

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 7598





此の書は、大東出題の第一、編輯の第六には、
 大東出題の第一、編輯の第六には、
 大東出題の第一、編輯の第六には、

警言

演

大東出題

此の書は、大東出題の第一、編輯の第六には、
 大東出題の第一、編輯の第六には、
 大東出題の第一、編輯の第六には、

對 蹙

不 滿

口 舌

東京市五區本町二丁目三番
 東京市五區本町二丁目三番
 東京市五區本町二丁目三番

昭和九年九月十四日

印味武平氏員二十日發

印味武平氏員十五日印

譯者

國朝一等勳 海島洲十八

雄

坂本 幸 男

昭和九年九月十五日印刷
昭和九年九月二十日發行

不許
複製

發行所

國譯一切經毗曇部十八

編輯者兼
發行者

岩野真雄

東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者

渡邊通夫

東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所

日進舎

東京市芝區芝浦町二丁目三番地

東京市芝區芝公園七號地十番

大東出版社

振替東京一九四七一
電話芝三〇一四〇六番番

するなり」(大正二六、八二〇頁)とあり、
 (四)發智の雜蘊第一中、相納息第六には
 生・住・老・無常の四有爲相論をなす(大正三
 六、九二六頁、上)に對して、八健度第三卷
 にては、經説の如く生・老・無常の三有爲
 相論をなす(大正二六、頁七八〇、中)に止る、
 (五)發智の業蘊第四中、害生納息中第三
 に、身を成就し亦、語業を成就するものと
 して聖者の胎藏中に住するものの一句が
 存するも、八健度第十六卷に於ては、無垢
 人(聖者)の卵膜漸厚中に處するものと、
 母胎に處するものとを擧げて、聖者の卵
 生を許してゐる(大正二六、頁八四七、上)な
 ども注目すべき相違點であらう。

昭和九年九月十四日

尙、此の外に細かく論すれば法相上相
 違する幾多の點が存するのであるが、今
 は凡て之を省略する。

第四、傳承上の相違

玄奘譯發智論は迦濕彌羅の毘婆沙師所
 謂五百羅漢等の支持を蒙つてゐるが、八
 健度論は此支持を得てゐない。換言すれ
 ば、五百羅漢等の廣釋としての大毘婆沙
 論は玄奘譯二百卷も、舊譯即ち浮陀跋摩、
 道泰等共譯の阿毘曇毘婆沙論も、共に發
 智論の註釋であるが、決して八健度論の
 註釋では無い。然し毘婆沙師達は八健度
 論の存在を全然無視してゐたのではない。
 婆沙師が發智論文を紹介し且つ註釋

するの砌り、前述の如く屢々異誦、別誦
 又は有誦等として八健度の論文に相當す
 る文を掲げてゐるから、即ち毘婆沙師達
 は已に別の誦者の傳へた異本としての八
 健度の存在を知つてゐて、之に敬意を
 拂ふことを怠らなかつたと言ふべきであ
 らう。

最後に一言して置きたいのは、此の外
 發智八健度以外にも種々の異本の存する
 ことであるが、此は、必ずしも今の所論
 に必要がないから、茲に之を省く。詳細
 は、宗教研究第十一卷第四號の有部宗内
 に於ける發智系非發智系等の諸種の學說
 及び學説の研究を参照されたい。

譯者

西 義 雄
 坂 本 幸 男

識

である。

次に、前述の六文の如く特に婆沙が別誦等として紹介してゐるものではないが、發智と八禪度との注目すべき説相上の相違點を一二例示すると、

(一)業蘊第四中、表無表納息の「三學の業と果との關係論に於ける九種の頗問中、第六頗問たる「頗業無學、非學非無學果耶」の問の答を、發智(卷一二、九七九、下)は「答無」とするに對して八禪度(卷一七、八五一頁、下)には、「答有、解脫果」としてゐる。又、

(二)定蘊第七中、攝納息の味相應と淨と無漏との四靜慮の相互の得捨に關する七句分別中の「得淨非味相應非無漏耶」の一句問と、「得淨無漏非味相應耶」の一句問とに就いて、發智(卷一八、一〇六、中)は之を共に「答無」とするに對して、八禪度(卷二七、八九七、中、下)にては、前問に對しては之を「答曰得、凡夫人逮第三

禪愛盡也」とし、後問に對しては「答曰得、無垢人逮第三禪愛盡」としてゐるが如きである。

此外に細かく比較すれば譯語譯文上の相違以外に、説述の順位の前後、説明文の廣略等の相違など枚擧に追がない。今は凡て之等を省略して、各節の註記に讓る。

第三に、教相上の相違

右の第二の誦文の相違の記述中に於いて發智と八禪度との教相上の相違の一部分を已に顯示したが、前に表されてないもので然も重大なる教相上の異説のあることを注意しなければならぬ。例せば、(一)發智は第六無相住者(隨信行、隨法行)を苦法智忍位より道類智位迄の十五心剎那とする(發智卷二、九二六頁、下)に對して、八禪度論は之を苦法智忍位より道類智(道未知智)位迄の十六心剎那の間とする(八禪度卷三、七八一、中)。即ち此は、發智

が見道十五心説を取るに對して、八禪度は見道十六心説を主張するものであり、婆沙第四百十三卷の外國師説(前掲外國師説中第十三)に同ずるものであるが如き、(二)發智(卷五)の十門納息に説く二十二根等の四十二章中の五順上分結と三重三摩地との二章は、八禪度(卷八)にては之を説かない、従つて八禪度の十門跋蹠は四十章門論であるが、是の如きは兩者の相違の最も著しき例であらう。特に後者に於て、吾人は兩者の歴史的變遷のあつた跡を見出し得ると思ふ。尙、此の外、(三)發智の智蘊第三中、他心智納息中に四證淨を得するに附きて、苦・集・滅現觀時には、法に於て最初に證淨を得し、道現觀時には、佛・法・僧に於て最初に證淨を得するなりと言ふを(大正二六、九五七頁、上)八禪度第十卷には「苦法を修行し、習法を修行し、盡法を修行し、道法を修行するとき、佛と法と僧とに信を得

全編の各章に互り、一樣に五字一句の頌文にて其の内容を示してゐる。此の頌文は多くの場合、其の章中、各節の最初の論題か又は各節の特相かを取りて一字又は數字に依つて節全體の内容を表示するを原則とするが、發智の頌文の文句と、たとひ存するものにてても、八健度の頌文の文句とは一致しないものが大半である。

第二に、説相、説順上の相違。

此の説相説順に關する相違の諸點の重なるものの中特に、兩者の異誦、別誦なるものとして大毘婆沙論に明瞭に指摘される個處は次の通りである。

(一) 雜蘊第一智納息中に於ける「設隨眠於心隨増、此心但由_二彼隨眠_一故、名_二有隨眠心_一耶」問と、次の「諸心由_二隨眠_一故名_二有隨眠心_一、彼隨眠於_レ此當_レ斷耶」問との二問の答文は、發智(卷一、大正二六、九二一頁、中)と八健度(卷一、大正二六、七七五頁、上)と異なる。而して八健度の答文は、

婆沙卷第二十二(前答に就いては一二二頁、中、後答に就いては一一三頁、中)に、「有說此文應作是說」以下に述ぶる文句と相契つてゐる。

(二) 同じく雜蘊第一智納息中、因境斷識に關する所説中、發智(卷一、大正二六、九二一頁、中)の「已離色染、苦類智已生、集類智未生……」の文は、八健度(卷一、七五五頁、中)には、「色愛盡、無色愛未盡、若苦智生、習生智未……」とあり。後者の文は、正しく婆沙論(卷二三、一六六頁、中)に、有誦として紹介するものに相當し、然も婆沙評者は、後者の如く誦すべからずとて破斥してゐる。

(三) 雜蘊第一愛敬納息中の、涅槃の學、無學・非學非無學分別に關する問答に於ける文意は、發智(卷二、九二三頁、中)と八健度(卷二、七七七頁、下)と著しく異つて居り、後者の文言は、正しく婆沙第三十三卷(大正二七、一七〇頁、上、中、下)に於ける

別誦の言として掲げるものと一致する。

(四) 智蘊第三中他心智納息の他心智論に關する發智(卷八、九五六頁、中)と八健度(卷一〇、八一九頁、下)との説明が異なる。後者の説明の後半は、婆沙第九十九卷(五一二頁、中)の別誦の言に一致する。

(五) 定蘊第七中不還納息に於ける發智(卷一八、一〇一八頁、上)の極禁と極迹との關係論は、八健度(卷二七、八九九頁、下)にては、極迹と到彼岸との關係論になつて居り、是れ亦、婆沙第七十六卷(八八六頁)が「或作是說……」として二説を掲ぐる中の第一説に相契つてゐる。

(六) 同じく定蘊第七中不還納息の中の大迦葉波と薄矩羅との關係論に就いての發智(卷一八、一〇一八頁、中)の記述と八健度(卷二七、九〇〇頁、上)の其とは亦甚だ異つてゐる。後者の記述は正しく婆沙第八十一卷(九〇六頁、下)に「有於此文作相違誦」として紹介する一文に相當するの

るものもあるから毘婆沙師の解釋は其の儘受入れられない。併し、眼等の五根と男女根との七色根を最初に説くが故に、決して不當なりとも言ふことは出来ぬ。要するに生きとし生けるもの、諸種の機能を二十二根と立て、之に關する諸種の問題を阿毘達磨的に論究をなす段と解すべきである。

第七編、定寔度、本編は、婆沙に據るに、諸根の清淨は何の精力に由るやに謂ふに、諸定を得するに由る、故に、第七に定寔度を説けりと言ふ。

然も此の中には、有部教學で喧しい得非得の諸論をなし、次に四禪・四無色に味相應等の種類あるを明し、更に此の禪定に關する諸種の功德法としての四等（無量）八解脱等や三解脱門としての空三昧等の成就不成就論をも論及するを主目的とする。

第八編、見寔度。婆沙の所説の意を汲

むに、折角、清淨品を得する精力としての定を得するとしても、若し其の定が正しき見解に立脚するものでなければ、所謂修定主義者又は苦行主義者の轍を踏むに過ぎない。其れ故に最後に、惡趣に趣き生死輪廻せしめるが如き諸種の惡見論の一切を明にし、其をして速かに斷盡して正しき智見を養はしめんが爲めに、此の見寔度を説くと言ふ。但し、本編には、斯る惡見論のみならず、四意止論即ち四念住論、十想論等、諸慧に關する種々の論究及び種々の伽陀（偈）の解釋文をも含め論じてゐるのは、本論中の章節の示すが如くである。

尙、内容大觀に附して、所謂、發智婆沙の阿毘達磨論式一般の特長を明にしたいが、今は其の機でない、一切の詳細は、他日に譲りたい。

七、八寔度論と發智論との關係

發智と八寔度との兩者は、從來一般學

界に於いては同本異譯にして、其の相違も單に新舊兩譯の相違であると言ふ位に解しられてゐたが、之の兩者を仔細に點檢すると、其の間に少からぬ異點を發見する。勿論、發智といひ八寔度と言ふも其源は言ふ迄もなく、同一であることは前已に述べたが、其が、處と人とを別として永き傳持の間にか、或は傳誦者達の意見に據つてか、或は誤れる記憶に據つてか、又は脱落、添加に據つてか、其間に、少からぬ異點を生じたものに相違ない。

故に今、兩論の重なる相違點を以下數項に分つて明にして置きたいと思ふ。

第一に、論述形式上の相違である。

八寔度は、各跋渠の初頭に、長行の論題形式にて其の内容目次を列擧するを原則とするが、中には其の前に發智に於けるが如く、内容目次に該當する頌文を掲げる場合もある。之に對して、發智は、

て、無義の苦行ならざる有義の、眞の修行の要諦に闡説してゐる。(8)婆沙に據れば無義を捨て有義を修習するものは正思と正思惟を爲す者であるから、第八に思跋渠を説くと解するも、實は、思と想との關係、覺觀論、掉舉・心亂・慢論、三惡觀等の惡覺を述べ、其の間には、智と境、有漏行と無漏行、行圓滿と護圓滿等にも言及してゐるけれども、最後に凡夫性を明し、邪見・邪志・邪念・邪定等の相互關係を論述して、主として裏面より正思・正思惟の修習に向ふべきことを暗々裏に説くものゝ如くである。

第二編、結使寔度。本編は、最初煩惱論一般をなすに因みて寔度の題名とせしものにして、其の内容は、四跋渠、即ち(1)不善、(2)一行、(3)人、(4)十門の四章論よりなる。前三跋渠は煩惱に關する論究であるが、後の一章は、煩惱たる雜染品も無記品も清淨品をも併せて四十章(發

智にては四十二章)の諸法相を十門に分ちて論究してゐる。特に、此の編中の一行跋渠に於ける九結の一行・歷六・小七句問答・大七句問答の論究形式は、以下、八智、三三昧等に就きても、採用されるものである、而して此の論述形式は亦、他の阿毘達磨論書に於いては用ひられ無い所のもので發智八寔度に於ける特異の煩鎖な形式として記憶さるべきものである。

因みに婆沙は、本編は雜寔度に於ける法の覺は結の斷ずることに由るが故に、第二に結使寔度を論究すと言つてゐる。

第三編、智寔度は、婆沙に據れば、結の斷は諸智に由るが故に第三として智寔度を説くと言つてゐるが、併し實は、結を斷ずる智としての八智のみならず、染淨兩品に亘る見・智・慧の一般に就きて論述してゐる。就中、後に大千の五事として小乘分派史上有名なる雜漢に關する五種の惡見をも紹介し、其の對治道を論究してゐる點は注目すべき點であらう。

第四編、行寔度、婆沙に據るに、斷結の諸智は業障なき補特伽羅に得せらるるものなるが故に、第四として業蘊を説くと言つてゐるが、此の中には、單に業障の業のみならず、律儀等の善行及び、善惡の果報をも説き、更に普く、行爲と稱するもの以外の行一般にも闡説してゐる。

第五編、四大寔度。婆沙に據るに、諸業の多分は四大種に依るが故に第五に大種蘊を説くと言つてゐるが、四大種と其の造色との所謂色法一般に關して諸種の立場より分別するを其の課題としてゐる。

婆沙論には、佛教の所謂、宇宙論の一般をもこの寔度中に論じてゐることを此の際附言しておく。

第六編、根寔度。本編は、四大種の所造の中、勝れたるものは眼等の根なるが故に、第六に根蘊を説くと言ふが、併し本編に説く二十二根の中には、意根、信等の五根、三無漏根の如く、所造色に非ざ

明しよう。本編は八章(跋渠)より成立する。此の中、(1)世間第一法跋渠とは、凡夫身中の最上の清淨品法たる四善根中の世間第一法より論起し、忍法を覆説しつゝ頂法・暖法を説き、婆沙に所謂、異身身中の清淨品法を逆説する。序いで二十有身見と其他の惡見の種々相を説きて、凡夫身中の雜染法の主なるものを明にする。さて、是くの如き淨染の二品は誰が能く了智するやといふに、そは婆沙に據るに無我智に外ならざるが故に、次に(2)智跋渠を説くのである。但し、智跋渠の中には、有情の智識論、記憶の問題、過去法と現在法との關係論、名・句・文身論、癡人論、六因論、煩惱心としての有隨眠心、隨眠と其の隨増論、因境斷論等を爲してゐる。此の中の、六因論と隨眠と隨増との論究は、阿毘達磨佛敎に於て、重大なる役目を演ずるものとして注意すべきものである。(3)此の無我智は何に由

りて生ずるやといへば、緣起を覺する人(補特伽羅)に由る。此の故に第三に人跋渠を説く。其の人は即ち流轉と還滅との間に界在するものなるが、彼をして流轉門より還滅門への覺を生ぜしめんが爲めに先づ例の三世兩重に解されたる十二緣起を述ぶ、と、毘婆沙師は解してゐる。

が然し、十二緣起支の外に、有情の出入息、無有中愛論、解脫心等の心所論等をも説述してゐる。(4)第四の愛恭敬跋渠を、婆沙は、緣起の覺は愛及び恭敬に由るが故なりと解する。佛敎に於ける愛と言ふ語の正當なる理解は茲に於いて得られるであらう。本章には尙、此の外に、菩薩の身力論、擇滅・非擇滅論、有餘涅槃・無餘涅槃論、無漏の五蘊論、智遍知・斷遍知即ち諸煩惱の斷盡論、三歸依の眞髓などの重要教義を論説してゐる。(5)愛敬の因りて起る所以は、慚愧心の存するに由るとして、第五に無慚愧跋渠を説きて、無

慚・無愧及び慚愧の性質を明にしてゐる。勿論此の外に、増上の善根・不善根論、心の變易論、五蓋論、夢の自性論、無明使論等の諸論をも説いてゐる。(6)是の如き慚愧心は何に由るやに言ふに、そは、法相を解するに由る、故に第六色跋渠に於て、三有爲相論(發智では四有爲相論)を爲すのであり。(7)此の法相を解するのは無義を捨して有義を修習するが爲めであるから、第七無義跋渠を明にしたのであるとは、毘婆沙師の解釋である。即ち本章に於ては、苦行の無義なること、正身に端坐し結跏趺坐による不淨觀等を修すべきと等を明し、その目的は、見道に入るにあることを示さんとて第六無相入即ち聖者としての堅信人堅法人を紹介する。尙、此の外に、佛の初轉法輪の時に五比丘が見諦するを地神、三十三天等が知りて稱嘆するの義を述べ、最後に比丘の心得としての少欲・喜足等の義を説き

秀でて、華・戒の語は皆通曉せざる無き有様であつた。迺々、僧伽跋澄 (Vaṅgha-vāṃṃ) 及び曇摩難提 (Dharmānanda) が長安に來り諸經を翻譯せんとした際、當時の名徳にして能く傳譯するものが無かつたので推されて翻譯者となり、増一阿含・中阿含等を譯出した。其の後、彼れは、十住斷結經、菩薩瓔珞經、出曜經、中陰經等、十二部七十四卷を翻譯したと傳へられてゐる。

【一】八禪度論卷第二十四 (大正・二六、八八七頁上)

五、本論の流行

本論は、十四卷毘婆沙論と共に有部の論書としては最も早く傳來されたものであり、續いて阿毘曇心論四卷 (A. D. 391) 雜阿毘曇心論十一卷 (A. D. 435) 阿毘曇毘婆沙論百卷 (A. D. 439) 等と有部の重要な論部が續々譯出せられ、又他方に在りてはこれと同時に四阿含及び有部の

律たる十誦律等の譯出を見、茲に大體に於て有部宗の三藏に近きものが具備された關係上、有部宗の研究、換言すれば阿毘曇の研究が頗に盛んとなり遂に毘曇宗なる一學派の興起を見るに至つた程である而して此の阿毘曇は單に毘曇一宗の人々のみならず、廣く成實・般若・法華・涅槃等の學者達の間にも亦、盛んに研究されたことは高僧傳の我々に告ぐる所である。

然るに、梁代に及んで眞諦の俱舍釋論の譯出を見、次いで、唐の玄奘に依り俱舍論が翻譯さるるや、毘曇の研究は漸く其の影を潜め、俱舍論の研究がこれに代つたのである。乍併、彼の支佛教思想史上最も華やかなりし隋唐の佛教を産むに到つた其の原因を尋ぬるに、實に南北朝の初期に在りて阿毘曇が輸入せられ爲めに佛教教理の基本的研究がなされたことも其の中の重大なる原因の一なることを知る時、阿毘曇が支那佛教界に及ぼした影

響の如何に大なるものがあつたかを忘れてはならぬ。

六、本論の内容の大觀

本論は、總じて八種の禪度 (Grantha, Grantha 即ち蘊) 四十四跋渠 (varga, varga 即ち品又は章) より成る。

(因みに、以下内容の解説に就きても、紙數と時間の徹底的制限の爲めに詳細には之を爲し得ないから、本解題に於ては第一編の外は單に極く大難把な大綱を紹介するに外なきことを預めお断りして置く。尙、若し今精しきを欲する人は、本論の章節の註記及び婆沙論に據られんことを希望する次第である。)

八禪度とは、一、雜禪度、二、結使禪度、三、智禪度、四、行(業)禪度、五、四大(種)禪度、(六)根禪度、七、定禪度、八、見禪度である。

第一編雜禪度、本編はいはゞ本論全體の序曲に相當するから此は稍々詳しく説

第一譯は秦の建元十九年 (A. D. 383) に僧伽提婆 (Saṅghadeva) 及び竺佛念の共譯たる阿毘曇八度論三十卷で、本國譯はこれに基くものである。

第二譯は唐の顯慶五年 (A. D. 660)、玄奘に依つて翻譯せられた阿毘達磨發智論二十卷である。

釋道安の阿毘曇八度論序に依れば、建元十九年罽賓の沙門僧伽提婆は此の經を誦して長安に來り、比丘釋法和は其の譯出を請ふた。茲に於て佛念之れを傳譯し慧刀、僧茂が筆受し、法和は其の指歸を理し、斯くて、四月二十日より十月二十三日に至つて訖つたのが實に梵本十五千七十二首盧、秦語十九萬五千二百五十言の本論である。然るに其の譯文たるや義辭頗難にして龍蛇同淵の譬なきに非ざるものであつた爲め、再び夙夜無懈、四十六日を費してこれを整理した。

抑々僧伽提婆は、阿毘曇の專門家であ

り、佛念は安世高、支謙以來の名翻譯家として當時稱讃された程の語學の天才であり、更に法和の如きも道安門下の逸材であるに拘はらず尙且つ翻譯が上手行かなかつた所を以てすれば、未だ眞の阿毘達磨の傳譯のなかつた當時に於ては、本論の如き最も難解な有部の根本論部の翻譯が云何に困難な事業であつたが知られ得るであらう。尙、僧伽提婆は翻譯に際して四十四品中の因縁の一品即ち緣跋渠を忘失したが、偶々同じ罽賓の沙門、曇摩卑が此の經を誦し來つたので僧伽提婆はこれを更に譯出して、茲に八度論四十四品を完備することを得たと傳へられてゐる。

本論は譯出當時は二十卷であつたが、後繁辭を除いて十八卷と爲し、更に復、三十卷とせられたが、隋の衆經目錄以後は皆三十卷とされてゐる。

次に譯者の經歷に就いて一言しよう。僧伽提婆は本姓は瞿曇氏、罽賓の人であ

る。深く三藏に通じ殊に阿毘曇心論及び三法度論は其の最も得意とする所であつた。性格は高僧傳の言葉を借りて表せば「俊明有深鑑而儀止溫恭、務在誨人、恂不怠」の如き人である。符秦の建元中長安に來り、冀州の沙門法和と俱に洛陽に適きて四五年間經論を講研したが、後、慧遠に請るるままに廬山に留り、晋の太元十六年 (A. D. 391) 阿毘曇心論四卷三法度論二卷を譯した。其の後、隆安元年 (A. D. 397) 京師に來遊して衛軍東亭侯瑯琊王珣淵蓋の歸信する所となり、遂に珣の舍宅に於て阿毘曇を講じ又、珣の請を入れて中阿含の再譯を企て罽賓の沙門僧伽羅又が梵本を執り、提婆は翻じて晋言となして中阿含六十卷を得た、現傳するものは實に彼れの再治にかかるものである。

次に竺佛念は、涼州の人、弱年の頃出家し、好んで四方に遊歴し、又、語學に

諸外道が競起し來るにつれて各學派間の對立的意識が愈々激げしくなり、従つて一方、自派の宗義を確立して他に向つて宣揚すると同時に他方、他派の異執を批判すべき必要も生じたのである。

斯かる狀勢の下に在つて其の要求を充すべく作製されたのが實に迦多衍尼子の發智經八禪度である。而して其の間の消息を最も明白に物語れるものは實に本論の註釋書たる大毘婆沙論であらう。即ち婆沙論は本論を註解するに當つて八禪度論の各論題毎に作論の緣由を説明し、「他の異執を遮止して己が義を題示せんが爲めなり」と言ひて、常に他の異説を紹介し、之れを評破すると同時に又八禪度論の主張を極力支持する態度に出てゐる程である。斯くて迦多衍尼子は以上の、内・外の二因によりて本論を作製するに到つたのであるが、其の論述に際しては、全く他に見出し難き謂ひ得るならば彼れ

の獨創とも考へらるゝ彼の六因論を取り入れるが如きこともなしたが、併し大體に於ては當時派内に行れてゐた研究を更に完全せしめ、それ等を材料として彼れ獨自の組織の頭腦を以つて阿毘達磨全體に涉つて體系付けんとし、斯くて出來上つたのが本論であらう。

右の如くにして八禪度論が作製せられたるに及んで茲に有部教義が完全に確立するに及んでは、有部教徒は競つて本論の傳持とその解釋とに従事し、爲めに此等の人々は他から迦旃延教徒の名稱を以つて呼ばれるに到つた程である。而して其れ等の解釋研究の精華が纏て編輯されたのは、實に本論の唯一の註釋書として現存する大毘婆沙論二百卷である。大毘婆沙論に關しては既に本國譯毘曇部七に解題が存するから茲ではこれを省略するが、兎も角、此の大毘婆沙論に來つて有部の教義の發達は其の最高潮に達したとも、言ふべき

である。

斯くて八禪度論の思想は、迦濕彌羅、犍駄羅等の西北印度を中心として益々隆盛を極め、後世には全印度は勿論のこと竺外にも及び、彼の玄奘の入竺當時に在りては印度及び西域地方に涉りて小乗佛敎中、最も盛に行はれたのは有部と正量部との二派のみで他は唯、總括的に上座部或は大衆部と稱せられて、特殊的部派名は傳へられなかつた程であるとは西域記の我等に告ぐる所である。

従つて又、其れだけ他學派から受けた攻撃も激げしいものがあつた、彼の龍樹の中論及び大智度論、さては提婆の百論下つて訶梨跋摩の成實論等は其の代表的のものであると言ふことが出來やう。

四、本論の翻譯

本論の原典は已に散佚したけれども、幸に前後二回、漢譯せられ現に二つ并保存されてゐる。

には「上座部に於て出家し先に對法を弘め後に經律を弘むるに上座の本旨に乖けるが所以に鬪靜紛紜たり」と言つて兩者の所説が一致してゐない。

更に又、本論作製の場所に關しても、婆藪槃豆傳は屬實なりとし、西域記は至那僕底國 (Sinhāhūti) の答秣蘇伐那僧伽藍 (Tāmasāvāsūghāraṇa 閻林寺) に於て製すと爲してゐる。

【一】 婆沙論卷第一。

【二】 婆藪槃豆傳。

【三】 天、龍等が所聞の阿毘達磨を送つて來たのを撰集したといふ傳説を、若し當時の阿毘達磨學者の研究の結果を撰集したものであると解し得るならば、事實に近きものがあると思ふ。

三、本論の作製の因由、並に

其の流傳

本論述作の因由に就いては婆沙論は、『彼の尊者は是の思惟を作す、「云何んが當に諸の有情類をして佛の聖教に於て無

倒に受持し精進し思惟し觀察せしめ、此に由りて無量の煩惱・惡行を現在前せしめざらしめて便ち甚深の法性に悟入するを得せしむべきか」と、故に此の論を造りしなり』とて、有情利益てふ所謂の神學的説明を試みてゐるが、乍併、此は一般に他の諸論にも共通する造論の緣由であつて必ずしも八度度論に限つた譯ではない。従つて其の他の原因が尙、考らるべきである。而して其の原因は種々あらうけれども、今は二種位に大別して究明することにしよう、即ち一は内部的原因にして、二は外部的のそれである。

内部的原因とは、宗輪論に據れば、説一切有部は佛滅後三百年の初、上座部より獨立したことになるが、それは種々の徵證上大體、佛滅後二百五十年頃、即ち紀元前三世紀の中葉頃の出來事であつたと思はれる。而して其のことは、阿育王時代 (B.C. 272-232) の作と傳へらる、

Kaṭhāvatthu (論事) 中に明かに有部の宗義を述べ且つ批評してゐる事實等からも推知せられ得る所である。其の後漸く歲月を経るに隨つて、法義の研究が益々盛んとなり、殊に有部は一名説因部 (Hīnayanāyin) とも稱せられた程、理論的方面的の研究に力を注いだ關係上、法義の討究の如きも、各方面に涉つて實に精細を極めたものがあつた。蓋しそのことは、八度度論中に、極めて難解なる法相問題が何等の準備もなく、卒然として論ぜられてゐるのは、必ず當時已に法義の論究が著しく専門的に迄進んでゐた爲めに殊更に説明を加ふる必要がなかつたに基因するものであらうと推定され得るに依つてである。茲に於て自派内に在りては知らるる所諸種の研究の成果を統攝し全體に涉りて組織ある論書の作製を必要とするの状態にあつたのである。

次に外部的原因とは、諸部派が分裂し、

つて佛説に歸せんとする教徒は、本論をも佛説と見做し、而も本論を、迦多衍尼子 (Kātyāyanaiputra 迦旃延子) 造と稱する所以を説明して迦多衍尼子が單に受持し演説して廣く流布せしめしが爲めであるとの解釋を下してゐるが、乍併、これは神學的解釋としては何程かの價值があるとしても、斷じて歴史的事實を如實に物語るものではない。

又、眞諦三藏の傳ふる所に據れば、迦旃延子は五百の阿羅漢及び五百の菩薩と共に薩婆多部の阿毘達磨を撰集して八伽蘭他を製したが、其の際、先に佛が説きし阿毘達磨を聞いた諸の天・龍・夜叉は其の所得の一句一偈を送り來つたので、迦旃延子は五百の阿羅漢及び菩薩と共にそれ等の一々を經律に照合し經律と相違せざるものは之を撰録し、相違するものはこれを棄捨し、其の所取の文句を更に義に従つて分類して若し慧の義を明すも

のは慧結(智禪度)中に置き、定の義を明すものは定結中に置き、斯くて八結合して五萬偈を得たと言はれてゐるが、これは他に見ざる傳説であり、且つ又神話的要素を多分に包含してゐるので、其の間多少の眞理を含むものがあるとした所で其の儘、受け入れることは到底出來ぬものである。

然らば、眞の作者は何人であるかといふに、右の二傳を除けば諸傳は何れも皆迦多衍尼子造たることに一致してゐる。

例へば婆沙論(卷第一)には、「此の論は即ち彼の尊者迦多衍尼子の造なり」といひ、また智度論卷第二にも「迦旃延婆羅門道人、智慧利根にして盡く三藏内外の經書を読み、佛語を解さんと欲するが故に發智經八禪度を作る」と云ふ、更に他の六足論の作者に關しては漢譯の諸傳と異なる説を爲す Yasomitra の Abhidhamakosāyāyakkya に於てすらも本論を Kāty-

āyanaiputa の作なりと認定してゐるが如きである。

次に、迦多衍尼子の出世年代に關しては、異部宗輪論は佛滅三百年の初とし、大唐西域記卷第四及び俱舍論寶疏第一は佛滅三百年中とし、中論疏は佛滅後三百年八禪度を作るといひ、俱舍論光記第一は佛滅三百年末とし、婆藪槃豆傳は佛滅五百年中として、種々の異説があるけれども、而し既に佛滅年代に關して色々異説がある限り俄かに何れの時代の出世なるかを決定することは困難である。

乍併、婆藪槃豆傳には一方、世親を佛滅九百年の出世となして居り又、世親は今日の研究では大體西紀三二〇—四〇〇年頃に存在したと推定されてゐるから、従つて迦多衍尼子の在世は大體紀元前一世紀頃と見做して大差なからうと思ふ。

婆藪槃豆傳に依れば迦旃延子は初め薩婆多部に於て出家すといひ、異部宗輪論

阿毘曇八禪度論解題

紙數が非常に超過したこと、又他に出版を急ぐことの爲めに、譯者が最初に意圖した本論全體に渉る詳しい解題を茲に附することが出来なかつたのは、先の公約を果し得ない點から云つても、又學的良好心からしても譯者の甚だ遺憾とする所である。

併しこれは他日何かの機會を俟つこととして、今は、幸じて與へられた極く僅少の貴重なる紙幅を利用して、極めて簡單に本論の輪廓を述べるだけに止めたと思ふ。蓋し本國譯の性質上、解説を附せざることは、其の理由の如何を問はず、甚だ不親切の訾を免ぬかれぬからである。

一、本論の名稱

阿毘曇八禪度論は、八禪度阿毘曇、或

解題

は、^二八伽蘭他、或は阿毘達磨發智論、或は發慧論、或は發智經八禪度、或は阿毘曇身、或は發智身論、或は迦旃延阿毘曇等と種々の名前を以つて呼ばれてゐる。

就中、本論を八禪度又は八伽蘭他と稱するのは、本論が雜・結使・智・行・四大・根・定・見の八禪度(或は伽蘭他)より、成立せるが爲めである。而して茲に禪度又は伽蘭他といふのは *Grantha* の音譯にして、これは蘊又は結或は節と翻ぜらるるものである。

次の發智論及び發慧論は共に *Jāna-prāhāna-sāstra* の意譯であるが、本論を *Jānaprahāna* と名けた理由に就いては婆沙論(卷第一)の解釋に據るに、勝義の智は皆此の論より發し、此の論は智の安足處たり根本たるが爲めであると説か

れてゐる。

而して、右の八禪度と發智とを結付けたのが大智度論等に用ひられた發智經八禪度の名目である。

次に、本論を阿毘曇身又は發智身論と呼稱するは、一般に說一切有部の論部と見做されてゐる、集異門足論、法蘊足論、施設足論、識身足論、界身足論、品類足論の六論を足と(*padā*)とすれば、本論はその身幹(*śarīra*)に相當するものであると云ふ所に由來するものである。

最後の迦旃延阿毘曇とは、本論に其の作者の名前を冠して呼稱したものに過ぎぬ。

- 【一】 大智度論卷第二(大正・二五、七〇頁)
- 【二】 婆藪槃豆法師傳(大正・五〇、一八九頁)
- 【三】 同上。
- 【四】 大智度論卷第二。
- 【五】 成實論卷第一。不善根品第三百三十五。

二、本論の作者

本論の作者に關しては、阿毘達磨を以

る人なるが、故に此の人を尊敬し稱讃すべく、決して、誹謗す可らず、若し此の人を誹謗すれば、誹謗者自身禍殃を招くべしと言ふなり。但し、初めの部分は發智と可なりに異れり。

(毘曇部十七、頁二〇四参照)。

【七六】 根を、發智は「有取識」と解す。從つて、以下に引用する契經も彼此相異なる。發智は「五種子とは有取識を顯し、地界は四識住を顯す」といふ説を引用せり。

【七九】 「四識住」とは、一、色隨識住、二、受隨識住、三、想隨識住、四、行隨識住をいふ、詳しくは婆沙一三七、毘曇部十四、頁五二参照すること。

【八〇】 以下の引用文は、發智は「五妙色の宮内に、若し愛の枝の生ずること有れば、牟尼は彼の生を見て、慧を以て速に除斷す」とあり。

【八一】 没は、大正本に「況」とあるも、聖本、聖乙本に據りて没と訂正す。

【八二】 「猛なり」といふを、發智は、阿羅漢なりと解せり。

【八三】 以下、發智は之を缺く。

彼は猛にして縛より解脱すといふうち、猛とは佛弟子の猛勇なるを謂ふ。智慧成就するをもて猛勝に悪法、三縛——欲と瞋恚と愚癡とをいふ——を除き、彼は脱し已脱し當脱するなり。故に彼は猛縛より解脱すと曰ふなり。

誰か能く誹謗するに堪えんやといふは、彼の人は當に稱譽すべく毀譽す可からざればなり。若し毀譽せば罪を受くること多し。説くが如し。「若しくは毀すべきを便ち譽め、若しくは譽むべきを便ち毀せば、口に禍殃を招き、樂を覺えず」と。故に、

若し根無く皮も無くんば、

彼は猛にして縛より解脱す、

と、曰ふなり。

葉無し。況んや枝有らんや。

誰か能く誹謗するに堪えんや。

偈品第四十四竟り(梵本二百十首盧、秦三千九百五十七言)

見韃度第八盡く

(八韃度、共せて四十四品なり)

は發智にては、「住を觀じ、覺は遠近し、應に喜ぶべく、諸業無く……」とす。從つて、以下の註釋の義理も亦、自ら異りあり。

【六七】 彼此とは、内の所緣、此と外の所緣(彼)の意にして即ち、一切を示す。

【七〇】 次下に「十五竟り」の夾註あり。

【七一】 本節は、内容目次中の

「隨」に相當し、世間道即ち外道に依りては、假令欲染を盡くして色界に生ずることありとも、有身見を斷ぜざるが故に、五盛陰に樂着して、再び之より退墮するも、佛弟子は已に泥洹を娛樂するが故に樂道に依りて、終に眞の樂所に至ることを得との義理を明すなり。

【七二】 「食餐……」の一句に就

きては、發智は、「彼の外道は、順五下分結に於て少分斷するものありと雖も、而も餘の斷ぜざるもの多きが故に、後、必ず貪を起して、欲界に還生すと解し、八韃度の以下の釋解と多少趣きを異にせり。

【七三】 「之」は大正本に佛とあり。

【七四】 安穩を「發智は有餘涅盤界」と解せり。

【七五】 「樂」を、發智は無餘依涅盤界と解せり。

【七六】 次下に、「十六竟り」との夾註あり。

【七七】 本節は、目次中の「皮」に當り傷跋菓の最後のものなり。其の内容を摘記せば佛無の根を抜き、四誑住を餘り無く盡くして、慢も愛も滅無せしものは、眞の勇猛者にして一切の惡法、縛法より解脱す

已に安隱處に逮ぶは、

樂によりて樂所に往至するなり。

脱すとも若し已墮に墮するといふうち、脱すとは欲界より脱するなり。已墮とは色界に生ずるを謂ふ。若し墮すればとは、色界中の五陰を辦するを謂ふなり。故に脱すとも若し已墮に墮するといふなり。

食養せば復び來還すとは、世間の道に有りて垢盡の聖智未だ生ぜざるときは、彼は自身を娛樂し自身を恃怙するをもて、復び地獄・畜生・餓鬼に墮するなり。故に食養せば復び來還すと曰ふなり。

已に安隱處に逮ぶといふうち、已に逮ぶものとは、之れ佛弟子を謂ふ。安隱とは之れ泥洹にして彼が之を娛樂するを謂ふ。故に已に安隱處に逮ぶと曰ふなり。

樂によりて樂所に往至すとは、彼は道の樂なるによりて泥洹に至るをいふなり。故に、樂によりて樂所に往至すと曰ふなり。

第十六節 無明・慢・愛無き者は解脱するを以て稱譽すべしと言ふに就きて

若し根も無く皮も無くんば

葉無し。況んや枝有らんや。

彼は猛にして縛より解脱す。

誰か能く誹謗するに堪えんや。

若し根も無く皮も無くんばといふうち、世尊は無明を根もて現す。説くが如し、「諸の此の惡趣の今世後世なるは、彼れ無明を本とし、慳貪等を生ずるなり」と。皮とは四識住をいふ。彼は盡さずして餘り有ることを欲せず忍ぜざるなり。故に若し根無く皮無しといふなり。葉無くんば況んや枝有らんやといふうち、世尊は葉をも、我慢を現す。説くが如し、「云何んが比丘よ、葉を燒くといふや。答へて曰く、我慢を盡くして餘り無からしむることなり」と。枝とは愛をいふ。説くが如し「比丘よ、我は今當に、愛の叢水の枝の漚ぐところ、此に於て衆生覆せば隱没して陰蓋に纏ぜらる」と。故に、葉なし、況んや枝有らんやと曰ふなり。

【毘曇部十七、頁二〇二参照】。

【五〇】此の磨舍等は、後の夾註に據ればこは曇蜜羅の國の語なりと言ふ。

因みに、發智には此の句の前に、

「醫泥と及び謎泥と、蹋鋪と遠鞞鋪と」

の二句あり。

【五一】 次下に「一」の夾註あり。

【五二】 次下に「二」の夾註あり。

【五三】 次下に「三」の夾註あり。

【五四】 次下に「四」の夾註あり。

【五五】 僧は大正本に僧とあるも宮本、聖本・聖乙本には僧とあるによりて、かく改む。

【五六】 次下に「曇蜜羅國の語なり」との夾註あり。

【六〇】 次下に「十三竟り」の夾註あり。

【六一】 本節は、目次中の「沫」に當るものにして、

五盛蘊を泡沫の如しと觀じ有爲法をかけるふの如しと觀じて、見諦斷、思惟斷の煩惱魔の一切を斷盡すれば、老病死の苦迫を蒙らずと言ふを明す段なり。

【六三】 「野馬の如し」とは、發智に「陽焰に同じ」とあり。

【六四】 自在天子魔は、大正本

めに彼れによりて、見諦斷を現じ、華垢を盡さしむ。小華は思惟斷なり。故に魔華と小華とを斷すと曰ふなり。

往いて死王に見えずとは、是の如く、見諦斷と思惟斷との結を己に盡くして餘り無からしむれば、自在天子は隨意に自ら恣ひまゝにせず。故に往いて死王に見えずと曰ふなり。

第十四節 三昧に依りて内外を守り、三行を圓滿し、有の滅盡を遍盡せば

心解脱すと言ふに就きて

堂にて若しくは彼此を守れば、諸の覺をもて我を喜足し、

世間の興衰を知りて

善心盡く解脱す。

堂にて若しくは彼此を守るといふうち、三講堂あり、空と無願と無相となり。諸の内を縁として外縁をも生ずるなり、故に堂にて若しくは彼此を守ると曰ふ。諸の覺をもて我を喜足すといふうち、覺とは、之れ智の達するなり。總明の智慧成ぜば、佛道を喜び、説法を善くし、聖僧に順じ、苦・習・盡・道を別ち、色は無常なり、痛・想・行・識は無常なりとの想妙となり、我が身・口・意行を具して成就するなり。故に諸の覺をもて我を喜足すと曰ふなり。

世間の興衰を知るといふうち、世間とは之れ五盛陰をいふ。諸の比丘は興衰を遊觀して、此の如きは色なり、此の如きは色の習なり、此の如きは色の盡なり、此の如きは、痛・想・行……乃至識なり、此れ識の習なり、此れ識の盡なりと知る。故に世間の興衰を知ると曰ふなり。

善心盡く解脱すといふは、彼は義を思ひ、法を思ひ、善を思ひ、妙を思ひて、一切の有の道を没し生脱し當脱し已脱するなり。故に善心盡く解脱すと曰ふなり。

第十五節 世間は煩惱を暫斷するも還た退墮し、佛弟子は泥洹に至ると言ふに就きて

脱するも若し已墮に墮して

貪養せば、復び來還す

【四九】 魔童子 (Māruṅkaṅgaṅga, Māruṅkaṅgaṅga) を、發

智は、大母とせり。

【五〇】 「如しくは此に非ず……兩の中間に非ざるもの」と

は發智に、汝には此無し、汝に

此無きに由るが故に、汝に

彼無し、汝に彼無きに由るが

故に、汝に近無く遠無く、二

の中間無し……」といひ、更

に、此に非ず即ち此無しとは、

慢・憍慢心・高學心・快勇を起

すこと無きをいひ、彼に非ず

即ち彼無しとは、貪・瞋・癡を

起すこと無きをいふ。下(近)

に非ず、上(遠)に非ず、兩の

中間に非ずとは、欲界(下)に

も生ぜず。無色界(上)、色界

(中間)にも生ぜずして、三界

を度するを言ふなり。

【五一】 發智論は、聞に就きて

は耳識に於いて、知に就きて

は、鼻・舌・身識に於いて、識

に就きては意識に於いて、夫

々知の眼識に於けるが如く詳

述せり。

【五二】 次下に「十二覺」の夾

註まり。

【五三】 本節は、目次中の「無

望」に當り、欲・恚・癡の三毒

を希望せず、佛と法と僧とに

喜信し、四諦の理を善分別し、

三毒を制息し、三界を超出す

るは、即ち其の邊際に至ると

いふことを明す段なり。

五四 磨舍、兜舍、僧賈磨、薩披多羅毘比栗多 此は是れ苦邊なり。

磨舍とは、若しくは欲も、若しくは悲も、若しくは愚も憐望せざることなり。故に、磨舍と曰ふ。兜舍とは、佛道を喜び、善説法を喜び、聖五九僧に順じ、苦・習・盡・道を別ち、色は無常・痛・想・行・識は無常なりと分別するなり、故に兜舍と曰ふなり。僧賈磨とは、欲生すれば之を制息し、瞋恚・愚癡生すれば、之を利息するなり。故に僧賈磨と曰ふなり。薩披多羅毘比栗多とは、一切の欲界心より脱離し、一切の色・無色界心より脱離するなり。故に薩披多羅毘比栗多と曰ふなり。

此は是れ苦邊なりといふうち、苦とは之れ五盛陰を謂ふ。彼は是れ邊・後邊・最後邊となるが故に、此は是れ苦邊なりと曰ふなり。

第十三節 身を聚沫の如しと覺知し煩惱癡を斷盡せば

老病死の苦迫を免ると言ふに就きて

身は聚沫の如しと知り、 法は野馬の如しと覺り、

魔華と小華とを斷ぜば、 往いて死王に見えず、

身は聚沫の如しと知るは、彼の沫聚の力無く羸く虚しく空なるものにして堅からざるが如く、五盛陰も是の如く、力無く羸く虚しく空なるものにして堅からざるなり。故に身は聚沫の如しと知るなり。

法は野馬の如しと覺るといふうち、野馬の如しとは、野馬が日光より出でて久しからずして彈指の頃住せず、本無にして忽ちに有り、設ひ有るも便ち盡くるが如く、五盛陰も是くの如く、斯は須く彈指の頃をも住せず、本無くして忽ちに有り設ひ有るも便ち盡くるなり。故に法を野馬の如しと覺ると曰ふなり。

魔華と小華とを斷ずといふうち、四魔あり、陰魔と垢魔と死魔と自在天子魔となり。世尊は爲

ば流をして惡趣に向はしむと云ふ意義を明す段なり。

【四四】 大本には三十六水の上一「諸」の字あるも、三本宮本・聖本・聖乙本には凡てなし、又、四字一句なる偈文の形の上からも、諸の字を除くべきものとす。

【四五】 三十六愛種とは、十八意近行に耽嗜衣と種依とを分ちて三十六となせるもの、十八意近行及び三十六意近行に就きては、婆沙一三九、毘曇部十四、頁九二以下参照のこと。

【四六】 以下に「十竟り」の夾註あり。

【四七】 本節は、目次中の、「惡」偈の解釋にして、所謂、不殺生、不偷盜、不邪淫の身三惡行と、兩舌、妄語、惡口、綺語の口四惡行と、貪、瞋、邪見の意の三惡行の捨離を明す段なり。

【四八】 本節は、目次中の「見」に當るものにして、一切の見・聞・覺・知するものを如實に見・聞・覺・知することを得、即ち顛倒を離れて、如實知見を得れば、終に苦の邊際に至り、生死を度脱することを説くを其の主目的とす。

因みに、以下の文に於て、發智と八禪度と廣略同じからず、總じて發智は詳し（毘曇部十七頁一九九参照）

終に苦の邊際に至ると言ふに就きて

如し四九 鬻童子よ、見は見るものゝみにて足る有り、聞は聞くものゝみにて足り、知は知るものゝみにて足り、識は識のるものゝみにて足り、如しくは此に非ず、如しくは此の者に非ず、如しくは彼に非ず、如しくは彼の者に非ず、如しくは下に非ず、如しくは上に非ず、如しくは兩の中間に非ざるもの、此は是れ苦邊なり。

或は鬻童子よ、見は見るものゝみにて足ること有り或は無しといふうち、誰か足ること有るものなりや。答へて曰く、若しくは眼が色を見て垢を起さずんば、是を足ること有るものと謂ふなり。誰か足ること無きものなりや。答へて曰く、若し眼が色を見て垢を起さば、是を足ること無きものと謂ふなり五一。聞は聞くものゝみにて足り、知は知るものゝみにて足り、識は識のるものゝみにて足るといふも亦、是の如し。

彼の如く、鬻童子よ、見は見るものゝみにて足ること有り、聞は聞くものゝみにて足り、知るは知るものゝみにて足り、識は識のるものゝみにて足れば、如し此れの若しくは染にも若しくは穢にも若しくは愚なるものあるに非ざるなり。

若し此れの若しくは染、若しくは穢、若しくは愚なるものあるに非ざれば、是の如くんば彼の取縛非ず、若し彼の取縛非ずんば、是の如くんば、下の欲界に非ず、上の無色界に非ず、兩の中間なる色界にも非ず。此は是れ苦邊なり。苦とは、之れ五盛陰を謂ふ。彼は是れ邊にして後邊、最後邊なるが故に、此は是れ苦邊なりと曰ふなり五二。

第十二節 三番を厭離し、三實に歸依し、三番を制し、三界を越ゆれば

苦邊に至るに就きて

伽羅 (Gandhāra) とは、新譯にては補特伽羅とし、數取趣とも譯せらるゝもの、耶婆 (Jivo) は命者と譯され、禪豆 (Janto) は、生者と譯さるゝもの。
【一】次に、八人の名字寛るゝとの夾註あり。
【二】望は發智に希望とし、希望に二あり、一に財位を希望すると、二に壽命を希望するとなりとあり。
【三】「形之望」は大正本に單に「形」とあるも、三本、宮本により、かく訂正せり。
【四】本節は、内容目次中の「三十六」に當る。三十六水とは三十六意近行なり。意近行 (manoprevāṇā) とは、(1)意が近縁となりて境界に於て行ずるが故に、(2)或は受が近縁となりて、意を境に於いて數々行ぜしむるが故に(3)又、意に依るが故に境に近づきて而して行ずるが故に、(4)或は境に於いて數々分別することを樂ぶが故に、(5)名沙一三九、毘曇部十四、頁九四參照)。
要するに意を上首とするが故に、意に就きて深き注意を拂はざるべからず、若し生死の流に順ずる常見と斷見とは食(婬)瞋・癡に由りて起るものなるが——の二見がある

に邪披、七に禪豈とも謂ふ^{四〇}。故に若し那羅が際を斷すればと曰ふなり。

望を害し望を捨離すといふうち、望を害すとは^{四二}、形の望を盡すを現し、望を捨離すとは、命につきての望を盡くすことを現す。故に望を害し望を捨離すと曰ふなり。

彼は是れ無上士なりとは、彼は第一士・大士・妙士・高士・無上士となり。故に彼は是れ無上士なりと曰ふなり。

第九節 三十六變行の所依に就きて

三十六水あり、意により流は倍する有り。順流の二見あり、望覺に由りて出づるなり。

三十六水といふうち、水とは之れ^{四三}、三十六愛種を謂ふなり。故に三十六水と曰ふなり。

意により流は倍する有りとは、意より生じ意を首とし意に縛著さるゝものとなるをいひ、倍とは極く増し上滿するをいふ。故に、意により流は倍する有りと曰ふ。

順流の二見ありといふうち、二見とは之れ斷滅見と有常見とを謂ふ。彼は流を、地獄・畜生・餓鬼に至らしむるが故に、順流の二見ありと曰ふ。

望覺に由りて出づといふうち、三覺あり、欲覺と瞋恚覺と害覺とにして、欲より生じ欲を首とし欲に縛著さるゝが故に、望覺に由りて出づるなりと曰ふなり^{四六}。

第十節 十惡業を捨するに就きて

身惡行と及び口惡行とを棄て、意惡行と諸の穢雜の想とを棄つ。

身惡行を棄つとは、身の三惡行を滅するを現す。故に身惡行を棄つと曰ふなり。及び口惡行を棄つとは、口の四惡行を滅するを現す。故に及び口惡行をも棄つと曰ふなり。意惡行を棄つとは、意

の三惡行を滅するを現す。故に意惡行を棄つといふなり。諸の穢雜想をも棄つとは、若し諸餘の雜想あるをすれば、亦、當に滅すべきをいふ。故に諸の穢雜想を棄つといふなり。

き色の使に遇はざると言ふ喻を考へつゝ解すべし。

【三四】 颯使と俱たり、とは颯風又は、颯風に煽弄さるゝの意、神とは惡鬼なり。

【三五】 文尼は、發智に牟尼 (Muni) とす。寂靜者の意なり。

【三六】 次下に「八竟り」の夾註あり。

【三七】 本節は、内容自次頌文中の「不信」に當る。

佛の聖弟子は四諦の理を諦めるを以て他の人、外道等の異學を信ぜず、又、去らず、往かず、有にあらざ無にあらざる涅槃を知らず。

かかる那羅は、三界の繫縛、生死の際を盡くし、利即ち財位に關する有所得心、壽命に對する執着を捨離し、物とか、はらざるが故に、之を大士、無上士と稱すと云ふなり、因みに、發智の文と説相異なること多し。

【昆曇第十七、頁一九八參照】

【三八】 望は大正本に、姪とあるも三本宮本に望とあり。以下本節中、望とあるは、凡て之に準ず。

【三九】 磨窶舍 (manuṣya) とは意生のこと。

磨納婆 (Manava) とは童童などと號せらる。富樓沙 (Purusa) とは、士夫 (男子) と號じ、福

して、地獄と畜生と餓鬼と天と人とを謂ふ。故に三垢による五彌廣と曰ふなり。

諸海と十二轉といふうち、世尊は海といひて六入を現す。——是れ海といふにつきて、説くが如し、——海とは海比丘よ、愚凡人の説語にして、此の聖典に非ざるものには海とは大水處、大水聚數をいふとあり」と。然も眼入を海とを爲す。彼の色に廻使あるとき、若し彼の色の使を忍ばば、眼海を度せずして、廻使と俱なり神と俱なり羅刹とも俱なり。耳・鼻・舌・身、乃至意入は海なり、彼の法に廻使あるとき、若し彼の法の使を忍ばば、彼は意海を度せず、廻使と俱なり神と俱なり羅刹と俱なればなり」と。十二轉とは、之れ十二入を謂ふなり。若しくは眼が色中に廻し、色が眼中に廻し、乃至、意が法中に廻し、法が意中に廻するが故に、諸海は十二轉なりと曰ふ。

文尼は沃焦を度すといふうち、沃焦とは無限の生死をいふ。彼の無學の文尼は已に度し、學の文尼は方に度するが故に、文尼は沃焦を度すと曰ふなり。

第八節 佛の聖弟子(阿羅漢)が無上士たるに就きて

不信にして不住を知り、

若し那羅が際を斷じ、

望を害し望を捨離せば、

彼は是れ無上士なり。

不信にして不往を知るといふうち、世尊の弟子は已に四諦を實見するをもて之を不信と謂ふなり。何が故となれば、答へて曰く、彼は餘を信ぜずして、若しくは佛、若しくは法、若しくは僧、若しくは苦・習・盡・道のみを信すればなり。不往を知るとは、之れ泥洹(Nirvāṇa)をいふ。説くが如し、「比丘よ、不生、不往、不有なるあり、無爲は此に於いて長く久遠にして今、道に因り迹に因りても得するを得ず。」と。故に不信にして不往を知ると曰ふなり。

若し那羅(Nāgā)が際を斷ずとは、彼が一切三界の際を斷ずるをいふ。若し那羅とは、名なり。説くが如し、「衆生は之れを那羅とも謂ひ、二に 磨究舍、三に磨納婆、四に富樓沙、五に福伽羅、六

【一〇】 大正本には海の下に「也」の字あり。

【一一】 茲に「海比丘とは、海生、又は海の(Manthā, Samāna)と稱せられる比丘のことならん。海比丘に就きては Aridha. II. pp. 60-61 及び、撰集百緣經に記載あり。

今、撰集百緣經卷第九、大正四、二四四頁下、海生商主經に據るに「佛在舍衛國祇樹給孤獨園一時彼城中、有五百賈客、欲入大海採取珍寶時彼商主……產一男兒、因爲立字名曰海生……海生、年漸長大、重復勤勉。更入大海、獲其珍寶……進引還來、值大黑風吹其船舫飄墮羅刹鬼國、廻波黑風……」の文あり。以下の文と比較せば或は了解を助くることあらん。

因みに、此の海比丘の事、發智は之を缺く。

【一二】 彼は、大正本には「波」とあるも諸本皆「彼」とあり、恐らく大正本の色植ならん。因みに、彼の色の廻使あるときとは、「眼の所緣なる色に、海に於ける廻風黑風の如き無明・三垢等の煩惱心を持つとき」の意に解すべし。

【一三】 彼の色の使を忍ばば、とは、眼入の海に、廻風の如

三六 已に繩と東高と、

覺は已に塹を度すものと爲す、

亦、意と等相依とを截ち、
彼を是れ世に梵志なりといふ。

已に繩と東高とを截つといふうち、世尊は高にて慢を現し繩にて愛を現す。譬へば車の載するものが現に高く繩にて繫せらるゝが如く、是の如く、衆生は慢に高められ愛に繫せらる。彼を世尊は現と當とに滅せしなり。故に已に繩と東高とを截つと曰ふなり。

亦、意と等相依とをも截つといふうち、意とは三即ち意欲と瞋恚と愚癡となり。等相依とは之れ彼の意と相應する覺・觀を謂ふ。故に、亦、意と等相依とをも截つと曰ふなり。

覺は已に塹を度すものと爲すといふうち、佛世尊は現と當とに無明を斷ず。説くが如し、「云何んが比丘よ、已に岸を度せるものなりや。答へて曰く、無明の塹を盡くして餘り無きものなり」と。故に覺は已に塹を度すものと爲すと曰ふなり。

彼を是れ世に梵志といふとは、梵志は現に已に惡法を滅するが故に、彼を是れ世に梵志といふと曰ふなり。^{三七}

第七節 學は無明乃至諸煩惱を當に度すべく、無學は一切を度

せしものなるに就きて

一の本による二の展轉と、

三垢による五彌廣と、

諸海と十二轉とあり、

文尼は沃焦を度す。

一の本と二の展轉といふうち、世尊は、無明を是れ本なりと現す。説くが如し。

「諸の餘の惡趣と、今世と後世と、彼等は無明を本とし、慳貪等之より生ず」と。二の展轉とは、之れ名と色となり。故に一の本による二の展轉と曰ふなり。

三垢による五彌廣といふうち、三垢とは、貪婬と瞋恚と愚癡となり。五彌廣とは、之れ五趣に

【三六】發智にては前二句は「已に車を壞し、索と流注と及び隨行とを斷じ」と譯す。

【三七】次下に、「七竟り」との夾註あり。

【三八】本節は、目次中の「一」に相當するものにして、無明によりて名色あり、又は三垢によりて五趣に輪廻し、吾々は生死の大海としての十二處の世界を脱し得ずして轉生し沈淪するも、學は預流者にても極七返有にて必ずこの生死の大海を度すべきものなり亦、無學は、已に無明三垢等の一切の煩惱を度脱し牟尼となれるものといふを示すにあり。

(毘曇部十七、頁一九七參照)

【三九】廣の下に、大正本には「也」の字あるも、三本・宮本・聖乙本には共になし、據りて今、之を除去す。

して若しくは染なるも若しくは穢なるも若しくは愚なるものも無し。故に迹無し、何の迹か將ゐんやと曰ふなり。

三五 第五節 佛世尊は愛の網を斷滅し、其の所行は無量無邊なるに就きて

三三 若し叢る染枝は灑ぐも、

彼は佛の無量行なり。

愛の將ゐ隨ふ可きもの無し。
迹無し、何の迹か將ゐんや。

若し叢る染枝なれば灑ぐといふうち、叢るとは之れ愛を謂ふ。説くが如し、「比丘よ、我は今當に愛の叢水の枝の灑ぐところ、若し彼に諸の衆生が覆せば、隱没して蔭蓋に纏ぜらると説くべし」と。云何んが灑ぐといふや。答へて曰く、此の愛を盡くさず餘り有れば、灑ぎて、若しくは五趣に生ずること、過去・未來・現在するなり。彼を盡くして餘り無くんば灑がざるなり。故に若し叢る染枝は灑ぐと曰ふなり。愛の將ゐ隨ふ可きもの無しとは、此の愛を盡くさずして餘り有れば、二事に將ゐ隨はる。現法中に於て色・聲・香・味・細滑法を樂しむこと、若し身壞しぬれば苦有りて生ずるととなり。彼を盡くして餘り無くんば將ゐ隨ふものあらず。故に愛無くんば將ゐ隨ふ可きもの無しと曰ふなり。

彼は佛の無量行なりといふうち、云何んが佛なりや。答へて曰く、彼の如來が無餘の智・見・明・覺・思惟を已に得し度し成就するが若き、之を佛と謂ふ。二邊即ち斷滅と有常とに著するは、彼れ佛世尊の行に非ざるなり。四意止の無邊・無限・無量なるもの、此れ佛世尊の行なり。故に彼は佛の無量行なりと曰ふなり。

迹無し、何の迹か將ゐんやといふうち、迹とは之れ垢を謂ふ。彼には垢の、一も將ゐ可き若しくは染なるもの若しくは穢なるも若しくは愚なるものも無し。故に迹無し、何の迹か將ゐんやと曰ふなり。

三六 第六節 愛・慢等を斷滅する佛世尊こそ眞の梵志と稱し得べきに就きて

第六章 諸種の偈(伽他)の意義に就きて

七五七

【二二】 次下の割註に「五覺り」とあり。

【二三】 本節は、本章内容目次の「灑」偈文に當るものにして、愛の細網を斷滅し盡せば、三界に引き廻さることなし。かくて愛の網を完全に脱出せし人は即ち佛如來にして、其の所行(四念住)は、一前節に説くが如く——無邊無量なりと言ふを表すなり。

(毘曇部十七、頁一九五)

【二四】 若し叢る染枝……無しの二句は、發智には「諸網にして布くべからずんば、愛は何所にも將ゐること無し」とせり。

【二五】 次下に「六覺り」といふ割註あり。

【二六】 本節は、本章内容目次の「若負」偈に相當するものにして、愛慢及び意欲・瞋恚・無癡之等と相應する覺(尋)觀(伺)とを捨離したるは覺即ち如來にして、如來こそ、惡法を滅せる眞の、志と稱すべしと言ふの道理を顯示するなり。

(毘曇部十七、頁一九六參照)因みに、本節を若負」と稱せし所以明ならず。

せるなり。云何んが五なりや。答へて曰く、數を五となす。五蓋中の五、五下分結中の五なり。彼は當に捨し離し斷ずべきものなるが故に、已に五虎を害すと曰ふなり。

彼は之れ清淨なりと謂ふうち、欲を盡くすは清淨なるものなり。瞋恚と愚癡とが已に盡くるを、之を清淨と謂ふをもて、彼は故に之れ清淨なりと謂ふなり。

第四節 佛の無量行に就きて

若し已に盡くして不生なり、

已に盡くして將ひ隨はざるもの、

彼は佛の無量行にして

迹無し。何の迹か將ひんや。

若し已に盡くして不生なりといふうち、結を盡くして餘り無き、之れを盡くすと謂ふ、或は生ずるあり、或は生ぜざるあり。誰が生ずるものなりや。答へて曰く、若し彼の結の盡より退するものなれば、此れ生ずるものなり。誰か生ぜざるものなりや。答へて曰く、若し彼の結の盡より退せざるものなれば、此れ生ぜざるものなり。故に若し已に盡くして生ぜざるものなりと曰ふなり。

已に盡くして將ひ隨はざるものといふうち、此の結を盡くさず餘り有りとせば、二事を以て將ひ隨はる、現法中に於て色・聲・香・味・細滑を樂しむことと、若し身壞せば苦有りて生ずることとなり。彼の結を盡くして餘り無くんば、將ひ隨ふものあらず。故に已に盡くして將ひ隨はれざるものと曰ふなり。

彼は佛の無量行なりといふうち、云何んが佛なりや。答へて曰く、彼の如來が「無餘の智・見・明・覺・思惟を已に得し度し成就するが如き、之を佛と謂ふ。二邊の有の常と斷とに著するもの、此は佛世尊の行に非ざるなり。四意止の無量・無邊・無限なるもの此れ佛世尊の行なり。故に彼は佛の無量行なりと曰ふなり。

迹無し、何の迹か將ひんやといふうち、迹とは之れ垢を謂ふ。彼れには垢の一の將ひべきものと

【七】 次下に「四竟り」との制註あり。

【八】 本節は、目次中の「盡」偈に當るもの。此の中、盡とは「若し已に盡くして不生なりし」に因みしものなり。

即ち本節は、佛は、一切の結を餘り無く盡くして、結盡より退すること無く、從つて、色等の五妙欲にも心、將ひられず、死して苦を受くるの憂なし。此の佛の無量無邊の行とは、即ち四意止(念住)にして、此の行には、一の垢の將ひべきものもなしとて、佛の無量行を讚え、併せて、四念住を修すべきことを教示するなり。

(毘曇部十七、頁一九五參照)

【九】 「無餘の智見……成就する」を發智は、無學の智・見・明・覺・成就と慧觀の現觀とを起して成提すと譯す。

【一〇】 四意止とは、身・受・心・法の四念住なり。

曰ふなり。

亦は王と及び二學といふうち、王とは之れ^{一〇}。有漏の心意識を謂ふ。説くが如し、

「六増上王は、^二諸塵の染に非ず汚に無きものに染著す、

染するは謂く之れ愚なるものなり。」

と。二學とは之れ戒盜と見盜とを謂ふ。故に、亦は王と及び二學を損捨すと曰ふなり。

邦土と翼従とを捨すといふうち、邦土とは之れ^{二三}。垢をいひ、翼従とは之れ彼の垢と相應する有覺有觀を謂ふ。彼等は常に捨し離し斷すべきものなり。故に邦土と翼従とを捨すべしと曰ふ。

礙無くして過ぐるは梵志なりといふうち、礙に三礙あり、貪欲と瞋恚と愚癡となり。彼を盡くせば欲界の中より過ぎ出要し、色・無色界を過ぎ出要す。梵志は、此に於て礙の盡と出要とを見るものなり。故に、礙無くして過ぐるは梵志なりと曰ふなり。^{一四}

父母と亦是王と及び二學とを損捨し、^{一五} 已に五虎を害せば、彼は之れ清淨なりと謂ふ。

父母を捐捨すといふうち、母とは之れ愛を謂ふ、生ずるが故なり。説くが如し、

「愛は士を生じ、彼の心を馳走するものと爲す、人は生死に囚り、彼の苦を大いに畏る」と。父とは有漏行の有を謂ふ。彼は常に捨し離し斷すべきものなり。故に、父母を損捨すと曰ふなり。

亦、王と及び二學といふうち、王とは之れ有漏の心意識なり。説くが如し、

「六増上王は諸塵の染に非ず汚無きものに染著す、染するとは謂く之れ愚なるものなり」と。二學とは之れ戒盜と見盜となり。故に亦、王と及び二學とを損捨すと曰ふなり。

已に五虎を害すといふうち、虎にて、世尊は瞋恚を現す。彼の虎が兇惡無慈なるが如く、是の如く瞋恚纏は衆生にとりて兇惡無慈なるものなるをもて、彼の世尊は常に盡すべきものたることを現す。

【一〇】 有漏の心意識とは、發智に、有取識(sakajjanavijñāna)と瞋ず。煩惱を有する心・意識即ち有漏の心意識の意なり。

【一一】 六増上王とは第六意識の意。

【一二】 諸塵とは、六塵など、稱する場合の塵の意なり。六塵とは色・聲・香・味・觸・法にして、此が心の所緣となりて染汚心を生ずるが故に、之を六塵の境など、稱す。

【一三】 垢は發智に煩惱と瞋じ、翼従は、之を等何とす。

【一四】 次下に「三竟り」の刺註あり。

【一五】 眞の清淨と稱すべきものに就きて。

【一六】 大正本には虎の字無きも三本と宮本には在り、發智をも参照して今は、かく補正す。

見るとするなりとなり。故に、視ざるを視るも亦、視るとすと曰ふなり。

第二節 阿羅漢を害せず供養すべきに就きて

應に婆羅門を捶つべからず、

亦、婆羅門を放つべからず、

不是なるは婆羅門を捶つことなり、

亦、不是なるは婆羅門を放つことなり。

應に婆羅門を捶つべからずといふうち、婆羅門といふは之れ阿羅漢をいふ。彼を若しくは手、若しくは石、若しくは刀、若しくは杖もて捶つべからず。故に應に婆羅門を捶つべからずと曰ふなり。亦、婆羅門を放つべからずとは、彼の阿羅漢は、放ちて敬せず亦、衣・食・臥具・病瘦醫藥等を施與せざることもあるべからずといふなり。故に亦、婆羅門を放つべからずと曰ふ。

不是なるは婆羅門を捶つことなりとは、彼の不是弊醜なるは、諸の阿羅漢を、若しくは手、若しくは石、若しくは刀、若しくは杖もて捶つことなるをいふ、故に、不是なるは婆羅門を捶つことなりと曰ふ。

亦、不是なるは婆羅門を放つことなりとは、彼の不是弊醜なるは、諸の阿羅漢を放ちて、敬し衣・食・臥具・病瘦醫藥を施與せざることなるをいふ。故に亦、不是なるは婆羅門を放つことなりと曰ふなり。

第三節 眞の梵志と及び清淨と稱し得る者とに就きて

父母と亦是王及び二學を損捨し、

邦土と冀從とを捨して、礙無くして過ぐるは梵志なり。

父母を損捨すといふうち、母とは之れ愛を謂ふ、生ずるが故なり。説くが如し、

「愛は士を生じ、彼の心を馳走するものと爲す 人は生死に因り、彼の苦を大に畏る」

と。父とは之れ有漏行の有るを謂ふ、彼は當に捨し離し斷すべきものなり。故に、父母を損捨すと

註あり。

【五】本節は、目次中の「婆羅門」に相當する段にして、婆羅門即ち阿羅漢を手又は刀杖等を以て害すべからず、害するは不是なり、供養し敬すべし、供養し敬せざるは不是なるの義を説くなり。

【六】次下に、「二竟り」との割註あり。

【七】本節は、目次の「二母」偶に當るものにして、此の中二の母とは、眞の梵志を説くときも、愛(母)の捨をとき、清淨なるものを説くに際しても母を捨すべきことを説くに據る。即ち本節は先づ、最初に、眞の梵志たるべきものは、愛(母)と有漏業(父)と有漏の心意識(王)と、見盜と戒盜との二見(二學)とを捨し、更に、煩惱(邦土)と冀從(隨煩惱)とを捨し、貪・瞋・癡の三礙なく、之を盡くし、欲・色・無色界を出ずるものなるを明し、次に、眞の清淨と稱すべき者も亦、愛(母)と有漏業乃至二見を捨し、五蓋・五下分結(五虎)を殺害して斷じ已れるものなりとの義を明せり。

【八】眞の梵志たる者に就きて

【九】邦土と冀從とは、發智に、國と隨行と稱す。

第六章 諸種の偈(伽他)の意義に就きて

(阿毘曇見鍵度中、偈跋渠第六) (發智論卷第三十、大正・二六、一〇二九頁)

二 本章の内容目次

- (一)見と、(二)婆羅門と、(三)二母と、(四)盡と、
- (五)灑と、(六)若負と、(七)一と、(八)不信と、
- (九)三十六と、(十)惡と、(十一)見と。
- (十二)無望と、(十三)沫と、(十四)講堂と、
- (十五)墮と、(十六)皮となり。

三 第一節 已見諦者と未見諦者との差別に就きて

視者は視るもの時も視る。

視ざるものゝ時も亦視る。

視ざる者は亦は視るとし、

視ざるを視るも亦視るとする。

と。此の中、視者は、視る時視る。視るとは之が諸の苦・習・盡・道を已に見ることを謂ふ。視るもの時も視るとは、之に諸の餘の苦・習・盡・道を見しものを、彼も亦、此の苦・習・盡・道を見しものと、見るを謂ふなり。故に視者は視るもの時も視ると曰ふなり。

視ざるものゝ時も亦視るとは、之は諸の餘の苦・習・盡・道を見ざるものを、彼は此の苦・習・盡・道を見ざるものなりと視るを謂ふ。故に視ざるものゝ時も亦、視ると曰ふなり。

視ざる者は亦は視るとすといふうち、視ざるとは、之の苦・習・盡・道を見ざるを謂ひ、視るとは、之の諸の苦・習・盡・道を見るものとするをいふ。故に視ざる者は、亦は視ると曰ふ。

視ざるを視るも亦、視るとすは、彼は苦・習・盡・道を見るとするも、此は苦・習・盡・道を見ざるを

【一】 本章は種種、意義の必ずしも明ならざるの偈文即ち伽他を擧げて、其の意味内容を検討し解釋せんとせしものなり。而も婆沙は、此の註釋を全然省略せり。

【二】 茲に示す目次は、以下、解釋せんとする諸の偈文の中の、目だち易き一句又は一字をととりて、全體を示さんとしたるものにして、他の跋渠の名目の如く、其れ自身意味を有するものに非ず。

此の中、例せば第一節の(一)「見」とは已見諦者と未見諦者との差別に就きての偈文の存在を示すが如し。

此の目次に附せる(一)(二)乃至(十六)の番號は、次下の節數と一致せしめ置きたるが故に、之に因りて、目次の義を知るべし。

【三】 本節は、前内容目次中の「見」に相當する段にして、四諦を已に見し者は、四諦を自ら視る時は、かくと如實知見し、他人にして未見諦者なれば彼は未見諦者なりと如實知見するも、未だ四諦を視ざる未見諦者なれば、自ら四諦を見ずして、觀ると謂ひ、他人の四諦を見ざるものを見る時も、亦、彼の人はい見諦者なりと誤知するをいふなり。

【四】 次下に「見竟り」との割

説明を加へて言ふ、外道は鳥禁・鷓鴣禁・默然禁等を受持せば、此に由りて便ち淨脱し出離し苦邊に至るとの見を主張するも、此は非因を非と計する戒禁取にして見苦所斷なり云云と。

【六三】外道の諸の活(浴)に就きて。

此の活説も亦發智は、非因を因と計する戒禁取にして、見苦所斷なりと言ふ。

【六四】外道の諸の梵活(梵行)に就きて。

【六五】發智には「諸の補特伽羅が、梵行を受持し、婬欲を遠離せば、此に由りて淨脱し出離することを得て、苦樂の邊に至る」と言へり。

【六六】大正本には、受は愛とあるも、三本・宮本に受とあり。

【六七】次下に、發智は、「此は非因を因と計する戒禁取にして、見苦所斷なり」と加へ、更に、「苦は苦行を言ふ、云云」の一文を加へて、外道が苦行にて淨脱出離して、苦邊に至るといふも、亦、非因を因と

計する戒禁取見にして見苦所斷なることを明にせり。

【六八】外道の諸の養全(承事)に就きて。

此の承事説も亦、發智は、非因を因と計する戒禁取にして見苦所斷なりと斷ず。

【六九】外道の五妙欲涅槃論。

こは、樂行の一邊を明すもの。【七〇】以下、具眼の士即ち佛の如實見と苦の邊際を盡くせるに就きて。

發智は、具眼の士を、佛及び佛弟子とし、八禪度の佛世尊

のみとすると異なる。因みに、以下の文は發智と説相上、甚だ異れり。

【七一】發智は、以下の「邊」といふ語を「苦の邊」即ち涅槃なりと定義するに對して、八禪度は、「邊」を、前説の二邊見の邊の意味ととり、此の邊を

我は苦の極なるものとなす、故に我は此の邊を苦なりと説くと言はんとするものゝ如し。

尙、可考。

れ邊なり、後邊なり、最後邊なるが故に、此に邊と曰ひ、我は苦なりと説くといふなり。

見品、第四十三竟り(梵本二百七十六首盧、秦三千三百七言)

此の中、新舊兩譯語を對比せば次の如し、
八捨度 發智 (A)九慢類

一、我 豪——我勝慢類

二、我相似——我 等

三、我卑——我 劣

四、有勝我——有勝 我

五、有似我——有等 我

六、有卑我——有劣 我

七、無豪我——無勝 我

八、無似我——無等 我

九、無卑我——無劣 我

(B)七慢の三名

一、增 慢——過 慢

二、慢 慢——慢 慢

三、小 慢——卑 慢

即ち之に依りて見るに、九慢とは七慢中の慢・過慢・卑慢の分別なること明なり。尙、茲に「此の見」と言ひ、又見捷度中に、九慢類を脱ける所以に就きては、婆沙に所謂有部の四大論師の意見あり、就きて見るべし。

(婆沙一九九、毘曇部十七、頁一五一参照)。

【四八】慢は大正本に増慢とあるも、聖乙本には慢とあり、發智と對比するに、後者を應理とするを以て、今はかく訂正す。

【四九】本節は、本章頌文の「非

風」に當る。風無く、雨無く乃至垢と淨とは住する處無しといふ惡見を紹介してそは斷滅見にして苦諦斷なることを明す段なり。されど、發智は、「風吹かず、河は流れず乃至雜染と清淨とは自性安住にして増さず減ぜず」といふ此の見は、邊執見のうちの常見の攝にして見苦所斷なり」と言ひ、兩者甚だ相違せり。

(婆沙一九九、毘曇部十七、頁一五四参照)。

【五〇】本節は、本章頌文の「我作」に相當するものにして、一切は我の造作するとの見と、及び一切は他の造作するとの見との二種の見を紹介し、彼等の見は毒箭の如きものなるに、彼等は、之を自身を害する毒箭と見ざるが故に、共に觸惱さるるものなることを明にする段なり。

以下の方意は發智のそれと、同じきも、其の譯語に於ては、相違あり、婆沙一九九、毘曇部十七、頁一五五参照すべし。

【五一】外は大正本に依とあるも三本・聖乙本には外とあり。

發智には、衆生とは外道をいふといふが故に、今は後者に隨ひ、かく訂正す。

【五二】本節は、本章頌文の所謂「亦、有慢」論にして、慢に住する衆生即ち具慢の衆生が、慢のために取らはれ縛され、或は我又は世間は有といひ、無と言ふ相違逆するお互の自己の見(解)に執はれて、生死に輪廻し、生死を度脱して涅槃に至ること能はずと言ふなり。

(婆沙一九九、毘曇部十七、頁一五六参照)。

【五三】本節は、見捷度の最後の一節としての本章頌文の「若しくは得と若しくは當得」との論に相當するものにして、諸の外道の執する學又は戒が、即ち戒盜(我禁取見)又は見盜(見取見)に過ぎず、又、苦樂の二邊に迷執するものなることを明し、次に、眼に見を成ずるもの即ち佛世尊は、此の二邊に對して如實見を有するを以て、終に淨解脱を得、其の邊際を盡くすに至るの義を示さんとする段なり。

以下發智の文と可なりに異なるも、一一は之を擧げず、詳細は婆沙一九九、毘曇部十七、頁一五八参照せよ。

【五四】得と當得とに就きて。

【五五】發智は次下に、「禁」を加ふ。

【五六】發智には「苦」とを加ふ。

【五七】發智は、次に、「見ずして極く沈走す。明眼は見るをもて能く異り、彼に於て塵と慢と無く、絶路して苦邊に至る」の四句を附せり。

【五八】二とは、得と當得との二得なり。

【五九】異學戒とは外道の意なり。

【六〇】外道の諸學に就きて。發智は、之を「非因を因と計する戒禁取にて見苦所斷とせり。

因みに、以下は苦行の一邊を明すもの——

【六一】外道の持戒に就きて。發智は此を「戒」といひ、是の如き戒を、非因を因と計する戒禁取にして、見苦所斷なりと言ふ。

【六二】次下に、發智は、「禁」の

諸の活とは、諸の衆生は是の如き見、是の如き語をなす——彼が多く活き久しく活きんとせば、若しくは人泉・不人泉・上人泉の恒門の三藕泉にて洗ふべし——と。故に活と曰ふ。

諸の梵活とは、諸の衆生は是の如き見、是の如き語をなす——彼の淨脱出とは、諸の兩々の梵行を、改め往いて等しく受くることなり——と、故に諸の梵にて活くといふ。

諸の養全とは、諸の衆生は是の如き見、是の如き語をなす——彼の淨脱出は、若しくは火・日・月・星・宿・藥に事えて宮を嚴飾するなり——と。故に諸の養全と曰ふ。

此等は一邊にして作と作の縁と無しとするものなるをもて、此れ戒盜にして、苦諦斷なり。

諸の衆生は、是の如き見、是の如き語をなす——好欲は淨欲なるをもて、食欲・充根欲の欲の中には過の事無し——と。此は第二邊して、穢法を以て盜みて最と爲すものなるをもて、此れ見盜にして、苦諦斷なり。

此の二邊は、戒盜と見盜とを知らず如實に知らず如實に見ざるをもて、彼は取し彼は受け彼は走る時を見て眼は見を成ずるなり。彼の眼成ずるものは之を佛世尊と謂ふ。彼は取する時、受くる時、起る時、起るを見るが故に、眼は見を成ず。彼此の二邊は、戒盜と見盜なりと知り、如實に知り

如實に見るをもて、彼に取せず彼を受けず彼に走らざるなり。

不起を見て、眼は見を成ず。彼の眼を成ずるものは之を佛世尊と謂ふ。彼は取せざる時、受けざる時、走らざる時、起きざる時を見る。故に眼は見を成ずと曰ふ。

彼は此れに染するに非ず穢せらるるに非ず愚なるに非ず、彼は不欲にして淨解脱出し、彼は復び輪轉せず。輪轉は無量に生死するを謂ふ。彼は盡さざるもの非ずして餘り有るに非ず。故に復び輪轉せずと曰ふ。此にいふ「邊をば我は苦なり」と説くといふうち、苦とは五盛陰なり。彼の五盛陰は此

一一の對治道を紹介する段なり。

(婆沙一九九、毘曇部十七、頁一四六參照)。

【四四】發智は、以下を、「是れ有情なり、命者・生者・養育者・補特・羶、意生・儒童・作者・教者・生者・等生者・起者・等起者・語者・覺者・等領受者……」とす。新譯の語彙の多き適例なるべし。因りて掲ぐ。

【四五】本節は、本章頌文の「欲樂及び諸禪と」に當るものにして(一)欲界の五妙欲を第一現法涅槃とするの見、

(二)初禪に入りて五支を具し住するを、第一現法涅槃とする見、

(三)第二禪に入りて四支、

(四)第三禪に入りて五支、

(五)第四禪に入りて四支を具足して住するを、夫第一現法涅槃とする見趣を紹介し、其の對治道を示す段なり。但し發智の文より凡て簡單なり。

(婆沙一九九、毘曇部十七、頁一四九參照)。

【四六】淨脱出とは、發智の第一現法涅槃の義なり。

【四七】本節は、本章頌文の「空の有と無と」に相當するものにして、見趣と相似にして、見に依りて起る九慢を論じ、同時と九慢と七慢との關係を明にする段なり。

他が作るといふ彼は有るに非ずと曰ふなり。

第十四節 具慢の衆生の生死輪廻に就きて

慢に此の衆生が住するとき、慢は取し慢は縛す。

見にて逆ひて生死を過ぎず。

慢に此の衆生が住するときとは、七慢に彼が住し屬し成就するをいふ。故に慢に此の衆生が住すと曰ふ。慢は取すとは、彼は取し重取し恒に取するが故に、慢は取すと曰ふ。慢は縛すとは、彼は縛し重縛し恒に縛するが故に、慢は縛すと曰ふ。見にて逆ふとは、斷滅見と有常見とにて俱に逆ひ、有常見と斷滅見とにて俱に逆ふをいふ。生死を過ぎずとは、無窮なる彼を越えず等越せざるをいふ。故に生死を過ぎずと曰ふなり。

第十五節 外道の諸種の戒盜・見盜と其の對治道、並に佛の如實見等に就きて

若しくは得と、若しくは當得と、二は塵と雜り俱に散す。

異學戒・諸學・諸持戒・諸活、諸の梵活、諸の養全あり。

若しくは得、若しくは當得といふうち、已得の持・陰・入の故に若しくは得と曰ひ、若しくは當得とは、不得の持・陰・入は必ず當に得すべきが故に、若しくは當得と曰ふ。

二は塵と雜り俱に散すとは、二は塵なる欲・瞋・恚・愚癡によりて、彼は散雲し多散するが故に、二は塵と雜り俱に散すといふ。異學戒とは、彼を學び彼に従ふ、故に、異學戒と曰ふ。

諸學とは、諸の衆生は、是の如きの見、是の如きの語をなす——彼の淨脫出は、諸の、象頸・馬背・車・弓地・鉤強・諸輩にて出入するを學ぶによる——と。故に諸學と曰ふなり。

諸の持戒とは、諸の衆生は是の如きの見、是の如きの語をなす——彼の淨脫出は、若しくは牛戒を持し、狗戒・鹿戒・象戒・禿鼻戒・裸形戒を守をいふ——と。故に諸の持戒と曰ふなり。

(一)自作なり、(二)他作なり、(三)自作と他作となり、(四)自作にも他作にも非ずとの四種の惡因論を紹介し、此等は凡て作と作の縁とを待たずとする説なるが故に正見に非ずとして其の對治道を示す段なり。

(婆沙一九九、毘曇部十七、頁一四三參照)。

【三】苦樂は我作なりとするは戒盜にして苦諦斷なり。

【四】苦樂は他作なりとするは戒盜にして苦諦斷なり。

【五】苦樂は自他との作なりとは、戒盜にして苦諦斷なり。

【六】苦樂は非自作非他作なりとするは、邪見にして苦諦斷なり。

【七】本節は、我と世我即ち世間との、常恒論の一つの型を紹介し、其の對治道を明す段なり。

(婆沙一九九、毘曇部十七、頁一四五參照)。

【八】本節は、本章頌文の「彼の此の我の六見」に相當するものにして、我に關し、(一)此の我有り(二)此の我無し(三)我は我を觀る、(四)我は非我を觀る、(五)無我が我を觀る、(六)我、語者乃至報を受くる者ありといふ、この六種の我に關する見趣を紹介し、其の

第十二節 風無く乃至日月出沒せず垢・淨の住する處無しとの惡見と其の對治道

所謂此の見——風無く、雨無く、射する無く、懷妊は孕まず、河は流れず、火は燃えず、日月は出でず沒せず、垢と淨とは住する處無しといふ——は、此れ邊見中の斷滅見の攝にして、苦諦斷なり。

第十三節 我作又は他作の二種の外道論に就きて

所謂此の見——

我は衆生を造り、

他も亦造ること有り、

一一は見るごと有る無く、

此は是れ箭なりと觀ぜず——

といふ、此の中、我に依りて衆生を造るとは、我が作し我が造り我が化するが故に「我は衆生を造る」と曰ふをいひ。他も亦、造ること有りとは、他が作し我が造り我が化するが故に、他も亦、有造ることと曰ふをいふなり。一一は見るごと有る無しといふうち、一一とは一切のいひに非ず、箭とはは見なり。彼等は看す視す覺せざるが故に、一一は見るごと有る無し。此を是れ箭を觀ぜずと曰ふなり、當に此の箭の縁を觀ぜずべし、

我が作るといふ彼は有るに非ず、

他が作るといふも、

彼は有るに非ざるべし。

此の中、當に此の箭の縁を觀ぜずべしとは、此の箭とは之れ見を謂ふ。此の箭の縁とは、別して生じ別して老し別して病し別して死するをいふ。此の箭の縁を視るは視覺なり。故に箭の縁を觀ずると曰ふ。生の受に觸するが若しとは、生とは之れ ^五外道なり。彼の見を學して染著するは觸なり。故に曰く、生の受に觸するが若くなり。我が作るといふ彼は有るに非ずとは、彼の、我が作り我が造り我が化するごと、有るに非ずといふなり。故に、我が作るといふ彼は有るに非ずと曰ふ。我が作るといふ彼は有るに非ずといふなり。故に

盜即ち戒禁取見にして、苦諦斷なりと判ずる段なり。因みに其の説順は發智と多少異れり。
【一〇】 婆沙一九八、毘曇部十七頁一三四參照。

【三】 本節は、本章頌文の「本縁・蒙・無」論に當り一切人の受くる所の身心は凡て、これ過去の業果に過ぎずとなす宿作因論と、凡ては自在天の變化に因ると主張する神意論即ち靈祐論と及び一切人の所受は、凡て無因無縁にして偶然に過ぎずと主張する所謂偶然論とを紹介し、これ等惡見の對治道を明す段なり。

【一〇】 婆沙一九八末—一九九始め、毘曇部十七、頁一四〇以下參照。

【三】 宿作因論は戒盜にして苦諦斷なり。

【四】 本所作とは、發智等に宿作と宿業と纏ずるもの。

【五】 神意論は戒盜にして苦諦斷なり。

【六】 當者の化とは本章頌文に「蒙」とあり、發智に「自在の變化」と纏ずるもの。

【七】 無因無縁偶然論は邪見にして苦諦斷なり。

【八】 本節は、本章頌文の「自作に因ると亦、他と我作他作と無因と」の論に相當するものにして一切の苦樂等の因は

(二)所謂此の見——實に此の我無しといふ——は、此れ邊見中の斷滅見の攝にして苦諦斷なり。
(三)所謂此の見——我は我を觀る、眼と色とは我に住せばなりといふ——は、此れ身見にして、苦諦斷なり。

(四) 所謂此の見——我は非我を觀る。眼は我に住するも、色は衆具の因なればなりといふ——は、此れ身見にして、苦諦斷なり。

(五)所謂此の見——無我が我を觀る。色に我は住し、眼は衆具の因なればなりといふ——は、此れ身見にして苦諦斷なり。

(六)所謂此の見——此は是れ我なり。若しくは語るもの若しくは覺するもの、作すもの、作さしむるもの、生ずるもの、等生するもの、彼々に於て善・惡の行を作し報を受くるものありといふ——は、此れ邊見中の有常見の攝にして、苦諦斷なり。

第十節 五種淨脫出(現法淨樂法)と其の對治道

所謂此の見——彼の淨脫出とは、五欲の樂を娛樂するが若きといふ——は、穢法を以て盜みて最と爲すものなるをもて、此れ見盜にして、苦諦斷なり。

所謂此の見——彼の淨脫出とは、欲を解脱し乃至第四禪に遊ぶが若きにして、作と作の縁と無しといふ——は、此れ戒盜にして、苦諦斷なり。

第十一節 九慢と七慢との關係

所謂此の見——我豪とは空しき見に依りて起す増慢なり。我相似とは空しき見に依りて起す慢なり、我卑とは空しき見に依りて起す小慢なり、有勝我とは見に依りて起す小慢なり、有似我とは見に依りて起す慢なり、有卑我とは見に依つて起す増慢なり、無豪我とは見に依りて起す慢なり、無似我とは見に依りて起す増慢なり、無卑我とは見に依りて起す小慢なり。

【二六】造り遣らしめ……乃至因縁による惡も福も、亦其の報も無し」とは、邪見にして苦諦斷。

【二七】大正本には語は説とあるも、三本・宮本・聖乙の諸本には皆、語とあり今は後者に従ふ。

【二八】本節は、頌文の「七士身」に當る。即ち、地・水・火・風・苦・樂・命の七身は萬有特に衆生の成立要素にして、而もこれが衆生の身體を形成するとするも、其の要素と要素とは相禦らず即相觸礙せず、其の體微細なるが故に、今、刀等を以て、衆生の身中を割くとも、其の命等の要素を害することなし。従つて不殺生は成立せず……といふが如き常見論を紹介し、これ常見にして苦諦斷となすなり。婆沙一九八、毘曇部十七、頁一三二、參照。

【二九】刀は大正本には「乃」とあるも三本・宮本には刀とあり。

【三〇】本節は、本京頌文の「四因」即ち宿作因(Paribhaya Karma)論の代表的ものとして、四百千の生門乃至、七夢七百夢等の一定の經驗を経て八十四百千大劫を、過れば、自然法爾に一切の衆生は、苦の邊際を得し、解脱すと説く惡見を紹介し、こは戒

第六節 一切人の所受は宿作又は自在變化に因るとの惡見と其の對治道

所謂此の見——諸の此の人の更る所の彼の一切は、本所作を因とし、作と作の縁と無しといふ——は、此れ戒盜にして、苦諦斷なり。

所謂此の見——此の人の更る所の彼の一切は、富者の化にして、作と作の縁と無しといふ——は、此れ戒盜にして、苦諦斷なり。

所謂此の見——此の人の更る所の彼の一切は、無因無縁なりといふ——は、此れ邪見にして、習諦斷なり。

第七節 苦樂等は自作或は他作なり等とする諸惡見と其の對治道

所謂此の見——我が苦樂を作し、作と作の縁とは無しといふ——は、此れ戒盜にして、苦諦斷なり。

所謂此の見——他が苦樂を作し、作と作の縁と無しといふ——は、此れ戒盜にして、苦諦斷なり。

所謂此の見——苦樂を我が作し、他が作すものにして、作と作の縁と無しといふ——此、は戒盜にして、苦諦斷なり。

第八節 我及び世我(世間)は常恒なりとの惡見論と其の對治道

所謂此の見——苦樂は自作に非ず、他作に非ず我作に非ず他をして作さしむるにも非ず、無因無縁にして衆生は苦樂を更る所なりといふ——は、此れ邪見にして、習諦斷なり。

第九節 我に關する六見論と其の對治道

(一) 所謂此の見——實に此の我有りといふ——は、此れ邊見の有常見の攝にして、苦諦斷なり。

り。

但し、發智は、これも亦、四
大種の士夫身云云の邊見中に
述べ、苦諦斷とせり。

【二】 前の斷滅見は虛妄語な
りとは常見にして苦諦斷。

これ亦、婆沙の説明文中にあ
るものと一致す。

(婆沙一九八、毘婆沙十七、頁
一二五、參照)

【三】 婁の次下に、大正本に
は「曾」の字あるも三本・宮
本には無きが故に、今は此の
「曾」字を除去せり。

【四】 本節は、無因無縁論の
種々なる惡見を紹介し、其の
對治道を示さんとする段なり。

因みに、本節は、本章頌文の
「垢と翳と、無因によりて無智
見と、無力、無精進にして作
す」の論に當る。

【五】 無因無縁にして衆生は
垢有りとは邪見にして習諦斷。

【六】 無因無縁にして衆生は
淨となるとは、邪見にして道
諦斷。

【七】 無因無縁にして衆生は
無智無見たりとは、邪見にし
て習諦斷。

【八】 無因無縁にして衆生は
智見を生ずとは、邪見にして
道諦斷。

【九】 「力無く精進無く、乃至
無因無縁にして衆生は苦樂を
六六生に受く」とは、邪見に
して習又は道諦斷。

若しくは樂なるも苦樂なるも、相關すること無し。彼の七とは何ぞや、所謂地身と水身と火身と風身と苦と樂と命との七なり。是を、七士身は不作にして作し、不化にして化、實に住聚し、常住にして彼は立ち、移動すること無く、各々相關すること無く、若しくは福も若しくは惡も福惡も、若しくは樂も若しくは苦も樂苦も、此等は若しくは士の樂にも若しくは士の苦にも豫からず。世事に七身の中間を、刀が過ぎ去ることを得るも亦、命を害せず。彼は是の説——「若しくは害し若しくは殺すも、命終するに到らず。而して命終するに到るを作すことも無しといふ——は、此れ邊見中の有常見に攝し苦諦斷なり。

第五節 四百千の生門等を八十四百千大劫流轉し盡せば、法爾に苦邊に至るとの

惡見と其の對治道

所謂此の見——四百千の生門あり、六十百千大劫あり、六百三行・行・半行あり。六十二跡向・六十二塵持・六十二中劫・百二十根・百三十六大地獄・四十九百千梵志家、四十九百千の裸形村、四十九百千の龍國あり。中に於て、六六生と八土地、七想行と七無想行と七尼毘子行、七阿須倫・七非阿須倫・七天・七悲・七人・七非人・七泉・七百泉・七嶮・七百嶮・七山・七百山・七夢・七百夢あり。是を八十四百千大劫と謂ふが、若しくは愚なるも若しくは智なるも往來經歷することに因りて、其の苦際を盡すなりと——といふあり。彼は是の説「我は、此の戒の果として、淨行の行ぜざるを熟行せしめ、當に熟すべきものと、已に熟すべきものとを當に倍すべく、已に倍せるをして二倍せしむること」を作すこと有ること無く、苦樂は已に進めば退くこと無し、譬へば縋丸あり、縋を執りて放走せしむるが如く、是の如く、八十四百千大劫は、若しくは愚なるも若しくは智なるも往來し經歷せば、其の苦際を盡くすものにして、作と作の縁とあること無し——をなすは、此れ戒盜にして、苦諦斷なり。

【三】趣（正行）即ち學・無學道無しとは、邪見、道諦斷趣は發智に正行とあり。自智にて作證し……は發智に「現法にて作證し、具足し、我が生已に盡き乃至後有を受けず」と斷ず。
【四】本節は本京頌文の「斷」に相當するものにして隨見及び其の他邪見をも併説し其の對治道を示さんとするものなり（婆沙一九八、毘婆沙部十七、頁一四四參照）。
【五】來世無しとは、斷滅見にして苦諦斷。
【六】西 四大人身（四種類の士夫の身）は死後斷滅すと、常見にして苦諦斷。
【七】發智は、此の文を前文の續きとして同じく斷見とせり。
【八】我は變じて灰となるとの邪智、乃至無漏行が我なりとの邪見に對きて、此は發智には無く、むしろ婆沙の四種類の士夫身云々の文の説明文に類似す。
【九】貪者が施を欺じ、智者は受くるを欺すと、邪見にして道諦斷。
【一〇】佛、獨覺、及び聲弟子は皆、諸の智慧者は皆施を行ずることを誦するも、彼を撥するを愚となす」といふが故に、此の佛教等と正反對な惡見は、正に、道諦斷なりとな

は此れ邪見にして道諦斷なり。

【三】所謂此の見——無因無縁にして衆生を無智無見たらしめ、無因無縁にして衆生は無智無見となる

——といふは、此れ邪見にして習諦斷なり。

【四】所謂此の見——無因無縁にして衆生に智見を生ぜしめ、無因無縁にして衆生は智見たり——とい

ふは、此れ邪見にして道諦斷なり。

【五】所謂此の見——力無く、精進無く、力と精進と無く、自作無く他作無く、土作無く、自作に非ず他作

に非ず土作に非ず。士・力士・精進士・方便・一切衆生・一切蟲・一切神は力無く自在無く精進無く方便

無し。行報有るも無因無縁にして衆生は苦樂を六六生に於て受く——をなして、若し有漏の力、精

進等を誹謗するものなれば、此れ邪見にして習諦斷なり。若し無漏の力・精進等を誹謗するものな

れば、此れ邪見にして道諦斷なり。

【六】所謂此の見——造り、造らしめ、斷じ、斷ぜしめ、煮、煮せしめ、愁煩せしめ、胸を椎ちて呻吟せし

め、志を亂れしめ、衆生を害し、與へざるを取り、姪邪行し、妄語し、飲酒し、牆を穿ち藏を壞ち、

金を偷み他の妻を姪し、村を害し城を害し衆生を害する等。是の如く作す者も、此は惡に非ず。刀

を以て輪を以て此の地上の所有の諸蟲の彼的一切を一日の中に斷截し過捶して一の肉聚に作すも、

彼に惡有ること無く、因縁と惡報も無し。恒水の左に於ては施の福を說法し、恒水の右に於ては斷

截し過打し來るものも、彼には福も無く惡も無し。戒を完具し、歡喜と語と錢財とを施與するも、

彼の因縁による福無く、彼の因縁に福の報無しといふ——は、此れ邪見にして、習諦斷なり。

【四】第四節 七士身は常住なり等の常見論と其の對治道

所謂此の見——七士身は不作にして作し、不化にして化し、實に住聚し、常住にして彼が立ち移

動するに非ず、各々相關せず、若しくは福なるも若しくは惡なるも福惡なるも、若しくは苦なるも

に據りて「因自作」と改む。

【五】本節は契經中に現はるゝ、施無く福なし等の外道の邪見を紹介し、其を四諦斷分

別して、其の對治道を指示せんとする段なり。其の主張者、

及び其の意義等に關する詳細は、婆沙一九八、毘曇部十七、

頁一一八以下參照のこと。

因みに、こは本章頌文の「邪見」論なり。

【六】施・福無しとは邪見にして習諦斷。

【七】善惡の行及び果無しとは、邪見にして見苦斷。

【八】此世・他世無しといふと父・母無しといふは邪見にして習諦斷。

婆沙は此の中、此世無く他世無く化生有情無しとは、見集

又は見苦斷なりとせり。

【九】世に纏漢無しとは、邪見にして道諦斷。

【一〇】樂去は、大正本に樂法とあるも三本・毘本によりて樂去と改む。

因みに阿羅漢の樂去とは阿羅漢が有餘涅槃を得するの意か。

【一一】等去無しとは、邪見・盡諦斷。

發智に、等去は正至と續ず。

因みに、大正本に、等去は等法とあるも、三本宮本に據りて等去と改む。

れ邪見にして、道諦斷なり。

第二節。命考も死後は斷壞すの斷見等と其の對治道

一四 所謂此の見——此に於ては命は活くるも、餘處に於ては斷壞して有ること無く、死するなりといふ——は、此れ邊見に攝する斷滅見にして、苦諦斷なり。

一五 所謂此の見——四大人身あり。彼が若し命終する時、彼は雨の時に當つて、地は即ち地身に屬し、水は即ち水身に屬し、火は即ち火身に屬し、風は即ち風身に屬し、空は五にして、人が屍を持して往いて塚間に棄つるに、跡には現に根は虚空に歸するなりといふ——は、此れ邊見に攝する有常見にして、苦諦斷なり。

一六 所謂此の見——骨は白鴿色となり、我は變じて灰と爲るといふ中、若し火は我の緣たりといはば、此れ見に非ずして邪智なり。若し有漏行は我の緣たりといはば、此は邪見にして、習諦斷なり。若し無漏行が我なりとの見なれば、此は邪見にして、道諦斷なり。

一七 所謂此の見——貪者が施を數じ、智者は受くることを數すと智法を誹謗する——は、此れ邪見にして、道諦斷なり。

一八 所謂此の見——彼は、空なる妄語をなすものにして、此は愚にして智に非ず。こゝに彼とは、諸の是の說謂く「此に於ける命は活くるも、餘處には斷壞して有ること無く、死するなり」といふを作すものにして、此は愚なりといふ——は、邊見の攝なる有常見にして、苦諦斷なり。

第三節 無因無緣にして有情を以て垢有らしめ淨を生ぜしむ等との惡見論と其の對治道

一九 所謂此の見——無因無緣にして衆生に垢有らしめ、無無因緣にして衆生に垢有り——といふ此は邪見にして習諦斷なり。

二〇 所謂此の見——無因無緣にして衆生に淨を生ぜしめ、無因無緣にして衆生は淨となる——といふ

とは先づ、世間と我との常住論を述べて、次に我は我を見る等の我に關する六見論を示し、

(十)「欲樂及び諸禪」とは所謂「五種現法涅槃論、

(十一)「空の有と無」とは、九慢論等をさし、

(十二)「非風」とは風無く乃至垢淨の住する處無し等の惡見

(十三)「我作」とは、我作他作の二種の外道論、

(十四)「亦是有害慢」とは、具慢の衆生の生死輪迴論、

(十五)「若しくは得……」は外道の諸種の戒盜・見盜と佛の如實知見等の論、

右の如き諸惡見趣を一一に就きて批判し、其の對治道を、

見苦・習・滅・道の四諦斷分別に依りて指示せんとする目的を有するものなり。

因みに、發智の頌文に左の如し。

邪斷邪常見戒邪邪邪邪六見

五涅槃九慢類常見達執ニ自

他作ニ悟則ニ非レ有具慢及

得等此章顯具說。

【三】「無力」は大正本に「智力」とあるも、三本・宮本に従ひて無力と改む。

【四】「因自作」は、大正本に「無因自」とあるも、三本・宮本

第五章 外道の諸見趣と其の對治道の論究

(附、諸種の慢論)

(阿毘曇見捷度、見跋渠第五) (發智論第二十卷、大正・二六、一〇二七頁)

本章の内容目次

- 一 (一)邪見と、(二)斷と、(三)垢と淨と、 無因により無智見と、
- 二 無力・無精進にて 作ると、(四)七士身と、(五)四に因ると、
- 三 無因・無精進にて 因自作と亦是他と、
- 四 (六)本縁と、豪と、無と、 (八)―(九)此彼の我の六見と、
- 五 我作他作と無因と、 (十一)空の有と無と、(十二)非風と、
- 六 (十)欲樂及び諸禪と、 (十五)若しくは得と若しくは當得と、
- 七 (十三)我作と(十四)亦是有慢と、 故に是の見品を説くなり。

第一節 施與無く福(愛樂)無く等の邪見論と其の對治道

六 所謂此の見——施無く福無く説無しといふ——は、此れ邪見にして、習諦斷なり。

七 善・惡の行とその果報と無しといふは、此れ邪見にして、見苦諦斷なり。

八 今世・後世無く、父無く母無しといふは、此れ邪見にして、習諦斷なり。

九 世に阿羅漢の樂去無しといふは、此れ邪見にして、道諦斷なり。

一〇 等去無しといふは、此れ邪見にして、盡諦斷なり。

一一 趣の諸の今世・後世に得するもの無く、自智にて作證し成就して遊ぶといふこと無しといふは、此

【一】本章の内容は、次の内容目次の示すが如く、諸の外道の諸種の見趣を擧げて、此を佛教の有無等の二邊を離れたる緣起中道の立場より、對釋を加へ五見分別し、其の對治道を示さんとするものなり。

【二】以下、頌文の中、

(一)邪見とは、施與なく福無し等の諸邪見論。

(二)「斷」とは、命者も死後は斷壞すとすの斷見論。

(三)「垢と淨とは無因により」：「無精進にて作る」とは無因無緣論に關する種々なる外道説をさし。

(四)「七士身」とは、七士身は常住なり、等の常見論。

(五)「四に因ると」とは、四百千の生門等を盡せば、法爾に苦の邊際に至るとの宿作因論。

(六)「本縁と豪と無」とは、(1)一切の人の受くる所のものは本即ち宿業を依歸とする宿作因論と(2)豪即ち神の意に因るとの尊祐論、(3)無因無緣とする偶然論。

(七)「因自作と亦是他と、我作他作と無因」とは、苦樂等は、自作を因とする説、他作を因とする説、自作と他作とに因する説、無因無緣なりとする説を言ひ。

(八)―(九)「此彼の我の六見」

と、一入——意入なり——と、一陰——色陰なり——となり。

阿毘曇智跋渠第四竟り(梵本一百七十八首盧、秦二千三百四十一言)

【六〇】「註五七」の如し。

【六一】九持とは、七心持と色持(身表業)と聲持(語表業)とにして、三入とは意・色・塵入。

二陰とは色陰と識陰となり。

【六二】三界繫法、三學法の夫々と法入とを除く餘法の三學分別。

【六三】十三持とは、十八持より鼻・舌・識持と香・味持と法持とを除くもの、九入とは、十二入より香・味・法入を除くもの。

【六四】十七持等は註五七の如し。

【六五】二持等とは意持と意識持、意入、識陰をいふ。

【六六】見諸斷・無斷法又は思惟斷法と法入とを除く餘法の三科分別。

【七二】「註五七」の如し。

【七三】二持等は「註七〇」の如し。

【七四】起法又は未生法と必不生法とを除く餘法の三科分別。

【七五】色無色法乃至有對・無對法の夫々と必不生法とを除く餘法の三科分別。

【七六】八持とは、七心持と法持とをいひ、二入とは意・法入、四陰とは無色の二陰なり。

【七七】十一持とは、十色持と法持、十一入は意入を除くもの、一陰とは色陰なり。

【七八】法持を除く十七持、と法入を除く十一入、と五陰となり。

【七九】一持等は、色持・色入・色陰なり。

【八〇】八持等は、「註七六」の如し。

【八一】十持等は、十色持・十色入・色陰なり。

【八二】有漏・無漏法並に有爲無爲法の夫々と必不生法とを除く餘法の三科分別。

【八三】三持等とは、意持・意識持・法持の三と、意入と法入との二となり。

【八四】三世法並三性法の夫々と必不生法とを除く餘法の三科分別。

【八五】十持とは、色・聲持と七心持と法持とにして、四入とは色・聲・意・法入なり。

【八六】三界繫法・三學法・三斷法の夫々と必不生法とを除く餘法の三科分別。

【八七】十四持とは、十八持中より、香・味・識持と香・味持と

【六〇】「註五七」の如し。
【六一】善・不善法或は無記法と法入とを除く餘法の三科分別。

を除くもの、十入とは香・味を除くものなり。
【八八】三持等とは「註八三」の如し。

【八九】三持等とは「註八三」の如し。
【九〇】本節は、一持と一入と一陰とを合して一切を攝盡するものを明す段なり。

此中、十八持にて表せば、法持は法持を、意入は七心持を、色陰は、十色持を表せばなり。(跋沙一九七、毘曇部十七、頁一一七參照)。

【九一】持は大正本に攝とあるも、三本・宮本・聖乙本に共に、持とあるが故に、今は持と訂正す。

無對法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十持・十入・一陰に攝す。

有漏法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、三持・二入・五陰に攝す。

無漏法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十八持・十二入・五陰に攝す。

有爲法と及び諸法の必ず不生なるものとを除くといふは、一切法を除くことにして、これ無聚の空論なり。

空論なり。

無爲法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十八持・十二入・五陰に攝す。

過去・現在法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十八持・十二入・五陰に攝す。

未來法と及び諸法の必ず不生なるものとを除くといふは、一切法を除くことにして、これ無聚の空論なり。

空論なり。

善・不善法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十八持・十二入・五陰に攝す。

無記法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十持・四入・五陰に攝す。

欲界繫法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十四持・十入・五陰に攝す。

色・無色界繫法と學・無學法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十八持・十二入・五陰に攝す。非學非無學法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、三持・二入・五陰に攝す。

見諦斷法・無斷法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十八持・十二入・五陰に攝す。

攝す。

思惟所斷法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、三持・二入・五陰に攝す。

頗し一持・二入・一陰にて一切法を攝するもの有りや。答へて曰く、有り。一持——法——持なり——

第九節 一切法を攝する一持・二入・一陰に就きて

頗し一持・二入・一陰にて一切法を攝するもの有りや。答へて曰く、有り。一持——法——持なり——

【五〇】 十六持等は十八持より、色持・法持を除く十六持と、色入と法入とを除く十入と、色と識との陰なり。

【五一】 一持等は、眼持・眼入・色陰なり。

【五二】 有對或は無對法と法入とを除く餘法の三科分別。

【五三】 七持等は七心持と意入と識陰とを言ふ。因みに次に「意識竟」との制註あるも、こは意と識と意との誤りならん。

【五四】 十持等は、十色持・十色入・色陰なり。

【五五】 有漏或は無漏法と法入とを除く餘法の三科分別。

【五六】 二持等は、意持と意識持との二持と意入と識陰となり。

【五七】 十七持等は、十八持中より法持を除く十七持、十二入中より法入を除く、十一入と、色陰と識陰となり。

【五八】 有爲或は無爲法と法入とを除く餘法の三科分別。

【五九】 十七持等とは「註五七」の如し。

【六〇】 陰の下に、「色と識となり」との夾註あり。

【六一】 過去と現在法、或は未來法と法入とを除く餘法の三科分別。

【六二】 十七持等は、「註五七」の如し。

【六三】 十七持等は、「註五七」の如し。

【六四】 十七持等は、「註五七」の如し。

【六五】 十七持等は、「註五七」の如し。

【六六】 十七持等は、「註五七」の如し。

五八 無漏法と及び法入とを除く諸餘の法は、十七持・十一入・二陰に攝す。

有爲法と及び法入とを除けば、一切法を除くことにして、これ無聚の空論なり。

六二 無爲法と及び法入とを除く諸餘の法は、十七持・十一入・二陰に攝す。

過去と現在との法と及び法入とを除く諸餘の法は、十七持・十一入・二陰に攝す。

六三 未來法と及び法入とを除く諸餘の法は、十七持・十一入・二陰に攝す。

善と不善との法と及び法入とを除く諸餘の法は、十七持・十一入・二陰に攝す。

六四 無記法と及び法入とを除く諸餘の法は、九持・三入・二陰に攝す。

六五 欲界聚法と及び法入とを除く諸餘の法は、十三持・九入・二陰に攝す。

六六 色・無色界聚法・學・無學法と及び法入とを除く諸餘の法は、十七持・十一入・二陰に攝す。

六七 非學非無學法と及び法入とを除く諸餘の法は、二持・一入・一陰に攝す。

七八 見諦斷法と無斷法と及び法入とを除く諸餘の法は、十七持・十一入・二陰に攝す。

七九 思惟斷法と及び法入とを除く諸餘の法は、二持・一入・一陰に攝す。

八〇 起法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十八持・十二入・五陰に攝す。

八一 未生法と及び諸法にして必ず不生なるものとを除くといふは、一切法を除くことにして、これ無聚の空論なり。

八二 色法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、八持・二入・四陰に攝す。

八三 無色法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十一持・十一入・一陰に攝す。

八四 可見法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、十七持・十一入・五陰に攝す。

八五 不可見法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、一持・一入・一陰に攝す。

八六 有對法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、八持・二入・五陰に攝す。

す所以は、婆沙に據るに、
〔一〕自性を攝するも他性を攝せず、〔二〕集諦は唯、愛のみに非ずして一切の有漏法なり、〔三〕道諦は唯八支聖道のみに非ずして無漏の有爲法なり、〔四〕法處は想・受・行蘊と、三無爲との非色法の外に、無表色をも攝す、〔五〕過未二世は實有なり、〔六〕意識は、唯無記のみならず、善と染汚にも通ずと言ふが如き、諸種の自宗を顯示せんが爲めなりと言ふ。所除の法に就きては婆沙一九七、毘曇部十七、頁一〇六參照のこと。
【四三】 苦聖諦乃至或は清聖諦と法入とを除く餘法の三科分別。
【四四】 持の下に、「意識」の夾註あり、尙、一入とは意入、一陰とは識陰なり。
【四五】 十七持とは法持を除くもの、十一入は法入を除くもの、二陰とは色識陰なり。
【四六】 色又は無色法と法入とを除く餘法の三科分別。
【四七】 七持とは七心界、一陰とは識陰なり。
【四八】 次下に「意なり」との夾註あり。
【四九】 十持等は、十色處、十色入、色陰をいふ。
【五〇】 可見法は不可見法と法入とを除く餘法の三科分別。

三九 若し聚にして得せざるものなれば、彼の聚を成就せざるや。答へて曰く、是の如し。若し聚にして得せざるものなれば彼の聚を成就せざるなり。

四〇 頗し聚にして成就せざるも彼の聚を得せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。若し聚の得せしも便ち失するものなり。

四一 若し聚にして得するものなれば、彼の聚を成就するや。答へて曰く、是の如し。若し聚にして成就するものなれば、彼の聚を得するなり。

四二 頗し聚にして得するものなるも彼の聚を成就するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。若し聚にして得せしも便ち失せしものなり。

第八節 苦諦と法處とを除く餘の法等の持・入・陰所攝分別

四三 苦聖諦と及び法入とを除く諸餘の法は、二持・一入・一陰に攝す。

四四 習聖諦と法入とを除くにつきても亦、是の如し。

四五 盡聖諦と及び法入とを除く諸餘の法は、十七持・十一入・二陰に攝す。

四六 道聖諦と及び法入とを除く諸餘の法につきても、亦、是の如し。

四七 色法と及び法入とを除く諸餘の法は、七持・一入・一陰に攝す。

四八 無色法と及び法入とを除く諸餘の法は、十持・十入・一陰に攝す。

四九 可見法と及び法入とを除く諸餘の法は、十六持・十入・二陰に攝す。

五〇 不可見法と及び法入とを除く諸餘の法は、一持・一入・一陰に攝す。

五一 有對法と及び法入とを除く諸餘の法は、七持・一入・一陰に攝す。

五二 無對法と及び法入とを除く諸餘の法は、十持・十入・一陰に攝す。

五三 有漏法と及び法入とを除く諸餘の法は、二持・一入・一陰に攝す。

も三本・宮本は、盛とあり。今は後者に従ふ。次下の場合も之に準ず。

【四】 波旬は發智に惡者 (Pāpī manā) とあり。

【五】 本節は、行 (即ち業) と護 (律儀) との關係、及び行と不護 (不律儀) との關係を四句分別に依りて明にする段なり。

(婆沙一九七、毘曇部十七、頁一〇三參照)。

【六】 行と不護 (不律儀) との關係。以下、不護は、非護としても用ふ。

【七】 行と護との關係。

【八】 本節は、(一) 不淨觀・持息念・念住・三義觀・七處善・四善根・見・修・道・無學道等を未だ得せざるものなれば、彼は此等の聚を成就せざるものなりや、(二) 此等の法を得せるものなれば、彼は此等の法を成就するものなりやを明にする段なり。

【九】 不淨觀等の聚の未得と不成就との關係。

【一〇】 不淨觀等の得と成就との關係。

【一一】 本節は、苦聖諦と法入を除く餘の法、乃至不斷法と定不生法とを除く諸餘の法が幾くの持・入・陰に攝するやを詳論する段なり。然もかゝる諸の所除の法の所攝分別をな

頗し自己にして慢に非ざるものありや。答へて曰く、有り。見たり。世尊の亦、説く、「比丘よ、
我は是れ自己なり、於我も、比丘よ、是れ自己なり」と。

諸の慢なれば彼は増盛なりや。答へて曰く、是の如し。諸の慢なれば彼は増盛なり。

頗し増盛なるものにして彼は慢ならざるものありや。答へて曰く、有り。慢を除く諸餘の垢の現
在前するものなり。世尊は亦、説く、「比丘よ、若し増盛なるは是れ魔に繋せらるゝもの、不増盛な
れば是れ波旬より解脱するなり」と。

第六節 行(業)と護(律儀)並に不護(不律儀)との關係

諸の行なれば彼は護に非ざるものなりや。答へて曰く、或は行にして彼は不護に非ざるものあり。
(一)云何んが行にして彼は不護に非ざるものなりや。答へて曰く、身護・口護・是を行にして彼は不護
に非ざるものと謂ふ。(二)云何んが非護なるも彼は行に非ざるものなりや。答へて曰く、根非護な
り、是を非護なるも彼は行に非ざるものと謂ふ。(三)云何んが行にして非護なるものなりや。答へ
て曰く、身非護と口非護と、是を行にして非護なりと謂ふ。(四)云何んが行にも非ず彼は不護にも
非ざるものなりや。答へて曰く、根護なり、是を行にも非ず彼は不護にも非ざるものと謂ふなり。
諸の行なれば彼は護なりや。答へて曰く、或は行なるも護に非ざるものあり。(一)云何んが行な
るも彼は護に非ざるものなりや。答へて曰く、身不護と口不護と、是を行なるも彼は護に非ざるも
のと謂ふ。(二)云何んが護なるも彼は行に非ざるものなりや。答へて曰く、根護なり、是を護なる
も彼は行に非ざるものと謂ふ。(三)云何んが行にして彼は護なるものなりや。答へて曰く、身護と
口護となり。是を行にして彼は護なるものと謂ふ。(四)云何んが行にも非ず彼は護にも非ざるもの
なりや。答へて曰く、根非護なり。是を行にも非ず彼は護にも非ざるものと謂ふなり。

第七節 不淨觀乃至無學道等の聚の未得と不成就、並に得と成就との關係

身と相應する更が夫々の根・境・識の三等更なりと言ふが如く、意根・法境・意識の三等更と稱し得るの義を明すにあり。因みに波沙は、觸・受・非實有の異宗等を止めんが爲めに、此の論起ありと言ふ。
【波沙一九七、毘曇部十七、頁九九參照】
【三七】發智は、以下の文を、「無明觸の生ずる所の受到觸せらるるが故に、無聞の愚夫は、便ち有と執し、無と執し、或は有無と執す」と觀ぜり。
【二六】本節は、慢と自己(自執)と、慢と増盛との關係を明す段なり。
慢を見蘊中に論ずるは、諸法の中、見に相似の法にして慢に如くものなき等の理由に據るものなるべし。
【波沙一九七、毘曇部十七、頁一〇一參照】
【二九】慢と自己(自ら執す)との關係。
【三〇】「於我」とは發智に、我所とす。
【三一】慢と増盛(不寂靜)との關係。
【三二】盛は大正本に上盛とあるも、三本・宮本・聖本・聖乙本には皆、盛とのみあり。今は後者を採ぶ。以下(※)印は之に準ず。
【三三】盛は大正本に上とある

ひ、苦智・習智・盡智・道智を以ひて垢を斷するもの、是を聚は無欲にして彼の聚は厭を修するものと謂ふ。(四)云何んが聚は無欲にも非ず彼の聚は厭を修するにも非ざるものなりや。答へて曰く、^{三二}盡忍・道忍を以ひて垢を斷ぜざるもの、是を聚は無欲にも非ず彼の聚は厭を修するにも非ざるものと謂ふなり。

^{三三}第三節 諸法に因縁等となる法が、時として、彼の法の與めに

因縁等とならざることありやに就きて

^{三三}若し法が諸法のために因縁となるものなれば、或は時に彼の法は彼の法のために當に因縁と言ふべからざることありや。答へて曰く、無し。

^{三四}若し法が諸法のために次第縁となるものなれば、或は時に彼の法は彼の法のために當に次第縁と言ふべからざることありや。答へて曰く、若し彼の法が未生なれば、彼の法は當に次第縁と言ふべからざるなり。

^{三五}若し法が諸法のために縁縁・増上縁となるものなれば、或は時に、彼の法は彼の法のために當に縁縁・増上縁と言ふべからざることありや。答へて曰く、無きなり。

^{三六}第四節 意更(意觸)と三等更(三事和合觸)との關係に就きて

諸の意更の彼の一切は三等更なりや。答へて曰く、是の如し。諸の意更の彼の一切は三等更なり。頗し三等更なるも彼が意更に非ざるものありや。答へて曰く、有り。五識身と相應する更なり。世尊の亦、説く、「比丘よ、意持・法持あり、無明持あり。無明痛更による觸を有として得すとせんや、無として得すとせんや、有無として得すとせんや。」と。

^{三九}第五節 慢と自己(自執)と心増盛(不寂靜)との關係

諸の慢なれば彼の一切は自己なりや。答へて曰く、是の如し。諸慢の彼の一切は自己なり。

【三二】「盡忍・道忍を以ひて垢を斷ぜざるもの」とは、發智にては「滅・道の忍・智にして諸の煩惱を斷ぜざるもの」とあり。

【三三】本節は、諸法にして或る法の與めに因縁、乃至或は増上縁となるものなれば、此の法は時として、彼の法の與めに、因縁乃至或は増上縁とならざることありやを論究する段なり。換言すれば、法にして緣起の法即ち有爲法なれば因縁乃至増上縁を持たざるものなき義を明さんとするものにして、婆沙は、本論提起の因由を、因縁法に愚なるものが緣性の非實有説を作すと止め、緣性質有説を主張せんが爲めなりと言へり。
(婆沙一九六、毘曇部十七、頁九三參照)。

【三四】因縁の場合。

【三五】次第縁の場合。

【三六】所緣縁及び増上縁の場合。

【三九】本節は、意更(即ち發智の意觸)と、三等更(即根・境・識の三事和合觸)との關係を論じ、意更の場合も、五識

第二節 厭と無欲(能離)と修厭とに就きて

諸聚が厭なれば、彼の聚は無欲なりや。答へて曰く、或る聚は厭なるも彼の聚は無欲に非ざるものあり。(一)云何んが聚は厭なるも彼の聚は無欲に非ざるものなりや。答へて曰く、苦忍・習忍を以ひ、苦智・習智を以ひて垢を斷ぜざるもの、是を聚は厭なるも彼の聚は無欲に非ざるものと謂ふ。

(二)云何んが聚は無欲なるも彼の聚は厭に非ざるものなりや。答へて曰く、盡忍道忍を以ひ、盡智・道智を以ひて垢を斷ずるもの、是を聚は無欲なるも彼の聚は厭に非ざるものと謂ふ。(三)云何んが聚は厭にして彼の聚は無欲なるものといふや。答へて曰く、苦忍・習忍を以ひ、苦智・習智を以ひて垢を斷ずるもの、是を聚は厭にして彼の聚は無欲なるものと謂ふなり。(四)云何んが聚は厭にも非ず彼の聚は無欲にも非ざるものなりや。答へて曰く、盡忍・道忍を以ひ、盡智・道智を以ひて垢を斷ぜざるもの、是を聚は厭にも非ず彼の聚は無欲にも非ざるものと謂ふなり。

諸の聚が厭なれば、彼の聚は厭を修するや。答へて曰く、是の如し。諸の聚が厭なれば彼の聚は厭を修するなり。

頗し聚が厭を修するものにして、彼の聚が厭に非ざるものありや。答へて曰く、有り。盡智・道智を以ひて垢を斷ずるものなり。

諸の聚が無欲なれば、彼の聚は厭を修するや。答へて曰く、或は聚は無欲なるも彼の聚は厭を修するに非ざるものあり。(一)云何んが聚は無欲なるも彼の聚は厭を修するに非ざるものなりや。答へて曰く、盡忍・道忍を以ひて垢を斷ずるもの、是を聚は無欲なるも彼の聚は厭を修するに非ざるものと謂ふ。(二)云何んが聚は厭を修するも彼の聚は無欲に非ざるものなりや。答へて曰く、苦忍・習忍を以ひ苦智・習智を以ひて垢を斷ぜざるもの、是を聚は厭を修するも彼の聚は無欲に非ざるものなりや。答へて曰く、苦忍・習忍を以ひて彼の聚は厭を修するものなりや。答へて曰く、苦忍・習忍を以

【一】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【二】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【三】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【四】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【五】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【六】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【七】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【八】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【九】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【一〇】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【一一】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【一二】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【一三】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【一四】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【一五】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【一六】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【一七】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【一八】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【一九】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

【二〇】聚の次に、大正本には「彼」の字あるも、三本・宮本には無きに據り、今は之を省略せり。

色法と及び法入とを除く諸餘の法は、幾く持、幾く入、幾く陰に攝するや。

無色・可見・不可見、有對・無對、有漏・無漏、有爲・無爲、過去・未來・現在、善・不善・無記、欲界繫・色・無色界繫、學・無學・非學非無學、見諦斷・思惟斷……乃至、無斷法と及び法入とを除く諸餘の法は幾く持、幾く入、幾く陰に攝するや。

起法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は幾く持、幾く入、幾く陰に攝するや。

未生、色・無色・可見・不可見、有對・無對、有漏・無漏、有爲・無爲、過去・未來・現在、善・不善・無記、欲界繫・色・無色界繫、學・無學・非學非無學、見諦斷・思惟斷……乃至不斷法と及び諸法の必ず不生なるものとを除く諸餘の法は、幾く持、幾く入、幾く陰に攝するや。

(九)頗し一持、一入、一陰にて一切法を攝するものありや。

此の章の義、願くば具さに演說せん。

第五節 智(能遍達)と斷(能遍知)とに關する論究

諸の聚が智なれば、彼の聚は斷なりや。答へて曰く、或は聚は智なるも彼の聚は斷ならざるものあり。(一)云何んが聚が智なるも彼の聚が斷ならざるものなりや。答へて曰く、苦智・習智・盡智・道智を以ひて垢を除かざるもの、是を聚が智なるも彼の聚は斷にあらざるものと謂ふ。(二)云何んが聚の斷なるも彼の聚が智ならざるものなりや。答へて曰く、苦忍・習忍・盡忍・道忍を以ひて垢を斷するもの、是を聚は斷なるも彼の聚が智ならざるものと謂ふ。(三)云何んが聚が智にして彼の聚が斷なるものなりや。答へて曰く、苦智・習智・盡智・道智を以ひて垢を斷するもの、是を聚は智にして彼の聚は斷なるものと謂ふ。(四)云何んが聚は智にも非ず彼の聚は斷にもあらざるものなりや。答へて曰く、苦忍・習忍・盡忍・道忍を以ひて垢を斷ぜざるもの、是を聚は智にもあらず彼の聚は斷にもあらざるものと謂ふなり。

非不護(律儀)との關係。

【一】聚(即ち不淨觀等)の未得と不成就。得と成就との關係。

【二】大正本には「得」の上に「不」の字あるも聖・聖乙二本には無し。今は後者に據りてこれを除去せり。

【三】苦聖諦と法入とを除く諸の法等の持・入・陰の三分別問。

【四】一切法を攝する一の持・入・陰に就きて。

【五】本節は、智の事と、斷の事との廣狹關係を四句分別を以て論ずる段なり。此の中、新舊兩譯語の相違せるものを示せば次の如し。

發智

智の聚——能遍達の事

斷の聚——能遍知の事

垢——煩惱

因みに、婆沙に據るに、本節論起の因由は「忍は即ち是れ智の性なり」との異執を破して忍は見る性なるも、自の所斷の疑と俱生し、重ねて審決するものに非ざるが故に、智の性に非ざることを顯示せん

第四章 智(能通達)と斷(能遍知)等に關する論究

(阿毘曇見犍度、智時跋渠第四) (發智論卷第二十初頭)

本章の内容目次

一 諸聚が智の時、彼の聚は斷なりや。設し聚が斷なるとき彼の聚は智なりや。

二 諸聚が厭なるとき彼の聚は無欲なりや。設し聚が無欲なるとき彼の聚は厭なりや。

三 諸聚が厭なれば彼の聚は厭を修するや。設し聚が厭を修すれば、彼の聚は厭なりや。

四 諸聚が無欲なれば、彼の聚は厭を修するや。設し聚が厭を修すれば彼の聚は無欲なりや。

五 若し法が諸法のために因縁となるものなれば、或は時として彼の法は彼の法のために、當に

因縁と言ふべからざるときありや。若し法が諸法の次第・緣・増上となるものなれば、或は時として

彼の法は彼の法のために當に次第・緣・増上と言ふべからざるときありや。

六 諸の意更なれば彼の一切は三等更なりや。設し三等更なれば彼の一切は意更なりや。

七 諸の慢なれば彼は作慢なりや。設し作慢なれば彼は慢なりや。

八 諸の慢なれば心は増盛するや。設し心が増盛すれば彼は慢なりや。

九 諸の行は非護なりや。設し非護なれば、彼は行なりや。諸の行は護なりや。設し護なれば、

彼は行なりや。

一〇 若し聚を得せずんば、彼の聚を成就せざるや。設し聚を成就せずんば、彼の聚を得せざるや。

一一 諸の聚を得すれば彼の聚を成就するや。設し聚を成就すれば、彼の聚を得するや。

一二 苦聖諦及び法入を除く諸餘の法は幾く持、幾く入、幾く陰に攝するや。智も亦、是くの如し。

一三 盡聖諦及び法入を除く諸餘の法は幾く持、幾く入、幾く陰に攝するや。道も亦、是の如し。

【一】 本章は、智時跋渠と稱するも其の内容の多岐なるは、次の内容目的の示すが如し、因みに、發智の頌文は左の如し。

「智・斷厭・離・修・緣・觸・慢・業・事」

攝餘攝一切、此章頌具說

【二】 智と斷とに關するの問

【三】 厭と(能厭)と無欲(能斷)、並に厭と無欲と修厭との關係問題。

【四】 諸法に因縁等となる法が其の法に因縁等たらざる時在りやの問題。

【五】 「彼」は大正本に無きも、三本・宮本に據りて之を補へり。

【六】 意更(意觸)と三等更(三事和合觸)との關係。

【七】 慢と作慢(自慢)と心増盛(不寂靜)との關係。

此の中、作慢とあるは、本文には、自己とあり。

【八】 盛は、大正本に上とあり、三本・宮本・聖本・聖乙本には皆、盛とあり、今は後者に據りて盛と改む。

【九】 盛は、大正本には上とあり、三本・宮本には盛とあり。

【一〇】 行(業)と非護(不律儀)。

第七節 因と道と縁生(緣起)等の持・入・陰所攝分別

因と道と縁生とは十八持・十二入・五陰に攝するなり。

眼更の等生にして想と痛と心との相應法を除くと、耳更の等生にして想と痛と心との不相應法とを除く、諸餘の法は十八持・十二入・五陰に攝す。

鼻・舌・身更の等生にして想と痛と心との相應法を除き、意更の等生にして想と痛と心との不相應法を除く諸餘の法は十八持・十二入・五陰に攝するなり。

阿毘曇想品第四十一章(梵本一百四首盧、秦一千六百二十二言)

智は「色と異り……」とあり。

【三〇】得・生・老・無常の相互、因又は縁に就きて。

【三一】發智は、以下を單に、「當に因たりと言ふべく、當に縁たりと言ふべし」とのみ言へり。

【三二】得・生・老・無常の三性分別。

【三三】得・生・老・無常に所使たる使及び繋する結に就きて。

【三四】本節は、心と俱生し心を用ひざるに非ず即ち、心を離れてあるに非ざる法(發智には、法の心に由りて起り、心に由らざるに非ざるものとあり)と、心との關係を、生と滅と得と棄と受報とに於て明にせんとする段なり。婆沙に據れば、此の節には、身語の二業の分位差別を明すもの

と云へり。然も此の「法」の解釋に就きては、三説あり。第一説は、「法」とは、是れ別解脫律儀なり」といひ、第二説は、「法」とは是れ不律儀なり」と、第三説に曰く、「法」とは非律儀非不律儀の所有の身語の妙行惡行を謂ふ」として、婆沙は、この三説に従ひて、本節に三様の解釋を施せり。(婆沙一九五、毘曇部十七、頁六三参照)。

【三五】心と俱生し心と離れざる法の、生と盡とに於ける心との關係。

【三六】心と俱生し心を離れざる法が、得・棄・受報に於ける心との關係。

【三七】本節は、見相應の受と見不相應の受と、疑相應の受と、疑不相應の受との四受に、所使たる使、即ち隨増する隨眠は幾くなりやを明にせんとする段なり。婆沙に據れば、本節の論起は、(1)世俗の正見あり、是れに修所斷と遍行との隨眠が隨増すること、(2)修所斷の疑隨眠はなきことを顯示せんが爲めなりと言ふ。(婆沙一九六、毘曇部十七、頁七七参照)。

【三八】見と相應し又は相應せざる痛に所使たる使に就きて。

【三九】疑と相應し又は相應せざる痛に所使たる使に就きて。

【四〇】大正本には一切の次下に「見諸斷」の三字あるも、聖本・聖乙本になく發智にも、聖きが故に之を除去せり。

【四一】本節は、(一)六因と、(二)八道種と(三)十二緣生支並讀すべし。(婆沙一九五、毘曇部十七、頁七一参照)。

【四二】得と生・老・無常の實有及び性實に就きて。

【四三】以下、八健度は之を「眼更等生想痛除心不相應法……餘法」の如くあるも、發智は、之を「除眼觸等起想受心相應法……餘法」とあり。今は發智婆沙に従ひて、如上の如く意譯し置けり。

【四四】「色に餘たり……」は、發と、(四)眼更の等生(發智には眼觸の等起)にして想・痛・心と相應なる法と耳更の等生にして想・痛・心と不相應なるとを除く諸餘の法と、及び乃至身更の等生にして想・痛・心と相應する法と及び意更と等生にして想・痛・心と不相應なる法とを除く諸餘の法との、持・入・陰の三科分別をなす段なり。(婆沙一九六、毘曇部十七、頁八〇参照)。

曰く、九結が繫するなり。

第五節 心と俱生し心と離れざる法と、心との關係に就きて

諸の法は心と俱生し、心を用ひざるに非ざるものあり。如し彼の心が生ずれば、彼の法も亦、然るや。答へて曰く、先に心が生じ、後、彼の法が生ずるなり。

如し彼の心が盡くれば、彼の法も亦、然るや。答へて曰く、先に心が盡きて後、彼の法が盡くるなり。

如し彼の心を得せば、彼の法も亦、然るや。答へて曰く、先に心を得して後、彼の法を得すなり。如し彼の心を棄つれば、彼の法も亦、然るや。答へて曰く、先に法を棄てて後、彼の心を棄つるなり。

如し彼の心が報を受くれば、彼の法も亦、然るや。答へて曰く、或は是のとき、或は非らざるときに受くるなり。

第六節 見又は疑と相應し或は相應せざる漏(受)に、所使たる使に就きて

見と相應する痛には幾く使が所使となるや。答へて曰く、有漏縁の使と亦、無漏縁の使と、若しくは彼と相應する無明使とが、所使となる。

見と相應せざる痛には、幾く使が所使となるや。答へて曰く、見の無漏縁の使と見の、若しくは彼と相應する無明とを除く諸餘一切の使が所使となるなり。

疑と相應する痛には、幾く使が所使となるや。答へて曰く、見諦斷の有漏縁の使と、亦、疑の無漏縁の使と若しくは彼と相應する無明使とが所使となるなり。

疑と相應せざる痛には幾使が所使となるや。答へて曰く、疑の無漏縁なると若しくは彼と相應する無明とを除く諸餘一切の使が所使となるなり。

【三】 智分別法にして、斷なるも、不修・不作證のもの。

【四】 耳の次に、大正本には、「也」の字あるも、三本・宮本・聖乙本には共になきを以て、此を除く。

【五】 本節は、(1)無縁法即ち所縁を有せざる法にして、縁法と無縁とを因とし、縁法と無縁法とに俱生する法として

得と生・老・無常の三有爲相の存在を擧げ、(2)其の性質を明し、(3)彼等は相互因又は縁たるを論じ、(4)其の三性分別をなし、(5)所使となる使と、(6)幾結が繫するやを明す段なり。

因みに、發智は、其の組織、敘述法は同じなるも、生・老・住・無常の四有爲相のみの存在を明し、得に關せず。從

つて婆沙は、此の論起の緣由として、(1)一有爲相に實體なしとの譬喩者の異宗と、(2)有爲相は是れ無爲法なりとの分別論者の異説、(3)四有爲相中、三は有爲なくも滅のみは無爲なりとする有説、(4)色法の生・老・住・無常は體是れ色法なりとの有説、(5)有爲相は相縁法なりとの有説等を破して、有爲相は實有の性にして、無爲法に非ず、亦、色等にも非ず、是れ不相應法なることを顯示せんが爲めなりと言へり。因みに本節は本章目次を

三 頗し法の智分別のものにして斷するも修せずして作證するものありや。答へて曰く、有り。天眼・天耳なり。

三 頗し法の智分別のものにして斷するも修せず作證せざるものありや。答へて曰く、有り。天眼・天耳を除く諸餘の無記の有爲法、若しくは不善法なり。

第四節 得と生・老・無常との三有爲相に就きて

三 頗し法の無縁なるものにして縁を因とし無縁を因とし、縁法縁と俱生するものありや。答へて曰く、有り。諸の五識身と、俱に相應するものと、諸の意識身と、俱に相應するものと、色と無爲と心不相應行とを縁する彼の法との諸の得と生・老・無常となり。是を法の無縁なるものにして縁を因とし無縁を因とし、縁法縁と俱生するものといふ。有たり有像たるものなれば、彼の法は有り、彼の法無きに非ず。是の故に 有たり有像たりといふ。有ならざるに非ず、有像ならざるに非ざるものなれば、然も彼の法は有り、彼法有らざるに非ず、是の故に 有ならざるに非ず有像ならざるに非ずといふ。色に餘たるもとは、彼の法は色に非ず、痛に餘たるもとは、彼の法は痛に非ず、想に餘たるもとは彼の法は想に非ず、識に餘たるもとは彼の法は識に非ず、彼の相應法に餘たるもとは彼の法は相應に非ざるをもて。是の故に餘たる不相應法といふなり。

三 彼の法は彼の法に於て當に因と言ふべきや。當に縁と言ふべきや。或は當に縁と言ふべきも當に因に非ずと言ふべきや。答へて曰く、前生は後生のために當に因たりと言ふべく、當に縁たりと言ふべきも、後生は前生のために當に縁たりと言ふべきも當に因たりと言ふべからず。

三 彼の法は當に善と言ふべきや、不善なりや。當に無記と言ふべきや、答へて曰く、彼の法は善中にては當に善と言ふべく、不善中にては當に不善と言ふべく、無記中にては當に無記と言ふべし。

三 彼の法は幾く使に使せらるゝや。答へて曰く、三界の有漏縁の使なり。幾結が繫するや。答へて

との異説、(2)無漏有爲も所斷なりとの有説、(3)「加行所起の無覆無記も亦是れ所修なり」、との有説、(4)「唯、涅槃のみ有り是れ所作證なり」との有説等の諸異説を遮止して、所通達・所通知は實有法にして、所斷なるは是れ有漏なるもののみ、所修なるは唯、善有爲のみ、所證なるは、一切の善と及び定に依りて起す所の無覆無記に通ずと、以上を顯示せんが爲めに、本論を作せしなりと言ふ。

(婆沙一九五、毘曇部十七、頁六八參照)。

尚、發智に於ては、本節の前に、此の第五節がありて、説順同じからず。

因みに、此の中、新舊兩譯語を對比せば、次の如し。

八種度 發智

智分別 所通達所通知

非數緣盡 非擇滅

數緣盡 擇滅

【一】智分別法にして、不斷・不修、不作證のもの。

【二】智分別法にして、不斷・不修なるも作證のもの。

【三】智分別法にして、不斷なるも修・作證のもの。

【四】智分別法にして、斷・修・作證のもの。

も彼の法は無常想と同一縁に非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが法の無常想と同一縁なるもの彼の法は無常想より生ずるに非ざるものなりや。答へて曰く、猶し餘の想が在前に必ず盡き、無常想が在前に必ず生ずるに、彼の法が此の縁を有するときの如し。是を法の無常想と同一縁なるも彼の法は無常想より生ずるに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが法の無常想より生ずるものにして彼の法が無常想と同一縁なるものなりや。答へて曰く、猶し無常想が在前に必ず盡き、無常想が在前に必ず生ずるに、彼が此の縁を有するときの如し。是を法の無常想より生ずるものにして彼の法は無常想と同一縁なりと謂ふなり。(四)云何んが法にして無常想より生ずるにも非ず、彼の法は無常想と同一縁にも非ざるものなりや。答へて曰く、猶し餘の想が在前に必ず盡きて、餘の想が在前に必ず生ずるが猶如きとき彼が餘縁を有するが如し、是を法にして無常想より生ずるにも非ず、彼の法は無常想と同一縁にも非ざるものと謂ふなり。

乃至、盡想につきても亦、是の如し。

第三節 智分別(所通達・所遍知)法の斷・修・作證分別

一八 頗し法の智分別のものにして、斷ぜず修せず作證せざるものありや。答へて曰く、有り。虚空と非數緣盡となり。

一九 頗し法の智分別のものにして斷ぜず修せざるものなるも、作證するものありや。答へて曰く、有り。數緣盡なり。

二〇 頗し法の智分別のものにして斷ぜざるも修し作證するものありや。答へて曰く、有り。無漏の有爲法なり。

二一 頗し法の智分別のものにして斷じ修し作證するものありや。答へて曰く、有り。善の有漏法なり。

【二〇】 無常想を除く餘の想が生ずる法が、其の想と同一縁なりやに就きて。

【二一】 本節は、(一)智分別即ち所通達・所遍知の法にして斷にも修にも作證にも非ざるものあり、(二)不斷不修なるも作證の法なるあり、(三)不斷なるも修・作證なるあり、(四)斷・修・作證なるあり、(五)斷なるも不修・作證なるあり、(六)斷なるも不修不作證なるあり。

之等は何ものなりやを明にする段なり。因みに、婆沙に據れば、(一)所通達・所遍知は實有に非ず

諸法にして無常想より生ずるものなれば、彼の法は無常想と相應するや。答へて曰く、或る法は無常想より生ずるも、彼の法は無常想と相應するに非ざるものあり。(一)云何んが法にして無常想より生ずるも、彼の法は無常想と相應するに非ざるものなりや。答へて曰く、猶し無常想が在前に必ず盡きて諸餘の想が在前に必ず生ずるとき彼の想と諸の相應する法の如し。是を法にして無常想より生ずるも、彼の法は無常想と相應するものに非ずと謂ふなり。(二)云何んが法にして無常想と相應するも、彼の法は無常想より生ずるに非ざるものなりや。答へて曰く、猶し餘の想が在前に必ず盡き、無常想が在前に必ず生ずるとき彼の想と諸の相應する法の如し。是を法にして無常想と相應するも、彼の法は無常想より生ずるものに非ずと謂ふなり。(三)云何んが法の無常想より生ずるものにして、彼の法は無常想と相應するものなりや。答へて曰く、猶し無常想が在前に必ず盡き、無常想が在前に必ず生ずるとき彼の想と諸の相應する法の如し。是を法の無常想より生ずるものにして、彼の法は無常想と相應するものと謂ふなり。(四)云何んが法にして無常想より生ずるにも非ず、彼の法は無常想と相應するにも非ざるものなりや。答へて曰く、猶し餘の想が在前に必ず盡き餘の想が在前に必ず生ずる猶如きとき、彼の想と諸の相應する法の如きなり。是を法の無常想より生ずるにも非ず、彼の法は無常想と相應するにも非ずと謂ふなり。

乃至盡想につきても亦、是の如し。

第二節 十想の無間に生ずる法は、十想と同一所縁なりやに就きて

諸法の無常想より生ずるもの、彼の法は無常想と同一縁なりや。答へて曰く、或る法は無常想より生ずるも彼の法は無常想と同一縁に非ざるものあるなり。(一)云何んが法にして無常想より生ずるも彼の法は無常想と同一縁に非ざるものなりや。答へて曰く、猶し無常想が在前に必ず盡きて餘の想が在前に必ず生ずるが猶如きとき、彼が餘縁を有するが如きなり。是を法の無常想より生ずる

【三】無常想が生ずる法は無常想と相應するや否や。

【三】無常想外の餘の想より生ずる法は、夫々の想と相應するやに就きて。

【四】本節は、十想中の一を等無間として生ずる法は彼の想と同一所縁なりや否やを無常想を代表として論究する段なり。

婆沙に據れば、本節は、所縁法の實有を顯示せんが爲めなりと言ふ。

(婆沙一九五、毘曇部十七、頁六〇参照)。

【五】無常想が生ずる法は無常想と同一所縁なりや。以下、四句分別をなせり。

有にあらざるに非ず、有像ならざるに非ず、色に餘たり、痛に餘たり、想に餘たり識に餘たり、彼の相應法に餘たるものありや。

彼の法は彼の法に於て、當に因と言ふべきや。當に緣と言ふべきや。復次に、當に緣たりと言ふべきも、當に因に非ずと言ふべきや。

彼の法は當に善と言ふべきや。不善なりや。無記なりや。

彼の法は幾く使に使せらるゝや。幾く結が繋するや。

(五)若し法なれば心と俱生し、心を用ひざるに非ざるものあり。如し心生ずれば、彼の法も亦然るや。如し心盡くれば彼の法も亦然るや。如し彼が心を得ずれば、彼の法も亦然るや。如し彼が心を棄つれば、彼の法も亦然るや。如し彼の心が報を受くれば、彼の法も亦、然るや。

(六)見と相應する痛は幾く使に使せらるゝや。見と相應せざる痛は幾く使に使せらるゝや。疑と相應する痛は幾く使に使せらるゝや。疑と相應せざる痛は幾く使に使せらるゝや。

(七)因と道と縁生とは幾く持、幾く入、幾く陰に攝するや。

眼更と等生の想と痛と心とに相應する法を除き、耳更と等生の想と痛と心とに相應せざる法を除く、諸餘の法は、幾く持、幾く入、幾く陰に攝するや。

鼻・舌・身更と等生の想と痛と心とに相應する法を除き、意更と等生の想と痛と心とに相應せざる法を除く諸餘の法は幾く持、幾く入、幾く陰に攝するや。

此の章の義、願くば具さに演說せん。

第一節 十想の無間に生ずる法は十想と相應するや否やに就きて

二 十想あり、無常想と無常苦想と苦無我想と不淨想と觀思想と一切世間不可樂想と死想と斷想と無解想と盡想となり。

【六】心と俱生し心を用ひて得する法と、心との關係の問題。

【七】如の次に、大正本には「是」の字あるも、三本・宮本・聖本・聖乙本には共に無きが故に、今は後者に從つて是を除去して讀めり。

【八】見又は疑と相應し又は相應せざる痛(受)に所使たる使の問題。

【九】因・道・縁の持・入・陰の三科分別。

【一〇】本節は、十想中の一を等無間として起る法は、其の想と相應するや否やを無常想を代表として四句分別に依りて論究する段なり。

婆沙に據れば、本論提起の緣由は、相應法の實有なることを顯示せんが爲めなりと言ふ(婆沙一九五、毘婆沙十六、頁五八參照)。

【二】十想の名目。

卷の第三十 (第八編 見健度)

第三章 十想の無間に生ずる法等に關する論究

(見健度、想跋渠第三) (發智論卷第十九、大正・二六、一〇二五頁)

本章の内容目次

二 (一) 十想あり、無常想と無常苦想と苦無我想と不淨想と觀食想と一切世間不可樂想と死想と斷想と無婬想と盡想となり。

諸法にして無常想より生ずるものなれば、彼の法は無常想と相應するや。設し諸法にして無常想と相應するものなれば、彼の法は無常想より生ずるや。

乃至盡想も亦、是くの如し。

三 (二) 諸法にして無常想より生ずるものなれば、彼の法は無常想と同一緣なりや。設し諸法にして無常想と同一緣なれば、彼の法は無常想より生ずるや。

乃至盡想も亦、是の如し。

四 (三) 頗し法の智分別のものにして斷ぜず修ぜず作證せざるものありや。頗し法の智分別のものにして斷ぜず修せざるも作證するものありや。頗し法の智分別のものにして斷ぜざるも修し作證するものありや。頗し法の智分別のものにして斷じ修し作證するものありや。頗し法の智分別のものにして斷ずるも修せずして作證するものありや。頗し法の智分別のものにして斷ずるも修せず作證せざるものありや。

五 (四) 頗し法の無緣のものにして緣を因とし無緣を因とし、緣法緣と俱生し、有たり有像たり、非

【一】 本章は、十想の生ずる法は十想と相應するや、乃至、六因・八道種・十二緣起支の陰・入・持の三科分別は云何ん等の諸種の問題を論究するを其の課題とす。例により發智の頌文を示せば、

「想、心、知等四、

無緣法、見婬、

因道等攝ノ三

此章頗具説。」

【二】 十想の無間に生ずる法は十想と相應するや否やの問題。

【三】 十想の生ずる法は十想と同一所緣なりやの問題。

【四】 智分別(所遠達、所週知)の法と、不斷と不修と不作證法との關係に就きての問題。

【五】 得と生、老、無常の三有爲相とに就きて。

※緣法緣は發智及び婆沙に後無緣とあり。以下これに准ず。

にして明を因とするものなれば、彼の法は無明を縁とするなり。

頗し法の無明を縁とするものにして、彼の法が明を因とせざるものありや。答へて曰く、有り。

初明、若しくは有漏行なり。

諸法にして無明を因とするものなれば、彼の法は不善なりや。答へて曰く、是の如し。諸法にして不善なるもの、彼の法は無明を因とするなり。

頗し法の無明を因とするものにして、彼の法は不善に非ざるものありや。答へて曰く、有り。無明報と染汚の行となり。

諸法にして明を因とするものなれば、彼の法は善なりや。答へて曰く、是の如し。諸法にして明を因とするものなれば、彼の法は善なり。

頗し法の善なるものにして彼の法は明を因とせざるものありや。答へて曰く、有り。初明、若しくは善の有漏行なり。

頗し法にして明を因とせず無明をも因とせずして、彼の法が不因に非ざるものありや。答へて曰く、有り。無明報を除く諸餘の不墮没無記の行と初明と、若しくは善の有漏行となり。

阿毘曇欲品第四十寛り(梵本一百八十六首盧、秦二千九百五十六首)

阿毘曇八變度論卷第二十九

覆無記とせり。

【六】明を因と爲す法は明を縁とするや否や。

【七】無明を因とする法は明を縁とするや否や。

【八】明を因となす法は、無明を縁となすや否や。

【九】無明を因と爲す法は不善なり、否や。

【一〇】明と因と爲す法は善なりや否や。

【一一】明及び無明を因となさずして無因に非ざる法に就きて。

是を出要覺を意の所念とするも、彼は出要覺を覺する時に非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが出要覺を覺する時、彼は出要覺を意の所念となすや。答へて曰く、猶し出要覺を緣として出要覺を覺する時の如し。是を出要覺を覺する時、彼は出要覺を意の所念とするものと謂ふなり。(四)云何んが出要覺を覺するにも非ず、彼は出要覺を意の所念となすにも非ざるや。答へて曰く、上の爾所の事を除くなり。

無瞋覺と不害覺とにつきても亦、是の如し。

第七節 明及び無明を因又は緣と爲す法に關する論究

諸法にして無明を因とするものなれば、彼の法は無明を緣とするや。答へて曰く、是の如し。諸法にして無明を因とするものなれば、彼の法は無明を緣とするものなり。

頗し法の無明を緣とするものにして、彼の法が無明を因とせざるものありや。答へて曰く、有り。

無明報を除く諸餘の不隱沒無記の行、若しくは善の行なり。

諸法にして明を因とするものなれば、彼の法は明を緣とするや。答へて曰く、是の如し。諸法にして明を因とするものなれば、彼の法は明を緣とするなり。

頗し法の明を緣とするものにして、彼の法が明を因とせざるものありや。答へて曰く、有り。初

明、若しくは有漏行なり。

諸法にして無明を因とするものなれば、彼の法は明を緣とするや。答へて曰く、是の如し。諸法にして無明を因とするものなれば、彼の法は明を緣とするなり。

頗し法の明を緣とするものにして、彼の法が無明を因とせざるものありや。答へて曰く、有り。

無明報を除く諸餘の不隱沒無記の行、若しくは善の行なり。

諸法にして明を因とするものなれば、彼の法は無明を緣とするや。答へて曰く、是の如し。諸法

【三】 無瞋覺不害覺を覺すと其の所緣との關係。

【三三】 本節は、明又は無明を因又は緣となす諸法の關係等を論述する段なり。

其の綱目を示せば次の如し。

(一) 無明を因と爲す法は無明を緣となすや。

(二) 明を因と爲す法は明を緣と爲すや。

(三) 無明を因とする法は明を緣となすや。

(四) 明を因と爲す法は無明を緣となすや。

(五) 無明を因と爲す法は不善なりや。

(六) 明を因と爲す法は善なりや。

(七) 明及び無明を因と爲さざるものにして而も無因ならざるものありやなり。

【三四】 無明を因となす法は、無明を緣と爲すや否や。

【三五】 發智にては、無明報を無明異熟とし、不隱沒無記又は隱沒無記を無覆無記又、有

し。是を無常想を修し亦彼は無常想を意の所念とすると謂ふなり。(四)云何んが無常想を修するにも非ず、彼は無常想を意の所念とするにも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くなり。^{三二}
乃至盡想につきても亦、是くの如し。

^{三七}第五節 三惡覺(惡尋)の一を覺起する時、其ま意の所念とするや否やに就きて

^{三六} 若し欲覺を覺する時、彼は欲覺を意の所念とするや。答へて曰く、或は欲覺を覺する時、彼は欲覺を意の所念とするに非ざるものあり。(一)云何んが欲覺を覺する時、彼は欲覺を意の所念とするに非ざるや。答へて曰く、猶し餘の法を緣じて欲覺を覺する時の如し。是を欲覺を覺する時、彼は欲覺を意の所念とするに非ずと謂ふなり。(二)云何んが欲覺を意の所念とするも彼は欲覺を覺するに非ざるや。答へて曰く、猶し餘を覺して欲覺を意の所念とするときの如し。是を欲覺を意の所念とするも彼は欲覺を覺するに非ずと謂ふなり。(三)云何んが欲覺を覺する時、彼は欲覺を意の所念とするや。答へて曰く、猶し欲覺を緣じて欲覺を覺する時の如し。是を欲覺を覺する時、彼は欲覺を意の所念とすると謂ふなり。(四)云何んが欲覺を覺する時にも非ず、彼は欲覺を意の所念とするにも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くなり。^{三九}
瞋恚覺と害覺とにつきても亦、是の如し。

^{四〇}第六節 三善覺を覺する時、其ま意の所念とするや否やに就きて

^{三三} 若し出要覺を覺する時、彼は出要覺を意の所念とするや。答へて曰く、或は出要覺を覺する時、彼は出要覺を意の所念となすに非ざることあり。(一)云何んが出要覺を覺する時、彼は出要覺を意の所念とするに非ざるや。答へて曰く、猶し餘を緣じて出要覺を覺する時の如し。是を出要覺を覺する時、彼は出要覺を意の所念となすに非ずと謂ふなり。(二)云何んが出要覺を意の所念とするも彼は出要覺を覺する時に非ざるや。答へて曰く、猶し餘を覺して出要覺を意の所念とするときの如し。

【二六】 無常想の外の九想の習修と、意の所念との關係。

【二七】 本節は、三惡覺即ち欲覺(欲尋)と瞋恚覺と害覺との一を起す時に、其の起せし覺を意の所念(所緣)とするや否やを明す段なり。然も、起す覺と其の所緣と必ずしも同一ならざるが故に、以下四句分別をなせり。

(婆沙一九四、毘婆沙部十七、頁四二參照)。

【二八】 欲覺を覺すと其の所緣との關係。

【二九】 瞋恚覺、害覺を覺すと其の所緣との關係。

【三〇】 本節は、前節の三惡覺に論ぜしものを今三善覺に就きて論ずる段なり。

因みに發智は之を、欲尋の如く、恚尋、害尋、出離尋、無恚尋、無害尋も亦爾りとして省略せり。

婆沙は、三善尋に就きては、此の八種度論の如く、詳論せり。

(婆沙一九四、毘婆沙部十六、頁四四參照)。

【三一】 出要覺を覺すと其の所緣との關係。

と、色界の無愛に無知なるとなればなり。

何等を以ての故に、無色界の使は、欲界・色界にて使せらるゝに非ざるや。答へて曰く、則ち界が壞すると、然して彼は此の縁に非ざるとなり。

第三節 非一切遍使が遍く自界法に所使たらざる所以に就きて

何等を以ての故に、欲界の非一切遍使は、一切の欲界に使せらるゝに非ざるや。答へて曰く、若し然らば、^三遍一切有となるべきと、彼れ亦、此れを縁するに非ざるとなり。

何等を以ての故に、色界の非一切遍使は、一切の色界に使せらるゝに非ざるや。答へて曰く、若し然らば遍一切有となるべきと、彼れ亦、此れを縁するに非ざるとなり。

何等を以ての故に、無色界の非一切遍使は、一切の無色界に使せらるゝに非ざるや。答へて曰く、若し然らば遍一切有となるべきと、彼れ亦、此れを縁するに非ざるとなり。

第四節 十想の習修と其の所縁とに關する論究

十想あり、無常想・無常苦想・苦無我想・不淨想・觀食想・一切世間不可樂想・死想・斷想・無姪想・盡想なり。

^{三三}

若し無常想を修するものなれば、彼は無常想を意の所念とするや。答へて曰く、或は無常想を修

するも、彼は無常想を意の所念とするに非ざるものあり。(一)云何んが無常想を修するも、彼は無常想を意の所念とするに非ざるや。答へて曰く、猶し餘を縁じて無常想を修するが如し、是を無常想を

修するも彼は無常想を意の所念とするに非ずと謂ふなり。(二)云何んが無常想を意の所念とするも彼は無常想を修するに非ざるや。答へて曰く、猶し餘想を修するに無常想を意の所念とするときの

如し。是を無常想を意の所念とするも彼は無常想を修するに非ずと謂ふなり。(三)云何んが無常想を修し、彼は無常想を意の所念ともするや。答へて曰く、猶し無常想を縁じて無常想を修するが如

【三】本節は三界の非一切遍使(非通行隨眠)が、各自界の法にすら遍く所使たらざる所以を明にする段なり。

【三】遍一切有とは通行隨眠の義なり。

【四】本節は十想の一を習修(現在前)する時、其の習修する想を意の所念(所縁)とするや。若し一想を意の所念とする時は、其の想を習修するや、の關係を十想の一に就きて論究する段なり。

(婆沙一九三、毘婆沙部十七、頁二九參照)。

【五】無常想を習修すると、無常想を意の所念とするものとの關係。

無常想を習修するとき無に常想を所縁とすると、他を所縁とするの場合あり、又逆に無常想を所縁として無常想を習修する時と、他を習修する時とあるが故に、以下四句分別せり。

彼の一切は無色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するなり。

頗し無色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するも、彼は無色界有を棄てず、無色界有をも受けざるものありや。答へて曰く、有り。未だ命終せずして無色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するもの如し。

若し無色界有を棄てて欲界有を受くるものなれば、彼の一切は無色界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するや。答へて曰く、是の如し。

設し無色界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は無色界有を棄てて欲界有を受くるや。答へて曰く、是の如し。

若し無色界有を棄てて色界有を受くるものなれば、彼の一切は無色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するや。答へて曰く、是くの如し。若し無色界有を棄てて色界有を受くるものなれば、彼の一切は無色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するなり。

頗し無色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するも彼は無色界有を棄てず色界有をも受くるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。未だ命終せずして無色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するが如きなり。

第二節 使(隨眠)が他界法に所使たらざる所以に就きて

何等を以ての故に、欲界使は色・無色界にて使せらるるに非ざるや。答へて曰く、則ち界が壞すると、若しくは、^三欲界の無愛に無知なるとなればなり。

何等を以ての故に、色界使は欲界にて使せらるるに非ざるや。答へて曰く、則ち界が壞すると、然して彼の欲界が此の色界使の所縁に非ざるとなり。

何等を以ての故に、色界の使は無色界にて使せらるるに非ざるや。答へて曰く、則ち界が壞する

【八】無色界有を棄てて欲界有を受くる者の滅し現在前する法に就きて。

【九】無色界有を棄て、色界有を受くる者の滅し現在前する法に就きて。

【一〇】本節は、自界の使(隨眠)は他界法に於て所使(隨眠)たらざる所以を論究する段なり。

(婆沙一九三、毘婆沙十七、頁二一參照)。

【一一】「欲界の無愛に無知なると」とは、發智は、「隨眠を施設すべからざるが故に」とせり。思ふに、八難度がかく觀ぜしは avijāṅki (不隨眠) を無知とせしに由るならん。

^{一四} 若し色界有を棄てて色界有を受くるものなれば、彼の一切は色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するや。答へて曰く、是くの如し。若し色界有を棄てて色界有を受くるものなれば、彼の一切は色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するなり。

頗し色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するも、彼は色界有を棄つるにも非ず色界有を受くるにも非ざるものありや。答へて曰く、有り。未だ命終せずして色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するもの如きなり。

^{一五} 若し色界有を棄てて欲界有を受くるものなれば、彼の一切は、色界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するや。答へて曰く、是の如し。若し色界有を棄てて欲界有を受くるものなれば、彼の一切は色界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するなり。

頗し色界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するも、彼は色界有を棄つるにも非ず欲界有を受くるにも非ざるものありや。答へて曰く、有り。未だ命終せずして色界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するもの如きなり。

^{一六} 若し色界有を棄てて無色界有を受くるものなれば、彼の一切は色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するや。答へて曰く、是の如し。若し色界有を棄てて無色界有を受くるものなれば、彼の一切は色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するなり。

頗し色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するも、彼は色界有を棄つるにも非ず無色界有をも受けざるものありや。答へて曰く、有り。未だ命終せずして色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するもの如きなり。

^{一七} 若し無色界有を棄てて無色界有を受くるものなれば、彼の一切は無色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するや。答へて曰く、是の如し。若し無色界有を棄てて無色界有を受くるものなれば、

【一四】 色界有を棄て、色界有を受くる者の滅し現在前する法に就きて。

【一五】 色界有を棄て、欲界有を受くる者の滅し現在前する法に就きて。

【一六】 色界有を棄て無色界有を受くる者の滅し現在前する法に就きて。

【一七】 無色界有を棄てて無色界有を受くる者の滅し現在前する法に就きて。

法は明を因とするや。

頗し法にして明を因とせず無明をも因とせざるものにして、彼の法が因有らざるに非ざるものありや。此の章の義、願くは具さに演説さん。

第一節 三有の一を棄てて一を受くる者の滅し現在前する法に關する論究

一 若し欲界有を棄てて欲界有を受くるものなれば、彼の一切は欲界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するや。答へて曰く、是くの如し。若し欲界有を棄てて欲界有を受くるものなれば、彼の一切は欲界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するなり。

二 頗し欲界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するも、彼は欲界有を棄つるにも非ず、欲界有をも受けざるものありや。答へて曰く、有り。未だ命終せずして欲界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するもの如きなり。

三 若し欲界有を棄てて色界有を受くるものなれば、彼の一切は欲界繫法を盡くして色界繫法を現在前するや。答へて曰く、是の如し。若し欲界有を棄てて色界有を受くるものなれば、彼の一切は欲界繫法を盡くして色界繫法を現在前するなり。

四 頗し欲界繫法を盡くして色界繫法を現在前するも、彼は欲界有を棄つるに非ず色界有を受くるにも非ざるものありや。答へて曰く、有り。未だ命終せずして欲界繫法を盡くして色界繫法を現在前するもの如きなり。

五 若し欲界有を棄てて無色界有を受くるものなれば、彼の一切は欲界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するや。答へて曰く、是の如し。

六 設し欲界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は欲界有を棄てて無色界有を受くるや。答へて曰く、是の如し。

【九】大正本には不因有因とあるも三本、宮本には不有因とあるを以て、今は後者に據りてかく改む。

【一〇】本節は、三有の棄捨と受生と、三界繫法の滅盡と現在前との有と法との關係を明すを課題とする段なり。例せば、(a)欲有を棄てて欲有を受くる者は、欲界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するや。

逆に(b)欲界繫法を盡くして欲界繫法を現在前する時は、欲有を捨して欲有を受くるやと、かくの如きを、欲界有より色界有乃至無色界有より色界有を受くる場合に就きて一一明にするなり。

(婆沙一九二、毘婆沙十七、頁五、以下參照)。

【一】欲界有を棄てて欲界有を受くる者の盡くして現在前する法に就きて。

【二】欲界有を棄てて色界有を受くる者の滅し現在前する法に就きて。

【三】欲界有を棄てて無色界有を受くる者の滅し現在前する法に就きて。

若し無常想を修すれば、彼は無常想を意の所念とするや。設し無常想を意の所念とするとせば、彼は無常想を修するや。

乃至盡想につきても亦、是くの如し。

^六 (五)若し欲覺を覺する時は、彼は欲覺を意の所念とするや。設し欲覺を意の所念とすれば、彼の欲覺を覺するや。

瞋恚覺と害覺とにつきても亦、是くの如し。

^七 (六)若し出要覺を覺する時は、彼は、出要覺を意の所念とするや。設し出要覺を意の所念とするときは、彼は出要覺を覺するや。

無瞋恚覺と無害覺とにつきても亦、是くの如し。

^八 (七)諸法にして無明を因とするものなれば、彼の法は無明を縁とするや。設し法にして無明を縁とするものなれば、彼の法は無明を因とするや。

諸法にして明を因とするものなれば、彼の法は明を縁とするや。設し法にして明を縁とするものなれば、彼は明を因とするや。

諸法にして無明を因とするものなれば、彼の法は明を縁とするや。設し法にして明を縁とするものなれば彼の法は明と因とするや。

諸法にして無明を因とするものなれば、彼の法は不善なりや。設し法にして不善なるものなれば彼の法は無明を因とするや。

諸法にして明を因とするものなれば、彼の法は善なりや。設し法にして善なるものなれば、彼の

【六】三欲覺を覺する時三欲覺を意の所念とするや否やの問題。

【七】三出要覺を覺する時三出要覺を意の所念とするや否やの問題。
※大正本には覺の下に時の字あるも宮本・聖本・聖乙本によりてこれを除けり。

【八】明又は無明を因又は縁となす法に關する問題。

若し色界有を棄てて無色界有を受くるものなれば、彼の一切は色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するものなりや。設し色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は色界有を棄てて無色界有を受くるものなりや。

若し無色界有を棄てて無色界有を受くるものなれば、彼の一切は無色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するや。設し無色界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は無色界有を棄てて無色界有を受くるものなりや。

若し無色界有を棄てて欲界有を受くるものなれば、彼の一切は、無色界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するや。設し無色界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は無色界有を棄てて欲界有を受くるものなりや。

若し無色界有を棄てて色界有を受くるものなれば、彼の一切は無色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するものなりや。設し無色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は、無色界有を棄てて色界有を受くるものなりや。

三 (一)何等を以ての故に、欲界の使は色界・無色界にて使せらるゝに非ざるや。何等を以ての故に、色界の使は欲界・無色界にて使せらるゝに非ざるや。何等を以ての故に、無色界の使は欲界・色界にて使せらるゝに非ざるや。

四 (二)何等を以ての故に欲界の非遍一切使は、一切の欲界に使せらるゝに非ざるや。何等を以ての故に色界の非遍一切使は一切の色界に使せらるゝに非ざるや。何等を以ての故に無色界の非遍一切使は一切の無色界に使せらるゝに非ざるや。

五 (四)十想あり。無常想・無常苦想・苦無我想・不淨想・觀食想・一切世間不可樂想・死想・斷想・無疑想・寤想なり。

【三】使(隨眠)が他界法に於いて使せられざる所以如何の論題。

【四】非遍一切使(非遍行隨眠)が遍く自界法に使せられざる所以如何。

【五】十想の習修と其の所縁とに關する問題。

第二章 三有等に關する論究

(阿毘曇見健度中、欲跋渠第二) (發智論卷第十九、大正・二六、一〇二四頁)

本章の内容目次

(一) 若し欲界有を棄てて欲界有を受くるものなれば、彼の一切は欲界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するや。設し欲界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は欲界有を棄てて欲界有を受くるものなりや。

若し欲界有を棄てて色界有を受くるものなれば、彼の一切は欲界繫法を盡くして色界繫法を現在前するや。設し欲界繫法を盡くして色界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は欲界有を棄てて色界有を受くるものなりや。

若し欲界有を棄てて無色界有を受くるものなれば、彼の一切は欲界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するものなりや。設し欲界繫法を盡くして無色界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は欲界有を棄てて無色界有を受くるものなりや。

若し色界有を棄てて色界有を受くるものなれば、彼の一切は色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するものなりや。設し色界繫法を盡くして色界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は色界有を棄てて色界有を受くるものなりや。

若し色界有を棄てて欲界有を受くるものなれば、彼の一切は色界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するものなりや。設し色界繫法を盡くして欲界繫法を現在前するものなれば、彼の一切は色界有を棄てて欲界有を受くるものなりや。

【一】 本章の内容は、次の目次の如きも、發智の頌文にて示せば次の如し。

三有、眠、隨、想、

六尋、明、無明、

對因等、有、無、

此章願具說

詳細は婆沙一九二、毘曇部十七、頁一、の註記を見よ。

【二】 三有の一を棄てて發生する者の滅し現在前する法は如何の論題。

る、彼は盡く無色界の有なり。頗し無色界の有にして彼の有が四行に非ざるものありや。答へて曰く、有り。無色界の衆生の不自住心の諸有なり。

頗し有にして五行なるものありや。答へて曰く、有り。欲界の衆生の自住心のものと、無想定・減盡定に入らざる諸有と也た。若しくは色界の有想天の自住心のものと、無想定・減盡定に入らざる諸有と、若しくは色界の無想天の無想を得せざる諸有となり。

頗し有にして四行のものありや。答へて曰く、有り。無色界の衆生の自住心なる諸有なり。

頗し有にして三行のものありや。答へて曰く、有にして三行なるものあること無し。

頗し有にして二行のものありや。答へて曰く、有り。欲界の衆生の不自住心のものと、無想定・減盡定に入れる諸有と、色界の想天の不自住心のものと、無想定・減盡定に入れる諸有と、色界の無想天の無想を得せし天の諸有となり。

頗し有にして一行のものありや。答へて曰く、有り。無色界の衆生の不自住心なる諸有なり。

阿毘曇意止品第三十九(梵本三百一十五首盧、秦四千六百二十二首)

四行・三行・二行・一行なる有ありや否やを論述せり。(婆沙一九二、毘曇部十六、頁三五〇参照)。

【六二】 欲有と五行有るものとの關係に四句分別あり。

【六三】 不自住心を發智は「不同分心に住するものと觀ず」。

【六四】 「無想定・減盡定に入らざる諸有」の一句發智にはなし。以下(※)印あるはこれに準ず。

【六五】 色界の有想天有と五行有るものとの關係。

【六六】 色界無想天の有と二行有るものとの關係。

【六七】 無色界の有と四行有るものとの關係。

【六八】 諸有の五行・四行・三行・二行・一行のもの有無に就きて。

【六九】 大正本には、若の字なきも三本・宮本によりて之を補へり。

【七〇】 次下に、發智には「頗し有にして行無きもの有りや、答ふ、無し」の一文あり。

有は五行に非ざるものといふ。(二)云何んが有が五行なるも彼は色有の想天に非ざるものなりや。答へて曰く、欲界の衆生の自住心のものと、無想定・滅盡定に入らざる諸有と、若しくは色界の無想天にして無想を得せざる諸有と、是を有は五行なるも彼は色有の想天に非ざるものと謂ふ。(三)云何んが色有の想天にして彼の有は五行なるものなりや。答へて曰く、色界の想天の自住心のものと、無想定・滅盡定に入らざる諸有と、是を色有の想天にして彼の有は五行なるものといふ。(四)云何んが色有の想天にも非ず、彼の有は五行にも非ざるものなりや。答へて曰く、欲界の衆生の不自住心のものと、無想定・滅盡定に入らざる諸有と、若しくは色界の無想天の無想を得する諸有と、若しくは無色界の有と、是を色有の想天にも非ず、彼の有は五行にも非ざるものと謂ふなり。

諸の色有の無想天なれば、彼の一切の有は二行なりや。答へて曰く、或は色有の無想天なるも彼の有は二行に非ざるものあり。(一)云何んが色有の無想天なるも、彼の有は二行に非ざるものなりや。答へて曰く、色界の無想天にして無想を得せざる諸有、是を色有の無想天にして彼の有は二行に非ざるものと謂ふ。(二)云何んが有の二行なるものにして、彼は色有の無想天に非ざるものなりや。答へて曰く、欲界の衆生の不自住心のものと、無想定・滅盡定に入れる諸有と、色界の想天の不自住心のものと、無想定・滅盡定に入れる諸有と、是を有の二行なるものにして彼は色有の無想天に非ざるものと謂ふ。(三)云何んが色有の無想天にして彼の有は二行なるものなりや。答へて曰く、色界の無想天にして無想を得する諸有、是を色有の無想天にして彼の有は二行のものといふ。(四)云何んが色有の無想天にも非ず、彼の有は二行にも非ざるものなりや。答へて曰く、欲界の衆生の自住心のものと、無想定・滅盡定に入らざる諸有と、若しくは色界の想天の自住心のものと、無想定・滅盡定に入らざる諸有と、若しくは色界の想天の自住心のものと、無想定・滅盡定に入らざる諸有と、是を色有の無想天にも非ず、彼の有は二行にも非ざるものと謂ふなり。

諸の無色界の有なれば、彼の有は盡く四行のみなりや。答へて曰く、是の如し。諸の有の四行な

「法爾に由るが故なり」とせり。

【六】本節は、佛が般涅槃する時は、第四靜慮より起ち出で、欲界の無憂無記なる不動三昧(不動寂靜色)に依りて般涅槃せしことを明す段なり。(婆沙一九一、毘曇部十六、頁三三四參照)。

【六二】本節は、本時有(本有)死有・中有・生有の四有の自性を明す段なり。(婆沙一九一、毘曇部十六、頁三三四參照)。

【六三】四有の名目。此の四有の醜列の順序に於て、發智は(一)本有(二)中有(三)生有、(四)死有とせり。從つて後の自性論も、八禪度と發智と說順異れり。

【六四】四有の自性。發智は、「生分と死分との諸蘊を除く、中間の諸有なり」と言ひ、次の中有に就きては、「死分と生分との諸蘊を除く、中間の諸有なり」と言へり。

【六五】本節は、先づ欲・色・無色の三有は五行即ち五蘊の幾くを有するものなりやを、(一)欲有と五行あるもの、(二)色界の有想天と五行あるもの、(三)色界の無想天と二行あるもの、(四)無色界有と四行あるもの、等の諸關係に於て詳に明し、最後に、五行

云何んが本時有なりや。答へて曰く、死際と生際との五陰の此の中間に於けるもの、是を齊るの諸有、是を本時有といふ。云何んが死有なりや。答へて曰く、死の五陰、是を死有といふ。

云何んが中有なりや。答へて曰く、中有の五陰、是を中有といふ。云何んが生有なりや。答へて曰く、生の五陰、是を生有といふなり。

第十三節 欲・色・無色の三有と行(蘊)との關係

諸の欲有の彼の一切の有は、五行なりや。答へて曰く、或は欲有なる彼の有にして五行に非ざるものあり。

(一)云何んが欲有なるも彼の有にして五行に非ざるものなりや。答へて曰く、欲界の有情の自任心のもとの、無想定・滅盡定に入れる諸有と、是を欲有なるも彼の有にして五行に非ざるものと謂ふ。(二)云何んが有にして五行なるも、彼は欲有に非ざるものなりや。答へて曰く、色界の想天にして自任心のもとの、無想定・滅盡定に入らざる諸有と、若しくは色界の無想天の無想を得せざる諸有と、是を五行有るも彼は欲有に非ざるものと謂ふ。(三)云何んが欲有にして彼の有は五行なるものなりや。答へて曰く、欲界の衆生の自任心のもとの、無想定・滅盡定に入らざる諸有と、是を欲有にして彼の有は五行なりと謂ふ。(四)云何んが欲有にも非ず、彼の有は五行にも非ざるものなりや。答へて曰く、色界の想天の不自任心のもとの、無想定・滅盡定に入れる諸有と、若しくは色界の無想天の無想を得する諸有と、若しくは無色界の有と、是を欲有にも非ず、彼の有は五行にも非ざるものと謂ふなり。

諸の色有の想天なる彼の一切の有は五行なりや。答へて曰く、或は色有の想天なるも彼の有は五行に非ざるものあり。(一)云何んが色有の想天なるも、彼の有は五行に非ざるものなりや。答へて曰く、色界の想天の不自任心のもとの、無想定・滅盡定に入れる諸有と、是を色有の想天なるも彼の

〔婆沙一九〇、毘曇部十六、頁三二四參照。〕

〔五〕 法入は大正本に細滑入とあるも、宮本・三本及び發智に據りて法入と改む。

〔五七〕 本節は「阿羅漢は已に不善法を斷じて善法を成就すと稱せらるるを閉きて、阿羅漢は死する時も亦、善心に住するものなるべしとの疑ひを生ずるものあるが故に、羅漢の般涅槃する時の心は無記なることを明にする段なり。婆沙一九一、毘曇部十六、頁三二八參照。〕

〔五八〕 本節は、佛の一雙の弟子たる舍利弗と目連との二人が、佛に先んじて般涅槃せし所以を論究する段なり。

〔五九〕 發智には、「長夜中、造作し增長せる無斷を感ずる業をして、異熟を空無果なからしむること勿からんが爲めの故なり」と説く。

此の中、無斷を感ずる業とは、「大師と與に現に法樂を受けて、問斷すること無からしむる業」の意なり。若し大師の滅後迄も、止住すとせば、即ち大師と與たること能はずして法樂を受くるに問斷あること、なればなり。

〔婆沙一九一、毘曇部十六、頁三三〇參照。〕

〔六〇〕 「復次に」以下を發智は、

第八節 死時痛(死邊際受)に就きて

云何んが死時痛なりや。答へて曰く、諸の節々が疼みて若し命行が盡くれば、これを死時痛といふ。

何處を齊りとして死時痛といふや。答へて曰く、支節疼みて命行の盡くるを齊るなり。

死時痛は一入の攝にして、法入なり。二識の識るものなり。二識とは身識と意識となり。支節の疼みは先に身識、後に意識に相應す。

第九節 羅漢の般涅槃心が無記心なるに就きて

阿羅漢は當に善心にて般涅槃するや。無記心にて般涅槃するや。答へて曰く、阿羅漢は無記心にて般涅槃す。

第十節 舍利弗・目連が佛に先んじて般涅槃せし所以に就きて

何等を以ての故に、佛世尊より先に二弟子が般涅槃し、後、佛世尊が般涅槃せしや。答へて曰く彼の尊者等は、長夜無斷行の報を受くるものを作れるに、彼の行が空にして無果無報ならしむること無からしめんためなり。復次に、佛世尊の常法として先に二弟子が般涅槃し、後、佛世尊が般涅槃するなり。

第十一節 佛は出定して般涅槃するに就きて

又、世尊の言く、「不移動三昧に入りて如來は般涅槃す」と。如來は定に入りて般涅槃するや。定より起ちて般涅槃するや。答へて曰く、如來は定より起ちて般涅槃し、定に入りてには非ず。

第十二節 四有に關する論究

四有あり。本時有(purvakālabhava)と死者(marajabhava)と中有(antarabhava)と生有(ūpapa-ttībhava)となり。

乃至法の内結を略示せしなり。
【五〇】鼻内結と舌内結との有無等の如實智の八智分別。

發智は之を「鼻・舌結は盡の說の如し」と省略せり。

【五一】五蓋(貪欲等)の有無等の如實智の八智分別。

こは、鼻内結の場合の如しとなり。因みに之を發智は六内結の前に置きて詳論せり。

【五二】本節は法々觀意止の節來の續行として、七覺意の一に就きて、

(一)内の覺意有りととの如實智と。

(二)内の覺意無しとの如實智と。

(三)未生の内の覺意生じ已りて住し退ぜず等との如實智とを一八智分別する段なり。

(婆沙一九〇、毘曇部十六、頁三二一參照)。

【五三】本節は、世尊が、契經に、「彼は自ら姪・瞋志・愚癡の盛……又は……薄を觀ず……」

と説かれしに因みて、其の姪等の盛(智)となると、薄(滅)となるとは如何んを明にする段なり。

(婆沙一九〇、毘曇部十六、頁三二二參照)。

【五四】觀ずは、發智に「等隨觀す」とあり。

【五五】本節は、死時痛(死邊際受)即ち死する時の受の自性等を論究する段なり。

耳と聲、身と細滑、意と法とも亦、是の如し。

鼻は香を縁として内結を生ずと。彼の比丘が、實に内結あるを、此の内結有りとか如實に之を知るは一の等智なり。實に内結あらざるを、此の内結無しとか如實に之を知るは、三智即ち法智・等智・道智なり。如し未生の内結は便ち生ずと、此も亦、如實に之を知るは、一の等智なり。如し生ぜしものは便ち盡き、已盡のものは不生なりと此も亦如實に之を知るは、三智即ち法智・等智・道智なり。舌に於ける味と食欲・瞋恚・睡眠・調戲・疑とにつきてても亦、是の如し。

第六節 七覺意の有無等を如實に知る智に關する論究

内の念覺意を生ずと彼の比丘、實に内の念覺意あるを、此の内の念覺意有りと如實に之を知るは四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。實に内の念覺意にあらざるを此の内の念覺意無しとか如實に之を知るは、一の等智なり。如し未生の内の念覺意は便ち生じ、已生のは便ち住し、忘れず退せず、増益し思惟し廣く滿たしめ、彼をも亦如實に之を知るは、四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。

法・精進・喜・猶・定・護覺意につきてても亦、是くの如し。

第七節 姪・瞋恚・愚癡の盛・薄(増・減)に就きて

又、世尊の言く、「彼は自ら姪・瞋恚・愚癡の盛なるを 觀ず……」と。彼のうち云何にして姪・瞋恚・愚癡が盛となるや。答へて曰く、少の姪・瞋恚・愚癡盛となりて中の姪・瞋恚・愚癡となり、中のが便ち増して上となる。是くの如くして姪・瞋恚・愚癡が盛となるなり。

又、世尊の言く、「彼は自ら姪・瞋恚・愚癡薄しと觀ず……」と。彼は云何にして姪・瞋恚・愚癡が薄くなるや。答へて曰く、増の淫・瞋恚・愚癡が中となり、中のが便ち少となる。是くの如く、姪・瞋恚・愚癡が薄くなるなり。

有亂心、有怠、無 心の如實智の八智分別。
【四三】少・多心、不修・修心、の如實智の八智分別。
因みに發智には、少多心(小大心)の次に「掉心と不掉心」とに就きての論究あり。
【四二】不定・定心、無解脫、解脫心の如實智の八智分別。
【四一】本節は、先づ六結の一一に就きて、例せば、(一)眼の内結が有りとの如實智。(二)内結が無しとの如實智。(三)未生の内結が生ずとの如實智。
(四)已生の内結を盡し、已に盡せば不生なりとの如實智の如き四種に分ち、此等の如實智の八智分別をなし、次に、五蓋の一一をも亦、同様に分ちて、其等の如實智の八智分別をなすを其の課題とせり。これは共に法念住の一種なり。因みに、發智にては、五蓋説を先に出せり。
(婆沙一九〇、毘婆沙十六、頁三一八參照)。
【四〇】眼の内結の有無等の如實智の八智分別。
【三九】耳・鼻・舌・身・意の内結の有無等の如實智の八智分別。
こゝに耳と聲とあるは「耳が聲を縁として内結を生ず、」乃至「意は法を縁として内結を生ず、」にして即ち耳の内結、

有瞋恚心^一を如實に知るは一の等智なり、無瞋恚心^二を如實に知るは三智即ち法智・等智・道智なり。

有愚癡心^三を如實に知るは一の等智なり。無愚癡心^四を如實に知るは四智即ち法智・未知智・等智・道

智なり。

有染汚心^五を如實に知るは一の等智なり。無染汚心^六を如實に知るは四智即ち法智・未知智・等智・道

智なり。

無亂心^七を如實に知るは四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。有亂心^八を如實に知るは、一の等智な

り。

有怠心^九を如實に知るは一の等智なり。無怠心^{一〇}を如實に知るは四智即ち法智・未知智・等智・道智な

り。

少心^{一一}を如實に知るは一の等智なり、多心^{一二}を如實に知るは四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。

不修心^{一三}を如實に知るは一の等智なり。修心^{一四}を如實に知るは四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。

不定心^{一五}を如實に知るは一の等智なり。定心^{一六}を如實に知るは四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。

無解脫心^{一七}を如實に知るは一の等智なり。解脫心^{一八}を如實に知るは四智即ち法智・未知智・等智・道智

なり。

第五節 六内結と五蓋との有無等を如實に知る智に關する論究

又、世尊の言く、「眼は色を緣として内結を生ず……」と。彼の比丘が、實に内結あるを此の内結

有りと之を如實に知るは一の等智なり。實に内結あらざるを此の内結無しと如實に之を知るは、四

智即ち法智・未知智・等智・道智なり。如し未生の内結は、便ち生ずと彼が亦如實に之を知るは、彼は

一の等智なり。如し生ずれば便ち盡き、已盡なれば不生なりと、此も亦如實に之を知るは、四智即ち

法智・未知智・等智・道智なり。

樂身痛等 樂受等

樂食等 樂有味受等

樂無食等 樂無味受等

依樂賴等 樂耽嗜依受等

依樂出要等 樂出離依受等

(婆沙一八九、毘曇部十六、頁

三〇三以下參照)。

【三〇】樂痛・苦痛・不苦不樂痛

を痛す(受く)と如實に知る智

の八智分別。

【三一】樂身・苦身・不苦不樂身

痛及び、樂心・苦心・不苦不樂

心痛を受くと如實に知る智の

分別。

【三二】苦食等及び、苦無食等

を如實に知る智の八智分別。

【三三】依樂慧等及び依樂出要

等を痛すと如實に知る智の八

智分別。

【三四】本節は、心々觀念止の

種々の様式として欲心と無欲

心乃至無解脫と解脫心等の二

十心の一一を如實に知る智を

示し、其の各々は何の智なり

やを顯示するなり。

(婆沙一九〇、毘曇部十六、頁

三一參照)。

因みに、新舊譯語の對比に就

きては、第二十二卷第二節の

註記を參照せよ。

【三五】欲心・無欲心・有瞋恚・

無瞋恚心、有愚癡・無愚癡心

の如實智の八智分別。

【三六】有染汚・無染汚心、無亂

心、無怠心、無定心、無解脫心

の如實智の八智分別。

【三七】有染汚・無染汚心、無亂

心、無怠心、無定心、無解脫心

いふべく、或は樂根と相應し、或は喜根、或は護根と相應すといふべく、或は空或は無願と俱なりといふべく、或は欲界繫を緣じ、或は色・無色界繫を緣じ、或は不繫を緣すといふべし。

三五 痛痛觀意止の如く心觀意止も亦、是の如し。

三六 法法觀意止は、當に法智と言ふべきや。答へて曰く、法法觀意止は、或は彼は法智・未知智・知他人心智・等智・苦智・習智・盡智・道智なりと言ふべく、或は有覺有觀なり、或は無覺有觀なり、或は無覺無觀なりいふべく、或は樂根と相應し、或は喜根、或は護根と相應すといふべく、或は空・無願・無相と俱なりといふべく、或は欲界繫を緣じ、或は色・無色界繫を緣じ、或は不繫を緣すといふべし。

三七 第三節 樂受・苦受・不苦不樂受等を受くと如實に知る智に關する論究

三八 又、世尊の言く、「彼の樂痛を痛する時、樂痛を痛すと知る」は四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。「苦痛を痛する時、苦痛を痛すと知る」は一の等智なり。「不苦不樂痛を痛する時、不苦不樂痛を痛すと知る」は、四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。

三九 樂身・苦身・不苦不樂身の痛と苦の心痛とを痛すと如實に知るは一の等智なり。樂心・不苦不樂心の痛を痛すと如實に知るは、四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。

四〇 苦食・樂食・不苦不樂食及び苦無食を如實に知るは、一の等智なり。樂無食・不苦不樂無食を如實に知るは、四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。

四一 依樂慧・依苦慧・依不苦不樂慧、依苦出要を如實に知るは、一の等智なり。依樂出要・依不苦不樂出要を如實に知るは、四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。

四二 第四節 有貪心乃至解脫心を如實に知る智に關する論究

四三 又、世尊の言く、「欲心……あり」と。欲心有りと、如實に之を知るは、一の等智なり。無欲心を如實に知るは四智即ち法智・未知智・等智・道智なり。

【註】 心々觀意止の五門分別痛々觀意止の如しと。

【義】 法々觀意止の五門分別。

【毛】 本節は痛々觀意止即ち受念住の種々なる様式を擧げて、之を八智分別するを其の課題とす。種々なる様式とは(一)樂痛・苦痛・不苦不樂痛の夫々を痛す(受く)と夫々如實に知る智、(二)樂身痛・苦身痛・不苦不樂身痛、樂心痛・苦心痛・不苦不樂心痛の夫々を受くと夫々如實に知る智、(三)樂食・苦食・不苦不樂食、樂無食・苦無食・不苦不樂無食の夫々を受くと夫々如實に知る智、(四)依樂・依苦・依不苦不樂、依樂・依苦・依不苦不樂出要の夫々を如實に夫々を知る智なり。

因みに、以下、新舊兩譯相違語を比較せば次の如し。

八種皮 發智

も修するに非ず法をも非らずと謂ふなり。

三 若し心心觀意止を修するとき、彼は法をも修するや。答へて曰く、或は心を修するも法は非らざることあり。(一)云何んが心を修するも法は非らざるや。答へて曰く、本得の心心觀意止の現在前するとき、是を心を修するも法は非らずといふ。(二)云何んが法を修するも心は非らずといふや。答へて曰く、本得の法法觀意止の現在前するときと、若しくは本不得の法法觀意止が現在前するも是の時、心心觀意止を修するを得ざるるときと、是を法を修するも心は非らずといふ。(三)云何んが心と法とを修するや。答へて曰く、本不得の心が現在前し是の時法を修するを得るときと、若しくは本不得の法が現在前し是の時、心を修するを得るときと、本不得の身、本不得の痛が現在前し是の時、心心觀意止と法法觀意止とを修するを得るときと、是を心と法とを修すといふ。(四)云何んが心を修するにも非ず法をも非らざるや。答へて曰く、本得の身身觀意止、本得の痛痛觀意止が現在前するも是の時、心心觀意止も法法觀意止をも修するを得ざるるときと、一切の染汚心、無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入れるるときと、無想天には、心心觀意止を修するに非ず法をも非らざるをもて、是を心をも修するに非ず法をも非らずと謂ふなり。

三三 第二節 四意止の自性・地・相應・行相・所緣の五門分別

三三 身身觀意止は當に法智と言ふべきや。答へて曰く、身身觀意止は、或は彼は法智なり、未知智なり、等智なり、苦智なり、習智なり、道智なりと言ふべく、或は有覺有觀なり、或は無覺有觀なり、或は無覺無觀なりといふべく、或は樂根と相應し、或は喜根或は護根と相應すといふべく、或は空、或は無願と俱なりといふべく、或は欲界繫を緣じ、或は色界繫を緣じ、或は不繫を緣すといふべし。

三三 痛痛觀意止は當に法智と言ふべきや。答へて曰く、痛痛觀意止は或は彼は法智・未知智・知他人心・等智・苦智・習智・道智と言ふべく、或は有覺有觀なり、或は無覺有觀なり、或は無覺無觀なりと

【三】 心々觀意止と法々觀意止との相修關係。

以下四句分別せり。

因みに、發智は、此の項を、「受念住と法念住との如く、應に知るべし、心念住と法念住とも亦、爾ることを」とて省略せり。

【三】 本節は、四意止の(一)自性(智)分別、(二)有覺有觀等の地分別、(三)五受根相應分別、(四)行相即ち三三昧と俱なりやの分別(五)三界繫・不繫の何を緣するやの所緣分別の五門に互りて分別をなす段なり。

(婆沙一八九、毘曇部十六、頁二九七參照)。

【三】 身々觀意止の五門分別。
【三】 痛々觀意止の五門分別。

く、本得の心心觀意止が現在前するとき、是を心は修するも痛は非らずといふ。(三)云何んが痛と心とを修するや。答へて曰く、本不得の痛が現在前し、是の時心を修するを得るときと、本不得の心が現在前し、是の時、痛を修するを得るときと、若しくは本不得の身・本不得の法が現在前し是の時、痛痛觀意止と心々觀意止とを修するを得るときと、是を痛と心とを修するといふ。(四)云何んが痛を修するに非ず心をも非らずといふや。答へて曰く、本得の身・本得の法が現在前するときと、若しくは本不得の法法觀意止が現在前するも是の時痛痛觀意止と心心觀意止とを修するを得ざるときと、一切の染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧とに入れるときと、無想天には、痛痛觀意止を修するに非ず心心觀意止をも非らざるをもて、是を痛をも修するに非ず心をも非らずと謂ふなり。

三元 若し痛痛觀意止を修するとき、彼は法をも修するや。答へて曰く、或は痛を修するも法は非らざるあり。(一)云何んが痛は修するも法は非らざるや。答へて曰く、本得の痛痛觀意止の現在前するとき、是を痛を修するも法は非らずといふ。(二)云何んが法を修するも痛は非らずといふや。答へて曰く、本得の法法觀意止が現在前するときと、若しくは本不得の法法觀意止が現在前するも是の時痛痛觀意止を修するを得ざるときと、是を法を修するも痛は非らずといふ。(三)云何んが痛と法とを修するや。答へて曰く、本不得の痛が現在前し是の時法を修するを得るときと、本不得の法が現在前し是の時痛を修するを得るときと、本不得の身・本不得の心が現在前し是の時痛痛觀意止と法法觀意止とを修するを得るときと、是を痛と法とを修すといふ。(四)云何んが痛を修するに非ず法をも非らずといふや。答へて曰く、本得の身身觀意止、本得の心心觀意止が現在前するも是の時痛痛觀意止と法法觀意止とを修するを得ざるときと、一切の染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧とに入れるときと、無想天には、痛痛觀意止を修するに非ず法をも修するに非ざるをもて、是を痛を

【三六】 以下、發智は、「未得の身・受・心念住を現在前する時」といひて、此の八觸度の文よりも略述し、且つ、說順異れり。

【三九】 痛々觀意止と法々觀意止との相修關係。
以下四句分別せり。

【三〇】 以下、第三俱是句は、發智の文と說相說順異なるも意は同じ。

るときと、本不得の法法觀意止が現在前するも是の時身身觀意止も心心觀意止をも修することを得ざるときと、一切の染汚心・無記心とのときと、無想三昧・滅盡三昧に入れるときと、無想天には、身身觀意止を修するにも非ず、心をも修するに非ざるをもて、是を身も修するに非ず心をも非らずと謂ふ。

三、若し身身觀意止を修するとき、彼は法をも修するや。答へて曰く、或は身は修するも法は非らざるあり。(一)云何んが身を修するも法は非らざるや。答へて曰く、本得の身身觀意止が現在前するとき、是を身を修するも法は非らずといふ。(二)云何んが法は修するを身は非らずといふや。答へて曰く、本得の法法觀意止が現在前するときと、若しくは本不得の法法觀意止が現在前するも是の時、身身觀意止を修するを得ざるとき、若しくは本不得の痛と本不得の心とが現在前し、是の時、法法觀意止を修するを得るも身は非らざるるときと、是を法を修するも身は非らずと謂ふ。(三)云何んが身と法とを修するや。答へて曰く、本不得の身が現在前し是の時法を修するを得るときと、若しくは本不得の法が現在前し、是の時身を修するを得るときと、若しくは本不得の痛、本不得の心が現在前し、是の時、身身觀意止と法法觀意止とを修するを得るときと、是を身と法とを修するといふ。

(四)云何んが身を修するに非ず法をも非らずといふや。答へて曰く、本得の痛痛觀意止か本得の心心觀意止かが現在前するも是の時身身觀意止も法法觀意止をも修するを得ざるときと、一切の染汚心と無記心とのときと、無想三昧・滅盡三昧に入れるときと、無想天には、是を身身觀意止をも修するにも非ず法をも非らざるをもて、是を身も修するに非ず、法をも修するに非ずと謂ふなり。

三、若し痛痛觀意止を修するとき、彼は心をも修するや。答へて曰く、或は痛を修するも心は非らざるあり。(一)云何んが痛を修するも心は非らざるや。答へて曰く、本得の痛痛觀意止の現在前するとき、是を痛は修するも心は非らずといふ。(二)云何んが心は修するも痛は非らざるや。答へて曰

〔三〕 身々觀意止と法々觀意止との相修關係。
以下四句分別をなり。

〔三〕 痛々觀意止と心々觀意止との相修關係。
以下四句分別せり。

若しくは、本不得の法法觀意止が現在前するも、是の時、痛痛觀意止は修するも身は非らざるときと、是を痛は修するも身は非らずと謂ふ。(三)云何んが身と痛とを修するや。答へて曰く、本不得の身が現在前し、是の時痛を修するを得るときと、若しくは本不得の痛が現在前し、是の時身を修するを得るときと、若しくは本不得の心が現在前し、若しくは本不得の法が現在前して是の時、身痛痛觀意止を修することを得ると、是を身と痛とを修すといふなり。(四)云何んが身を修するにも非ず、痛も修するに非ざるものなりや。答へて曰く、本得の心、若しくは本得の法の現在前するときと、若しくは本不得の法法觀意止が現在前するも是の時身身觀意止と痛痛觀意止とを修するを得ざるときと、一切の染汚心と無記心のとときと、無想定滅盡定に入れるときと、無想天とには、身身觀意止を修するにも非ず、痛痛觀意止をも修するに非ざるをもて、是を身を修するにも非ず、痛を修するにも非ずと謂ふ。

二五 若し身身觀意止を修するとき、彼は心心觀意止をも修するや。答へて曰く、或は身を修するも心は非らざるあり。(一)云何んが身は修するも心は非らざるや。答へて曰く、本得の身身觀意止が現在前するとき、是を身を修するも心は非らずといふ。(二)云何んが心は修するも身は非らずといふや。答へて曰く、本得の心心觀意止が現在前するときと、若しくは本不得の心心觀意止が現在前するも是の時身身觀意止を修するを得ざるときと、若しくは本不得の痛、本不得の法を現在前し是の時、心心觀意止は修するを得るも、身は非らざるときと、是を心は修するも身は非らずといふ。(三)云何んが身も心も共に修するや。答へて曰く、本不得の身が現在前し、是の時心を修するを得るときと、若しくは本不得の心が現在前し是の時身を修するを得るときと、若しくは本不得の痛、本不得の法が現在前し、是の時、身身觀意止と心心觀意止とを修するを得るときと、是を身・心を修すと謂ふ。(四)云何んが身を修するに非ず心も非らざるや。答へて曰く、本得の痛、本得の法が現在前す

【二五】身々觀意止と心々觀意止との相修關係。

以下四句分別をなせり。
因みに、發智は、以下、註二六の開處に至る間の文を「身念住と受念住との如く、應に知るべし、身念住と心念住とも亦、關することを」として略述せり。

るや。

【一六】阿羅漢は當に善心にて般涅槃すと云ふべきや。當に無記心にて般涅槃すと云ふべきや。

【一七】何等を以ての故に、佛世尊より先に二弟子が般涅槃し、然る後に佛世尊が般涅槃せしや。

【一八】又、世尊の言く、「不移動三昧に入りて如來は般涅槃す」と。如來は入定して般涅槃せしや。

定より起ちて般涅槃せしや。

【一九】四有あり、本時有と死有と中有と生有となり。彼のうち云何んが本時有なりや。云何んが

死有なりや、云何んが中有なりや、云何んが生有なりや。

【二〇】諸の欲有の彼一切には五行ありや。設し五行なるもの彼の一切は欲有なりや。

【二一】諸の色有の無想天の彼一切には、五行有りや。設し五行有るもの彼の一切は、色の有想天なりや。

【二二】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【二三】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【二四】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【二五】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【二六】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【二七】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【二八】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【二九】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【三〇】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【三一】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【三二】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【三三】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【三四】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【三五】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【三六】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【三七】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【三八】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【三九】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

【四〇】諸の無色有の彼の一切には、四行有りや。設し四行有るもの彼の一切は無色有なりや。

第一節 四意止(念住)の相修論

【一】四意止あり。身身觀意止と痛痛觀意止と心心觀意止と法法觀意止となり。

【二】若し身身觀意止を修するときは、彼は痛痛觀意止をも修するや。答へて曰く、或は身を修するも、

痛は非らざるものあり。(一)云何んが身身觀意止は修するも、痛は非らざるや。答へて曰く、本得

の身身觀意止の現在前するとき、是を身は修するも痛は非らずといふ。(二)云何んが痛は修するも

身は非らざるや。答へて曰く、本得の痛痛觀意止が現在前するときと、若しくは本不得の痛痛觀意

止が現在前するも、是の時、身身觀意止を修するを得ざるるときと、若しくは本不得の心心觀意止、

若しくは本不得の法法觀意止を修するを得ざるるときと、若しくは本不得の法法觀意止、

若しくは本不得の法法觀意止を修するを得ざるるときと、若しくは本不得の法法觀意止、

【一六】 羅漢の般涅槃心に關する論題。
【一七】 舍利弗・目連が佛に先じて般涅槃せしに關する論題。
【一八】 佛は出定して般涅槃せしに關する論題。

【一九】 四有に關する論題。

【二〇】 欲有等の三有には五行ありやとの論題。

【二一】 本節は、四意止の習修得修を論述する段にして、

(一) 身々觀意止と痛々觀意止

(二) 身々觀意止と心々觀意止

(三) 身々觀意止と法々觀意止

(四) 痛々觀意止と心々觀意止

(五) 痛々觀意止と法々觀意止

(六) 心々觀意止と法々觀意止との相互相修の關係を明す段なり。

(婆沙一八九、毘曇部十六、頁二八八以下參照)。

【二二】 四意止の目目。

【二三】 身々觀意止と痛々觀意止との相修論。

以下四句分別をなせり。

【二四】 次下、大正本には、「現在前」の三字あるも、三本宮本及び發智によりて之を除去す。以下の(※)印は之に准ず。

二 (五)又、世尊の言く、「眼は色を縁として内結を生ず……」と。彼の比丘が實に彼の内結あるを、此の内結有りと如實に之を知り、實に彼の内結ならざるを此の内結無しと如實に之を知り、如し未生の内結なれば便ち生じ、已生のは便ち盡き、已盡のは便ち不生なりと、彼も亦、如實に之を知る、此の智は當に法智と言ふべきや、當に乃至道智と言ふべきや。

耳・鼻・舌・身につきても亦、是の如し。

意は法を縁として内貪欲を生ず。彼の比丘が、實に彼の内貪欲あるを、此の内貪欲有りと如實に之を知り、實に彼の内貪欲あらざるを此の内貪欲無しと如實に之を知り、如し未生の内貪欲なれば便ち生じ、已生のは便ち盡き、已盡のは不生なりと、彼も亦、如實に之を知る。此の智は當に法智と言ふべきや、當に乃至道智と言ふべきや。

瞋恚・睡眠・調戲・疑につきても亦、是の如し。

(六)内の念覺意を生ず。彼れ比丘が、實に彼の内の念覺意あるを、此の内の念覺意有りと如實に之を知り、實に内の念覺意にあらざるを此の内の念覺意無しと如實に之を知り、如し未生の内の念覺意は便ち生じ、已生のは便ち住し、忘れず退せず、益々廣く思惟を滿たしめて、此をも亦、如實に之と知る。此の智は當に法智と言ふべきや、當に乃至道智と言ふべきや。

法・精進・喜・猗・定・護覺意につきても亦、是の如し。

(七)又、世尊の言く、「彼は自ら、婬・瞋恚・愚癡の盛となるを觀すべし」と、彼れ云何んが婬・瞋恚・愚癡は盛となるや。

又、世尊の言く、「彼れ自ら婬・瞋恚・愚癡の薄らぐを觀すべし」と。彼れ云何んが婬・瞋恚・愚癡が薄らぐや。

二五 (八)云何んが死時痛なりや。何處を齊りて死時痛といふや。死時痛は何の入に攝し、幾く識が識

無きも、後文を参照して之を補正せり。

【九】無は大正本には有とあるも、三本・宮本には無とあるを以て、今は後者に據りて、無と訂正す。

【一〇】大正本には無解脫心とあるも、三本・宮本には、無の字無きが故に、今は後者に據りて、かく訂正す。

【一一】六内結乃至七覺意の有無等を如實に知る智に關する論題。

【一二】後の本文と說順・說相と異なる。本文には、「鼻舌は蓋の如し」とあり。

【一三】大正本に「彼は無きも、三本・宮本によりて、之を補へ

【一四】經(貪)・瞋恚・愚癡の盛(増減)を對するに就きての問題。

【一五】死時痛(死邊際受)に關する問題。

若し痛痛觀意止を修するとき、彼は法をも修するや。設し法を修するとき彼は痛をも修するや。若し心々觀意止を修するとき彼は法をも修するや、設し法を修するとき彼は心をも修するや。

【二】身身觀意止は、當に法智・未知智・知他人心智・等智・苦智・習智・盡智・道智と言ふべきや。當に無覺有觀と言ふべきや。當に無覺無觀と言ふべきや。當に樂根と相應すと言ふべきや。當に喜根・護根と相應すと言ふべきや。當に空・無願・無相と相應すと言ふべきや。當に欲界繫を緣すと言ふべきや。色・無色界繫を緣すと言ふべきや。當に不繫を緣すと言ふべきや。

痛痛觀・心々觀・法々觀意止につきても亦、是の如し。

【三】又、世尊の言く、「彼の樂痛を痛する時、樂痛を痛すと知る……」と。此の智は當に法智と言ふべきや。當に乃至道智と言ふべきや。苦痛を痛する時、苦痛を痛すと知り、不苦不樂痛を痛する時、不苦不樂痛を痛すと知る、此等の智は當に法智と言ふべきや。當に乃至道智と言ふべきや。

樂身・苦身・不苦不樂身・樂心・苦心・不苦不樂心、樂食・苦食・不苦不樂食、樂不食・苦不食・不苦不樂不食、依樂慧・依苦慧・依不苦不樂慧、依樂出要・依苦出要・依不苦不樂出要あり、乃至依不苦不樂出要痛を痛する時、不苦不樂出要痛と知る、此の智は當に法智と言ふべきや、當に乃至道智と言ふべきや。

【四】又、世尊の言く、「彼の有欲心を彼の有欲心と如實に之を知る」と。此の智は當に法智と言ふべきや、當に乃至道智と言ふべきや。

有欲・無欲、有瞋恚・無瞋恚、有愚癡・無愚癡、有染汚・無染汚、有亂・無亂、有怠・無怠、少・多、修・不修、定・不定、無解脫心あり。乃至無解脫心を無解脫心と如實に之を知り、解脫心を解脫心と如實に之を知る、此の智は當に法智と言ふべきや。當に乃至道智と言ふべきや。

佛、涅槃、出定、四有、三有行、此章頗具說」と。此の詳細に關しては、婆沙一八七、毘曇部十六、頁二五四、註を見よ。

【三】四意止(四念住)と、四意止の相修の論題。此の中、四意止の新舊兩譯語を示せば

八犍度 發智

四意止 四念住
一、身身觀意止 身念住
二、痛々觀意止 受念住
三、心々觀意止 心念住
四、法々觀意止 法念住

なり。以下、相修論中、身を修し乃至法を修すとの如きは、身々觀意止乃至法々觀意止を修すを略示せるもの。

【四】四意止の自住・地・相應・行相・所緣の五門分別問題。

【五】樂受・苦受・不苦不樂受等を如實に知る智に關する論題。

【六】大正本には、「知不苦不樂出要此痛智……」とあるも、聖乙本には、「知不苦不樂出要痛、此智……」とあり。法義上より見て、今は後者の如く、かく訂正す。

【七】有貪心乃至解脫心を知實に知る智に關する論題。

【八】有欲の二字は、諸本に

卷の第二十九 (第八編 見捷度)

第八編 見 論

(見捷度 第八)

見論總目次

意止と、欲と、想と、

緣智と、見と、

偈品は後に在り。

第一章 四意止(念住)等に關する論究

(一) 意止跋渠第一 (發智論卷第十九、大正・二六、一〇二二頁)

本章の内容目次

(一) 四意止あり、身々觀意止と痛痛觀意止と心心觀意止と法法觀意止となり。

若し身身觀意止を修するときは彼は痛痛觀意止をも修するや。設し痛々觀意止を修するときは、彼は身々觀意止をも修するや。

若し身身觀意止を修するときは、彼は心をも修するや。設し心々修するときは、彼は身をも修するや。若し身々觀意止を修するときは、彼は法をも修するや。設し法を修するときは彼は身をも修するや。若し痛痛觀意止を修するときは、彼は心をも修するや。設し心を修するときは彼は痛をも修するや。

第一章・四意止(念住)等に關する論究

七〇一

【一】 見捷度、即ち見蘊の凡ての跋渠即ち章品を今、發智のそれと對比せば次の如し。

八捷度 發智

一、意止跋渠——念住納息

二、欲跋渠——三有納息

三、想跋渠——想納息

四、智時跋渠——智納息

五、見跋渠——見納息

六、偈跋渠——伽他納息

因みに、婆沙は最後の偈跋渠即ち伽他納息の註釋を全然省略せり。

【二】 本章の目的は、次の内容目次の逐次に列承せる問題の論究にあるも、今参考の爲めに、此處に、發智の頌文を掲ぐべし。

「念住有ニ六門一

相貫知有ソハ

貪・瞋・癡・増・減

死受・涅槃心

弟子先・涅槃

を觀ずる時」と翻す。

【三五】是の上に大正本には無の字あるも、聖乙本には無きが故に、今はこれを除去す。

【三六】阿那含・斯陀含果には退有るも須陀洹果は不退なる所以。

【三七】不替・替は發智の無事・有事に當る。

【三八】我の上に、「無」の字あるも、前文より推斷してこは無しを善しとするを以て、今はこれを除去せり。

【三九】若の字は大正本には無きも、三本宮本には有り、故に、之を補正せり。

【四〇】本節は、上三果より退すとき得する所の五根・五力、

七覺意八道種の如き無漏法は、唯本、得せしものなることを明す段なり。

因み、婆沙に據れば、曾得の過去法・未來法を共に得することを顯示するなりと言ふ。

(婆沙一八六、毘曇部十六、頁二四三參照)。

【四一】本節は、(一)無色界より没して欲界に生ずる時、

(二)無色界より色界に生ずる時、(三)色界より欲界に生ずる時、得する所の諸法が本得(曾得)なりや本不得(未曾得)なりやを明にする段なり。

(婆沙一八六、毘曇部十六、頁二四三參照)。

【四二】無色界より欲界に生ずる時の諸法の本得・本不得分別。

【四三】垢は發智に隨煩惱と翻す。

【四四】無色界より欲界に生ずる時所得の法の本得・本不得分別。

【四五】色界より欲界に生ずる時所得の本得本不得分別。

【四六】大正本には、入陰とあるも三本・宮本に陰入とあるを以て、今はかく改む。

【四七】本節は、神足・徹聽智(天耳)・知他人心智・識宿命智(徹視智(天眼)の五通の勢力の及ぶ限界を四靜慮に配して明す段なり。

(婆沙一八六、毘曇部十六、頁二四五參照)。

【四八】苦を苦なりと意が所念する即ち思惟して、阿羅漢果定時なり。而して、この金剛喻定時に、苦を苦なりと意が所念するは苦智、習を習なりと意が所念するは習智、滅を思惟するは道智なり。

本節は、此等の諸智の所緣は、何の界繫の苦、乃至道なりやを明にする段なり。

(婆沙一八六、毘曇部十六、頁二四七參照)。

なり。

若し初禪に依りて徹聽智證通修道を修するとき、彼は能く何の繫を齎りて耳が聲を聞くや。答へて曰く、梵天上の繫のを聞くなり。

若し初禪に依りて知他人心智證通修道を修するとき、彼は能く何の繫を齎りて、他人の心法を知るや。答へて曰く、梵天上の繫のなり。

若し初禪に依りて自識宿命智證通修道を修するとき、彼は能く何の繫を齎りて自ら宿命を識るや。答へて曰く、梵天上の繫のなり。

若し初禪に依りて徹視智證通修道を修するとき、彼は能く何の繫を齎りて眼が色を見るや。答へて曰く、梵天上の繫のなり。

初禪に依るが如く、第二禪によれば光音繫に、第三禪によれば遍淨繫に、第四禪によれば果實繫に至るなり。

第二十三節 金剛喻定時の六智の所縁の界繫分別

若し苦を苦なりと意が所念して阿羅漢果に逮ぶとき、彼は何の繫の苦を苦なりと意が所念して阿羅漢果に逮ぶや。答へて曰く、無色界繫のなり。

若し盡を盡なりと意が所念して阿羅漢果に逮ぶとき、彼は何の繫の盡を盡なりと意が所念して阿羅漢果に逮ぶや。答へて曰く、或は欲界繫の、或は色界繫の、或は無色界繫のなり。

若し道を道なりと意が所念して阿羅漢果に逮ぶとき、彼は何の繫の行を斷ずる道を道なりと意が所念して阿羅漢果に逮ぶや。答へて曰く、或は欲界繫のなり、或は色・無色界繫のなり。

阿毘曇一行跋藁第五竟り
定機度第七竟り

段なり。

〔婆沙一八六、毘曇部十六、頁二三五參照〕。

〔三三〕本節は、凡夫人の斷結に退あり。退する時見諦斷と

思惟斷との結を還つて得するに、は尊の弟子即ち聖者には、退あり、不退あり、退するものは、思惟斷の結を還つて得するも見諦斷のは得せざる所以を明す段なり。

因みに婆沙は、此は退性の實有性を顯示せんが爲めに論起せしなりと言ふ。

〔婆沙一八六、毘曇部十六、頁二三八參照〕。

〔三三〕發智には「思惟斷」の一

句なし。

〔三三〕本節は、阿羅漢果・阿

那含果・斯陀含果には退あるも、須陀洹果には退無き所以を明す段なり。

本論、提出の所以は、大乘部の預流果にも退ありとの主張を破せんが爲めなりとは婆沙の解釋なり。

〔婆沙一八六、毘曇部十六、頁二四二參照〕。

〔三三〕羅漢果には退有るも、須陀洹果は不退なる所以。

〔三三〕無特有誓は、發智は之を無事有事と調ず。

〔三三〕「淨想が不順にて意の所念の不順なるとき」とは發智は「非理作意に由りて淨相

て意の所念が不順なるとき、不淨想より退するなり。彼の見諦斷法には、一法の、若しくは一三九我なり、若しくは是れ我なりとて諸の彼を我なりと取すべきものありて無我見より退すべきもの無きなり。

一四〇第二十節 上三果を退する時、得する無漏法は唯、本得(曾得)なるに就きて

阿羅漢果より退するとき、諸の得する無漏の根・力・覺・道種は、當に本得を得すと言ふべきや、當に本不得を得すと言ふべきや。答へて曰く、當に本得を得すと言ふべし。

阿那含果・斯陀含果より退するとき、諸の得する無漏の根・力・覺・道種は、當に本得を得すと言ふべきや、當に本不得を得すと言ふべきや。答へて曰く、當に本得を得すと言ふべきなり。

一四一第二十一節 上界より下界に生ずる時、得する法の本得・本不得分別

一四二無色界より没して欲界に生ずるとき、諸の得する持・陰・入・四大、善根・不善根・無記根、結・縛・使・垢・纏は、當に本得を得すと言ふべきや、當に本不得を得すと言ふべきや。答へて曰く、善、若しくは染汚は、當に本得を得すと言ふべきも、報は當に本不得を得すと言ふべし。

一四三無色界より没して色界に生ずるとき、諸の得する持・陰・入・四大、善根・無記根、結・縛・使・垢・纏は、當に本得を得すと言ふべきや、當に本不得を得すと言ふべきや。答へて曰く、善、若しくは染汚は、當に本得を得すと言ふべきも、報は當に本不得を得すと言ふべきなり。

一四五色界より没して欲界に生ずるとき、諸の得する持・陰・入・四大、善根・不善根・無記根、結・縛・使・垢・纏は當に本得を得すと言ふべきや、當に本不得を得すと言ふべきや。答へて曰く、善、若しくは染汚は當に本得を得すと言ふべきも、報は當に本不得を得すと言ふべきなり。

一四七第二十二節 五通の能力の限界に關する論究

若し初禪に依りて神足智證通修道を修するとき、彼の齋は能く幾所に至るや。答へて曰く、梵天

(婆沙一八六、毘曇部十六、頁二三〇參照)。

【二八】覺意の成就者は無漏法もなりや。

【二九】覺意の不成就者は無漏法きもなりや。

【三〇】覺意を得する者は無漏法きもなりや。

【三一】覺意と無漏法とを棄つるものありや。

【三二】覺意と無漏法とを退するものありや。

【三三】本節は

(一)不盡即ち煩惱の未斷と不知(未通知)との關係、

(二)盡(已斷)と知(已通知)との關係、

とを明にする段なり。

(婆沙一八六、毘曇部十六、頁二三二參照)。

【三四】不盡と不知との關係。

【三五】盡にて已知なるも、斷知にて盡に非ず」とは發智

は之を「智通知の故に已通知なるも、斷通知の故に已斷に非ず」とと據せり。

【三六】盡と知との關係。

【三七】大正本に智とあるも前の用語例に準じて知とせり。

【三八】本節は、生れながらの盲者及び聾者は、天眼・天耳を起すに加行して必要なる色又は聲を聞くこと能はざるに、彼等は如何にして天眼・天耳を起し得るやを論究する

二二八 第十七節 生盲・生聾者が天眼・天耳を起すに就きて

諸の此の生眼に於て本、色を見ざるもの彼が後に天眼を辨ずるに、彼は何等に依りて天眼を辨ずるや。答へて曰く、猶し一の性ひとり、よちたつ、自ら宿命を識るものあり、彼は本、餘の生眼にて色を見しに於て彼に依りて天眼を辨ずるが如し。

耳に於ける聲につきても亦、是の如し。

二二九 第十八節 凡夫人と聖者との退・不退に關する論究

何等を以ての故に、凡夫人は退するるとき、見諦斷と思惟斷との結を還つて得するに、世尊の弟子は思惟斷のみを得するや。答へて曰く、凡夫人の道の見諦斷の結を滅するに用ふ可き所のもの、彼は思惟斷の結をも滅す。彼の道を退するをもて、彼の結の繫を得するなり。世尊の弟子は餘の道を以て見諦斷の結を滅し、餘の道にて思惟斷の結を滅す。彼が道の見諦斷の結を滅するに用ふ可き所のもの、彼の道に於ては不退なり。道の思惟斷の結を滅するに用ふ可き所のもの、彼に於ては或は退あり、或は不退あり。彼の世尊の弟子にして、道の見諦見諦・思惟斷の結を滅するに用ふ可き所のもの、彼の道もて思惟斷の結を滅するものなれば、彼の道は不退なり。

二三〇 第十九節 上三果の有退と須陀洹果の不退とに關する論究

何等を以ての故に阿羅漢果は退するに、須陀洹果は非らざるや。答へて曰く、見諦斷の法は、無替なり、思惟斷の法は有替なり。彼の思惟斷法に有淨想あり無淨想あり。彼の淨想淨想が不順にして意の所念の不順なるとき、無淨想にて退す。彼の見諦斷法には一法の、若しくは我なり、若しくは是れ我なりと、諸の彼を我と取すべきものありて無我見より退すべきものあること無きなり。何等を以ての故に、阿那含・斯陀含果は退するに、然も須陀洹果は非らざるや。答へて曰く、見諦斷法は、不替なるに、思惟斷法は替なり。彼の思惟斷法には有淨想あり不淨想あり。彼が不順にし

(四) 性定者と覺意の成就との關係を夫々論究する段なり。

(婆沙一八六、毘婆沙部十六、頁二二六參照)。

因みに、此の中、無明實と無明語とは發智に、非聰慧と無明語とし、明實と明語とを總慧と明趣と稱ぜり。

【二三】 性不定者と無明實、無明語との關係。

【二四】 性定者と、明實・明語との關係。

【二五】 性不定者と覺意不成就との關係。

【二六】 性定者と覺意成就との關係。

【二七】 本節は

(一) 覺意を成就する者は、無漏法をもなりや。

(二) 覺意を成就せざるものは、無漏法をもなりや。

(三) 覺意を得する者は無漏をもなりや。

(四) 覺意を棄つるものは、無漏をもなりや。

(五) 覺意を退するものは、無漏法をもなりや。

を論究する段なり。

而して此の論題の起りし所以は、無漏法には聖道の如く有爲なる而非淨滅の如く無爲なる

とあり、有爲の無漏法のみ覺意の如く、不成就・非得あるも無爲無漏は非らざること

を顯示せんが爲めなり。

第二十五節 覺意(覺支)と無漏法との成就・不成就及び得・棄・捨に關する論究

二〇八 若し覺意を成就するもの、彼は無漏法を成就するや。答へて曰く、是の如し。諸の覺意を成就するもの、彼は無漏法を成就するなり。

二〇九 頗し無漏法を成就するも、覺意は非らざるものありや。答へて曰く、有り、凡夫人なり。

二一〇 若し覺意を成就せざるものにして、彼は無漏法をも成就せざるものありや。答へて曰く、無漏法を成就せざるもの有ること無きも、覺意を成就せざるもの有り。凡夫人なり。

二一一 若し覺意を得するもの彼は無漏法を得するや。答へて曰く、是の如し。若し覺意を得するものなれば彼は無漏法を得するなり。

二一二 頗し無漏法を得するも覺意は非らざるものありや。答へて曰く、有り。凡夫人なり。

二一三 若し覺意を棄つるもの彼は無漏法をも棄つるや。答へて曰く、無漏法を棄つるものあること無く覺意を盡く棄つるものも有ること無し。

二一四 若し覺意を退すれば、彼は無漏法をも退するや。答へて曰く、無漏法を退するもの有ること無く覺意を盡く退するものも有ること無きなり。

第二十六節 不盡(未斷)・盡(已斷)と不知(未遍知)・知(已遍知)との關係

二一五 若し不盡なれば、彼は不知なりや。答へて曰く、是の如し。諸の不知なるものは彼は不盡なり。

二一六 頗し不盡なるも彼は不知に非ざるものありや。答へて曰く、有り、^{二一五} 諸知にて已知なるも、斷知にて盡に非ざるものなり。

二一七 諸の盡なるもの、彼は知なりや。答へて曰く、是の如し。諸の盡なるもの彼は知なり。

二一八 頗し知にして盡に非ざるものありや。答へて曰く、有り。諸知にて已知なるも、斷^{二一七} 知にて盡に非ざるものなり。

其の煩惱を繋ずることを明す段なり。婆沙に據るに、本節を論起せし所以は、契經に「七依定に依りて能く漏盡す」と言ひ、有頂地に依る漏盡を説がざるが故に、有頂に生ぜし聖者は何に依りて漏盡するやを疑ふものがあるが故に、本論に由りて其の疑を決し、次に、

「有頂の聖者は命終する時、煩惱と業と命とが俱に盡くも聖道に由らず」と主張する分別論者の意を止め、漏盡は必ず聖道に由ることを顯示せんが爲めなりと言ふ。

【一】婆沙一八五、毘曇部十六、頁二二二參照。

【二】想三昧とは四禪と下三無色を指し、有想無想定と簡ぶなり。

【三】本節は、毘奈耶に、目犍連が、不用處定(無所有處)に住して龍の哮吼を聞けりと説くを會通し、入定中には聲を聞かず必ず出定して聞くべきことを明す段なり。

【四】婆沙一八五、毘曇部十六、頁二二三參照。

【五】性不定者と無明實・無明語との關係。

【六】性定者と明實・明語との關係。

【七】性不定者と覺意の不成就との關係。

なり。

第二十三節 入定者は聲を聞かざる事に就きて

又、尊者大目犍連の言く、「我れ自ら憶す、諸賢よ、かつて耆闍崛山の禪湖池側にて不用定に入れるとき、衆多の龍象有り擎鼻して哮吼せしにその聲を聞けることを」と。尊者大目犍連は定に入りて聲を聞きしや、定より起ちて聞きしや。答へて曰く、尊者大目犍連は定より起ちて聲を聞きしも、定に入りてには非ず。

第二十四節 性決定者と性不定者とに關する論究

一、諸の不定なるもの彼の一切は、無明實にして無明語なりや。答へて曰く、是の如し。諸の不定なるもの彼の一切は、無明實にして無明語なり。

二、頗し無明實にして無明語なるもの、彼に不定に非ざるものありや。答へて曰く、有り、性邪定なるものなり。

三、諸の定なるもの彼の一切は、明實にして明語なりや。答へて曰く、是の如し。諸の明實にして明語なるもの彼の一切は定なり。

四、頗し定なるもの彼に明實にして明語に非ざるものありや。答へて曰く、有り、邪定なるものなり。

五、諸の不定なるもの彼の一切は覺意を成就せざるものなりや。答へて曰く、是の如し。諸の不定なるもの彼の一切は覺意を成就せざるなり。

六、頗し覺意を成就せざるもの、彼に不定に非ざるものありや。答へて曰く、有り、邪定なり。

七、諸の定なるもの彼の一切は覺意を成就するや。答へて曰く、是の如し。諸の覺意を成就する彼の一切は定なり。

八、頗し定なるもの、彼に覺意を成就するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。邪定なるものなり。

とは、發智にては、夫々、僧身觀念住、僧受觀念住、僧心觀念住、僧法觀念住なり。

【二六】本節は、無漏の初禪の樂及び無漏の第二禪の樂と、猗覺意即ち輕安覺支との同異を明にする段なり。

此の中、無漏の初二禪の樂とは、大善地法中の輕安を自性し、輕安覺支と同一にして、受を自性とする無漏の樂根の意に非ず。故に、婆沙は、本論に由りて初二靜慮に無漏の樂根ありと主張するもの意を述し、無漏の樂根は初二禪には無きことを顯さんが爲めに論起せしものと言ふ。

(婆沙一八五、毘曇部十六、頁二一八參照)。

【二七】本節は三昧(定)より出づる時は、所緣も出づるや、否やを論究する段なり。而も、三昧より出づると、所緣より出づると、寛狭同じからざるが故に、以下四句分別をなせり。

(婆沙一八五、毘曇部十六、頁二一九參照)。

【二八】大正本には、「節なきも、三本、宮本によりて之を補へり。

【二九】本節は、無漏道無き有頂即ち有想無想(非想非非想)處に生れし聖者は、不用處即ち無漏の無所有處定によりて

盡智は當に 身々觀意止と言ふべきや。答へて曰く、盡智は、或は彼の身々觀意止なり、或は痛
痛觀意止・心々觀意止・法々觀意止なり。

無生智も亦、是の如し。

第十節 無漏の初二禪の樂と捨(輕安)覺意との無差別に就きて

諸の無漏の初禪の樂と、諸の猗覺意と、此に何の差別ありや。答へて曰く、差別無きなり。
諸の無漏の第二禪の樂と、諸の猗覺意と、此に何の差別ありや。答へて曰く、差別無きなり。

第十一節 三昧より起つ所緣よりも起つや否やの論究

三昧より起つとき彼は所緣よりも起つや。答へて曰く、或は三昧より起つも緣よりには非ざるもの
のあり。(一)云何んが三昧より起つも緣よりに非ざるものなりや。答へて曰く、猶し一有りて、諸
想を意が所念して初禪に入り、彼は復その想を意の所念として第二禪に入るが如し。是を三昧より
起つも緣よりには非ずと謂ふ。(二)云何んが緣より起つも三昧よりに非ざるや。答へて曰く、猶し
一有り、諸想を意の所念として初禪に入り、彼は其の如き定にて、餘の第二の想を意の所念とす
るが如し。是を緣より起つも三昧よりに非ずといふ。(三)云何んが、三昧よりも起ち緣よりも起つ
や。答へて曰く、猶し一有り、諸想を意の所念として初禪に入り、彼は餘の第二想を意の所念して
第二禪に入るが如し。是を三昧よりも起ち緣よりも起つといふ。(四)云何んが三昧よりも起つに非
ず緣よりも起つに非ざるものなりや。答へて曰く、猶し一有り、諸想を意の所念として初禪に入り
彼は其の如き定に久住するが如し。是を三昧より起つにも非ず、緣より起つにも非ずといふ。

第十二節 有頂の聖者は不用處(無所有處)定に依りて羅漢果を得するに就きて

又、世尊の言く、「所謂 想三昧により是に齋りて教を得す」と。若し世尊の弟子にして有想無想
處に生ずるものなれば、彼は何等に依りて、阿羅漢果に逮ぶや。答へて曰く、無漏の不用定による

二一四以下参照のこと。

【一〇】越次取證する(正性離生に入る)意の所念(作意)に就きて。

婆沙に據るに、本問題提起の因由は、「三三摩地の隨一によりて皆能く正性離生入る」との
有説及び「唯無相三摩地によりてのみ能く正性離生に入る」と主張する達摩迦多

(Dharmaguptaka) 即ち法藏部の主張を遮止し、空と無願との二三摩地の隨一にて正性離生に入ることを得るも、無相によりてのみは入ること能はずと言ふの義を顯示せんが爲めなりと言ふ。

此の中、無常と苦とは即ち無願三摩地と相應し、空と無我とは空三摩地と相應することを顯はすなり。

【一〇三】何の繫の行を所緣として越次取證するやに就きて。本論題提起緣由は、婆沙に據るに、頓に三界繫の行を思惟して正性離生に入るとの法救の主張、及び、涅槃を推思して正性離生に入るとの有説を遮止せんが爲めなりと言ふ。

【一〇四】本節は、盡智・無生智の二智は、見の性には非ざるも、念住の性なることを顯示するなり。

【一〇五】身々觀意止、痛々觀意止、心心觀意止、法々觀意止

第七節 三三昧の滅する結に關する論究

九三 頗し結にして空の滅するものなるも、無願の滅するにも非ず無相の滅するにも非ざるものありや。答へて曰く、空のみの滅するもの不す。

九四 無願の滅するものにして空の滅するにも非ず、無相の滅するにも非ざるものありや。答へて曰く、

九五 無願のみの滅するものあり、諸結の習諦斷なると道諦斷なるとは無願のみの斷なればなり。

九六 無相の滅するものにして空の滅するにも非ず無願の滅するにも非ざるものありや。答へて曰く、

九七 無相のみの滅するものあり。諸結の盡諦斷なるは、無相のみの斷なればなり。

九八 空と無願との滅するものなるも無相の滅するには非ざるものありや。答へて曰く、滅するものあり。諸結の苦諦斷なるは空と無願との滅するものなればなり。

九九 空と無相との滅するものなるも無願の滅するに非ざるものありや。答へて曰く、空と無相との滅するもの不す。

一〇〇 無願と無相との滅するものにして空の滅するに非ざるものありや。答へて曰く、滅するもの不す。

一〇一 空と無願と無相との滅するものありや。答へて曰く、滅するものあり。諸結の學見跡のものは思惟滅なればなり。

一〇二 頗し諸結の空の滅するに非ず無願の滅するに非ず無相の滅するにも非ずして而も滅せらるる結ありや。答へて曰く、滅せらるるものあり。諸結にして凡夫人の滅するものなり。

一〇三 云何に意が所念して越次取證するや。答へて曰く、無常・苦・空・無我なり。

一〇四 何繋の行を意が所念して越次取證するや。答へて曰く、欲界繋の行なり。

一〇五 第九節 畫智と無生智との意止(念住)に就きて

一〇六 第八節 越次取證(正性離生に入る)時の意の所念(作意)等に就きて

一〇七 云何に意が所念して越次取證するや。答へて曰く、無常・苦・空・無我なり。

一〇八 何繋の行を意が所念して越次取證するや。答へて曰く、欲界繋の行なり。

一〇九 第九節 畫智と無生智との意止(念住)に就きて

【三二】本節は、空又は無願又は無相のみに依りて斷滅さるる結ありや、空と無願、空と無相、無願と無相のみに依りて斷滅さる結ありや、空・無願・無相の三三昧に依りて斷滅さるものありや三三昧の所斷ならずして斷滅する結ありや。其等は云何んを明にする段なり。

【三三】空のみの所斷の結無し。

【三四】無願のみの所斷の結。

【三五】無相のみの所斷の結。

【三六】空と無願との所斷の結。

【三七】空と無相とのみの所斷の結なし。

【三八】無願と無相との所斷の結もなし。

【三九】三三昧所斷の結。

【四〇】三三昧の所斷に非ずして斷滅さる結。

【四一】本節は、(一)越次取證する即ち正性離生に入る時、如何に意が所念して作意して越次取證するや、(二)其の意が所念する所縁は何の界繋の行なりやを明にせんとする段なり。

(婆沙一八五、毘婆沙部十六、頁

(四)云何んが空を修するに非ず無相を修するにも非ざるや。答へて曰く、若しくは本得、若しくは本不得の無願三昧が現在前し、若しくは本得の世俗智、若しくは本不得の世俗智が現在前する是の時、空・無相三昧を修することを得ざるるときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・減盡三昧に入るときと、無想天とは、空三昧を修するにも非ず無相をも修するに非ざるをもて、是を空を修するにも非ず無相も非らずと謂ふなり。

九一
若し無願三昧を修するものなれば、彼は無相をも修するや。答へて曰く、或は無願を修するも無相は非らざるあり。(一)云何んが無願を修するも無相は非らざるものなりや。答へて曰く、本得の無願三昧が現在前するるときと、若しくは本不得の無願三昧が現在前するも是の時、無相三昧を修するを得ざるるときと、若しくは本不得の空三昧が現在前し是の時、無願三昧を修するを得るも無相は非らざるるときと、是を無願を修するも無相は非らずといふ。(二)云何んが無相を修するも無願は非らざるや。答へて曰く、本得の無相三昧が現在前するるときと、若しくは本不得の無相三昧が現在前するも是の時、無願三昧を修するを得ざるるときと、是を無相を修するも無願は非らずといふ。(三)云何んが無願と無相とを修するや。答へて曰く、本不得の無願三昧が現在前し是の時、無相三昧を修することを得るるときと、若しくは本不得の無相三昧を現在前し是の時、無願三昧を修するを得るときと、若しくは本不得の空、若しくは本不得の世俗智を現在前し是の時、無願・無相三昧を修するを得るときと、是を無願と無相とを修すといふ。(四)云何んが無願と無相とを修するに非ざるや。答へて曰く本得の空三昧を現在前するるときと、本得の世俗智、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時無願・無相三昧を修するを得ざるるときと、一切の凡夫人と、染汚心と無記心のときと、無相三昧・減盡三昧に入れるるときと、無想天とは、無願三昧をも修するに非ず無相をも修するに非ざるをもて、是を無願と無相とを修するに非ずといふなり。

進道のもの修する場合とあり。本得のものを現在前するときは原則としては、未來修(得修)なく、本不得のものを現在前する時は自法のみならず餘の功德・智等の諸法を未來修として得することあり。而も本不得のものを現在前する時と雖も、特に或る法を修せざることあり。此の故に、空と無願との相修關係に於ても四句分別をなすなり。以下、相修關係に於ける四句分別は、之に準じて推知すべし。

【八七】「得」の字は、大正本には無きも、三本宮本に在り、前來も斯る場合に此の字あるを恒とするを以て、今は之を補へり。

【八八】空と無相との相修關係以下四句分別をなせり。

【八九】無願と無相との相修關係。これも亦以下四句分別せり。

答へて曰く、本得の無願三昧が現在前するときと、若しくは本不得の無願三昧が現在前するも、是の時空三昧を修するを得ざるるときと、是を無願を修するも空は非らずといふ。(三)云何んが空と無願とを修するや。答へて曰く、本不得の空三昧が現在前する是の時無願三昧を修するを得るときと、若しくは本不得の無願三昧が現在前する是の時空三昧を修するを得るときと、若しくは本不得の無相、若しくは本不得の世俗智が現在前する是の時、空・無願三昧を修するを得るときと、是を空と無願とを修すといふ。(四)云何んが空も無願をも修するに非ざるや。答へて曰く、若しくは本得の、若しくは本不得の無相三昧が現在前し、若しくは本得の世俗智、若しくは本不得の世俗智が現在前する是の時、空・無願三昧を修するに非ざるるときと、一切凡人と染汚心と無記心のとときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天とは、空三昧を修せず無願も非らざるをもて、是を空を修するにも非ず、無願を修するにも非ずといふ。

若し空三昧を修するものなれば、彼は無相をも修するや。答へて曰く、或は空を修するも無相は非らざるあり。(一)云何んが空は修するも無相は非らざるや。答へて曰く、本得の空三昧が現在前するときと、若しくは本不得の空三昧が現在前するに、是の時無相三昧を修するを得ざるるときと、若しくは本不得の無願三昧が現在前し是の時空三昧を修するを得るも無相は非らざるるときと、是を空を修するも無相は非らずといふ。(二)云何んが無相を修するも空は非らざるや。答へて曰く、本得の無相三昧が現在前するときと、若しくは本不得の無相三昧が現在前する是の時、空三昧を修することを得ざるるときと、是を無相を修するも空は非らずと謂ふ。(三)云何んが空と無相とを修するや。答へて曰く、本不得の空三昧が現在前し是の時無相三昧を修することを得るときと、若しくは本不得の無相三昧が現在前し、是の時、空三昧を修するを得るときと、若しくは本不得の無願、若しくは本不得の世俗智が現在前し、是の時空・無相三昧を修するを得るときと、是を空・無相を修すといふ。

(七)過去空・無願—過・未・現

無相、

但し、この大七句の形式としての詳細は、婆沙九、(毘婆沙部九、頁三五八)参照のこと。

【八】 次下に「一也」との夾註あり。

【九】 次下に「二也」との夾註あり。

【一〇】 次下に「三也」との夾註あり。

【一一】 次下に「四也」との夾註あり。

【一二】 次下に「五也」との夾註あり。

【一三】 次下に「六也」との夾註あり。

【一四】 次下に「七無相七竟り」との夾註あり。

【一五】 本節は、空と無願と、空と無相と、無願と無相との相修關係を特に習修(現在修)と得修(未來修)との二修の義に於て明にする段なり。因みに婆沙二、據るに、本節論起の緣由は、過未二世の實有及び未來修の實有を顯示せんが爲めなりと言ふ。

(婆沙一八五、毘婆沙十六、頁二二、〇五以下參照)。

【一六】 空と無願との相修關係、空と無願と等を修するに、本得(即ち已得)のものを修する時と、本不得(未得)の即ち勝

未來の無相は成就するも、現在の非らざるものなりや。答へて曰く、若し空・無相三昧は盡きて失せざるも、又、彼は無相三昧を現在前せずんば、是を過去の空及び過去・未來の無相を成就するも現在の非らずといふ。(四)云何んが過去の空及び未來・現在の無相を成就するも、過去の非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せず、又、彼は無相三昧を現在前するも、盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば、是を過去の空及び未來・現在の無相を成就するも、過去の非らざるものといふ。(五)云何んが過去の空及び過去・未來・現在の無相を成就するものなりや。答へて曰く、若し空・無相三昧が盡きして失せず、又、彼が無相三昧を現在前すれば、是を過去の空及び過去・未來・現在の無相を成就するものといふ。

設し過去・未來・現在の無相を成就するものなれば、彼は過去の空を成就するものなりや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるが設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

空につきての如く、無相と無願との小七句も亦、爾り。

第五節 三三昧の成就に關する大七句問答

過去の空と、過去の無願とを(1)過去の無相、(2)未來の無相、(3)現在の無相、(4)過去・現在の無相、(5)未來・現在の無相、(6)過去・未來の無相、(7)過去・未來・現在の無相に對するとき大の七句問答を作すなり。

第六節 三三昧の相修關係に就きて

若し空三昧を修するものなれば、彼は無願をも修するや。答へて曰く、或は空は修するも無願は非らざるあり。(一)云何んが空は修するも無願は非らざるや。答へて曰く、本得の空三昧の現在前するとき、是を空を修するも無願は非らずといふ。(二)云何んが無願は修するも空は非らざるや。

【七】 次下に「空・無相の七竟り」の夾註あり。
 【七〇】 無相と無願との小七句問答。
 【七〇】 本節は、空・無願・無相の成就關係を大七句問答によりて明にせんとするものなるも、其の大綱のみを示して詳説せず。依りて今、其の大七句問答の一の論式を掲げ置くべし。
 (一)過去空・無願—過去無相
 (二)過去空・無願—未來無相
 (三)過去空・無願—現在無相
 (四)過去空・無願—過・現無相
 (五)過去空・無願—未・現無相
 (六)過去空・無願—過・未無相

し空三昧が盡きて失せざるも、又、彼が無相三昧を得せざれば、是を過去の空を成就するも、過去・未來の無相は非らざるものといふ。(二)云何んが過去の空及び未來の無相を成就するも過去の無相は非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せず、又、彼は無相三昧を得するも、盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するものかなれば、是を過去の空及び未來の無相を成就するものな過去の非らざるものといふ。(三)云何んが過去の空及び過去・未來の無相をも成就するものなりや。答へて曰く、若し空・無相三昧が盡きて失せざれば、是を過去の空及び過去・未來の無相をも成就するものといふ。

設し、過去・未來の無相を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失すれば則ち成就せず。

(7)若し過去の空を成就すれば、彼は過去・未來・現在の無相をも成就するや。答へて曰く、(一)或は過去の空を成就するも過去・未來・現在の無相は非らざるものあり、(二)及び未來の無相をも成就するも過去・現在の無相は非らざるものあり、(三)及び過去・未來の無相をも成就するも、現在の非らざるものあり、(四)及び未來・現在の無相は成就するも過去の非らざるものあり、(五)及び過去・未來・現在の無相をも成就するものあり。

(一)云何んが過去の空を成就するも、過去・未來・現在の無相は非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せず、又、彼は無相三昧を得せずんば、是を過去の空を成就するも、過去・未來・現在の無相は非らざるものといふ。(二)云何んが過去の空及び未來の無相は成就するも、過去の無相は非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せず、又、彼は無相三昧をも得するも盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかにして、亦、現在前せずんば、是を過去の空及び未來の無相を成就するも過去・現在の無相は非らざるものといふ。(三)云何んが過去の空及び過去・

【七〇】 次下は大正本には「亦不在前」とあるも、三本・宮本・聖本・聖乙本に無きを以て今は之を除く。

【七一】 大正本には次下に、「非現在の三字あるも三本・宮本・聖本・聖乙本には無きが故に、今之を除く。」

【七二】 大正本には、次下に、「又、彼無相三昧不在前」の十字在るも、三本・宮本・聖本・聖乙本には共に無きが故に、今は之を除く。

【七三】 次下に、大正本には、「非現在の三字あるも、三本・宮本・聖本・聖乙本には之を缺くが故に、今こゝには之を除く。」

【七四】 過去空と過去・未來・現在無相との成就關係。
これ第七句なり。

【七五】 發智にては次の「未來・現在の無相は成就するも過去の非らざる」の文がこゝにあり。八難度と說順前後せり。

【七六】 發智にては、次の「過去の空と過去・未來の無相とが成就するも……」の一文がこゝにありて、八難度と說順前後せり。

設し過去・現在の無相を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。

(5) 若し過去の空を成就するものなれば、彼は未來・現在の無相をも成就するや。答へて曰く、(一) 或は過去の空は成就するも、未來・現在の無相は非らざるあり、(二) 及び未來の無相をも成就するも現在の非らざるあり、(三) 及び未來・現在の無相をも成就するあり。

(一) 云何んが過去の空を成就するも未來・現在の無相は非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せざるも、又、彼の無相三昧を得せざるものなれば、是を過去の空を成就するも未來・現在の無相は非らずと謂ふ。(二) 云何んが過去の空及び未來の無相を成就するも現在の無相は非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せず、又、彼の無相三昧を得するも現在前せざれば、是を過去の空及び未來の無相を成就するも現在のは非らずといふ。(三) 云何んが過去の空及び未來・現在の無相を成就するものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せず、又、彼の無相三昧が現在前すれば、是を過去の空及び未來・現在の無相を成就するものといふなり。

設し未來・現在の無相を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

(6) 若し過去の空を成就するものなれば、彼は過去・未來の無相を成就するや。答へて曰く、(一) 或は過去の空を成就するも過去・未來の無相は非らざるあり、(二) 及び未來の無相をも成就するも過去の非らざるあり、(三) 及び過去・未來の無相をも成就するものあり。

(一) 云何んが過去の空は成就するも、過去・未來の無相は非らざるものなりや。答へて曰く、若

【六四】 過去空と未來・現在の無相との成就關係。これ第五句なり。

【六五】 過去空と過去・未來の無相との成就關係。これ第六句なり。

【六六】 大正本には、未來の下に「現在」の二字あるも、三本宮本には無く、且つ法相上よりも無きをよしとするが故に今、之を除去せり。以下(※)印は之に準ず。

【六七】 大正本には、過去の下に現在とあるも三本・宮本には無きが故に之を除去す。

【六八】 大正本には、次下に、「非現在、及未來・現在非過去及過去・未來・現在」の十八字あるも三本・宮本・聖語本・聖語乙本には皆、之を缺く。法相上も除去すべきを以て、今は之を省けり。

【六九】 次下に、「現在」の二字あるも三本・宮本・聖語乙本には無きを以て、之を除去す。以下(※)印は之に準ず。

失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

(3) 若し過去の空を成就するものなれば、彼は現在の無相をも成就するや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。

設し現在の無相を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

(4) 若し過去の空を成就するものなれば、彼は過去・現在の無相をも成就するや。答へて曰く、(一) 或は過去の空を成就するも、過去・現在の無相を成就するに非ざるものあり、(二) 及び過去の無相をも成就するも、現在のは非らざるものあり、(三) 及び現在の無相をも成就するも過去の非らざるものあり、(四) 及び過去・現在の無相をも成就するものあり。

(一)云何んが過去の空を成就するも過去・現在の無相は非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せざるも、又、彼の無相三昧が盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかにして亦、現在前せずんば、是を過去の空を成就するも、過去・現在の無相は非らざるものといふ。(二)云何んが過去の空及び過去の無相をも成就するも、現在の無相は非らざるものなりや。答へて曰く、若し空・無相三昧が盡きて失せざるに、又、彼の無相三昧が現在前せずんば、是を過去の空及び過去の無相は成就するも、現在の無相は非らずといふ。(三)云何んが過去の空及び現在の無相を成就するも過去の無相は非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せず、又、彼の無相三昧も現在前するも、盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば、是を過去の空及び現在の無相三昧を成就するも、過去の無相は非らずといふ。(四)云何んが過去の空及び過去・現在の無相を成就するものなりや。答へて曰く、若し空・無相三昧が盡きて失せずして、又、彼の無相三昧が現在前すれば、是を過去の空三昧及び過去・現在の無相を成就するものといふなり。

【空三】 過去空と現在無相との成就關係。
これ第三句あり。

【空三】 過去空と過去・現在無相との成就關係。
これ第四句なり。

らざるものなりや。答へて曰く、若し空・無願三昧は已に盡きて失せざるも、又、彼の無願三昧が現在前せずんば、是を過去の空及び過去・未來の無願を成就するも、現在の無願は非らずと謂ふなり。
 (三)云何んが過去の空と及び未來・現在の無願を成就するも、過去の無願は非らずものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せず、又、彼の無願三昧が現在前するも、盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば、是を過去の空及び未來・現在の無願を成就するものなりや。答へて曰く、若し空・無願三昧を盡くして失せず、又、彼の無願三昧を現在前すれば、是を過去の空及び過去・未來・現在の無願をも成就すと謂ふなり。

設し過去・未來・現在の無願を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。^{五九}

五九 第四節 空と無相との成就等に関する小七句問答

六〇 (1)若し過去の空三昧を成就するものなれば、彼は過去の無相をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

設し過去の無相を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

六一 (2)若し過去の空を成就するものなれば、彼は未來の無相をも成就するや。答へて曰く、若し得ずれば成就す。

設し未來の無相を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて

【六〇】次下に「空・願七竟り」の夾註あり。

【五九】本節は、先づ空と無相との成就關係を小七句問答に依りて詳かに明にし、次に無願と無相との成就關係の小七句問答は之を略示せり。本節を空と無相との成就等と言へる所以なり。

其の論式は前節の如し。

(婆沙一八四、毘曇部十六、頁一九一参照)。

【六一】過去空と過去無相との成就關係。

第一句なり。

【六二】過去空と未來無相との成就關係。

これ第二句なり。

きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

(5) 若し過去の空を成就するものなれば、彼は未來・現在の無願をも成就するや。答へて曰く、未來のは成就するも、現在の無願を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

(6) 若し過去の空三昧を成就するものなれば、彼は過去・未來の無願をも成就するや。答へて曰く、未來の無願は成就し、過去のは若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

設し過去・未來の無願を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

(7) 若し過去の空を成就するものなれば、彼は過去・未來・現在の無願をも成就するや。答へて曰く、(一) 或は過去の空及び未來の無願を成就するも、過去・現在の無願は非らざるあり。(二) 及び過去・未來の無願は成就するも現在の非らざるあり、(三) 及び未來・現在の成就するも過去の非らざるあり、(四) 及び過去・未來・現在の無願を成就するあり。

(一) 云何んが過去の空及び未來の無願を成就するも、過去・現在の無願は非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せず、又、彼の無願三昧を得するも盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかにして、亦、現在前せずんば、是を過去の空及び未來の無願を成就するも、過去・現在の非らずと謂ふなり。(二) 云何んが過去の空三昧及び過去・未來の無願を成就するも、現在の非

【五三】過去空と未來・現在の無願との成就關係。
これ第五句なり。

【五四】過去空と過去・未來の無願との成就關係。
これ第六句なり。

【五五】過去空と過去・未來・現在の無願との成就關係。
これ第七句なり。

【五六】發智にては、未來・現在の成就するも過去の非らずが、この「過去・未來の無願……」の句より先にあり。

【五七】發智には、こゝに、大の過去の説と未來現在の無願との成就の文がありて八難度と說願前後せり。

五
 (3) 若し過去の空を成就するものなれば、彼は現在の無願をも成就するや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。

設し現在の無願を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設し盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

五
 (4) 若し過去の空を成就するものなれば、彼は過去・現在の無願をも成就するや。答へて曰く、(一)或は過去の空を成就するも過去・現在の無願は非らざるものあり、(二)及び過去の無願をも成就するも現在の非らざるものあり、(三)及び現在のをも成就するも過去の非らざるものあり、(四)及び過去・現在の無願をも成就するものあり。

(一)云何んが過去の空を成就するも、過去・現在の無願は非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せざるに、又、彼の無願三昧が盡きざるか、設し盡くるも便ち失するかにして、亦、現在前せざるものなれば是を過去の空三昧を成就するも、過去・現在の無願は非らずといふ。

(二)云何んが過去の空三昧を成就し、及び過去の無願をも成就するも、現在のは非らざるものなりや。答へて曰く、若し空と無願との三昧が盡きて失せざるに、又、彼の無願三昧が現在前せずんば是を過去の空を成就し、及び過去の無願をも成就するも、現在のは非らずといふ。(三)云何んが過去の空、及び現在の無願を成就するも、過去の非らざるものといふや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せず、又、彼の無願三昧が現在前するも、盡きざるか、若し盡くるも便ち失するかなれば是を過去の空及び未來・現在の無願を成就するも、過去の非らずといふ。(四)云何んが過去の空及び過去・現在の無願をも成就するものなりや。答へて曰く、若し空・無願三昧が盡きて失せず、又、彼の無願三昧が現在前すれば、是を過去の空及び過去・現在の無願をも成就すといふなり。

設し過去・現在の無願を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡

【五】 過去空と現在無願との成就關係。
 これ第三句なり。

【五】 過去空と過去・現在の無願との成就關係。
 これ第四句なり。

るも、過去のは非らずといふや。答へて曰く、若し空三昧を現在前するも、若しくは盡きざるか、設ひ盡くるも、便ち失するかなれば、是を未來及び現在のは成就するも、過去のは非らずといふ。
(四)云何んが未來及び過去・現在のを成就するものといふや。答へて曰く、若し空三昧が盡きて失せずして、又、彼の空三昧を現在前するもの、是を未來及び過去・現在のを成就すといふなり。

設し過去・現在のを成就するものなれば、彼は未來のをも成就するや。答へて曰く、是の如し。
^{四五}(6)若し現在の空を成就するものなれば、彼は過去・未來のをも成就するや。答へて曰く、未來のは成就するも、過去のは若し盡きて失せずんば則ち成就し、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

設し過去・未來のを成就するものなれば、彼は現在のものも成就するや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。
^{四六}無願と無相とにつきての歴六も亦、是の如し。^{四七}

^{四八}第三節 空と無相との成就に關する小七句問答

^{四九}(1)若し過去の空三昧を成就するものなれば、彼は過去の無願をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。
設し過去の無願を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。
^{五〇}(2)若し過去の空三昧を成就するものなれば、彼は未來の無願をも成就するや。答へて曰く、是の如し。

設し未來の無願を成就するものなれば、彼は過去の空をも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

【四五】 過去空と過去・未來空——第六問答。

【四六】 無願と無相との歴六問答。

【四七】 過去三昧の歴六の如しと。次下に「六竟り」の夾註あり。

【四八】 本節は、空三昧と無願三昧との成就に關する小七句問答をなす段なり。其の七句の形式を示せば次の如し。

(一) 過去空——過去無願

(二) 過去空——未來無願

(三) 過去空——現在無願

(四) 過去空——過・現無願

(五) 過去空——過・現無願

(六) 過去空——過・未無願

(七) 過去空——過・未・現無願

(婆沙一八四、毘婆沙十六、頁一八二參照)。

【四九】 過去空と過去無願との成就關係。

これ第一句なり。

【五〇】 過去空と未來無願との成就關係。これ第二句なり。

れば則ち成就し、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

【二〇】若し過去の空を成就するものなれば、彼は現在のをも、成就するや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。設し現在の空を成就するものなれば、彼は過去のをも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就し、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

【二一】若し未來の空を成就するものなれば、彼は現在のをも成就するや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。設し現在のを成就するものなれば、彼は未來のをも成就するや。答へて曰く、是の如し。

【二二】若し過去の空を成就するものなれば、彼は未來・現在のをも成就するや。答へて曰く、未來のは成就するも、現在のは若し現在前すれば成就す。設し未來・現在の空を成就するものなれば、彼は過去のをも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せずんば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

【二三】若し未來の空を成就するものなれば、彼は過去・現在のをも成就するや。答へて曰く、(一)或は未來のを成就するも、過去・現在のは非らざるものあり。(二)及び過去のは成就するも、現在のは非らざるものあり、(三)及び現在のは成就するも過去の非らざるものあり、(四)及び過去・現在のをも成就するものあり。

(一)云何んが未來の空は成就するも過去・現在の非らざるものなりや。答へて曰く、若し空三昧を得するも盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかにして、現在前せざるものなれば、是を未來のは成就するも過去・現在の非らずと謂ふ。(二)云何んが未來及び過去の非らざるもの現在のは非らざるや。答へて曰く、若し空三昧を得し盡きて失せざるも、又、彼の空三昧を現在前せざるもの、是を未來及び過去の非らざるもの、現在の非らずといふ。(三)云何んが未來及び現在の非らざるもの、

【二〇】過去空と—現在空—
第二問答。

【二一】未來空と現在空—第
三問答。

【二二】過去空と未來・現在空
第四問答。

【二三】未來空と過去・現在空
第五問答。

【四四】或は大正本には無きも、
三本・宮本にはあり。

何の繋を齊りて眼は色を見るや。

第二・第三・第四禪につきても亦、是の如し。

三 (二十三) 若し苦を苦なりと意が所念して阿羅漢果に逮ぶものなれば、彼は何の繋の行を苦は苦なりと意が所念して阿羅漢果に逮ぶものなりや。

習も亦、是の如し。

若し盡を盡として意が所念して阿羅漢果に逮ぶものなれば、彼は何の繋の行の、盡を盡なりと意が所念して阿羅漢に逮ぶや。

道も亦、是の如し。

此の章の義を願くば具さに演說せん。

三三昧の成就に關する一行問答

三三昧あり。空(samvatta)と無願(aprahita)と無相(animitta)となり。

三〇 若し空を成就するものなれば、彼は無願をも成就するや。答へて曰く、是の如し。設し無願を成就するものなれば、彼は空をも成就するや。答へて曰く、是の如し。

三一 若し空を成就するものなれば、彼は無相をも成就するや。答へて曰く、若し無相を得るものなれば成就す。設し無相を成就するものなれば、彼は空をも成就するや。答へて曰く、是の如し。

三二 若し無願を成就するものなれば、彼は無相をも成就するや。答へて曰く、若し無相を得るものなれば成就す。設し無相を成就するものなれば、彼は無願をも成就するや。答へて曰く、是の如し。

三三 若し無願を成就するものなれば、彼は無願をも成就するや。答へて曰く、是の如し。設し未來の空を成就するものなれば、彼は過去のものも成就するや。答へて曰く、若し盡きて失せざ

三三昧の成就に關する歷六問答

三九 (1) 若し過去の空を成就するものなれば、彼は未來の空をも成就するや。答へて曰く、是の如し。

第五 三三昧の成就論乃至羅漢果所得時の智と所緣とに關する論究

【三】 金剛喻定時の意所念と其の所緣の界繋分別。

【三〇】 本節は、經中にある空と無願と無相との三三昧の成就に於ける相互關係を一行問答を以て明す段なり。(婆沙一八三、毘婆沙部十六、頁一七五參照)。

【三一】 空と無願との成就關係。

【三二】 空と無相との成就關係。

【三三】 無願と無相との成就關係。

【三九】 空の成就に關する歷六問答。

【四〇】 過去空と未來空の成就關係——

第一問答。

歷六の形式は

(1) 過去空——未來空

(2) 過去空——現在空

(3) 未來空——現在空

(4) 過去空——未來、現在空

(5) 未來空——過去、現在空

(6) 現在空——過去、未來空

の如し。

而も本節は、此を空に依りてのみ示し、無願と無相とは略示せり。

(婆沙一八三、毘婆沙部十六、頁一七九參照)。

【三九】 空の成就に關する歷六問答。

過去空と未來空の成就關係——

二六 (十七) 諸の此の生眼に於いて本色を見ざるもの、彼は天眼を辨するや。何等に依りて天眼を辨するや。

三 耳の聲に於けるにつきて亦、是の如し。

三七 (十八) 何等を以ての故に、凡夫人の退するときは見諦斷と思惟斷との結が還つて有るに、世尊の弟子には思惟斷の結のみありや。

三八 (十九) 何等を以ての故に阿羅漢果には退があるに、須陀洹果は非らざるや。何等を以ての故に、阿那含・斯陀含果には退あるに、須陀洹果は非らざるや。

三九 (二十) 阿羅漢果を退するとき、諸の得する無漏の根と力と覺と道種とは、當に本得を得すと云ふべきや、本不得を得するや。阿那含・斯陀含果を退するとき、諸の得する無漏の根と力と覺と道種とは、當に本得を得すと云ふべきや、本不得を得するや。

四〇 (二十一) 無色界より没して欲界に生ずるとき、諸の得する持・陰・入・四大、善根・不善根、無記根、結・縛・使・垢・纏は、當に本得を得すと云ふべきや、本不得を得するや。

無色界より没して色界に生ずるとき、諸の得する持・陰・入・四大、善根・無記根、結・縛・使・垢・纏は、當に本得を得すと云ふべきや、本不得を得するや。

色界より没して欲界に生ずるとき、諸の得する持・陰・入・四大、善根・不善根・無記根、結・縛・使・垢・纏は當に本得を得すと云ふべきや、本不得を得するや。

二二 (二十二) 若し初禪に依る神足智證通修道なれば、彼は何を齊りて能く幾所に至るや。若し初禪に依る徹聽聞聲智證通修道なれば、彼は能く何の繫を齊りとするや。若し初禪に依る知他人心智證通修道なれば、彼は能く何の繫を齊りて心心法を知るや。若し初禪に依る自識宿命智證通修道なれば、彼は能く何の繫を齊りて自ら宿命を識るや。若し初禪に依る天眼智證通修道なれば、彼は能く

【二六】 生盲・生聾者が天眼・天眼を起すに就きての問題。

【三七】 凡夫人と無垢人との退・不退に關する問題。

【三八】 上三果の有退と須陀洹果の不退との問題。

【三九】 上三果を退する時所得の無漏法が本得(曾得)なりやの問題。

【四〇】 上界より下界に生ずる時、所得の法の本得・本不得分別問題。

【三一】 五通の能力の限界に關する問題。

想處に生ずるものなれば、彼は何等に依りて阿羅漢果に違ぶや。

三 (十三) 又、尊者摩訶目犍連の言く、「諸賢者よ、我れ自ら憶す、耆闍崛山の醍醐池側に在りて不用定に入りしとき、衆多の龍象の擎鼻し哮吼すること有り、而して聲を聞きしことありしを」と。尊者摩訶目犍連は入定して彼の聲を聞きしや、定より起ちて聲を聞きしや。

三 (十四) 諸の不定なるものの彼の一切は、無明實にして無明語なりや。設し無明實にして無明語なる彼の一切は不定なりや。

諸の定なる彼の一切は、明實にして明語なりや。設し明實にして明語なる彼の一切は定なりや。諸の不定なる彼の一切は、覺意を成就せざるや。設し覺意を成就せざるものの彼の一切は不定なりや。

諸の定なる彼の一切は、覺意を成就するものなりや。設し覺意を成就するものの彼の一切は、定なりや。

二 (十五) 若し、意を成就すれば、彼は無漏法をも成就するや。設し無漏法を成就すれば、彼は覺意をも成就するや。

若し覺意を成就せざるものなれば、彼は無漏法を成就せざるや。設し無漏法を成就せざるものなれば、彼は覺意を成就せざるや。

若し覺意を得すれば、彼は無漏法をも得するや。設し無漏法を得すれば、彼は覺意をも得するや。若し覺意を棄つれば、彼は無漏法をも棄つるや。設し無漏法を棄つれば、彼は覺意をも棄つるや。

若し覺意を退すれば、彼は無漏法をも退するや。設し無漏法を退すれば、彼は覺意をも退するや。

三 (十六) 若し不盡なれば彼は無餘なりや。設し無餘なれば彼は不盡なりや。

若し盡なれば彼は有餘なりや。設し有餘なれば、彼は盡なりや。

【三】 入定者は聲を聞くや否やの問題。

※ 憶は大正本に思惟とあるも三本・宮本には憶とあり。

【三】 定性者と不定性者とに關する問題。

【四】 覺意と無漏法との成就不成就、得・棄並に退の問題。

【五】 不盡(未斷)盡(已斷)と無餘(不知)有餘(知)との問題。

【一六】(1)若し空三昧を修すれば、彼は無願をも修するや。設し無願を修すれば、彼は空をも修するや。(2)若し空三昧を修すれば、彼は無相をも修するや。設し無相を修すれば、彼は空をも修するや。

【一七】若し無願三昧を修すれば、彼は無相をも修するや、設し無相を修すれば、彼は無願をも修するや。

【一八】(七)頗し結にして空の減するものなるも、無願・無相の減するに非ざるものありや。無願の減するものなるも、空の減するものにも非ず、無相の減するものにも非ざるものありや。無相の減するものなるも、空の減するにも非ず、無願の減するにも非ざるものありや。空と無願との減するものなるも、無相の減するに非ざるものありや。空と無相とが減するも無願が減するに非ざるものありや。無願と無相とが減するも、空が減するに非ざるものありや。空と無相と無願とが減するものありや。

頗し結にして空の減するにも非ず、無願の減するにも非ず、無相の減するにも非ずして、而も減せらるる結ありや。

【一九】(八)云何に意が所念して越次取證するや。

【二〇】何の繋の行を意が所念して越次取證するや。

【二一】(九)盡智は當に身身觀意止なりと言ふべきや。當に痛：心：法法觀意止なりと言ふべきや。

無生智につきても亦、是の如し。

【二二】(十)諸の無漏の初禪の樂と諸の猗覺意と、此に何の差別ありや。諸の無漏の第二禪の樂と諸の猗覺意と、此に何の差別ありや。

【二三】(十一)若し三昧より起つものなれば、彼は緣よりも起つや。設し緣より起つものなれば、彼は三昧よりも起つや。

【二四】(十二)又、世尊の言く、「乃至想定により是に齊りて教を得ず」と。若し世尊の弟子にして有想無

【二五】三三昧の相修問題

【二六】三三昧の減する結に關する問答

【二七】越次取證する(正性離生に入)る時の意の所念(作意)問題

【二八】越次取證するとき何繋の行を意の所念となすやの問題

【二九】盡・無生智の意止(念住)問題

【三〇】無漏の初禪の樂と猗(輕安)覺意との差別問題

【三一】三昧より起つと、所緣より起つとの關係

【三二】有頂の聖者の羅漢果を得するに依用する定の問題

の空を成就すれば、彼は過去のをも成就するや。(3)若し未來の空を成就すれば、彼は現在のをも成就するや。設し現在のを成就すれば、彼は未來のをも成就するや。(4)若し過去のを成就すれば、彼は未來・現在のをも成就するや。設し未來・現在のを成就すれば、彼は過去のをも成就するや。(5)若し未來のを成就すれば、彼は過去・現在のをも成就するや。設し過去・現在のを成就すれば、彼は未來のをも成就するや。(6)若し現在のを成就すれば、彼は過去・未來のをも成就するや。設し過去・未來のを成就すれば、彼は現在のをも成就するや。⁷

⁶ 無願・無相につきても亦、是の如し。

⁷ (一)若し過去の空を成就すれば、彼は過去の無願を成就するや。設し過去の無願を成就すれば、彼は過去の空をも成就するや。(2)若し過去の空を成就すれば、彼は未來の無願を成就するや。設し未來の無願を成就すれば、彼は過去の空を成就するや。(3)若し過去の空を成就すれば、彼は現在の無願を成就するや。設し現在の無願を成就すれば、彼は過去の空を成就するや。(4)若し過去の空を成就すれば、彼は過去・現在の無願を成就するや。設し過去・現在の無願を成就すれば、彼は過去の空を成就するや。設し未來・現在の無願を成就すれば、彼は過去の空を成就するや。(6)若し過去の空を成就すれば、彼は過去・未來の無願を成就するや。(7)若し過去の空を成就すれば、彼は過去・未來・現在の無願を成就するや。設し過去・未來・現在の無願を成就すれば、彼は過去の空を成就するや。⁸

(四)無相につきても亦、是くの如し。

(五)過去の空と、過去の無願とをもて過去の無相、未來の無相、現在の、過去・現在の、未來・現在の、過去・未來の、過去・未來・現在の無相に對して大の七句あり。¹³

【二】 三は大正本に是とあるも三本・宮本に據りてかく訂正す。

【三】 拘律陀(Kolita)は摩訶目犍連のこと。即ち拘律陀村の出身なるが故に、かくあだなせられたりといふ。

【四】 三三昧の成就に關する一行問答。

【五】 次下に、「一行竟り」の夾註あり。

【六】 三三昧の成就に關する歴六問答。特に、空に就きて、歴六問題論ず。

【七】 次下に、「空六竟り」の夾註あり。

【八】 無願と無相との歴六。

【九】 空と無願との成就に關する小七句問答。

【一〇】 次下に「空と願との七竟り」の夾註あり。

【一一】 空と無相との成就に關する小七句問答。

【一二】 三三昧の成就に關する大七句問答。

【一三】 次下に「七竟り」の夾註あり。

卷の第二十八 (第七編 定犍度)

第五章 三三昧の成就論乃至羅漢果所得時の

智と所縁とに關する論究

(定犍度中、一行跋渠第五) (發智論卷第十九、大正・二六、一〇一九頁)

本章の内容目次第一

- 一行と、歴六と、二の七と、三修と、斷三昧と、
- 越と、智と、禪二と、定起と、想と、
- 拘律陀と、聚と、覺意と、斷と、眼視・徹聽と、
- 有逮と凡夫と、果と退と、生界と、
- 五通と、苦は最も後に在り。

本章の内容目次第二

- (一) 三三昧とは空と無願と無相となり。若し空を成就すれば、彼は無願をも成就するや。設し無願を成就すれば、彼は空をも成就するや。若し空を成就すれば、彼は無相をも成就するや。設し無相を成就すれば、彼は空をも成就するや。若し無願を成就すれば、彼は無相をも成就するや。設し無相を成就すれば、彼は無願をも成就するや。

- (二) (1) 若し過去の空を成就すれば、彼は未來の空をも成就するや。設し未來の空を成就すれば、彼は過去の空をも成就するや。(2) 若し過去の空を成就すれば、彼は現在のも成就するや。設し現在

【一】本章は、本章内容目次一の示すが如く、空定の三三昧の成就に關する一行と歴六と小七、大七(二の七)句問答、三三昧の習修、得修論(三修)三昧の斷ずる結(斷三昧)、越次取證時の意所念等に關する問題(越)、盡、無生智(智)の念住、無漏の初二禪の樂と猗覺意との同異論(禪二)、定より起つと所縁より起つとの關係(定起)、有想無想處の聖者の得果の爲めに依用する定の問題(想)、目連の入定中に聲を聞きしとの傳に因みて入定中も聲を聞くや否やの論究(拘律陀)、定聚・不定聚に關する論究(聚)、覺意と無漏法との成就等の問題(覺意)、不盡と盡等の問題(斷)、生盲・生聾者が天眼・天耳を得するに關する問題(眼視・徹聽)、凡夫と無垢人の退、不退に關する問題、有逮凡夫、上三果よりの退問題(果退)、界に於ける時所得の法の本得・本不得分別(生界)、五通の能力の限界問題(五通)、最後に金剛喻定時に於ける苦の所念等の問題(苦)を論究するを其の課題とせり。

住するを等法の住といひ、斯る佛徒の滅し去る時を等法の滅とぞ言ふ。

【八七】等法の滅。

【八八】本節は、先づ一般に生といひ、滅といふ法の三世分別をなし、次に、最初の無漏の初禪乃至不用處定を得する

時に、得する餘の無漏の心心法は、何の世に攝するやを明す段なり。詳細は婆沙一八三、毘曇部十六、頁一七二以下參照せよ。

【八九】生と滅との三世分別。

婆沙に據れば、こは、過未有體説を顯示せんが爲めの論起

なりと。

【九〇】初めて無漏の諸定に入る時、得する餘の無漏法の三世分別。

こは、婆沙に據れば、未來修を廢無するもの、聖道無爲説を作す者、又は聖道唯一説を作すものの意を遮止し、未來

修有り、聖道は有爲にして多なる義を顯示せんが爲めなりと言ふ。

【九一】大正本には、初は始とあるも、三本・宮本に初とあり、今は後者に從ふ。

阿毘曇八犍度論卷第二十七

第十六節 等法(正法)の定義並に等法の住と滅とに就きて

等法とは云何、答へて曰く、無漏の根と力と覺と道種となり。

何を齊りて當に等法が住すと言ふべきや。答へて曰く、諸の法を行ずる者が住するを齊りて等法が住すといふ。

何を齊りて當に等法が滅すと言ふべきや。答へて曰く、諸の法を行ずる者が滅するときに齊る。

第十七節 生と滅と及び初入の無漏の七定に依りて得する法との三世分別

諸の生は何の世に攝するや。答へて曰く、未來なり。若し滅なれば何の世に攝するや。答へて曰く、現在なり。

若し最初に無漏の初禪に入りて得する心々法は、何の世に攝するや。答へて曰く、未來なり。

若し最初に乃至無漏の不用定に入りて得する心々法は、何の世に攝するや。答へて曰く、未來なり。

阿那含品第四竟り (梵本一百五十七首盧、秦二千四百二言)

かく訂正す。

【七五】 本節は、佛說中の法知足と比尼(毘尼)知足との義理を明す段なり。

發智は、法知足を法珊度沙 (brahmos) とし、比尼知足を毘尼珊度沙とす。

珊度沙の意義には、婆沙に種種の説を擧ぐ。

喜足とするもの、毀壞とするもの等あり。

(婆沙一八一、毘曇部十六、頁一三七参照)。

【七六】 次下に、「比尼不作證已」の六字あるも、こは重復に就き、三本・宮本に従つて之を除去せり。

【七七】 經文の中にある、「法の次法もて彼に向ふ」とは發智に「法の隨法を行す (dhamma = marudhamma pratipanna) 」とあり。

本節は、此の經の意義を解明ならしめんとする段なり。

(婆沙一八一、毘曇部十六、頁一三九参照)。

【七八】 戒解脫とは、發智に、別解脫と識じ、戒解脫比尼を別解脫律儀とす。

【七九】 以下、發智は「身律儀・語律儀・命清淨を法と名け、之を受くるを隨法と名く」とす。

【八〇】 本節は、法輪の意義を述べ、次に、轉法輪中、特に初轉法輪の義を述する段なり。

(婆沙一八一、毘曇部十六、頁一四三以下参照)。

【八一】 法輪の自性。即ち、八聖道支なり。

頁一二四以下の註七、八、九を参照せよ。

【七一】 大徳の上に、大正本は「非」の字あるも、三本・宮本には無し。今は、後者に從ひ之を除けり。

【七二】 本節は、經に佛が「學は五蓋を滅して遊ぶ」と説きし意義を明にせんとする段なり。

(婆沙一八一、毘曇部十六、頁一三六参照)。

【七三】 摩訶南 (Mahānāma) は、初轉法輪時の五比丘中の一人といはる。發智は之を「大名」と識せり。

【七四】 大正本には、解は脫とあるも、聖語藏本には解とあり、前にも學解とあるにより、

【八二】 特に初轉法輪に就きて。

【八三】 本節は、等法(正法)とは何ぞや、其の正法の住又は正法の滅とは何を齊りとし何を最後としてかく言ふやを明す段なり。

(婆沙一八一、毘曇部十六、頁一六五以下参照)。

【八四】 等法(正法)の定義。

【八五】 等法の住。

【八六】 法の特證者、即ち能く無漏の聖道を修證する體得者

又、世尊の言く、「摩訶南よ、學は五蓋を滅して遊ぶ」と。云何んが學は五蓋を滅して遊ぶや。答へて曰く、須陀洹、斯陀含は此の義に於て學解す、即ち彼の五蓋を滅するや漸に滅し、離するや漸に離し、障ゆるや漸に障え、背するや漸に背して遊ぶと。是を以ての故に、須陀洹・斯陀含は此の義に於て學解するなり。

第十三節 法知足と比尼知足とに就きて

又、世尊の言く、「是に法知足ありて比尼知足あり、比尼知足ありて法知足あり」と。

云何んが法知足ありて比尼知足ありといひ、云何んが比尼知足ありて法知足ありといふや。答へて曰く、聖八道種、之を法と謂ひ、婬・恚・癡を除く比尼、之を比尼と謂ふ。彼の聖八道種を修せず廣からずんば、彼の婬・恚・癡の比尼を作證せず。彼の聖八道種を修せずんば、聖八道種は修せず廣からず。是の如くして法知足ありて比尼知足あり、是の如くして比尼知足ありて法知足ありといふなり。

第十四節 「法の次法もて彼に向ふ」との經意

又、世尊の言く、「法の次法もて彼に向ふ」と。云何んが法なりや。云何んが次法もて彼に向ふといふや。答へて曰く、涅槃、之を法と謂ひ、聖八道種、之を次法もて彼に向ふと謂ふ。復次に戒・戒解脫、之を法と謂ひ、戒解脫比尼、之を次法もて彼に向ふと謂ふ。復次に、身戒律と口戒律と、之を法と謂ひ、等持、之を次法もて彼に向ふと謂ふ。

第十五節 法輪の自性並に轉法輪に就きて

法輪とは云何、答へて曰く、聖八道種なり。

何を齊りて當に法輪を轉ずと言ふべきや。答へて曰く、尊者阿若拘隣 (Anā-Kondhina) の法を見しときを齊りて法輪を轉ずといふ。

名なり」とあり。
【六四】 祝利般特迦と聖訶般特迦とに就きて。

此の中、祝利般特迦 (Cūḍhapaṇṭhaka) は、小路、摩訶般特迦 (Mahā-paṇṭhaka) は大路と發智の轉するもの。
【六五】 心心觀を、發智は信心觀念住とし、法法觀を、備法觀念住とす。

【六六】 舍利弗と聖訶拘絺羅とに就きて。
【六七】 摩訶拘絺羅 (Mahakotijhāna) を發智は、執大藏とす。

【六八】 義辯とは、發智に、義無礙解とし、四辯は四無礙解とせり。
【六九】 聖訶迦葉と薄拘盧とに就きて。

即ち、大迦葉波 (Mahākassapa) と薄拘羅 (Pakkula, Vīriyā) となり。
發智は、大迦葉波は、少欲喜足にして杜多行を具し、薄拘羅は少病節儉にして、淨戒行を具すと翻す。

【七〇】 以下の文は、多少翻譯上の相違はあるも、此は發智の文と異り、婆沙の擧示する所謂、相違の論文に同ず。是れ亦、發智と八辨處論との關係を檢するに際して注目すべき點なりとす。

此の兩者の意義の相違に就きては婆沙一八一、毘婆沙十六、

無垢ならしむるなり。

第十一節 四聖の佛弟子論

又、世尊の言く、「第一比丘として我が弟子のうち第一智なるは 醜兜摩納、捷智なるは婆猶果衣なり」と。此に何の差別ありや。答へて曰く、尊者醜兜摩納は、専ら心を正しくし偽り無きに、尊者婆猶果衣は少務にして心柔和なるなり。是を差別と謂ふ。

又、世尊の言く、「是に第一比丘として我が弟子のうち心の廻を善くするものは祝利般特迦なり想の廻を善くするものは摩訶般特迦なり」と。此に何の差別ありや。答へて曰く、尊者祝利般特迦は心心觀に多く遊び、尊者摩訶般特迦は法々觀に多く遊ぶなり。是を差別と謂ふ。

又、世尊の言く、「我が弟子の中、第一比丘として大智慧なるは舍利弗なり、得辯才なるは摩訶拘絺羅なり」と。此に何の差別ありや。答へて曰く、尊者舍利弗は、多く、義辯に遊び、尊者摩訶拘絺羅は多く、四辯に遊ぶ。是を差別と謂ふ。

又、世尊の言く、「我が弟子の中、第一比丘として少欲、頭陀 (Chhīra) なるは摩訶迦葉なり、無著少欲なるは薄拘盧なり。此に何の差別ありや。答へて曰く、尊者摩訶迦葉は若し食を得ば、若しくは好なるも若しくは醜なるも、彼は等意にて食し、彼此の意無きに、尊者薄拘盧は、食の若しくは好なるもの、若しくは醜なるものを得せば、彼は其の好なるものを別して而して鹿なるものを食するなり。復次に、尊者摩訶迦葉は、廣識の大徳なりしかば、衣食・床臥具・病瘦醫藥を得るに、彼は等受して頭陀を行ぜしに、尊者薄拘盧は少識の 大徳にして、亦、衣食・床臥具・病瘦醫藥を得せざりしかば、彼は等受せずして頭陀を行ぜり。此の、少識の比丘が等受せずして頭陀を行するを難と爲す。是を差別と謂ふ。

第十二節 學は多く五蓋の滅に遊ぶとの契經の意義

は婆沙一七八、毘曇部十六、頁七九參照せよ。

【五四】 願智の意義。

【五五】 頂第四禪とは、發智に、邊際の第四靜慮とす。

【五六】 願智の三性分別。

【五七】 本節は、他述即ち無諍の意義を明す段なり。

【五八】 内時とは、自己身中の所有の煩惱をいひ、外とは、他人の身中に存する一切の煩惱なり。

【五九】 以下、發智は、若し亦、外時にも善達するものなれば、無諍行のものとも名く」とあり。

【六〇】 本節は、(一)醜兜摩納と婆猶果衣、(二)祝利般特迦と摩訶般特迦、(三)舍利弗と薄拘盧との佛の四雙の勝弟子の特長を擧げて夫々の特質を明にせんとする段なり。

(婆沙一七九、毘曇部十五、頁九九以下參照)。

【六一】 醜兜摩納と婆猶果衣とに就いて。

【六二】 醜兜摩納は Hehmi na-
ntā ならん。婆沙には、因儒

童とあり。

婆猶果衣は、發智に、婆伽迦等とあり。婆伽迦等の等とは、尊者願洛迦と尊者至履迦とを攝すとは、婆沙の言なり。出典、未だ明ならず。

【六三】 次下の夾註に、「真人の

何を齊りて菩薩といふや。答へて曰く、相報行を作して厭ふこと無きを齊りて菩薩と名く。何事を得するを菩薩と名くるや。答へて曰く、相報行なり。

第七節 彌勒を當來佛たりと授記せし佛智と其の作用とに就きて

又、世尊の言く、「汝は、彌勒(Maitreya)よ、未來久遠に、彌勒怛薩阿竭阿羅訶三耶三佛(Tathagata arhat-samyaksambuddha)と名く」と。此は是れ何の智なりや。答へて曰く、因智と道智となり。

此の智は當に何事を辯ずと言ふべきや。答へて曰く、相報行を辯ずるは因智なり。諸の無漏の根と力と覺と道種との阿耨多羅三耶三佛を得すと辯ずるは此れ道智なり。

第八節 世尊の弟子が聖教を體得するや否やを記別する佛智と其の作用とに就きて

又、世尊の言く、「是に謂ふ世尊の弟子は現法に教を具し、^{五二}死生を盡し梵行を立し所作已に辯じ名色有りと如實に之を知る」と。此は是れ何の智なりや。答へて曰く、道智なり。此の智は、當に何事を辯ずと言ふべきや。答へて曰く、諸の無漏の根と力と覺と道種との盡漏を得するものを辯ず。是を道智と謂ふなり。

第九節 願智に就きて

願智とは云何。答へて曰く、如し阿羅漢にして諸の義を解せんと欲せば、彼は作願し已りて^{五三}頂の第四禪に入るに、彼れ三昧より起ちて彼々の義を知る。是を願智と謂ふなり。

願智は當に善と言ふべきや。當に無記と言ふべきや。答へて曰く、願智は或は善なり、或は無記なり。

第十節 他述(無勝行)に就きて

云何が他述なりや。答へて曰く、一切の阿羅漢には^{五八}内時を善別するも、外を盡くさざるあり。若し外をも盡せば是を内時善別他述と謂ふ。他の義は何の法に名くるや。答へて曰く、他をして

(婆沙一七六、毘曇部十六、頁四六參照)。

【四〇】本節は、菩薩と稱し得べき有情は、相報行即ち相異熟業を造作し增長するものを齊りとすることを明す段なり。(婆沙一七六、毘曇部十六、頁四八參見すべし)。

【四一】本節は、佛が、彌勒比丘の修行と其の果報とを觀じて、「彌勒よ爾は當來佛たるべし」と授記せりと言へるが、此の佛の智は何と稱すべき智にして、其の作用は何なりやを明す段なり。

(婆沙一七八、毘曇部十六、頁七二參照)。

【五〇】但は、大正本に恒(恆)とあるも、宋・元・宮・聖語藏の各本に皆恒とあり。且つ、善義の上からも此の場合、恒にみならずして恒を適當とするが故にかく訂正せり。

【五一】本節は、一般比丘の修行と其の進程を如實に知りて記別する佛智は、何の智と稱すべく、又、其の智の作用は何ぞやを明す段なり。(婆沙一七八、毘曇部十六、頁七七參照)。

【五二】發智は、以下の經文を略せり。

【五三】本節は、願智の意義を明して、其の三性分別をなす段なり。本節の詳細に就きて

第四節 順流と逆流と及び實住との意義

順流の義は云何ん、答へて曰く、諸の生と、諸の去と、諸の有と、諸の所生と、諸の所居とのために、彼の種たり彼の門たり彼の縁たり彼の道たり彼の迹向たることなり。是の故に順流といふ。

逆流とは云何ん。答へて曰く、諸の生の盡と、諸の去の盡と、有の盡と所生の盡と所居の盡とのために、彼の種たり彼の門たり彼の縁たり彼の道たり彼の迹向たることなり。是の故に逆流といふ。

實住の義は云何ん。答へて曰く、彼が此の如く諸の生と諸の去と諸の有と諸の所生と諸の所居とのために、彼の種たり彼の門たり彼の縁たり彼の道たり彼の迹向たるにも非ず、彼は此の如く諸の生の盡と、去の盡と有の盡と、所生の盡と、所居の盡とのために、彼の種たり彼の門たり彼の縁たり彼の道たり彼の迹向たるにも非ざるものたることなり。是の故に實住といふ。

諸の實住なる彼の一切は阿羅漢なりや。答へて曰く、是の如し。諸の阿羅漢の彼の一切は實住なり。頗し實住なるも彼は阿羅漢に非ざるものありや。答へて曰く、有り、阿那含なり。世尊も亦、説く、

「若し、五垢を滅し學足りて漏法無く、心に自在と定根とを得するもの、彼は實住なり」と、是を實住人と謂ふなり。

第五節 還述と到彼岸との關係

諸の還述なる彼の一切は到彼岸なりや。答へて曰く、是の如し。諸の還述なる彼の一切は到彼岸なり。頗し到彼岸なるも彼は還述に非ざるものありや。答へて曰く、有り、阿那含なり。世尊の亦、説く、「云何なる比丘が到彼岸を得するや。答へて曰く、五下分結の已に盡きて餘り無きものなり」と。

【四〇】本節は、順流と逆流と、其の何れにも非ざる實住のもの（即ち阿那含果又は無學果に住するもの）との意義を論述する段なり。

（婆沙一七六、毘曇部十五、頁四〇參照）。

【四一】順流の意義。

【四二】以下、八犍度の、(1)去(2)所生と、(3)所居と、(4)彼の種と、(5)彼の縁とは發智にて、(1)趣、(2)種類、(3)生死、(4)支、(5)事と譯せり。以下之に准ず。

【四三】逆流の意義。

【四四】實住の意義。

實住は、發智に「自住」とす。【四五】實住には、羅漢と阿那含とあるに就きて。

【四六】五垢とは、發智に五煩惱と譯す、五蓋と五順下分結となり。

【四七】本節は、還述と到彼岸との關係を述ぶる段なり。此の中、還述とは、發智に極述と譯するものにして、茲にては、羅漢の意と見るべし。

因みに、本節は、發智の文と全然異り、婆沙が一説として掲ぐるものに相當する發智と相當すこは發智と八犍度との關係を見る上に注意すべき個所なり。

所謂是れ無學士なる彼の一切は、到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し證せざるを證せんと欲して、學すること無きものなりや。答へて曰く、或は是れ無學士にして、彼は到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し證せざるを證せんと欲して學するにあらざるに非ざるものあり。

三六
（一）云何んが是れ無學士にして彼は到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し證せざるを證せんと欲して學せざるに非ざるものなりや。答へて曰く、阿羅漢の方便して上求するもの、是を無學士にして彼は到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し證せざるを證せんと欲して學せざるには非らざるものと謂ふなり。

三七
（二）云何んが到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し證せざるを證せんと欲して學するにあらざるものにして、彼は是れ無學士にあらざるものなりや。答へて曰く、學士若しくは凡夫人の性に住するもの、是を到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し證せざるを證せんと欲して學するにあらざるも、彼は是れ無學士にあらざるものと謂ふなり。

三八
（三）云何んが亦、是れ無學士にして亦、到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し證せざるを證せんと欲し是れ學するにあらざるものなりや。答へて曰く、阿羅漢の性に住するもの、是を亦は是れ無學士にして亦、到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し證せざるを證せんと欲して學するにもあらざるものと謂ふなり。

三九
（四）云何んが是れ無學士にも非ず、亦、到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し證せざるを證せんと欲して、學せざるに非ざるものなりや。答へて曰く、學士若しくは凡夫人の方便して上求するもの、是を是れ無學士にも非ず、亦、到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し證せざるを證せんと欲して學せざるにも非ざるものと謂ふなり。

然も、無學にも、本性即ち果に住するものと、退法羅漢の如く不動法たらんとして勝進道を修するものとあり。

又、未得を得せんが爲めに學せざるものにも、無學なると、故に、以下、四句分別をなせるなり。

（婆沙一七六、毘曇部十六、頁三八以下參照）。

【三】 第一單句——

【七】 第二單句——

【六】 第三俱是句——

【五】 第四俱非句——

諸の所謂、是れ學士なる彼の一切は、到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して學するや。答へて曰く、或は是れ學士にして彼は到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して學ぶに不ざるものあり。

(一)云何んが是れ學士にして彼は到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して學するに不ざるものなりや。答へて曰く、學士の性に住するもの、是を是れ學士にして彼は到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して、學するにあらざるものと謂ふなり。

(二)云何んが到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して學するものにして、彼は學士に非ざるものなりや。答へて曰く、阿羅漢若しくは凡夫人の、方便して上を求むるもの、是を到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して、學するも、彼は是れ學士に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが是れ學士にして亦、到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して、學するものなりや。答へて曰く、學士の方便して上を求むるもの、是を是れ學士にして亦、到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して、學するものと謂ふなり。

(四)云何んが亦、是れ學士にもあらず、亦、到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して、學するにも不ざるものなりや。答へて曰く、阿羅漢若しくは凡夫人の性に住するもの、是を亦是れ學士にもあらず、亦是に到らざるを到らんと欲し獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して、學するにもあざざるものと謂ふなり。

第三節 無學と、未得未得せん爲めに學するに非ざるものとの關係

ず獲せず證せざる勝法を到達し獲得し證得せんが爲めに學する者との關係を明にせんとする段なり。

然も、學には、學の本性に住するもの、即ち、學果に住するものもあれば、未得を得せんが爲めに勝進道に精進するものとあり、又、未得を得せんとして學ぶ者には、學なるあり、無學なるあり、非學非無學なるあるが故に此の關係を以下、四句分別を以て論究せり。

(婆沙一七六、毘曇十六、頁三五以下参照)。

【三】大正本には「諸」の字無きも、三本・宮本にはあり、今は後者に據りて之を補ふ。

【一】第一單句——學にして、未得を得せんとて學ぶものに非ざるもの。

【二】第二單句——未得を得せんとて學する者なるも、學ならざるもの。

【三】第三俱是句——學にして、未得を得せんとて學ぶもの。

【四】第四俱非句——兩者に非ざるもの。

【五】本節は、全然其の組織、前節と同じにして、無學と、未得を得せんが爲めに學するに非ざるもの、との關係を論究する段なり。

一〇 (十五)法輪とは云何ん。何を齊り當に法輪を轉ずと言ふべきや。

二 (十六)等法とは云何ん。何を齊りて當に等法住すと言ふべきや。何を齊りて當に等法盡くと言ふべきや。

三 (十七)若し生なれば彼は何の世の攝なりや。若し盡なれば彼は何の世の攝なりや。

若し最初に無漏の初禪に入るとき彼は何の世の攝なりや。若し最初に無漏の乃至不用定に入るとき彼は何の世の攝なりや。

此の章の義を願くば具に演說せん。

第一節 五阿那含と一切との阿那含との關係及び五阿那含相の勝劣論

二五 五阿那含(anāgamin)あり。中般涅槃(antarāparinirvāyin)と生般涅槃(ūpaadyaparinirvāyin)と行般涅槃(sāhisaṅskāraparinirvāyin)と無行般涅槃(anahisaṅskāraparinirvāyin)と、上流往阿迦膩吒(urdhvasrotāgāni, iha, or urdhvasrotakamiṣṭha)となり。

二五 此の五阿那含は一切の阿那含を攝するや。一切が五を攝するや。答へて曰く、一切が五を攝するも、五が一切を攝するには非ず、何等をか攝せざるや。答へて曰く、現法般涅槃と無色界の阿那含となり。

三七 何れが最勝なりや、中般涅槃なりや、生般涅槃なりや。答へて曰く、等しき盡に住するものなれば中般涅槃勝り生般涅槃には非ざるも、若し此の生般涅槃の結の盡が多ければ彼は則ち勝るなり。

二八 何れが最勝なりや、乃至無行般涅槃なりや、上流往阿迦膩吒なりや。答へて曰く、等しき盡に住するものなれば無行般涅槃勝り上流往阿迦膩吒には非ざるも、若し此の上流往阿迦膩吒の結の盡が多ければ、彼は即ち勝るなり。

第二節 學と、未得を得せんが爲めに學する者との關係

第四章 不還に關する諸問題乃至生滅の三世分別等に關する論究

六六七

【一〇】 法輪と轉法輪との問題。

【三】 等法と等法の住と滅との問題。

【三】 生滅等の三世分別問題。

【三】 本節は、先づ五種の阿那含即ち不還を明にし、次に、此の五種の阿那含は一切阿那含の意なりや、五種中に攝せられざる餘の阿那含もありやを明し、最後に五阿那含相互の優劣を論ずる段なり。(婆沙一十四、毘婆沙十六、頁一以下參照)。

【四】 五阿那含の名目。

此の中、上流往阿迦膩吒は、發智に、上流往色究竟と顯ず。

【五】 五阿那含と一切阿那含との相攝關係。

【六】 無色界阿那含を發智に、往無色不還とす。

【七】 五阿那含相互の勝劣論。

【八】 以下の文に發智との略說上の說相異れり。

【九】 本節に、學と、未得を得せんと欲して學ぶ即ち到ら

此は是れ何の智にして、此の智は當に何事を辯ずと爲すと云ふべきや。

(八)又、世尊の言く、「是にいふ世尊の弟子は現法に諸教を辯じ、生を盡くし梵行を具し所作已に辯じ名色已に有りて、如實に之を知る」と。此は是れ何の智なりや。當に此の智は何事を辯ずと爲すと云ふべきや。

(九)願智とは云何ん。願智は當に善と言ふべきや。無記なりや。

(十)餘述とは云何ん。餘述とは何の法に名くるや。

(十一)又、世尊の言く、「我が弟子中の第一比丘として第一智なるは醯兜摩納、捷智なるは婆猶、頗隸・脂梨なり」と。此に何の差別ありや。

又、世尊の言く、「我が弟子中、第一比丘として心の廻を善くするは祝利般特迦、想の廻を善くするは摩訶般特迦なり」と。此に何の差別ありや。

又、世尊の言く、「我が弟子中の第一比丘として大智慧なるは舍利弗、得辯才なるは摩訶拘絺羅なり」と。此に何の差別ありや。

又、世尊の言く、「我が比丘の第一弟子中、少欲にして頭陀を行するは摩訶迦葉、無著にして少欲なるは薄拘盧なり」と。此に何の差別ありや。

又、世尊の言く、「學は摩訶南よ、五蓋を滅し已りて遊ぶ」。云何が學にして、五蓋を滅し已りて遊ぶや。

又、世尊の言く、「是に法知足ありて比尼知足あり、比尼知足ありて法知足ありと謂ふ」と。云何んが法知足によりて毘尼知足なりや。云何んが毘尼知足によりて法知足なりや。

又、世尊の言く、「法の次法もて彼に向ふ」と。云何が法なりや、云何んが次法もて彼に向ふや。

【七】 菩薩論の問題。

【八】 彌勒は當來佛たりと授記する佛智及び其の智の用に關する問題。

【九】 世尊の弟子が現法に於て聖教に徹するや否やを記別する智と其の用とに就きての問題。

【一〇】 願智論題。

【一一】 餘述(無諍行)問題。

【一二】 本文中には他述とせり。

【一三】 四雙の佛弟子論。

【一四】 醯兜摩納と婆猶頗等との特質論。

【一五】 祝利般特迦と脂利とは、婆沙に婆迦迦と頗洛迦と至賢迦とあり。

【一六】 祝利般特迦と摩訶般特迦との特質論。

【一七】 舍利弗と摩訶拘絺羅との特質論。

第四章 不還に關する諸問題乃至生・滅の三

世分別等に關する論究

(阿毘曇定鍵度、阿那含跋渠第四) (發智論卷第十八、大正・二六、一、〇一七頁)

本章の内容目次

二 (一) 五阿那含とは中般涅槃・生般涅槃・行般涅槃・無行般涅槃・上流往阿迦膩吒なり。此の五阿那含は一切阿那含を攝するや、一切が五を攝するや。何れが最勝なりや、中般涅槃なりや、生般涅槃なりや。何れが最勝なりや、乃至無行般涅槃なりや、上流往阿迦膩吒なりや。

三 (二) 諸の學なる彼の一切は、(1) 到らざるを到らんと欲し、(2) 獲せざるを獲せんと欲し、(3) 證せざるを證せんと欲して、學するや。設し到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して學するものなれば、彼の一切は學なりや。

四 (三) 諸の無學の彼の一切は、到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して學すること無きものなりや。設し到らざるを到らんと欲し、獲せざるを獲せんと欲し、證せざるを證せんと欲して學せざる彼の一切は、無學なりや。

五 (四) 順流の義は云何ん。逆流の義は云何ん。實住の義は云何ん。

六 諸の實住なる彼の一切は阿羅漢なりや。設し阿羅漢の彼の一切は實住なりや。

七 (五) 諸の還跡の彼の一切は到彼岸なりや。設し到彼岸なる彼の一切は還迹なりや。

八 (六) 何所を齊りて菩薩とするや。何物を得するを菩薩となすや。

九 (七) 又、世尊の言く、「汝は今、彌勒よ、未來久遠に彌勒世薩阿竭阿羅訶三耶三佛と名くべし」と。

【一】本章に、契經に存する意義の解釋段として、種種難多なる諸問題を論ぜり。今發智の頌文に據るに、

「不還學、無學、

順・逆・住、極二、

菩薩記、顯智、

無諍、四雙別、

住斷、法、調伏、

法、隨法、及、行、

法輪、正法、世、

此の詳細に就き、一は、婆沙一

七四、毘婆沙十六、頁一の註

を往見せよ。

【二】五阿那含と一切阿那含との關係、並に五阿那含の相互勝劣問題。

【三】學と、未得を得せんが爲め學するものとの關係問題。

【四】無學と、未得を得せんが爲めに學するに非ざるものとの關係問題。

【五】順流と逆流と實住とは如何んの問題。

【六】還跡と到彼岸との關係問題。

此の中、始めを還跡とし、後を還迹とすること諸本一致せり。

未來に依り、第四識止は或は三に依り或は未來に依る。第五識止は或は五に依り或は未來に依り、第六識止は或は六に依り或は未來に依り、第七識止は或は七に依り或は未來に依りて盡く。

世八法は未來に依りて盡く。

初業生居は或は未來に依り、第二業生居は或は初に依り或は未來に依りて盡く。第三業生居は或は二に依り或は未來に依り、第四業生居は或は三に依り或は未來に依る。第五業生居は或は四に依り或は未來に依り、第六業生居は或は五に依り或は未來に依る。第七業生居は或は六に依り或は未來に依り、第八・第九業生居は或は七に依り或は未來に依りて盡く。

十行迹は未來に依りて盡く。

禪中の、初禪は或は初禪に依り或は未來に依る。第二禪は或は二に依り或は未來に依る。喜と初二禪に依り或は未來に依る。慈・悲・護と淨解脱と後四除入と前八一切入とも亦、是の如し。第四禪は或は四一切入とは或は六に依り或は未來に依る。不用處と不用處解脱と有想無想處と有想無想解脱と滅盡

無色中、空處と空處解脱と空處一切入とは或は五に依り或は未來に依る。識處と識處解脱と識處一切入とは或は六に依り或は未來に依る。不用處と不用處解脱と有想無想處と有想無想解脱と滅盡解脱とは或は七に依り或は未來に依りて盡くるなり。

知他人心智に或は四に依り或は未來に依る。等智は或は七に依り或は未來に依りて盡くるなり。

此の中、五優婆塞戒とは、不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒の五學處なり。發智には、五欲の前に、五趣の定に依る滅をも附せり。

【六】六入内・六外入・六識身・六更樂身・六觸身・六想身・六思身・六愛身を減する三昧に就きて。此の中、六更樂(觸)身と六痛(愛)身と、六想身と六思身と

六愛身とは眼識乃至意識の六識の一と相應する更樂と痛と想と思と愛となり。【七】七識止と世八法とき減する三昧に就きて。【八】九業生居と十行迹とき減する三昧に就きて。

五盛陰——五取蘊
五欲——五妙欲
五優婆塞戒——五學處
六更樂身——六觸身
六痛身——六愛身
六內入・外入——六內處・外處
七識止——七識住
世八法——八世法
九業生居——九有情居
十行迹——十業道
(婆沙一七一、毘婆沙部十五、頁三五八以下參照)。
異にせり。發智と說順を多少異にせり。
【五七】身・口・教及び身・口・無教を減する三昧に就きて。因みに、婆沙に據れば、こは、表・無表(教・無教)の實有なることを顯示するなりと。
【五八】三惡行・三妙行・三不善根・三善根・四無聖語・四聖語四生四識所止を減する三昧に就きて。
【五九】發智には、四生の次に、四種入胎とあり。尙、以下、七に依る一句あり。時の七とは、四禪と下三無色定(三昧)となり。
【六〇】五陰・五盛陰と五妙・五優婆塞戒とき減する三昧に就きて。

べきときなり。頤に棄つることありや。答へて曰く、棄つることあり。無垢人の識處の愛を盡くせしものが欲・色界經によりて退するるときなり。漸に得することありや。答へて曰く、得することあり。^{一五五}漸に棄つることありや。答へて曰く、棄つること不ざるなり。

第十二節 身口の教・無教行乃至等智は何の定に依りて滅するやの論究

^{一五七}身教は何の三昧に由りて盡くるや。答へて曰く、或は初禪に依り、或は未來に依る。

口教も亦、是の如し。

身無教は或は四禪に依り或は未來に依る。

口無教も亦、是の如し。

^{一五六}三惡行・三妙行と、三不善根・三善根と四無聖語・四聖語と、^{一五九}四生のうちの胞胎・卵生・合會生とは未來定に依りて盡き、化生は或は七に依り、或は未來に依りて盡く。色識所止は或は四禪に依り、

或は未來に依る。痛・想・行識所止は或は七に依り、或は未來に依りて盡く。^{一六〇}色陰は或は四禪に依り、或は未來に依る。痛・想・行・識陰は或は七に依り、或は未來に依りて盡く。

色盛陰は或は四に依り、或は未來に依る。痛・想・行・識盛陰は或は七に依り、或は未來に依る。

^{一六一}五欲・五優婆塞(三)戒は或は未來に依りて盡く。

眼入と耳・鼻・舌・身入と、色・聲・細滑入とは或は四に依り、或は未來に依りて盡く。香入と味入とは未來に依る。意入と法入とは、或は七に依り或は未來に依る。

眼識・耳識・身識と、彼等と相應する更樂と痛と想と思と愛とは、或は初禪に依り、或は未來定に依る。鼻識と舌識と、彼等と相應する更樂と痛と想と思と愛とは未來に依り、意識と彼と相應する

更樂と痛と想と思と愛とは、或は七に依り或は未來に依りて盡く。

^{一六二}初識止は未來に依り、第二識止は或は初に依り、或は未來に依る。第三識止は或は二に依り或は

【一五】無漏の三無色定の頓得、業と漸頓・業とに就きて。

【一五】發智は、漸に捨することありとせり。

【一六】本節は、(1)身口の教(表業)と無教(無表)、(2)

三惡行、(3)三妙行、(4)三不善根、(5)三善根、(6)四非聖語、(7)四聖語、(8)四生、

(9)四識所止、(10)五陰、(11)五盛陰、(12)五妙、(13)

五優婆塞、(14)六內入、(15)六外入、(16)六觸身、(17)六更樂身、(18)六痛身、(19)六想身、(20)六思身、(21)六愛身、

(22)七識止、(23)世八法、(24)九衆生居、(25)十行迹、(26)

四禪、(27)四等、(28)四無色、(29)八解脫、(30)八除入、(31)

十一切入、(32)知他人心智と等智とは何の三昧に依りて滅するやを明す段なり。

因みに、本節に於ける新舊の異なる兩異譯を表示せば次の如し。

八難度

身教・口教

身表・語表

無表

未定

胎生

卵生

合會生

四識所止

五陰

の四禪を頓に棄つることありや。答へて曰く、棄つること不ず。頗し味相應の四禪を漸に得することありや。答へて曰く、得すること不ず。漸に棄つることありや。答へて曰く、棄つることあり。

一四八 頗し淨の四禪を頓に得することありや。答へて曰く、得すること不ず。頓に棄つることありや。答へて曰く、棄つることあり。第三禪の愛を盡くせしものが欲界纏によりて退するるときと、欲界又は梵天上より没して無色界に生ずるときとなり。漸に得することありや。答へて曰く、得することあり。漸に棄つることありや。答へて曰く、棄つることあり。

一四九 頗し無漏の四禪を頓に得することありや。答へて曰く、得することあり。第四禪に依りて越次取證するるときと、當に阿羅漢に逮ぶべきときとなり。頓に棄つることありや。答へて曰く、頓に棄つることあり。無垢人の第三禪の愛を盡くせしものが欲界纏によりて退するるときなり。漸に得することありや。答へて曰く、得することあり。漸に棄つることありや。答へて曰く、棄つること不ざるなり。

一五〇 頗し味相應の四無色定を頓に得することありや。答へて曰く、得することあり。阿羅漢の欲・色界纏によりて退するるときなり。頓に棄つることありや。答へて曰く、棄つること不ざるなり。漸に得することありや。答へて曰く、得すること不ざるなり。漸に棄つることありや。答へて曰く、棄つること不ざるなり。

一五一 頗し淨の四無色定を頓に得することありや。答へて曰く、得すること不ず。頓に棄つることありや。答へて曰く、棄つることあり。不用處愛を盡くせしものが欲・色界纏によりて退するるときなり。漸に得することありや。答へて曰く、得することあり。漸に棄つることありや。答へて曰く、棄つることあり。

一五二 頗し無漏の三無色定を頓に得することありや。答へて曰く、得することあり。當に阿羅漢に逮ぶることあり。

一五三 頗し無漏の三無色定を頓に得することありや。答へて曰く、得することあり。當に阿羅漢に逮ぶることあり。

【四】次下に「棄七竟り」との夾註あり

【三】味相應と淨との四無色と三無漏無色との退に關する七句問答。

【四】本節は、味相應と淨と無漏との四禪と味相應と淨との四無色と無漏の三無色定とを頓に得することありや、又は、頓に棄捨することありや、又は、漸に得するや、漸に棄つることありやを一一に就きて論究する段なり。

【一四七】發智は、漸に得すること「有り」とせり。

【一四八】淨の四禪の頓得・頓棄と漸得・漸棄に就きて。

【一四九】發智は、「欲界と梵世との纏……」とせり。

【一五〇】發智は、漸に棄つること「有り」とせり。

【一五一】味相應の四無色定の頓得・頓棄と漸得・漸棄に就きて。

【一五二】發智は、漸に得すること「有り」とせり。

【一五三】淨の四無色定の頓得・頓棄と漸得・棄に就きて。

無漏のも非らざることありや。答へて曰く、得することあり。凡夫人の不用處の愛を盡くすに違ふものなり。(3)無漏の三無色は得するも味相應の四無色は非らず、淨のも非らざることありや。答へて曰く、得することあり。當に阿羅漢果に違ふべきとなり。乃至(6)淨と無漏とのを得するも味相應のは非らざることありや。答へて曰く、得することあり。無垢人の不用處愛を盡くすに違ふときなり。餘を得することありや。答へて曰く、得ことの不ざるなり。

(1)頗し味相應の四無色定を棄つるも淨のは非らず無漏のも非らざることありや。答へて曰く、棄つること不ざるなり。(2)淨のを棄つるも味相應のは非らず無漏のは非らざることありや。答へて曰く、棄つることあり。凡夫人の不用處愛を盡くせるもの欲・色界纏によりて退するときなり。乃至(6)淨と無漏とのを棄つるも味相應のは非らざることありや。答へて曰く、棄つることあり。無垢人の不用處愛を盡せるもの欲・色界纏によりて退するときなり。餘を棄つることありや。答へて曰く、棄つること不ざるなり。

(1)頗し味相應の四無色定を退するも淨のは非らず無漏のは非らざることありや。答へて曰く、退すること不ず。(2)淨のは退するも味相應のは非らず無漏のは非らざることありや。答へて曰く、退することあり。凡夫人の不用處愛を盡くせるもの欲・色界纏によりて退するときなり。乃至(6)淨と無漏とを退するも味相應のは非らざることありや。答へて曰く、退することあり。無垢人の不用處愛を盡せるもの欲・色界纏によりて退するときなり。餘を退することありや。答へて曰く、退すること不ざるなり。

第十一節 味相應と淨と無漏との禪と無色の頓得・頓棄(捨)と漸得・漸棄に就きて

頗し味相應の四禪を頓に得することありや。答へて曰く、得す、色愛を盡せるものが欲界纏によりて退するるときと、若しくは無色界より没して欲界又は梵天上に生ずるときとなり。頗し味相應

と無漏との三無色の成就に關する七句問答。

【三】餘とは、七句問中の第二・三・四・五・七句を指す。

【三】次下に、「無色の七寛り」との夾註あり。

【三】味相應と淨との四無色と三無色との不成就に關する七句問答。

【三】餘とは、七句問中の、第二・三・四・五・七句を指す。餘の意義は以下之に准ず。

【三】次下に、「無色不成寛り」との夾註あり。

【三】本節の論述形式も、第七節以來のものにして、味相應と淨との四無色と三無漏無色との得論・棄論・退論を七句に分けて明す段なり。

因みに、發智と其の説願異ること前述の如し。

(婆沙一六九、毘婆沙十五、頁三二一以下參照)

【三】味相應と淨との四無色と無漏の三無色との得に關する七句問答。

【三】此の第二句は、發智は「答ふ、無きなり」とせり。

【三】此の第六句も、發智には無しと答ふ。

【三】次下に、「得七寛り」との夾註あり。

【三】味相應と淨との四無色と無漏の三無色との違に關する七句問答。

答へて曰く、棄つること不ざるなり。^{二二四}

(1) 頗し味相應の四禪を退するも淨のは非らず無漏のは非らざることありや。答へて曰く、退すること不ざるなり。(2) 淨のは退するも味相應のは非らず無漏のも非らざることありや。答へて曰く、退することあり。凡夫人の第三禪の愛を盡くせるもの、欲界纏により退するときなり。乃至(6) 淨と無漏とのを退するも味相應のは非らざることありや。答へて曰く、退することあり。無垢人の第三禪の愛を盡くせるもの、欲界纏により退するときなり。餘を退することありや。答へて曰く、退すること不ざるなり。^{二二七}

第九節 味相應と淨と無漏との無色定の成就・不成就に關する七句問答

(1) 頗し味相應の四無色定を成就するも、淨のは非らず無漏のは非らざるものありや。答へて曰く、有り。色愛を未だ盡くさざるものなり。乃至(6) 淨と無漏とのを成就するも、味相應のは非らざるものありや。答へて曰く、有り。欲・色界に生じて阿羅漢果を得するもの、若しくは空處に生じて阿羅漢果を得するものなり。餘を成就するもの有りや。答へて曰く、無きなり。^{二二八}

(1) 頗し味相應の四無色定を成就せざるものにして、淨のを成就せざるに非ず無漏のを成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。阿羅漢の欲・色界に生ずるもの、若しくは阿羅漢の空處に生ずるものなり。乃至(6) 淨と無漏とのを成就せざるものにして、味相應のを成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。色愛を未だ盡くさざるものなり。餘を成就せざるものありや。答へて曰く、無きなり。^{二三四}

第十節 味相應と淨と無漏との無色の得・棄・退に關する七句問答

頗し味相應の四無色定を得するも、淨のは非らず無漏のは非らざることありや。答へて曰く、得することあり。阿羅漢の欲・色界纏によりて退するときなり。^{二三七}(2) 淨のは得するも味相應のは非らず

無しとせり。

【二二九】餘とは、七句問中の第四・第五・第七句をさす。

【二三〇】次下に、「得の七問竟り」との夾註あり。

【二三一】味相應等の四禪の棄に關する七句問答。

【二三二】發智には、次下に、「若しくは欲界と梵世とより没して無色界に生ずる時なり」との一句あり。

【二三三】餘とは、七句問中の第三・第四・第五・第七句をさす。

【二三四】次下に、「棄の七問竟り」との夾註あり。

【二三五】味相應等の四禪よりの退に關する七句問答。

以下の文は、發智と其の説順を異にせり。發智は、此の所に、「味相應等の四無色の得捨に關する七句問答」あり。

【二三六】餘とは、七句問中の第三・第四・第五・第七句をさす。

【二三七】次下に、「退の七問竟り」との夾註あり。

【二三八】本節も亦、前前節の論述形式に則りて、味相應等の無色定の成就論と不成論とを各各七句に分けて分別する段なり。

因みに、發智と説順の異なること前述の如し。

(婆沙一六九、毘曇部十五、頁三一九以下參照)。

【二二九】味相應と淨との四無色

【二三〇】味相應と淨との四無色

【二三一】味相應と淨との四無色

【二三二】味相應と淨との四無色

【二三三】味相應と淨との四無色

【二三四】味相應と淨との四無色

【二三五】味相應と淨との四無色

【二三六】味相應と淨との四無色

【二三七】味相應と淨との四無色

【二三八】味相應と淨との四無色

【二三九】味相應と淨との四無色

【三四〇】味相應と淨との四無色

【三四一】味相應と淨との四無色

【三四二】味相應と淨との四無色

【三四三】味相應と淨との四無色

【三四四】味相應と淨との四無色

無漏のは成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。無垢人の無色界に生ずるものなり。
(5) 味相應と無漏との成就せざるものにして淨のは成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。凡夫人の欲界若しくは梵天上に生じて色愛を盡くせるものなり。(6) 淨と無漏との成就せざるものにして、味相應のは成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。欲界愛を未だ盡くさざるものなり。(7) 味相應と淨と無漏との四禪を成就せざるものありや。答へて曰く、有り。凡夫人の無色界に生ずるものなり。

第八節 味相應と淨と無漏との四禪の相互得・棄・退に關する七句問答

(一) 頗し味相應の四禪を得するものにして淨のは非らず無漏のも非らざるものありや。答へて曰く、得するものあり。色愛を盡くせるものが欲界纏によりて退するときと、若しくは無色界より没して欲界に生ずるときとなり。(2) 淨の四禪を得するも味相應のは非らず、無漏のは非らざるものありや。答へて曰く、得するものあり。凡夫人の第三禪の愛の盡に逮ぶときなり。(3) 無漏の四禪を得するも味相應のは非らず淨のも非らざることありや。答へて曰く、得することあり。第四禪に依りて越次取證するるときと、當に阿羅漢果に逮ぶときとなり。乃至(6) 淨と無漏との四禪を得するも味相應のは非らざることありや。答へて曰く、得することあり。無垢人の第三禪の愛の盡に逮ぶときなり。餘を得することありや。答へて曰く、得することあらざるなり。

(1) 頗し味相應の四禪を棄つるも淨のは非らず、無漏のも非らざることありや。答へて曰く、棄つることあらざるなり。(2) 淨のは棄つるも味相應のは非らず無漏のも非らざることありや。答へて曰く、棄つることあり。凡夫人にして第三禪の愛を盡くせしものが欲界纏によりて退するときなり。乃至(6) 淨と無漏とのを棄つるも味相應のは非らざることありや。答へて曰く、棄つることあり。無垢人にして第三禪の愛を盡くせるものが欲界纏によりて退するときなり。(7) 餘を棄つることありや。

て論究するなり。
不成就論の形式も亦、之に准ず。而して、以下の番號は、此の七句問答の順位を示すなり。

(婆沙一六九、毘曇部十五、頁三一六以下參照)。

因みに、發智は、答へに無しと言ふは、之を略記せり。

【二】味相應等の四禪の成就に關する七句問答。

【三】次下に、「七問竟り」との夾註あり。

【三】味相應等の四禪の相互不成就に關する七句問答。

【四】次下に、「問不成就七竟り」との夾註あり。

【五】本節は、前節と同様の問答形式を用ひて、味相應等の四禪相互の得論及び棄論と退論とを明す段なり。

因みに、こは、發智の說順と異れり。發智にては、「味相應等の無色の成就・不成就論の次に本節を論述せり。

(婆沙一六九、毘曇部十五、頁三二〇以下參照)。

【二】味相應等の四禪の得に關する七句問答。

【三】發智は、「答ふ、無し」とせる點、大いに八變度と異る。

【二】此の第六句なる「淨と無漏との四禪を得するも、味相應のは非らず」を、發智は、

淨の四無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は一、或は四を成就するなり。云何んが一を成就するや。答へて曰く、有想無想處に生ずるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、欲界・色界に生ずるもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

無漏の三無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、一切を成就するなり。^{一〇九}

第七節 味相應と淨と無漏との四禪の相互成就・不成就に關する七句問答

二 (1) 頗し味相應の四禪を成就するも、淨のは非らず無漏のも非らざるものありや。答へて曰く、有り。欲界愛を未だ盡くさざるものなり。 (2) 淨の四禪を成就するも、味相應のは非らず無漏のも非らざるものありや。答へて曰く、有り。凡夫人にして欲界若しくは梵天上に生じて色愛を盡くすものなり。 (3) 無漏の四禪を成就するも味相應のは非らず淨のも非らざるものありや。答へて曰く、有り。無垢人の無色界に生ずるものなり。 (4) 味相應と淨との四禪を成就するも、無漏のは非らざるものありや。答へて曰く、無きなり。 (5) 味相應と無漏との成就するも、淨のは非らざるものありや。答へて曰く、無きなり。 (6) 淨と無漏との成就するも味相應のは非らざるものありや。答へて曰く、有り。無垢人の欲界若しくは梵天上に生じて色愛を盡くせるものなり。 (7) 味相應と淨と無漏との禪を成就するものありや。答へて曰く、無きなり。^{一一〇}

二 (1) 頗し味相應の四禪を成就せざるものにして、淨のは成就せざるに非ず無漏のも成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。無垢人の欲界若しくは梵天上に生じて色愛を盡くすものなり。 (2) 淨を成就せざるものにして味相應のは成就せざるに非ず無漏のも成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、無きなり。 (3) 無漏のを成就せざるものにして味相應のは成就せざるに非ず、淨のも成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、無きなり。 (4) 味相應と淨との成就せざるものにして、

【一〇九】 次下に、「七人竟り」との割註あり。

【一一〇】 本節は、味相應の四禪と淨の四禪と無漏の四禪との相互の成就論と不成就論とを七句に分ちて問答分別する段なり。

(一) 味相應の四禪を成就するも、淨の四禪と無漏の四禪とは成就せざるものありや。

(二) 淨の四禪は成就するも、味相應と無漏との非らざるものありや。

(三) 無漏の四禪は成就するも、他は非らざるものありや。

(四) 味相應と淨との四禪は成就するも、他は非らざるものありや。

(五) 味相應と無漏との成就するも、他は非らざるものありや。

(六) 淨と無漏との成就するも、他は非らざるものありや。

(七) 味相應と淨と無漏との四禪を凡て成就するものありや。斯くの如き七種の問題に就き

を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、識處愛を盡くすもの、是を三を成就するものと謂ふなり。

二〇三 見到も亦、是の如し。

二〇四 身證人は、味相應の四無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、一は成就するも三は成就せざるなり。

淨の四無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は一、或は四を成就するなり。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、有想無想處に生ずるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは色界に生ずるもの、是を四を成就するものと謂ふ。

無漏の三無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、一切を成就するなり。

二〇五 慧解脱人は味相應の四無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、一切成就せざるなり。淨の四無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、有想無想處に生ずるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、不用處に生ずるもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、識處に生ずるもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生ずるもの、若しくは色界に生ずるもの、若しくは空處に生ずるもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

二〇六 慧解脱人は無漏の三無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、一切を成就するなり。俱解脱人は味相應の四無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、一切を成就せざるなり。

り。

【二〇三】見到の味相應等の無色の成就・不成就論。

信解脱人の如しとなり。

【二〇四】身證人の味相應等の無色の成就・不成就論。

【二〇五】一は成就するとは、未だ有頂の愛を斷せざるが故なり。

【二〇六】慧解脱人の味相應等の無色の成就・不成就論。

【二〇七】發智は、「云何が二……是を三を成就すると謂ふ」を「乃至」の言にて省略せり。

【二〇八】俱解脱人の味相應等の無色の成就・不成就論。

101 信解脫人は淨の四無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きものあり、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、欲界若しくは色界に生じて色愛を未だ盡くさざるもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは色界に生じて色愛を盡くすも空處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは空處に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、若しくは識處に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、若しくは不用處に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、若しくは有想無想處に生ずるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは色界に生じて空處愛を盡くすも識處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは空處に生じて彼の愛を盡くすも不用處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは不用處に生じて彼の愛を盡くすもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは色界に生じて識處愛を盡くすも不用處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは空處に生じて識處愛を盡くすも不用處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは識處に生じて不用處愛を盡くすもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは色界に生じて不用處愛を盡くすもの、若しくは空處に生じて不用處愛を盡くすもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

102 信解脫人は無漏の三無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きものあり。或は一・二・三を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、色愛を未だ盡くさざるもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、色愛を盡くすも空處愛を未だ盡くさざるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、空處愛を盡くすも識處愛を未だ盡くさざるもの、是を二

【101】信解脫人の淨の四無色の成就・不成就論。

【102】信解脫人の無漏の三無色の成就・不成就論。

未だ盡くさざるもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや、答へて曰く、空處愛を盡くすも識處愛は未だ盡くさざるもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、空處愛を未だ盡くさざるもの、是を四を成就するものと謂ふ。

堅信人は淨の四無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きものあり、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、色愛を未だ盡くさざるもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、色愛を盡くすも空處の愛を未だ盡くさざるもの、是を一を成就するものと謂ふなり。

云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、空處愛を盡くすも識處愛を未だ盡くさざるもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、識處愛を盡くすも不用處愛を未だ盡くさざるもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、不用處愛を盡くすもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

堅信人は無漏の三無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、一切を成就せざるなり。堅法も亦、是の如し。

信解脫人は味相應の四無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、不用處愛を盡くすもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、識處愛を盡くすも、不用處愛を未だ盡くさざるもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、空處愛を盡くすも識處愛を未だ盡くさざるもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、空處愛を未だ盡くさざるもの、是を四を成就するものと謂ふ。

【九七】堅信人の淨の四無色に於ける成就・不成就論。

【九八】堅信人の無漏の三無色の成就・不成就論。

【九九】堅法人の味相應の無色の成就・不成就論。

堅信人の如しとなり。

【一〇〇】信解脫人の味相應の四無色の成就・不成就論。

或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、有想無想處に生ずるもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、果實に生ずるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、遍淨に生ずるもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、光音に生ずるもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生ずるもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

九二 身證は無漏の四禪を幾く成就し、幾く成就し。答へて曰く、一切を成就するなり。

九三 俱解脱も亦、是の如し。

九四 慧解脱人は味相應の四禪を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、一切を成就せざるなり。

淨の四禪を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きものあり、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、無色界に生ずるもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、果實に生ずるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、遍淨に生ずるもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、光音に生ずるもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生ずるもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

九六 慧解脱人は無漏の四禪を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、一切を成就するなり。

堅信人は味相應の四無色定を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、不用處の愛を盡くすもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、識處愛を盡くすも不用處愛は

【九二】發智は、「乃至」と言ひて「云何が二を成就するや……是を三を成就するもの」と謂ふに迄を省略せり。

【九三】身證人の無漏の四禪の成就不成就論。

【九四】俱解脱人の味相應等の四禪の成就不成就論。身證人の如しとなり。

【九五】慧解脱人の味相應・淨・無漏の四禪の成就不成就論。

【九六】發智は、「乃至」と言ひて「云何が二を……是を三を成就する」と謂ふの文を省略せり。

【九七】堅信人の味相應の四無色に於ける成就不成就論。

未だ盡くさざるもの、若しくは梵天上に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、若しくは光音に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、若しくは遍淨に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、若しくは果實に生ずるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じ、梵天上愛を盡くすも光音愛を未だ盡くさざるもの、若しくは遍淨に生じて彼の愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、若しくは遍淨に生じて彼の愛を盡くすものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて光音愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、若しくは光音に生じて遍淨愛を盡くすもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて遍淨愛を盡くすもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

^{八七}信解脫人は無漏の四禪を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きものあり、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、欲愛を盡くすも梵天上愛を未だ盡くさざるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、梵天上愛を盡くすも光音愛を未だ盡くさざるもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、光音愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、遍淨愛を盡くすもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

^{八八}見判も亦其の如し。

^{八九}身證人は味相應 四禪 幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、一切成就せざるなり。

身證人は淨の四禪を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きものあり、

【八七】 信解脫人の無漏の四禪の成就・不成就論。

因みに、發智は、無漏の四禪の成就論の次に、直ちに、信解脫人の味等の四無色定の成就・不成就論をなし、八難度と設顯異れり。

【八九】 見到の味相應等の四禪の成就・不成就論。

信解脫人の如しとなり。

【九〇】 身證人の味相應の四禪の成就・不成就論。

【九一】 身證人の淨の四禪の成就・不成就論。

或は一・二・三・四を成就するあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、未來に依りて越次取證するもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、初禪に依りて越次取證するもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、第二禪に依りて越次取證するもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、第三禪に依りて越次取證するもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、第四禪に依りて越次取證するもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

^{A三} 堅法も亦、是の如し。

^{A四} 信解脱人は味相應の四禪を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きものあり、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、色愛を盡くすもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、遍淨愛を盡くすも果實愛を未だ盡くさざるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、光音愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、梵天上愛を盡くすも光音愛を未だ盡くさざるもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、梵天上愛を未だ盡くさざるもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

^{A五} 信解脱人は淨の四禪を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きものあり、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、欲界に生じて欲愛を未だ盡くさざるもの、若しくは無色界に生ずるもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じて欲愛を盡くすも梵天上愛を

【八三】 發智は、「初靜慮或は靜慮中間に依りて」と言ふ。

【八四】 堅法人の味相應等の四禪の成就・不成就論。

堅信人の如しとなり。

【八五】 信解脱人の味相應の四禪の成就・不成就論。

【八六】 信解脱人の淨の四禪の成就・不成就論。

乃至第四禪の成就に於いても、初禪の場合の如く、亦、是の如し。

第六節 七無垢人の味相應等の四禪四無色に於ける成就不成就論

七人あり、堅信と堅法と信解脫と見到と身證と慧解脫と俱解脫となり。

堅信人は味相應の四禪を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きあり、或は一・二・三・四を成就するものなりや。答へて曰く、色界愛を盡くすもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、遍淨愛を盡くすも果實愛を未だ盡くさざるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、光音愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、梵天上愛を盡くすも光音愛を未だ盡くさざるもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、梵天上愛を未だ盡くさざるもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

堅信人は淨の四禪を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きあり、或は一・二・三・四を成就するものなり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるもの、是を淨の四禪を成就すること無きものと謂ふ。云何んが淨の一を成就するものなりや。答へて曰く、欲愛を盡くすも梵天上愛を未だ盡くさざるもの、是を一を成就するものと謂ふ。云何んが二を成就するものなりや。答へて曰く、梵天上愛を盡くすも光音愛を未だ盡くさざるもの、是を二を成就するものと謂ふ。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、光音愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、是を三を成就するものと謂ふ。云何んが四を成就するものなりや。答へて曰く、遍淨愛を盡くすもの、是を四を成就するものと謂ふなり。

堅信人は無漏の四禪を幾く成就し幾く成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きあり、

【七】 第二禪・第三禪・第四禪の成就者の四禪乃至三三昧の成就に就きて。

初禪成就者の場合の如しとなり。

【七】 本節は、堅信人等の七無垢人が味相應と淨と無漏との四禪・四無色の幾くを成就し幾くを成就せざるやを論究する段なり。

(婆沙一六八、毘曇部十五、頁三〇五以下参照)。

因みに、發智にては、信解脫人以後の所論に於いて、四禪の成就・不成就論の次に、四無色の成就・不成就論をなす點、八禪度が、四無色の成就・不成就論は之を後に更めて、爲すのと説相異なれり。然し其の内容は同一なり。

【尤】 七無垢人の名目。

【合】 堅信人の味相應の四禪の成就・不成就論。

【合】 堅信人の淨の四禪の成就・不成就論。

【合】 堅信人の無漏の四禪の成就・不成就論。

なりや。答へて曰く、空處に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、若しくは識處に生ずるもの、是を一切入を成就するものと謂ふ。云何んが二一切入を成就するものなりや。答へて曰く、空處に生じて彼の愛を盡くすものは二一切入を成就するものと謂ふ。云何んが八一切入を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて遍淨愛を盡くすも果實愛を未だ盡くさざるもの、若しくは光音に生じて遍淨淨愛を盡くすも果實愛を未だ盡くさざるもの、若しくは彼の愛を盡くすも果實愛を未だ盡くさざるもの、若しくは果實に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、是を八一切入を成就するものと謂ふ。云何んが九一切入を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは色界に生じて色愛を盡くすも空處愛を未だ盡くさざるもの、是を九一切入を成就するものと謂ふ。云何んが十一一切入を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは色界に生じて空處愛を盡くすもの、是を十一一切入を成就するものと謂ふなり。

若し初禪を成就するものなれば、此の八智に於て幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は二・四・五・六・七・八を成就するものあり。云何んが二智を成就するものなりや。答へて曰く、凡夫人は二を成就し、無垢人なれば苦法忍の現在前するとき二を成就し、苦法智のときは四智を成就し、苦未知忍のときは四智を、苦未知智のときは五を、習法忍のときは五を、習法智のときは六を、習未知忍、習未知智、盡法忍のときは六を、盡法智のときは七を、盡未知忍、盡未知智、道法忍のときは七を、道法智のときは八を、道未知忍、道未知智のときは八を成就するなり。

若し初禪を成就するものなれば、此の三三昧に於て幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きあり、或は二・三を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、凡夫人は成就すること無きなり。無垢人なれば、盡法忍未生のときは二を、

已生のときは三を成就するなり。

【七〇】初禪を成就する者の、八智の成就に就きて。

【七一】二智とは、知他人心智と等智となり。

因みに、二の下に、大正本には等の字あるも、三本・宮本には無きを以て、是を除く。

【七二】四智とは、知他人心智と等智との外に苦智と法智となり。

【七三】五とは、前の四に類智を加ふるなり。

以下、順次に、習智・減智・道智を増して、六・七・八智を成就することとなるなり。

【七四】初禪を成就する者の、三三昧の成就に就きて。

【七五】二とは、空と無願となり。

【七六】順次に、「初竟り」の割註あり。

り。云何んが七解脱を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて不用處愛を盡くすも滅盡三昧を得せざるもの、若しくは光音に生じて不用處愛を盡くすも滅盡三昧を得せざるもの、是を七解脱を成就するものと謂ふなり。云何んが八解脱を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて滅盡三昧を得するもの、若しくは光音に生じて滅盡三昧を得するもの、是を八解脱を成就するものと謂ふなり。

若し初禪を成就するものなれば、此の八除入に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きものあり、或は四、或は八を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、遍淨に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、若しくは無色界に生ずるもの、是を除入を成就すること無きものと謂ふ。云何んが四除入を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて光音愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、若しくは光音に生じて彼の愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、若しくは遍淨に生じて彼の愛を盡くすもの、若しくは果實に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、是を四除入を成就するものと謂ふ。云何んが八除入を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて遍淨愛を盡くすもの、若しくは光音に生じて遍淨愛を盡くすもの、是を八除入を成就するものと謂ふなり。

若し初禪を成就するものなれば、此の十一切入に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は一切入を成就すること無きものあり、或は一・二・八・九・十を成就するものあり。云何んが一切入を成就すること無きものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて光音愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、若しくは光音に生じて彼の愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、若しくは遍淨に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、若しくは不用處に若しくは有想無想處に生ずるもの、是を一切入を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一切入を成就するもの

【六〇】初禪を成就する者の、八除入の成就に就きて。

【六一】初禪を成就する者の、十一切入の成就に就きて。

脱を成就するものと謂ふなり。云何んが三を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて遍淨愛を盡くすも果實愛を未だ盡くさざるもの、若しくは光音に生じて遍淨愛を盡くすも果實愛を未だ盡くさざるもの、若しくは遍淨に生じて空處愛を盡くすも識處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは果實に生じて空處愛を盡くすも識處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは空處に生じて識處愛を盡くすも不用處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは識處に生じて彼の愛を盡くすも不用處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは不用處に生じて彼の愛に於て未だ盡さざるもの、是を三解脱を成就するものと謂ふ。云何が四解脱を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて果實愛を盡くすも空處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは光音に生じて果實愛を盡くすも空處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは遍淨に生じて識處愛を盡くすも不用處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは果實に生じて識處愛を盡くすも不用處愛を未だ盡さざるもの、若しくは空處・識處に生じて不用處愛を盡くすも滅盡三昧を得せざるもの、若しくは不用處に生じて彼の愛を盡くすも滅盡三昧を得せざるもの、若しくは有想無想處に生じて滅盡三昧を得せざるもの、是を四解脱を成就するものと謂ふなり。云何んが五解脱を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて空處愛を盡くすも識處愛を未だ盡さざるもの、若しくは光音に生じて空處愛を盡くすも識處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは遍淨に生じて不用處愛を盡くすも滅盡三昧を得せざるもの、若しくは有想無想處に生じて滅盡三昧を得するもの、是を五解脱を成就するものと謂ふなり。云何んが六解脱を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて識處愛を盡くすも不用處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは光音に生じて識處愛を盡くすも不用處愛を未だ盡さざるもの、若しくは遍淨に生じて滅盡三昧を得するもの、若しくは果實に生じて滅盡三昧を得するもの、是を六解脱を成就するものと謂ふなり。

應し、滅智は無相三昧と、道智は道を緣する無願三昧と相應するなり。

【六〇】三三昧と三三昧との相應關係。

【六一】次に、「相應覺る」の夾註より。

【六二】本節は、四禪の一を成就するものは、四禪・四無色・四等・八解脱・八除入・十一切入・八智三三昧の各各の幾くを成就するやを初禪を成就するものに就きて代表せしめて詳論する段にして、後三禪に就きては、推知せしむる方針を採れり。

（婆沙一六八、毘曇部十五、頁二八九以下參照）。

因みに、婆沙は、本論提起の因由は、成就・不成就性の非顯示説を破し、其の實有説を

【六三】初禪を成就する者の四禪の成就に就きて。

【六四】初禪を成就する者の、四等の成就に就きて。

【六五】三等とは、喜等を除くもの。

【六六】初禪を成就する者の、四無色定の成就に就きて。

【六七】初禪を成就する者の、八解脱の成就に就きて。

若し初禪を成就するものなれば、此の四無色定に於て、幾くを成就し幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は成就することは無きものあり、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、色界の愛を未だ盡くさざるもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一無色定を成就するものなりや。答へて曰く、色愛を盡くすも空處愛を未だ盡くさざるもの、是を一無色定を成就するものと謂ふ。云何んが二無色定を成就するものなりや。答へて曰く、空處愛を盡くすも識處愛を未だ盡くさざるもの、是を二無色定を成就するものと謂ふ。云何んが三無色定を成就するものなりや。答へて曰く、識處愛を盡くすも不用處の愛を未だ盡くさざるもの、是を三無色定を成就するものと謂ふ。云何んが四無色定を成就するものなりや。答へて曰く、不用處の愛を盡くすもの、是を四無色定を成就するものと謂ふなり。

若し初禪を成就するものなれば、此の八解脱に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は解脱を成就すること無きものあり、或は一・二・三・四・五・六・七・八を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、遍淨に生じ彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、是を解脱を成就すること無きものと謂ふ。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、遍淨に生じ彼の愛を盡くすも、果實の愛を未だ盡くさざるもの、若しくは果實に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、若しくは空處に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、是を一解脱を成就するものと謂ふ。云何んが二解脱を成就するものなりや。答へて曰く、欲界若しくは梵天上に生じて光音の愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、若しくは光音に生じて彼の愛を盡くすも遍淨愛を未だ盡くさざるもの、若しくは遍淨に生じて果實愛を盡くすも空處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは果實に生じて彼の愛を盡くすも空處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは空處に生じて彼の愛を盡くすも識處愛を未だ盡くさざるもの、若しくは識處に生じて彼の愛に於て未だ盡くさざるもの、是を二解

の夾註あり。

【四四】發智は、後二靜慮と相應す」と言ふ。

【四五】四禪は四禪乃至三三昧の幾くと相應するや。

【四六】三等とは、喜等を除く。

【四七】三等とは、「註四五」を参照。

【四八】四等は四等乃至三三昧の幾くと相應するや。

【四九】四無色は四無色乃至三三昧の幾くと相應するや。

【五〇】六智は、「註二七」の如し、以下之に準ず。

【五一】八解脱は八解脱乃至三三昧の幾くと相應するや。

【五二】六智の次下に、「四禪智と未知智と等智となり」との夾註あり。

【五三】發智には、次下に、「滅想受解脫は相應するに非ず」との一句あり。

【五四】八入は八入乃至三三昧の幾くと相應するや。

【五五】十一切入は十一切入乃至三三昧の幾くと相應するや。

【五六】八智は八智と三三昧との幾くと相應するや。

【五七】發智には、「等智は三昧と相應すること無し」の一句なし。

【五八】二の三昧とは、空と無願となり。

【五九】一の三昧といふも、發智は集を緣ずる無願三昧と相

び等智とも相應す。

法智と未知智とは三三昧の少入と相應し、知他人心智は、一の三昧（無願）の少入と相應す。等智は三昧と相應すること無し。苦智は二の三昧の少入と相應し、習・盡・道智は一の三昧の少入と相應す。

空・無相・無願三昧は三昧と相應すること無し。

第五節 四禪の一を成就する者は、四禪乃至三三昧の幾くを成就するやの論究

若し初禪を成就すれば、此の四禪に於て、幾くを成就し、幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は一・二・三・四を成就するものあり。云何んが可禪を成就するものなりや。答へて曰く、欲愛を盡くすも、梵天上の愛を未だ盡くさざるもの、是を一禪を成就するものと謂ふ。云何んが二禪を成就するものなりや。答へて曰く、梵天上の愛を盡くすも、光音愛を未だ盡くさざるもの、是を二禪を成就するものなりや。云何んが三禪を成就するものなりや。答へて曰く、光音愛を盡くすも遍淨の愛を未だ盡くさざるもの、是を三禪を成就するものと謂ふ。云何んが四禪を成就するものなりや。答へて曰く、遍淨の愛盡くすもの、是を四禪を成就するものと謂ふ。

若し初禪を成就するものなれば、此の四等に於て幾くを成就し、幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は成就すること無きあり、或は三、或は四を成就するものあり。云何んが成就すること無きものなりや。答へて曰く、無色界に生ずるもの、是を成就すること無きものと謂ふ。云何んが三等を成就するものなりや。答へて曰く、遍淨若しくは果實に生ずるもの、是を三等を成就するものと謂ふ。云何んが四等を成就するものなりや。答へて曰く、欲界、若しくは梵天上、若しくは光音に生ずるもの、是を四等を成就するものと謂ふなり。

「苦智は、苦智と二智（法・類智）の少分とを攝し、集智は集智と二智の少分とを攝し、滅智は道智と二智の少分とを攝し、道智は道智と三智（法・類・他心）の少分とを攝す」とす。故に茲の八健度の文は不完全なり。

【三七】三三昧は三昧の幾くを攝するや。

【三八】次下に、「攝竟り」との夾註あり。

【三九】本節に於ける、其在の意は攝の意なるが故に其の内容、第一節、第二節と同様なり。故に、「亦是の如し」といへるなり。

（婆沙一六七、毘曇部十五、頁二八二參照）。

【四〇】本節は、十想・四禪・四無色・四等・八解脫・八除入・一切入・八智・三三昧の一が相互に如何に相應するやを逐次に論究し行く段なり。

婆沙は本論は、相應法の實有説を顯示せんが爲めなりと言ふ。

（婆沙一六七、毘曇部十五、頁二八三以下參照）。

【四一】十想は四禪乃至三三昧の幾と相應するや。

【四二】四智とは、法智と未知智と等智と苦智となり。

【四三】一の三昧とは、苦を緣する無願なり。

因みに、次下に、「無願なり」と

不淨想と觀食想とは、四禪と相應し、初と第二との解脫と及び等智とも相應す。

一切世間不可樂想は、第三・第四禪と相應し、及び等智とも相應す。

四禪中、初禪は、初禪と相應し、四等と初第二解脫と初四除入と八智と三三昧とも相應す。

第二禪は、第二禪と相應し、四等と初・第二解脫と初四除入と八智と三三昧とも相應す。

第三禪は、第三禪と相應し、三等と八智と三三昧とも相應す。

第四禪は、第四禪と相應し、三等と淨解脫と後四除入と前八一切入と八智と三三昧とも相應す。

慈は慈と相應し、及び等智とも相應す。悲は悲と等智と相應し、喜は喜と等智と相應し、護は護と相應し、及び等智とも相應す。

四無色中、空處は、空處と相應し、空處解脫と空處入と、六智と三三昧とも相應す。

識處は、識處と相應し、識處解脫と識處入と六智と三三昧とも相應す。

不用處は不用處と相應し、不用處解脫と六智と三三昧とも相應す。

有想無想處は、有想無想處と相應し、有想無想解脫と及び等智とも相應す。

初と第二と第三との解脫は、初と第二と第三との解脫と相應し、及び等智とも相應す。

空處解脫は、空處解脫と相應し、空處入と、六智と三三昧とも相應す。

識處解脫は、識處解脫と相應し、識處入と六智と三三昧とも相應す。

不用處解脫は、不用處解脫と相應し、六智と三三昧とも相應す。

有想無想解脫は、有想無想解脫と相應し、及び等智とも相應す。

初除入は初除入と相應し、及び等智とも相應す。乃至第八除入は第八除入と相應し、及び等智と

も相應す。

初一切入は初一切入と相應し、及び等智とも相應す。乃至第十一一切入は第十一一切入と相應し、及

【五】 四等各自は無色乃至三昧の幾くを攝するや。

此の中、發智は、慈は慈と世俗智とを攝し、乃至捨は捨と世俗智とを攝す」と在りて八

【六】 四無色の各自は無色乃至三昧の幾くを攝するや。

【七】 六智とは、苦智・未知智・苦・習・盡・道智を指す。

以下之に準ず。

【八】 次下の夾註に、「無色寛り」とあり。

【九】 八解脫は解脫乃至三昧の幾くを攝するや。

【一〇】 發智には、次「一世俗智とをも攝す」との一句あり。

【一一】 以下の六智は、「註二七」の如し。

【一二】 次下の夾註に、「解脫寛り」とあり。

【一三】 八除入は除入乃至三昧の幾くを攝するや。

發智は、八除入の何れも、此の外に「世俗智(等智)を攝す」とせり。

【一四】 十一一切入は一切入乃至三昧の幾くを攝するや。

發智に、十一一切入の凡ては世俗智をも攝すとせり。

【一五】 八智は、智と三昧との幾くを攝するや。

發智と八難度卷第十一【一六】 發智は等智と一智(他心智)の少分とを攝す」とし、

慈は、慈を攝し、悲は悲を攝し、喜は喜を攝し、護は護を攝す。

四無色中、空處は空處と空處解脫と空處入と、六智と三三昧とを攝し、識處は、識處と識處解脫と識處入と六智と三三昧とを攝す。不用處は、不用處と不用處解脫と六智と三三昧とを攝し、有想無想處は、有想無想處と有想無想解脫と滅盡解脫と一智(等智)とを攝す。

初と第二と第三との解脫は、初と第二と第三との解脫を攝し、空處解脫は、空處解脫と空處入と、六智と三三昧とを攝し、識處解脫は、識處解脫と識處入と六智と三三昧とを攝し、有想無想解脫は、有想無想解脫と一智(等智)とを攝し、不用處解脫は、不用處解脫と六智と三三昧とを攝し、有想無想解脫は、有想無想解脫と一智(等智)とを攝し、滅盡解脫は、滅盡解脫を攝す。

初除入は、初除入を攝し、乃至第八除入は第八除入を攝す。

初一切入は初一切入を攝し、乃至第十一一切入は第十一一切入を攝す。

法智は法智と五智の少入とを攝す。此の中、五智とは知他人心智と苦智と習智と盡智と道智となり。未知智は、未知智と五智の少入とを攝す。此の中、五智とは、知他人心智と苦智と習智と盡智と道智となり。知他人心智は、知他人心智と四智の少入とを攝す。此の中、四智とは、法智と未知智と道智と等智となり。等智は、等智を攝し、苦智と習智と盡智と道智は、夫々各自のみを攝す。

空三昧は空三昧を攝し、無願は無願を攝し、無相は無相を攝するなり。

第三節 十想乃至三三昧の共在(可得)に關する論究

共在につきても亦、攝の如く、是の如し。

第四節 十想乃至三三昧は四禪乃至三三昧の幾くと相應するやの論究

無常想は、四禪と相應し、四無色定・四無色解脫・四智の一の三昧とも相應す。

無常想の如く、無常苦想「苦無我想」死想・斷想・無欲想・盡想も是の如し。

八健度 發智
十一 觀食想 厭食想
十 無欲想 離想
中 滅想
四 禪 四靜慮
四 等 四無量
護 捨無量
空 空無邊處
識 識無邊處
不用處 無所有處
有想無想 非想非非想處
八除入 八勝處
十一一切入 十通處
三三昧 三三摩地

【二九】十想の一と四禪等の相攝論。
【三〇】四禪は、發智には、第三・第四禪とのみあり、而して、不淨想・觀食想(厭食想)は皆四禪に在るに、後二靜慮を攝すとのみ説く所以に就きて、婆沙は種種の説を擧げて論究し居れり。

【三一】次に、「想竟り」の夾註あり。

【三二】本節は、四禪・四無色・四等・八解脫・八除入・十一一切入・八智・三三昧の各の一は相互何れを幾く攝するやを詳説する段なり。

(婆沙一六七、毘曇部十五、頁二七五以下参照)。

【三三】四禪の一は四無色乃至三三昧の幾くを攝するや。

【三四】次下の夾註に、「禪竟

頗し味相應の四無色定は頗に得し頗に棄つることありや、漸に得し漸に棄つることありや。
頗し淨の四無色定は頗に得し頗に棄つることありや、漸に得し漸に棄つることありや。

頗し無漏の三無色定は頗に得し頗に棄つることありや、漸に得し漸に棄つることありや。

〔十二〕身教は何の三昧に由りて盡くるや。身無教と口教・口無教とは何の三昧に由りて盡くるや。
三惡行・三妙行、三不善根・三善根、四不聖語・四聖語、四胞胎・四生・四識住、五陰・五盛陰、五欲・五
優婆塞戒、六內入・六外入、六識身・六更樂身・六痛身・六想身・六思身・六愛身、七識所止、世八法、
九衆生居、十行迹、四禪・四等・四無色定、八解脫・八除入・十一切入、知他人心智・等智は、何の三昧
に由りて盡くるや。

此の章の義、願くば具さに演說せん。

第一節 十想と四禪乃至三昧との相攝論

〔一〕十想あり、無常想・無常苦想・苦無我想・不淨想・觀食想・一切世間不可樂想・死想・斷想・無欲想・盡想
なり。

〔二〕無常想は、四禪と四無色定と四解脫とを攝す。無常苦想・苦無我想・死想・斷想・無欲想・盡想も亦、
是の如し。

不淨想と觀食想とは、四禪と初・第二解脫とを攝す。

一切世間不可樂想は、第三・第四禪を攝す。

第二節 四禪乃至三昧は、四禪乃至三昧の幾くを攝するやの論究

〔三〕四禪中、初禪は、初禪と四等と初・第二解脫と、初四除入と八智と三三昧とを攝し、第二禪は、第
二禪と四等と初・第二解脫と初四除入と八智と三三昧とを攝す。第三禪は、第三禪と三等等と八智と三
三昧とを攝し、第四禪は、第四禪と三等等と淨解脫と後四除入と八一切入と八智と三三昧とを攝す。

〔二〕身教身無教乃至等智等
は何の定に依りて滅するやの
問題。
※ 五陰は大正本に無きも三
本・宮本にあり。

〔七〕本節は、先づ十想の名
目を擧げ、此の一は四禪・
四無色・八解脫・八除入・十
切入・八智・三三昧の幾くを攝
するやを論究する段なり。
婆沙に據るに、本論提起の緣
由は、「他性を攝するも自性を
攝すとするを許さざる」分別
論者の異執を遮し、法は「自
性をのみ攝し他性を攝するに
非ざること」を顯示せんが爲
めなりと言ふ。
〔婆沙一六七、毘曇部十五、頁
二七〇以下參照〕。
〔八〕十想の名目。
因みに、十想と四禪乃至三三
昧との新舊兩譯の異名を列示
せば次の如し。

堅信人は味相應の四無色定の幾くを成就し幾くを成就せざるや。淨の四無色定の幾くを成就し、幾くを成就せざるや、無漏の幾くを成就し幾くを成就せざるや。

乃至、俱解脫人は味相應の四無色定の幾くを成就し、幾くを成就せざるや、淨の幾くを成就し、幾くを成就せざるや、無漏の幾くを成就し幾くを成就せざるや。

(七) (1) 頗し味相應の四禪は成就するも、淨のは非らず、無漏のも非らざるものありや。(2) 淨のは成就するも味相應のは非らず無漏のも非らざるものなりや。(3) 無漏のは成就するも、味相應のは非らず、淨のも非らざるものありや。(4) 味相應のと淨のとを成就するも無漏のは非らざるものありや。

(5) 味相應のと無漏のとを成就するも、淨のは非らざるものありや。(6) 淨と無漏とのは成就するも、味相應のは非らざるものありや。(7) 味相應と淨と無漏との四禪を成就するものありや。

不成就(八) 得・棄・退に就きての、七句問も亦、是くの如し。

(九) (1) 頗し味相應の四無色定を成就するも、淨のは非らず無漏のも非らざるものありや。(2) 淨の四無色定を成就するも、味相應のは非らず無漏のは非らざるものありや。(3) 無漏のは成就するも、味相應のは非らず、淨のも非らざるものありや。(4) 味相應と淨とのを成就するも無漏のは非らざるものありや。(5) 味相應と無漏とのを成就するも、淨のは非らざるものありや。(6) 淨と無漏とのは成就するも、味相應のは非らざるものありや。(7) 味相應と淨と無漏との四無色定を成就するものありや。

不成就(十) 得・棄・退につきての七句問も亦、是くの如し。

(十一) 頗し味相應の四禪は頗に得し頗に棄つることありや、漸に得し、漸に棄つることありや。頗し淨の四禪は頗に得し頗に棄つることありや、漸に得し漸に棄つることありや。

頗し無漏の四禪は頗に得し頗に棄つることありや、漸に得し漸に棄つることありや。

【二】 味相應・淨・無漏の四禪の成就・不成就等の七句分別門。

【三】 次下に、「成竟り」との夾註あり。

【四】 味相應・淨・無漏の四無色の成就・不成就等の七句分別門。

【五】 次下に、「成竟り」との夾註あり。

【六】 味相應等の四禪・四無色の頗の得・捨、漸の得・捨問題。

や。

乃至有想無想につきて問ふことも亦、是の如し。

(4) 初解脫は、幾く解脫、幾く除入、幾く一切入、幾く智、幾く三昧を攝するや。

乃至第八解脫につきて問ふことも亦、是の如し。

(5) 初除入は、幾く除入、幾く一切入、幾く智、幾く三昧を攝するや。

乃至第八除入につきて問ふことも亦、是の如し。

(6) 初一切入は、幾く一切入、幾く智、幾く三昧を攝するや。

乃至第十一切入につきて問ふことも亦、是の如し。

(7) 法智は、幾く智、幾く三昧を攝するや。

乃至道智につきて問ふことも亦、是の如し。

(8) 空・無願・無相三昧は幾く三昧を攝するや。

(三) (四) 相應と 共に つきて も 亦、 是の 如し。

(五) 若し初禪を成就すれば、此の四禪に於て幾くを成就し、幾くを成就せざるや。四等・四無色

定・八解脫・八除入・十一切入・八智・三三昧は幾くを成就し幾くを成就せざるや。

乃至第四禪につきて問ふことも亦、是の如し。

(六) 七人あり。堅信と堅法と信解脫と見到と身證と慧解脫と俱解脫となり。

堅信人は味相應の四禪の幾くを成就し、幾くを成就せざるや。淨の幾くを成就し幾くを、成就せ

ざるや。無漏の幾くを成就し幾くを成就せざるや。乃至俱解脫人は味相應の四禪の幾くを成就し幾くを成就せざるや、淨の幾くを成就し、幾くを成

就せざるや、無漏の幾くを成就し幾くを成就せざるや。

「何の三昧……滅すや」とは、身表・無表等の定に依る滅を述ぶるものなり。

【三】亦共は、大正本に「在亦爾」とあるも、三本・宮本は共に、「亦共」とあり、本文にも、「共亦如是」とあるが故に、今は、後者に從つてかく訂正す。

【四】次下に「胡に優波藍と曰ふ」との夾註あり。發智に之を可得と斷ずる所より見れば、この優波藍は *upadhāna* (得らるべき可能なる) か。

【五】十想と四禪乃至三三昧との相攝問題。

【六】四禪乃至三三昧等の八種類の各法の一一の相互相攝問題。

【七】十想と四禪乃至三三昧相互の相應問題。

但し本文に於いては實際は相應と共と前後轉換せり。

【八】十想等の共在(可得)問題。

【九】四禪乃至三三昧等相互の成就・不成就門。

【一〇】七無垢人の四禪等の成就・不成就問題。

卷の第二十七(第七編 定健度)

第三章 等至と十想との相攝等に關する論究

(定健度中、解脱跋渠第三) (發智論卷第十七、大正・二六、一〇二頁中)

本章の内容目次第一

攝と相應と 亦、共と、

七人と七と頓得と、

本章の内容目次第二

禪と無色との成就と、

何の三昧に由りて盡くすやと。

五 (一)十想と、四禪と四等と四無色定と八解脱と八除入と十一切入と八智と三三昧とあり。十想とは、無常想・無常苦想・苦無我想・不淨想・觀食想・一切世間不可樂想・死想・斷想・無欲想・盡想なり。

無常想は幾く禪、幾く等、幾く無色定、幾く解脱、幾く除入、幾く一切入、幾く智、幾く三昧を攝するや。

乃至盡想につきても亦問ふことは是の如し。

六 (二)(1)初禪は、幾く禪、幾く等、幾く無色定、幾く解脱、幾く除入、幾く一切入、幾く智、幾く三昧を攝するや。

乃至第四禪につきて問ふことも亦、是の如し。

(2)慈は、幾く等、幾く無色定、幾く解脱、幾く除入、幾く一切入、幾く智、幾く三昧を攝するや。乃至護につきて問ふことも亦、是の如し。

(3)無色中の空處は、幾く無色定、幾く解脱、幾く除入、幾く一切入、幾く智、幾く三昧を攝する

【一】本章は、定(三昧)を中心として、定と種種の法相、例せば十想と其他禪定及功德等との種種なる關係と尙、表業等の八種法の定に依る滅等を述べるを主目的とす。發智の頌文は、
攝、可得、相應、
成、不得、捨、退、
頓漸、減、依、定、
此章頗具說。
とあり。其の詳細の意は婆沙一六六、毘曇部十五、頁二五三註を見よ。
【二】「攝」とは、諸定と十想との相攝、定と其の諸功德との相攝關係。
「相應」とは、十想と四禪等との相互相應論。
「亦共」とは、可得論にて、「攝」論と同じ。
次に、「禪等の成就」とは、四禪等の相互の成就不成就論。
「七人」とは、七無垢人の諸定の成就論。
「七」とは、定の成就不成就の七句分別。
「頓得」とは、禪・無色の頓漸得の問題。

【六】味相應の有想無想は彼の味相應の有想無漏のために、因と次第と縁と増上となり、淨のために次第と縁と増上となるも、因となること無く、味相應のために次第と増上となり、淨の不用處のために次第と縁と増上となり、餘の淨と無漏との下のものために縁と増上となるなり。

【七】淨の有想無想は彼の淨の有想無想のために、因と次第と縁と増上となり、味相應の下のものために一の増上となり、淨と無漏との識處と不用處とのために次第と縁と増上となるも因となること無く、餘の淨と無漏とのために縁と増上となり、味相應の自地のもののために、次第と縁と増上となるも、因となること無きなり。

阿毘曇、緣跋渠第二竟り(梵本一百八十四首盧、秦一千六百六十四言)

阿毘曇八鍵度論卷第二十六

第二章 八三昧に於ける味相應と淨と無漏との三昧に關する論究

六三九

屬するものにして、誤りて夾註中に入りしものならん。

【六】無漏の初禪は、自地及び他地の味相應等の與めに縁縁となるやに就きて。

【六】以下の文は、已に、前に「淨の初禪と第二第三との禪の與めに次第と縁と増上となる」とあるが故に、重複なれば取るをよしとすべし。

【六】次下に「無漏竟り」との夾註あり。

【六】第二禪乃至不用處の諸定の相互相續論。此は初禪の場合の如しとなり。但し、發智はこれを逐次詳述せる點、八辯度と異れり。

【六】味相應の有想無想は自地及び他地の諸定の與めに縁縁となるやにつきて。

【六】「味相應のために次第と増上となる」の一句は、發智に相當文なし。但し、此は自地の味相應のための意ならんも、自地の味相應のためならば、先已に出せるを以て、此の一句は正しく無きを善しとす。

【七】次下に「味相應竟り」との夾註あり。

【七】淨の有想無想は自地及び他地の諸定の與めに、縁縁となるやに就きて。

るなり。

若し最初に無漏の不用定に入るを得るとき、是の時諸餘の未來の無漏の心々法を得するに、彼の一切法は當に不用定に攝すと言ふべきや。答へて曰く、或は彼は空定に攝し、或は識定、不用定に攝するなり。

第五九 第六節 味相應と淨と無漏との觀(靜慮)・無色の相緣論

味相應の初禪は彼の味相應の初禪のために、因と次第と緣と増上となり、自地の淨のために次第と緣と増上となるも因となることなく、自地の無漏のために緣と増上となり、餘の、味相應のために一の増上となる。淨と無漏との第二・第三・第四禪のために緣と増上となり、淨と無漏との無色定のために一の増上となる。

淨の初禪は、彼の淨の初禪のために、因と次第と緣と増上となり、無漏のために次第と緣と増上となるも因となることなく、自地の味相應を除く餘の一切の味相應のために一の増上となり、淨と無漏との第二・第三禪のために次第と緣と増上となるも因となることなく、淨と無漏との第四禪のために緣と増上となり、淨と無漏との無色定のために一の増上となり、味相應の自地のために、次第と緣と増上となる。

無漏の初禪は彼の無漏の初禪のために因と次第と緣と増上となり、一切の味相應のために一の増上となり、淨の初禪と第二第三禪とのために次第と緣と増上となるも因となることなく、無漏の第二・第三禪のために因と次第と緣と増上となり、淨の第四禪と淨の無色定とのために緣と増上となり、無漏の第四禪と無漏の無色定とのために因と緣と増上となり、淨の自地のために次第と緣と増上となるなり。

乃至不用處につきても亦、是の如し。

【五九】本節は、味相應と淨と無漏との四禪と四無色とが夫々、自地の味相應等の三三昧及び他地の其等の與めに四緣中の幾緣となるやを論究するなり。

發智は之を詳説するも八健度は、最初の初靜慮の場合と最後の有想無想(非想非々想處)の場合とをのみ詳説して、他は略せり。因みに婆沙に據るに、本論は、譬喩者の緣性非實有説を破せんが爲めに提起せしなりと。(婆沙一六五、毘曇部十五、頁二三五以下參照)。

【六〇】味相應の初靜慮な自地及び他地の味相應等の諸定の與めに幾緣となるやに就きて。

【六一】次に「味の初禪竟り」との夾註あり。

【六二】淨の初禪は自地と他地との味相應等の定の與めに幾緣となるやに就きて。

【六三】次下に「因は無し。淨は竟り」との夾註あり。但し此の中、「因は無し」は本文に

無想天とは、世俗の第四禪を修せず無漏のをも修するに非ざるをもて、是を世俗の第四禪を修するにも非ず無漏のも非らずといふなり。

乃至不用處につきても亦、是の如し。

第五節 無漏定初入時、所得の未來の無漏の心々法(心々所)の諸門分別

若し最初に無漏の初禪に入れば是の時諸餘の未來の無漏得の心々法を得するに、彼の一切法は當に有覺有觀と言ふべきや。答へて曰く、或は彼は有覺有觀なるあり、或は無覺有觀なるあり、或は無覺無觀なるあり。

若し最初に無漏の第二禪に入れば、是の時諸餘の未來の無漏得の心々法を得するに、彼の一切法は當に喜根と相應すと言ふべきや。答へて曰く、或は彼は樂根と相應し、或は喜根或は護根と相應するなり。

若し最初に無漏の第三禪に入れば、是の時諸餘の未來の無漏の心々法を得するに、彼の一切法は當に樂根と相應すと言ふべきや。答へて曰く、或は彼は樂根と相應し、或は喜根、或は護根と相應するなり。

若し最初に無漏の第四禪に入れば是の時諸餘の未來の無漏得の心々法を得するに、彼の一切法は當に護根と相應すと言ふべきや。答へて曰く、或は彼は樂根と相應し、或は喜根・護根とも相應するなり。若し最初に無漏の空處に入るを得るとき、是の時諸餘の未來の無漏の心々法を得するに、彼の一切法は當に攝すと言ふべきや。答へて曰く、或は彼は空定に攝し、或は識定、不用定に攝するなり。

若し最初に無漏の識處に入るを得るとき、是の時諸餘の未來の無漏の心々法を得するに、彼の一切法は當に識定に攝すと言ふべきや。答へて曰く、或は彼は空定に攝し、或は識定、不用定に攝す

【五】 究處・識處・不用處の淨定と無漏定との習修・得修。

【四】 本節は、最初に無漏の初禪に入りし時得する所の未來修の無漏の心々所法に就きては、有覺有觀・無覺有觀・無覺無觀の三種分別をなし、無漏の第二、第三、第四靜慮に入りて最初に得する所の未來の心々所法に就きては樂・喜・護の根相應分別をなし、最後に、下三無色の無漏定に入りて最初に得する所の未來の無漏の心々所法に就きては、無色所攝分別をなすを其の課題とせり。

【五】 無漏の初禪初入時所得の未來の無漏の心々所法の有覺有觀等の分別。

【六】 無漏の上三禪初入時所得の未來の無漏の心々所法の樂・喜・捨分別。

【七】 或の字は大正本に無きも、三本・宮本・聖本にはあり、據りて之を補へり。

【八】 無漏の下三無色定初入時所得の未來の無漏の心々所法の三無色所攝分別。

四五 (一)云何んが世俗の第四禪は修するも無漏のは非らざるや。答へて曰く、本得の世俗の第四禪を現在前するときと、若しくは本不得の世俗の第四禪を現在前するも是の時無漏の第四禪を修するを得ざるときと、^{四六}若しくは本不得の世俗智を現在前するも彼は世俗の第四禪のに非ずして是の時世俗の第四禪を修するを得るも無漏の第四禪は非らざるるときと、是を世俗の第四禪は修するも無漏のは非らずといふなり。

四七 (二)云何んが無漏の第四禪は修するも世俗のは非らずといふや。答へて曰く、本得の無漏の第四禪を現在前するときと、若しくは本不得の無漏の第四禪を現在前するも、是の時世俗の第四禪を修するを得ざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも彼は第四禪のに非ずして、是の時無漏の第四禪を修するも世俗のは非ざるるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも彼は第四禪のに非ずして、是の時無漏の第四禪を修するを得るも世俗のは非らざるるときと、是を無漏の第四禪は修するも世俗のは非らずといふなり。

四八 (三)云何んが世俗と無漏との第四禪を修するや。答へて曰く、本不得の世俗の第四禪を現在前して是の時無漏の第四禪を修することを得ると、若しくは本不得の無漏の第四禪を現在前して是の時世俗の第四禪を修するを得ると、若しくは本不得の無漏智を現在前し彼は第四禪のに非ざるも、是の時世俗と無漏との第四禪を修するを得ると、^{四九}是を世俗と無漏との第四禪を修するといふなり。

五〇 (四)云何んが世俗の第四禪を修するにも非ず、無漏のも非らざるものなりや。答へて曰く、本得の世俗智を現在前するも彼は第四禪のに非ざるときと若しくは、^{五一}本不得の世俗智を現在前するも、是の時世俗と無漏との第四禪を修するを得ざるときと、若しくは本得の無漏智を現在前するも彼は第四禪のに非ざるときと若しくは、^{五二}本不得の無漏智が現在前するも是の時世俗と無漏との第四禪を修するを得ざるときと、一切の染汚心と無記心のときと、無想三昧と滅盡三昧とに入れるときと、

【四五】 第一單句——

【四六】 「若しくは本不得の世俗智……無漏の第四禪は非らざるときと」の一句は發智に之を缺き、聖本の八健度論にも無し。

【四七】 第二單句——

【四八】 第三俱是句——

【四九】 次下に、大正本には、若しくは本不得の無漏智が現在前し彼は第四禪のに非ざるも是の時世俗と無漏との第四禪を修す」との一句があれども、こは直前の一句と重複する上、三本・宮本・聖本には何れも之無きが故に、今は之を削去せり。

【五〇】 第四俱非句——

【五一】 本不得の世俗智は、發智には「第四靜慮のに非ざる未得の世俗智」とあり。

【五二】 本不得の無漏智は發智には「第四靜慮のに非ざる無漏智」とあり。

ときと、若し本不得の世俗智を現在前するも彼は初禪のに非ずして、是の時、無漏の初禪を修することを得るも、世俗のは非らざるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも、彼は初禪のに非ずして、是の時、無漏の初禪を修するを得るも世俗のは非らざるときと、是を無漏の初禪は修するも世俗のは非らずといふなり。

(三)云何んが世俗と無漏との初禪を修するものなりや。答へて曰く、本不得の世俗の初禪を現在前し是の時無漏の初禪を修するを得るときと、若しくは本不得の無漏の初禪を現在前し是の時世俗の初禪を修するを得るときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するに、彼は初禪のに非ずして是の時世俗と無漏との初禪を修するを得るときと、若しくは本不得の無漏智の現在前するに彼は初禪のに非ずして、是時世俗と無漏との初禪を修するを得るときと、是を世俗と無漏との初禪を修すといふなり。

(四)云何んが世俗の初禪を修するにも非ず、無漏のも非らざるものなりや。答へて曰く、本得の世俗智を現在前するも彼は初禪のに非ざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時世俗と無漏との初禪を修するを得ざるときと、若しくは本得の無漏智を現在前するも彼は初禪のに非ざるときと、若しくは本不得の無漏智が現在前するも是の時世俗と無漏との初禪を修するを得ざるときと、一切の染汚心と無記心とのときと、無想定・滅盡定に入れるときとは、世俗の初禪を修するにも非ず無漏のも修するに非ざるをもて、是を世俗の初禪を修するにも非ず、無漏のも非らざるときといふなり。

第二・第三禪につきても亦、是の如し。

若し世俗の第四禪を修するとき、彼は無漏の第四禪をも修するや。答へて曰く、或は世俗のは修するも無漏のは非らざることあり。

習修・得修の意義及び其他の(詳細は婆沙一六三、毘曇部十五、頁二〇六以下参照のこと)。

【五】初禪の淨定と無漏定との習修・得修に就きて。

以下四句分別をなす。

【美】世俗は、大正本に生俗とあるも、三本・宮本・聖本には共に世俗とあり。據りてかく訂正す。

【毛】第一單句——

【美】本得とは、發智に已得と雖び、本不得を未得と顯す。

【光】第二單句——

以下初禪のに非ざる世俗智及び無漏智の現在前に關する說明を發智は略示するも、

意は八變度と異らず。

【三】第三俱是句。

【四】第四俱非句。

【四】第二・第三禪の淨定と無漏定との習修・得修。

初禪の場合の如しとなり。

【四】第四禪の淨定と無漏定との習修・得修。

以下四句分別せり。

かなり。^{三〇}

(六)乃至淨と無漏との初禪を棄つるも味相應のは非らざることありや。答へて曰く、棄つることあり。無垢人の無欲愛より退するときなり。

餘を棄つることありや。答へて曰く、棄つることあらざるなり。^{三〇}

(一)頗し味相應の初禪より退するも、淨のは非らず、無漏のも非らざることありや。答へて曰く退することあらざるなり。

(二)淨の初禪より退するも、味相應のは非らず、無漏のも非らざることありや。答へて曰く、退することあり。凡夫人の無欲愛より退するときなり。

(三)乃至淨と無漏との初禪より退するも、味相應のは非らざることありや。答へて曰く、退することあり。無垢人の無欲愛より退するときなり。

餘を退することありや。答へて曰く、退することあらざるなり。^{三三}

第四節 世俗(淨)定と無漏定との習修・得修に就きて

若し世俗の初禪を修するものなれば、彼は無漏の初禪をも修するや。答へて曰く、或は世俗のは修するも、無漏のは非らざるものあり。

(一)云何んが世俗の初禪は修するも無漏のは非らざるや。答へて曰く、本得の世俗の初禪の現在前するときと、若しくは本不得の世俗の初禪を現在前するも是の時無漏の初禪を修することを得ざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも彼は初禪のに非ず、是の時、世俗の初禪を修することを得るも無漏のは非ざるときと、是を世俗の初禪を修するも、無漏のは非らずといふなり。

(二)云何んが無漏の初禪を修するも世俗のは非らざるや。答へて曰く、本得の無漏の初禪の現在前するときと、若しくは本不得の無漏の初禪を現在前するも是の時、世俗の初禪を修するを得ざる

【二八】發智は次下に「並に梵世より没して欲界に生ずる時となり」との一句を加ふ。

【二九】餘とは、第三句と第四句と第五句と第七句とを指す。

【三〇】次下に「棄竟り」の夾註あり。

【三一】初禪の三味の退に關する七句分別。

【三二】餘とは七句中の、第三句と第四句と第五句と第七句とを意味す。

【三三】次下に「退竟り」の夾註あり。

尚、發智には、此の次に、「初靜慮を説くが如く、乃至無所有處を説くことも亦、是の如し」との一句あり。思ふに八健度はこれを脱落せしものならん。

【三四】本節は、八三昧一の世俗の定(淨定)と無漏定との習修(現在修)と得修(未來修)との關係を一是初禪を代表とし、二是第四禪を代表として論明する段なり。

(六) 淨と無漏との成就せざるも、味相應のは成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り、欲界の愛を未だ盡さざるものなり。

(七) 味相應と淨と無漏との初禪を成就せざるものありや。答へて曰く、有り、凡夫人の梵天より上に生ぜざるものなり。

第三節 初禪の味相應等の三三昧の得・捨・退に關する論究

(一) 頗し味相應の初禪を得するも、淨のは非らず無漏のは非らざることありや。答へて曰く、得するあり。梵天上の無愛より退するときなり。

(二) 淨の初禪を得するも、味相應のは非らず、無漏のも非らざることありや。答へて曰く、得するあり。凡夫人の欲愛の盡に逮るときなり。

(三) 無漏の初禪を得するも、味相應のは非らず、淨のは非らざることありや。答へて曰く、得するあり。初禪に依りて越次取證するときと、當に阿羅漢果に逮るべきときとなり。

(四) 味相應と淨との初禪を得するも、無漏のは非らざることありや。答へて曰く、得するあり。上地より没して梵天に生ずるときなり。

(六) 乃至淨と無漏との初禪を得するも味相應のは非らざることありや。答へて曰く、得することあり。無垢人の欲愛の盡に逮るときなり。

餘のを得することありや。答へて曰く、得せざるなり。

(一) 頗し味相應の初禪を棄つるも、淨のは非らず、無漏のは非らざることありや。答へて曰く、棄つることあり。梵天上の愛の盡に逮るときなり。

(二) 淨の初禪を棄つるも、味相應のは非らず、無漏のも非らざることありや。答へて曰く、棄つることあり。凡夫人の無欲愛より退するときか、欲界若しくは梵天より没して上地に生ずるとき

【二〇】 次下に「不成竟り」との夾註あり。

【三〇】 本節は、禪定の味相應等の三三昧の相互の得と捨と退とに於ける關係を初禪を代表として、前節の成就・不成就論の七句分別の形式に則りて、明にする段なり。

(婆沙一六二、毘婆沙十五、頁一九八以下參考)。

【三二】 初禪の三三昧の相互の得に關する七句分別。

【三三】 發智には、次下に、及び梵世より没して欲界に生ず時となりとの一句を加ふ。

【三四】 初禪に依りては、發智には、靜慮と靜慮中間に依りて」とあり。

【三五】 上地より没するは、發智には、「梵世の上より」とあり。

【三六】 餘とは、七句分別中の、第五句と第七句とを指す。

【三七】 次下に、「得竟り」との夾註あり。

【三九】 初禪の三三昧の棄(捨)に關する七句分別。

人の欲界に生じて欲愛を盡すも、梵天上の愛を未だ盡さざるものか、若しくは梵天上に生じて彼の愛を未だ盡さざるものかなり。

(五) 味相應を成就し無漏のをも成就するも、淨のは非らざるものありや。答へて曰く、無きなり。

(六) 淨と無漏とのを成就するも、味相應のは非らざるものありや。答へて曰く、有り。無垢人の欲界若しくは梵天上に生じ、梵天上の愛を盡せるものなり。

(七) 味相應のを成就し、淨と無漏とのをも成就するものありや。答へて曰く、有り。無垢人の欲界に生じて、欲愛を盡すも梵天上の愛を未だ盡さざるものか、若しくは梵天上に生じて梵天上の愛を未だ盡さざるものかなり。

(一) 頗し味相應の初禪を成就せざるものにして、淨のを成就せざるに非ず、無漏のをも成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。無垢人の欲界若しくは梵天上に生じ、梵天上の愛の盡くるものをいふ。

(二) 淨のを成就せざるも、味相應のは成就せざるに非ず、無漏のも成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、無きなり。

(三) 無漏のは成就せざるも、味相應のは成就せざるに非ず、淨のも成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。凡夫人の欲界に生じ欲愛を盡せるも、梵天上の愛を未だ盡さざるものか、若しくは梵天上に生じて彼の愛を未だ盡さざるものかなり。

(四) 味相應のと淨のとは成就せざるも、無漏のは成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。無垢人の梵天上より上に生ずるものなり。

(五) 味相應のと無漏とのを成就せざるも、淨のは成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。凡夫人の欲界若しくは梵天上に生じ、梵天上の愛を盡せるものなり。

は非らざる場合。
(三) 無漏のを成就するも、他の二は非らざる場合。

(四) 味相應と淨との二を、成就するも他は非らざる場合。

(五) 味相應と無漏とのを成就するも他は非らざる場合。

(六) 淨と無漏とのを成就するも他は非らざる場合。

(七) 三者凡てを成就する場合此の七種の場合ありや否や、有りとせば其は如何んを論述するなり。

次に、同様に初靜慮の三三昧の不成就に就きてかく七句分別をなすものなり。本節及び第三節、第四節の本文中に附せる番號は此の七句の序數を示すものなり。

(婆智一六二、毘曇部十五、頁一九五以下參考)

【二】初禪の三三昧の相互成就に關する七句分別。

【七】次に「成就竟り」の夾註あり。

【八】初禪の三三昧の相互不成就に關する七句分別。

【九】初禪の三三昧の相互不成就に關する七句分別。

【一〇】初禪の三三昧の相互不成就に關する七句分別。

【一一】初禪の三三昧の相互不成就に關する七句分別。

【一二】初禪の三三昧の相互不成就に關する七句分別。

【一三】初禪の三三昧の相互不成就に關する七句分別。

【一四】初禪の三三昧の相互不成就に關する七句分別。

【一五】初禪の三三昧の相互不成就に關する七句分別。

【一六】初禪の三三昧の相互不成就に關する七句分別。

て縁となるや。淨と無漏との上のものゝために幾く縁として縁となるや。自地の^二淨と味ともののため幾く縁として縁となるや。

乃至不用處につきても亦、是の如し。

味相應の有想無想は彼の味相應の有想無想のために幾く縁として縁となるや。淨のもののため幾く縁として縁となるや。味相應の下のものゝために幾く縁として縁となるや。淨と無漏との下のものゝために幾く縁として縁となるや。^三

淨の有想無想は彼の淨の有想無想のために幾く縁として縁となるや。味相應の下のものゝために幾く縁として縁となるや。淨と無漏との下のものゝために幾く縁として縁となるや。自地の味相應のものゝために幾く縁として縁となるや。

此の章の義、願くば具さに演說せん。

^{一四} 第一節 八三昧と味相應等の三三昧(等至)に就きて

八三昧、即ち四禪と四無色定とに味相應なると淨なると無漏なるとあり。

^{一五} 第二節 初禪の味相應等の三三昧の成就・不成就に関する論究

^{一六} (一) 頗し味相應の初禪を成就するも、淨の初禪は非らず、無漏のは非らざるものありや。答へて曰く、有り。欲愛の未盡なるものなり。

(二) 淨の初禪を成就するも味相應のは非らず、無漏のは非らざるものありや。答へて曰く、有り。凡夫人の欲界若しくは梵天上に生じて梵天上の愛を盡せるものなり。

(三) 無漏の初禪を成就するも、味相應のは非らず、淨のは非らざるものありや。答へて曰く、有り、無垢人の梵天より上に生ずるものなり。

(四) 味相應を成就し淨のをも成就するも無漏のは非らざるものありや。答へて曰く、有り。凡夫

【二二】 淨の次に、味は、大本に無きも、明本にはあり。

【二三】 次下に「味竟り」の夾註あり。

【一四】 本節は、三昧(Samāpatti)を四禪と四無色との八種にて顯し、更にこの一一に味相應(染汚)なると、淨(世俗)なると無漏なるとの三種の三昧あることを明示するにあり。いはゞ本節は、次節に於ける序論なり。

(婆沙一六二、毘婆沙十五、頁一九二以下参照)。

【一五】 本節は、初禪の三種の三昧の相互成就論と不成就論とをなす段なり。其の組織は七句を基本として成る。先づ(一)味相應の初禪を成就するも他の二は非らざる場合。(二)淨のを成就するも他の二

一切法は、當に有覺有觀と言ふべきや。

若し最初に無漏の第二禪に入ることを得るに、是の時、諸餘の未來の無漏の心々法を得ず。彼の

一切法は、當に喜根と相應すと言ふべきや。

若し最初に無漏の第三禪に入ることを得るに、是の時、諸餘の未來の無漏の心々法を得ず。彼の

一切法は、當に樂根と相應すと言ふべきや。

若し最初に無漏の第四禪に入ることを得るに、是の時、諸餘の未來の無漏の心々法を得ず。彼の

一切法は、當に護根と相應すと言ふべきや。

若し最初に無漏の空處に入ることを得るに、是の時、諸餘の未來の無漏の心々法を得ず。彼の

一切法は、當に空處に攝すと言ふべきや。

若し最初に無漏の識處に入ることを得るに、是の時、諸餘の未來の無漏の心々法を得ず。彼の

一切法は、當に識處に攝すと言ふべきや。

若し最初に無漏の不用處に入ることを得るに、是の時、諸餘の未來の無漏の心々法を得ず。彼の

一切法は、當に不用處に攝すと言ふべきや。

若し最初に無漏の初禪のために幾く縁として縁となるや。淨の初禪のために幾く

縁として縁となるや。無漏の初禪のために幾く縁として縁となるや。味相應の上のものゝために幾

く縁として縁となるや。淨と無漏との上のものゝために幾く縁として縁となるや。

淨の初禪は彼の淨の初禪のために幾く縁として縁となるや。無漏のために幾く縁として縁となる

や。味相應の上のものゝために幾く縁として縁となるや。淨と無漏との上のものゝために幾く縁と

して縁となるや。自地の味相應のものゝために幾く縁として縁となるや。

無漏の初禪は彼の無漏の初禪爲に幾く縁として縁となるや。味相應の上のものゝ爲に幾く縁とし

【九】味相應と淨と無漏との禪・無色定の相續問題。

【一〇】次下に、「味竟り」との夾註あり。

【一一】次下に「淨竟り」の夾註あり。

第二章 八三昧に於ける味相應と淨と無漏との

三昧に關する論究

(阿毘曇定健度中、緣跋渠第二) (發智論卷第十七、大正・二六、一〇一頁)

本章の内容目次

- 二 (一) 八三昧即ち四禪と四無色定とに味相應と淨と無漏となるあり。
- 三 (二) (1) 頗し味相應の初禪を成就するも、淨のは非らず、無漏のは非らざるものありや。(2) 淨のを成就するも味相應のは非らず、無漏のは非らざるものありや。(3) 無漏のは成就するも、味相應のは非らず、淨のは非らざるものありや。(4) 味相應のを成就し、淨のを成就するも、無漏のは非らざるものありや。(5) 味相應のを成就し無漏のも成就するも、淨のは非らざるものありや。(6) 淨と無漏とのを成就するも、味相應のは非らざるものありや。(7) 味相應のを成就し、淨と無漏とのも成就するものありや。

不成就につきても亦兩り。

六 (三) 得と棄と退とにつきても亦、是の如し。

七 (四) 若し世俗の初禪を修するものなれば、彼は無漏の初禪をも修するや。設し無漏の初禪を修するものなれば、彼は世俗の初禪をも修するや。

八 若し世俗の乃至……不用處を修するものなれば、彼は無漏の不用處をも修するや。設し無漏の不用處を修するものなれば、彼は世俗の不用處をも修するや。

九 (五) 若し最初に無漏の初禪に入ることを得るに、是の時諸餘の未來の無漏の心々法を得ず、彼の

【一】本章は、禪定一般に關する阿毘達磨的分別をなすもの。發智の頌文を參考に掲ぐれば次の如し。

「八、味・淨・無漏、

成・不成、得・捨、

退、修、初入、緣、

此章頗具說」

此の詳細につきては、婆沙一六二、毘曇部十五、頁一九二の註參照。

【二】八三昧と味相應等の三三昧とに就きて。

【三】初禪の三三昧の成就・不成就問題。

以下、七句分別せり。

【四】次下に「覺竟り」の夾註あり。

【五】次下に、「覺竟り」との夾註あり。

【六】初禪の三三昧の得・捨・退に關する問題。

【七】世俗(淨)の等至と無漏の等至との夫々の習修・得修問題。

【八】無漏定初入時、所得の未來の無漏の心々法を得ず、彼の分別問題。

四五

知他人心智の報は、何の所に報を受くるや。答へて曰く、或は梵天に、或は光音に、或は遍淨に、或は果實に報を受け、或は處所無きなり。

等智の報は何の所に報を受くるや。答へて曰く、或は欲界に、或は色界に、或は無色界に受け、或は受くる處無きなり。

阿毘曇過去得跋渠第三十四竟り(梵本四百七十九首盧、秦六千四百四十三言)

斷ずること無しとの意なり。
以下之に準ず。

【二】 淨の八定が斷結するや

否やに就きて。

【三】 八礙脫の何れが斷結するやに就きて。

【四】 八除入は、斷結するや否やに就きて。

【五】 十一切入は斷結するや

否やに就きて。

【三六】 八智の斷結に就きて。

【三九】 本節は、四等・八淨定

乃至八智の異熟(報)を受くる

ものは、夫々何の處に報を受くるやを明す段なり。

(婆沙一六二、毘曇部十五、

頁一八七以下參考)。

【四一】 八淨定の報を受くる處所。

【四二】 發智は、此の「乃至」を、

淨の第二禪、第三禪、第四禪、

乃至不用處の一一に就きて、詳細に論述せり。

【四三】 八礙脫八除入の報を受

くる處所。以下、發智の文と八健度の文

八除入と、十一切入と八智と三昧とが能く斷結し得るや否やを明にせんとする段なり。これの詳細に就きては婆沙一六二、毘曇部十五、頁一八〇以下を見よ。

【三二】 四等が斷結するや否や

【三三】 「處所無きなり」とは、

とには說相上の廣略異なるものあるも意は同じなり。

【四四】 大正本には「解脫報何

所」は「解脫何報所」とあるも、

これは誤植につき前の如く訂正す。

【四五】 八智中の有漏智の報の

處所に就きて。

等智・苦智・習・盡・道智・空・無願・無相は、何の繋の結を滅するや。答へて曰く、或は欲界繋のを、或は色・無色界繋のを滅し、或は處所無きなり。

第十四節 等・淨定・解脫・除入・一切入・智の報(異熟果)を受くる處所に就きて

慈報は何の所に報を受くるや。答へて曰く、或は梵天、或は光音、或は遍淨、或は果實天に報を受け、或は受くる處所無きなり。

悲と護とも亦、是の如し。

喜報は何の所に報を受くるや。答へて曰く、梵天・光音天に報を受け、或は處所無きなり。

淨の初禪の報は何の所に報を受くるや。答へて曰く、梵天上に、或は處所無きなり。

乃至有想無想の報は、何の所に報を受くるや。答へて曰く、有想無想到、或は處所無きなり。

初と第二解脫と、初の四除入との報は何の所に報を受くるや。答へて曰く、梵天又は光音に、報を受け、或は處所無きなり。

淨解脫と後四除入と八一一切入との報は、何の所に報を受くるや。答へて曰く、果實に、或は處所無きなり。

空處解脫の報は何の所に報を受くるや。答へて曰く、空處に、或は處所無きなり。

空處一切入も亦、是の如し。

識處解脫の報は何の所に報を受くるや。答へて曰く、識處に、或は處所無きなり。

識處一切入も亦、是の如し。

不用處解脫の報は何の所に報を受くるや。答へて曰く、不用處に、或は處所無きなり。

有想無想解脫の報は何の所に報を受くるや。答へて曰く、有想無想到、或は處所無きなり。

滅盡解脫の報は何の所に報を受くるや。答へて曰く、有想無想到、或は處所無きなり。

には非ずとする説者の意を遮止し、根本定ならずとも、未來、禪中間、四根本禪、下三無色の九地に依りて皆漏を盡し得ることを顯さんが爲めなりといふ。従つて以下の文意は、下なる初靜慮等を得せし者が未來定等にて夫々の地繋の漏盡をなし、而も上の根本第二禪等に入らずして命終するものが何處に生ずるやを示すものなり。

【二五】發智は此に乃至と言ふを略せずして、「若し空無邊處を得ずるも識無邊處を得せざるもの……若し識無邊處を得ずるも無處有處を得せざるもの……と言ふが如く詳説せり。

【二六】本節は、慈・悲・喜・護の四等(無量)に入るには、先づ何を思惟の對象とするやを明にする段なり。
(婆沙一六一、毘婆沙十五、頁一八〇以下参照)。

【二七】發智には、「有情に樂を興ふることなり」とあり。

【二八】發智には、「有情の苦を抜くことなり」とあり。

【二九】發智には、「諸の有情を度ばすことなり」とあり。

【三〇】發智には、「有情に於いて捨することなり」とあり。

【三一】本節は淨定と、定の功德とせらるゝ四等と八解脫と

慈は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。

悲・喜・護は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。

淨の初禪は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。

淨の乃至有想無想は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。

初と第二・第三解脫は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。

空處解脫は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、或は空處の繫の結を滅し、或は識處の繫の結を滅し、或は不用處の繫の結を滅し、或は有想無想處の繫の結を滅し、或は處所無きなり。

或は不用處の繫の結を滅し、或は有想無想處の繫の結を滅し、或は處所無きなり。

識處解脫は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、或は識處の繫の結を、或は不用處の繫の結を、或は有想無想處の繫の結を滅し、或は處所無きなり。

不用處解脫は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、或は不用處の繫の結を、或は有想無想處の繫の結を滅し、或は處所無きなり。

有想無想處の繫の結を滅し、或は處所無きなり。

有想無想解脫と滅盡解脫とは、何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。

初除入は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。乃至第八除入は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。

初一切入は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。乃至第十一切入は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。

法智は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、或は欲界繫のを、或は色・無色界繫のを滅し、或は處所無きなり。

未知智は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、或は色・無色界繫のを滅し、或は處所無きなり。

知他人心智は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。

とありや、乃至不用定に入らずして有頂定に入ることありを明す段なり。婆沙に據れば、本論提起の所以は、「初靜慮に入らざれば便ち第二靜慮等に入ること能はざるべし」との疑とを決して、初靜慮以外の即ち未來定(未至)、禪中間(靜慮中間)第二靜慮の近分等よりも第二靜慮に入るものなることを明さんが爲めなりと言ふ。

(婆沙一六一、毘曇部十五、頁一六七以下参照)。

【一三】本節は一般には、入定の果報として其の入定せし禪定の地處に生ずるものなるも必ずしも其の定に入定せざるものと雖も、其の地處に生ずることある理を明さんとする段なり。

婆沙に據れば、其の定に入るもののみ、其の地に生ずとの疑ふ者に解決を與へんが爲めに作論せりと言ふ。

(婆沙一六一、毘曇部十五、頁一六九参照)。

【一四】本節は、下の定を得ずるも、上の根本定を得ずるに非ざるものは、何處に生ずるやを明す段なり。

婆沙に據れば、此論提起の因由は、唯、根本定のみによりて能く諸漏を盡すも、未來(未至)、近分定にて漏を盡す

頗し隱沒無記にして、彼は味相應の乃至有想無想に非ざるものありや。答へて曰く、有り。愛を除く諸餘の垢の現在前するものなり。

三三 第九節 入定の次第に關する論究

頗し初禪に入らずして第二禪に入ることありや。答へて曰く、入ることあり。

頗し乃至不用定に入らずして有想無想に入ることありや。答へて曰く、入ることあり。

三三 第十節 入定せずして其の地に生ずるに就きて

頗し初禪に入らずして初禪に生ずることありや。答へて曰く、生ずることあり。

頗し乃至有想無想に入らずして有想無想に生ずることありや。答へて曰く、生ずることあり。

三四 第十一節 下定を得ずるも上の根本定を得ざる者の生處に就きて

若し初禪を得するも第二禪は非らずんば、彼は命終して何の所に生ずるや。答へて曰く、或は梵

天なり、或は光音なり、或は遍淨なり、或は果實なり、或は空處なり、或は識處なり、或は不用處

なり或は有想無想なり、或は生ずる處所無きなり。

若し乃至不用處を得するも有想無想は非らずんば、彼は命終して何所に生ずるや。答へて曰く

或は不用處なり、或は有想無想なり、或は處所無きなり。

三五 第十二節 何等の行相を意所念(思惟)して四等(無量)に入るやに就きて

云何なる意の所念にて慈に入るや、答へて曰く、樂しむ衆生なり。

云何なる意の所念にて悲に入るや、答へて曰く、苦しむ衆生なり。

云何なる意の所念にて喜に入るや、答へて曰く、悦ぶ衆生なり。

云何なる意の所念にて護に入るや、答へて曰く、護の衆生なるのみ。

三六 第十三節 等(無量)・淨定・解脫・除入(勝處)・一切入(遍處)・智・三昧の斷結に就きて

味相應(即ち愛と相應するもの)なりやを明にせんとする段なり。

【一六三】一六一、毘曇部十五、頁一六三以下参照。

【一六四】味相應の定の出入と味との關係。

婆沙に據れば、本問題提起の緣由は、靜慮は唯是れ善なるもののみなりやと疑ふ者あるが故に、此の疑ひを決して靜慮は善と染汚と無覆無記とに通ずることを顯示せんが爲めなりと言ふ。

【一六五】以下の文を、發智は、「能く味に於いて當に入ると言ふべく、所味に於いて當に出づと言ふべし」と翻せり。

【一六六】味相應の定のみが隱沒無記(有覆無記)の定なりや否や。

婆沙に據るに、前頌(註一八)にては、唯、味(愛)と相應する定のみを説きしとせば、尙此の外の煩惱とも相應する定も存することを顯示せんが爲めに、此の論を提起せしなりと言ふ。

【一六七】愛を除く諸餘の垢とは、茲にては、主として、見と疑と慢と無明とをいふとは婆沙師の所説なり。

【一六八】本節は、入定の次第に關する論究にして、即ち初禪に入らずして第二禪に入るこ

第七節 染汚不染汚の四禪(靜慮)の支に就きて

一切の初禪には五種ありや。答へて曰く、不染汚の初禪には五種あるも、染汚のには五種あるに非ず。何等を無しとするや。答へて曰く、遠離の喜と樂となり。

一切の第二禪には四種ありや。答へて曰く、不染汚のには四種あるも、染汚のには四種あるに非ず。何等を無しとするや。答へて曰く、内信なり。

一切の第三禪には五種ありや。答へて曰く、不染汚のには五種あるも、染汚のには五種あるに非ず。何等を無しとするや。答へて曰く、念と智となり。

一切の第四禪には四種ありや。答へて曰く、不染汚のには四種あるも、染汚のには四種あるに非ず。何等を無しとするや。答へて曰く、護念淨なり。

第八節 味相應定の入起(出)と味との關係等の論究

味相應の初禪は入るを當に味と言ふべきや。起つを當に味と言ふべきや。答へて曰く、諸味は彼れ入るなり、味し已れば則ち起つなり。

味相應の乃至有想無想は、入るを當に味と言ふべきや、起つを當に味と言ふべきや。答へて曰く、諸味は彼れ入るなり、味し已れば則ち起つなり。

諸の味相應の初禪の彼の一切は、隱沒無記なりや。答へて曰く、是の如し。諸の味相應の初禪の彼の一切は隱沒無記なり。

頗し隱沒無記にして、彼は味相應の初禪に非ざるものありや。答へて曰く、有り。愛を除く諸餘の垢の現在前するものなり。

諸の味相應の乃至有想無想の彼の一切は、隱沒無記なりや。答へて曰く、是の如し。諸の味相應の乃至有想無想の彼の一切は隱沒無記なり。

【八】本節は、不染汚と染汚との四禪の何れにも支ありや、若しあれば何の禪に何の支ありやを明にする段なり。因沙に據るに、此の論提起の因由は、分別論者が、初靜慮にのみは支あるも上地には支無しと主張するを遮止して、上地にも亦支の建立あることを主張せん爲めなりと言ふ。
(婆沙一六〇、毘曇部十五、頁一五八以下參照)。

【九】初禪の支に就きて。

【一〇】五種とは、覺・觀・喜・樂・心一境性なり。

【一一】第二禪の支に就きて。

【一二】四種とは、内信と喜と樂と心一境性となり。

【一三】第三禪の支に就きて。

【一四】五種とは、行捨と正念と正慧と受樂と心一境性となり。

【一五】第四禪の支に就きて。

【一六】四種とは、不苦不樂痛と護(行捨)清淨と念清淨と心一境性となり。

【一七】本節は、先づ(一)味相應の定に入るを味と言ふべきや、出づるを味と言ふべきや抑々、入り又出づるとは如何なる意なりやを明にし、(二)次に、(a)味相應の定(四禪・四無色定)は皆、有覆無記なりや、(b)逆に、有覆無記の定は凡て

(一)云何んが法の思惟斷心と俱生する思惟斷の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると彼と俱有なるとの思惟斷、是を法の思惟斷心と俱生する思惟斷の無色といふ。(二)云何んが法の思惟斷心と俱生する見諦斷の無色なりや。答へて曰く、思惟斷心にて若しくは退し若しくは生ずるとき見諦斷法の得の生ずるが如き、是を法の思惟斷心と俱生する見諦斷の無色といふなり。(三)云何んが法の思惟斷心と俱生する不斷の無色なりや。答へて曰く、思惟斷心にて若しくは退し若しくは勝進するとき不斷法の得の生ずるが如き、是を法の思惟斷心と俱生する不斷の無色といふなり。^五諸法の不斷の無色の生ずるとき、彼は不斷心と俱なりや。答へて曰く、或は法の不斷の無色の生ずるとき、(一)不斷心と俱なるあり、(二)思惟斷心と俱なるあり。

(一)云何んが法の不斷の無色の生ずるとき不斷心と俱なるものなりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの不斷、是を法の不斷の無色の生ずるとき不斷心と俱なるものといふなり。(二)云何んが法の不斷の無色の生ずるとき思惟斷心と俱なるものなりや。答へて曰く、思惟斷心にて若しくは退し若しくは勝進するとき、不斷法の得の生ずるが如き、是を法の不斷の無色の生ずるとき思惟斷心と俱なるものといふ。

^六設し諸法の不斷心と俱生するものなれば、彼の法は不斷の無色なりや。答へて曰く、或は法の不斷心と俱生するものに、(一)不斷の無色あり、(二)思惟斷の無色あり。

(一)云何んが法の不斷心と俱生する不斷の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの不斷、是を法の不斷心と俱生する不斷の無色といふ。(二)云何んが法の不斷心と俱生する思惟斷の無色なりや。答へて曰く、不斷心にて勝進するとき思惟斷法の得の生ずるが如き、不斷心に住するとき、思惟斷の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる彼の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の不斷心と俱生する思惟斷の無色といふなり。

【四】 次下に、「思惟竟り」との夾註あり。

【五】 不斷の無色の生ずる時、俱生する法の三斷分別。此に二あり。

【六】 不斷心と俱生する無色の三斷分別。此に二あり。

【七】 次下に、「不斷竟り」の夾註あり。

卷の第二十六 (第七編 定健度)

(定健度中、過去得跋渠第一之二)

第六節 無色と俱生する法との三斷分別に於ける相互關係(續き)

諸法の思惟斷の無色の生ずるとき、彼は思惟斷心と俱なりや。答へて曰く、或は法の思惟斷の無色の生ずるとき、(一)思惟斷心と俱なるあり、(二)見諦斷心と斷なるあり、(三)不斷心と俱なるあり。

(一)云何んが法の思惟斷の無色の生ずるとき、思惟斷心と俱なるものなりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると彼と俱有なるとの思惟斷、是を法の思惟斷の無色の生ずるとき、思惟斷心と俱なるものといふ。(二)云何んが法の思惟斷の無色の生ずるとき、見諦斷心と俱なるものなりや。

答へて曰く、見諦斷心にて若しくは退し若しくは生ずるとき思惟斷法の得の生ずるが如き、見諦斷心に住するとき思惟斷の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる彼の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の思惟斷の無色の生ずるとき見諦斷心と俱なるものといふ。(三)云何んが法の思惟斷の無色の生ずるとき不斷心と俱なるものなりや。答へて曰く、無斷心にて勝進するとき思惟斷法の得の生ずるが如き、無斷心に住するとき思惟斷の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる彼の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の思惟斷の無色の生ずるとき不斷心と俱なるものといふなり。

設し諸法にして思惟斷心と俱生するものなれば、彼の法は思惟斷の無色なりや。答へて曰く、或は法の思惟斷心と俱生するものに、(一)思惟斷の無色あり、(二)見諦斷の無色あり、(三)不斷の無色あり。

【一】本節は、全然、前節の續きにして、分卷による切斷に過ぎず。

【二】思惟斷の無色の生ずるとき、俱生する法の三斷分別。此に三あり。

【三】思惟斷心と俱生する無色の三斷分別。此に三あり。

ると彼と俱有なるとの見諦斷、是を法の見諦斷心と俱生する見諦斷の無色といふ。(二)云何んが法の見諦斷心と俱生する思惟斷の無色なりや。答へて曰く、見諦斷心にて若しくは退し若しくは生ずるとき、思惟斷法の得の生ずるが如き、見諦斷心に住するとき、思惟斷の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる彼の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の見諦斷心と俱生する思惟斷の無色といふなり。

六八

阿毘曇八犍度論卷第二十五

第一章 得等に関する論究

六二一

【六八】 次下に、「見諦竟り」の夾註あり。
尙、此の次に、大正本には、「諸法の思惟斷の無色の生ずるとき、彼は思惟斷心と俱なりや」の一句あるも、三本・宮本は、共に之を次巻の初頭に置けり。意味上も後者の方善なるを以て、今は、後者に從ひて、此の一句をここより除去し、次巻初頭に送れり。

或は法の非學非無學心と俱生するものに、(一)非學非無學の無色あり、(二)學の無色あり、(三)無學の無色あり。

(一)云何んが法の非學非無學心と俱生する非學非無學の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの非學非無學、是を法の非學非無學心と俱生する非學非無學の無色といふなり。(二)云何んが法の非學非無學心と俱生する學の無色なりや。答へて曰く、非學非無學心にて若しくは退し若しくは勝進するとき、學法の得の生ずるが如き、是を法の非學非無學心と俱生する學の無色といふ。(三)云何んが法の非學非無學心と俱生する無學の無色なりや。答へて曰く、非學非無學心にて若しくは退し若しくは勝進するとき無學法の得の生ずるが如き、是を非學非無學心と俱生する無學の無色といふなり。

第五節 無色と俱生する法との三斷分別に於ける相互關係

諸法の見諦斷の無色の生ずるとき、彼は見諦斷心と俱生するや。答へて曰く、或は法の見諦斷の無色の生ずるとき、(一)見諦斷心と俱なるものあり、(二)思惟斷心と俱なるものあり。

(一)云何んが法の見諦斷の無色の生ずるとき、見諦斷心と俱なるものなりや、答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの見諦斷、是を法の見諦斷の無色の生ずるとき見諦斷心と俱なるものといふ。(二)云何んが法の見諦斷の無色の生ずるとき思惟斷心と俱なるものなりや。答へて曰く、思惟斷心にて若しくは退し若しくは生ずるとき見諦斷法の得の生ずるが如き、是を法の見諦斷の無色の生ずるとき思惟斷心と俱なるものといふなり。

設し諸法にして見諦斷心と俱生するものなれば、彼の法は見諦斷の無色なりや。答へて曰く、或は法の見諦斷心と俱生するものに、(一)見諦斷の無色あり、(二)思惟斷の無色あり。

(一)云何んが法の見諦斷心と俱生する見諦斷の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應す

【六四】 次下に「非學非無學竟り」の夾註あり。

【六五】 本節は、(一)見諦斷・思惟斷・不斷なる無色は、夫見諦斷等の心と俱生するや、(二)見諦斷等の心と俱生する法は夫見諦斷等の無色なりやを論究する段なり。

(婆沙一六〇、毘曇部十五、頁一五二以下参照)。

【六六】 見諦斷の無色が生ずる時、俱生する法の三斷分別。此に二あり。

【六七】 見諦斷心と俱生する無色の三斷分別。此に二あり。

學心と俱生するものに、(一)無學の無色あり、(二)非學非無學の無色あり。

(一)云何が法の無學心と俱生する無學の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの無學、是を法の無學心と俱生する無學の無色といふ。(二)云何んが法の無學心と俱生する非學非無學の無色なりや。答へて曰く、無學心にて勝進するとき非學非無學法の得の生ずるが如き、無學心に住するとき非學非無學の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる此の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の無學心と俱生する非學非無學の無色といふなり。

諸法の非學非無學の無色の生ずるとき、彼は非學非無學心と俱なりや。答へて曰く、或は法の非學非無學の無色の生ずるとき、(一)非學非無學心と俱なるあり、(二)學心と俱なるあり、(三)無學心と俱なるあり。

(一)云何んが法の非學非無學の無色の生ずるとき、非學非無學心と俱なるものなりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると彼と俱有なるとの非學非無學、是を法の非學非無學の無色の生ずるとき非學非無學心と俱なるものといふ。(二)云何んが法の非學非無學の無色の生ずるとき、學心と俱なるものなりや。答へて曰く、學心にて勝進するとき非學非無學法の得の生ずるが如き、學心に住するとき非學非無學の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる此の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の非學非無學の無色の生ずるとき學心と俱なるものといふ。(三)云何んが法の非學非無學の無色の生ずるとき、無學心と俱なるものなりや。答へて曰く、無學心にて勝進するとき非學非無學法の得の生ずるが如き、無學心に住するとき非學非無學根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる彼の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の非學非無學の無色の生ずるとき、無學心と俱なるものといふなり。

設し諸法の非學非無學心と俱生するものなれば、彼の法は非學非無學の無色なりや。答へて曰く、

【六】 次下に、「無學竟り」の割註あり。

【七】 非學非無學なる無色の生ずる時、俱生する法の三學分別。

此に三あり。
【六二】 次下に、「有漏」との夾註あり。

【六三】 次下に、「五色と男・女と命と苦・憂となり」との夾註あり。

【六四】 非學非無學心と俱生する無色の三學分別。
此に三あり。

(一)云何んが法の學の無色が生ずるとき學心と俱なるものなりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると彼と俱有なるとの學、是を法の學の無色の生ずるとき學心と俱なるものといふ。(二)云何んが法の學の無色の生ずるとき、非學非無學心と俱なるものなりや。答へて曰く、非學非無學心にて若しくは退し若しくは勝進するとき、學法の得の生ずるが如き、是を法の學の無色の生ずるとき、非學非無學心と俱なるものといふ。

設し諸法の學心と俱生するものなれば、彼の法は學の無色なりや。答へて曰く、或は法の學心と俱生するものに、(一)學の無色あり、(二)非學非無學の無色あり。

(一)云何んが法の學心と俱生する學の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると彼と俱有なるとの學、是を法の學心と俱生する學の無色といふ。(二)云何んが法の學心と俱生する非學非無學の無色なりや。答へて曰く、學心にて勝進するとき非學非無學法の得の生ずるが如き、學心に住するとき非學非無學根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる彼の法の諸の得と生老無常との如き、是を法の學心と俱生する非學非無學の無色といふなり。

諸法の無學の無色の生ずるとき、彼は無學心と俱なりや。答へて曰く、或は法の無學の無色の生ずるとき、(一)無學心と俱なるあり、(二)非學非無學心と俱なるあり。

(一)云何んが法の無學の無色の生ずるとき、無學心と俱なるものなりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの無學、是を法の無學の無色の生ずるとき、無學心と俱なるものといふ。(二)云何んが法の無學の無色の生ずるとき非學非無學心と俱なるものなりや。答へて曰く、非學非無學心にて若しくは退し若しくは勝進するとき、無學法の得の生ずるが如き、是を法の無學の無色の生ずるとき非學非無學心と俱なるものといふなり。

設し諸法にして無學心と俱生するものなれば、彼の法は無學の無色なりや。答へて曰く、或は法

【三】學心と俱生する無色の三學分別。此に二あり。

【五四】次下に、増益多きは竟り。の割註あり。

【五】「法の諸の」は、大正本に「諸の法」とあるも、三本、宮本・聖本・聖乙本に皆、「法の諸の」とあり、據りて、かく訂正す。

【六】次下に、「學竟り」の夾註あり。

【七】無學の無色の生ずる時、俱生する法の三學分別。此に二あり。

【八】無學心と俱生する無色の三學分別。此の二あり。

しくは生ずるとき無色界繫法の得の生ずるが如き、是を法の無色界繫の無色の生ずるとき色界繫心と俱なるものといふ。(四)云何んが法の無色界繫の無色の生ずるとき、不繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、不繫心にて勝進するとき無色界繫法の得の生ずるが如き、是を法の無色界繫の無色の生ずるとき不繫心と俱なるものといふなり。

設し諸法の無色界繫心と俱生するものなれば、彼の法は無色界繫の無色なりや。答へて曰く、或は法の無色界繫心と俱生するものに、(一)無色界繫の無色あり、(二)欲界繫の無色あり、(三)色界繫の無色あり、(四)不繫の無色あり。

(一)云何んが法の無色界繫心と俱生する無色界繫の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの無色界繫、是を法の無色界繫心と俱生する無色界繫の無色といふ。(二)云何んが法の無色界繫心と俱生する欲界繫の無色なりや。答へて曰く、無色界繫心に住して欲界繫の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる此の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の無色界繫心と俱生する欲界繫の無色といふ。(三)云何んが法の無色界繫心と俱生する色界繫の無色なりや。答へて曰く、無色界繫心に住するとき色界繫の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる此の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の無色界繫心と俱生する色界繫の無色といふ。(四)云何んが法の無色界繫心と俱生する不繫の無色なりや。答へて曰く、無色界繫心にて若しくは退し若しくは勝進するとき不繫法の得の生ずるが如き、是を法の無色界繫心と俱生する不繫の無色といふなり。

五二 第四節 無色と俱生する法との三學分別に於ける相互關係

諸法の學の無色が生ずるとき、彼は學心と俱なりや。答へて曰く、或は法の學の無色の生ずるとき、(一)學心と俱なるあり、(二)非學非無學心と俱なるあり。

【四六】無色界繫心と俱生する無色の界繫分別。此に四種あり。

【四九】「若」の字は、大正本になきも、三本に據りてかく補正せり。

【五〇】次下に、「無色竟り」の夾註あり。

【五一】本節は、(一)學・無學・非學非無學なる無色は、夫夫學・無學・非學非無學心と俱起するや、(二)三學心と俱起する法は、夫夫學等の無色なりやを論究する段なり。

(婆沙一六〇、毘婆沙十五、頁一四六以下參照)。

【五二】學の無色が生ずる時、俱生する法の三學分別。此に二あり。

あり、(四)不繫の無色あり。

(一)云何んが法の色界繫心と俱生する色界繫の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの色界繫、是を法の色界繫心と俱生する色界繫の無色といふ。(二)云何んが法の色界繫心と俱生する欲界繫の無色なりや。答へて曰く、色界繫心にて若しくは勝進するとき欲界繫法の得の生ずるが如き、色界繫心に住して欲界繫の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる此の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を色界繫心と俱生する欲界繫の無色といふ。(三)云何んが法の色界繫心と俱生する無色界繫の無色なりや。答へて曰く、色界繫心にて若しくは退し若しくは生ずるとき無色界繫の法の得の生ずるが如き、是を法の色界繫心と俱生する無色界繫の無色といふ。(四)云何んが法の色界繫心と俱生する不繫の無色なりや。答へて曰く、色界繫心にて若しくは退し若しくは勝進するとき、不繫法の得の生ずるが如き、是を法の色界繫心と俱生する不繫の無色といふなり。

諸法の無色界繫の無色の生ずるとき、彼は無色界繫心と俱なりや。答へて曰く、或は法の無色界繫の無色の生ずるとき、(一)無色界繫心と俱なるあり、(二)欲界繫心と俱なるあり、(三)色界繫心と俱なるあり、(四)不繫心と俱なるあり。

(一)云何が法の無色界繫の無色の生ずるとき、無色界繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると彼と俱有なるとの無色界繫、是を法の無色界繫の無色の生ずるとき無色界繫心と俱なるものといふ。(二)云何が法の無色界繫の無色の生ずるとき、欲界繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、欲界繫心にて若しくは退し若しくは生ずるとき、無色界繫法の得の生ずるが如き、是を法の無色界繫の無色の生ずるとき欲界繫心と俱なるものといふ。(三)云何んが法の無色界繫の無色の生ずるとき、色界繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、色界繫心にて若しくは退し若

【五】發智には、「若しくは生じ、若しくは勝進し」とあり。此には「若しくは生じ」の一句脱落せしものならん。

【六】次に、「色界竟り」の夾註あり。

【七】無色界繫の無色の生ずる時、俱する法の界繫分別。此に四種あり。

んが法の欲界繫心と俱生する無色界繫の無色といふや。答へて曰く、欲界繫心にて若しくは退し若しくは生ずるとき無色界繫法の得の生ずるが如き、是を法の欲界繫心と俱生する無色界繫の無色といふなり。(四)云何が法の欲界繫心と俱生する不繫の無色なりや。答へて曰く、欲界繫心にて退するるとき不繫法の得の生ずるが如き、是を法の欲界繫心と俱生する不繫の無色といふなり。

諸法の色界繫の無色が生ずるとき、彼は色界繫心と俱なりや。答へて曰く、或は法の色界繫の無色の生ずるとき、(一)色界繫心と俱なるあり、(二)欲界繫心と俱なるあり、(三)無色界繫心と俱なるあり、(四)不繫心と俱なるあり。

(一)云何んが法の色界繫の無色が生ずるとき、色界繫心と俱なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの色界繫、是を法の色界繫の無色の生ずるとき色界繫心と俱なるものといふ。(二)云何んが法の色界繫の無色の生ずるとき欲界繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、欲界繫心にて若しくは退し若しくは生ずるとき色界繫法の得の生ずるが如き、是を法の色界繫の無色の生ずるとき欲界繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、無色界繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、無色界繫心に住するとき色界繫の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる此の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の色界繫の無色の生ずるとき無色界繫心と俱なるものといふ。(四)云何が法の色界繫の無色の生ずるとき不繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、不繫心にて勝進するとき色界繫法の得の生ずるが如き、不繫心に住するとき色界繫の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる此の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の色界繫の無色の生ずるとき不繫心と俱なるものといふなり。

設し諸法の色界繫心と俱生するものなれば、彼の法は色界繫の無色なりや。答へて曰く、或は法の色界繫心と俱生するものに、(一)色界繫の無色あり、(二)欲界繫の無色あり、(三)無色界繫の無色

【四二】 次下に、「欲界竟り」の夾註あり。

【四三】 色界繫の無色が生ずるとき、俱起する法の界繫分別。此に四種あり。

【四四】 色界繫心と俱生する無色の界繫分別。此に四種あり。

るあり、(四)不繫心と俱なるあり。

(一)云何んが法の欲界繫の無色の生ずるとき、欲界繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの欲界繫、是を法の欲界繫の無色の生ずるとき欲界繫心と俱なるものといふ。(二)云何んが法の欲界繫の無色の生ずるとき、色界繫心と俱なるものなりや、答へて曰く、色界繫心にて若しくは生じ若しくは勝進するとき、欲界繫法の得の生ずるが如き、色界繫心に住するとき欲界繫の根を長益し、四大を増益し軟美し飽かしむる此の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の欲界繫の無色の生ずるとき色界繫心と俱なるものといふ。(三)云何んが法の欲界繫の無色の生ずるとき、無色界繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、無色界繫心に住するとき欲界繫の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる此の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の欲界繫の無色の生ずるとき不繫心と俱なるものなりや。答へて曰く、不繫心にて勝進するとき欲界繫法の得の生ずるが如き、不繫心に住するとき欲界繫の根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる此の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の欲界繫の無色の生ずるとき不繫心と俱なるものといふなり。

設し諸法の欲界繫心と俱生するものなれば、彼の法は欲界繫の無色なりや。答へて曰く、或は法の欲界繫心と俱生するものに、(一)欲界繫の無色あり、(二)色界繫の無色あり、(三)無色界繫の無色あり、(四)不繫の無色あり。

(一)云何んが法の欲界繫心と俱生する欲界繫の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの欲界繫、是を法の欲界繫心と俱生する欲界繫の無色といふ。(二)云何んが法の欲界繫心と俱生する色界繫の無色なりや。答へて曰く、欲界繫心にて若しくは退し若しくは生ずるとき色界繫法の得の生ずるが如き、是を法の欲界繫心と俱生する色界繫の無色といふ。(三)云何

【四】欲界繫心と俱生する無色の界繫分別。此に四種あり。

(一)云何んが法の無記の無色の生ずるとき、無記心と俱なるものなりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの無記、是を法の無記の無色が生ずるとき無記心と俱なるものといふ。(二)云何んが法の無記の無色の生ずるとき、善心と俱なるものなりや。答へて曰く、善心にて勝進するとき、無記法の得が生ずるが如き、善心に住するとき無記根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる彼の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の無記の無色の生ずるとき、善心と俱なるものといふ。(三)云何んが法の無起の無色が生ずるとき、不善心と俱なるものなりや。答へて曰く、不善心にて若しくは退し若しくは生ずるとき、無記法の得の生ずるが如き、不善心に住するとき無記根を長益し四大を増益し軟美し飽かしむる彼の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の無記の無色が生ずるとき、不善心と俱なるものといふ。

設し諸法の無記心と俱生するものなれば、彼の法は無記の無色なりや。答へて曰く、或は法の無記心と俱生するものに、(一)無記の無色あり、(二)善の無色あり、(三)不善の無色あり。

(一)云何んが法の無記心と俱生する無記の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの無記、是を法の無記心と俱生する無記の無色といふ。(二)云何んが法の無記心と俱生する善の無色なりや。答へて曰く、無記心にて若しくは退し若しくは生ずるとき善法の得の生ずるが如き、是を法の無記心と俱生する善の無色といふ。(三)云何んが法の無記心と俱生する不善の無色なりや。答へて曰く、無記心にて若しくは退し若しくは生ずるとき不善法の得の生ずるが如き、是を法の無記心と俱生する不善の無色といふなり。

第三節 無色と俱生する法との三界繫・不繫分別に於ける相互關係

諸法の欲界繫の無色が生ずるとき、彼は欲界繫心と俱なりや。答へて曰く、或は法の欲界繫の無色の生ずるとき、(一)欲界繫心と俱なるあり、(二)色界繫心と俱なるあり、(三)無色界繫心と俱あ

【三七】 無記の無色と俱生する無色の三性分別。これに三あり。

【三八】 次下に、「無記寛り」との夾註あり。

【三九】 本節は、(一)欲界繫・無色・無色界繫なる無色は、夫々、三界心と俱起するや、(二)欲・色・無色界心と俱起する法は夫々、欲・色・無色界の無色なりやを論究するを其の課題とす。

(婆沙一五九、毘婆沙十五、頁一三三以下参照)。

【四〇】 欲界繫の無色が生ずるとき、俱生する法の三界繫分別。此に三界繫なると不繫なるとの四種あり。

如き、善心に住するとき無記根を長益し四大を増益し軟美にして飽かせしむる彼の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の善心と俱生する無記の無色といふ^{三三}。

諸法の不善の無色が生ずるとき、彼は不善心と俱なりや。答へて曰く、或は法の不善の無色が生ずるとき、不善心と俱なるあり、無記心と俱なるあり。

(一)示何んが法の不善の無色が生ずるとき、不善心と俱なるものなりや、答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると云彼と俱有なるとの不善、是を法の不善の無色が生ずるとき不善心と俱なるものといふ。(二)云何んが法の不善の無色が生ずるとき無記心と俱なるものなりや。答へて曰く、無記心にて若しくは退し若しくは生ずるとき、不善法の得の生ずるが如き、是を法の不善の無色が生ずるとき無記心と俱なるものといふ。

設し諸法の不善心と俱生するものなれば、彼の法は不善の無色なりや。答へて曰く、或は法の不善心と俱生するものに、(一)不善の無色あり、(二)善の無色あり、(三)無記の無色あり。

(一)云何んが法の不善心と俱生する不善の無色なりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると彼と俱有なるとの不善、是を法の不善心と俱生する不善の無色といふ。(二)云何んが法の不善心と俱生する善の無色なりや。答へて曰く、不善心にて若しくは退し若しくは生ずるとき善法の得の生ずるが如き、是を法の不善心と俱生する善の無色といふ。(三)云何んが法の不善心と俱生する無記の無色なりや。答へて曰く、不善心にて若しくは退し若しくは生ずるとき無記法の得の生ずるが如き、不善心に住するとき無記根を長益し四大を増益し軟美して飽かせしむる彼の法の諸の得と生・老・無常との如き、是を法の不善心と俱生する無記の無色といふなり^{三五}。

諸法の無記の無色が生ずるとき、彼は無記心と俱なりや。答へて曰く、(一)或は法の無記の無色が生ずるとき無記心と俱なるあり、(二)善心と俱なるあり、(三)不善心と俱なるあり。

【三】 次下に、「善竟り」との夾註あり。

【三三】 不善の無色が生ずる時、俱起する法の三性分別。此に二あり。

【三四】 不善心と俱生する無色の三性分別。此の三あり。

【三五】 次に「不善竟り」の夾註あり。

【三六】 無記の無色が生ずる時、俱起する法の三性分別。此に三あり。

謗斷なれば、彼は見諦斷法を得するや。答へて曰く、是の如し。

若し思惟斷法を得するものなれば、彼の得は思惟斷なりや。答へて曰く、是の如し。設し得が思惟斷なれば、彼は思惟斷法を得するや。答へて曰く、或は彼は思惟斷、或は不斷を得するなり。

若し不斷法を得するものなれば、彼の得は不斷なりや。答へて曰く、或は彼は思惟斷なり、或は不斷なり。設し得が不斷なれば、彼は不斷法を得するや。答へて曰く、是の如し。

第二節 無色と俱生する法との三性分別に於ける相互關係

諸法の善の無色が生ずるとき、彼は善心と俱なりや。答へて曰く、(一)或は法の善の無色が生ずるとき、彼は善心と俱なるあり、(二)不善心と俱なるあり、(三)無記心と俱なるあり。

(一)云何んが法の善の無色が生ずるとき、善心と俱なるものなりや。答へて曰く、諸法にして彼の心と相應すると彼と俱有なるとの善、是を法の善の無色が生ずるとき善心と俱なるものといふ。

(二)云何んが法の善の無無色が生ずるとき、不善心と俱なるものなりや。答へて曰く、不善心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき、善法の得が生ずるが如き、是を法の善の無色が生ずるとき不善心と俱なるものといふ。(三)云何んが法の善の無色が生ずるとき、彼は無記心と俱なるものなりや。

答へて曰く、無記心にて若しくは退し若しくは生ずるとき、善法の得の生ずるが如き、是を法の善の無色が生ずるとき無記心と俱なるものといふ。

設し諸法の善心と俱にして生ずるものなれば、彼の法は善の無色なりや。答へて曰く、或は法の善心と俱生するものに、(一)善の無色なるあり、(二)無記の無色なるあり。

(一)云何んが法の善心と俱生するものにして善の無色なるものなりや。答へて曰く、諸法の彼の心と相應すると、彼と俱有なるとの善、是を法の善の心と俱生する善の無色といふ。(二)云何んが法の善心と俱生する無記の無色なりや。答へて曰く、善心にて勝進するとき無記法の得の生ずるが

【二八】 次下に、「得竟り」との夾註あり。

【二九】 本節は、(一)善・不善・無記の無色は、夫・善心・不善心・無記心と俱起するや、(二)逆に善心・不善心・無記心と俱起する法は、夫・善・不善・無記の無色なりやを論究する段なり。

此の中、無色とは、廣くは、無色の四蘊とて、受・想・行・識を言ふも、茲にては、特に、心所と彼の法と俱有なる法即ち彼の法の生・老・無常と得とをいふ。以下の四節の無記等の義は準之。

(婆沙一五九、毘曇部十五、頁一二五以下參照)。

【三〇】 善の無色が生ずる時俱起する法の三性分別。

此に三種あり。

【三一】 善心と俱生する無色の三性分別。

之に二種あり。

二四 若し善法を得する彼の得は善なりや。答へて曰く、是の如し。設し得の善なる、彼は善法を得するや。答へて曰く、是の如し。

若し不善法を得する彼の得は不善なりや。答へて曰く、是の如し。設し得の不善なる彼は不善法を得するや。答へて曰く、是の如し。

若し無記法を得する彼の得は無記なりや。答へて曰く、是の如し。設し得の無記なる彼は無記法を得するや。答へて曰く、是の如し。

三五 若し欲界繫法を得する彼の得は欲界繫なりや。答へて曰く、是の如し。設し得の欲界繫なる彼は、欲界繫法を得するや。答へて曰く、是の如し。

若し色界繫法を得する彼の得は色界繫なりや。答へて曰く、是の如し。設し得の色界繫なる彼は色界繫法を得するや。答へて曰く、或は彼は色界繫なり、或は不繫なり。

若し無色界繫法を得する彼の得は無色界繫なりや。答へて曰く、是の如し。設し得の無色界繫なる彼は無色界繫法を得するや。答へて曰く、或は彼は無色界繫、或は不繫を得するなり。

三六 若し學法を得するものなれば彼の得は學なりや。答へて曰く、是の如し。設し得が學なれば彼は學法を得するや。答へて曰く、或は彼は學、或は非學非無學を得するなり。

若し無學法を得するものなれば、彼の得は無學法なりや。答へて曰く、是の如し。設し得が無學なれば彼は無學法を得するや。答へて曰く、或は彼は無學、或は非學非無學を得するなり。

若し非學非無學法を得するものなれば、彼の得は非學非無學なりや。答へて曰く、或は彼は學なり、或は無學なり、或は非學非無學なり。設し得の非學非無學なるものなれば、彼の得は非學非無學法なりや。答へて曰く、是の如し。

三七 若し見諦斷法を得するものなれば、彼の得は見諦斷なりや。答へて曰く、是の如し。設し得が見

【二四】 能得と所得との三性分別。

こは、善法を得する得（能得）は善なりや、否や。

次に、若し得の善なるものが得する法（所得）は、善なりや等を論究するなり。

以下、能得と所得との義は之に準じて推知するべし。

【三五】 能得と所得との三界繫、不繫分別。

【三六】 能得と所得との三學分別。

【三七】 能得と所得法との見諦斷等の三斷分別。

初解脱乃至第八解脱、初除入乃至第八除入、初一切入乃至第十一切入は何の繋の結を滅するや。
法智乃至道智、空・無願・無相は何の繋の結を滅するや。

〔十三〕慈の報は何所に報を受くるや。悲・喜・護の報は何所に報を受くるや。

淨の初禪の報は何所に報を受くるや。淨の乃至有想無想の報は何所に報を受くるや。

初解脱乃至第八解脱、初除入乃至第八除入、初一切入乃至第十一切入、知他人心智・等智の報は何所に報を受くるや。

此の章の義、願くば具さに演說せん。

第一節 得の三性等の五門分別

若し過去法を得するものなれば、彼の得は過去なりや。答へて曰く、或は過去なり、或は未來なり、或は現在なり。

設し得にして過去なれば、彼は過去法を得するや。答へて曰く、或は彼は過去、或は未來、或は現在、或は無爲を得するなり。

若し未來法を得するものなれば、彼の得は未來なりや。答へて曰く、或は彼は過去なり、或は未來なり、或は現在なり。

設し得が未來なれば彼は未來法を得するや。答へて曰く、或は彼は過去、或は未來、或は現在、或は無爲を得するなり。

若し現在法を得するものなれば、彼の得は現在なりや。答へて曰く、或は彼は過去なり、或は未來なり、或は現在なり。

設し得が現在なれば、彼は現在法を得するや。答へて曰く、或は彼は過去、或は未來、或は現在、或は無爲を得するなり。

〔七〕等(無量)・淨定・解脱・除入・一切入・智・三昧の斷結問題。

〔八〕等・淨定・解脱・除入・一切入・智の受果の處の問題。

〔九〕本節は、得論一般にして、(一)先づ、得即ち三世法を得する得の三世分別、(二)能得と所得法との三性分別、(三)界繋分別、(四)三學分別、(五)三斷分別をなす段なり。

(婆沙一五七、毘曇部十五、頁九三以下參照)。

(一)過去無、現在無爲説、(二)譬喩者の成就非實有説、(三)不成就非實有説等の異執を破し、(四)能得と所得法とに同なるあり異なるものあることを明す爲めに論起せりと云ふ。

〔一〇〕三世法を得する得の三世分別。

〔一一〕次下に、「過去寛り」の夾註あり。

〔一二〕次下に、「未來寛り」の夾註あり。

〔一三〕次下に、「現在寛り」の夾註あり。

不善・無記、(三)欲界繫・色界繫・無色界繫、(四)學・無學・非學非無學、(五)見諦斷・思惟斷乃至不斷法の無色が生ずれば、彼は不斷心と俱なりや。

設し不斷心と俱なるものなれば、彼の法は不斷の無色なりや。

(六)一切の初禪には五種ありや。一切の第二禪には四種ありや。一切の第三禪には五種ありや。

一切の第四禪には四種ありや。

(七)味相應の初禪は、入るを當に味と言ふべきや、起つを當に味と言ふべきや。味相應の乃至有想無想は入るを當に味と言ふべきや、起つを當に味と言ふべきや。

諸の味相應の初禪の彼の一切は、隱沒無記なりや。設し隱沒無記なる彼の一切は、味相應の初禪なりや。

諸の味相應の乃至有想無想の彼の一切は、隱沒無記なりや、設し隱沒無記なる彼の一切は、味相應の乃至有想無想なりや。

(八)頗し初禪に入らずして第二禪に入ることありや。頗し乃至不用定に入らずして有想無想に入ることありや。

(九)頗し初禪に入らずして初禪に生ずることありや。頗し乃至有想無想に入らずして有想無想に生ずることありや。

(十)若し初禪を得するも第二禪を得するに非ざれば、彼は命終して何所に生ずるや。若し乃至不用定を得するも有想無想を得するに非ざれば、彼は命終して何所に生ずるや。

(十一)云何なる意の所念にて慈に入るや。云何なる意の所念にて悲・喜・護に入るや。

(十二)慈は何の繫の結を減するや。悲・喜・護は何の繫の結を減するや。

淨の初禪は何の繫の結を減するや。淨の乃至有想無想は、何の繫の結を減するや。

にて示せば次の如し。

五得_ト、四起_ト、支_ト

味_ト、入生_ト、無量_ト

斷結_ト、受果處_ト

此章頗具說。

と。右の意は、次の本章の内容目次の示すが如し。

【六】 得の三世等の五門分別

【七】 無色と此と俱起する心

【八】 無色と此と俱起する心

【九】 無色と此と俱起する心

【一〇】 無色と此と俱生する心

【一一】 無色と此と俱生する心

【一二】 染・不染靜慮の支に關する問題。

【一三】 味相應定の出入等に關する問題。

【一四】 入定の次第に關する問題。

【一五】 入定せずして其の處所に生ずるや否やの問題。

【一六】 下定を得するも上定を得せざるもの生處の問題。

【一七】 何を意所念(思惟)して四無量に入るやの問題。

卷の第二十五（第七編 定慧度）

第七編 定 論

（定慧度第七）

定論總目次

過去得と、是の縁を謂ふと、

阿那含と、

解説と
一行を 最も後に在りとす

第一章 得等に關する論究

（阿毘曇、過去得跋渠第一之一）（發智第十七卷、大正・二六、一〇〇八頁）

本章の内容目次

（一）若し過去法を得する、彼の得は過去なりや。設し得にして過去なれば、彼は過去法を得するや。

若し未來・現在を得するもの……善・不善・無記、欲界繫・色界繫・無色界繫、學・無學・非學非無學、見諦斷・思惟斷法を得するもの……乃至、若し不斷法を得するものなれば、彼の得は不斷なりや。

設し得にして不斷なれば、彼は不斷法を得するや。

（二）諸法の善の無色が生ずれば、彼は善心と俱なりや、設し善心と俱なるものなれば、彼の法は善の無色なりや。

第一章 得等に關する論究

六〇七

【一】 本編は、定慧度即ち一切の禪に關する諸種の論議をなすにあり。

【二】 次下に、「盡三十八品」との夾註あり。

【三】 此の定慧度の總序の類は、定慧度中の跋渠を示すもの、即ち、發智の納息と對比せば次の如し。

八慧度

發智

一、過去得跋渠——得納息

二、緣跋渠——緣納息

三、解脫跋渠——攝納息

四、阿那含跋渠——不還納息

五、一行跋渠——一行納息

此の中、（一）「過去得」とは、

得等に關する論究、（二）緣とは、

八等至に於ける味相應・淨・無漏等の等至に關する論究、

（三）「解脫」とは、等至と十想との相攝等に關する論究、

（四）「阿那含」とは、不還に關する諸問題乃至正生・正滅に關する諸問題乃至正生・正滅の世分別等の論究、（五）「一行」とは、三三昧の成就論乃至羅漢果所得時の智・所緣等に關する論究を指す。

【四】 最是、大正本に觀とあるも、三本・宮本に最とあるに據り、かく訂正す。

【五】 本章の内容を發智の頌

未知智斷を縁するものにして見習斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見習斷のものにして盡未知智斷を縁すると、復次に、諸根の見苦斷のものにして見習斷を因とするもの、盡未知智斷を縁すると、復次に、諸根の見盡斷のものにして見習斷を因とするもの、盡未知智斷を縁するとなり。(四)云何んが根の盡未知智斷を縁するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして盡未知智斷を縁するものなり。(五)云何んが根の盡未知智斷を縁するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷のものにして盡未知智斷を縁するものなり。^{四三}道法智斷を因とするもの見道斷を縁すると、道未知智斷^{四四}を因とするもの、見道斷を縁するものにつきても亦、上の如し。

阿毘曇根鍵度、緣跋渠第三十三竟り

根鍵度第六竟り

阿毘曇八鍵度論卷第二十四

【四三】「註四二」より此點迄發智と相違す。
 【四四】根の因又は所縁の道法智斷或は道未知智斷なる彼の根の所縁又は因の四諦斷分別。

ものと、復次に、諸根の見盡斷のものにして見習斷を因とするもの、盡法智斷を緣するものとなり。
 (四)云何んが根の盡法智斷を緣するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして盡法智斷を緣するものなり。(五)云何んが根の盡法智斷を緣するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷なるものにして盡法智斷を緣するものなり。^{四〇}
 諸根の盡未知智斷を因とするものなれば、彼の根は見盡斷を緣するものなりや。答へて曰く、
 (一)或は根の盡未知智斷を因とするものにして、見盡斷を緣するものあり、(二)無斷を緣するものあり。

(一)云何んが根の盡未知智斷を因とするものにして見盡斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の盡未知智斷を因とするものにして見盡斷を緣するものなり。(二)云何んが根の盡未知智斷を因とするものにして無斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の盡未知智斷のものにして無斷を緣するものなり。

設し諸根にして盡未知智斷を緣するものなれば、彼の根は見盡斷を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の盡未知智斷を緣するものにして、見盡斷を因とするものあり、(二)見苦斷を因とするものあり、(三)見習斷を因とするものあり、(四)思惟斷を因とするものあり、(五)無斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の盡未知智斷を緣するものにして見盡斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見盡斷のものにして盡未知智斷を緣するものなり。(二)云何んが根の盡未知智斷を緣するものにして見苦斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして盡未知智斷を緣するものと、復次に、諸根の見習斷のものにして見苦斷を因とするもの、盡未知智斷を緣すると、復次に、諸根の見盡斷のものにして見苦斷を因とするもの、盡未知智斷を緣するとなり。(三)云何んが根の盡

【四〇】「莊三八」より此の點まで發智と相異す。

【四一】根の因が盡未知智斷なる彼の根の所緣の四諦斷分別。

【四二】根の所緣が盡未知智斷なる彼の根の因の四諦斷分別。發智は、以下に於いて、根の所緣が見滅斷なる彼の根の因の八智斷分別をなし、全然、八種度と異れり。

く、諸根の苦未知智斷のものにして見道斷を縁すると、復次に、諸根の習未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするもの見道斷を縁すると、復次に、諸根の道未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするもの見道斷を縁するとなり。(五)云何んが根の苦未知智斷を因とするものにして、思惟斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦未知智斷のものにして思惟斷を縁すると、復次に、諸根の習未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするもの思惟斷を縁すると、復次に、諸根の思惟斷のものにして苦未知智斷を因とするもの思惟斷を縁するとなり。(六)云何んが根の苦未知智斷を因とするものにして無斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の盡未知智斷・道未知智斷なるものにして苦未知智斷を因とするもの無斷を縁するものなり。

^{三三} 設し諸根の苦未知智斷を縁するものなれば、彼の根は見苦斷を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の苦未知智斷を縁するものにして、見苦斷を因とするものあり、(二)見習斷を因とするものあり、(三)思惟斷を因とするものあり、(四)無斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の苦未知智斷を縁するものにして見苦斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして苦未知智斷を縁すると、復次に、諸根の見習斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見習斷のものにして苦未知智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして見習斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして苦未知智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして苦未知智斷を縁するものなり。(四)云何んが根の苦未知智斷を縁するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷のものにして苦未知智斷を縁するものなり。^{三三}

^{三三} 習法智斷を因とするものにして見習斷を縁するものと、習未知智斷を因とするものにして見習斷

【三三】 根の所縁が苦未知智斷なる彼の根の因の四諦斷分別發智は、以下に於て、根の所縁の見苦斷なる彼の根の因の八智斷分別をなし、八難度と全然異れり。

【三三】 次下に、一八の四の苦智竟り」の夾註あり。
【三四】 根の因又は所縁が習法智斷又は習未知智斷なる彼の根の所縁の四諦斷分別。

するもの見苦斷を縁するとなり。(二)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして見習斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして見習斷を縁するものと、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの見習斷を縁するとなり。(三)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして見盡斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして見盡斷を縁すると、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの見盡斷を縁するとなり。(四)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして見道斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして見道斷を縁すると、復次に、諸根の道法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの見道斷を縁するとなり。(五)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして思惟斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして思惟斷を縁すると、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの思惟斷を縁するとなり。(六)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして無斷を縁するものなりや。答へて曰く、根の盡法智斷と道法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの無斷を縁するものなり。(七)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁のものにして苦法智斷法を因とするものなり。

設し諸根の苦法智斷を縁するものなれば、彼の根は見苦斷を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の苦法智斷を縁するものにして、見苦斷を因とするものあり、(二)見習斷を因とするものあり、(三)思惟斷を因とするものあり、(四)無斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の苦法智斷を縁するものにして見苦斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根

【七】根の所縁が苦法智斷なる彼の根の因の四諦斷分別。以下、辯智は、根の所縁が見苦斷なる彼の根の因の八智斷分別を辨じて居り、八種度と全然異なる。

して苦未知智斷を因とするものの盡未知智斷を縁すると、復次に、諸根の盡未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするものの盡未知智斷を縁するものなり。(四)云何が根の盡未知智斷を縁するものにして習法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の習法智斷のものにして盡未知智斷を縁するものと、復次に、諸根の苦法智斷のものにして習法智斷を因とするものの盡未知智斷を縁するものとなり。(五)云何が根の盡未知智斷を縁するものにして習未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の習未知智斷のものにして盡未知智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の習未知智斷のものにして盡未知智斷を縁するものなり。(六)云何が根の盡未知智斷を縁するものにして習未知智斷を因とするものなり。(七)云何が根の盡未知智斷を縁するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷のものにして盡未知智斷を縁するものなり。

^{三六} 道法智斷を因とするものにして道法智斷を縁するものと、道未知智斷を因とするものにして道未知智斷を縁するものにつきても亦、上の如し。

^{三七} 第十節 根の因又は所縁が八智斷なる彼の根の所縁又は因の四諦斷分別

^{三九} 諸根にして苦法智斷を因とするものなれば、彼の根は見苦斷を縁するものなりや。答へて曰く、(一)或は根の苦法智斷を因とするものにして、見苦斷を縁するものあり、(二)見習斷を縁するものあり、(三)見盡斷を縁するものあり、(四)見道斷を縁するものあり、(五)思惟斷を縁するものあり、(六)無斷を縁するものあり、(七)縁すること無きものあり。

(一)云何が根の苦法智斷を因とするものにして見苦斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして見苦斷を縁すると、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因と

【五】 次下に、「八共八の盡智竟り」との夾註あり。

【六】 根の因又は所縁が道法智斷又は道未知智斷の場合の彼の根の縁又は因の八智斷分別の盡法智・盡未智斷の場合の如しと。

【七】 次下に、「八共八竟り」との夾註あり。

【八】 本節は、本章頌文の「八四門」にして、根の因の八智斷なる彼の根の所縁の四諦斷分別及び根の所縁の八智斷なる彼の根の因の四諦斷分別を詳論する段なり。

因みに、本節の組織は、發智の相當個所の組織と全然異なること、以下註に記するが如し。(婆沙一五六、毘曇部十五、頁八〇以下参考)。

【九】 根の因が苦法智斷なる彼の根の所縁の四諦斷分別。

諸根の思惟斷のものにして盡法智斷を緣するものなり。(五)云何が根の盡法智斷を緣するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷のものにして盡法智斷を緣するものなり。

諸根の盡未知智斷を因とするものなれば、彼の根は盡未知智斷を緣するものなりや。答へて曰く(二)或は根の盡未知智斷を因とするものにして、盡未知智斷を緣するものあり(二)無斷を緣するものあり。

(一)云何が根の盡未知智斷を因とするものにして盡未知智斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の盡未知智斷のものにして盡未知智斷を緣するものなり。(二)云何が根の盡未知智斷を因とするものにして無斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の盡未知智斷のものにして無斷を緣するものなり。

設し諸根の盡未知智斷を緣するものなれば、彼の根は盡未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の盡未知智斷を緣するものにして、盡未知智斷を因とするものあり、(二)苦法智斷を因とするものあり、(三)苦未知智斷を因とするものあり、(四)習法智斷を因とするものあり、(五)習未知智斷を因とするものあり、(六)思惟斷を因とするものあり、(七)無斷を因とするものあり。

(一)云何が根の盡未知智斷を緣するものにして盡未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の盡未知智斷のものにして盡未知智斷を緣するものなり。(二)云何が根の盡未知智斷を緣するものにして苦法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして盡未知智斷を緣すると、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの盡未知智斷を緣するものなり。(三)云何が根の盡未知智斷を緣するものにして苦未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の苦未知智斷のものにして盡未知智斷を緣すると、復次に、諸根の習未知智斷のものに

【三】 根の因が盡未知智斷なる彼の根の所緣の八智斷分別。

【三】 根の所緣が盡未知智斷なる彼の根の因の八智斷分別。

曰く、(一)或は根の苦未知智斷を縁するものにして、苦未知智斷を因とするものあり、(二)苦法智斷を因とするものあり、(三)習法智斷を因とするものあり、(四)習未知智斷を因とするものあり、(五)思惟斷を因とするものあり、(六)無斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の苦未知智斷を縁するものにして苦未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く諸根の苦未知智斷にして苦未知智斷を縁すると、復次に、諸根の習未知智斷のものにして、苦未知智斷を因とするもの苦未知智斷を縁するものなり。(二)云何んが根の苦未知智斷を縁するものにして苦法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の苦法知智斷のものにして苦未知智斷を縁すると、復次に、諸根の習法知智斷のものにして苦法知智斷を因とするもの苦未知智斷を縁するものなり。(三)云何んが根の苦未知智斷を縁するものにして習法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の習法智斷のものにして苦未知智斷を縁すると、復次に、諸根の苦法智斷のものにして習法智斷を因とするもの苦未知智斷を縁するものなり。(四)云何んが根の苦未知智斷を縁するものにして習未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の習未知智斷のものにして苦未知智斷を縁するものなり。(五)云何んが根の苦未知智斷を縁するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして苦未知智斷を縁するものなり。(六)云何んが根の苦未知智斷を縁するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷のものにして苦未知智斷を縁するものなり。

習法智斷を因とするものにして習法智斷を縁するもの、習未知智斷を因とするものにして習未知智斷を縁するものにつきても、亦、上の如し。

諸根の盡法智斷を因とするものなれば、彼の根は盡法智斷を縁するや。答へて曰く、(一)或は根

【七】 次下に「八共八の苦智
覺り」の夾註あり。

【八】 根の因又は所縁が、習
法智斷又は習未知智斷の場合
の、彼の根の縁又は因の八智
斷分別。

前の苦法智斷苦未知智斷な
る場合に論ぜしが如しとなり。
【九】 根の因が盡法智斷なる
彼の根の所縁の八智斷分別。

斷を緣するものあり、(六)無斷を緣するものあり。

(一)云何んが根の苦未知智斷を因とするものにして苦未知智斷を緣するものなりや。答へて曰く諸根の苦未知智斷のものにして苦未知智斷を緣するものと、復次に、諸根の習未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするもの苦未知智斷を緣するものとなり。(二)云何んが根の苦未知智斷を因とするものにして習未知智斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の苦未知智斷のものにして習未知智斷を因とするもの習未知智斷を緣するものと、復次に、諸根の習未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするもの習未知智斷を緣するものなり。(三)云何んが根の苦未知智斷を因とするものにして盡未知智斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の苦未知智斷のものにして盡未知智斷を緣するものと、復次に、諸根の習未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするもの盡未知智斷を緣するものなり。(四)云何んが根の苦未知智斷を因とするものにして道未知智斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の苦未知智斷のものにして道未知智斷を因とするもの道未知智斷を緣するものと、復次に、諸根の習未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするもの道未知智斷を緣するものと、復次に、諸根の道未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするもの道未知智斷を緣するものなり。(五)云何んが根の苦未知智斷を因とするものにして思惟斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の苦未知智斷のものにして思惟斷を緣するものと、復次に、諸根の習未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするもの思惟斷を緣するものと、復次に、諸根の思惟斷のものにして苦未知智斷を因とするもの思惟斷を緣するものなり。(六)云何んが根の苦未知智斷を因とするものにして無斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の盡未知智斷・道未知智斷のものにして、苦未知智斷を因とするもの無斷を緣するなり。

^{一六}設し諸根の苦未知智斷を緣するものなれば、彼の根は苦未知智斷を因とするものなりや。答へて

〔一六〕根の所緣が苦未知智斷なる彼の根の因の八智斷分別。

ものにして思惟斷を緣するものと、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの思惟斷を緣するものと、復次に、諸根の思惟斷のものにして苦法智斷を因とするもの思惟斷を緣するものとなり。(十)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして無斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の盡法智斷・道法智斷のものにして、苦法智斷を因とするものの無斷を緣するものなり。(十一)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして緣すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無緣なるものにして苦法智斷^三法を因とするものなり。

^{一四}設し諸根の苦法智斷を緣するものなれば、彼の根は苦法智斷を因とするものなりや。答へて曰く(一)或は根は苦法智斷を緣するものにして、苦法智斷を因とするものあり、(二)習法智斷を因とするものあり、(三)思惟斷を因とするものあり、(四)無斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の苦法智斷を緣するものにして苦法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして苦法智斷を緣するものと、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの苦法智斷を緣するものとなり。(二)云何んが根の苦法智斷を緣するものにして習法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を緣するものと、復次に、諸根の苦法智斷のものにして、習法智斷を因とするもの苦法智斷を緣するものとなり。(三)云何んが根の苦法智斷を緣するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして苦法智斷を緣するものなり。(四)云何んが根の苦法智斷を緣するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷なるものにして苦法智斷を緣するものなり。

^{一五}諸根の苦未知智斷を因とするものなれば、彼の根は苦未知智斷を緣するものなりや。答へて曰く(一)或は根の苦未知智斷を因とするものにして、苦未知智斷を緣するものあり、(二)習未知智斷を緣するものあり、(三)盡未知智斷を緣するものあり、(四)道未知智斷を緣するものあり、(五)思惟

【三】法の字は大正本に無きも、三本・宮本にあるを以て、これをこゝに補正す。
【四】根の所緣が苦法智斷なる彼の根の因の八智斷分別。

【五】根の因が苦未知智斷なる彼の根の所緣の八智斷分別。

して苦未知智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして苦未知智斷を縁するものと、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの苦未知智斷を縁するとなり。(二)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして習法智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして習法智斷を縁するものと、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの苦法智斷を縁するものなりや。(四)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして習未知智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして苦法智斷を因とするものにして盡法智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして盡法智斷を縁するものなりや。復次に、諸根の盡法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの盡法智斷を縁するものなり。(六)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして盡未知智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして盡未知智斷を縁するものなり。(七)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして道法智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして道法智斷を縁するものなりや。復次に、諸根の道法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの道法智斷を縁するものなり。(八)云何んが根の苦法智斷を縁するものにして道未知智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして道未知智斷を縁するものなり。(九)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして思惟斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷の

見盡斷を縁するものと、復次に、諸根の盡法智斷のものにして習法智斷を因とするもの見盡斷を縁するものとなり。(六)云何んが根の見盡斷を縁するものにして、習未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の習未知智斷のものにして見盡斷を縁するものと、復次に、諸根の苦未知智斷のものにして習未知智斷を因とするもの見盡斷を縁するものとなり。(七)云何んが根の見盡斷を縁するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして見盡斷を縁するものなり。(八)云何んが根の見盡斷を縁するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷なるものにして見盡斷を縁するものなり。^九

見道斷を因とするものの道法智斷を縁するものと、見道斷を因とするもの道未知智斷を縁するものにつきても、亦、上の如し。

第九節 根の因縁と所縁縁との八智斷分別

諸根の苦法智斷を因とするものなれば、彼の根は苦法智斷を縁するものなりや。答へて曰く、(一)或は根の苦法智斷を因とするものにして、苦法智斷を縁するものあり、(二)苦未知智斷を縁するものあり、(三)習法智斷を縁するものあり、(四)習未知智斷を縁するものあり、(五)盡法智斷を縁するものあり、(六)盡未知智斷を縁するものあり、(七)道法智斷を縁するものあり、(八)道未知智斷を縁するものあり、(九)思惟斷を縁するものあり、(十)無斷を縁するものあり、(十一)縁すること無きものあり。

(一)云何んが根の苦法智斷を因とするものにして、苦法智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして苦法智斷を縁するものと、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの苦法智斷を縁するものとなり。(二)云何んが根の苦法智斷を因とするもの

【八】 次下に、「四諦の八、の盡竟り」との夾註あり。

【九】 根の因の見道斷なる彼の根の所縁の八智斷分別及び根の所縁の見道斷なる彼の根の因の八智斷分別。

此は、根の見盡斷の場合の如しとなり。

【一〇】 次下に、「四八竟り」との夾註あり。

【一一】 本節は、本章初頭の頌文の「八等の八を有するもの」に相當し、根の因縁と所縁々々とを八智斷の立場より考察せしものなり。

(婆沙一五六、毘婆沙十五、頁七四以下參考)。

【一二】 根の因の苦法智斷なる彼の根の所縁の八智斷分別。

なり。(三)云何んが根の見盡斷を因とするものにして無斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見盡斷にして無斷を縁するものなり。(四)云何んが根の見盡斷を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁なるものにして見盡斷法を因とするものなり。

七
設し諸根の見盡斷を縁するものなれば、彼の根は盡法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の見盡斷を縁するものにして、盡法智斷を因とするものあり、(二)盡未知智斷を因とするものあり、(三)苦法智斷を因とするものあり、(四)苦未知智斷を因とするものあり、(五)習法智斷を因とするものあり、(六)習未知智斷を因とするものあり、(七)思惟斷を因とするものあり、(八)無斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の見盡斷を縁するものにして盡法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の盡法智斷にして見盡斷を縁するものなり。(二)云何んが根の見盡斷を縁するものにして盡未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の盡未知智斷のものにして見盡斷を縁するものなり。(三)云何んが根の見盡斷を縁するものにして苦法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして苦法智斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷のものにして苦法智斷を縁するものなり。(四)云何んが根の見盡斷を縁するものにして苦未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の苦未知智斷なるものにして見盡斷を縁するものと、復次に、諸根の習未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするもの見盡斷を縁するものと、復次に、諸根の見盡斷を縁するものと、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするもの見盡斷を縁するものと、復次に、諸根の見盡斷を縁するものにして苦未知智斷を縁するものなり。(五)云何んが根の見盡斷を縁するものにして習法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の習法智斷のものにして見盡斷を縁するものと、復次に、諸根の苦法智斷のものにして習法智斷を因とするもの

【六】發智に、次下に「見滅道を因とするものにして修斷を縁するものとは、謂く、根が修斷なるものにして、見滅斷を因とするもの、修斷を縁するものなり」の一句あり。

八健度と發智との相違點とす。

【七】根の所縁の見盡斷なる彼の根の因の八智斷分別。

因みに、以下の設問答(此處より、「註八」迄)は、全然發智の文と異れり。

發智に於いては、「根の所縁が滅法智斷なる彼の根の因の四諦斷分別」等をなせり。

(發智十六、婆沙百五十六卷、毘曇部十五、頁七二—七四參照のこと)

卷の第二十四 (第六編 根捷度)

(根捷度中、七、緣跋渠之二)

第八節 因の四諦斷なる根の所緣の八智斷分別並に緣の四諦斷なる根の因の八智斷分別(續き)

復次に、諸根の苦法智斷のものにして習法智斷を因とするもの見苦斷を緣するものなり。(四)云何んが根の見苦斷を緣するものにして習未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の習未知智斷のものにして見苦斷を緣するものと、復次に、諸根の苦未知智斷のものにして習未知智斷を因とするもの見苦斷を緣するものとなり。(五)云何んが根の見苦斷を緣するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして見苦斷を緣するものなり。(六)云何んが根の見苦斷を緣するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷なるものにして見苦斷を緣するものなり。

見習諦斷を因とするものなれば習法智斷を緣するや。見習斷を因とするものなれば習未知智斷を緣するやにつきても亦、上の如し。

諸根の見盡斷を因とするものなれば、彼の根は盡法智斷を緣するや。答へて曰く、(一)或は根の見盡斷を因とするものにして、盡法智斷を緣するものあり、(二)盡未知智斷を緣するものあり、(三)無斷を緣するものあり、(四)緣すること無きものあり。

(一)云何んが根の見盡斷を因とするものにして盡法智斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の見盡斷のものにして盡法智斷を緣するものなり。(二)云何んが根の見盡斷を因とするものにして盡未知智斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の見盡斷のものにして盡未知智斷を緣するものなり。

【一】本節は、内容上は勿論のこと一文章の上よりも、全然前節の續行なり。

【二】次下に、「四の諦八の苦諦竟り」との夾註あり。

【三】根の因の見習斷なる彼の根の所緣の見習斷なる彼の根の所緣の見習斷なる彼の根の因の八智斷分別。こは、根の見苦斷の場合の如しとなり。

【四】根の因の見盡斷なる彼の根の所緣の八智斷分別。

【五】發智には、次下に、「或は修斷(思惟斷)を緣するものあり」の一句あり。

を因とするものあり、(六)無斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の見苦斷を緣するものにして、苦法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の苦法智斷を因とするものゝ見苦斷を緣するものと、復次に、諸根の習法智斷のものにして苦法智斷を因とするものゝ見苦斷を緣するものにして、苦未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の苦未知智斷のものにして見苦斷を緣するものと、復次に、諸根の習未知智斷のものにして苦未知智斷を因とするものゝ見苦斷を緣するものとなり。(二)云何んが根の見苦斷を緣するものにして、苦未知智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の苦未知智斷のものにして見苦斷を緣するものとなり。(三)云何んが根の見苦斷を緣するものにして習法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の習法智斷のものにして見苦斷を緣するものと、(次卷に續く)

阿毘曇八禪度論卷第二十三

【八七】本項は、次卷の初頭へ直ちに密接さるべきものなり。卷の量の上のみよりの分卷ならんも、こは一文章なれば決して切斷さるべきに非ず。

見盡斷のものにして見苦斷を因とするもの、盡法智斷を緣するものとなり。(六)云何んが根の見苦斷を因とするものにして盡未知智斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして、盡未知智斷を緣するものと、復次に、諸根の見習斷のものにして見苦斷を因とするもの、盡未知智斷を緣するものなり。(七)云何んが根の見苦斷を因とするものにして道法智斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして道法智斷を緣すると、復次に、諸根の見習斷のものにして見苦斷を因とするもの、道法智斷を緣するものなり。(八)云何んが根の見苦斷を因とするものにして道未知智斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして道未知智斷を緣すると、復次に、諸根の見習斷のものにして見苦斷を因とするもの、道未知智斷を緣するものなり。(九)云何んが根の見苦斷を因とするものにして、思惟斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして思惟斷を緣すると、復次に、諸根の見習斷のものにして見苦斷を因とするもの、思惟斷を緣するものなり。(十)云何んが根の見苦斷を因とするものにして見苦斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の見盡・見道斷のものにして見苦斷を因とするもの、無斷を緣するものなり。(十一)云何んが根の見苦斷を因とするものにして緣すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無緣なるもの、見苦斷法を因とするものなり。

^A 設し諸根の見苦斷を緣するものなれば、彼の根は苦法智斷を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の見苦斷を緣するものにして、苦法智斷を因とするものあり、(二)苦未知智斷を因とするものあり、(三)智法智斷を因とするものあり、(四)智未知智斷を因とするものあり、(五)思惟斷

【七】 見道は大正本に見習とあるも三本・宮本に見道とあり法相上よりもこゝは見道たるべきにより、かく訂正せり。

【八】 根の所縁が見苦斷なるもの、彼の根の因の八智斷分別。

以下設問答の文章(此處より、次卷「註二」迄)は、發智の文と全然異なる。

發智の設問は、「根の所縁が苦法智斷なるもの彼の根の因の四諦斷分別」をなせり。今此の相違をこの註中に示すことは不可能なり。學者は宜敷し、直ちに比較すべし。發智第一部六、婆沙百五十六卷、毘曇十五、頁六九—七一の終り迄。

見盡斷のものゝ見盡斷を縁するものなり。^{A1} (二)云何んが根の見盡斷を因とするものにして無斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見盡斷のものにして無斷を縁するものなり。(三)云何んが根の見盡斷を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁なるものにして見盡斷法を因とするものなり。

^{A2} 設し諸根の見盡斷を縁するものなれば、彼の根は見盡斷を因とするものなりや。答へて曰く、(二)或は根の見盡斷を縁するものにして、見盡斷を因とするものあり、(二)見苦斷を因とするものあり、(三)見習斷を因とするものあり。(四)思惟斷を因とするものあり、(五)無斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の見盡斷を縁するものにして見盡斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見盡斷のものにして見盡斷を縁するものなり。(二)云何んが諸根の見盡斷を縁するものにして見苦斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして見盡斷を縁すると、復次に、諸根の見習斷のものにして見苦斷を因とするものゝ見盡斷を縁すると、復次に、諸根の見苦斷のものにして見習斷を因とするものゝ見盡斷を縁すると、復次に、諸根の見習斷のものにして見習斷を因とするものゝ見盡斷を縁すると、復次に、諸根の見盡斷のものにして見盡斷を縁するものなり。(四)云何んが根の見盡斷を縁するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものゝ見盡斷を縁するものなり。(五)云何んが根の見盡斷を縁するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷のものゝ見盡斷を縁するものなり。^{A3}

^{A3} 見道斷を因とするものにして見道斷を縁するやにつきても、亦、上の如し。^{A4}

【A1】 には、次下に「見滅斷を因とするものにして、修斷を縁するものあり、謂く、根は修斷にして、見滅斷を因とするもの修斷を縁するものなり」との一句ありて、八捷度と相違せり。

【A2】 根の所縁の見盡斷のもの彼の根の因の四諦斷分別

【A3】 次下に、「盡諦竟り」との夾註あり。

【A4】 根の因の見道斷なる時と、根の所縁の見道斷なる時との夫々の根の所縁と因との四諦斷分別。

【A5】 見盡斷(前項)の如しと
【A6】 次下に、「四諦竟り」の夾註あり。

にして見苦斷を因とするもの、思惟斷を緣するとなり。(六)云何んが根の見苦斷を因とするものにして無斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の見盡・見道斷のものにして見苦斷を因とするもの、無斷を緣するものなり。(七)云何んが根の見苦斷を因とするものにして緣すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無緣なるものにして見苦斷法を因とするものなり。

^{七五} 設し諸根の見苦斷を緣するものなれば、彼の根は見苦斷を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の見苦斷を緣するものにして、見苦斷を因とするものあり、(二)見習斷を因とするものあり、(三)思惟斷を因とするものあり、(四)無斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の見苦斷を緣するものにして見苦斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして見苦斷を緣すると、復次に、諸根の見習斷のものにして見苦斷を因とするもの、見苦斷を緣するものなり。(二)云何んが根の見苦斷を緣するものにして見習斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見習斷のものにして見苦斷を緣すると、復次に、諸根の見苦斷なるものにして見習斷を因とするもの、見苦斷を緣するものなり。(三)云何んが根の見苦斷を緣するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして見苦斷を緣するものなり。

(四)云何んが根の見苦斷を緣するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷なるもの、見苦斷を緣するものなり。^{七六}

^{七五} 見習斷を因とするものにして見習斷を緣するにつきても亦、上の如し。

^{七六} 諸根の見盡斷を因とするものなれば、彼の根は見盡斷を緣するや。答へて曰く、(一)或は根の見盡斷を因とするものにして、見盡斷を緣するものあり。^{七九} (二)無斷を緣するものあり、(三)緣すること無きものあり。

(二)云何んが根の見盡斷を因とするものにして見盡斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の

【七五】 根の所緣が見苦斷なるもの、彼の根の因の四諦斷分別。

【七六】 次下に、「苦諦竟り」の夾註あり。

【七七】 根の因の見習斷と、根の所緣の見習斷との夫々の根の所緣又は因の四諦斷分別。

見苦斷(前項)の場合の如し。

【七八】 根の因の見盡斷のもの、彼の根の所緣の四諦斷分別。

【七九】 發智には、次下に、「或は修斷を緣するものあり」の一句あり。

無斷を縁するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして無斷を縁するものなり。^{七二}

第六節 根の因縁と所縁々との四諦斷分別^{七三}

諸根の見苦斷を因とするものなれば、彼の根は見苦斷を縁するや。答へて曰く、(一)或は根の見苦斷を因とするものにして、見苦斷を縁するものあり、(二)見習斷を縁するものあり、(三)見盡斷を縁するものあり、(四)見道斷を縁するものあり、(五)思惟斷を縁するものあり、(六)無斷を縁するものあり、(七)縁すること無きものあり。

(一)云何んが根の見苦斷を因とするものにして見苦斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷なるものゝ見苦斷を縁するとなり。復次に、諸根の見習斷なるものにして見苦斷を因とするものゝ見苦斷を縁するとなり。(二)云何んが根の見苦斷を因とするものにして見習斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして見習斷を縁すると、復次に、諸根の見苦斷を因とするものゝ見盡斷を縁するとなり。(三)云何んが根の見苦斷を因とするものにして見盡斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして見道斷を縁すると、復次に、諸根の見苦斷を因とするものゝ見盡斷を縁するとなり。(四)云何んが根の見苦斷を因とするものゝ見道斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして見道斷を縁すると、復次に、諸根の見苦斷を因とするものゝ見道斷を縁するとなり。(五)云何んが根の見苦斷を因とするものにして思惟斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見苦斷のものにして思惟斷を縁すると、復次に、諸根の見苦斷のものにして見苦斷を因とするものゝ思惟斷を縁すると、復次に、諸根の思惟斷のもの

【七二】 次下に、「五の三竟り」の夾註あり。

【七三】 本節は、本章初頭の頌文中の、「及四」に相當するものにして、根の因の見苦斷・見習斷・見盡斷・見道斷なるものと其の根の所縁が夫々四諦斷なるとの關係を一一の場合に就きて論究する段なり。其の組織は次の如し、(一)(a)根の因の見苦斷なるもの彼の根の所縁は見苦斷なりや、見盡斷、見道斷なりや。

(b)根の所縁が見苦斷なるもの彼の根の因は見苦斷なりや、乃至見道斷なりや、乃至見盡斷なりや、乃至(二)見習斷、(三)見盡斷(四)見道斷の場合も見苦斷の場合に準ず。

【七四】 根の因が見苦斷なるもの彼の根の四諦斷分別。

(一)云何んが根の思惟斷を縁するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷なるものにして思惟斷を縁するものなり。(二)云何んが根の思惟斷を縁するものにして見諦斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見諦斷のものにして思惟斷を縁するものと、復次に、諸根の思惟斷のものにして見諦斷を因とするもの、思惟斷を縁するものとなり。(三)云何んが根の思惟斷を縁するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷なるものにして思惟斷を縁するものなり。^{六九}

諸根の無斷を因とするものなれば、彼の根は無斷を縁するや。答へて曰く、(一)或は根の無斷を因とするものにして、無斷を縁するものあり、(二)見諦斷を縁するものあり、(三)思惟斷を縁するものあり。

(一)云何んが根の無斷を因とするものにして無斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無斷なるものにして、無斷を縁するものなり。(二)云何んが根の無斷を因とするものにして見諦斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無斷なるものにして見諦斷を縁するものなり。(三)云何んが根の無斷を因とするものにして思惟斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無斷にして思惟斷を縁するものなり。

設し諸根の無斷を縁するものなれば、彼の根は無斷を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の無斷を縁するものにして、無斷を因とするものあり、(二)見諦斷を因とするものあり、(三)思惟斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の無斷を縁するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷なるものにして無斷を縁するものなり。(二)云何んが根の無斷を縁するものにして見諦斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見諦斷のものにして無斷を縁するものなり。(三)云何んが根の

【六九】次下に、「思惟實り」の夾註あり。

【七〇】根の因の無斷なるもの、彼の根の所縁の三斷分別。

【七一】根の所縁が無斷なるもの、彼の根の因の三斷分別。

六五 設し諸根の見諦斷を緣するものなれば、彼の根は見諦斷を因とするものなりや。答へて曰く、
(一)或は根の見諦斷を緣するものにして、見諦斷を因とするものあり、(二)思惟斷を因とするものあり、(三)無斷を因とするものあり。

(一)云何んが根の見諦斷を緣するものにして見諦斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の見諦斷のものにして見諦斷を緣するものなり。(二)云何んが根の見諦斷を緣するものにして思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして見諦斷を緣するものなり。(三)云何んが根の見諦斷を緣するものにして無斷を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無斷にして見諦斷を緣するものなり。^{六六}

六七 諸根の思惟斷を因とするものなれば、彼の根は思惟斷を緣するや。答へて曰く、(一)或は根の思惟斷を因とするものにして、思惟斷を緣するものあり、(二)見諦斷を緣するものあり、(三)無斷を緣するものあり、(四)緣すること無きものあり。

(一)云何んが根の思惟斷を因とするものにして思惟斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして思惟斷を緣するものなり。(二)云何んが根の思惟斷を因とするものにして見諦斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして見諦斷を緣するものなり。(三)云何んが根の思惟斷を因とするものにして無斷を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の思惟斷のものにして無斷を緣するものなりや。(四)云何んが根の思惟斷を因とするものにして緣すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無緣なるものにして思惟斷法を因とするものなり。

六八 設し諸根の思惟斷を緣するものなれば、彼の根は思惟斷を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の思惟斷を緣するものにして、思惟斷を因とするものあり、(二)見諦斷を因とするものあり、(三)無斷を因とするものあり。

【六五】 根の所緣が見諦斷なるもの彼の根の因の三斷分別。

【六六】 次下に、「見諦斷竟り」との夾註あり。
【六七】 根の因が思惟斷なるもの彼の根の所緣の三斷分別。

【六八】 根の所緣が思惟斷なるもの彼の根の因の三斷分別。

六二 設し諸根にして非學非無學を縁するものなれば、彼の根は非學非無學を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の非學非無學を縁するものにして、非學非無學を因とするものあり、(二)學を因とするものあり、(三)無學を因とするものあり。

(二)云何が根の非學非無學を縁するものにして非學非無學を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の非學非無學なるもの、非學非無學を縁するものなり。(二)云何が根の非學非無學を縁するものにして學を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の學なるものにして非學非無學を縁すると、復次に、諸根の無學なるものにして學を因とするもの、非學非無學を縁するとなり。(三)云何が根の非學非無學を縁するものにして無學を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無學なるもの、非學非無學を縁するものなり。^{六三}

第五節 根の因縁と所縁縁との三斷分別

六四 諸根にして見諦斷を因とするものなれば、彼の根は見諦斷を縁するや。答へて曰く、(一)或は根の見諦斷を因とするものにして、見諦斷を縁するものあり、(二)思惟斷を縁するものあり、(三)無斷を縁するものあり、(四)縁すること無きものあり。

(一)云何が根の見諦斷を因とするものにして見諦斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見諦斷のものにして見諦斷を縁するものなり。(二)何云が根の見諦斷を因とするものにして思惟斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見諦斷のものにして思惟斷を縁すると、復次に、諸根の思惟斷のものにして見諦斷を因とするもの、思惟斷を縁するとなり。(三)云何が根の見諦斷を因とするものにして無斷を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の見諦斷のものにして無斷を縁するものなり。(四)云何が根の見諦斷を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁なるものにして見諦斷法を因とするものなり。

【六二】 根の所縁の非二學なるもの彼の根の因の三學分別。

【六三】 次下に、「四の三竟り」との夾註あり。

【六四】 本節は、本章頌文の「五三」中の第五に當るものにして、前四節と同じく、根の因の見諦斷・思惟斷・不斷なる、其の根の所縁の三斷なるとの一一の關係を分別する段なり。

(婆沙百五十六卷、毘曇部十五、頁六三參考)。

【六四】 根の因の見諦斷なるもの彼の根の所縁の三斷分別。

非學非無學を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無學のものにして非學非無學を縁するものなり。

五八

設し諸根の無學を縁するものなれば、彼の根は無學を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の無學を縁するものにして、無學を因とするものあり、(二)學を因とするものあり、(三)非學非無學を因とするものあり。

(一)云何が根の無學を縁するものにして無學を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無學なるものゝ無學を縁するなり。(二)云何が根の無學を縁するものにして學を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の學なるものゝ無學を縁すると、復次に、諸根の無學なるものにして、學を因とするものゝ無學を縁するとなり。(三)云何が根の無學を縁するものにして非學非無學を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の非學非無學のものにして無學を縁するものなり。

五九

諸根の非學非無學を因とするものなれば、彼の根は非學非無學を縁するや。答へて曰く、(一)或は根の非學非無學を因とするものにして、非學非無學を縁するものあり、(二)學を縁するものあり、(三)無學を縁するものあり、(四)縁すること無きものあり。

(一)云何が根の非學非無學を因とするものにして、非學非無學を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の非學非無學のものにして非學非無學を縁するものなり。(二)云何が根の非學非無學を因とするものにして學を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の非學非無學のものにして學を縁するものなり。(三)云何が根の非學非無學を因とするものにして無學を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の非學非無學にして無學を縁するものなり。(四)云何が根の非學非無學を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁なるものにして非學非無學法を因とするものなり。

【五八】 根の所縁の無學なるもの彼の根の因の三學分別。

【五九】 次下に、「無學竟り」の夾註あり。

【六〇】 根の因の非二學なるもの彼の根の所縁の三學分別。

の學を緣すると、復次に、諸根の無學なるものにして學を因とするものゝ學を緣するとなり。(二)云何が根の學を因とするものにして無學を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の學なるものゝ無學を緣すると、復次に、諸根の無學なるものにして學を因とするものゝ無學を緣するとなり。(三)云何が根の學を因とするものにして非學非無學を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の學なるものゝ非學非無學を緣すると、復次に、諸根の無學なるものにして學を因とするものゝ非學非無學を緣するとなり。

^{五五}

設し諸根にして學を緣するものなれば、彼の根は學を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の學を緣するものにして、學を因とするものあり、(二)無學を因とするものあり、(三)非學非無學を因とするものあり。

(一)云何が根の學を緣するものにして學を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の學なるものゝ學を緣すると、復次に、諸根の無學なるものにして學を因とするものゝ學を緣するとなり。(二)云何が根の學を緣するものにして無學を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無學なるものゝ學を緣するなり。(三)云何が根の學を緣するものにして非學非無學を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の非學非無學なるものゝ學を緣するなり。^{五六}

^{五七} 諸根の無學を因とするものなれば、彼の根は無學を緣するや。答へて曰く、(一)或は根の無學を因とするものにして、無學を緣するものあり、(二)學を緣するものあり、(三)非學非無學を緣するものあり。

(一)云何が根の無學を因とするものにして無學を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の無學なるものゝ無學を緣するなり。(二)云何が根の無學を因とするものにして學を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の無學なるものゝ學を緣するなり。(三)云何が根の無學を因とするものにして、

【五五】 根の所緣の學なるもの彼の根の因の三學分別。

【五六】 次下に「學竟り」の夾註あり。

【五七】 根の因の無學なるもの彼の根の所緣の三學分別。

て欲界繫を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無色界繫のものにして欲界繫を縁するものなり。
(三)云何が根の無色界繫を因とするものにして色界繫を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無色界繫のものにして色界繫を縁するものなり。(四)云何が根の無色界繫を因とするものにして不繫を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無色界繫のものにして不繫を縁するものなり。(五)云何が根の無色界繫を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁のものにして無色界繫法を因とするものなり。

設し諸根にして無色界繫を縁するものなれば、彼の根は無色界繫を因とするや。答へて曰く、(一)或は根の無色界繫を縁するものにして、無色界繫を因とするものあり、(二)欲界繫を因とするものあり、(三)色界繫を因とするものあり、(四)不繫を因とするものあり。

(一)云何が根の無色界繫を縁するものにして、無色界繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無色界繫のものにして無色界繫を縁するものなり。(二)云何が根の無色界繫を縁するものにして欲界繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の欲界繫のものにして無色界繫を縁するものなり。(三)云何が根の無色界繫を縁するものにして色界繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の色界繫のものにして無色界繫を縁するものなり。(四)云何が根の無色界繫を縁するものにして不繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の不繫なるものにして無色界繫を縁するものなり。

第五三 第四節 根の因縁と所縁縁との三學分別

諸根の學を因とするものなれば、彼の根は學を縁するや。答へて曰く、(一)或は根の學を因とするものにして、學を縁するものあり、(二)無學を縁するものあり、(三)非學非無學を縁するものあり。(一)云何が根の學を因とするものにして學を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の學なるもの

【五二】 根の所縁の無色界繫のもの彼の根の因の三界繫分別。

【五一】 繫の字は太正本には無きも、三本・宮本・聖本・聖乙本には皆有り、故に、今はかく補正す。

【五〇】 次下に、「三の三竟り」との夾註あり。

【四九】 本節は、本章頌文の「五三」中の第四に當るものにして、前三節と同様に根の因の學・無學・非學非無學なると、其の所縁の三學なるとの關係を一分別する段なり。

(婆沙百五十六卷、毘婆沙十五、頁六一參照)。

【四五】 根の因が學なるもの彼の根の所縁の三學分別。

縁するものなりや。答へて曰く、諸根の色界繫のものにして欲界繫を縁するものなり。(三)云何が根の色界繫を因とするものにして無色界繫を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の色界繫のものにして無色界繫を縁するものなり。(四)云何が根の色界繫を因とするものにして不繫を縁するものなり。(五)云何が根の色界繫を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁なるものにして色界繫法を因とするものなり。

^{四七} 設し諸根にして色界繫を縁するものなれば、彼の根は色界繫を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の色界繫を縁するものにして、色界繫を因とするものあり、(二)欲界繫を因とするものあり、(三)無色界繫を因とするものあり、(四)不繫を因とするものあり。

(一)云何が根の色界繫を縁するものにして色界繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の色界繫のものにして色界繫を縁するものなり。(二)云何が根の色界繫を縁するものにして欲界繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の欲界繫のものにして色界繫を縁するものなり。(三)云何が根の色界繫を縁するものにして無色界繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無色界繫のものにして色界繫を縁するものなり。(四)云何が根の色界繫を縁するものにして不繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の不繫なるものにして色界繫を縁するものなり。^{四八}

^{四九} 諸根の無色界繫を因とするものなれば、彼の根は無色界繫を縁するものなり。(一)或は根の無色界繫を因とするものにして、無色界繫を縁するものあり。(二)欲界繫を縁するものあり、色界繫を縁するものあり、不繫を縁するものあり、縁すること無きものあり。

(一)云何が根の無色界繫を因とするものにして無色界繫を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無色界繫のものにして無色界繫を縁するものなり。^{五〇} (二)云何が根の無色界繫を因とするものにして

【四七】 根の所縁の色界繫なるもの彼の根の所縁の三界繫分別。

【四八】 次下に、「色界竟り」の夾註あり。

【四九】 根の因の無色界繫のもの彼の根の所縁の三界繫分別。

【五〇】 「欲界繫を縁するものあり」の一句は、發智になし。

【五一】 發智には、「云何が根の無色界繫を因とするもの……欲界繫を縁するものなり」の一文無し。

るものなりや。答へて曰く、諸根の欲界繫のものにして色界繫を縁するものなり。(三)云何が根の欲界繫を縁するものにして無色界繫を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の欲界繫のものにして無色界繫を縁するものなり。(四)云何が根の欲界繫を因とするものにして不繫を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の欲界繫のものにして不繫を縁するものなり。(五)云何が根の欲界繫を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁なるものにして欲界繫法を因とするものなり。

設し諸根の欲界繫を縁するものなれば、彼の根は欲界繫を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の欲界繫を縁するものにして欲界繫を因とするものあり、(二)色界繫を因とするものあり、(三)無色界繫を因とするものあり、(四)不繫を因とするものあり。

(一)云何が根の欲界繫を縁するものにして欲界繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の欲界繫のものにして欲界繫を縁するものなり。(二)云何が根の欲界繫を縁するものにして色界繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の色界繫のものにして欲界繫を縁するものなり。(三)云何が根の欲界繫を縁するものにして無色界繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無色界繫のものにして欲界繫を縁するものなり。(四)云何が根の欲界繫を縁するものにして不繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の不繫なるものにして欲界繫を縁するものなり。

諸根の色界繫を因とするものなれば、彼の根は色界繫を縁するや。答へて曰く、(一)或は根の色界繫を因とするものにして、色界繫を縁するものあり、(二)欲界繫を縁するものあり、(三)無色界繫を縁するものあり、(四)不繫を縁するものあり、(五)縁すること無きものあり。

(二)云何が根の色界繫を因とするものにして色界繫を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の色界繫のものにして色界繫を縁するものなり。(三)云何が根の色界繫を因とするものにして欲界繫を

【四二】根の所縁の欲界繫のもの彼の根の因の三界繫分別

【四一】「無色界繫を因とするものあり」の一句は發智と婆沙とに成し。

但し、發智・婆沙は、無色界より欲界に對するときは、四遠を説き其の中、所緣處(ārambhanāntarā)の立場を守りて、之を掲げざるものならん。

【四三】「云何が根の欲界繫を縁するものにして無色界繫を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無色界繫のものにして欲界繫を縁するものなり」との文は、發智に無し。

【四四】次に、「欲界竟り」の夾註あり。

【四五】根の因の色界繫なるもの彼の根の所縁の三界繫分別

を縁するものなり。(三)云何が根の無記を因とするものにして不善を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無記なるものにして不善を縁すると、復次に、諸根の不善なるものにして無記を因とするものゝ不善を縁するものなり。(四)云何が根の無記を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁なるものにして無記法を因とするものなり。

設し諸根の無記を縁するものなれば、彼の根は無記を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の無記を縁するものにして、無記を因とするものあり、(二)不善を因とするものあり、(三)不善を因とするものあり。

(一)云何が根の無記を縁するものにして無記を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無記なるものにして無記を縁すると、復次に、諸根の不善なるものにして無記を因とするものゝ無記を縁するものなり。(二)云何が根の無記を縁するものにして善を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の善なるものにして無記を縁すると、復次に、諸根の無記なるものにして善を因とするものゝ無記を縁するものなり。(三)云何が根の無記を縁するものにして不善を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の不善なるものにして無記を縁すると、復次に、諸根の無記なるものにして不善を因とするものゝ無記を縁するものなり。

第三節 根の因縁と所縁縁との三界繫分別

諸根の欲界繫を因とするものなれば、彼の根は欲界繫を縁するものなりや。答へて曰く、(一)或は根の欲界繫を因とするものにして、欲界繫を縁するものあり、(二)色界繫を縁するものあり、(三)無色界繫を縁するものあり、(四)不繫を縁するものあり、(五)縁すること無きものあり。

(一)云何が根の欲界繫を因とするものにして欲界繫を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の欲界繫のものにして欲界繫を縁するものなり。(二)云何が欲界繫を因とするものにして色界繫を縁す

【三】 根の所縁の無記なる、彼の根の因の三性分別。

【七】 次下に、「三の二竟り」との夾註あり。

【三】 本節は、(一)先づ(a)根の因の欲界繫なるもの、彼の根の所縁の三界繫・不繫分別を爲し、次に、(b)根の所縁が欲界繫なるもの彼の根の因縁の三界繫・不繫分別をなし、更に、此の論述形式を(二)(a)根の因縁の色界繫なるもの、(b)及び所縁の色界繫なるもの、(三)(a)根の因縁の無色界繫なるもの、(b)根の所縁の無色界繫なるものに對してなすものにして、本章頌文の所謂、「五三」中の第三に相當する段なり。

【元】 根の因の欲界繫なる彼の根の所縁の三界繫分別。

となり。(三)云何が根の不善を因とするものにして無記を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の不善なるものにして無記を縁すると、復次に、諸根の無記なるものにして不善を因とするものゝ無記を縁するものなり。(四)云何が根の不善を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁のものにして不善法を因とするものなり。

^三設し諸根にして不善を縁するものなれば、彼の根は不善を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の不善を縁するものにして、不善を因とするものあり、(二)善を因とするものあり、(三)無記を因とするものあり。

(一)云何が根の不善を縁するものにして不善を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の不善にして不善を縁すると、復次に、諸根の無記にして不善を因とするもの不善を縁するものなり。(二)云何が根の不善を縁するものにして善を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の善にして不善を縁すると、復次に、諸根の無記にして善を因とするものゝ不善を縁するものなり。(三)云何が根の不善を縁するものにして無記を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無記にして不善を縁すると、復次に、諸根の不善にして無記を因とするものゝ不善を縁するものなり。^{三四}

^{三五}諸根にして無記を因とするものなれば、彼の根は無記を縁するや。答へて曰く、(一)或は根の無記を因とするものにして、無記を縁するものあり、(二)善を縁するものあり、(三)不善を縁するものあり、(四)縁すること無きものあり。

(一)云何が根の無記を因とするものにして無記を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無記なるものにして無記を縁すると、復次に、諸根の不善なるものにして無記を因とするものゝ無記を縁するものなり。(二)云何が根の無記を因とするものにして善を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の無記なるものにして善を縁すると、復次に、諸根の不善なるものにして無記を因とするものゝ善

【三】根の所縁の不善なる、彼の根の因の三性分別。

【四】次に、「不善竟り」の夾註あり。
【五】彼の因の無記なる、彼の根の所縁の三性分別。

を因とするものにして無記を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の善のものゝ無記を縁すると、復次に、諸根の無記のものにして善を因とするものゝ無記を縁するとなり。(四)云何んが根の善を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁なるものにして善法を因とするものなり。

三〇 設し諸根にして善を縁するものなれば、彼の根は善を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の善を縁するものにして、善を因とするものあり、(二)不善を因とするものあり、(三)無記を因とするものあり。

(一)云何が根の善を縁するものにして善を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の善のものゝ善を縁すると、復次に、諸根の無記なるものにして善を因とするものゝ善を縁するとなり。(二)云何が根の善を縁するものにして不善を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の不善なるものにして善を縁すると、復次に、諸根の無記のものにして不善を因とするものゝ善を縁するとなり。(三)云何が根の善を縁するものにして無記を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の無記にして善を縁すると、復次に、諸根の不善なるものにして無記を因とするものゝ善を縁するとなり。

三二 諸根にして不善を因とするものなれば、彼の根は不善を縁するや。答へて曰く、(一)或は根の不善を因とするものにして、不善を縁するものあり、(二)善を縁するものあり、(三)無記を縁するものあり、(四)縁すること無きものあり。

(一)云何が根の不善を因とするものにして不善を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の不善のものゝ不善を縁すると、復次に、諸根の無記なるものにして不善を因とするものゝ不善を縁するとなり。(二)云何が根の不善を因とするものにして善を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の不善なるものにして善を縁すると、復次に、諸根の無記のものにして不善を因とするものゝ善を縁する

【三〇】根の所縁が善なる、彼の根の因の三性分別。

【三二】次下に、「善竟り」の夾註あり。
【三三】根の因が不善なる、彼の根の所縁の三性分別。

のものゝ無爲を縁すると、復次に、諸根の未來のものにして現在を因とするものゝ無爲を縁するものゝ無縁なるものにして現在法を因とするものなり。

設し諸根にして現在を縁するものなれば、彼の根は現在を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の現在を縁するものにして、現在を因とするものあり、(二)過去を因とするものあり、(三)未來を因とするものあり。

(一)云何が根の現在を縁するものゝ現在を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の現在のものゝ現在を縁すると、復次に、諸根の未來のものにして現在を因とするものゝ現在を縁するものなり。

(二)云何が根の現在を縁するものゝ過去を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の過去なるものにして現在を縁すると、復次に、諸根の未來・現在のものにして過去を因とするものゝ現在を縁するものなり。(三)云何が根の現在を縁するものゝ未來を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の未來のものにして現在を縁するものなり。

第二節 根の因縁と所縁縁との三性分別

諸根にして善を因とするものなれば、彼の根は善を縁するや。答へて曰く、(一)或は根の善を因とするものにして、善を縁するものあり、(二)不善を縁するものあり、(三)無記を縁するものあり、(四)縁すること無きものあり。

(一)云何が根の善を因とするものにして善を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の善なるもの善を縁すると、復次に、諸根の無記のものにして善を因とするものゝ善を縁するものなり。(二)云何が根の善を因とするものにして不善を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の善なるものゝ不善を縁すると、復次に諸根の無記にして善を因とするものゝ不善を縁するものなり。(三)云何が根の善

【三】根の所縁が現在なる、彼の根の因の三性分別。

【七】次下に、「一ノ三竟り」との夾註あり。

【三】本節は、本章頌文の「五三中」の第二に當るものにして、(一)(a)根の因が善なる時の其の根の縁の三性分別をなし、次に(b)逆に、根の縁が善なるものゝ其の根の因の三性分別をなし、斯くして(二)(a)根の因が不善なるとき、(b)根の縁が不善なるとき、(三)(a)根の因が無記なるとき、(b)根の縁が無記なるとき、夫々の根の因と縁との三性分別を爲すを其の課題とするなり。(婆沙百五十六、毘曇部十五、頁五五以下参照)。

【三】根の因の善なる、彼の根の所縁の三性分別。

て曰く、諸根の無縁のものにして未來法を因とするものなり。

三 設し諸根の未來を緣するものなれば、彼の根は未來を因とするものなりや。答へて曰く、(一)或は根の未來を緣するものにして、未來を因とするものあり、(二)過去を因とするものあり、(三)現在を因とするものあり。

(一)云何が根の未來を緣するものにして未來を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の未來のものゝ未來を緣するものなり。(二)云何んが根の未來を緣するものにして過去を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の過去のものにして未來を緣するものと、復次に、諸根の未來・現在のものにして過去を因とするもの未來を緣するものとなり。(三)云何が根の未來を緣するものにして現在を因とするものなりや、答へて曰く、諸根の現在のものにして未來を緣するものと、復次に、諸根の未來のものにして現在を因とするもの未來を緣するものとなり。^{二四}

五 諸根の現在を因とするものなれば、彼の根は現在を緣するや。答へて曰く、(一)或は根の現在を因とするものにして、現在を緣するものあり、(二)過去を緣するものあり、(三)未來を緣するものあり、(四)無爲を緣するものあり、(五)緣すること無きものあり。

(一)云何んが根の現在を因とし、現在を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の現在のものゝ現在を緣すると、復次に、諸根の未來のものにして現在を因とするもの現在の現在を緣するとなり。(二)云何んが根の現在を因とするものにして過去を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の現在のものゝ過去を緣すると、復次に、諸根の未來のものにして現在を因とするものゝ過去を緣するとなり。(三)云何が根の現在を因とするものにして未來を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の現在のものゝ未來を緣すると、復次に、諸根の未來のものにして現在を因とするものゝ未來を緣するものなり。(四)云何が根の現在を因とするものにして無爲を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の現在

【三】 根の所緣が未來なる彼の根の因の三世分別。

【四】 次下に、「未來竟り」の夾註あり。

【五】 根の因が現在なる、彼の根の所緣の三世分別。

(五)云何が根の過去を因とするものにして、縁すること無きものなりや。答へて曰く、諸根の無縁なるものの、過去法を因とするものなり。

設し諸根の過去を縁するものなれば、彼の根は過去を因とするや。答へて曰く、(一)或は諸根の過去を縁するものにして、過去を因とするものあり、(二)未來を因とするものあり、(三)現在を因とするものあり。

(二)云何が根の過去を縁するものにして過去を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の過去を縁するものの、過去を因とするものと、復次に、諸根の未來・現在のものにして、過去を因とするもの、過去を縁するものとなり。(二)云何が根の過去を縁するものにして未來を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の未來なるもの、過去を縁するものなり。(三)云何が根の過去を縁するものにして現在を因とするものなりや。答へて曰く、諸根の現在のもの、過去を縁するものとなり。

諸根にして未來を因とするものなれば、彼の根は未來を縁するや。答へて曰く、(一)或は根の未來を因とするもの、未來を縁するものあり、(二)過去を縁するものあり、(三)現在を縁するものあり、(四)無爲を縁するものあり、(五)縁すること無きものあり。

(一)云何が根の未來を因とするものにして未來を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の未來のもの、未來を縁するものなり。(二)云何が根の未來を因とするものにして過去を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の未來なるもの、過去を縁するものなり。(三)云何が根の未來を因とするものにして現在を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の未來のもの、現在を縁するものなり。(四)云何が根の未來を因とするものにして無爲を縁するものなりや。答へて曰く、諸根の未來のもの、無爲を縁するものなり。(五)云何が根の未來を因とするものにして縁すること無きものなりや。答へ

五、頁五十二、參考)。

【二】根の因の過去なる彼の所縁の三世分別之に根の(一)因縁は過去にして、縁々は過去なるもの(二)因は過去にして、縁々は未來のもの(三)因は過去にして、縁々は現在のもの(四)因は過去にして、縁々は無爲のもの(五)因は過去にして無縁なるものあり而して次に此の五種が一一如何なるものなりやを説明するなり。

本章に於ける以下の凡ての、節項の論述の體裁は、此の説相に依るものなり。
※「諸根の無縁なるもの」とは發智は之を「無縁根」と號せり以下準之。

【三】根の所縁が過去なる彼の根の因の三世分別。
【二】次に、「過去竟り」の夾註あり。

【三】根の因が未來なる、彼の根の所縁の三世分別。

諸根にして苦未知智斷を因とするものなれば、彼の根は見苦斷を緣するものなりや。設し諸根にして見苦斷を緣するものなれば、彼の根は苦未知智斷を因とするものなりや。

諸根にして習・盡……乃至道法智斷を因とするものなれば、彼の根は見道斷を緣するものなりや。設し諸根にして見道斷を緣するものなれば、彼の根は道法智斷を因とするものなりや。

諸根にして道未知智斷を因とするものなれば、彼の根は見道斷を緣するものなりや。設し諸根にして見道斷を緣するものなれば、彼の根は道未知智斷を因とするものなりや。^七

此の章の義、願くば具さに演說せん。

第一節 根の因緣と所緣緣との三世分別

諸根にして過去を因とするものなれば、彼の根は過去を緣するものなりや。答へて曰く、(一)或は根の過去を因とするものにして、過去を緣するものあり、(二)未來を緣するものあり、(三)現在を緣するものあり、(四)無爲を緣するものあり、(五)緣すること無きものあり。(一)云何が根の過去を因とするものにして、過去を緣するものなりや。答へて曰く、諸根にして過去を因とするものとなり、(二)云何が根の過去を因とするものにして未來を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の過去を因とするものにして、未來を緣するものとなり、(三)云何が根の過去を因とするものにして現在を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の過去を因とするものにして、未來を緣するものとなり、(四)云何が根の過去を因とするものにして、無爲を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の過去のものにして過去を因とするもの無爲を緣するものとなり、(五)云何が根の過去を因とするものにして、無爲を緣するものなりや。答へて曰く、諸根の過去のものにして過去を因とするもの無爲を緣するものとなり。

緣々の四諦斷との關係問題。

【七】 次下に、「八の四竟り」との夾註あり。

【八】 本節は、(一)(a)根の過去を因とするもの(即ち根の因緣が過去なるもの)、(b)過去法を緣するや(即ち其の根の所緣とする法は過去の法なりや)、未來法なりや、現在なりや、はた非世法なりや、と論じ來り、逆に(b)然らば、過去を緣する根(所緣々が過去なる根)は、過去を因とするや、未來又は現在を因とするや、非世を因とするやを論述し、而してこの(a)と(b)の論述形式を、二根の因、緣の未來なるものと(三)現在なるものにと及ぼして、夫々の根の因緣と緣々との三世分別を完成せんとするを其の課題とせり。

而して本節は、本章頌文の「五」中の「五」に當る。(婆沙百五十六卷、毘曇部十

諸根にして見習・見盡……乃至見道斷を因とするものなれば、彼の根は見道斷を緣するものなりや。設し諸根にして見道斷を緣するものなれば、彼の根は見道斷を因とするものなりや。

〔七〕諸根にして見苦斷を因とするものなれば、彼の根は苦法智斷を緣するものなりや。設し諸根にして苦法智斷を緣するものなれば、彼は見苦斷を因とするものなりや。

諸根にして見苦斷を因とするものなれば、彼の根は苦未知智斷を緣するものなりや。設し諸根にして苦未知智斷を緣するものなれば、彼の根は見苦斷を因とするものなりや。

諸根にして見習・見盡……乃至見道斷を因とするものなれば、彼の根は道法智斷を緣するものなりや。設し諸根にして見道斷を因とするものなれば、彼の根は道未知智斷を緣するものなりや。設し諸根にして道未知智斷を緣するものなれば、彼の根は見道斷を因とするものなりや。

〔八〕諸根にして苦法智斷を因とするものなれば、彼の根は苦法智斷を緣するものなりや。設し諸根にして苦法智斷を緣するものなれば、彼の根は苦法智斷を因とするものなりや。

諸根にして苦未知智斷を緣するものなれば、彼の根は苦未知智斷を緣するものなりや。設し諸根にして苦未知智斷を緣するものなれば、彼の根は苦未知智斷を因とするものなりや。

諸根にして習・盡……乃至道法智斷を因とするものなれば、彼の根は道法智斷を緣するものなりや。設し諸根にして道法智斷を緣するものなれば、彼の根は道法智斷を因とするものなりや。

諸根にして道未知智斷を緣するものなれば、彼の根は道未知智斷を緣するものなりや。設し諸根にして道未知智斷を緣するものなれば、彼の根は道未知智斷を因とするものなりや。

〔九〕諸根にして苦法智斷を因とするものなれば、彼の根は見苦斷を緣するものなりや。設し諸根にして見苦斷を緣するものなれば、彼の根は苦法智斷を緣するものなりや。

〔一〇〕諸根にして見習・見盡……乃至見道斷を因とするものなれば、彼の根は見道斷を緣するものなりや。設し諸根にして見道斷を緣するものなれば、彼の根は見道斷を因とするものなりや。

【三】 根の因縁と縁々(所縁々)との(1)三世(2)三性(3)三界業・不業(4)三學(5)三斷分別門これ所謂、前頌文の根の因縁と縁々との五の三と稱するもの。

【四】 以下、根の因縁と縁々との三世分別問題なり。

【五】 以下、根の因縁と縁々の善・不善・無記の三性分別問題を示すものなり。

【六】 以下、根の因縁と縁々の三界業・不業の界繫分別問題の略示なり。

【七】 以下、根の因縁と縁々の學・無學・非學・非無學の三學分別問題の略示なり。

【八】 以下、根の因縁と縁々の見諦斷・思惟斷・不斷の三斷分別問題の略示なり。

【九】 次下二、「五の三電り」と夾註あり。

【一〇】 根の因縁と縁々との見苦・習・盡・道の四諦斷分別門。

【一一】 次下二、「四電り」との夾註あり。

【一二】 根の因縁と縁々との八智斷分別門。

卷の第二十三(第六編 根健度)

第七章 根の因縁と縁縁(所縁縁)とに

關する論究

(根健度、縁跋渠第七之一) (發智論卷第十六、大正・二六、一〇〇二頁)

本章の内容目次第一

因となる者と諸の縁とを

五の三と及び四と、

八等の八を有すると、

當に次漸に作るべし、

四と亦八と共なると、

八と亦復四となると」と。

本章の内容目次第二

(一—五) (1) 諸根にして 過去を因とするもの、彼の根は過去を縁するや。設し諸根にして過去を縁するものなれば、彼の根は過去を因とするや。

諸根にして、未來を因とし、現在を因とし、(2) 善を因とし、不善を因とし無記を因とし、(3) 欲界繫を因とし色界繫を因とし無色界繫を因とし、不繫を因とし、(4) 學を因とし無學を因とし非學非無學を因とし、(5) 見諦斷を因とし思惟斷を因とし……乃至無斷を因とするものなれば、彼の根は無斷を因とするものなりや。(6) 諸根にして見苦斷を因とするものなれば、彼の根は見苦斷を縁するや。設し諸根にして見苦斷を縁するものなれば、彼の根は見苦斷を因とするものなりや。

【一】 本章は、諸根の因縁と、其の縁々即ち所縁々となる法との關係を、九ケの立場より(九節に分けて)種々吟味するものなり。例せば諸根の過去を因とするものとは、根の因縁が過去なるものとの意、又、彼の根は過去を縁ずといへば、彼の根の所縁々が過去なることを示すなり。

【二】 本章の内容目次をなす頌文と發智の頌文とを對照する、ために、發智のを示せば、
「五三四四八、
八八、八四、門、
辯三根、因、所縁、
此章願具說」

とあり。本論の頌文の「五の三」とは根の因と縁々との三世等の五種分別、「四」とは其の四諦斷分別、四と亦八と共なると一は因を四諦に分ち縁を八智斷に分ちて、相互の關係を論ずるもの、八等の八を有する」とは因と縁との八智斷分別、「八と亦復四」とは、因を八智斷に分ち、縁を四諦斷に分ちて、相互の種々なる關係を述ぶるものなり。

阿毘曇八鍵度論卷第二十一

第六章 二十二根の成就・不成就、並に三性根を因と爲す根に關する論究

五六七

五、頁四三以下參照。

【八七】 眼等の五根の隨一を成就せざる者の三世の根の成就・不成就論。

【八八】 過去・未來の七根とは、命・男・女根と、眼根を除く四根となり。

【八九】 發智は、舌の次に、女・男根を加へ、略示せり。

【九〇】 三世の十根とは、七色根と苦・憂・未知根となり。

【九一】 過・未の五根とは、信等の五根なり。

【九二】 意・命・護根の隨一を成就せざるも無し。

【九三】 男・女根の隨一を成就せざる者の三世の根の成就・不成就論。

【九四】 過・未の七根とは、命と男女根の隨一と眼等の五根となり。

【九五】 五受根の隨一を成就せざる者の三世の根の成就・不成就論。

【九六】 三世の九根とは、女・男

根と、護の外の四受と三無漏根となり。過・未の六とは、眼等の五色根と命となり。

【七〇】 過・未の七根とは、意・護根と信等の五根となり。

【九八】 三世の五根とは、女・男・苦・憂・未知根にして、過未の七とは、眼等の五色根と命根となり。

【九九】 過未の七とは、「註九七」の如し。

【一〇〇】 三世の八根とは、女・男・苦・憂・喜・三無漏根にして、過未の六とは五色・命根なり。

【一〇一】 過未の七根とは、「註九七」の如し。

【一〇二】 過・未の八根とは、命・男・女・眼等の五根にして、成就する過未の七根とは、「註九七」の如し。

【一〇三】 信等の五根の隨一を成就せざる者の三世の根の成就・不成就論。

【一〇四】 三世の八根とは、信等の五と三無漏根、過未の八と

は、命・男・女・眼等の五なり。【一〇五】 過未の四とは、憂を除く四受。三世の二とは、意と憂。現在の二とは、身と命となり。

【一〇六】 三無漏根の隨一を成就せざる者の三世の根の成就・不成就論。

【一〇七】 過未の八根とは、命と七色根となり。

【一〇八】 次下に、「三世不成就竟り」との夾註あり。

【一〇九】 本節は、(1)善なる諸根は無貪・無瞋・無癡の三の善根本(即ち三善根)を因となすや否や、(2)不善なる諸根は、貪・瞋・癡の三不善根本を因となすや否や、(3)無記なる諸根は、無記の愛・慧・無明の三無記根を因となすや否やを論究する段なり。

因みに、無記根に就きて、西方師は四無記根説をなし従つて西方師の謂する文は、此の八鍵度とも婆沙所傳の發智と

も異なるものあり。

(詳細は、婆沙百五十六、毘曇部十五、頁四六以下參照のこと)。

【一一〇】 善なる諸根は善根を因となすや否や。

【一一一】 善根本の報なる無記根とは、發智に、「善根所引の異熟生の根なり」とせり。

【一一二】 不善なる諸根は、不善根本を因となすや否や。

【一一三】 無記なる諸根は、無記根本を因となすや否や。

【一一四】 記の下に、大本本には、「根本」の二字あれど、宮本にはなく、亦、發智の相當文にもなし。故に、今はこれを除す。

【一一五】 善・不善・無記根本を因となさず然も無因にも非ざる根に就きて。

善根本の報なる無記根なり。

諸根にして不善なるものなれば、彼の根は不善根本を因となすや。答へて曰く、是の如し。諸根にして不善なれば、彼の根は不善根本を因となすなり。

頗し根の不善根本を因となすものにして、彼の根は不善に非ざるものありや。答へて曰く、有り。

不善根本の報たる無記根と、若しくは欲界の身見・邊見と相應する根となり。

諸根にして無記なるもの、彼の根は無記根本を因となすや。答へて曰く、或は根は無記なるも、彼の根は無記根本を因となすにあらざるものあり。

(一)云何んが根の無記なるものにして、彼の根は無記根本を因となさざるものなりや。答へて曰く、無記の無縁根なり。是を根の無記なるものにして、彼の根は無記根本を因となさざるものといふ。

(二)云何んが根の、無記根本を因となすものにして、彼の根は無記に非ざるものなりや。答へて曰く、不善根なり。是を根の無記根本を因とするも、彼の根は無記に非ざるものといふ。

(三)云何んが根は無記にして、彼の根は無記根本を因とするものなりや。答へて曰く、無記の有縁根なり。是を根の無記にして、彼の根は無記根本を因となすものといふなり。

(四)云何んが根が無記にも非ず彼の根は無記根本を因となすにも非ざるものなりや。答へて曰く、善根なり。是を根が無記にも非ず、彼の根は無記根本を因となすにも非ざるものといふ。

頗し根にして善根本を因となすにも非ず、不善根本を因となすにも非ず、無記根本を因となすにも非ざるものにして、彼の根は不因に非ざるものありや。答へて曰く、有り。諸の無縁根なり、こは色と心不相應行を因となせばなり。

魚子品第三十二竟り、(梵本一百七十三首盧、秦言三千三百四十二言)

就きて。

【七三】 五受根の隨一を成就せざる者の根の成就・不成就論。

【七四】 九根とは、女・男と護を除く四受と三無漏根となり。

【七五】 八根とは、「註七〇」の如し。

【七六】 五根とは、女・男・苦・憂未知根なり。

【七七】 八根とは、「註七〇」の如し。

【七八】 八根とは、女・男・苦・喜・憂三無漏根なり。

【七九】 八根とは、「註七〇」の如し。

【八〇】 八根は、「註七〇」の如し。

【八一】 信等の五根の隨一を成就せざる者の根の成就・不成就論。

【八二】 八根とは、信等の五と三無漏根となり。

【八三】 八根とは、身・命・意根と五受根となり。

【八四】 三無漏根の隨一を成就せざる者の根の成就・不成就論。

【八五】 次下に、「不成竟り」の夾註あり。

【八六】 本節は、二十二根の隨一の不成就者が、三世の二十根の中、幾くを定んで成就し、幾くを定んで成就せざるやを明す段なり。

(婆沙百五十六卷、毘曇部十

を成就せず、必ず^{九七}過去・未來の七根と現在の^{九七}一根(命)とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し苦根を成就せずんば、彼は必ず^{九八}過去・未來・現在の五根を成就せず、必ず過去・未來の六根

を成就せず、必ず^{九九}過去・未來の七根と現在の^{九九}一根(命)とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し喜根を成就せずんば、彼は必ず^{一〇〇}過去・未來・現在の八根を成就せず、必ず過去・未來の六根

を成就せず、必ず^{一〇一}過去・未來の七根と現在の^{一〇一}一根(命)とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し憂根を成就せずんば、彼は必ず^{一〇二}過去・未來・現在の^{一〇二}一根(憂)を成就せず、必ず^{一〇三}過去・未來の

八根を成就せず、必ず過去・未來の七根と現在の^{一〇三}一根(命)とを成就し、餘は或は成就し或は成就せ

ず。^{一〇四}若し信根を成就せずんば、彼は必ず^{一〇四}過去・未來・現在の八根を成就せず、必ず過去・未來の八根

を成就せず、必ず^{一〇五}過去・未來の四と、過去・未來・現在の二根と現在の^{一〇五}二根とを成就し、餘は或は成

就し或は成就せず。

精進・念・定・慧根も亦、是の如し。

若し未知根を成就せずんば、彼は必ず^{一〇六}過去・未來・現在の^{一〇六}一根(未知)を成就せず、必ず^{一〇七}過去・未

來の八根を成就せず、必ず過去・未來の意と護との二根と現在の^{一〇七}一根(命)とを成就し、餘は或は成就

し或は成就せざるなり。

已知根と未知根とにつきても亦、是の如し。^{一〇八}

第五節 善・不善・無記根は夫々善根本(善根)等を因と爲すやに就きて

諸根にして善なるもの、彼の根は善根本を因とするや。答へて曰く、是の如し、諸根にして善な

るもの、彼の根は善根本を因となすなり。
頗し根の善根本を因となすものにして、彼の根が善に非ざるものありや。答へて曰く、有り。

なり。

【六三】三世の三根とは、憂と未知根と已知根となり。

【六四】過去未來の七とは、註

【六一】の如く、未來の三とは、樂・喜・無知なり、現在の一とは、命なり。

【六五】次に、「三世竟り」の夾註あり。

【六六】本節は、前節と反對に二十二根の隨一を成就せざる

者が、二十二根の幾くを成就し、幾くを成就せざるやを明

す段なり。

(婆沙百五十六卷、毘婆沙部四十五、頁四十以下参照)

【六七】眼等の五根の隨一を成就せざる者の根の成就・不成

就論。

【六八】三根とは、命・意・護根なり。

【六九】發智は、舌の次に、「女男・三無漏も亦爾り」とて之等を茲に略示せり。

【七〇】十根とは、七色根と善・愛・未知根となり。

【七一】八根とは、命・意・護・信等の五なり。

【七二】意・命・護根の隨一を成就せざるもの無し。

以下の文の說顯說相の發智との相違に就きては「註四四」に言へる如く。

【七三】男女根の隨一を成就せざる者の根の成就・不成就に

八二 若し信根を成就せずんば、必ず 八根を成就せず、必ず 八根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

精進・念・定・慧根も亦、是の如し。

八四 若し未知根を成就せずんば、彼は必ず一根（未知）を成就せず、必ず命と意と護との三根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

已知根・無知根も亦、是の如し。

第四節 二十二根の隨一を成就せざる者は、三世の二十二根の幾くを成就し

幾くを成就せざるやに就きて

八七 若し眼根を成就せずんば、彼は必ず過去・未來・現在の一根（眼）を成就せず、彼は必ず 過去・未來の七根を成就せず、必ず過去・未來の意と護との二根と現在の（命）とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

耳・鼻・舌 根も亦、是の如し。

九〇 若し身根を成就せずんば、彼は必ず 過去・未來・現在の十根を成就せず、必ず過去・未來の（命）を成就せず、必ず 過去・未來の五根と、過去・未來・現在の意と護との二根と、現在の（命）とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

九二 意根・命根・護根は成就せざるもの無し。

九三 若し男根又は女根を成就せずんば、彼は必ず過去・未來・現在の男・女の隨一の根を成就せず、必ず過去・未來の七根を成就せず、必ず過去・未來の意と護との二根と現在の（命）とを成就し、餘は或は成就し、或は成就せず。

九五 若し樂根を成就せずんば、彼は必ず 過去・未來・現在の九根を成就せず、必ず過去・未來の六根

【五〇】 五根とは、意と愛の外
の四受となり、現在の二とは
身と命となり。

【五一】 二とは、意と護、未來
の二とは、樂と喜、現在の二
とは命。

【五二】 一根とは、具知根。

【五三】 四根とは四受、三世の
二とは意と一受、現在の二と
は身と命となり。

【五四】 信等の五根の隨一を成
就する者の、三世の根の成就
不成就論。

【五五】 七根とは、意・捨根と
信等の五根となり、現在の一
とは、命なり。

【五六】 三無漏根の隨一を成就
する者の三世の根の成就・不
成就論。

【五七】 三世の二根とは已知と
具知となり。

【五八】 發智には、次下に、現
在の二を成就せずの一句を
置けり。この二とは、苦と愛
となり。

【五九】 三世の七根とは、意と
一受と信等の五根となり、過
未の三とは、樂・喜・護の三受。

【六〇】 現の二とは未知根、現在
の二とは身と命となり。

【六一】 三世の二根とは、未知
と無知となり。

【六二】 過・未の七とは、意・
護・信等の五、未來の三とは、
樂・喜・已知、現在の二とは命

若し無知根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず過去・未來・現在の三根を成就せず、必ず過去・未來の七根と未來の三と現在のひとを成就し餘は或は成就し或は成就せず。

第三節 二十二根の隨一を成就せざる者は、二十二根の幾くを成就し

幾くを成就せざるやに就きて

若し眼根を成就せずんば、彼は必ず一根(眼)を成就せず、必ず三根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

耳・鼻・舌 根も亦、是の如し。

若し身根を成就せずんば、彼は必ず十根を成就せず、必ず八根を成就す。餘は或は成就し或は成就せず。

意根・命根・護根は成就せざるもの無し。

若し男根・女根の隨一を成就せずんば、彼は必ず男女根中の一根を成就せず、必ず命と意と護との三根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し樂根を成就せずんば、彼は必ず九根を成就せず、必ず八根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し苦根を成就せずんば、彼は必ず五根を成就せず、必ず八根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し喜根を成就せずんば、彼は必ず八根を成就せず、必ず八根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し憂根を成就せずんば、彼は必ず一根(憂)を成就せず、必ず八根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

就するものの三世の根の成就・不成就に就きて。

【四二】過去・未來の八根とは、命根と男女根と、眼・耳・鼻・舌・身根とにして、これを八種の無記根といふ。

以下、過去・未來の不成就の八根とは之を指す。

【四三】二根とは、意・護根にして、次の三根とは、眼・身・命根なり。

【四四】二根とは、意・護根、次の二根とは、身と命となり。

【四五】意・命・護根の隨一を成就する者の、三世の根の成就・不成就論。

以下の説順と説相とは、發智と異なる。發智は、ここに女男根等につきてを論じ、意根の代りに命根を用ふ。

【四六】二根とは、意・護根、次の二根とは、意根なり。

【四七】男・女根の隨一を成就する者の三世の根の成就・不成就論。

【四八】五根とは、意と、憂を除く四受とにして、次の現在身と命となり。

【四九】五根の隨一を成就する者の三世の根の成就・不成就論。

【五〇】二根とは、意・護の二根にして、未來の一とは樂根、現在のひととは命根なり。

四六 若し男根女根の隨一を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず過去・未來の 五根と現在の三根とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

四八 若し樂根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず過去・未來の二根と未來の一根と現在の二根とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し苦根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず過去・未來の 五根と現在の二根とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し喜根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず過去・未來の二根と未來の二と現在の二とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し憂根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、彼は必ず過去・未來の 一根を成就せず、必ず、過去・未來の 四根と過去・未來・現在の二と現在の二とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

四四 若し信根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず過去・未來の 七根と現在の二根とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

精進・念・定・慧根につきても亦、是の如し。

五五 若し未知根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず 過去・未來・現在の二根を成就せず、必ず 過去・未來・現在の三と、未來・現在の二と、現在の二とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し已知根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず 過去・未來・現在の二根を成就せず、必ず 過去・未來の七根と、未來の三と現在の二とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

六〇 若し已知根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず 過去・未來・現在の二根を成就せず、必ず 過去・未來の七根と、未來の三と現在の二とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

【三〇】 次下に、「意・命・護根を加ふ」との夾註あり。

【三一】 三無漏根の隨一を成就する者の根の成就・不成就に就きて。

【三二】 二根とは、次下に夾註のあるが如く、已知根と無知根となり。

【三三】 十三根とは、次下に夾註あるが如く、信等の五根と身・命・意・苦・喜・樂・護・未知根となり。

【三四】 二根とは、次下の夾註にあるが如く、未知根と無知根となり。

【三五】 十一根とは、命・意・樂・喜・護根と信等の五根と已知根となり。尙、次下の夾註には、「上(十三根)より憂と苦との二を除く」とあるも正しからず。

【三六】 三根とは、次下の夾註にあるが如く、憂根と未知・已知根となり。

【三七】 十一根とは、「註三五」の十一中の已知根の代りに具知根を加へしもの。

【三八】 次下に、「成就竟り」の夾註あり。

【三九】 本節は、二十二根の隨一を成就するものは、三世の二十二根の幾くを定んで成就するや、幾くを成就せざるやを論究する段なり。

【四〇】 眼等の五根の隨一を成

若し憂根を成就せば、彼は必ず ^{三六} 一根を成就せず、彼は必ず ^{三七} 八根を成就し、餘は或は成就し、或は成就せず。

若し信根を成就せば、彼は必ず ^{三九} 八根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

^{三九} 精進・念・定・慧根も亦、是の如し。

若し未知根を成就せば、彼は必ず ^{三九} 二根を成就せず、必ず ^{三九} 十三根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し已知根を成就せば、彼は必ず ^{三九} 二根を成就せず、必ず ^{三九} 十一根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し無知根を成就せば、彼は必ず ^{三六} 三根を成就せず、必ず ^{三七} 十一根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

^{三九} 第二節 二十二根の隨一を成就する者は、三世の二十二根の幾くを定めて成就し

幾くを成就せざるやに就きて

若し眼根を成就せば、彼は必ず ^{四一} 過去・未來の八根を成就せず、必ず過去・未來の ^{四二} 二根と現在の三根とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

耳・鼻・舌根につきても亦、是の如し。

若し身根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず過去・未來の ^{四三} 二根と現在の二根とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し意根を成就せば、彼は必ず過去・未來の八根を成就せず、必ず過去・未來の ^{四四} 二根と現在の二根とを成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

命根と護根とにつきても亦、是くの如し。

【七】 四根とは、次下に夾註するが如く、身・命・意・捨根なり。

【八】 意・命・護根を成就する者の根の成就・不成就に就きて。

以下の説順・説相は共に、發智と異れり。發智はここに女根を成就するものを論じ、又、意根の代りに、命根を説けるが如し。

【九】 三根とは、次下に夾註するが如く、意・命・護根なり。

【一〇】 男・女根の一を成就する者の根の成就・不成就に就きて。

【一一】 八根とは、女・身・命・意・樂・苦・喜・捨根なり。

【一二】 五等根の隨一を成就する者の根の成就・不成就に就きて。

【一三】 四根とは、樂・命・意・護根なり。

【一四】 七根とは、身・命・意根と憂を除く四受根となり。

【一五】 五根とは、命・意・樂・喜・護根なり。

【一六】 一根とは、具知根なり。

【一七】 八根とは、身・命・意根と五受根となり。

【一八】 信等の五根の隨一を成就する者の根の成就・不成就に就きて。

【一九】 命・意・護根と信等の五根となり。

諸根にして不善なるもの、彼の根は不善根本を因となすや。設し諸根にして不善根本を因となすものなれば、彼の根は不善なりや。

諸根にして無記のもの、彼の根は無記根本を因となすや。設し諸根にして無記根本を因となすものなれば、彼の根は無記なりや。

願し根にして善根本を因とせず、亦、不善根本を因とせず、亦、無記根本を因とせざるものにして、彼の根は不因に非ざるものありや。

此の章の義、願くば具さに演說せん。

第二節 二十二根の隨一を成就する者は、二十二根の幾くを定んで成就し

幾くを成就せざるやに就きて

二十二根あり、眼根と、耳・鼻・舌・身根と、意根と男根と女根と命根と、樂根と苦根と喜根と憂根と護根と、信根と精進・念・定・慧根と、未知根と已知根と無知根となり。

若し眼根を成就せば、彼は必ず 五根を成就し、餘は或は成就し、或は成就せず。

耳・鼻・舌根も亦、是の如し。

若し身根を成就せば、彼は必ず 四根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し意根を成就せば、彼は必ず 三根を成就し、餘は或は成就し、或は成就せず。

命根と護根とも亦、是くの如し。

若し男根女根の隨一を成就せば、彼は必ず 八根を成就し、餘は或は成就し或は成就せず。

若し樂根を成就せば、彼は必ず 四根を成就し、餘は或は成就し、或は成就せず。

若し苦根を成就せば、彼は必ず 七根を成就し、餘は或は成就し、或は成就せず。

若し喜根を成就せば、彼は必ず 五根を成就し、餘は或は成就し、或は成就せず。

幾く根を成就せざるやの問題。
【八】 次下に、「不成就竟り」の夾註あり。

【九】 二十二根の隨一を成就せざる者は三世の幾く根を成就し成就せざるやの問題。

【一〇】 次下は、「三世不成就竟り」との夾註あり。

【一一】 善・不善・無記の三根は、夫々善根等を因と爲すやの問題。

【一二】 本節は、二十二根中の隨一を成就する者なれば、彼は、總じて二十二根中の幾くを成就し幾くを成就せざるやを論究する段なり。
(婆沙百五十六卷、毘曇部十五、頁三〇以下參照)。

【一三】 二十二根の名目。
【一四】 眼根等の五根の隨一を成就する者の根の成就・不成就に就きて。

【一五】 五根とは、眼・身・命・意・護根にして、此の五ヶ定んで成就するなり。以下准之。因に、次に「加下眼」の夾註あり。

【一六】 餘は或は成就し、或は成就せずとは、前註の五根以外は、其の成就・不成就が不定なるを言ふ。詳細は、婆沙參照のこと、以下准之。

第六章 二十二根の成就・不成就、並に三性根を

因と爲す根に關する論究

(阿毘曇根健度、魚子跋渠第六) (發智論卷第十六、大正・二六、一〇〇頁)

本章の内容目次

二十二根あり、即ち、眼根と耳・鼻・舌・身根と意根と男根と女根と、命根と樂根と苦根と喜根と憂根と護根と、信根と精進・念・定・慧根と、未知根と已知根と無知根となり。

(一)若し眼根を成就すれば、此の二十二根に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。乃至無知根を成就せば、此の二十二根に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。

(二)若し眼根を成就せば、此の二十二根に於て過去の幾くを成就し、未來の幾くを成就し、現在の幾くを成就するや。若し乃至無知根を成就せば、此の二十二根に於て過去の幾くを成就し、未來の幾くを成就し、現在の幾くを成就するや。

(三)若し眼根を成就せずんば、此の二十二根に於て、幾くを成就し、幾くを成就せざるや。若し乃至無知根を成就せずんば、此の二十二根に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。

(四)若し眼根を成就せずんば、此の二十二根に於て、過去の幾く、未來の幾く、現在の幾くを成就するや。若し乃至無知根を成就せずんば、此の二十二根に於て、過去の幾く、未來の幾く、現在の幾くを成就するや。

(五)諸根にして善なるもの、彼の根は善根本を因となすや。設し諸根にして善根本を因となすものなれば、彼の根は善なりや。

【一】本章は、魚子跋渠(發智に魚納息)と言ふ。婆沙は之を註して、二十二根の成・不成は轉移して定まらざることを、魚の執へ難きが如くなるが故にかく稱すと言へり。之に據るに、魚子跋渠の名目は、二十二根の成就・不成就論に因めるものにして、内容は此に止まらず。例によりて發智の頌文にて示せば次の如し。

「總、三世成就、不成就、亦然、善等根爲因」

此章頗具說」と。此の詳細に就きては、婆沙百五十六卷、毘曇部三〇の註を往見すべし。

【二】二十二根の名目。
【三】二十二根中の隨一を成就する者が、總じて幾根を成就し成就せざるやの問題。

【四】次下に、「成就寛り」の夾註あり。

【五】二十二根の隨一を成就する者は、三世の根の幾くを成就し成就せざるやの問題。

【六】次下に、「三世成就寛り」の夾註あり。

【七】二十二根の隨一を成就せざる者は、幾く根を成就し

する法、是を等解脫と等智とに相應するものといふ。

(四)云何んが等解脫と等智とに相應するに非ざるものなりや。答へて曰く、等智と相應せざる等解脫と、諸餘の心々法と色と無爲と心不相應行と、是を等解脫と等智とに相應するに非ざるものといふなり。

始發心品第三十一竟、(梵本二百四十二首處、秦言三千九百四十二首)

五五 等定と等解説とも亦、是の如し。

六六 諸法にして無學の等方便と相應するもの、彼は無學の等智ともなりや。答へて曰く、或は等方便と相應するも等智とは非ざるものあり。

(一)云何んが等方便と相應するも等智とに非ざるものなりや。答へて曰く、等智と、諸の等智と相應せずして等方便と相應する法と、是を等方便と相應するも等智とに非ざるものといふ。

(二)云何んが等智と相應するも等方便とに非ざるものなりや。答へて曰く、等智と相應する等方便なり、是を等智と相應するも等方便とは非ざるものといふ。

(三)云何んが等方便と等智とに相應するものなりや。答へて曰く、等方便を除く諸の等智と相應する法、是を等方便と等智とに相應するものといふ。

(四)云何んが等方便と等智とに相應するに非ざるものなりや。答へて曰く、等智と相應せざる等方便と、諸餘の心々法と色と無爲と心不相應行と、是を等方便と等智とに相應するに非ざるものといふなり。

六九 等念・等定門につきても亦、是の如し。

七〇 諸法にして無學の等解説と相應するもの、彼は無學の等智ともなりや。答へて曰く、或は等解説と相應するも等智とに非ざるものあり。

(一)云何んが等解説と相應するも等智とに非ざるものなりや。答へて曰く、等智と、諸の等智と相應せずして等解説と相應する法と、是を等解説と相應するも等智とに非ざるものといふ。

(二)云何んが等智と相應するも等解説とに非ざるものなりや。答へて曰く、等智と相應する等解説、是を等智と相應するも等解説とに非ざるものといふ。

(三)云何んが等解説と等智とに相應するものなりや。答へて曰く、等解説を除く諸の等智と相應

【空】無學の等方便と無學の等定・等解説との相應關係。此等も亦、無學の等方便と無學の等念との相應關係の如しとなり。

【六〇】無學の等方便と無學の等智との相應關係。以下四句分別せり。

【六一】大正本には、この下に「或等方便非等智、云何等方便非等智。答曰」の十七字あるも三本には無く、亦、これは重複に過ぎざらむが故に、今は、これを除去せり。

【六二】次に、「方便竟り」の夾註あり。

【六三】無學の等念と無學の等定・等解説・等智との相應門及び無學の等定と無學の等解説・等智との相應門。

此は、無學の等方便と丈夫、無學の等念・等定・等解説・等智との相應關係の如く、無學の等念と天下の丈夫との相應關係も、又、無學の等定が天下の丈夫との相應關係も皆同じと言ふの意なり。

【七〇】無學の等解説と無學の等智との相應關係。以下四句分別をなせり。

應するも等智とに非ざるものあり。

(一)云何んが等志と相應するも等智とに非ざるものなりや。答へて曰く、等志と相應する等智と諸の等智と相應せずして等志と相應する法と、是を等志と相應するも等智とに非ざるものといふ。

(二)云何んが等智と相應するも等志とに非ざるものなりや。答へて曰く、等智と相應する等志と諸の等志と相應せずして等智と相應する法と、是を等智と相應するも等志とに非ざるものといふ。

(三)云何んが等志と等智とに相應するものなりや。答へて曰く、等志と相應する等智を除くものにして、諸の等志と等智とに相應する法、是を等志と等智とに相應するものといふ。

(四)云何んが等志と等智とに相應するに非ざるものなりや。答へて曰く、等志に相應せざる等智と、等智に相應せざる等志と、諸餘の心々法と、色と無爲と心不相應行と、是を等志と等智とに相應するに非ざるものといふなり。

諸法にして無學の等方便と相應するもの、彼は無學の等念とも相應するや。答へて曰く、或は等方便と相應するも等念とに非ざるものあり。

(一)云何んが等方便と相應するも等念とに非ざるものなりや。答へて曰く、等念なり。是を等方便と相應するも等念とに非ざるものといふ。

(二)云何んが等念と相應するも等方便とに非ざるものなりや。答へて曰く、等方便なり。是を等念と相應するも等方便とに非ざるものといふ。

(三)云何んが等方便と等念とに相應するものなりや。答へて曰く、等念を除く諸の等方便と相應する法なり。是を等方便と等念とに相應するものといふなり。

(四)云何んが等方便と等念とに相應するに非ざるものなりや。答へて曰く、前所説に攝せざる諸の餘の心々法と色と無爲と心不相應行と、是を等方便と等念とに相應するに非ざるものといふなり。

【六一】發智には、此の次に、「及び無學の正智と相應する正思惟を除く」との一句あり。

【六二】次下に、「等志竟り」との夾註あり。

【六三】無學の等方便と無學の等念との相應關係。以下四句分別せり。

【六四】發智にては、以下を、「無學の正勤(方便)と正念とを除く、諸餘の無學の正勤と正念とに相應する法とせり。四句分別としては、此の點八辨度の文、不完全なるを免れず。

(三)云何んが等見と等方便とに相應するものなりや。答へて曰く、等方便を除く諸の等見と相應する法、是を等見と等方便とに相應するものといふ。

(四)云何んが等見と等方便とに相應せざるものなりや。答へて曰く、等見と相應せざる等方便と諸餘の心々法と色と無爲と心不相應行と是を等見と等方便とに相應するに非ざるものといふなり。

^{五四}等念と等定と等解脱とも亦、是の如し。

^{五五}諸法にして無學の等見と相應するものなれば、彼は無學の等智と相應するものに非ず。設し諸法にして無學の等智と相應するものなれば、彼は無學の等見と相應するものに非ざるなり。

^{五七}諸法にして無學の等志と相應するものなれば、彼は無學の等方便とも相應するものなりや。答へて曰く、或は等志と相應するも、等方便とに非ざるものあり。

(一)云何んが等志と相應するも等方便とに非ざるものなりや。答へて曰く、等志と相應する等方便、是を等志と相應するも、等方便とに非ざるものといふ。

(二)云何んが等方便と相應するも等志とに非ざるものなりや。答へて曰く、^{五九}等志と、諸の等志と相應せずして等方便と相應する法と、是を等方便と相應するも等志とに非ざるものといふ。

(三)云何んが等志と等方便とに相應するものなりや。答へて曰く、等方便を除く諸の等志と相應する法、是を等志と等方便とに相應するものといふ。

(四)云何んが等志と相應するにも非ず、等方便とに非ざるものなりや。答へて曰く、等志と相應せざる等方便と、諸餘の心々法と、色と無爲と心不相應行と、是を等志と相應するにも非ず等方便とに非ざるものといふなり。

^{五九}等念と等定と等解脱とにつきても亦、是の如し。

^{六〇}諸法にして無學の等志と相應するもの、彼は無學の等智ともなりや、答へて曰く、或は等志と相

以下四句分別をなせり。
【五三】無學の等見と無學の等方便(正勤)との相應關係。以下四句分別せり。

【五四】無學の等見と無學の等念・等定・等解脱との相應關係。此等は凡て、無學の等見と無學の等方便との相應關係の如しとなり。

【五五】無學の等見と無學の等智との相應關係。相互相應せざるなり。
【五六】次下に、「無學見竟り」の夾註あり。

【五七】無學の等志と無學の等方便との相應關係。以下四句分別せり。

【五八】「等志」とは、發智に於て、無學の正勤(方便)と相應する正思惟(等志)とあり。

【五九】無學の等志と無學の等念・等定・等解脱との相應關係。無學の等志と無學の等方便との相應關係の如しとなり。
【六〇】無學の等志と無學の等智との相應關係。以下、四句分別をなせり。

第九節 無學の等見・等志・等方便・等念・等解脫・等智の相互相應關係論

諸法の無學の等見と相應するもの、彼は無學の等志とも相應するや。答へて曰く、或は無學の等見と相應するも、無學の等志とは非ざるものあり。

(一)云何んが無學の等見と相應するも、無學の等志とは非ざるものなりや。答へて曰く、無學の等見と相應する無學の等志と、諸の無學の等志と相應せずして無學の等見と相應する法となり。是を等見と相應するも等志とは非ざるものといふ。

(二)云何んが無學の等志と相應するも無學の等見とは非ざるものなりや。答へて曰く、等志と相應する等見と、諸の等見と相應せずして等志と相應する法と、是を等志と相應するも等見とは非ざるものといふ。

(三)云何んが等見と等志とに相應するものなりや。答へて曰く、等見と相應する等志を除く諸餘の等見と等志とに相應する法、是を等見と等志とに相應するものといふ。

(四)云何んが等見と相應するにも非ず、等志にも非ざるものなりや。答へて曰く、等見と相應せざる等志と、等志と相應せざる等見と、前所攝の法を除く諸餘の心々法と、色と無爲と心不相應行と、是を等見にも等志にも相應するに非ざるものといふ。

諸法にして無學の等見と相應するもの、彼は無學の等方便とも相應するや。答へて曰く、或は等見と相應するも等方便とは非ざるものあり。

(一)云何んが無學の等見と相應するも無學の等方便とは非ざるものなりや。答へて曰く、等見と相應する等方便、是を等見と相應するも等方便とは非ざるものといふ。

(二)云何んが等方便と相應するも等見とは非ざるものなりや。答へて曰く、等見と、諸の等見と相應せずして等方便と相應する法と、是を等方便と相應するも等見とは非ざるものといふ。

覺有觀等・五受根相應・三三昧相應・所緣の五門分別をなす段なり。(婆沙百五十五卷、毘曇部十五、頁十五參照)

【四五】 盡智の五門分別。【四六】 茲に大正本には空三昧と盡智との相應をも説かず、こは、法相上正しからず、何んとなれば、空は是れ勝義にして、勝義にのみ涉るものなるに、勝義は是れ勝義なるも、「我が生已に盡く……」と言ふが如く、世俗に涉るものなれば、空三昧と相應せずと言ふべければなり。故に、盡無生智は、空・非我の二行相を除く、十四聖行相とのみなりて轉ずと稱せらるるなり。宮本聖本・聖乙本並に發智には、「空との相應を除く。」

【四七】 無生智の五門分別。【四八】 無學の等見の五門分別。【四九】 此れが盡智無生智と異りて空とも相應するは、無學の正見は、空非我の行相ともなりて轉ざるが故なり。

【五〇】 次下に、「無學見竟り」との夾註あり。

【五一】 本節は、無學の等見等の七種の無學法、相互の相應關係を明す段なり。(婆沙百五十六卷、毘曇部十五、頁二一以下參照)

【五二】 無學の等見と無學の等志との相應關係。

【一〇】 最初の盡智として生ずるもの彼の一切は、無礙道の次第なりや。答へて曰く、是の如し。設し無礙道の次第なれば、彼の一切は盡智なりや。答へて曰く、是の如し。

【一一】 最初の無生智として生ずるもの彼の一切は、盡智の次第なりや。答へて曰く、是の如し。

設し盡智の次第なれば、彼の一切は無生智なりや。答へて曰く、或は彼は盡智なり、或は無生智なり、或は無學の等見なり。

【一二】 諸の彼を緣する無礙道なれば、彼を緣する盡智なりや。答へて曰く、若し彼の種を緣する無礙道なれば、彼を緣する盡智なり。若し此の種を緣せざるを無礙道なれば、彼を緣せざる盡智なり。

【一三】 如し彼を緣する盡智なれば、彼を緣する無生智なりや。答へて曰く、是の如し。如し彼を緣する無生智なれば、彼を緣する盡智なりや。答へて曰く、是の如し。

【一四】 第八節 盡智と無生智と無學の等見との自性乃至所緣の五門分別

【一五】 盡智は當に盡智と言ふべきや。答へて曰く、盡智は當に盡智と言ふべく、或は彼は法智・未知智・苦智・習・盡・道智といふべし。或は有覺有觀、或は無覺無觀といふべく、或は樂根と相應し、或は喜根・護根と相應し、或は無願・無相と相應すと云ふべし。或は欲界繫を緣じ、或は色・無色界繫を緣じ、或は不繫を緣すと云ふべきなり。

【一六】 無生智も亦、是の如し。

【一七】 無學の等見は當に無學の等見と言ふべきや。答へて曰く、無學の等見は、當に無學の等見と言ふべく、或は彼は法智・未知智・知他人心智・苦智・習・盡・道智と言ふべく、或は有覺有觀、或は無覺有觀、或は無覺無觀といふべく、或は樂根と相應し、或は喜根・護根と相應し、或は無願・無相と相應すと云ふべく、或は欲界繫を緣じ、或は色・無色界繫を緣じ、或は不繫を緣すと云ふべし。

【一八】 本節は、(1)初生の盡智は、無礙道、即ち、金剛喻定の次第(等無間)に起るものなりや。金剛喻定の次第なれば、一切盡智なりや、(2)初生の無生智は、一切盡智の次第(等無間)なりや、盡智の次第なれば彼の一切は無生智なりや否や、(3)無礙道即ち金剛喻定の所緣は、盡智の所緣なりや否や、(4)盡智の所緣は無生智の所緣と同じきやの四種の問題を論究する段なり。

因みに、本節と次節とは、發智と共にの説順を前後せり。(婆沙百五十五卷、毘婆沙十五、頁十八以下參照)。

【一九】 初盡智と無礙道(金剛喻定)の次第(等無間)との關係。

【二〇】 初無生智と盡智の次第との關係。

【二一】 無礙道(金剛喻定)の所緣と盡智の所緣との關係。

云云は、發智は之を、諸の彼を緣する無間道起れば、則ち彼を緣する盡智起るや。答ふ、若し生を緣する無間道起れば則ち彼を緣する初の盡智起る……と續せり。

【二二】 盡智と無生智との所緣に就きて。

【二三】 本節は、盡・無生智と無學の正見との、自性(智)有

るものなりや。答へて曰く、^{三三}所修の道未知智の現在前するときと、無漏道をもて斯陀含・阿那含果を取るときと、阿羅漢果を得るときと、等意解脱阿羅漢が無疑を得るときと、是を無漏根を棄てて無漏根を得するものにして、彼は無漏根を盡くし無漏根を現在前するものといふなり。

^{三三}(四)云何んが無漏根を棄つるにも非ず無漏根をも得せず、無漏根を盡くし無漏根を現在前するにも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

^{三四}第六節 未知根の一切は不修の四諦を修(現觀)するやに就きて

諸の未知根なる彼の一切は不修の諦を修すること有りや。答へて曰く、或る未知根にして彼は不修の諦を修すること有るに非ざるものあり。

^{三五}(一)云何んが未知根にして彼は不修の諦を修すること有るに非ざるものなりや。答へて曰く、諸の未知根にして若し過去・未來のものなれば、是を諸の未知根にして彼は不修の諦を修すること有るに非ざるものといふ。

^{三六}(二)云何んが不修の諦を修すること有るも、彼は未知根ならざるものなりや。答へて曰く、諸の無根法にして不修の諦を修すること有るもの、是を不修の諦を修するも彼は未知根ならざるものといふ。

^{三七}(三)云何んが未知根にして彼は不修の諦を修すること有るものなりや。答へて曰く、諸の未知根にして不修の諦を修すること有るもの、是を未知根にして彼は不修の諦を修すること有るものといふ。

^{三八}(四)云何んが未知根にも非ず、不修の諦を修すること有るにも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

^{三九}第七節 初の盡・無生智と其の次第(等無間)と、及び其れ等の所緣とに就きて

【三三】「所修の」とは、發智に「現觀邊の」と翻す。

【三四】 第四俱非句――

【三五】 本節は、一切の未知根は、未だ修せざる即ち、未だ現觀せざる四聖諦を修す(即ち現觀す)るものなりや否やを明にする段なり。

【三六】 婆沙に據れば、本節を説ける所以は、「唯、現在に作用あるもののみ(未知根)未知當知根と言ひ得るも、過去・未來のものは非らざらんとの疑ひを決定して、三世に有るは皆、此の未知根なることを顯示せんが爲めなりと言ふ。

【三七】 (婆沙百五十五卷、毘曇部十五、頁十三以下參見)以下、四句分別をなせり。

【三八】 第一單句――

【三九】 第二單句――此の中、無根法とは、發智に「非根法」と翻す、想・思・觸、乃至心不相應行等を指す。

【四〇】 第三俱是句――

【四一】 第四俱非句――

是の如し。諸の世間第一法の次第なるときの、彼の一切は學根を成就せずして學根を得するなり。

頗し學根を成就せずして學根を得するときは、彼れに世間第一法の次第に非ざるものありや。答へて曰く、有り、阿羅漢果より退するるときなり。

第五節 無漏根を棄てて無漏根を得するものに就きて

若し無漏根を棄てて無漏根を得するもの、彼の一切は果より果に遊ぶものなりや。答へて曰く、是の如し。諸の果より果に遊ぶもの、彼の一切は無漏根を棄てて無漏根を得するものなり。

頗し無漏根を棄て無漏根を得するものにして、彼が果より果に遊ぶに非ざることありや。答へて曰く、有り。所修の道未知智が現在前するときに、若しくは等意解脫阿羅漢が無疑を得するときにたり。

若し無漏根を棄てて無漏根を得するものなれば、彼の一切は無漏根を盡くして無漏根を現在前するものなりや。答へて曰く、或は無漏根を棄てて無漏根を得するも、彼は無漏根を盡くし無漏根を現在前するに非ざるものあり。

(一)云何んが無漏根を棄てて無漏根を得するも、彼は無漏根を盡くし無漏根を現在前するに非ざるものなりや。答へて曰く、世俗道にて斯陀含果・阿那含果を取るときと、阿羅漢果より退するるときと、阿那含果斯陀含果より退するるときと、是を無漏根を棄てて無漏根を得するも、彼は無漏根を盡くし無漏根を現在前せざるものといふなり。

(二)云何んが無漏根を盡くし無漏根を現在前するも、彼は無漏根を棄てて無漏根を得するに非ざるものなりや。答へて曰く、本得せし無漏根を盡くし現在前するが如き、是を無漏根を盡くし無漏根を現在前するも、彼は無漏根を棄てて無漏根を得するに非ざるものといふなり。

(三)云何んが無漏根を棄てて無漏根を得するものにして、彼は無漏根を盡くし無漏根を現在前す

五、頁七以下参照。

【四】本節は、無漏根を棄てて無漏根を得するものは果より果に至るや果より果に至らざるものありやとの問題と、次に、無漏根を棄てて無漏根を得するものなれば、彼は無漏根を盡くして無漏根を現在前するものなりやとの二種の問題を論究する段なり。

(婆沙百五十五卷、毘婆沙十五、頁八以下参照)。

【五】無漏根を棄て無漏根を得するものは、一切果より果に至るやに就きて。

【六】遊ぶ、大正本に由とあるも、三本・宮本・聖本・聖乙本には皆遊とあり。今は後者に從ひて遊と改む。

【七】無疑とは、發智の不動に當る、尙、發智には、練根して不動と作る時とあり。

【八】無漏根を棄て無漏根を得するもの、彼の一切は無漏根を盡くし無漏根を現在前するやに就きて。

以下四句分別をなせり。

【九】第一單句——

【一〇】第二單句——

【一一】第三俱是句——

云何んが眼根を修せずといふや。答へて曰く、眼根において愛未だ盡きず、貪未だ盡きず、念未だ盡きず、渴未だ盡きざると、復次に、無礙道を以てせば色愛を盡しうるに、彼の道において修せずと、是の如きを眼根を修せずといふ。

耳・鼻・舌・身根も亦復、是の如し。

云何んが意根を修せずといふや。答へて曰く、意根において、愛未だ盡きず、貪未だ盡きず、念未だ盡きず、渴未だ盡きざると、復次に、無礙道を以てせば、無色愛を盡しうるに、彼の道において修せず、猗せざると、是の如きを意根を修せずといふなり。

云何んが眼根を修すといふや。答へて曰く、眼根において愛盡き、貪盡き、念盡き、渴盡くると復次に、無礙道を以てせば、色愛を盡しうるに、彼の道において修し猗すると、是の如きを眼根を修すといふ。

耳・鼻・舌・身根につきても亦、是の如し。

云何んが意根を修すといふや。答へて曰く、意根に於て愛盡き、貪盡き、念盡き、渴盡くると、復次に、無礙道を以てせば無色愛を盡しうるに彼の道において修し猗すると、是の如きを意根を修すといふなり。

第四節 學根を成就せずして學根を得するものに就きて

若し學根を成就せずして學根を得するものなれば、彼の一切は越次取證するものなりや。答へて曰く、是くの如し。諸の越次取證するもの、彼の一切は學根を成就せずして學根を得するものなり。

頗し學根を成就せずして學根を得するものなるも、彼は越次取證するに非ざるものありや。答へて曰く、有り、阿羅漢果より退するものなり。

若し學根を成就せずして學根を得するときは、彼の一切は世間第一法の次第なりや。答へて曰く

し、心心所は剎那に滅すと説くを破するにありと婆沙は言ふ。(婆沙百五十五卷、毘曇部十五、頁三参照) 【七】心を用ひざるに非ずとは、發智の「心を離れず」といふに當る。

【八】本節は、婆沙に據れば、對治修及び除遣修の立場より眼・耳・鼻・舌・身・意の六根の一一に就き、此を修し、及び修せずとは、如何なる義なりやを明す段なり。(婆沙百五十五卷、毘曇部十五、頁四以下参照) 【九】眼・耳・鼻・舌・身根の不修に就きて。

此の中、「愛・貪・念・渴未だ盡きず」とは、發智にては、「未だ欲・調・慧・渴を離れず」と翻す。 【一〇】意根の不修に就きて。 【一一】眼等の五根の修に就きて。

【一二】意根を修すといふに就きて。

【一三】學根を成就せずして學根を得するものに、二種あり即ち、異生より世間第一法を経て越次取證する(即ち正性離生に入る)ものと、阿羅漢果より退して學根を得するものとなり。本節は此の義を明にせんとするを其の課題とせり。(婆沙百五十五卷、毘曇部十

するや。設し諸法にして無學の等智と相應するものなれば、彼の法は無學の等見とも相應するや。諸法にして無學の乃至等解脫と相應するもの、彼の法は無學の等智とも相應するや。設し諸法に無學しての等智と相應するものなれば、彼の法は無學の等解脫とも相應するや。

此の章の義、願くは具さに演說せん。

第二節 心と一起・一住・一盡(滅)する諸法と、心との相應・所縁に於ける關係論

諸法にして心と共に一起・一住・一盡するものなれば、彼の法は心と相應するや。答へて曰く、是の如し。諸法にして心と共に相應するものなれば、彼の法は心と共に一起・一住・一盡す。

頗し法の心と共に一起・一住・一盡するものにして、彼の法が心と相應せざるものありや。答へて曰く、有り。心廻轉の色と、心廻轉の心不相應行となり。

諸法にして心と共に一起・一住・一盡するものなれば、彼の法は心と共に同一縁なりや。答へて曰く、是の如し。諸法にして心と共に同一縁のものなれば、彼の法は心と共に一起・一住・一盡す。

頗し法の心と共に一起・一住・一盡するものにして、彼の法が心と共に同一縁に非ざるものありや。答へて曰く、有り。心廻轉の色と、心廻轉の心不相應行となり。

第二節 心を離れざる色法の起・住・盡に就きて

諸法にして心と共に起り、心を用ひざるに非ざるものなれば、彼の法の起るとき心と共に起し、心を用ひざるに非ざるや。彼の法が住し盡くるとき心と共に住し共盡して、心を用ひざるに非ざるや。答へて曰く、欲・色界の衆生にして無想三昧・滅盡三昧に入らざるもの諸根の四大なれば、彼の法が起るとき心と共に起し、心を用ひざるに非ず。住し盡くるとき、心と共に住し共盡して、心を用ひざるに非ざるも、此の二定に入るものなれば心を用ひず。

第三節 眼根乃至意根の修・不修に就きて

第五章心と一起・一住・一盡する諸法と、心との相應等に關する論究

五四九

【三】本節は、心と一起・一住・一盡する諸法は、心と相應するや否や、又、此の諸法の所縁は、心のそれと同一なりや否やを論究する段なり。因みに、婆沙に據れば、本節論起の所以は、相應法と所縁との非實有説を遮止し、兩者の實有なるとを顯示せんが爲めなりと言ふ。
（婆沙百五十五卷、毘婆沙十五、(初頌)參照)。

【四】心廻轉の色とは、發智は隨心轉の色と講ず。

【五】心と一起・一住・一盡する諸法は心と同一縁なりや否や。

【六】本節は、心と俱生し、心を離れざる色法、即ち諸根の四大は、心と共に起し共住し共滅して心を用ひざるに非ざること明すにあり。故に、本節論起の目的は、三剎那論沙門等が、諸の色法は三剎那住

若し無漏根を棄して無漏根を得するものなれば、彼の一切は無漏根を盡し無漏根を現在前するや。設し無漏根を盡して無漏根を現在前するものなれば、彼の一切は無漏根を棄して無漏根を得するや。
 (六) 諸の未知根なる彼の一切は、不修の諦を修すること有りや。設し不修の諦を修すること有るものなれば、彼の一切は未知根なりや。

(七) 最初の盡智として生ずるもの彼の一切は、無礙道の次第なりや。設し無礙道の次第のものなれば、彼の一切は盡智なりや。

最初に無生智の起るもの彼の一切は、盡智の次第なりや。設し盡智の次第のものなれば、彼の一切は無生智なりや。

如し彼を縁する無礙道なれば、彼を縁する盡智なりや。如し彼を縁する盡智なれば、彼を縁する無礙道なりや。

如し彼を縁する盡智なれば、彼を縁する無生智なりや。如し彼を縁する無生智なれば、彼を縁する盡智なりや。

(八) 盡智は當に盡智・法智・未知智・知他人心智・苦智・習智・盡智・道智と言ふべきや。當に有覺有觀と言ふべきや、當に無覺有觀と言ふべきや、當に無覺無觀と言ふべきや。當に樂根と相應する言ふべきや、喜根・護根・空・無相・無願と相應するや。當に欲界繫を縁すと言ふべきや。當に色・無色界繫を縁すと言ふべきや。當に不繫を縁すと言ふべきや。

無生智と無學の等見とにつきても、亦、是の如し。

(九) 諸法の無學の等見と相應するもの、彼の法は無學の等至と相應するや。設し諸法にして無學の等志と相應するものなれば、彼の法は無學の等見とも相應するや。

諸法にして無學の等見と相應するもの、彼の法は無學の等方便・等念・等定・等解脱・等智とも相應

【八】 未知根の一切は、四諦を修(現觀)するやの問題。

【九】 初の盡・無生智と其の無間道、及び其れ等の所緣問題。

【一〇】 盡智・無生智・無學の等(正)見の五門分別門。

【一二】 無學の等見・等至乃至等智との相互相關關係問題。

第五章 心と一起・一住・一盡する諸法と、心との

相應等に關する論究

(毘曇根健度、始發心跋渠第五) (發智論卷第十五、大正・二六、九九八頁)

本章の内容目次

二 (一) 諸法にして心と共に一起・一住・一盡するものなれば、彼の法は心と相應するや。設し法にして心と相應するものなれば、彼の法は心と共に一起・一住・一盡するや。

諸法にして心と共に一起・一住・一盡するものなれば、彼の法は心と共に同一縁なりや。設し諸法にして心と同一縁のものなれば、彼の法は心と共に一起・一住・一盡するや。

三 (二) 諸法にして心と共に起り、心を用ひざるにあらざるものなれば、彼の法は起ること心と共たり、起ること心を用ひざるに非ざるや。彼の法は住し盡くこと心と共たり、住し盡くこと心を用ひざるに非ざるや。

四 (三) 云何んが眼根を修せざるや、云何んが耳・鼻・舌・身・意根を修せざるや。云何んが眼根を修するや、云何んが耳・鼻・舌・身・意根を修するや。

五 (四) 若し學根を成就せずして學根を得するものなれば、彼の一切は越次取證するや。設し越次取證するものなれば、彼の一切は學根を成就せずして學根を得するものなりや。

若し學根を成就せずして學根を得するものなれば、彼の一切は世間第一法の次第なりや。設し世間第一法の次第のものなれば、彼の一切は學根を成就せずして學根を得するものなりや。

六 (五) 若し無漏根を棄して無漏根を得するものなれば、彼の一切は果より果に遊ぶものなりや。設し果より果に遊ぶものなれば、彼の一切は無漏根を棄して無漏根を得するものなりや。

【一】 本章の内容を發智の頌文にて示せば、次の如し。

「相應・縁・不離」

不修・修得^{スル}根

捨得^シ・未知根

五門辨三智

初盡・無生智

七正五・相應^{スル}

此章頌具說。

從つて、本章を始發心跋渠といふは、最初の論題に據れるものなり。

【二】 心と一起・一住・一盡する法と、心との相應・所縁に於ける關係問題。

【三】 心を離れざる法の起・住・盡と、心との離・不離關係問題。

【四】 眼根乃至意根の修・不修に就きての問題。

【五】 學根を成就せずして學根を得するものに関する問題。

【六】 無漏根を棄して、無漏根を得するに関する問題。

【七】 遊は、大正本に由とあり、三本・宮本・後本・聖乙本等皆遊とあり、彼の本文にも遊とあるを以て、かく訂正す。以下※印あるは之に準ず。

〔婆沙百五十五卷、毘曇部十四、頁三九七以下參照〕。

【七〇】 欲界に没して生ずる時、滅起する根並に心心法。

【七二】 四とは、身・命・意・捨なり。次の九とは、前の四に信等の五を加ふ。

【七三】 八とは、眼・耳・鼻・舌・身・命・意・護根なり。

【七四】 以下、一形、二形の時は、前(註七三)の數に、各々夫々之を加ふるなり。

【七五】 八とは、眼・耳・鼻・舌・身・命・意・護根にして、次の九、十は、之に、一形、二形を順に加へしもの。

【七六】 欲界より没して色界に生ずる時、滅起する根と心心法。

【七七】 「或は九」は諸本皆無きも、後文より推し、且つ發智を參照するに當然あるべきものなり。故に今はかく補正せり。

【七八】 四とは、身・命・意・護根にして、善心のときの九とは、之に信等の五を加へしもの。

の、一時に無記心にて命終者のなれば九とは、眼・耳・鼻・舌・身・命・意・護根と及び男・女根中の隨一となり、次の十四とは、之に信等の五を加へしもの。

【七九】 八とは、眼・耳・鼻・舌・身・命・意・護根なり。

【八〇】 欲界より没して無色界に生ずる時、滅起する根と心心法。

【八一】 「或は九」は諸本になきも前後の關係、及び發智を參照して之を補ふ。

【八二】 以下の數字は、「前註七八」の如し。

【八三】 三とは、命・意・護根なり。

【八四】 次下に「欲界竟り」との夾註あり。

【八五】 色界に没して色界に生ずる時、滅起する根と心心法。

【八六】 八とは、眼・耳・鼻・舌・身・命・意・護根にして、十三とは信等の五を加へしもの。

【八七】 八とは、「註八六」の如し。

【八八】 色界より没して欲界に生ずる時、滅起する根と心心法。

【八九】 八、及び十三は、「註八六」の如し。

【九〇】 以下の數字は、「註七五」の如し。

【九一】 色界より没して無色界に生ずる時、滅起する根と心心法。

【九二】 界の次に、大正本には、繫の字あるも、三本・宮本には無し、今は後者に據り、かく訂正す。

【九三】 八と十三とは、「註八六」の如し。

【九四】 三は大正本に二とあるも、三本・宮本・聖乙本によりて三と訂正す。

【九五】 三とは、命・意・護根なり。

【九六】 次下に、「色界竟り」の夾註あり。

【九七】 無色より没して無色界に生ずる時、滅起する根と心心法。

【九八】 三とは、命・意・護根にして、八とは、之に信等の五を加へしもの。

【九九】 無色界より没して欲界に生ずる時、滅起する根と心心法。

【一〇〇】 三、及び八は、「註八九」の如し。

【一〇一】 八、九、十の根數は、「註七五」の如し。

【一〇二】 無色界より没して色界に生ずる時、滅起する根と心心法。

【一〇三】 三及び八は「註九八」の如し。

【一〇四】 八とは、「註七九」の如し。

【一〇五】 本節は、特に阿羅漢が般涅槃する時に滅する根が幾くなりやを明す段なり。

〔婆沙百五十五卷、毘曇部十四、の最後參照〕。

【一〇六】 四とは、身・命・意・捨根なり。

【一〇七】 九とは、眼・耳・鼻・舌・身・命・意・護根と、男・女根中の隨一となり。

【一〇八】 八とは、前の九より男女根の隨一を除くもの。

【一〇九】 三とけ、命・意・護根なり。

くの根を攝するやを明にする段なり。

【婆沙百五十四卷、毘曇部十四、頁三八九以下參照】。

困みに、本節も發智と多少說順を異にす。

【四四】 二十二根各自の攝する根に就きて。

【四三】 三根とは、身・男・女根なり。

【四二】 三根とは三無漏根をいひ、無漏根の九法中の意のみを攝するなり。

【四一】 九根とは、意と樂・喜・護の三受と信等の五根となり。

然も此の九法は共に、有漏・無漏に通ずる中、此は無漏のみを攝し、未知根は更に、其の中の見道中のもののみを攝す。故に少入と言ふ。

【四〇】 五力の攝する根に就きて。

【三九】 三根とは三無漏根にして其の中の信のみを攝するなり。故に少入といふ。

【三八】 七覺意の攝する根に就きて。

【三七】 四根とは念根と三無漏根なり。少入とは、念根は有漏・無漏に通ずる中、無漏のみを攝し、三無漏根九法中の唯、念のみを攝するをいふ。

【二六】 八道種・八智・三三昧の

攝する根に就きて。

此の中、等見は慧根と三無漏根の少分、等方便(正精進)は方便と三無漏根との少分を攝するなり。他はこれに准じて知るべし。

【三五】 法智等は慧根と三無漏との少分なるも、知他人心智は、慧根と已知根と無知根との少入なり。

【三四】 四根とは定根と三無漏根なり。

【三三】 本節は、意根・五受根・信等の五根・三無漏根及び力・覺意・道種・智・三昧の各々が夫々幾根と相應するやを明する段なり。

(婆沙卷百五十四、毘曇部十四、頁三九二參照)。

【三二】 意根等と相應する根。

【三一】 十根とは、次下に夾註する如く、五受根と信等の五根となり。三根の少入とは三無漏根中の意根を除くものをいふなり。

【三〇】 九根とは、意根と信等の五と三無漏根となり。次に少入とは意と信等の五とは、五受根と皆相應するもの、其の中、三受と俱生するもののみと夫々相應するが故にして、三無漏根の少入とは、これ亦自根と俱生するもののみと相

應するが故なり。

【二九】 六根……とは、次下に夾註あるが如く、信等の五根に意根を加ふるなり。

【二八】 四根とは、精進・念・定・慧根にして、次の五根とは、意と五受と三無漏根となり。

【二七】 九根とは、意・樂・喜・護・信等の五根にして、此の中の少入とは、有漏・無漏の中、無漏のみ、無漏中、見・修・無學道中の見道位のもののみと相應すればなり。

【二六】 五力と相應する根。

此の中、四根及び九根に就きては註六〇の如し。

【二五】 七覺意と相應する根。

此の中、十一根とは、意・樂・喜・護と信等の四(念を除く)と三無漏根となり。

【二四】 意乃至信等の四の少入とは、其の中無漏のもののみと相應するを言ひ、三無漏根の少入とは、夫々自性を除く餘とのみ相應するをいふ。

【二三】 九根とは、意と信等の五と三無漏根にして、その少入なりとは、意と五根との其の無漏のもののみをいひ、更に初二禪に依るもののみ、三無漏根の少入とは、喜と俱生するもののみをいふ。

【二二】 三根とは、三無漏根、

九根とは、意根と樂・喜・護の三受根と信等の五根となり。

此の中、護覺意は行捨にして、三受根中の護根に非ず故に、護覺意は護根の少入とも相應すと言ふなり。

【二一】 八道種・智・三昧と相應する根。

此の中、等見・等方便・等念・等定・法智・未知智は何れも、信等の五根の一を自性とすることが故に、この十一根は、念覺意(註六三)の如し。

而も、等志は其の自性尋なるが故に、其の十一根は、意と喜と捨と信等の五根と三無漏根にして、樂根を除く點、等見等の場合と相違するなり。

因みに、發智は婆沙と共に等念(即ち、正念)を缺く。

【二〇】 十根とは、意・樂・喜・護・信等の四(慧を除く)と已知根と無知根となり。

【一九】 二根とは、喜・憂根にして、八根とは、意・樂・喜・護と信等の四となり。

【一八】 十一根は「註六三」の如し。

【一七】 本節は、有情が三界に没し、生ずるとき、幾根が盡き生じ、何界業の、心心法(心心所)が盡き、現在前するやを明にするを其の課題とす。

色界繫のなり。

無色界より没して欲界に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は三、或は八なり。

無記心にてなれば三、善心にてなれば八なり。何の繫の心心法が盡くるや。答へて曰く、無色界

繫のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、或は八、或は九、或は十なり。無形なれば八、

一形なれば九、二形なれば十なり。何の繫の心心法が現在前するや。答へて曰く、欲界繫のなり。

無色界より没して色界に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は三、或は八なり。

無記心にてなれば三、善心にてなれば八なり。何の繫の心心法が盡くるや。答へて曰く、無色界繫

のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、八なり。何の繫の心心法が現在前するや。答へ

て曰く、色界繫のなり。

第十二節 阿羅漢が般泥洹する時、滅する根に就きて

阿羅漢が般泥洹するとき、幾くの根が最後に滅するや。答へて曰く、或は四、或は九、或は八、或は三なり。欲界より漸に般泥洹するものなれば四なり、一時に般泥洹するものなれば九なり。

色界よりなれば八なり。無色界よりなれば三なり。

阿毘曇、始心品第三十竟り(梵本二百六十九首盧、秦言二千二百二十一言)

【三六】 無想天に想の生ずるや、否やに就きて。

婆沙に由るに無想天に生ずる時、多時有想なりといふを主張するなり。

【三七】 無想衆生の想起に由る想の滅と無想天よりの没落とに就きて。

無想天に生ずるとき想ありて、暫くして無想となるも、若し想起れば暫くして無想天より没するなり。而して此の無想天より没するときは、他の想が滅する時なるも、想起りて滅する初刹那に、直ちに無想天より没するに非ず、此の

想が起りてより多時無想天に於て此の想の滅起ありて後、最後の想の滅する時、無想天より没するものなることを顯示するが、以下の文意なり。【三九】 無想天の想の善・無記分別。無想天の想を便する使

【三四】 九とは、次下の夾註ある如く、前の八に男或は女根の一を加ふるなり。

【三五】 本節は、先づ第一、無想天には想が生ずるや否や、想の滅する場合は如何んを論じ、第二に、無想天の想の善・無記分別をなし、第三に此の想は幾く結に繫せらるるや及び幾く結に繫せらるるやを明し、第四に、無想天にも三食あるを明にする段なり。

因みに、婆沙に據るに、此は、(1)無想有情の生時と滅時とは、共に無想なりとの有説、(2)死時のみは無心なりとの有説、(3)生時、死時共に有心なるも、同じく一念にして久しく相續せずとの有説等の異執を遮止して、無想天の時にも滅時にも有想にして多時なることを顯示するに在りと言ふ。

(婆沙百五十四、毘曇部十四、頁三八五以下参照)

と繋する結とに就きて。

【四〇】 六とは九結より、婬・嫉・慳を除けるもの。

【四一】 無想天の食に就きて。

【四二】 更と意念とは、發智にては、觸と意思と繋ず。

【四三】 本節は、根・力・覺意道、種・智・三昧の各々が、夫々幾

九、或は十四なり。欲界繫の無記心にて漸に命終するものなれば四なり。善心にてなれば九なり。一時に無記心にて命終するものなれば九なり。善心にてなれば十四なり。

何の繫の心心法が盡くるや。答へて曰く、欲界繫のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、三なり。何の繫の心心法が現在前するや。答へて曰く、無色界繫のなり。

色界より没して色界に生ずるときは、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は八、或は十三なり。

無記心にて命終するものなれば八なり。善心にてなれば十三なり。

何の繫の心心法が盡くるや。答へて曰く、色界繫のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、八なり。何の繫の心心法が現在前するや。答へて曰く、色界繫のなり。

色界より没して欲界に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は八、或は十三なり。

無記心にて命終するものなれば八なり、善心にてなれば十三なり。

何の繫の心心法が盡くるや。答へて曰く、八、一形なれば九、二形なれば十なり。

何の繫の心心法が現在前するや。答へて曰く、欲界繫のなり。

色界より没して無色界に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は八、或は十三なり。

無記心にて命終すれば八、善心にてなれば十三なり。

何の繫の心心法が盡くるや。答へて曰く、色界繫のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、三なり。何の繫の心心法が現在前するや。答へて曰く、無色界繫のなり。

無色界より没して無色界に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は三、或は八なり。

無記心なれば三、善心なれば八なり。何の繫の心心法が盡くるや。答へて曰く、無色界繫のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、三なり。何の繫の心心法が現在前するや。答へて曰く、無

色界より没して無色界に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は八、或は十三なり。無記心にて命終すれば八、善心にてなれば十三なり。何の繫の心心法が盡くるや。答へて曰く、色界繫のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、三なり。何の繫の心心法が現在前するや。答へて曰く、無色界繫のなり。無色界より没して無色界に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は三、或は八なり。無記心なれば三、善心なれば八なり。何の繫の心心法が盡くるや。答へて曰く、無色界繫のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、三なり。何の繫の心心法が現在前するや。答へて曰く、無

出する時滅し現在前する根の數と、同じく滅する所の心心法即ち心心所の界繫分別となすを目的とす。(婆沙百五十二卷、毘曇部十四、頁三四四参照)。

【四】 意根と護根と信等の五根となり。

【五】 七なりとけ、次下の夾註に、「五根と意と護とあるが如し、五根とは信等の五をさす。

【六】 八なりとは、次下の夾註には、「已知根を加ふ」とあるも嚴密ならず、前の七根に已知根又は無知根の隨一を加へたるものなりとすべし、不還者と羅漢との場合あればなり。

【七】 本節は、無想天に生じ没する時、滅し現在前する所の根の數と心心所の界繫分別とを明す段なり。

【八】 婆沙百五十四卷、毘曇部十四、頁三八五以下参照。

【九】 無想天に生ずる場合。

【十】 八なりとは次下の夾註の示す如く、眼・耳・鼻・舌・身の所謂五情根と、意・命・護根となり。

【十一】 八は前註の如し。

【十二】 無想衆生より没する場合。

【十三】 八とは「註二九」の如し。

【十四】 八とは前註の如し。

等見・等志・等方便・等念・等定・法智・未知智は十一根と相應するも、その少入となり。知他人心智は十根と相應するも、その少入となり。等智は二根と相應し、八根の少入とも相應す。苦智と習・盡・道智と、空・無相・無願三昧とは十一根と相應するもその少入となり。

第九節 三界に生じ没する時、滅起する根並に心法に就きて

欲界より没して欲界に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は四、或は九、或は八或は十三、或は九、或十四、或は十、或は十五なり。

欲界繋の無記心にて漸に命終するものなれば、四なり。善心にてなれば九なり。

無形にして一時に無記心にて命終するものなれば、八なり。善心にてなれば十三なり。

一形にして一時に無記心にて命終するものなれば九なり。善心にてなれば十四なり。

二形にして一時に無記心にて命終するものなれば、十なり。善心にてなれば十五なり。

何の繋の心心が盡くるや。答へて曰く、欲界繋のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、

或は八なり、或は九なり。或は十なり。無形なれば、八、一形なれば九、二形なれば十なり。

何の繋の心心が現在前するや。答へて曰く、欲界繋のなり。

欲界より没して色界に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は四、或は九、或は九、或は十四なり。

欲界繋の無記心にて漸に命終するものなれば、四なり。善心にてなれば九なり。一時に無記心にて命終するものなれば九なり、善心にてなれば十四なり。

何の繋の心心が盡くるや。答へて曰く、欲界繋のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、

八なり。何の繋の心心が現在前するや。答へて曰く、色界繋のなり。

欲界より没して無色界に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、或は四、或は九、或は

非ずして、刹那刹那に生滅ありて壽をして漸く盡くさしむるものなることを顯示するに在りと云ふ。

此の中、「恒壽」とは、發智に、「起りて便ち住す」と釋するもの、即ち無想定滅盡定に入れる衆生の壽極めて永きをいふ。

【九】無想・滅盡定に入る時の壽の廻還又に住に就きて

此の答へとして發智にては「當に轉ずと言ふべし」とあり。

是れ婆沙に、無想定・滅盡定に入る時には一切の心心所は行ぜず。爾時、心心所が起らず、滅せざるが如く、壽行も亦起滅せずして擬念住するやとの疑ひを除き、壽は念念に起滅することを顯示せん爲めに、提出せし問答なりと言へる所以なり。然るに八健度にては之に正反對に、「當に住すと云ふべし」と言へる點、非常なる法相上の相違として注目すべし。

【一〇】本節は、無想三昧に入る時、盡き、且つ之より起つ時に、現在前する根の數と、其の心心法(心心所)の界繋分別とをなす段なり。

【一一】七とは、意根と護根と信等の五根となり。

【一二】此の七も前註二一の如し。

【一三】本節は、滅盡三昧に入

命根は命根を攝し、苦根は苦根を攝し、憂根は憂根を攝す。

未知根は未知根と四七、九根の少入とを攝す。已知根と未知根とも亦復、是の如し。

信力は一根と四九、三根の少入とを攝す。

精進・念・定・慧力も亦復、是の如し。

念覺意は五一、四根の少入を攝す。

擇法・精進・喜・定覺意も亦復是の如し。

猗・護覺意は根を攝せず。

等見と等方便と等念と等定と五三、法智と未知智とは四根の少入を攝し、知他人心智は三根の少入を攝し、等智は一根の少入を攝し、苦智、習・盡・道智と、空・無相・無願三昧とは五四、四根の少入を攝する

なり。

第五節 意根乃至三無漏根・五力・七覺意・八道種・八智・三三昧と相應する根に就きて

意根は五七、十根と相應し、三根の少入とも相應す。

樂根と喜根と護根とは五九、九根と相應するも、その少分となり。

苦根と憂根とは六〇、六根の少入と相應す。

信根は六一、四根と相應し、九根の少入とも相應す。精進・念・定・慧根も亦復、是の如し。

未知根は六二、九根の少入と相應す。已知根と未知根とも亦復、是の如し。

信力は四根と相應し、九根の少入とも相應す。精進・念・定・慧力も亦復、是の如し。

念覺意は十一根の少入と相應す。擇法・精進・定覺意も亦復、是の如し。

喜覺意は六四、九根と相應するも、その少入となり。猗覺意と護覺意とは六五、三根と相應し、九根の少

入とも相應す。

曇部十四、百三二九以下參照)。

【二六】壽は不與心迴(不隨心轉)なるに就きて。

婆沙に據るに、此は分別論者が、「壽は隨心轉なり」と説く異執を止め、壽は不與心迴(即ち不隨心轉)にして壽が心

と一起一住一滅するに非ざることを顯示せしなりと言ふ。

【二七】壽の順迴(隨相續轉)と始生住(一起便住)に就きて。

此は、婆沙に據れば、譬喩者が「非時に命終することあるを許さざる」に對して、無想定・滅盡定に入るもの、及び色・無色界の衆生なれば、非時に命終すること無く、即ち始生

して住(一起便住)するも、欲界の衆生にして、無想定にも滅盡定にも入らざるものには、非時に命終するものあり、即ち壽は災横の相續に順じて廻轉することあるを顯示するなりと言ふ。

【二八】人の壽命の盡に就きて。婆沙に據るに、此は、先に無想定・滅盡定に入れるものと、色・無色界の有情との壽行は「始生して住す」一起便住と言

ひし意味は、彼等の壽命は、一たび起つて滅せずといふ意なりやとの疑問を懐く恐れあるに對して、「始生して住す」と説くと雖も、不滅の意には

く、欲界繫のなり。

第六節 無想衆生の想と及び食とに關する論究

三六 無生衆生には、當に想が生ずと言ふべきや、想が生ずること無きや。答へて曰く、無想衆生には當に想が生ずと言ふべし。

三七 又、世尊の言く、「想起れば、彼の衆生、彼處より没す」と。想滅するるとき、彼の衆生は彼處より没すと爲んや。滅せずと爲んや。答へて曰く、彼の想滅すれば彼の衆生彼處より没するも、滅せずして住するには非ず、何處に彼の想を滅するや。答へて曰く、即ち彼に住して彼の想を滅するなり。

三八 此の想は當に善と言ふべきや。無記なりと爲んや。答へて曰く、此の想は或は善なり、或は無記なり。

三九 此の想は幾くの使に使せらるゝや。答へて曰く、色界の有漏縁のなり。幾くの結に繫せらるるや。答へて曰く、六なり。

四〇 又、世尊の言く、「一切の衆生は食に由りて存す」と。無想天は何を食するや。答へて曰く、更と意念と識となり。

第七節 二十二根・五力・七覺意・八道種・八智・三三昧の攝する根に就きて

眼根は眼根を攝す。

耳・鼻・舌根も亦復、是の如し。

身根は 三根を攝す。

意根は意根と 三根の少入とを攝す。

樂根と喜根と護根と信根と、精進・念・定・慧根とも亦復、是くの如し。

女根は女根と身根の少入とを攝し、男根は男根と身根の少入とを攝す。

- | | |
|---------|---------|
| 一、有欲心 | 發智 |
| 二、有瞋恚心 | 有貪心(一) |
| 三、有癡心 | 有瞋心(二) |
| 四、有染汚心 | 有癡心(三) |
| 五、有無亂心 | 散心(四) |
| 六、有無忘心 | 靜心(五) |
| 七、有大心 | 靜心(六) |
| 八、不修心 | 不修心(七) |
| 九、不定心 | 不定心(八) |
| 十、心無解脫 | 不修心(九) |
| 十一、心解脫 | 解脫心(十) |
| 十二、心無解脫 | 不修心(十一) |
- 【五】本節は、壽命が先づ第一に與心廻即ち隨心轉なりや、不與心廻、即ち不隨心轉なりやを明にし、第二に、壽は順廻す(相續に隨つて轉ず)るや、始生し住す(一起使住す)るやを論じ、第三に、人の壽命の盡くるに關する問題、第四に、無想三昧・滅盡三昧に入れるときの壽行が順廻(轉)するや否や等を論明するを其の課題とす。(婆沙百五十一卷、毘

又、世尊の言く、「人命、消盡すること、小河水の如し」と。諸の衆生が恒壽なるも、彼の壽は盡くといふ、云何んが彼の壽の盡くるを知るや。答へて曰く、世盡き劫盡くればなり。

無想三昧・滅盡三昧に入るとき、壽行は當に順廻すと言ふべきや。當に住すと言ふべきや。答へて曰く、當に住すと云ふべし。

第三節 無想三昧に出入する時、滅・起する根並に心心法(心心所)に就きて

無想三昧に入るとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、七なり。何の繋の心心法が滅するや。

答へて曰く、色界繋のなり。無想三昧より起つとき、幾くの根が現在前するや。答へて曰く、七なり。何の繋の心心法が現在前するや。答へて曰く、色界繋のなり。

第四節 滅盡三昧に出入する時、滅・起する根並に心心法に就きて

滅盡三昧に入るとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、七なり。何の繋の心心法が盡くるや。

答へて曰く、無色界繋のなり。滅盡三昧より起つとき、幾くの根が現在前するや。答へて曰く、或は七なり、或は八なり。有漏心なれば七にして、無漏心なれば八なり。何の繋の心心法が現在前するや。答へて曰く、或は無色界繋のなり、或は不繋のなり。

第五節 無想天に生没する時、滅・起する根並に心心法に就きて

無想天に生ずるとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、八なり。何の繋の心心法が盡くるや。

答へて曰く、色界繋のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、八なり。何の繋の心心法が現在前するや。答へて曰く、色界繋のなり。

無想衆生より没するとき、幾くの根が盡くるや。答へて曰く、八なり。何の繋の心心法が盡くるや。答へて曰く、色界繋のなり。幾くの根が現在前するや。答へて曰く、或は八、或は九、或は十なり。無形は八にして、一形は九、二形は十なり。何の繋の心心法が現在前するや。答へて曰

味不明瞭にして、無意義に近し、婆沙に據るに、本論提起の緣由は、心の起・住・滅に關して種類の疑問あり、其の疑問とは、(1)有情の身量の大小に應じて心も亦、大小あらざるや、(2)有情には行動の速かなると遲きと有るに、之に従つて其の心の起・住・滅にも夫速きと遲きと有るに非ずや、(3)有情の威儀には輕重の差あるに心にも亦、遲速の差ありや、(4)善心と染汚心とは其の起・住・滅に遲速の差なきや等なり。

今、本論の作論者は、之等の疑ひを泐滅せんが爲めに、心は總體としても、有欲心無欲心等の諸種の個別の心として

も、共に、等しく起り等しく住し等しく滅して、大小、遲速等の別なきを顯示するなりと言ふ。此の婆沙の説に據る限り、八難度の譯文は誤譯ならざるとするも少くとも適譯ならざるべし。詳細は、婆沙百五十一(毘婆沙部十四、頁三二三以下)參照のこと。

(二) 總體としての心の起・住・滅に就きて。

(三) 有欲心・無欲心等の十對の心の起・住・滅に就きて。因みに、此の十對心の新舊兩者の譯語の異同を示せば次の如し。

第四節 心心の法起(興)住・滅乃至三界に生滅する根・心心法に關する論究

五三九

生ずるとき、色界より没して欲界に生ずるとき、色界より没して無色界に生ずるとき、無色界より没して無色界に生ずるとき、無色界より没して欲界に生ずるとき、無色界より没して色界に生ずるとき、幾くの根が滅し、何の繋の心心法を滅し、幾くの根が現在前し、何の繋の心心法が現在前するや。

(十)阿羅漢が般泥洹するとき、幾くの根が最後に滅するや。

此の章の義、願くは具さに演說せん。

第一節 諸種の心の興(起)任、滅に關して

一切の衆生には當に始めて心が興り、始めて心が住し、始めて心が滅するや。答へて曰く、是くの如し。

諸の心の有欲なると諸の心の無欲なると、此の心は當に始めて興り始めて住し始めて滅するや。

答へて曰く、是くの如し。

有瞋恚と無瞋恚、有癡と無癡、有染汚と無染汚、有亂と無亂、有怠と無怠、有小と有大、不修と修、不定と定、諸心の無解脫なると諸心の解脫なる、此の心は當に始めて興り始めて住し始めて滅すと言ふべきや。答へて曰く、是くの如し。

第二節 壽の與心廻(隨心轉)等に關する諸種の問題に就きて

壽は當に與心廻なりと言ふべきや。不與心廻なりと爲んや。答へて曰く、壽は當に不與心廻なりと言ふべし。

壽は當に順廻すと言ふべきや、始生し住するや。答へて曰く、欲界の衆生にして無想三昧、滅盡

三昧に入らずんば則ち順廻するも、若し無想定・滅盡定に入るものと、及び色・無色界天にては、當に始生し住すと言ふべし。

【二】羅漢が般泥洹する時、滅する根の數の問題。

【三】本節は、先づ總體として、心が興(起)り、住し、滅する状態に關して述べ、次に、(1)有欲心と無欲心、(2)有瞋恚心と無瞋恚心、(3)有癡心と無癡心、(4)有染汚心と無染汚心、(5)有亂心と無亂心、(6)有怠心と無怠心、(7)有小心と有大心、(8)不修心と修心、(9)不定心と定心、(10)諸心の無解脫なると諸心の解脫なるのと、十對の個個の心の起・住・滅する状態に就きて論述する段なり。

因みに、本節に於て此の八犍度が「當に始めて心が興り、始めて心が住し、始めて心が滅す」と繋ずるを、發智は、「心が等起・等住・等滅す」と繋ぜり、「始め」と繋じ、「等」と繋ぜられたる原語は明かならざるも、而も、八犍度の「心が始めて興り始めて住し始めて滅す」は、之丈にては、意

五 (四) 滅盡定に入るとき、幾くの根が盡くるや。何の繋の心々法が盡くるや。滅盡三昧より起つとき、幾くの根が現在前するや。何の繋の心々法が現在前するや。

六 (五) 無想衆生に生ずるとき、幾くの根が滅するや。何の繋の心々法が滅するや。幾くの根が現在前するや。何の繋の心々法が現在前するや。

無想衆生より没するときは、幾くの根が滅するや。何の繋の心々法が滅するや。幾くの根が現在前するや。何の繋の心々法が現在前するや。

七 (六) 無想衆生に當に想が生ずと言ふべきや、當に想の生ずるもの無しと言ふべきや。又、世尊の言ふが如し、「想生ずるとき彼の衆生は彼處より没す」と。彼の想滅するとき彼の衆生は彼處より没するや。滅せずして住すと爲んや。何處に此の想を滅するや。此の想は當に善と言ふべきや。無記なりと爲んや。此の想は幾くの使に使せられ、幾くの結に繋せらるゝや。又、世尊の言く、「一切の衆生は食に由りて存す」と。無想衆生は何をか食するや。

八 (七) 眼根は幾くの根を攝するや、乃至無知根は幾くの根を攝するや。

九 (八) 意根は幾くの根と相應し、乃至無知根は幾くの根と相應するや。信力乃至慧力、念覺意乃至護覺意、等見乃至等定、法智乃至道智、空・無相・無願三昧は、幾くの根と相應するや。

一〇 (九) 欲界より没して欲界に生ずるとき、幾くの根が滅するや、何の繋の心々法を滅するや。幾くの根が現在前し、何の繋の心々法が現在前するや。

欲界より没して色界に生ずるとき、欲界より没して無色界に生ずるとき、色界より没して色界に

【五】 滅盡定に入出の時、盡起する根と心法との問題。

【六】 無想天に生・没する時、滅・起(現在前)する根及び心法の問題。

【七】 無想衆生の想と意とに關する問題。

【八】 二十二根・五力・七覺意・八道種・八智・三三昧の攝する根の數の問題。

【九】 意根乃至三無漏根、五力乃至三三昧と相應する根の問題。

【一〇】 三界に生没する時、滅起する根及び心法に關する問題。

卷の第二十二 (第六編 根健度)

第四章 心心法の起(興)住・滅乃至三界に生滅する

根・心・心法に關する論究

(根健度、始心跋渠第四) (發智論卷第十五、大正・二六、九九七頁)

本章の内容目次

二 (一)一切衆生には、當に始めて心が興り、始めて心が住し、始めて心が滅するや。

諸心の有欲なると諸心の無欲なると、此の心は當に始めて興り始めて住し始めて滅するや。

有瞋恚と無瞋恚、有癡と無癡、有染汚と無染汚、有亂と無亂、有怠と無怠、有小と有大、有修と

不修、有三昧と無三昧、諸心の不解脫すると諸心の解脫なる、此等の心は當に始めて興り始めて住

し始めて盡くと言ふべきや。

三 (二)壽は當に與心廻なりと言ふべきや。不與心廻なりとすべきや。

壽は當に順廻すと言ふべきや。當に始生し住すと言ふべきや。

又、世尊の言く、「人命消盡すること、小河水の如し」と。諸の衆生が恒壽なるも、彼の壽盡くと

いふ、云何が盡くるや。

無想定・滅盡定に入るとき、壽行、當に廻すと言ふべきや、廻せざるや。

四 (三)無想定に入るとき、幾くの根盡くるや。何の繫の心々法が盡くるや。無想三昧より起つとき、幾くの根が現在前するや、何の繫の心々法が現在前するや。

【一】本章は、始心跋渠とあるもこは例に依りて最初の論題に因めるものに外ならず。發智が、其の論題を附せる理由は同じきに拘らず之を等心納息となすは、八健度が、最初の一文を、一切衆生には、當に始めて心が起り云云と翻せるを、發智が、一切有情の心は當に等起し云云と翻せるに由る、其の理由は、第一節解題下に到りて述べん。因みに、發智の本章の初頭の頌文を示し置かん。

「等心壽二定、無想攝相應、界、死生、涅槃」
二 スルト スルト
此章願具説
と。此の詳細は婆沙百五十一卷、毘曇部十四、頁三二三、註を見よ。

【二】諸種の心の起・住・滅に關する問題。
【三】壽の與心廻・不與心廻等に關する諸問題。

【四】無想定に入出の時、滅(盡)、起(現在前)する根と心心法との問題。

阿毘曇八犍度論券第二十一

第三章 十六更樂(觸)論並に二十二根の成就週知減作證論

【六三】人の四洲の成就する根數。

以下の三洲は、不定者の如しとなり。此の點は、發智より省略なり。

但し、其の數は同じきも、極多の十九は、邪定聚及び不定者の場合の如きもの外、二形者にして三無漏根を除くものありて、多少相違せるにより、發智は特に別說せしものならん。

【六四】十八とは、一形と三無漏根とを除くもの、十三とは身・命・意根と五受根と信等の五根となり。

【六五】六欲天の成就する根數。十九とは、一形と二無漏根とを除くもの、十七とは、一形と三無漏根とを愛根とを除くもの。

【六七】色界諸天の成就する根數。十六とは、二形と苦・愛根と二無漏根とを除くもの。十五とは、二形と右の二受と

三無漏根とを除くなり。

【六九】十六は、前註六八の如し、十四とは、二形と喜・苦・憂の三受と三無漏根とを除くものを言ふ。

【七〇】十六とは、前註の如く、十三とは前註の十四より更に樂根を除くものをいふ。

【七二】中陰の成就する根數。十九とは、二形者の三無漏根を除くと、未離欲の無垢人の一形と二無漏根とを除くとをいひ、十三とは一形と信等の五根と三無漏根とを除くをいふ。

【七三】無色界天の成就する根數。十一とは、命・意・根と三受根と信等の五根と一無漏根とをいひ、八とは命・意・護根と信等の五根となり。

【七五】堅信乃至俱解脫の成就する根數。十九とは、一形と二無漏根とを除くもの、十三とは、身・命・意根と四受根と(愛根を除く)信等の五根となり。

【七六】十九は、前註七六の説の如し、十一とは、命・意・樂・喜・捨・信等の五根一無漏根をいふ。

【七八】十八とは、一形・愛根・二無漏根を除くをいひ、十一とは、前「註七七」の如し。

【七九】本節は、二十二根中より三無漏根を除く十九根の一一が斷智を得する(即ち永斷する)時、同時に幾く根が永斷するやを明すを其の課題とす。

(婆沙百五十、毘曇部十四、頁三一九參照)。

【八〇】眼根等の五根が斷智を得する時、斷智を得する根。舌・身根なり。

【八一】五根とは、眼・耳・鼻。舌・身根なり。

【八二】意乃至慧根が斷智を得する時、斷智を得する根。因みに、發智は、命根にて代説す。

【八三】八根とは、命・意・護根、信等の五根なり。

【八四】男・女・苦・憂根が斷智を得する時、斷智を得する根。

此の中、四根とは、男・女・憂・苦根なり。

【八五】樂・喜根が斷智を得する時、斷智を得する根。

【八六】本節は、三無漏根を除く眼根乃至慧根の十九の一一が、盡作證する時、同時に幾く根が盡作證するやを明にする段なり。

(婆沙百五十卷、毘曇部十四、頁三二〇參照)。

【八七】眼等の五根の減作證の場合。五根とは、眼・耳・鼻・舌・身根なり。

【八九】十九とは、三無漏根を除くもの。

【九〇】意乃至慧根の減作證の場合。此の中、十九は前註の如し。

【九一】男・女・苦・憂根の減作證の場合。此の中、四根とは、男・女・苦・憂根なり。

【九二】樂・喜根の減作證の場合。

を得するものなれば、十九根の盡を作證するなり。

喜根の盡を作證する時は光音愛の盡に到るものなれば、即ち彼の喜根の盡を作證し、阿羅漢を得するものなれば、十九の盡を作證するなり。

阿毘曇樂品第二十九竟り

(梵本一百四十一首盧、秦言一千九百一言)

らざるものもあるが故に、婆沙は、増語・無明・愛・樂痛・眼・意更樂を一一擧げて詳細に註釋せり。往きて見るべし。

【四】明更樂を因となす根と明更樂との相應關係。

【四】非明非無明更樂を因となす根と此の更樂との相應關係。

【四】「非」は、大正本に無きも意味及び法相上缺くべからざるものなり、發智も「相應するに非ざるものありや」とせるが故に、今は、之を補ひ譯し置けり。

【四】本節は、眼・耳・鼻・舌根の一一と身根との成就關係を明にする段なり。

(婆沙百四十九卷、毘曇部十四、頁二九九參照)。

【四】眼根と身根との成就關係。

以下四句分別をなせり。

【四】天眼は發智には、色世界の眼とあり。以下※印あるは

之に準ず。

【五】根の字は、大正本に無きも、今は之を補正せり。

【五】耳根と身根との成就關係。

眼根と身根との場合の如しとなり。

【五】鼻根と身根との成就關係。

順前句をなせり。

【五】舌根と身根との成就關係。

鼻根と身根との場合の如し。

【五】本節は、地獄等の三惡趣及び人趣に於ける斷善根・邪定・正定・不定のもの、四洲のもの、六欲天・色界天・無色界天に至る凡ての有情と、並びに隨信行乃至俱解脫に至る凡ての聖者とに就きて、其等が一一、二十二根中の幾くを成就するやを、極多と極少との場合に限りて明にせんとする段なり。

(婆沙百五十卷、毘曇部十四、

頁三一五以下參照)。

因みに、本節中、發智との譯語上の相違せるものを比較し置くべし。

八健度：發智

畜生——傍生

餓鬼——鬼界

等定——正定聚

閻浮提——瞻部洲

弗于逮——毘提訶洲

拘耶尼——瞿陀尼洲

鬱單曰——俱盧洲

四天王身——四大王衆天

炎天——夜摩天

兜術在天——都史多天

兜術在天——樂變化天

梵加夷天——梵衆天

光音天——極光淨天

果實天——廣果天

中陰——中有

る根數に就きて。

【五】十九とは、三無漏根を除くもの、極少の八とは、身・命・意・五受根なり。

【五】十九は、一註五六の如し、十三は身・命・意・五受根と信等の五根とをいふ。

【五】斷善根乃至不定者の成就する根の數。

【五】十三とは、一形と及び信等の五根と三無漏根とを除くもの、八とは、一註五六の如し。

【六】此の極多の十九及び極少の八は、地獄(註五六)の如し。

【六】十九とは、一形と二無漏根とを除くもの、次の十一とは、命意根と三受根と信等の五根と一無漏根となり。

【六】十九は、(註五六)の如し、極少の八は、(註五六)の如きと、命・意・捨・信等の五根とを成就する無色界生の異生の如きとなり。

報生にして其の更樂を因とする報生の無縁のものとなり」と言ふ點共通するを以て、かく言へるなり。されど、婆沙の註釋の如く、因を相應、俱有等の五因に分別して考ふる時は決して同一に取り扱ふ可から

るなり。

第六節 眼根乃至慧根が斷智(遍知)を得する時、斷智を得する根の數に就きて

^{八〇} 眼根が斷智を得する時、色愛盡に到るをもて、^{八一} 五根は斷智を得ず。

^{八二} 耳・鼻・舌・身根につきても亦復、是の如し。

^{八三} 意根が斷智を得する時、無色愛盡に到るをもて、八根は斷智を得ず。

^{八四} 命根と護根と、信・精進・念・定・慧根につきても亦、是の如し。

^{八五} 男根と女根とが斷智を得する時、欲愛盡に到るをもて、四根が斷智を得ず。

^{八六} 苦根と憂根とも亦復、是の如し。

^{八七} 樂根が斷智を得する時は、遍淨愛の盡に到るをもて、即ち彼の樂根が斷智を得ず。

^{八八} 喜根が斷智を得する時、光音愛の盡に到るをもて、即ち彼の喜根が斷智を得するなり。

第七節 眼根乃至慧根が盡(滅)作證する時、盡作證する根の數に就きて

^{八九} 眼根の盡を作證する時、色愛の盡に到るをもて、^{九〇} 五根の盡を作證し、阿羅漢を得するものなれば、十九根の盡を作證す。

^{九一} 耳・鼻・舌・身根も亦復、是の如し。

^{九二} 意根の盡を作證する時は、阿羅漢を得するをもて、十九根の盡を作證す。

^{九三} 命根と護根と、信・精進・念・定・慧根とも亦復、是の如し。

^{九四} 男根と女根との盡を作證する時、欲愛盡に到るをもて、四根の盡を作證し、阿羅漢を得するものなれば、十九根の盡を作證す。

^{九五} 苦根と憂根とも亦復、是の如し。

^{九六} 樂根の盡を作證する時は、遍淨愛の盡に到るをもて、即ち彼の樂根の盡を作證し、阿羅漢

ののみをとり、無漏根内の九根中の、六根のみをとるを言ふなり。

【三五】 眼更樂と相應する九根の少入とは、意・樂・苦・護・信等の五根の中の、眼識と俱生するもののみをとる。これにて耳乃至身更樂は推知し得べし。

【四〇】 意更樂と相應する五根とは、増語更樂(註三〇)の如し。

【四一】 本節は、十六更樂の一を一を因となす所の根が、十六更樂の一と相應するや否や、又、この更樂と相應する根は、其等の更樂を因となすや否やを論究する段なるも、詳細は婆沙百四十九卷(毘婆沙十四、頁二九四以下)の所説に譲る。

【四二】 有對更樂を因となす根と有對更樂との相應關係。

【四三】 増語乃至意更樂を因となす根と意更樂との相應關係。此の中、増語乃至意更樂とは、有對更樂と明更樂と非明非無明更樂とを除く餘他一切十三の更樂の義を略示す。

此等を「亦復、是の如し」と言ふは、亦第十三更樂は、有對更樂の場合の如く、同じく順後句をなし、殊に頗問の答意が「諸根の其の更樂を因とするものにして、諸餘の更樂と相應するものと、若しくは

ものなれば八を成就す。

畜生は若し極多のものなれば十九、若し極少のものなれば十三を成就す。

餓鬼も亦、是の如し。

斷善根のものは、若し極多のものなれば十三、若し極少のものなれば八を成就す。

邪定のものは、若し極多のものなれば十九、若し極少のものなれば八を成就す。

等定のものは、若し極多のものなれば十九、若し極少のものなれば十一を成就す。

不定のものは、若し極多のものなれば十九、若し極少のものなれば八を成就す。

閻浮提と拘耶尼と弗于逮のものも亦復、是の如し。

壽單日のものは、若し極多のものなれば十八、若し極少のものなれば十三を成就す。

四天王身は、若し極多のものなれば十九、若し極少のものなれば十七を成就す。

三十三天と炎天と兜術天と化自在天と他化自在天とも亦復、是の如し。

梵加夷天は、若し極多のものなれば十六、若し極少のものなれば十五を成就す。

光音天も亦復、是の如し。

遍淨天は、若し極多のものなれば十六、若し極少のものなれば十四を成就す。

果實天は、若し極多のものなれば十六、若し極少のものなれば十三を成就す。

中陰は、若し極多のものなれば十九、若し極少のものなれば十三を成就す。

無色天は、若し極多のものなれば十一、若し極少のものなれば八を成就す。

堅信・堅法のものは、若し極多のものなれば十九、若し極少のものなれば十三を成就す。

信解脱と見到とは、若し極多のものなれば十九、若し極少のものなれば十一を成就す。

身證と慧解脱と俱解脱とは、若し極多のものなれば十八、若し極少のものなれば十一を成就す。

【三】無明更樂と相應する六根の少入とは、意根と五受根との中、染のもののみをいふ。

【三三】非明非無明更樂と相應する十一根の少入とは、意根と五受根と信等の五根との中、不染にして有漏なるもののみをいふ。

【三三】愛更樂と相應する四根の少入とは、意・樂・喜・護根の中、貪と俱生するもののみを言ふ。

【三五】悲更樂と相應する四根の少入とは、意・苦・憂・護根の中、悲と俱生するもののみを言ふ。

【三六】樂痛更樂と相應する二根とは、樂・喜根をいひ、九根とは、意根と信等の五根と三無漏根とをいひ、前の六は樂痛と俱生するもののみを少入といひ、三無漏根の少入とは無漏根内の九根の中の前の六根のみを指す。

【三七】苦痛更樂と相應する二根とは、苦・憂根をいひ、六根の少入とは、意根と信等の五根との苦受と俱生するもののみを言ふ。

【三九】不苦不樂痛更樂と相應する一根本とは、護根をいひ、九根の少入とは、意根・信等の五根・三無漏根の中、前六根の不苦不樂痛と俱生するもののみを言ふ。

諸の此の種の眼根を成就するものなれば、彼は此の種の身根を成就するや。答へて曰く、或は此の種の眼根を成就するも、此の種の身根は非らざるものあり。(一)云何が此の種の眼根を成就するものにして此の種の身根は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じて眼根を得せず、設ひ得するも便ち失して、天眼を得するもの、是を此の種の眼根を成就するも、此の種の身根は非らざるものと謂ふなり。(二)云何が此の種の身根を成就するも、此の種の眼根は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じて眼根を得せず、設ひ得するも便ち失して天眼を得せざるもの、是を此の種の身根を成就するも、此の種の眼根は非らざるものといふなり。(三)云何が此の種の眼根を成就し此の種の身根をも成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ眼根を得して失せざるもの、若しくは色界に生ずるもの、是を此の種の眼根を成就し、此の種の身根をも成就するものといふなり。(四)云何が此の種の眼根を成就するに非ず、此の種の身根をも非らざるものなりや。答へて曰く、無色界に生ずるもの、是を此の種の眼根を成就するにも非ず、此の種の身根をも非らざるものといふなり。

五二 耳根も亦、是の如し。

五三 若し此の種の鼻根を成就するものなれば、彼は此の種の身根をも成就するや。答へて曰く、是の如し。若し此の種の鼻根を成就するものなれば、彼は此の種の身根をも成就するなり。頗し此の種の身根を成就するも、此の種の鼻根は非らざるものありや。答へて曰く、有り。欲界に生じて鼻根を得せざるもの、設し得するも便ち失するものなり。

五三 舌根も亦、是の如し。

第五節 地獄乃至俱解脱者の成就する根の數に就きて

五五 地獄は幾くの根を成就するや。答へて曰く、若し極多のものなれば 十九を成就し、若し極少の

愛・恚・眼乃至貪・更樂には捨受と俱生すると、せざるものの中、こは俱生するもののみを攝するをいふ。

【五】眼更樂の攝する八更樂の少入とは、有對・增語・無明・非明非無明・愛・恚・樂・苦・痛・不苦不樂痛更樂には眼識と相應すると、せざるものの中、相應するもののみを攝するを言ふ。

【六】耳等は、各自の觸の全と、自識と相應する八觸とを攝すること。相應の如しとなり。

【七】意更樂の攝する三更樂と七更樂の少入とは、增語更樂(註一六)の如し。

【八】本節は、十六更樂の一は二十二根の幾くと相應するやを明す設なり。

【九】有對更樂と相應する一根本は若根、八根の少入とは、意・樂・護と信等の五根との中、五識と俱生するもののみと相應するをいふ。

【一〇】增語更樂の相應する五根本は、喜・愛・護と三無漏根とをいひ、八根の少入とは、前註二九に示せる八根の中、意識と俱生する品のみをいふ。

【一一】明更樂と相應する三根本とは、三無漏根をいふ、九根の少入とは、意根と樂・喜・護根と信等の五根との九根が有漏と無漏とに通ずる中、無漏

三六 不苦不樂痛更樂は一根と相應し、九根の少入と相應す。

三九 眼更樂は九根の少入と相應す。耳更樂・鼻更樂・舌更樂・身更樂も亦復、是の如し。

四〇 意更樂は五根と相應し八根の少入と相應するなり。

第三節 十六更樂を因と爲す根と十六更樂との相應關係

諸根にして有對更樂を因となすものなれば、有對更樂は此の根と相應するや。答へて曰く、是くの如し。諸根にして有對更樂と相應するものなれば、彼の根は有對更樂を因とす。

頗し根にして有對更樂を因とするも、此の根は有對更樂と相應するに非ざるものありや。答へて曰く、有り、諸根の有對更樂を因とするものにして諸餘の更樂と相應するものと、若しくは根にして有對更樂を因とする報生の無縁のものとなり。

乃至意更樂を因とするものにつきても亦復、是の如し。但し明と非明非無明との二更樂を除く。

諸根にして明更樂を因とするものなれば、彼の根は明更樂と相應するや。答へて曰く、是くの如し。諸根にして明更樂と相應するものなれば、彼の根は明更樂を因とするや。答へて曰く、是くの如し。

諸根にして非明非無明更樂を因とするものなれば、此の根は非明非無明更樂と相應するや。答へて曰く、是の如し。諸根にして非明非無明更樂と相應するものなれば、此の根は非明非無明更樂を因とするなり。

頗し根の非明非無明更樂を因とするものにして此の根は非明非無明更樂と相應するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。諸根にして非明非無明更樂を因とするところの報生の無縁なるものなり。

第四節 眼・耳・鼻・舌根と身根との成就關係

【九】 非明非無明更樂の攝する十一更樂の少入とは、註一八に示せる十一更樂中の唯不染の有漏のもののみを攝するを言ふ。

【一〇】 愛更樂の攝する十一更樂の少入とは、有對・増語・無明・樂痛・不苦不樂痛・眼乃至意更樂は貪と俱生すると、せざるとに通ずるに、こは貪と俱生するもののみを攝するを言ふ。

【一一】 恚更樂の攝する十一更樂の少入とは、有對・増語・無明・苦痛・不苦不樂痛・眼乃至意更樂には、瞋と俱生すると、せざるとあるに、こは瞋と俱生するもののみを攝するを言ふ。

【一二】 樂痛更樂の攝する十二更樂の少入とは、有對・増語・無明・無明・非明非無明・愛・眼乃至意更樂には樂痛と俱生すると、せざるとある中、こは俱生するもののみを攝するを言ふ。

【一三】 苦痛更樂の攝する十一更樂の少入とは、有對・増語・無明・非明非無明・恚・眼乃至意更樂には、恚と俱生すると、せざるとある中、俱生するもののみを攝するを言ふ。

【一四】 不苦不樂痛更樂の攝する十三更樂の少入とは、有對・増語・明・無明・非明非無明・

何をか不苦不樂痛更樂といふや、答へて曰く、不苦不樂痛と相應する更樂なり。

何をか眼更樂と謂ふや。答へて曰く、眼識身と相應する更樂なり。

耳・鼻・舌・身更樂も亦、是の如し。

何をか意更樂と謂ふや。答へて曰く、意識身と相應する更樂なり。

有對更樂は六更樂と七更樂の少入とを攝し、増語更樂は三更樂と七更樂の少入とを攝し、明更樂

は明更樂と四更樂の少入とを攝し、無明更樂は三更樂と十一更樂の少入とを攝し、非明非無明更樂

は非明非無明更樂と十一更樂の少入とを攝し、愛更樂は愛更樂と十一更樂の少入とを攝し、恚更樂

は恚更樂と十一更樂の少入とを攝し、樂痛更樂は樂痛更樂と十二更樂の少入とを攝し、苦痛更樂は

苦痛更樂と十一更樂の少入とを攝し、不苦不樂痛更樂は不苦不樂痛更樂と十二更樂の少入とを攝し、

眼更樂は眼更樂と八更樂の少入とを攝す。耳・鼻・舌・身更樂も亦復、是の如し。意更樂は三更樂

と七更樂の少入とを攝するなり。

第二節 十六更樂と根との相應論

有對更樂は一根と相應し、八根の少入と相應す。

増語更樂は五根と相應し、八根の少入と相應す。

明更樂は三根と相應し、九根の少入と相應す。

無明更樂は六根の少入と相應す。

非明非無明更樂は十一根の少入と相應す。

愛更樂は四根の少入と相應し、恚更樂は四根の少入と相應す。

樂痛更樂は二根と相應し、九根の少入と相應す。

苦痛更樂は二根と相應し、六根の少入と相應す。

【四】十六更樂の相互攝に就きて。

【五】有對・眼・耳・鼻・舌・身の更樂をいひ、七更樂の少入とは、無明・非明非無明・愛・恚・樂痛・苦痛・不苦・不樂痛の更樂が、何れも六識に通ずる中、五識と相應するもののみを攝するをいふ。

【六】増語更樂の攝する三更樂とは、増語・明・意更樂をいひ、七の少入とは、「註一五」に示せる七更樂中の意識に相應するもののみを攝するをいふ。

【七】明更樂の攝する四更樂の少入とは、増語・樂痛・不苦不樂痛・意の更樂は、有漏と無漏とに通ずる中、無漏のもののみを攝するをいふ。

(五)地獄は幾くの根を成就するや。畜生、餓鬼、斷善本、邪定、等定、不定、闍浮提、拘耶尼、弗于逮、隣單曰、四天王身、三十三天、炎魔、兜術、化自在、他化自在天、梵加夷天、光音、遍淨、果實天、中陰、無色、堅信、堅法、信解脫、見到、身證、慧解脫、俱解脫は、幾根を成就するや。

^八(六)眼根が斷智を得する時、幾くの根が斷智を得するや。乃至慧根が斷智を得する時、幾くの根が斷智を得するや。

^九(七)眼根が盡證を得する時、幾くの根が盡證を得するや。乃至慧根が盡證を得する時、幾くの根が盡證を得するや。

此の章の義を、願くば具さに演說せん。

第一節 十六更樂(觸)の自性並に相攝論

十六更樂あり。有對更樂と増語更樂と明更樂と無明更樂も非明非無明更樂と愛更樂と恚更樂と樂痛更樂と苦痛更樂と不苦不樂痛更樂と、眼更樂と耳更樂と鼻更樂と舌更樂と身更樂と意更樂となり。

云何が有對更樂なりや。答へて曰く、五識身と相應する更樂なり。

云何が増語更樂なりや。答へて曰く、意識身と相應する更樂なり。

云何が明更樂なりや。答へて曰く、無漏の更樂なり。

云何が無明更樂なりや。答へて曰く、染汚の更樂なり。

云何が非明非無明更樂なりや。答へて曰く、無染汚なる有漏の更樂なり。

云何が愛更樂なりや。答へて曰く、^{一〇}欲と相應する更樂なり。

云何が恚更樂なりや。答へて曰く、瞋恚と相應する更樂なり。

云何が樂痛更樂と謂ふや。答へて曰く、樂痛と相應する更樂なり。

云何が苦痛更樂といふや。答へて曰く、苦痛と相應する更樂なり。

【七】地獄乃至俱解脫の成就する根問題。

【八】眼根乃至慧根が斷智を得する時、幾根が斷智するやの問題。

【九】眼根乃至慧根が盡證する時、幾根が盡證するやの問題。

【一〇】本節は、十六更樂即ち觸の自性と、各自が幾くの觸を攝するやとを明す段なり。

尙、婆沙に據れば、本節論起の因由は、譬喩者が眼・色・眼識等の三事を離れて別に觸即ち更樂の自體得べからざるが故にこは實有に非ずと主張することを遮止して、觸體實有なることを顯示せんが爲めなりと言へり。

尙、詳細は婆沙百四十九卷、照曼部十四、頁二八三以下参照のこと。

【一一】十六更樂の各自性に就きて。

【一二】發智は貪と瞋ず。
【一三】發智は、樂痛・苦痛更樂等を順樂受、順苦受の如く攝せり。

第三章 十六更樂(觸)論並に二十二根の成就

遍知・減作證論

(阿毘曇、根健度、更樂跋渠第三) (發智論第十五卷、大正・二六、九九六頁)

本章の内容目次

- 二^一十六^二更樂あり。有對更樂(sapratigha sauisparśa)、増語更樂(adhiyaccansamsparśa)、明更樂(vidyāsparśa)、無明更樂(avidyāsparśa)、非明非無明更樂(naiyavidyānāvīdyāsparśa)、愛更樂(annuyāsanisparśa)、悲更樂(pratighāsaisparśa)、樂痛更樂(sukhavedanīyāsparśa)、苦痛更樂(duhkhavedanīyāsparśa)、不苦不樂痛更樂(aduhkhasukhavedanīyāsparśa)、眼更樂(cakṣusanisparśa)、耳更樂(śrotisanisparśa)、鼻更樂(śhrīṅgasanisparśa)、舌更樂(jihvāsanisparśa)、身更樂(kāyasauisparśa)、意更樂(mānāsaisparśa)となり。何等が有對更樂なりや、乃至意更樂とは何等となすや。
- 有對更樂は幾くの更樂を攝するや。乃至意更樂は幾くの更樂を攝するや。
- 二^二有對更樂は幾くの根と相應するや、乃至意更樂は幾くの根と相應するや。
- 二^三諸根にして有對更樂を因となすものなれば、有對更樂は此の根と相應するや。設し根にして有對更樂と相應するものなれば、彼の根は有對更樂を因となすや。乃至、諸根にして意更樂を因となすものにつきても亦復、是の如し。
- 二^四諸の此の種の眼根を成就するものなれば、彼は此の種の身根を成就するや。設し此の種の身根を成就するものなれば、彼は此の種の眼根を成就するや。
- 耳・鼻・舌根につきても亦復、是の如し。

【二】本章を更樂(即ち觸)跋渠と稱するは例に依りて、本章最初の論題に因めるものなり。

而も、更樂論の外に、更樂と根との關係、根の成就等の諸問題をも論究せり。參考の爲め發智の頌を掲ぐれば、

十六觸、相攝、根相應、成就、遍知、減作證、此章顯具說。

とあり。詳細は婆沙百四十九卷、毘曇部十四、頁二八三註を見よ。

【三】十六更樂の自性及び相攝問題。

【四】大正本には、更樂は、單に更とのみあるも、三本、宮本・聖本には皆更樂とあり、又、此の論の次後には更樂とあるを以て、以下皆、更は更樂と訂正す。

【五】十六更樂と根との相應問題。

【六】眼・耳・鼻・舌根と身根との成就關係問題。

道のが起るをいふ。
次に一が滅して起らずとは、
次下に夾註する如く、已知根
にして、一が起りて盡きずと
は、同じく夾註にあるが如く、
無知根なり。

【〇七】二根は悉く滅すとは、
次下の夾註の如く、命根と護
根とをいひ、六とは意根と信
等の五根とをいひ、滅し盡き
て起るとは有漏なるが滅し、
無間道のが盡き解脱道のが起

るをいふ。一が滅して起らず
云云は「註一〇六」の如し。
【〇八】次下に、「三禪、樂根」
との夾註あり。此は、第二禪
第三禪も亦、初禪に依るもの
に如しと言ひしも、但し、第

三禪に依るときは、已知根と
共に樂根が起滅すと説くべき
を意味するなり。

得するとき、禪が現在前せずんば、四根は悉く滅し、七が盡きて起りて、當に阿那含果を得すと云ふべし。若し禪が現在前すれば、四根は悉く滅するなり、六は盡きて起り、一は滅して起らず、一は起りて盡きずして、當に阿那含果を得すと云ふべきなり。若し斯陀含果を得せしものが、無漏道を以て阿那含果を取るとき、禪が現在前せずんば、四根は悉く滅し、八は盡きて起りて、當に阿那含果を得すと云ふべきなり。若し禪が現在前すれば、四根は悉く滅し七は盡きて起り、一は滅して起らず、一は起りて盡きずして、當に阿那含果を得すと云ふべきなり。

幾くの根が滅し盡き起りて、當に阿羅漢果を得すと云ふべきや。答へて曰く、若し未來の有覺有觀三昧に依りて阿羅漢果を取るときは、一根は悉く滅し、七は滅し盡きて起り、一は滅して起らず、一は起りて盡きずして當に阿羅漢果を得すと云ふべし。初禪の中間・第四禪・無色定に依るも亦復、是の如し。若し初禪に依りて阿羅漢果を取るとき、二根は悉く滅し六は滅し盡きて起り、一は滅して起らず、一は起りて盡きず、一は盡きて起りて、當に阿羅漢果を得すと云ふべきなり。第二禪・第三禪に依るものも亦復、是の如し。

有品第二十八竟り

(梵本三百二十八首盧、秦言四千二百七十二言)

愛・苦根の永斷するをいふ。
 【九七】七とは、意根と護根と信等の五根となり、餘は前註八九の如し。
 【九八】四根は「註九七」の如し、六は盡きて起るとは、意根と信等の五根、一が滅して起るとは護根にして、一は起りて盡きずとは喜根を言ふ。
 【九九】四根とは、「註九七」の

如し、八とは、意根と護根と信等の五根と已知根とをいふ。
 【一〇〇】四根は前の如し、七は盡きて起るとは、意根と信等の五根と已知根とをいひ、一が滅して起り、一が起りて不盡きずとは、「註九九」の如し。
 【一〇一】次下に、「五根・意・已知」の夾註あり。
 【一〇二】次下に、「護根」の夾註

あり。
 【一〇三】次下に、「或は樂・喜なり」との夾註あるも、こは正しからず、斯陀含果を得せしものが、阿那含を得する第九無間道の時は初禪を得せず、第九解脱道時即ち得果の刹那始めて、初禪を得し樂根を起すものなるが故に、第九無間道迄は未來(未至定)といふべ

が如く、已知根なり。
 【九〇】斯陀含果を得する時、滅・盡・起する根の數。
 【九一】七等は前「註八九」の如し。
 【九二】七は前「註八九」の如し。

【九三】八とは、次下に夾註するが如く、前の七に已知根を加ふるなり。因みに、大正本の夾註は「如已知」とあるも三本・宮本は「加已知」とあり。後者を正しとす。
 【九四】阿那含果を得する時、滅・盡・起する根の數。
 【九五】七とは、意根と樂・喜・護の三根中の一と、信等の五根とをいふ、餘は前「註八九」の如し。

【九六】禪が現在前せずとは、發智に靜慮に入らずとあり。
 【九七】四根は、悉く滅すととは、次下に夾註ある如く女・男・

く、從つて此の時間前初禪の樂根を起し滅する管なければなり。
 【九八】阿羅漢果を得する時、滅・盡・起する根の數。
 【九九】一が悉く滅すととは、命根をいひ、七が滅し盡き起るとは、意と護と信等の五と七根の中、有漏なるが永滅し、無間道のが盡きて、解脱

第二章 三界續生位初得の根乃至得果時に斷滅盡起する根等に関する論究

五二五

習・盡・道智と相應すといふべく、當に無覺無觀と言ふべく、當に樂根と相應すと言ふべく、或は空・無相・無願と相應すといふべく、或は無色界繫を緣じ、或は不繫を緣すといふべきなり。

若し第四禪に依りて阿羅漢果を取るときは、此の道は、或は法智と相應し、或は未知智、或は苦智・習・盡・道智と相應すといふべく、當に無覺無觀と言ふべく、當に護根と相應すといふべく、或は空・無相・無願と相應すといふべく、或は無色界繫を緣じ、或は不繫を緣すともいふべきなり。

若し無色定に依りて阿羅漢果を取るときは、此の道は當に未知智と相應すと言ふべく、或は苦智・習・盡・道智と相應すといふべく、當に無覺無觀と言ふべく、當に護根と相應すと言ふべく、或は空・無相・無願と相應すといふべく、或は無色界繫を緣じ、或は不繫を緣すともいふべきなり。

第十八節 四沙門果を得する時、滅・盡・起する根の數に就きて

幾くの根が滅し盡き起りて須陀洹果を得するや。答へて曰く、根は悉くは滅せず、七は盡きて起り、一は滅して起らず、一は起りて盡きずして、當に須陀洹果を得すと言ふべきなり。

幾くの根が滅し盡き起りて當に斯陀含果を得すと言ふべきや。答へて曰く、若し倍欲盡にして越次取證するものなれば、根は悉くは滅せず、七は盡きて起り、一は滅して起らず、一は起りて盡きずして、當に斯陀含果を得すと言ふべきなり。若し須陀洹果を得せしものが世俗道を以て斯陀含果

を取るときは、根は悉くは滅せず、七が盡きて起りて、當に斯陀含果を得すと言ふべし。若し須陀洹果を得せしものが、無漏道を以て斯陀含果を取るとき、根は悉くは滅せず、八が盡きて起りて、當に斯陀含果を得すと言ふべきなり。

幾くの根が滅し盡き起りて當に阿那含果を得すと言ふべきや。答へて曰く、若し欲愛盡にして越次取證するときは、根は悉くは滅せず、七は盡きて起り、一が滅して起らず、一は起りて盡きずして、當に阿那含果を得すと言ふべきなり。若し斯陀含果を得せしものが、世俗道を以て阿那含果を

三本と宮本とに據りて、かく補正せり。

【六六】 次下に、「眞入竟る」の割註あり。

【六七】 本節は、四沙門果の夫々を得する時に夫々滅し盡き起る所の根の數に就きて論述する段なり。
(婆沙百四十八卷、毘曇部十四、頁二七八參照)。

此の中、滅すとは悉滅し永斷するを言ひ、盡し起すとは刹那的に向道又は無間道のもの滅して、果道又は解脫道のものが生ずるの意なり。
【六八】 須陀洹果を得する時、滅・盡・起する根の數。

【六九】 七が盡きて起るとは、意根と護根と信等の五根との無間道に攝するものが盡きて解脫道のが起り次の一は滅して起らずとは次下の夾註あるが如く未知根をいひ、一が起りて盡きずとは次下に夾註あり

若し斯陀含果を得せしものが世俗道を以て阿那含果を取るとき、此の道は當に等智と相應すと言ふべく、當に有覺有觀と言ふべく、當に護根と相應すと言ふべく、當に欲界繫を緣すと言ふべし。若し斯陀含果を得せしものが無漏道を以て阿那含果を取るときは、此の道は當に法智と相應し、或は苦智・習・盡・道智とも相應すと言ふべく、當に有覺有觀と言ふべく、當に護根と相應すと言ふべく、或は空・無相・無願と相應すともいふべく、或は欲界繫を緣すとも或は不繫を緣すともいふべきなり。^{八三}

無礙道を以て阿羅漢果の證を取るものが、若し未來の有覺有觀三昧に依りて阿羅漢果を取るときは、此の道は或は法智と相應し、或は未知智、或は苦智、習・盡・道智と相應し、當に有覺有觀と言ふべく、當に護根と相攝すと言ふべく、或は空・無相・無願と相應すといふべく、或は無色界繫を緣すともいふべきなり。

若し初禪に依りて阿羅漢果を取るときは、此の道は或は法智と相應し、或は未知智、或は苦智、習・盡・道智と相應すといふべく、當に有覺有觀と言ふべく、當に喜根と相應し、或は空・無相・無願と相應すといふべく、或は無色界繫を緣じ或は不繫を緣すともいふべきなり。

若し禪中間に依りて阿羅漢果を取るとき、此の道は、或は法智と相應し、或は未知智、或は苦智、習・盡・道智と相應すといふべく、當に無覺有觀と言ふべく、當に護根と相應すと言ふべく、或は空・無相・無願と相應すといふべく、或は無色界繫を緣じ、或は不繫を緣すともいふべきなり。

若し第二禪に依りて阿羅漢果を取るときは、此の道は、或は法智と相應し、或は未知智、或は苦智、習・盡・道智と相應すといふべく、當に無覺無觀と言ふべく、當に喜根と相應すと言ふべく、或は空・無相・無願と相應すといふべく、或は無色界繫を緣じ、或は不繫を緣すとも言ふべし。

若し第三禪に依りて阿羅漢果を取るとき、此の道は或は法智と相應し、或は未知智、或は苦智、

覺有觀等の何れの地なりや、(3)五受根相應及び、(4)三三昧との關係はいかに、(5)何の界繫を所緣とするや等の五門分別をなす段なり。

因みに、本節に於ては問の句は凡て之を略せり。詳細は、婆沙百四十八卷、毘曇部十四、頁二七四以下を往見すべし。

【七】 須陀洹果を證する時の無礙道の五門分別。

【七〇】 次下、「道迹竟り」との割註あり。

【七一】 斯陀含果を證する時の無礙道の五門分別。

【七二】 次下、「住還竟り」との割註あり。

【七三】 阿那含果を證する時の無礙道の五門分別。

【七四】 發智には、此の次に、「不繫を緣すと言ふべし」の一句あるも八捷度は之を脱捨す。

【七五】 次下、「不還竟り」との割註あり。

【七六】 阿羅漢果を證する時の無礙道の五門分別。

以下の文章は、八捷度が、(1)未來の有覺有觀三昧、(2)初禪、(3)禪中間、(4)第二禪、(5)第三禪、(6)第四禪、(7)無色定の第一所依の定に分ちて別々に説述せるに對して、發智は凡て之を一括して略述し、婆沙は之を補解せり。

【七八】 本正本に無の字無きも、

^{七四}無疑意解脫は當に學根が得すと云ふべきや、無學根が得するや。答へて曰く、若し始めより無疑を得するものなれば、當に學根が得すと云ふべく無學根が得すとも云ふべきも、若し等意解脫阿羅漢が無疑を得するなれば、當に無學根が得すと云ふべきなり。

^{七五}一切結の盡は、當に學根が之を得すと云ふべきや、無學根が得するや。答へて曰く、一切結盡は、當に學根が之を得すとも無學根が得すとも云ふべきなり。

^{七六}第十七節 四沙門果を證する時の、無礙道の忍・智乃至所緣分別

^{七七}無礙道を以て須陀洹果の證を取るとき、此の道は當に忍と相應すと云ふべく、當に有覺有觀と言ふべく、當に護根と相應し、無願と相應すと云ふべく、當に不繫を緣ずと言ふべきなり。^{七八}

^{七九}無礙道を以て斯陀含果の證を取るものが、若し倍欲盡にて越次取證するときは、此の道は當に忍と相應すと云ふべく、當に有覺有觀と言ふべく、當に護根と相應し、無願と相應すと云ふべく、當に不繫を緣ずと言ふべきなり。

若し須陀洹果を得せしものが世俗道を以て斯陀含果を取るときは、此の道は當に等智と相應すと云ふべく、當に有覺有觀にして、護根と相應すと云ふべく、當に欲界繫を緣ずと言ふべきなり。

若し須陀洹果を得せしものが、無漏道を以て斯陀含果を取るときは、此の道は當に法智と相應すと云ふべく、或は苦智・習智・盡智・道智と相應すといふべく、當に有覺有觀と言ふべく、當に護根と

相應し、或は空・無相・無願と相應すと云ふべく、或は欲界繫を緣じ、或は不繫を緣ずと言ふべきなり。

^{八〇}無礙道を以て阿那含果の證を取るに、若し欲愛盡にて越次取證するときは、此の道は當に忍と相應すと云ふべく、或は有覺有觀なり、或は無覺有觀なり、或は無覺無觀なりといふべく、或は樂根・喜根・護根と相應すといふべく、或は無願と相應すといふべし。^{八一}

ち發智の時心解脫」と、無疑意解脫(即ち發智の不動心解脫)とを得する夫々の根は、學根が得するものなりや、無學根が得するや及び一切の結盡は學根が得するや無學根が得するやを明にせんとするものなり。

尙、婆沙に據れば、先づ契經の義理を明にせんが爲め、次に、等意解脫は有學にして有所作なりと不動心は無學にして無所作なりと言ふものあり、又、前者は有漏なるも、後者は無漏なりと言ふものあり、又、前者は有爲なるも、後者は無爲なりとするものありて、諸說紛々たるが故に、此等の諸異説を破して、兩者共に、無學にして所作已辦なり、兩者共に無漏にして、而も、有爲法なることを顯示せんが爲めの論述なりと言ふ。

(婆沙百四十八卷、毘曇部十四、頁二七一參照)

【七三】等意解脫を得する根の學・無學分別。

【七四】無疑意解脫を得する根の學・無學分別。

【七五】一切結盡を得する根の學・無學分別。

【七六】本節は、無礙道即ち無間道を以て、預流果等の四果を證する時、其の無礙道は、(1)何の忍又は智と相應し、(2)有

繫を縁じ、彼の根は未知智と相應するものなりや。答へて曰く、諸根にして苦を縁じ習を縁する未知智と相應するもの、是を無漏根にして色・無色界繫を縁じ、彼の根は未知智と相應するものといふなり。(四)云何んが無漏根にして色・無色界繫を縁するにも非ず、彼の根は未知智と相應するにも非ざるものなりや。答へて曰く、苦法忍と苦法智と彼等と相應する根と、習法忍と習法智と彼等と相應する根と、盡法忍と盡法智と盡未知忍と彼等と相應する根と、盡未知智と、道法忍と道法智と彼等と相應する根と、道未知忍と彼と相應する根と、道未知智と、是を無漏根にして彼の根は色・無色界繫を縁するにも非ず、彼の根は未知智と相應するにも非ざるものといふなり。

第六十五節 法智、未知智の自性乃至所縁の五門分別

法智は當に法智と言ふべきや。答へて曰く、法智は當に法智と言ふべく、或は彼は知他人心智とも、苦智・習智・盡智・道智ともいふべし。

亦、法智は或は有覺有觀とも、或は無覺有觀、或は無覺無觀ともいふべし。或は樂根と相應すとも、或は喜根・護根とも相應し或は空・無相・無願とも相應すといふべし。或は欲界繫を縁すとも、或は不繫を縁すともいふべきなり。

未知智は當に未知智と言ふべきや。答へて曰く、未知智は當に未知智と言ふべく、或は知他人心智とも、苦智・習智・盡智・道智ともいふべし。或は有覺有觀とも、或は無覺有觀とも、或は無覺無觀ともいふべし。或は樂根と相應すとも、或は喜根・護根と相應すともいふべく、或は空・無相・無願とも相應すといふべく、或は色・無色界繫を縁すとも、或は不繫を縁すともいふべきなり。

第六十六節 等意解脱・無疑意解脱及び一切結盡を得する根の學・無學分別

等意解脱は、當に學根が之を得すと言ふべきや。無學根が之を得するや。答へて曰く、等意解脱は當に學根が之を得すとも無學根が得すとも言ふべし。

【六七】本節は、法智と未知智とに就きて、其の自性と地と五受根相應と其の行相と所縁と五門に涉りて分別する段なり。
婆沙第四百十八卷、毘曇部十四、頁二六七以下參見。

【六八】法智の五門分別。

此の中、(1)法智は當に法と智言ふべく云々は、即ち法智の自性分別。(2)法智の有覺有觀等の分別は、(3)樂根相應等の分別は、(4)三昧と相應分別は、(5)三昧と相應分別は、(6)三界繫不繫を縁する等の分別は所縁分別なり。

【六九】次下に、「法智盡く」との夾註あり。

【七〇】未知智の五門分別。

【七一】次下に、「未知智盡く」との夾註あり。

【七二】本節は、等意解脱(即

する根と、苦法智と、習法忍と彼と相應する根と、習法智となり、是を無漏根にして欲界繫を縁するも、此の根は法智と相應するに非ざるものといふなり。(二)云何んが無漏根にして法智と相應するも、此の根は欲界繫を縁するに非ざるものなりや。答へて曰く、諸根にして盡を縁じ道を縁する法智と相應するもの、是を無漏根にして法智と相應するも、此の根は欲界繫を縁するに非ざるものといふなり。(三)云何んが無漏根にして欲界繫を縁じ、此の根が法智と相應するものなりや。答へて曰く、諸根にして苦を縁じ習を縁する法智と相應するもの、是を無漏根にして欲界繫を縁じ、彼の根は法智と相應するものといふなり。(四)云何んが無漏根にして欲界繫を縁するにも非ず、法智と相應するにも非ざるものなりや。答へて曰く、苦未知忍と苦未知智と、彼等と相應する根と、習未知忍と習未知智と、彼等と相應する根と、盡法智と、彼と相應する根と、盡未知忍と盡未知智と、彼等と相應する根と、道法忍と彼と相應する根と、道法智と、道未知忍と道未知智と、彼等と相應する根と、是を無漏根にして、此の根は欲界繫を縁するにも非ず、彼の根は法智と相應するにも非ざるものといふなり。

六六

諸の無漏根にして色・無色界繫を縁するもの、彼の根は未知智と相應するや。答へて曰く、或は無漏根にして色・無色界繫を縁するも、彼の根は未知智と相應するに非ざるものあり。(一)云何が無漏根にして色・無色界繫を縁するも、彼の根は未知智と相應するに非ざるものなりや。答へて曰く、苦未知忍と、彼と相應する根と、苦未知智と、習未知忍と彼と相應する根と、習未知智と、是を無漏根にして色・無色界繫を縁するも、彼の根は未知智と相應するに非ざるものといふなり。(二)云何んが無漏根にして未知智と相應するも、彼の根は色・無色界繫を縁するに非ざるものなりや。答へて曰く、諸根にして盡を縁じ道を縁する未知智と相應するもの、是を無漏根にして未知智と相應するも、彼の根は色・無色界繫を縁するに非ざるものといふなり。(三)云何んが無漏根にして色・無色界繫を縁するに非ざるものといふなり。(三)云何んが無漏根にして色・無色界

ること即ち苦智は苦諦と習諦とを縁じ、習智も亦、此の二諦を縁するも、而も、盡・道二諦智には、行相も所縁も共に無難なることを顯示して、此の問題に關する疑者の疑を決せんが爲めの起論なりとせり。(婆沙第四百十七卷、毘曇部十四、頁二六〇參照)。

【六四】本節は、三界繫及び不繫を縁する無漏根は、法智又は類智と相應するや、非ざるやを明にせんとする段なり。(詳細は、婆沙四百四十八卷、毘曇部十四、頁二六三以下參照のこと)。

【六五】欲界繫を縁する無漏根と法智との相應關係。以下四句分別をなせり。

【六六】色・無色界繫を縁する諸根と未知智との相應關係。これ亦、四句分別にて明せり。

六三 第十二節 四沙門果所攝の諸根は何界の結を減するやに就きて

諸根にして須陀洹果に攝するもの、此の根は何の繫の結を減すと爲んや。答へて曰く、處所無きなり。

諸根にして斯陀含・阿那含・阿羅漢果に攝するもの、此の根は何の繫の結を減すと爲んや。答へて曰く、處所無きなり。

六三 第十三節 四諦智と四諦に於ける無漏智との關係

諸の苦智は、是れ苦における無漏智なりや。答へて曰く、是の如し。諸の苦智は是れ苦における無漏智なり、頗し苦における無漏智にして苦智にあらざるものありや。答へて曰く、有り。諸の苦における習智なり。

諸の習智は、彼は是れ習における無漏智なりや。答へて曰く、是の如し。諸の習智、彼は是れ習における無漏智なり。頗し習における無漏智にして彼れ習智に非ざるものありや。答へて曰く、有り。諸の習における苦智なり。

諸の盡智、彼は是れ盡における無漏智なりや。答へて曰く、是の如し。設し盡における無漏智なれば、彼は是れ盡智なりや。答へて曰く、是の如し。

諸の道智、彼は是れ道における無漏智なりや。答へて曰く、是の如し。設し道における無漏智なれば彼は是れ道智なりや。答へて曰く、是の如し。

六四 第十四節 三界繫・不繫を緣する無漏根と法・類智との相應關係

無漏の諸根にして欲界繫を緣するもの、此の根は法智と相應するや。答へて曰く、或は無漏根にして欲界繫を緣するも、此の根は法智と相應するに非ざるものあり。(一)云何んが無漏根にして欲界繫を緣するも、此の根は法智と相應するに非ざるものなりや。答へて曰く、苦法忍と、彼と相應

因みに本節の説相は發智と相違せり。(婆沙百四十七卷、毘曇部十四、頁二五七參照)。

【五五】 四無垢人の成就する根が滅する結の界繫分別。

【五六】 四無垢人の成就する諸根の果の所屬に就きて。

【五七】 發智は、斯陀含阿那含に就きても、須陀洹と阿羅漢とに就きての如く、夫々詳說せり。

【五八】 本節は、前三果者即ち須陀洹・斯陀含・阿那含が斷結する時の所用の諸根は、夫々何の界繫の結を滅するや、及び其の根は何の果の所攝なりやを論及する段なり。因みに説相は發智のと異れり。(婆沙百四十七卷、毘曇部十四、頁二五九參照)。

【五九】 須陀洹等が斷結時所用の根の滅する結の界繫分別。

【六〇】 須陀洹等の斷結時所用の根の沙門果の所屬分別。

【六一】 本節は、四沙門果所攝の諸根は夫々何の界繫の結を滅し斷ずるやを明せるもの。

【六二】 本節は、苦・習・盡・道の四智は夫々苦・習・盡・道に於ける無漏智なりや否やを明へせるものにして、婆沙に従へば、これは苦智と集智とは行相に雜無きも所緣に雜あ

或は處所無きなり。

斯陀舍の成就する諸根、此の根は何の繋の結を滅すと爲んや。答へて曰く、或は欲界繋のなり、或は處所無きなり。

阿那舍の成就する諸根、此の根は何の繋の結を滅すと爲んや。答へて曰く、或は色界繋のなり、或は無色界繋のなり、或は處所無きなり。

阿羅漢の成就する諸根、此の根は何の繋の結を滅するや。答へて曰く、處所無きなり。
須陀洹の成就する諸根、此の根は何の果の攝なりと爲んや。答へて曰く、或は須陀洹果の攝なり、

或は處所無きなり。
斯陀舍・阿那舍……乃至阿羅漢の成就する諸根、此の根は何の果の攝なりと爲んや、答へて曰く、

阿羅漢果の攝、或は處所無きなり。

第十一節 須陀洹等の結斷時の根は、何繋の結を滅し何果の所攝なりやに就き

諸根の須陀洹が結を滅するもの、此の根は何の繋の結を滅すと爲んや。答へて曰く、欲界繋のなり。

諸根の斯陀舍が結を滅するもの、此の根は何の繋の結を滅すと爲んや。答へて曰く、欲界繋のなり。

諸根の阿那舍が結を滅するもの、此の根は何の繋の結を滅すと爲んや。答へて曰く、或は色・無色界繋のなり。

諸根の須陀洹が結を滅するもの、此の根は何の果の攝とせんや。答へて曰く、處所無きなり。
諸根の斯陀舍・阿那舍が結を滅するもの、此の根は何の果の攝とせんや。答へて曰く、處所無きなり。

捨する根は何果の攝なりやに就きて。

【五二】 本節は、四沙門果の夫々を得する夫々の根は、何界の結を滅し、且つそは何果の所攝なりやを明す段なり。
(婆沙第四百十七卷、毘曇部十四、頁二五六參照)。

因みに本節の説相は、發智と異れり。
【五三】 四沙門果を得する時得する根は何繋の結を滅するやに就きて。

【五四】 四沙門果を得する時得する根は何果の所攝なりやに就きて。

此の中、發智は、預流果の場合には預流果の攝なる外、或は無きなりの一句を置きて、其の時得する世俗の諸根の在ることを示せり。斯陀舍・阿那舍・阿羅漢果の場合も同様に於て、此の點發智と八健度と異れり。

【五四】 以下の文け、一一、斯陀舍・阿那舍果に就きても須陀洹果の場合の如く、夫々、斯陀舍果・阿那舍果の攝を論ずべきを八健度は略説し、智は詳説せり。

【五五】 本節は須陀洹・斯陀舍・阿那舍・阿羅漢の成就する諸根は、夫々何の界の繋を滅し、且つ何の果に攝するものなりやを明にするを其の課題とせ

のなり、或は無色界繫のなり、或は處所無きなり。

五〇 須陀洹果を取るとき棄つる諸根、此の根は何の果の攝なりと爲んや。答へて曰く、處所無きなり。

斯陀含果を取るとき棄つる諸根、此の根は何の果の攝なりと爲んや。答へて曰く、須陀洹果の攝、

或は處所無きなり。

阿那含果を取るとき棄つる諸根、此の根は何の果の攝なりや。答へて曰く、斯陀含果の攝、或は

處所無きなり。

阿羅漢果を取るとき棄つる諸根、此の根は何の果の攝なりと爲んや。答へて曰く、阿那含果の

攝、或は處所無きなり。

第九節 四沙門果を得する時得する根は、何界の結を滅し何果の所攝なりやに

就きて

五二 須陀洹果を取るとき獲する諸根、此の根は何の繫の結を滅すと爲んや。答へて曰く、處所無きな

り。

斯陀含・阿那含・阿羅漢果を取るとき獲する諸根、此の根は何の繫の結を滅すと爲んや。答へて曰

く、處所無きなり。

五三 須陀洹果を取るとき獲する諸根、此の根は何の果の攝なりと爲んや。答へて曰く、須陀洹果の攝

なり。

五四 斯陀含・阿那含……乃至阿羅漢果を取るとき獲する諸根、此の根は何の果の攝なりと爲んや。

答へて曰く、阿羅漢果の攝なり。

第十節 四沙門者が成就する根は何界の結を滅し、何果の所攝なりやに就きて

五六 須陀洹の成就する諸根、此の根は何の繫の結を滅すと爲んや。答へて曰く、或は欲界繫の結なり、

【四三】 本節は四沙門果を得する諸根は、得果の時も、尙、成就するや否やを明にせんとする段なり。

【四四】 以下の文は發智の相當文に比して甚だ簡略なり。

【四五】 本節は、四沙門果を得する諸根は、(1)何界の結を滅するや、(2)何果の所攝なりやの二事を究明する段なり。

(婆沙第四百七卷、毘曇部十四、頁二五〇参照)。

【四六】 因みに本節の内容は發智と全同なるも、其の説相は異れり。

【四七】 四沙門果を得する諸根は何果の所攝なりやに就きて。

【四八】 本節は、四沙門果の夫々を得する時に、棄(捨)する諸根は、何の繫の結を滅するや、且つ其の根は何の果に攝せらるゝやを明にせんとする段なり。

(婆沙四百四十七卷、毘曇部十四、頁二五三参照)。

【四九】 因みに本節の説相は發智と異れり。

【五〇】 四沙門果を得する時棄捨する根は何界の結を滅するやに就きて。

【五一】 四沙門果を得する時棄

のなり、或は無色界繫のなり、或は處所無きなり。

諸根にして斯陀含果・阿那含果を取るもの、此の根は、何の繫の結を滅すと爲んや。答へて曰く、

或は欲界繫のなり、或は色・無色界繫のなり、或は處所無きなり。

諸根にして阿羅漢果を取るもの、此の根は何の繫の結を滅するや。答へて曰く、或は無色界繫の

なり、或は處所無きなり。

諸根にして須陀洹果を取るもの、此の根は何の果の攝なりや。答へて曰く、須陀洹果の攝、或は攝

する處所無きなり。

諸根にして斯陀含果を取るもの、此の根は何の果の攝なりや。答へて曰く、斯陀含の攝、或は處所

無きなり。

諸根にして阿那含果を取るもの、此の根は何の果の攝なりや。答へて曰く、阿那含果の攝、或は

處所無きなり。

諸根にして阿羅漢果を取るもの、此の根は何の果の攝なりや。答へて曰く、阿羅漢果の攝、或は

處所無きなり。

第八節 四沙門果を得する時棄捨する諸根は、何繫の結を滅し何果の

所攝なりやに就きて

須陀洹果を取る時棄つる諸根、此の根は何の繫の結を滅すと爲んや。答へて曰く、或は欲界繫

のなり、或は色・無色界繫のなり、或は處所無きなり。

斯陀含果・阿那含果を取る時棄つる諸根、此の根は何の繫の結を滅すと爲んや。答へて曰く、或

は欲界繫のなり、或は色・無色界繫のなり、或は處所無きなり。

阿羅漢果を取る時棄つる諸根、此の根は何の繫の結を滅すと爲んや。答へて曰く、或は色界繫

【五】 十一とは是れ亦、次下の夾註の明す如く、前の無垢人の十に具知根を加へたるもの。

【六】 本節は二十二根中の幾くが四沙門果を得するやを明すもの。
(婆沙第四百七卷、毘曇部十四、頁二四七参照。)

【七】 九とは、次下の夾註の明示するが如く、意・護根と信等の五根と未知根と已知根となり。

【八】 八とは前註の如し。

【九】 七とは、意・護根と信等の五根となり、次の無漏もてするときは八とは、之に已知根を加ふるなり。

【一〇】 九とは、意根と、樂・喜・護根中の一根と、信等の五根と未知根と已知根となり。

【一一】 七と、次の八とは前註三九の説の如し。

【一二】 十一とは意根と樂・喜・護根と信等の五根と已知根と具知根となり。因みに次下の夾註には「數は皆上の如し」とあり。

尚、注意すべきは、此の次に發智は、「預流果」を通知する時、幾くの根を通知するや云云と首ふ、四沙門果を得する時、通知する根の數に就きての論究をなせるも、八健度は、全然此の一節を缺けり。

第四節 三界を曉了する根の數に就きて

幾く根が欲界を曉了するや。答へて曰く、凡夫人のは^{三三}七にして、無垢人のは八なり。

幾く根が色界を曉了するや。答へて曰く、凡夫人のは^{三四}七にして、無垢人のは十なり。

幾く根が無色界を曉了するや。答へて曰く^{三五}十一なり。

第五節 四沙門果を得する根の數に就きて

幾く根が須陀洹果を取るや。答へて曰く^{三七}九なり。

幾く根が斯陀含果を取るや。答へて曰く、若し倍欲盡にて越次取證するものなれば^{三八}九なり。若

し須陀洹果を得せしものが、世俗道を以て斯陀含果を取るときは^{三九}七にして、無漏もてするときは

八なり。

幾く根が阿那含果を取るや。答へて曰く、若し欲愛盡にて越次取證するものなれば^{四〇}九なり。若

し斯陀含果を得せしものが、世俗道を以て阿那含果を取るときは^{四一}七にして、無漏もてするときは

八なり。

幾く根が阿羅漢果を取るや。答へて曰く^{四二}十一なり。

第六節 四沙門果を得する諸根の得果時に於ける成就不成礙關係

諸根の須陀洹果を取るものが、已に須陀洹果を得するとき、當に此の根を成就すと言ふべきや、

成就せざるや。答へて曰く、無礙道のは成就せざるも、解脫道のは成就するなり。

諸根の、斯陀含・阿那含……阿羅漢果を取るものが已に阿羅漢を得るとき、當に此の根を成就すと

言ふべきや、成就せざるや。答へて曰く、無礙道のは成就せざるも、解脫道のは成就するなり。

第七節 四沙門果を得する諸根は、何界の結を滅し何果の所攝なりやに就きて

諸根にして須陀洹果を取るもの、此の根は何の繫の結を滅すと爲んや。答へて曰く、或は色界繫

【三七】發智は之れを「遍知す」と言ひて、八健度と符意は正反對なり。

【三八】本節は、三界を曉了し遍知する時、遍知され永斷する根の數は幾くなりやを明にする段なり。

因みに、本節と次節とは、發智と說順前後せり。婆沙第四百七卷、毘曇部十四、頁二四七參照。

【三九】四とは次下の夾註の如く女・男・苦・憂の四根なり。

【四〇】五とは鼻・耳・鼻・舌・身の五根にして、次下に「五情」との割註あり。

【四一】八とは意と命と護と信等の五根にして、次下の夾註に之を五根、意・命・護とせり。

【四二】本節は三界を夫々遍知する根の數を夫々の最後の解脫道位に於て數ふるを其の課題とす。詳細は婆沙第四百七卷毘曇部十四、頁二四六參照。

【四三】七とは、以れも次下の夾註に明す如く意根と護根と信等の五根にして、無垢人の八とは、前の七に、已知根を加へたるもの。

【四四】七は前註の如く、無垢の十は、次下の夾註の明すが如く、前の無垢人の八に樂と喜との二根を加へたるもの。

三 (十八) 幾く根が斷じ盡き起りて、當に須陀洹果を得すと云ふべきや。幾く根が斷じ盡き起りて、當に斯陀含・阿那含・阿羅漢果を得すと云ふべきや。

此の章の義、願くは具さに演說せん。

第三節 三界の續生位、初得の根の數に就きて

欲界有を受くるとき、幾くの根が最初に得する行の所生根なりや。答へて曰く、卵生と胎生と合會生とは二——身根と命根と——なり。三 化生は、或は六・七・八根なり。無形は六根、一形は七根、二形は八根なり。

色界有を受くるとき、幾くの根が最初に得する行所生の根なりや。答へて曰く、六なり。

無色界有を受くるとき、幾くの根が最初に得する行所生の根なりや。答へて曰く、一なり。

第二節 三界繋の思惟と三界の曉了(遍知)との關係

願し欲界繋が心の所念の法なるとき、欲界を曉了するや。答へて曰く、曉了せざるなり。色界・無色界を曉了するや。答へて曰く、曉了せざるなり。

願し色界繋が心の所念の法なるとき、色界を曉了するや。答へて曰く、曉了するなり。欲界を曉了するや。答へて曰く、曉了するなり。無色界を曉了するや。答へて曰く、曉了するなり。

願し無色界繋が心の所念の法なるとき、無色界を曉了するや。答へて曰く、曉了するなり。欲界を曉了するや。答へて曰く、曉了せざるなり。色界を曉了するや。答へて曰く、曉了するなり。

第三節 三界を遍知する時、曉了さるる根の數に就きて

欲界を曉了するとき、幾、根を曉了爲るや。答へて曰く、四なり。

色界を曉了するとき、幾く根を曉了爲るや。答へて曰く、五なり。

無色界を曉了するとき、幾く根を曉了爲るや。答へて曰く、八なり。

【三】 四沙門果を得する時、斷・盡・起する根の數の問題。

【三】 本節は、欲界有・色界有・無色界有を受くるとき、最初に得する行による根の數が幾くなりやを四生に就きて論明する段なり。

【三】 詳細は婆沙百四十七卷、毘曇部十四、頁二四一を見るべし。

【三】 化生を受くるときの中、六根とは、眼・耳・鼻・舌・身・命根にして、これ無形者なれば此の六根を受け、一形者は、前の六に、男女根の中の一つを加へて七根を得し、二形者は、男女二根を加へて八根を得すと云ふなり。

【四】 六とは、眼等の五根と命根となり。

【五】 一とは命根なり。

【六】 本節は、三界繋法の夫々を所緣として、心が所念(思惟)するとき、夫々欲・色・無色の三界を曉了(遍知)するや否やを論及する段なり。此の中、心が所念すとは婆沙に依るに、所緣とするの義にして、又、曉了すとは究竟して斷ずるの義なりと云ふ。

詳細は、婆沙百四十七卷、毘曇部十四、頁二四四を見よ。

此の根は未知智と相應するや。設し諸の無漏根にして未知智と相應するものなれば、彼の根は色・無色界繫を緣するや。

〔十五〕法智は當に法智と言ふべきや。未知智・知他人心智・等智・苦智・習智・盡智・道智と言ふべきや。當に有覺有觀と言ふべきや。無覺有觀なりや、無覺無觀なりや。當に樂根・喜根・護根・空・無相・無願と相應と言ふべきや。當に欲界繫を緣すと言ふべきや、當に色界・無色界繫を緣すと言ふべきや、當に不繫を緣すと言ふべきや。

未知智も亦復、是くの如し。

〔十六〕等意解脫は當に學根を得すと言ふべきや、無學根を得するや。無疑意解脫は當に學根を得すと言ふべきや、無學根を得するや。

一切の結の盡は、當に學根を得すと言ふべきや、無學根を得するや。

〔十七〕無疑道を以て須陀洹果の證を取るとき、此の道は當に法智と相應すと言ふべきや。未知智・知他人心智・等智・苦智・習智・盡智・道智と相應するや。當に有覺有觀と言ふべきや。無覺有觀なりや、無覺無觀なりや。當に樂根と相應すと言ふべきや。喜根・護根・空・無相・無願と相應するや。當に欲界繫を緣すと言ふべきや、當に色・無色界繫を緣すと言ふべきや、當に不繫を緣すと言ふべきや。

無礙道を以て斯陀含・阿那含・阿羅漢果の證を取るとき、此の道は當に法智と相應すと言ふべきや、未知智・知他人心智・等智・苦智・習智・盡智・道智と相應すと言ふべきや。當に有覺有觀と言ふべきや、無覺有觀なりや、無覺無觀なりや。當に樂根と相應すと言ふべきや、喜根・護根・空・無相・無願と相應するや。當に欲界繫を緣すと言ふべきや、當に色・無色界繫を緣すと言ふべきや、當に不繫を緣すと言ふべきや。

〔八〕法智未知智の五門分別門。

〔九〕等意解脫と無疑意解脫との得する根の學・無學分別門。

〔三〕四沙門果を證する時の無疑道の五門分別門。

の果の攝なりと爲んや。

(八) 須陀洹果を取るとき諸根の棄てらるるもの、彼の根は何の繋の結を滅すと爲んや。此の根は何の果の攝なりや。斯陀含・阿那含・阿羅漢果を取るとき棄つる諸根、彼の根は何の繋の結を滅すと爲んや。此の根は何の果の攝なりや。

(九) 須陀洹果を取るとき得する諸根、彼の根は何の繋の結を滅すと爲んや。此の根は何の果の攝なりと爲んや。斯陀含・阿那含・阿羅漢果を取るとき得する諸根、彼の根は何の繋の結を滅すと爲んや。此の根は何の果の攝なりと爲んや。

(十) 諸根にして須陀洹に成就さるるもの、彼の根は何の繋の結を滅すと爲んや。此の根は何の果の攝なりと爲んや。諸根にして斯陀含・阿那含・阿羅漢に成就さるるもの、彼の根は何の繋の結を滅すと爲んや。此の根は何の果の攝なりと爲んや。

(十一) 諸根の須陀洹が結を滅するもの、此の根は何の繋の結を滅すと爲んや。此の根は何の果の攝なりと爲んや。諸根の斯陀含・阿那含が結を滅するもの、此の根は何の繋の結を滅すと爲んや。此の根は何の果の攝なりと爲んや。

(十二) 諸根にして須陀洹果に攝するもの、此の根は何の繋の結を滅すと爲んや。諸根にして斯陀含・阿那含・阿羅漢果に攝するもの、此の根は何の繋の結を滅すと爲んや。

(十三) 諸の苦智は、彼の苦における無漏智なりや。設し苦における無漏智なれば、是は苦智なりや。諸の習智・盡智……乃至道智は是れ道における無漏智なりや。設し是れ道における無漏智なれば、是れ道智なりや。

(十四) 諸の無漏根にして欲界繫を縁するもの、此の根は法智と相應するや。設し無漏根にして法智と相應するものなれば、彼の根は欲界繫を縁するや。諸の無漏根にして色・無色界繫を縁するも

【八】 四沙門果を得する諸根の得果時に於ける成就不成就問題。

【九】 四沙門果を得する諸根は、何界の結を斷じ何果の所攝なりやの問題。

【一〇】 此は大正本に彼とあるも三本に據りて、此と改む。

【一一】 四沙門果を得する時、棄つる根は、何界の結を斷じ何果の所攝なりやの問題。

【一二】 四沙門果を得する時、得する根は何界の結を斷じ何果の所攝なりやの問題。

【一三】 四沙門者が成就する根は、何界の結を斷じ何果の所攝なりやの問題。

【一四】 須陀洹等三無垢人の結斷時に於ける根は何界の結を斷じ何果の所攝なりやの問題。

【一五】 四沙門果所攝の諸根は何界の結を斷するやの問題。

【一六】 四諦智と四諦に於ける無漏智との問題。

【一七】 三界繫・不繫を縁する無漏根と法・未知智との相應關係問題。

第二章 三界續生位初得の根乃至得果時に斷・滅盡

起する根等に關する論究

(阿毘曇根健度、有跋渠第二) (發智論卷第十五、大正二六、九九四頁)

二 本章の内容目次

三 (一) 欲界有を受くるとき、幾くの根が最初に得する行所生の根なりや。色・無色界の有を受くるとき、幾くの根が最初に得する行所生の根なりや。

四 (二) 頗し欲界繫が意の所念の法なるとき、欲界を曉了するや、色・無色界を曉了するや。頗し色界繫が意の所念の法なるとき、色界を曉了するや、欲界・無色界を曉了するや。頗し無色界繫が意の所念の法なるとき、無色界を曉了するや、欲界・色界を曉了するや。

五 (三) 欲界を曉了するとき、幾く根を曉了するや。色界・無色界を曉了するとき、幾く根を曉了するや。

六 (四) 幾く根が欲界を曉了するや、幾く根が色界・無色界を曉了するや。

七 (五) 幾く根が須陀洹果を取るや、幾く根が斯陀含・阿那含・阿羅漢果を取るや。

八 (六) 諸根の須陀洹果を取るものが、已に須陀洹果を得するとき、此の根は當に成就すと言ふべきや、當に成就せずと言ふべきや。諸根の斯陀含・阿那含・阿羅漢果を取るものが、已に阿羅漢果等を得するとき、此の根は當に成就すと言ふべきや、當に成就せずと言ふべきや。

九 (七) 諸根の須陀洹果を取るもの、彼の根は何の繫の結を滅すと爲んや。此の根は何の果の攝なりや。諸根の斯陀含・阿那含・阿羅漢果を取るもの、彼の根は何の繫の結を滅すと爲んや。此の根は何

【一】本章は、根健度の有跋渠と稱するも、それは、本章の劈頭に欲界有等の三界有受生時に最初に得する行所生の根の數を論ずるに因みて、章の名目とせしものにして、其の内容は、次の内容目次の示す如く、多様なり。

【二】本章の内容を發智の頌文を以て示せば次の如し。

「得一、通知三、

沙門果、九節、

四智、法類智、

幾相應、五門、

學無學根得、

無間、證二四果、

幾根斷滅起、

此章頗具說」

但し、此の詳細に關しては、婆沙第四百七卷、毘婆沙十四、頁二四一の註參照のこと。

【三】三界續生時初得の根の問題。

【四】三界繫法の心所念(思惟)と三界通知との關係問題。

【五】三界を曉了する時、曉了さる、根數の問題。

【六】三界を通知する根數の問題。

【七】四沙門果を得する根の數等の問題。

するを指す。

【〇四】一根本とは、意根をいふ。三根は前説の如し。

【〇五】本節は、善根と不善根と、隱沒無記根と不隱沒無記根との七法の持・入・陰即ち十八界・十二處・五蘊の三科分別をなす段なり。

【〇六】次に、婆沙第四百十六卷、毘曇部十四、頁二二六參照。

【〇七】八持とは七心持と法持二入とは、意入と法入、三陰とは受・行・識陰なり。

【〇八】次に、發智には、唯善根のみに攝するものの三科分別あるも八變度は之を缺く。

【〇九】八持と二入とは一註一〇六の如し、二陰とは、受陰と識陰とを謂ふ。

【一〇】次に發智には、唯不善根のみに攝するものの三科分別あり、ここには之を缺く。

【一一】六持とは、眼識・耳識・身識・意識持と意・法持とをいひ、二入とは意持・法入、二陰とは受陰と識陰となり。

【一二】次に、發智は、唯隱沒無記のみに攝するものの三

科分別をあげ、ここには缺く。

【一三】十三持とは、内の十二持(界)と法持とを言ひ、七入とは内の六入と法入とを言ひ、四陰とは想陰を除くを言ふ。

【一四】次に、發智は唯、不隱沒無記のみに攝するものの三科分別あり。

【一五】根法につきての十三持等は前註、一一二の如し。

【一六】發智は此の次に、唯、根法のみに攝するものの三科分別あり。

【一七】無根法につきての六持とは、外の六持をいひ、六入とは外の六入をいひ、三陰とは色・想・行陰をいふ。發智は次に、唯無根法に攝するもののみ三科分別あり。

【一八】根・無根法につきての、三科分別の次に、發智には、唯、根と無根とに攝する法のみ三科分別あり。

【一九】本節は、先づ總じて根法即ち二十二根法と、不根即ち二十二根に攝せざる法と、かかる根と非根との法の相緣

相生の關係を論究し、次に、二十二根の各々が相互に緣となりて相生するや否やを論究する段なり。

【二〇】次に、婆沙第四百十六卷、毘曇部十四、頁二二八以下參照のこと。

【二一】總じて根と不根と、不根との相緣相生論。

【二二】二十二根各自の相緣相生論。

【二三】次に、「生覺る」の割註あり。

【二四】本節は、眼根は眼根の與めに幾緣となり、乃至具知根の與めに幾緣となるや、乃至具知根は眼根乃至具知根の與めに幾緣となるやを詳論する段なり。

【二五】此の細論に就きては、婆沙第四百十六卷、毘曇部十四、頁二二三以下、參見のこと。

【二六】眼等の五根は二十二の與めに々々幾緣となるや。

【二七】次に發智は、女・男根に就きて説き、說順八轉度と異れり。

【二八】意根等は二十二根の與めに

めに々々幾緣となるや。發智は、意根等より前に命根に就きて論じ、八變度と說順異れり。

【二九】命根等の八とは、七色根と命根となり。

【三〇】女・男根は二十二根の與めに々々幾緣となるや。

【三一】命根は二十二根の與めに々々幾緣となるや。

【三二】苦・憂根は二十二根の與めに々々幾緣となるや。

【三三】此の中、苦根が苦根の與めに幾緣となるやに就きては、發智の文と異る。發智は、一苦根は苦根の與めに、因と次第(等無間)と増上とになるも、所緣となるに非ず」と言へり。

【三四】三無漏根は夫々、二十二根の夫々の與めに幾緣となるや。

【三五】已知根の與めに……は、發智は、餘の根の與めに……の中に包含せしむ。

【三六】無知根の與めに……は發智は、餘の根の與めにの中に包含せしむ。

【三七】意根等は二十二根の與

已知根は彼の已知根のために因と次第と縁と増上となり、無知根のために因と次第と縁と増上となり、命根等の八と及び苦根とのために一の増上となり、憂根と未知根とのために縁と増上となり、餘のために因と次第と縁と増上となる。

無知根は彼の無知根のために因と次第と縁と増上となり、命根等の八と及び苦根とのために一の増上となり、憂根と未知根と已知根とのために縁と増上となり、餘のために因と次第と縁と増上となるなり。

二十二根品第二十七竟り、(梵本三百一十四首盧、秦四千四十二言)

實有説者の意を遮止せんが爲めなりと謂ふ。

尙、本節は、相應因のみによりて作論するも、二因乃至六因にても論じ得るとは婆沙の注意する所なり。

詳細は、婆沙第四百十六卷、(毘婆沙部十四、頁二二〇以下参照)。

【八七】 十四とは、意と五受と信等の五と三無漏根となり。

【八八】 八とは七色根と命根となり。

【八九】 因不相應の上に、大正本には、「幾」の字あるも、聖本聖乙本に従つて、今は省略せり。

【九〇】 十四とは意と五受と信等の五と三無漏根となり。

【九一】 大正本には因不相應と

あるも、聖本聖乙本及び發智に非因相應とあり、今は後者に據りて、斯く讀ぜり。

【九二】 大正本には、不因相應とあるも、聖本、聖乙本に従ひて、今は因不相應と訂正せり。

【九三】 大正本には、因不相應、因非不相應とあるも、前に準じて、かく訂正せり。

【九四】 本節は、二十二根の幾くが、共緣相緣なりや不共緣相緣なりや、共緣相緣不共緣相緣なりや、非共緣相緣、非不共緣相緣なりやを論究する段なり。此の中、共緣相緣とは發智の緣有緣、不共緣相緣とは緣無緣に當る。

因みに、婆沙に據れば、所緣緣非實有の異執を遮止せんが

爲めの立論なりと言ふ。

詳細は、婆沙四百十六卷、毘婆沙部十四、頁二二二以下参照。

【九五】 十三とは意根と、樂・喜・憂・捨根と信等の五根と三無漏根とをいふ。

【九六】 一とは、苦根をいひ、十三の少分といふ十三とは前註の如し。

【九七】 八とは七色根と命根となり。

【九八】 本節は、非凡夫の成就する根と、凡夫根と、凡夫の成就する根と非凡夫の根との關係を論述する段なり。

詳しくは、婆沙第四百十六卷、毘婆沙部十四、頁二二四を見よ。

【九九】 「此の法」とは婆沙に據れば聖者即ち無垢人をさす。従つて此の法の彼の根とは三

根の分別がありて、順序前後せり。

【八四】 特に、命根の三界繫・不繫特別。

【八五】 特に、樂・喜根の三界繫・不繫特別。

【八六】 本節は、二十二根中の幾くが、因相應なりや、因不相應なりや、因相應因不相應なりや、非因相應非因不相應なりやを論究する段なり。

婆沙に據るに、本節論起の所以は、因緣法及び相應法の非

無漏根なり。

【九〇】 本節は五陰の一一が二十二根の幾くを攝するやを明す段なり。

【九一】 色陰の七根とは、七色根を言ふ。

【九二】 五根と三根の少入といふ中、五根とは樂等の五受根にして、三根とは三無漏根なり。この少分とは三無漏根なり。

一は意と信等の五根と樂・喜・捨の三受との九法を以て體となすに、此の中の、樂・喜・捨根のみを痛根に攝するが故に、三無漏根の少分と言へるなり。

【九三】 六根とは、命根と信等の五根をいふ。三根とは三無漏根をいふ。少分につきては九法中の信等の五根をのみ攝

耳・鼻・舌根も亦復、是くの如し。

身根は彼の身根のために因と増上となり、男根と女根とのためにも亦、因と増上となる。命根・

苦根・眼根・耳・鼻・舌根のために一の増上となり、餘のために縁と増上となる。^{二三}

意根は彼の意根のために因と次第と縁と増上となり、命根等の八のために因と増上となり、苦根

のために因と次第と増上となるも、縁となること無く、餘のために因と次第と縁と増上となる。

樂根・喜根・護根、信・精進・念・定・慧根も亦復是の如し。

女根は彼の女根のために因と増上となり、男根・命根・苦根、眼・耳・鼻・舌根のために一の増上とな

り、身根のために因と増上となり、餘のために縁と増上となる。

男根も亦、是の如し。

命根は彼の命根のために因と増上となり、苦根・眼根、耳・鼻・舌・身根、男根・女根のために一の増

上となり、餘のために縁と増上となる。

苦根は彼の苦根のために因と増上となるも、縁となること無く、次第となることも無し。命根等

の八のために因と増上となる。三無漏根のために縁と増上となり、樂根のために因と縁と増上とな

るも次第となること無し。餘のために因と次第と縁と増上となる。

憂根は彼の憂根のために因と次第と縁と増上となり、命根等の八のために因と増上となり、苦根

のために因と次第と増上となるも、縁となること無し。無漏根のために縁と増上となり、餘のため

に因と次第と縁と増上となる。

未知根は彼の未知根のために因と次第と縁と増上となり、已知根のためにも亦、因と次第と縁と

増上となり、未知根のために、因と縁と増上となるも次第となること無し。命根等の八と及び苦根

とのために一の増上となり、憂根のために縁と増上となり、餘のために因と次第と縁と増上となる。

【八〇】樂根等が九根の少入と相應すとは、意と信等の五根と三無漏根との少入となるをいひ、苦、憂根が六根の少入と相應すとは、意と信等の五根との少入をいふ。

【八一】本節は、二十二根の幾くが欲・色・無色界の三界繋なりや不繋なりやを論究する段なり。

婆沙に據るに、本論起の因由は、(一)有説が色界にも男女根ありとし、(二)有説は樂・苦根は欲界と四禪との五地にありとし、(三)有説は、喜根と憂根とは欲界より有頂に至る九地に在りとするに對して、男・女・苦・憂根は唯欲界にのみ在り、樂根は欲界と初禪と第三禪との三地に、喜根は欲界と初二禪との三地にのみ有ることとを顯示せんとするに在りと言ふ。

詳細は、婆沙百四十五卷、毘曇部十四、頁二一四以下参照のこと。

【八二】欲界繋とは、女・男・苦・憂根をいひ、三は不繋とは三無漏根をいひ、餘殘は當分別なり。

【八三】特に眼等の五根の三界繋・不繋分別。

【八四】特に意根と護根と信等の五根との三界繋・不繋分別。發智にては、意根等の前に命

二入、二陰を攝し、不隱沒無記根は十三持、七入、四陰を攝す。

二四 根法は十三持、七入、四陰を攝し、無根法は六持、六入、三陰を攝し、根・無根法は十八持、十

二入、五陰を攝す。

第十五節 根・不根の相縁・相生論

一八 頗し根を縁として根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

一七 頗し根を縁として不根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

一六 頗し根を縁として根・不根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

一五 頗し不根を縁として不根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

一四 頗し不根を縁として根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

一三 頗し不根を縁として根・不根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

一二 頗し根を縁として根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

一一 頗し根を縁として不根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

一〇 頗し根を縁として根・不根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

九 頗し眼根を縁として、乃至無知根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

八 頗し無知根を縁として無知根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

七 頗し無知根を縁として眼根乃至已知根を生ずるや。答へて曰く、生ずるなり。

第十六節 二十二根は相互悲縁となるやに就きて

三三 眼根は彼の眼根のために因と増上となり、耳・鼻・舌・身根・男根・女根・命根・苦根のために一の増上となり、餘のために縁と増上となる。

のもの無きは、禪中間には、捨根のみありて、樂・喜根は共に無きが故なり。

【七】本節は、二十二根の幾くが樂・苦・喜・憂・捨の五受根の一一と相應するやを明にする段なり。

婆沙に據るに、本節論起の緣由は、(1)譬喩者又は彼の大徳は、心心所は次第して生じ、並起することなしと言ひ、(2)有説は、法にして、彼の力に由りて起るものは、即ち、彼と相應すと説くも餘は然らず、即ち、心は心と心所とを生じ、

心所は心所を生ずるが故に、心心所は心と相應し、心所は心所と相應すると説くも、心所は心を生ぜざるが故に、心は心所と相應すと説くべからず」と主張し、(3)有説は、

諸法は自體とのみ相應すと謂ひ、(4)有説は、諸法の自體は自體と相應すと非ず、相應せざるにも非ず、(5)と主張するに對し、之等の諸異説を遮止して心心所は俱時に生じ、展轉相應するも、自體に望めて相應するといふに非ずして、唯他に望めてのみなることを顯示せんが爲めに、斯の論を作せりと言へり。

詳細は、婆沙百四十五、毘曇部十四、頁二一二以下参照のこと。

く、欲界繫の心の所念に諸の樂根の相應するもの、是を欲界繫の樂根といふ。云何んが色界繫のなりや。答へて曰く、色界繫の心の所念に諸の樂根の相應するもの、是を色界繫の樂根といふ。云何んが不繫のなりや。答へて曰く、無漏の心の所念に諸の樂根の相應するもの、是を不繫の樂根といふ。喜根も亦、是くの如し。

第十節 二十二根の因相應等の四句分別

此の二十二根に於て、幾くが因相應なりや。答へて曰く、十四なり。幾くが因不相應なりや。答へて曰く、八なり。幾くが因相應 因不相應なりや。答へて曰く、彼の十四の少は因相應にして、少は因不相應なり。幾くが 因相應にも非ず、因不相應にも非ざるや。答へて曰く、彼の十四の少は 因相應にも非ず、少は因の不相應にも非ざるなり。

第十一節 二十二根の共緣相緣・不共緣相緣等の四句分別

此の二十二根に於て、幾くが共緣相緣なりや。答へて曰く、十三の少入なり。幾くが不共緣相緣なりや。答へて曰く、一と十三の少入となり。幾くが共緣相緣なり不共緣相緣なりや。答へて曰く、十三なり。幾くが共緣相緣にもあらず、不共緣相緣にもあらずるや。答へて曰く、八なり。

第十二節 二十二根の非凡夫の成就するものと凡夫の成就するものとの關係

諸根が 此の法なれば、彼の根は凡夫のに非ず。諸根が凡夫のなれば、彼の根は此の法のに非ず。

第十三節 五陰は幾根を攝するやに就きて

色陰は七根を攝し、痛陰は 五根と三根の少入とを攝す。想陰は根を攝せず、行陰は 六根と三根の少入とを攝す。識陰は 一根と三根の少入とを攝す。

第十四節 善根・不善根等の七法は幾持・入・陰の攝なりやに就きて

善根は 八持、二入、三陰を攝す。不善根は 八持、二入、二陰を攝す。隱沒無記根は 六持、

此の中、八根とは、慧を除く信等の四根と樂・喜・捨根と命根となり。

【七五】本節は、二十二根の幾くが有覺有觀なりや、幾くが無覺有觀なりや、幾くが無覺無觀なりやを論明する段なり。尚、婆沙に據るに、本論提起の緣由は、譬喩者及び彼の大徳が尋伺は欲界より乃至有頂に迄有りとするを遮止して、尋伺は唯、欲界と初禪地とのみにあることを顯示せんが爲めなりと謂ふ。

尚、詳細は、婆沙第四百四十五卷、毘曇部十四、頁二〇九以下を往見すべし。

【七五】二は、有覺有觀なりとは、善根と憂根とをいひ、八は無覺無觀なりとは、七色根と命根とをいひ、餘は當分別なり。

【七六】特に、意根の有覺有觀等の三門分別。

以下の三門分別中、有覺有觀なるは、欲界と初禪とに在る法、無覺有觀とは禪中間即ち靜慮中間に在る法、無覺無觀とは第二禪已上の法を指すと心得れば理解し易し。

【七七】特に、塵根乃至具知根の有覺有觀等の三門分別。

【七八】特に、樂根・喜根の有覺有觀等の三門分別。

此の中、樂・喜根に無覺有觀

根と喜根と護根とは九根の少入と相應し、苦根と憂根とは六根の少入と相應するなり。

第九節 二十二根の三界繫及び不繫分別

此の二十二根に於て、幾くが欲界繫なりや、幾くが色界繫なりや、幾くが無色界繫なりや、幾くが不繫なりや。答へて曰く、四は欲界繫、三は不繫にして、十五は當分別なり。

眼根は或は欲界繫なり、或は色界繫なり。云何んが欲界繫なりや。答へて曰く、欲界繫の四大の所造なる諸の眼根、是を欲界繫といふ。云何んが色界繫なりや。答へて曰く、色界繫の四大の所造なる諸の眼根、是を色界繫といふ。

耳・鼻・舌・身根も亦復、是くの如し。

意根は、或は欲界繫なり、或は色界繫なり、或は無色界繫なり、或は不繫なり。云何んが欲界繫の意根なりや。答へて曰く、欲界繫の心の所念に諸の意根の相應するもの、是を欲界繫の意根といふ。云何んが色界繫の意根なりや。答へて曰く、色界繫の心の所念に諸の意根の相應するもの、是を色界繫の意根といふ。云何んが無色界繫の意根なりや。答へて曰く、無色界繫の心の所念に諸の意根の相應するもの、是を無色界繫の意根といふ。云何んが不繫の意根なりや。答へて曰く、無漏の心の所念に諸の意根の相應するもの、是を不繫の意根といふ。

護根と信・精進・念・定・慧根も亦復是くの如し。

命根は、或は欲界繫なり、或は色界繫なり、或は無色界繫なり。云何んが欲界繫の命根なりや。答へて曰く、欲界繫の壽、是れを欲界繫の命根といふ。云何んが色界繫の命根なりや。答へて曰く、色界繫の壽、是を色界繫の命根といふ。云何んが無色界繫の命根なりや。答へて曰く、無色界繫の壽、是を無色界繫の命根といふ。

樂根は、或は欲界繫なり、或は色界繫なり、或は不繫なり。云何んが欲界繫の樂根なりや。答へて曰く

して、「諸法の中、見なるは、眼根及び慧の少分とのみ」なることを顯示せんが爲なりと言ふ。

【四】二十二根の見・不見分別中、一は見なりとは、眼根をいひ、四は當分別なりとは、慧根と三無漏根とをいひ、餘の十七は不見なり。

【五】特に、慧の見・不見なるに就きて。

此の詳細は婆沙第四百五卷（毘婆沙十四、頁二〇八）及び婆沙第九十五卷（毘婆沙十一、頁二八八）を見よ。

【六】茲に善慧といふも、發智は單に慧根とのみせる點、相違せり。但し、此に依るに、八捷度に於ける見とは五邪見を含まざるものなるべし。婆沙第九十五卷には、見と言ふ中、眼根と學無學見と世俗の正見との所謂善慧の外に、特に五（邪）見をも附せり。

【七】婆沙に據るに、五識と相應する慧に、善と染汚と無覆無記との三種あり。發智が單に、五識と相應する慧根と言へるに對して、八捷度が特に善慧とせるは、染汚と無記との慧をこの不見中より除くものなるべし。

【八】特に、三無漏根の見・不見分別。

（毘婆沙十一、頁二八六參照）

といふ。云何んが不見なりや、答へて曰く、未知根に攝する八根、是を不見といふなり。

已知根も亦、是の如し。

無知根は或は見なり、或は不見なり。云何んが見なりや。答へて曰く、盡智・無生智に攝せずして無知根に攝する慧、是を見といふ。云何んが不見なりや。答へて曰く、無知根に攝する八根と、盡智と無生智と、是を不見といふ。

第七節 二十二根の有尋有伺等の三門分別

此の二十二根に於て、幾くが有覺有觀なりや、幾くが無覺有觀なりや、幾くが無覺無觀なりや。答へて曰く、二是有覺有觀、八は無覺無觀、十二は當分別なり。

意根は、或は有覺有觀なり、或は無覺有觀なり、或は無覺無觀なり。云何んが有覺有觀のなりや。答へて曰く、有覺有觀の心の所念に諸の意根の相應するもの、是を有覺有觀の意根といふ。云何んが無覺有觀のなりや。答へて曰く、無覺有觀の心の所念に諸の意根の相應するもの、是を無覺有觀の意根といふ。云何んが無覺無觀のなりや。答へて曰く、無覺無觀の心の所念に諸の意根の相應するもの、是を無覺無觀の意根といふ。

護根と、信・精進・念・定・慧根と、未知根と已知根と無知根とも亦復、是くの如し。

樂根は、或は有覺有觀なり、或は無覺無觀なり。云何んが有覺有觀の樂根なりや。答へて曰く、有覺有觀の心の所念に諸の樂根の相應するもの、是を有覺有觀の樂根といふ。云何んが無覺無觀のなりや。答へて曰く、無覺無觀の心の所念に樂根の相應するもの、是を無覺無觀の樂根といふ。

喜根も亦是くの如し。

第八節 二十二根の五受根相應分別

此の二十二根に於て、幾くが樂根と相應するや、乃至幾くが護根と相應するや。答へて曰く、樂

【五〇】 前註四四の如し。

【五一】 特に、喜根の六斷分別。

【五二】 見苦斷の十七使とは、欲界の疑と瞋とを除く、見苦斷の八使と、色界の見苦斷の九使となり。欲界の疑と瞋とを除くは、喜根は歡行相轉なるに、此等は感行相轉なればなり。色界の疑は感行相轉には非ず。

【五三】 見智・盡斷の各々十一使とは、欲界の疑と瞋とを除く、貪・無明・慢と邪見と見取見との五使と色界の六使となり。

【五四】 欲界の見道斷八使中より瞋と疑とを除く六使と、色界の七使となり。

【五五】 欲界四種の修惑中より瞋を除くものと、色界の三使となり。

【五六】 特に、憂根の六斷分別。以下見苦・習・盡・道斷の四使とは、欲界の邪見と瞋と疑と無明とをいふ。

【五七】 二使とは、欲界の瞋と無明との二なり。

【五八】 特に、信等の五根の六斷分別。

【五九】 本節は、二十二根の見か不見かを分別する段なり。婆沙に據るに、本論提起の所以は、「一切法は皆是れ見性なり……」と説く者の意を遮止

やといふに、十七使に諸の喜根の相應するもの、見習斷の喜根は十一使に諸の喜根の相應するもの、見盡斷のは十一使に諸の喜根の相應するもの、見道斷のは十三使に諸の喜根の相應するものなり。是を見諦斷の喜根といふなり。云何んが思惟斷の喜根なりや。答へて曰く、諸の學見迹の思惟斷のものなり。何者が思惟斷のなりやといふに、六使に諸の喜根の相應するものと、亦、無染の有漏の喜根と、是を思惟斷の喜根といふなり。云何んが不斷のなりや。答へて曰く、無漏の喜根、是を不斷の喜根といふなり。

憂根は、或は見苦斷なり、或は見習・盡・道・思惟斷なり。云何んが見苦斷の憂根なりや。答へて曰く、諸の憂根にして堅信・堅法の行の忍にて斷するものなり。何者が見苦斷のなりやといふに、四使に諸の憂根の相應するもの、見習斷の憂根は四使に、見盡斷のは四使に、見道斷のは四使に憂根の相應するものなり。是を見諦斷の憂根といふなり。云何んが思惟斷の憂根なりや。答へて曰く、諸の學見迹の思惟斷のものなり。何者が思惟斷の憂根なりやといふに、二使に、諸の憂根の相應するものと、亦、無染の憂根と、是を思惟斷の憂根といふなり。

第六節 二十二根の見不見分別

此の二十二根に於て、幾くが見なりや、幾くが不見なりや。答へて曰く、一は見、十七は不見、四は當分別なり。

慧根は或は見なり、或は不見なり。云何んが見なりや。答へて曰く、盡智・無生智に攝せざるものにして意識身と相應する。善慧は、是を見といふ。云何んが不見なりや。答へて曰く、五識身と相應する。善慧と、盡智・無生智と、是を不見といふなり。

未知根は或は見なり、或は不見なり。云何んが見なりや。答へて曰く、未知根に攝する慧、是を見

種斷分別にして、前節に續きて煩惱の漸斷なることを更に明にし、又、五部の煩惱と五部の對治とあることを顯示せんとする段なり。詳細は凡て、婆沙百四十五、毘曇部十四、頁二〇三以下參照のこと。

【五二】 二十二根の六斷分別。

此の中、力は思惟斷なりとは、七色根と命根と苦根とをいひ、三は不斷なりとは、三無漏根をいひ、十は當分別なりとは、意と四受と信等の五根とをいふ。

【五三】 特に、意根・塵根の六斷分別。

【五四】 二十八使とは、欲界見苦斷の十使と、色・無色界の各々九使となり。

【五五】 見習盡斷の夫々十九使とは、見習・盡斷の夫々の欲界の七使と色・無色界の各々六使となり。

【五六】 二十二使とは、見道斷の欲界の八使と色・無色界の各々の七使となり。

【五七】 十使とは、思惟斷の三界の貪・慢・無明使にて九使と、欲界の瞋使となり。

【五八】 特に、樂根の六斷分別。

【五九】 樂根の見苦斷のものは、補じて色界の見苦・盡・道斷の使なるを以て、以下の九使乃至七使はかくと理解すべ

五〇 此の二十二根に於て、幾くが見苦斷なりや、幾くが見習・盡・道・思惟斷なりや、幾くが不斷なりや。答へて曰く、九は思惟斷、三は不斷、十は當分別なり。

五二 意根は、或は見苦斷なり、或は見習・盡・道・思惟斷なり、或は不斷なり。云何んが見苦斷の意根なりや。答へて曰く、諸の意根にして堅信・堅法の行の忍にて斷するものなり。何者が見苦斷のなりやといふに、二十八使に諸の意根の相應するものなり。見習斷のは^{五三}十九使に諸の意根の相應するもの、

見盡斷のは十九使に諸の意根の相應するもの、見道斷のは^{五四}二十二使に諸の意根の相應するものなり。是を見諦斷の意根といふなり。云何んが思惟斷の意根なりや。答へて曰く、諸の意根にして學

見迹の思惟斷のものなり。何者か思惟斷のなりやといふに、^{五五}十使に諸の意根の相應するものと、亦、無染の有漏の意根と、是を思惟斷の意根といふなり。云何んが不斷のなりや。答へて曰く、無漏の意根、是を不斷の意根といふなり。

護根も亦、是くの如し。

五六 樂根は或は見苦斷なり、或は見習・盡・道・思惟斷なり、或は不斷なり。云何んが見苦斷のなりや。答へて曰く、諸の樂根にして堅信・堅法の行の忍にて斷するものなり。^{五七}何者が見苦斷のなりやといふに、

九使に諸の樂根の相應するもの、見智斷のは六使に樂根の相應するもの、見盡斷のは六使に樂根の相應するもの、見道斷のは七使に諸の樂根の相應するものなり。是を見諦斷の樂根といふ。云何んが思惟斷の樂根なりや。答へて曰く、諸の學見迹の思惟斷のものなり。何者か思惟斷のなりやといふに、^{五八}五使に諸の樂根の相應するものと、亦、無染の有漏の樂根と、是を思惟斷の樂根といふなり。

五九 云何んが不斷の樂根なりや。答へて曰く、無漏の樂根、是を不斷のといふなり。

喜根は、或は見苦斷なり、或は見習・盡・道・思惟斷なり、或は不斷なり。云何んが見苦斷の喜根なりや。答へて曰く、諸の喜根にして堅信・堅法の行の忍にて斷するものなり。何者が見苦斷のなり

【四三】 茲の二十八使とは、色界第三禪の見諦斷の二十八使を指す、なんとなれば、第三禪以下には見諦斷の樂根無く、第三禪以上には樂根無きが故に。而してこの二十八使に就きては前述の毘曇部七、頁三五二、の註三二に示す上二界の二十八使に外ならず。

【四四】 五使とは、欲界と色界初禪との修所斷の貪と無明即ち五識身と相應する貪と無明と、及び、色界第三禪の修所斷の意識と相應する慢と貪と無明との五使を指す。詳しくは毘曇部十四、頁二〇〇、註八三を見よ。

【四五】 五十二使とは、欲界の見惑の三十二使中より、瞋と疑との各各四即ち八使を除く二十四使と、色界の二十八使となり。詳細は、毘曇部十四、頁二〇〇を見よ。

【四六】 六使とは、欲界と色界との修惑の貪と慢と無明とをいふ。詳細は毘曇部十四の前掲を見よ。

【四七】 十六使とは、欲界の邪見と瞋、疑と無明との各各四使なり。

【四八】 二使とは、欲界の瞋と無明との二使なり。

【四九】 本節は、二十二根の見苦斷と見習斷と見盡斷と、見道斷と、思惟斷と不斷との六

樂根は或は見諦斷なり、或は思惟斷なり、或は不斷なり。云何んが見諦斷のなりや。答へて曰く、諸の樂根にして堅信・堅法の行の忍にて斷するものなり。何者が見諦斷のなりや。答へて曰く、二十八使に諸の樂根の相應するもの、是を見諦斷の樂根といふなり。云何が思惟斷のなりや。答へて曰く、諸の學見迹の思惟斷のものなり。何者か思惟の斷なりや。五使に諸の樂根の相應するものと、亦、無染の有漏の樂根と、是を思惟斷の樂根といふなり。云何んが不斷のなりや。答へて曰く、無漏の樂根、音を不斷の樂根といふなり。

喜根は、或は見諦斷なり、或は思惟斷、或は不斷なり。云何んが見諦斷のなりや。答へて曰く、諸の喜根にして堅信・堅法の行の忍にて斷するものなり。何者が見諦斷のなりやといふに、五十二使に諸の喜根の相應するもの、是を見諦斷の喜根といふ。云何んが思惟斷のなりや。答へて曰く、諸の學見迹の思惟斷のものなり。何者か思惟斷のなりやといふに、六使に諸の喜根の相應するものと、亦、無染の有漏の喜根と、是を思惟斷の喜根といふ。云何んが不斷のなりや。答へて曰く、無漏の喜根、是を不斷の喜根といふなり。

憂根は、或は見諦斷なり、或は思惟斷なり。云何んが見諦斷のなりや。答へて曰く、諸の憂根にして堅信・堅法の行の忍にて斷するものなり。何者が見諦斷のなりやといふに、十六使に諸の憂根の相應するもの、是を見諦斷の憂根といふ。云何んが思惟斷のなりや。答へて曰く、諸の學見迹の思惟斷のものなり。何者か思惟斷のなりやといふに、二使に諸の憂根の相應するものと、亦、無染の憂根と、是を思惟斷の憂根といふなり。

信・精進・念・定・慧根にして諸の有漏のものは彼れ思惟斷なるも、諸の無漏なるものは、彼れ不斷なり。

第九
第五節 二十二根の五部所斷・不斷分別

有ること無し云云と記き、(2) 又有るが「世俗道を用ひて煩惱を斷ずるは、凡夫人即ち異生のみにして無垢人即ち聖者は非らず」と言ひ、(3) 有るが「煩惱にして漸斷に非ず」と主張し、(4) 又有るは現觀のみにては頓にして漸斷に非ず」と述べるものあるに對して、作論者は、世俗道も能く煩惱を斷ずることを得ること及び聖者も亦、この世俗道を用ひて煩惱を斷ずることあるも、凡て漸斷にして頓斷に非ず、見結斷斷のと思惟斷の結とあるに從ひ、見諦道と思惟道との存することを明かにせんとするべし」と言へり。

【四〇】 娑沙第四百四卷、毘婆沙十四、頁一九八以下參照。

【四一】 二十二根の見諦・思惟・不斷分別。

此の中、九は思惟斷なりとは、七色根と命根と善根とをいひ、三は不斷なりとは、三無漏根をいひ、十は當分別なりとは餘殘をいふ。

【四二】 特に意根等の十根の當分別に就きて。

【四三】 見諦斷の八十八使及び次の思惟斷の十使に就きては「毘婆沙七、頁三五二」の「註二三」を見よ。

報、十は當分別なり。

意根は或は有報、或は無報なり。云何んが有報のなりや。答へて曰く、不善と善の有漏との意根なれば、是を有報の意根といふなり。云何んが無報のなりや。答へて曰く、無記と無漏との意根なれば、是を無報の意根といふなり。

樂根と喜根と誑根とも亦復、是の如し。

苦根は或は有報なり、或は無報なり。云何んが有報のなりや。答へて曰く、不善と善との苦根なれば、是を有報の苦根といふ。云何んが無報のなりや。答へて曰く、無記の苦根なれば、是を無報のといふなり。

信根と精進根と念根と定根と慧根との諸の有漏なるは彼れ有報にして、諸の無漏なるは是を無報といふなり。

三九
第四節 二十二根の三斷分別

四〇。此の二十二根に於て、幾くが見諦斷なりや、幾くが思惟斷なりや、幾くが無斷なりや。答へて曰く、九は思惟斷、三は不斷、十は當分別なり。

意根は、或は見諦斷なり、或は思惟斷、或は不斷なり。云何んが見諦斷のなりや。答へて曰く、諸の意根にして堅信・堅法の行の忍にて斷するものなり。何者が見諦斷のなりや。四二。八十八使に諸の意根の相應するもの、是を見諦斷の意根といふなり。云何んが思惟斷のなりや。答へて曰く、諸の學見迹の思惟斷のものなり。何者か思惟斷のなりや。十使に諸の意根の相應するものと、亦、無染の意根にして有漏のもの、是を思惟斷の意根といふなり。云何んが不斷のなりや。答へて曰く、無漏の意根、是を無斷の意根といふなり。

護根も亦、是の如し。

沙に據るに、(1)譬喩者が、思を離れて異熟因なく、受を離れて異熟果なし」と主張し、(2)飲光部が、「異熟未生の時は異熟因の體は有るも、異熟が生じ已れば彼の因便ち失す」と説き、(3)亦、外道が、「善惡の業には、果の異熟なるものなし」となすが如き諸の異説を破斥して、「異熟因と異熟果とは共に五蘊に通ずること其の因體は恒に有ること。善惡の業には必ず、異熟果の有ることを顯示せんが爲めなりと言ふ。

尚、詳細は、婆沙第四百四卷、毘曇部十四頁一九四以下を参照せよ。

三七。二十二根の有報・無報分別。

右の中、一は有報なりとは、憂根をいひ、十一は無報なりとは、七色根と命根と三無漏根とをいひ、十は當分別なりとは、意根と四受根と信等の五根とを謂ふなり。

三八。特に、意根等の當分別に就きて。

三九。本節は、二十二根の見諦・斷思惟斷不斷即ち、見所斷・修所斷・不斷の三斷分別を明す段なり。

因みに、婆沙に據るに、本論論起の所以は、(1)譬喩者等が世俗道は能く煩惱を斷ずるもの

にして無學家の成就するもの、是を無學の根にして無學家の彼の根なりといふなり。(四)云何んが無學の根にも非ず彼の根は無學家のにもあらざるものなりや。答へて曰く、學の根と、諸の非學非無學の根にして無學家の成就せざるものと、是を無學の根にも非ず彼の根は無學家のにも非ざるものといふなり。

三三 諸の根の非學非無學なるもの彼の根は非學非無學家の根なりや。答へて曰く、是の如し。諸根の非學非無學家のものは非學非無學の彼の根なり。頗し根の非學非無學なるものにして、彼の根が非學非無學家のに非ざるものありや。答へて曰く、有り。諸の非學非無學の根にして非學非無學家の成就せざるものなり。

三三 第二節 二十二根の善・不善・無記の三性分別

三五 此の二十二根に於て、幾くが善なりや、幾くが不善なりや、幾くが無記なりや。答へて曰く、八は善、八は無記、六は當分別なり。

意根は或は善、或は不善、或は無記なり。云何んが善の意根なりや。答へて曰く、善の心所念に、諸の意根の相應するもの、是を善といふ。云何んが不善のなりや。答へて曰く、不善の心所念に諸の意根の相應するもの、是を不善の意根といふ。云何が無記のなりや。答へて曰く、無記の心所念に諸の意根の相應するもの、是を無記の意根といふなり。

樂根と苦根と喜根と護根とも亦、復、是の如し。憂根は或は善なり、或は不善なり。云何んが善のなりや。答へて曰く、善の心所念に諸の憂根の憂應するもの、是を善の憂根といふ。云何んが不善のなりや。答へて曰く、不善の心所念に諸の憂根の相應するもの、是を不善の憂根といふなり。

三六 第三節 二十二根の有報・無報分別

三七 此の二十二根に於て、幾くが有報なりや、幾くが無報なりや。答へて曰く、一は有報、十一は無報

以下、四句分別を以て明せり。此の中、學家とは學者のごと。【三】特に、無學根と無學家の成就する根との關係。此の中、無學家とは無學者のことなり。以下、四句分別を以て、此の義を明にせり。

【三】非學非無學根と非學非無學の成就する根との關係。此の中、非學非無學家とは凡夫人、即ち異生の義なり。

【三】頗しは、大正本に彼とあるも、宮本・聖本に従ひて頗と改む。
※ 非は大正本に無きも宮本等におり、

【三】本節は、二十二根の三性分別をなす段なり。詳しくは、婆沙第四百十四卷【毘婆沙部十四、婁九一以下】

【三】二十二根の善・不善・無記の三性分別。此の中、八は善なりとは、信等の五根と三無漏根とを言ひ、八は無記なりとは、眼等の五と男・女との七色根と命根とをいひ、六は當分別なりとは、意根と五受根とをいふ。

【三】特に、意根と五受根との當分別に就きて。

【三】本節は、二十二根の有報・無報分別、即ち有異熟・無異熟分別をなす段なり。因みに、本論論起の緣由は婆

意根は或は學なり或は無學なり或は非學非無學なり。云何が學のなりや。答へて曰く、^{二五}學の意の所念に諸の意根の相應するもの、是を學の意根といふ。云何んが無學のなりや。答へて曰く、^{二六}無學の意の所念に諸の意根の相應するもの、是を無學の意根といふなり。云何んが非學非無學のなりや。答へて曰く、^{二七}有漏の意の所念に諸の意根の相應するもの、是を非學非無學の意根といふなり。

^{二八}樂根・喜根・護根・信根・精進・念・定・慧根も亦、復是の如し。

^{二九}諸の根の學なるもの、彼は學家の根なりや。答へて曰く、或は學根なるも、彼の根は學家のに非ざるものあり。(一)云何んが學の根なるも、彼の根は學家のに非ざるものなりや。答へて曰く、諸根の學なるものにして、學家の成就せざるもの、是を根の學なるも、彼の根は學家のに非ざるものといふなり。(二)云何んが學家の根なるも、彼の根は學のに非ざるものなりや。答へて曰く、諸の非學非無學の根にして、學家の成就するもの、是を學家の根なるも、彼の根は學のに非ざるものといふなり。(三)云何んが學の根にして、彼の根は學家のものなりや。答へて曰く、諸學の根にして學家の成就するもの、是を學の根にして彼の根は學家のなりといふなり。(四)云何んが學の根にも非ず、彼の根は學家のにも非ざるものなりや。答へて曰く、無學の根と、諸の非學非無學の根にして學家の成就せざるものと、是を學の根にも非ず、彼の根は學家のにも非ざるものといふなり。

^{三〇}諸の無學の根は、無學家の彼の根なりや。答へて曰く、或は無學の根なるも彼の根は無學家のに非ざるものあり。(一)云何んが無學の根なるも彼の根は無學家のに非ざるものなりや。答へて曰く、諸の無學の根なるも無學家の成就せざるもの、是を無學の根なるも彼の根は無學家のには非ざるものといふなり。(二)云何んが無學家の根なるも彼の根は無學のに非ざるものなりや。答へて曰く、諸の非學非無學の根にして無學家の成就するもの、是を無學家の根なるも彼の根は無學のに非ざるものといふなり。(三)云何んが無學の根にして無學家の彼の根なりや。答へて曰く、諸の無學の根

する根との關係とを明す段なり。

詳しくは、婆沙第百四十四卷(毘曇部十四、頁一八三以下を見よ)。

【三二】二十二根の名目。

【三三】二十二根の三學分別。

此の中二は學なりとは、未知根と已知根とを謂ひ、一は無學なりとは具知根を謂ひ、十は非學非無學なりとは、眼・耳・鼻・舌・身・男・女の七根と、命と苦と憂との三根とを謂ふ。

意と樂と喜と捨と信等の五根は學なるも、無學なるものも非學非無學なるものもあるが故に當分別といへるなり。

【三四】特に、意根の三學分別。

【三五】「學の意の所念に……」とは、「學の作意」に相應する意根の義にして、苦法智忍より乃至金剛喻定に至る間の學の作意と相應する意根をいふ。

【三六】無學の意の所念に相應する意根とは、盡智・無生智・無學の正見と相應する慧根なり。

【三七】之に善と染汚と無覆無記との三種あること、詳しくは婆沙百四十四卷、毘曇部十四、頁一八三四を見よ。

【三八】特に、樂・喜・捨根と信等の五根との三學分別。

【三九】學根と學家の成就する根との關係。

【四〇】學根と學家の成就する根との關係。

【四一】學根と學家の成就する根との關係。

【四二】學根と學家の成就する根との關係。

【四三】學根と學家の成就する根との關係。

【四四】學根と學家の成就する根との關係。

【四五】學根と學家の成就する根との關係。

【四六】學根と學家の成就する根との關係。

【四七】學根と學家の成就する根との關係。

【四八】學根と學家の成就する根との關係。

【四九】學根と學家の成就する根との關係。

【五〇】學根と學家の成就する根との關係。

【五一】學根と學家の成就する根との關係。

(2) 根法は幾く持、幾く入、幾く陰を攝するや、無根法は幾く持、幾く入、幾く陰を攝するや。根・無根法は幾く持、幾く入、幾く陰を攝するや。

一四 頗し根を縁として、根を生ずるや。頗し根を縁として不根を生ずるや。頗し根を縁として不根を生ずるや。頗し不根を縁として不根を生ずるや。頗し不根を縁として根を生ずるや。頗し根を縁として不根を生ずるや。頗し根不根を縁として根を生ずるや。頗し根不根を縁として不根を生ずるや。頗し根不根を縁として根不根を生ずるや。頗し眼根を縁として眼根を生ずるや。頗し無知根を縁として無知根を生ずるや。頗し無知根を縁として眼根を生ずるや。乃至已知根を生ずるや。

一五 眼根は彼のために幾く縁として縁となるや、眼根は乃至無知根のために幾く縁として縁となるや。無知根は彼の無知根のために幾く縁として縁となるや。無知根は眼根乃至已知根のために幾く縁として縁となるや。此の章の義、願くば具さに演説せん。

第二節 二十二根と其の學・無學・非學・非無學分別

二十二根あり、眼根(cakaurindriya)と耳根(śrotrendriya)と鼻根(ghrāṇendriya)と舌根(jihvendriya)と身根(kāyendriya)と意根(mānendriya)と男根(puruṣendriya)と女根(striṇḍriya)と命根(jīvīendriya)と樂根(sukhendriya)と苦根(duḥkhendriya)と喜根(saumanasyendriya)と憂根(duḥmanasendriya)と護根(ūpekṣendriya)と、信根(śaddhendriya)と精進(vīryendriya)と念根(smṛtindriya)と定根(samādhindriya)と慧根(prajñendriya)と、未知根(anājānātāmajñāsyāmīndriya)と、已知根(jñēndriya)と無知根(ajñātāvīndriya)となり。

此の二十二根に於いて、幾くが學なりや、幾くが無學なりや、幾くが非學非無學なりや。答へて曰く、二は學、一は無學、十は非學非無學、九は當分別なり。

【五】 根の字は、大正本に無きも、前に准じてこれを補へり。

【六】 二十二根の三性門。

【七】 二十二根の有報・無報門。

【八】 有異熟無異熟分別なり。

【九】 二十二根の三斷門。

【一〇】 二十二根の六斷門。

【一一】 即ち、見所斷の四と修所斷と不斷との六斷門分別なり。

【一二】 二十二根の見・不見門。

【一三】 二十二根の有覺有觀等の分別門。

【一四】 有尋有伺等の三門分別なり。

【一五】 二十二根の五根相應門。

【一六】 二十二根の三界繫門。

【一七】 二十二根の因相應等の分別門。

【一八】 諸根の共緣・不共緣門。

【一九】 即ち、緣有緣緣無緣等の四種分別門なり。

【二〇】 凡夫人所屬分別門。

【二一】 二十二根の五陰所攝分別門。

【二二】 諸根の持・入・陰所攝門。

【二三】 界・處・蘊の三科分別門なり。

【二四】 根を緣として根・不根等を生ずるや等の問題。

【二五】 諸根の相緣門。

【二六】 本節は、二十二根の各自の學・無學・非學非無學所攝分別と、其等の根と、學家・無學家・非學非無學家の成就

諸根の非學非無學なるもの、彼は非學非無學人の根なりや。設し根が非學非無學人のなれば、彼の根は非學非無學根なりや。

二 此の二十二根は幾くが善なりや、幾く不善なりや、幾くが無記なりや。

三 此の二十二根は、幾くが有報なりや、幾くが無報なりや。

四 幾くが見諦斷なりや、幾くが思惟斷なりや、幾くが不斷なりや。

五 幾くが見苦斷なりや、幾くが見習・見盡・道斷なりや、思惟斷なりや。幾くが不斷なりや。

六 幾くが見なりや、幾くが見なりや。

七 幾くが有覺有觀なりや、幾くが無覺有觀なりや、幾くが無覺無觀なりや。

八 幾くが樂根と相應するや、幾くが苦根と相應するや、幾くが喜根、幾くが憂根、幾くが護根と相應するや。

九 幾くが欲界繫なりや、幾くが色界繫なりや、幾くが無色界繫なりや、幾くが不繫なりや。

十 幾くが因相應なりや、幾くが因不相應なりや、幾くが因相應因不相應なりや、幾くが因相應にもあらず因不相應にも非ざるや。

十一 幾くが共緣相緣なりや、幾くが不共緣相緣なりや、幾くが共緣相緣不共緣相緣なりや。幾くが共緣相緣にもあらず、不共緣相緣にも非ざるや。

十二 諸根が此の法なれば、彼の根は凡夫人のなりや。設し根が凡夫人のなれば、彼の根は此の法なりや。

十三 色陰は幾く根を攝するや、痛・想・行・識陰は幾く根を攝するや。

十四 (1) 善根は幾く持、幾く入、幾く陰を攝するや、不善根は幾く持、幾く入、幾く陰を攝するや。

隱沒無記根は幾く持、幾く入、幾く陰を攝するや、不隱沒無記根は幾く持、幾く入、幾く陰を攝するや。

因緣、四、凡聖、攝、攝、七、攝、三、爲緣生、幾緣、此意願具說。

(發智第十四卷、以下、婆沙、第四百二十四卷以下毘曇部十四、頁一四七以下参照すべし)。

因みに、婆沙論に、據るに、根健度をなせる所以に就きて、諸種の理由を擧ぐ。其中、注目すべきは、(1)契經に諸根に就き説述すること、(2)特に外道が聖修根とは、眼が色を見ず、耳が聲を聞かざるが如く消極的なるを言ふといへるを破して、聖修根の眞義を明にし、又、勝論等の五根説乃至百二十根説の非實なるを知らしめて二十二根確定説を明さんとするにありと言ふ。

【三】二十二根の目と三學分別門。因みに、二十二根の名目の新舊の異なるものを對比せば次の如し。八健度 發智 護根 捨根 未知根 未知當知根 無知根 具知根 【四】彼の次に、大本には根の字あるも、今は三本・宮本に隨ひて、之を省略せり。

卷の第二十一(第六編 根犍度)

第六編 根 論

(根犍度第六)

根論總目次

- (一) 二十二根と
- (二) 有と
- (三) 更樂と、
- (四) 始心等と
- (五) 始發と
- (六) 魚と
- (七) 因縁となり。

第一章 二十二根及び其の諸門分別論

(阿毘曇根跋渠第一) (發知論卷第十四、大正、二六、九九一)

本章の内容目次(附根の名目)

二十二根あり、眼根と耳根と鼻根と舌根と身根と意根と男根と女根と命根と樂根と苦根と喜根と憂根と護根と信根と精進根と念根と定根と慧根と未知根と已知根と無知根となり。

(一) 此の二十二根の幾くが學なりや、幾くが無學なりや、幾くが非學非無學なりや。

諸根の學なるもの、彼の根は學人のなりや。設し學人の根なれば、彼は學根なりや。

諸根の無學なるもの、彼は無學人の根なりや。設し無學人の根なれば、彼は無學根なりや。

【一】 根蘊の總目次として、根蘊中に七種の跋渠(章)の存することを以下の頌文にて示せり。

今、發智の七種の納息と對比せば次の如し。根跋渠一、根納息。

二、有跋渠一、有納息。

三、更樂跋渠一、觸納息。

四、始心(等)跋渠一、心納息。

五、始發(心)跋渠一、心納息。

六、魚跋渠一、魚納息。

七、因縁跋渠一、因縁納息。

【二】 本章は、二十二根に就きて、其の名目等の一般論、諸門分別を明せり。十五節門に分ちて論究するものして其の内容は、次下の目次の示すが如くなるも、發智の頌文を參考の爲め掲げん。

根、學、善等三、異熟三六斷、見等、有等、受、相應、界聚。

を修せず、第二禪のみを修するなり。

【三】茲に「第一第二」の夾註あり。

【四】茲に「八想四觀四色」の夾註あり。

【五】無垢人が第二禪に依りて、神足通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【六】二とは、初二禪をいひ、就中初禪は唯無漏に限るなり。

【七】茲に「四觀」の夾註あり。

【八】凡夫人が第三禪に依りて、神足通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【九】茲に「除喜」の夾註あり。

【十】解脫等無きは、第三禪は樂に迷ふ所なるが故なり。

【十一】無垢人が第三禪に依りて、神足通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【十二】凡夫人が第四禪に依りて、神足通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【十三】一とは、淨解脫をいふ。

【十四】四とは、後四除入をいふ。

【十五】八とは、前八一切入をいふ。

【十六】無垢人が第四禪に依りて、神足通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【十七】茲に「淨解脫也」の夾註あり。

【十八】茲に「四色」の夾註あり。

【十九】茲に「神足竟」の夾註あり。

【二十】天耳・知他人心・自識宿命徹視證通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

因みに、天耳と徹視とは、共に色を、ずるが故に、身、意、止を、知他人心智通のときは心意止を、自識宿命通のときは法意止を現修するなり。他は神足通の如し。

【二十一】本節は、盡漏智證通、即ち漏盡智通を證する時、四意止乃至三三昧の十五門の功德の幾くを現修し未來修するやを明す段なり。

【二十二】有覺有觀三昧に依りて、阿羅漢果を得するものが盡漏通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【二十三】未來とは、未至定のこと。

【二十四】一意止とは、雜緣法念住或は不雜緣法念住なり。四類智及び滅道の二法智の隨一が現前するが故なり。

【二十五】無漏を修する時なれば有漏なる等を修せざるなり。

【二十六】三とは、前三無色なり。

【二十七】三とは、前三無色解脫なり。

【二十八】二智とは、滅智と法智との二か、道智と法智との二か、苦智と類智との二か乃至道智と類智との二かなり。

【二十九】六とは、世俗智と他心智を除く六智なり。

因みに、茲に「未對知四」の夾註あるも、こは前の二智の下にある方よからん。

【三十】初禪に依りて、阿羅漢果を得するものが盡漏通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【三十一】禪中間に依りて、阿羅漢果を得するものが盡漏通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【三十二】茲に「三過向一」の夾註あり。

【三十三】第二禪に依りて、阿羅漢果を得するものが、盡漏通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【三十四】第三・第四禪に依りて、阿羅漢果を得するものが盡漏通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【三十五】無色定に依りて、阿羅漢果を得するものが盡漏通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【三十六】茲に「除三戒志」の夾註あり。

【三十七】一は、大正本に無とあるも、聖乙本に従つて一と改む。

【三十八】茲に「一日誦一」の夾註あり。

に修し未來に六を修す、一三昧を現在前に修し未來に三を修するなり。

若し無色定に依りて阿羅漢を取るものが彼の道を修する時、一意志を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、六覺意を現在前に修し、未來に七を修す、

四道種を現在前に修し未來に八を修す、禪を現在前に修すること無きも未來に四を修す、等を現在前に修すること無く、未來にも無し、一無色定を現在前に修し未來に三を修す、一解脱を現在前に修し未來に三を修す、八除入を修すること無く十一切入も無し、二智を現在前に修し未來に六を修す、一三昧を現在前に修し未來に三を修するなり。

内造品第四竟(梵本三百五十三首盧、秦四千五百二十三言)

四大健度第五竟

【二九】阿那含果を、斯陀含果を得せるものが世俗道を以つて證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【三〇】茲に「等智」の夾註あるも、こは前の「一智」の下にあるべきものなり。

【三一】阿那含果を、斯陀含果を得せるものが無漏道を以つて證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【三二】本節は、(一)神足智證通、(二)天耳智證通、(三)知他人心智證通、(四)自識宿命智證通(宿住隨念智通)徹觀

智證通(死生智通)の所謂五通を證する時、四意止乃至三三昧の十五門の功德の幾くを現在修し幾くを未來に修するを明にする段なり。

【三三】凡夫人が初禪に依りて神足通を證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【三四】一意志とは、身念住をいふ、神足通は唯、色のみを緣するが故に彼の無間道も亦唯、色のみを緣すればなり。

【三五】茲の下に「身止」の夾註あり。

【三六】二とけ、初二解脱をい

る時の十五門の習修・得修に就きて。

【三九】大正本には、禪の上に初の字あるも、聖本・聖乙本によりて除けり。

【四〇】六覺意とは、禪中間には喜無ければなり、されど初禪をも未來に修するが故に、未來修に七あるなり。

【四一】七道種とは、正思惟を除くなり、禪中間には尋無きを以つて正思惟無ければなり。

【四二】阿那含果を、第二禪に依りて越次取證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【四三】有漏の功德は、唯、自地のみを修するを以つて初禪

若し禪中間に依りて阿羅漢を取るものが彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、六覺意を現在前に修し未來に七を修す。七道種を現在前に修し未來に八を修す、禪を現在前に修すること無きも未來に四を修す、等を現在前に修すること無く未來にも無し、無色定を現在前に修すること無きも未來に三を修す、解脱を現在前に修すること無きも未來に三を修す、八除入を修すること無く十一切入も無し、二智を現在前に修し未來に六を修す、一三昧を現在前に修し未來に三を修するなり。

若し第二禪に依りて阿羅漢を取る道、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、七覺意を現在前に修し未來に七を修す、七道種を現在前に修し未來に八を修す、一禪を現在前に修し未來に四を修す、等を現在前に修すること無く未來にも無し、無色定を現在前に修すること無きも未來に三を修す、解脱を現在前に修すること無きも未來に三を修す、八除入を修すること無く十一切入も無し。二智を現在前に修し未來に六を修す、一三昧を現在前に修し未來に三を修するなり。

若し第三・第四禪に依りて阿羅漢を取るに、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、六覺意を現在前に修し未來に七を修す、七道種を現在前に修し未來に八を修す、一禪を現在前に修し未來に四を修す、等を現在前に修すること無く未來にも無し、無色定を現在前に修すること無きも未來に三を修す、解脱を現在前に修すること無く未來に三を修す、八除入を修すること無く、十一切入も無く、二智を現在前

智を除くなり、知他人心智は無間道と相違するが故に修せざるなり。

【九七】 三昧を茲に現修せざるは三昧は有漏にも通ずれど今は無漏のみを取ればなり。

【一〇〇】 斯陀含果を須陀洹果を得せるものが無漏道を以て證する時の十五門の習・得修に就きて。

【一〇一】 一意止とは、雜緣法念住或は不雜緣法念住なり、四法智の隨一を其の時起すが故に。

【一〇二】 茲に「喜無し」の夾註あり。即ち六とは、喜を除く六覺意との意なり。

【一〇三】 二智の下に「法二對四」の夾註あり。即ち、苦智と法智、或は習智と法智、或は盡智と法智、或は道智と法智のこと。

【一〇四】 一三昧とは、三三昧中の隨一なり。

【一〇五】 茲に「頻來竟」の夾註あり。

【一〇六】 阿那含果を無礙道を以て欲愛盡のものが未至定に依りて證する時の十五門の習修・得修に就きて。

【一〇七】 阿那含果を初禪に依りて越次取證せるものが證する時の十五門の習修・得修。

【一〇八】 阿那含果を禪中間に依りて越次取證するものが證す

未來にも無し、解脫を現在前に修すること無きも未來に ^{一四七}一を修す、八除入を現在前に修すること無きも未來に ^{一四八}四を修す、十一切入を現在前に修すること無きも未來に八を修す。一智を現在前に修し未來に七を修す、三昧を現在前に修すること無きも未來に三を修するなり。 ^{一四九}

天耳と知他人心と自識宿命と徹視とにつきても亦、是くの如し。

第七節 盡漏智證道を證する時の十五門の習修・得修に就きて

無礙道を以つて盡漏智證道を證するに、 ^{一五二}若し ^{一五三}未來の有覺有觀三昧に依りて阿羅漢を取るものが彼の道を修する時は、 ^{一五四}一意止を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、六覺意を現在前に修し未來に七を修す、八道種を現在前に修し未來に八を修す。禪を現在前に修すること無きも、未來に四を修す、等を現在前に修すること無きも未來に ^{一五五}無し、無色定を現在前に修すること無きも未來に ^{一五六}三を修す、解脫を現在前に修すること無きも未來に ^{一五七}三を修す、八除入を修すること無く、十一切入も無し、 ^{一五八}二智を現在前に修し未來に ^{一五九}六を修す、 ^{一六〇}一三昧を現在前に修し未來に三を修するなり。

若し初禪に依りて阿羅漢を取るものが彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、一禪を現在前に修し未來に四を修す。等を現在前に修すること無く未來にも無し、無色定を現在前に修すること無きも未來に三を修す、解脫を現在前に修すること無きも未來に三を修す、八除入を修すること無く十一切入も無し。二智を現在前に修し未來に六を修す、一三昧を現在前に修し未來に三を修するなり。

【一四七】 智無きが故に、又、未だ無色定を得せざるが故なり。
【一四八】 解脫・除入・一切入も無きが故に、未だ根本地を得せざるが故なり。
【一四九】 智無きは、今は道類智忍の位なればなり。
【九五】 一三昧とは、無願三昧をいふ。道類智忍の時なればなり。
【九二】 茲に「道迹竟」の夾註あり。
【九三】 斯陀舍果を無礙道を以つて倍欲盡のものが證する時の十五門の習修・得修に就きて。
【九三】 倍欲盡とは、倍離欲染のことにして欲の前六品の惑を斷ぜるものなり。
【九四】 斯陀舍果を須陀洹果を得せるものが世俗道を以つて證する時の十五門の習修・得修に就きて。
【九五】 一意止とは、雜緣法念住をいふ。有漏の離染の無間道は必ず總じて緣するが故なり。
【九六】 覺意の現修なきは覺意は唯無漏なるが故なり。
【九七】 道種の現修無きは道種は有漏に通ずと雖も覺意の後に道種を説く時は必ず、無漏の道種を指すが故なり。
【九八】 一智とは、等智（世俗智）にして、七智とは知他人

一四一 若し第三禪に依りて無垢人が神足道を修すれば、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、覺意を現在前に修すること無きも未來に七を修す、道種を現在前に修すること無きも未來に八を修す、一禪を現在前に修し未來に三を修す、等を現在前に修すること無きも未來に三を修す、無色定を修すること無く、解脱も無く、八除入も無く、十一切入も無し、一智を現在前に修し未來に七を修す、三昧を現在前に修すること無きも未來に三を修するなり。

一四二 若し第四禪に依りて凡夫人が神足道を修すれば、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、覺意を現在前に修すること無く未來にも無し、道種を現在前に修すること無く未來にも無し、一禪を現在前に修し未來に一を修す。等を現在前に修すること無きも未來に三を修す、無色定を現在前に修すること無く未來にも無し、解脱を現在前に修すること無きも未來に一を修す、八除入を現在前に修すること無きも未來に四を修す、十一切入を現在前に修すること無きも未來に八を修す、一智を現在前に修し未來に一を修す、三昧を現在前に修すること無く未來にも無し。

一四三 若し第四禪に依りて無垢人が神足道を修すれば、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、覺意を現在前に修すること無きも未來に七を修す、道種を現在前に修すること無きも未來に八を修す、一禪を現在前に修し未來に四を修す、等を現在前に修すること無きも未來に三を修す、無色定を現在前に修すること無く

(九) 預流、一來も靜慮を得ずとの異執、
 (十) 忍は是れ智なりとの異執、
 (十一) 異生は惑を斷ぜるとの異執、
 (十二) 聖者は世俗道にて惑を斷ぜずとの異執、
 (十三) 上地にも亦正思惟ありとの異執、
 (十四) 無色にも亦無漏の戒支ありとの異執、
 (十五) 三三摩地は義は別なるも體は同じとの異執、
 右十五種の異執を破して已が正義を顯はさんが爲めなりと

(婆沙百四十卷、毘曇部十四、頁一〇九參照)。
 (八) 須陀洹果を無礙道を以て證する時の十五門の習修得修に就きて。
 (八) 一意止とは雜緣法念住をいふ。遺諦を見るが故なり。
 (九) 六覺意とは喜覺意を除くなり、未至定には喜無きを以つての故なり。
 (十) 禪を修すること無きは未だ欲染を離れずして見道に入れるが故なり。
 (十一) 等即ち無量の無きは無量は無漏に非ず又、見道中に無きが故なり。又、根本禪を未だ得せざるが爲めなり。
 (十二) 無色定無きは、無色定には見道有ること無く、(遍緣

く、未來にも無し、道種を現在前に修すること無く、未來にも無し、一禪を現在前に修し、未來に
 一を修す、等を現在前に修すること無きも未來に四を修す。無色定を現在前に修すること無く未
 來にも無し、解脱を現在前に修すること無きも、未來に 二を修す、八除入を現在前に修すること
 と無きも未來に四を修す、十一切入を現在前に修すること無く未來にも無し、一智を現在前に修し
 未來に一を修す、三昧を現在前に修すること無く未來にも無し。

若し第二禪に依りて無垢人が神足道を修すれば、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來に
 四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を
 現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す。覺意を現在前に修すること無
 きも未來に七を修す、道種を現在前に修すること無きも未來に八を修す、一禪を現在前に修し未來
 に 二を修す、等を現在前に修すること無きも未來に四を修す、無色定を現在前に修すること無く
 未來にも無し、解脱を現在前に修すること無きも未來に二を修す、八除入を現在前に修すること無
 きも未來に 四を修す、十一切入を現在前に修すること無く、未來にも無し、一智を現在前に修し
 未來に七を修す、三昧を現在前に修すること無きも未來に三を修するなり。

若し第三禪に依りて凡夫人が神足道を修すれば彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に
 四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を
 現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、覺意を現在前に修すること無
 く未來にも無し、道種を現在前に修すること無く未來にも無し、一禪を現在前に修し未來に一を修
 す、等を現在前に修すること無きも未來に 三を修す、無色定を修すること無く、解脱も無く、
 八除入も無く、十一切入も無し、一智を現在前に修し未來に一を修す、三昧を現在前に修すること
 無く未來にも無し。

痛と三十六痛、並びに六痛と
 百八痛の相攝論。
 十八痛と三十六痛及び
 十八痛と百八痛の相攝論。
 十八痛……亦是くの
 如しは大正本には「亦如是」
 とのみあるも三本・宮本によ
 りて斯く補へるなり。

三十六痛と百八痛との
 相攝論。

〔八〕本節は須、陀沮果・斯陀
 舍果・阿那舍果の前三果を證
 するために、無礙道(無間道)
 を修する際、四意止(念住)四
 意斷(正斷)四神足・五根・五力・
 七覺支(覺意)八道支(道種)四
 禪・四等(無慧)四無色、八解
 脫・八除入(勝處)十一切入(十
 遍處)八智・三三昧(等持)の十
 五門の幾くを現在修し未來修
 するやを明す段なり。

- 而して此の論究ある所以は、
- (一)未來修無しとの異執、
- (二)二心俱行すとの異執、
- (三)四意斷は一時に有るに非
 ずとの異執、
- (四)信等は唯無漏なりとの異
 執、
- (五)根と力との體異るとの異
 執、
- (六)智支は有漏にも通ずとの
 異執、
- (七)近分にも喜ありとの異執、
- (八)正語・正業・正命は俱時に
 非ずとの異執、

無礙道を以つて神足智證通を證するに若し初禪に依りて凡夫人が神足道を修すれば、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す。覺意を現在前に修すること無く未來に修することも無し、道種を現在前に修すること無く未來にも無し、一禪を現在前に修し、未來に一を修す、等を現在前に修すること無きも未來に四を修す、無色定を現在前に修すること無く、未來にも無し、解脫を現在前に修すること無きも未來に二を修す、八除入を現在前に修すること無きも未來に四を修す、十一切入を現在前に修すること無きも未來に二を修す、一智を現在前に修し未來に一を修す。三昧を現在前に修すること無く、未來にも無し、

若し初禪に依りて無垢人が神足道を修すれば、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す。覺意を現在前に修すること無きも未來に七を修す、道種を現在前に修すること無きも未來に八を修す、一禪を現在前に修し未來に一を修す、等を現在前に修すること無きも未來に四を修す、無色定を現在前に修すること無く未來にも無し、解脫を現在前に修すること無きも未來に二を修す。八除入を現在前に修すること無きも、未來に四を修す、十一切入を現在前に修すること無く、未來にも無し、一智を現在前に修し未來に一を修す。

若し第二禪に依りて凡夫人が神足道を修すれば彼の道の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し、未來に四を修す。五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、覺意を現在前に修すること

と相應し初禪の樂根は三識と相應して意識に非ざるが故なり。又、第三禪の有漏の樂根は意識に在りとも雖も、此は一分にして全有漏の樂根に非ざるが故に意近行と立てざるなり。

【七三】 有對と相應する護根とは發智論に「五識と相應する捨根」とあり。これが意近行に非ざるは、前の苦根の場合に准じて知れ。

【七四】 無漏の樂根が意近行に非ざるは、意近行は諸有を増益し攝受し任持するものなるに無漏は諸有を損滅し違害し破壞するが故なり。

【七五】 二痛と三十六痛及び三痛と百八痛の相攝論。

因みに三十六痛とは、六耽嗜依喜と六出離依憂と六耽嗜依憂と六出離依憂と六耽嗜依捨と六出離依捨をいふ。

【七六】 三痛と四痛、三痛と五痛、三痛と六痛、三痛と十八痛、三痛と三十六痛、三痛と百八痛の相攝論。

四痛と五痛、四痛と六痛、四痛と十八痛、四痛と三十六痛、四痛と百八痛の相攝論
五痛と六痛、五痛と十八痛、五痛と三十六痛、五痛と百八痛の相攝論

【七七】 六痛と十八痛、及び六因みに發智論は此の二一を廣説せり。

も無く、智も無く、此れ等を未來に修することも無し。一三昧を現在前に修し未來に一を修す。

二七 若し四禪に依りて越次取證するものなれば阿那含果を取るに彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來は四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、六覺意を現在前に修し未來に七を修す、七道種を現在前に修し未來に八を修す、一禪を現在前に修し未來に四を修す、等を現在前に修すること無く、無色定も無く、解脫も無く、八除入も無く、十一切入も無く、智も無く、此等を未來に修することも無し。一三昧を現在前に修し、未來に一を修す。

二八 若し斯陀含果を得せるものが世俗道を以つて阿那含果を取るに、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、覺意を現在前に修すること無く、等も無く、無色定も無く、解脫も無く、八除入も無く、十一切入も無し。一智を現在前に修し未來に七を修す。

二九 三昧を現在前に修すること無く、未來に三を修す。

三〇 若し斯陀含果を得せるものが無漏道を以つて阿那含果を取るに、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す。四意斷を現在前に修し、未來に四を修す。四神足を現在前に修し、未來に四を修す。五根を現在前に修し未來に五を修す。五力を現在前に修し、未來に五を修す。六覺意を現在前に修し未來に六を修す。八道種を現在前に修し未來に八を修す。禪を修すること無く、等も無く、無色定も無く、解脫も無く、八除入も無く、十一切入も無し。二智を現在前に修し未來に七を修す。一三昧を現在前に修し未來に三を修するなり。

第六節 神足等の五通を證する時の十五門の習修・得修に就きて

神足等の五通を證する時の十五門の習修・得修に就きて

痛、二痛と六痛の相續關係。因みに四痛とは三界繫及び不繫の受なり。而して、身受は欲・色界繫の受の少分とを攝し、心受は無色界繫及び不繫の受の全と欲・色界繫の少分とを攝するなり。

五痛とは苦・樂・喜・憂・捨の五根なり、而して身受は苦根の全と樂・捨の二根の少分を攝し、心受は喜・憂の二根の全と樂・捨の二根の少分とを攝するなり。

六痛とは眼觸所身受乃至意觸所身受をいふ、而して身受は前五受の全を攝し、心受は第六意觸所身受のみを攝するなり。

【七〇】 二痛と十八痛との相續論。因みに十八痛とは、六喜意近行と六憂意近行と六捨意近行とをいふ。

【七一】 苦根は(一)五識とのみ相應し、

(二)分別すること能はず、

(三)自相の境のみを取り、

(四)現在のみを緣じ、

(五)一往して境を取り、

(六)思度すること能はず、

而るに意近行はこれと相違するが故に、苦根は意近行に非ざるなり。

【七二】 有漏の樂根が意近行に非ざるは、欲界の樂根は五識

一を修す、等を現在前に修すること無く、無色定も無く、解脱も無く、八除入も無く、十一切入も無く、智も無く、これ等を未來に修することも無し。一三昧を現在前に修し未來に一を修す。

若し^{二〇}禪中間に依りて越次取證するものなれば阿那含果を取るに彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、六覺意を現在前に修し未來に七を修す、七道種を現在前に修し未來に八を修す、禪を現在前に修すること無くも未來に一を修す、等を現在前に修すること無く、無色定も無く、解脱も無く、八除入も無く、十一切入も無く、智も無く、此れ等を未來に修することも無し。一三昧を現在前に修し未來に一を修す。

若し^{二二}二禪に依りて越次取證するものなれば阿那含果を取るに、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、七覺意を現在前に修し未來に七を修す、七道種を現在前に修し未來に八を修す、一禪を現在前に修し未來に二を修す、等を現在前に修すること無く、無色定も無く、解脱も無く、八除入も無く、十一切入も無く、智も無く、此等を未來に修することも無し。一三昧を現在前に修し未來に一を修す。

若し^{二四}三禪に依りて越次取證するものなれば阿那含果を取るに彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、六覺意を現在前に修し未來に七を修す、七道種を現在前に修し未來に八を修す、一禪を現在前に修し未來に二を修す、等を現在前に修すること無く、無色定も無く、解脱も無く、八除入も無く、十一切入も無く、智も無く、此等を未來に修することも無し。一三昧を現在前に修し未來に一を修す。

若し^{二六}三禪に依りて越次取證するものなれば阿那含果を取るに彼の道を修する時、一意止を現在前に修し未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、六覺意を現在前に修し未來に七を修す、七道種を現在前に修し未來に八を修す、一禪を現在前に修し未來に二を修す、等を現在前に修すること無く、無色定も無く、解脱も無く、八除入も無く、十一切入も無く、智も無く、此等を未來に修することも無し。一三昧を現在前に修し未來に一を修す。

舌を攝す。

【六三】これが外處の攝なるは唯、心法法の所緣のみなるが故にして外に非ざるは他身に在るに非ず、非有情數にも非ざるが故なり。

此の中に自身の色等の五境を攝す。

【六四】此の中に他身等の色等の五境を攝す。

【六五】此の中に亦、自身の眼耳・鼻・舌を攝するなり。

【六六】本節は二痛(受)と三痛と四痛と五痛と六痛と十八痛と三十六痛と百八痛との相互相攝關係を明す段なり。

而して此の論究ある所以は、一受は即ち是れ心の分位差別なり」との異執、及び「唯、苦受のみありて別に樂・捨なし」との異執を破して受は心に非ず、苦・樂・捨の三あることを顯はさんが爲めなり」となり。

(婆沙百三十九、毘曇部十四、頁八七参照)。

【六七】二痛と三痛との相攝關係。

因みに二痛とは身受と心受とをいひ、三痛とは苦・樂・捨の三受をいふ。

【六八】身受は苦・樂・捨の三の少分を攝し、心受も三の少分を攝するを以つて斯くいへるなり。

【六九】二痛と四痛、二痛と五

に四を修す、五根を現在前に修し、未來に五を修す、五力を現在前に修し、未來に五を修す、覺意を現在前に修すること無くも未來に六を修す、道種を現在前に修すること無くも未來に八を修す、禪を修すること無く、等も無く、無色定も無く、解脫も無く、八除入も無く、十一切入も無し、一智を現在前に修し、未來に七を修す、三昧を現在前に修すること無くも未來に三を修す。

若し須陀洹果を得せるものが無漏道を以つて斯陀含果を取るに彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し、未來に四を修す、四神足を現在前に修し、未來に四を修す、五根を現在前に修し、未來に五を修す、五力を現在前に修し、未來に五を修す、六覺意を現在前に修し、未來に六を修す、八道種を現在前に修し、未來に八を修す、禪を修すること無く、等も無く、無色定も無く、解脫も無く、八除入も無く、十一切入も無し、二智を現在前に修し、未來に七を修す。一三昧を現在前に修し、未來に三を修す。

無礙道を以つて阿那含果の證を取るに若し欲愛盡にて越次取證するものなれば、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し、未來に四を修す、四神足を現在前に修し、未來に四を修す、五根を現在前に修し、未來に五を修す、五力を現在前に修し、未來に五を修す、六覺意を現在前に修し、未來に六を修す、八道種を現在前に修し、未來に八を修す、禪を修すること無く、等も無く、無色定も無く、解脫も無く、八除入も無く、十一切入も無し、智を現在前に修すること無く、未來にも無し、一三昧を現在前に修し、未來に一を修するなり。

若し初禪に依りて越次取證するものなれば阿那含果を取るに彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來には四を修す、四意斷を現在前に修し、未來に四を修す、四神足を現在前に修し、未來に四を修す。五根を現在前に修し、未來に五を修す、五力を現在前に修し、未來に五を修す。七覺意を現在前に修し、未來に七を修す、八道種を現在前に修し、未來に八を修す、一禪を現在前に修し、未來に

(婆娑百三十八卷、毘曇部十四頁八三參照)。

【五】 内法と内入所攝法との相攝關係。

【五七】 これが内なるは自身に在るが故にして、内入の攝に非ざるは、心心法の所依に非ざるが故なり。此の中に、自身の色等の五境をも攝するなり。

【五九】 これが内入の攝なるは、心心法の所依なるが故にして、内に非ざるは自身に非ざるが故なり。

而して此の中に他身の眼・耳・鼻・舌をも攝するなり。

【六〇】 これが内に非ざるは自身に在るに非ざるが故にして、内入の攝に非ざるは心心法の所依に非ざるが故なり。

此の中に亦、他身等の五境を攝するなり。

【六一】 外法と外入所攝法との相攝關係。

【六二】 これが外なるは他身に在るが故にして、外入の攝に非ざるは、唯、心心所の所縁のみに非ざるが故なり。

此の中に、他身の眼・耳・鼻・

十八痛と三十六痛とあり。十八痛が三十六痛を攝するや、三十六痛が十八痛を攝するや。答へて曰く、種に隨つて相攝す、乃至百八痛につきても亦、是くの如し。

三十六痛と百八痛とあり、三十六痛が百八痛を攝するや、百八痛は三十六痛を攝するや。答へて曰く、種に隨つて相攝するなり。

第五節 須陀洹等の三果を證する時の意止(念住)乃至三味の

十五門の習修・得修に就きて

無礙道を以つて須陀洹果の證に趣くに、彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し、未來に五を修す、六覺意を現在前に修し未來に六を修す、八道種を現在前に修し、未來に八を修す、禪を現在前に修すること無く、等も無く、無色定も無く、解脫も無く、八除入も無く、十一切入も無く、智も無く、これ等を未來に修すること無し。一三昧を現在前に修し未來に一を修するなり。

無礙道を以つて斯陀含果の證に趣くに、若し、倍欲盡にて越次取證するものが彼の道を修する時は一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し、未來に四を修す、五根を現在前に修し未來に五を修す、五力を現在前に修し未來に五を修す、六覺意を現在前に修し、未來に六を修す、八道種を現在前に修し、未來に八を修す、禪を現在前に修すること無く、等も無く、無色定も無く、解脫も無く、八除入も無く、十一切入も無く、智も無く、此れ等を未來に修することも無し、一三昧を現在前に修し未來に一を修するなり。

若し須陀洹果を得せるものが世俗道を以つて斯陀含果を取るに彼の道を修する時、一意止を現在前に修し、未來に四を修す、四意斷を現在前に修し未來に四を修す、四神足を現在前に修し、未來に四を修す、

の根及び四大と彼の心心法との相縁關係。
【四七】色界生のものが無漏の初禪乃至不用處定に入る時の根及び四大と彼の心心法との相縁關係。

【四八】本節は内と不内、受と不受、結と無結、見處と不見處の意義を明にするを其の課題とす。

【四九】内(āpāṇā)有執受)と不内(ānāpāṇā)無執受)との定義。

【五〇】「自己の數名なり」とは發智論に、「増語所顯にして自體に墮する法なり」とあり。

【五一】「自己に不らざる數名」とは發智論に「増語の所顯にして自體に墮するに非ざる法なり」とあり。

【五二】受(āpāṇā)順取)と不受(ānāpāṇā)非順取)との定義。

【五三】結(順結)と無結(非順結)との定義。

【五四】見處と不見處(非見處)との定義。

【五五】本節は、(一)内法と内入の所攝法との雜無雜論、(二)外法と外入所攝法との雜無雜論を明す段なり。

因みに此の論究ある所以は、「内外法は皆非實有なり」との異執を破せんが爲めなりとな

(二)云何んが法にして外入の攝なるも彼の法は外に非ざるものなりや。答へて曰く、内痛の内法において法觀に而も處すと説く所の如し。是れを法にして外入の攝なるも彼の法は外に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが法の外にして彼の法は外入の攝なるものなりや。答へて曰く、外痛の外法において法觀に而も處すと説く所の如し。是れを法の外にして彼の法は外入の攝なるものと謂ふなり。

(四)云何んが法にして外にも非ず彼の法は外入の攝にも非ざるものとなりや。答へて曰く、内身の内心において心觀に而も處すと説く所の如し。是れを法にして外にも非ず彼の法は外入の攝にも非ざるものと謂ふなり。

第六六 第四節 二痛・三痛・四痛・五痛・六痛・十八痛・三十六痛・百八痛の相互攝關係

二痛と三痛とあり。二痛が三痛を攝するや、三痛が二痛を攝するや。答へて曰く、種に隨つて攝す。

二痛と四痛と五痛と六痛とあり。二痛は乃至六痛を攝するや。六痛は二痛を攝するや。答へて曰く、種に隨つて攝す。

二痛と十八痛とあり。二痛は十八痛を攝するや、十八痛は二痛を攝するや。答へて曰く、二痛は十八痛を攝するも、十八痛は二痛を攝するに非ざるなり。何等を攝せざるや。答へて曰く、苦根と有漏の樂根と、有對と相應する、護根と、無漏の痛となり。

三十六痛と百八痛とにつきても亦、是くの如し。乃至。

六痛と十八痛とあり。六は十八を攝するや、十八は六を攝するや。答へて曰く、六は十八を攝するも、十八は六を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、苦根と、有漏の樂根と、有對と相應する護根と、無漏の痛となり。三十六痛と百八痛とにつきても亦、是くの如し。

【一】 茲には續得也の夾註あり。
【二】 茲に「由上有此」の夾註あり。
【三】 茲に「續也」の夾註あり。
【四】 有爲法と無爲法との相緣關係。
【五】 纏に纏せられて五道の有を續くるものの最初得の根及び四大と、彼の心心法との相緣關係。
【六】 因みに茲に有とは衆同分を續くる有情數の五蘊をいひ、續くとは中有と生有の時をいふなり。
【七】 例へば、結生する時の心心所が、彼の諸根と四大とを緣じて結生すとせば單に一の増上緣のみならず、所緣緣ともなることあり。而るにこれを茲に説かざるは何故なりやの理由に關しては婆娑百三十八卷(毘婆沙十四、頁七五)に詳説さる。
【八】 欲界生のものが有漏の初禪乃至有想無想定に入るときの根及び四大と彼の心心法との相緣關係。
【九】 欲界生のものが無漏の初禪乃至不用處定に入る時の根及び四大と彼の心心法との相緣關係。
【一〇】 色界生のものが有漏の初禪乃至有想無想定に入る時

見處とは何の義と爲すや。答へて曰く、有漏法の數名なり。不見處とは何の義と爲すや。答へて曰く、無漏法の數名なり。

第三節 内・外法と内・外入所攝法との相攝關係

諸法にして内なれば、彼の法は内入の攝なりや。答へて曰く、或は法にして内なるも彼の法は内入の攝に非ざるものあり。(一)云何んが法にして内なるも彼の法は内入の攝に非ざるものなりや。答へて曰く、内痛の内法において法觀に而も處すと説く所の如し。是れを法にして内なるも、彼の法は内入の攝に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが法にして内入の攝なるも、彼の法は内に非ざるものなりや。答へて曰く、外身の外心において心觀に而も處すと説く所の如し。是れを法にして内入の攝なるも彼の法は内に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが法の内にして彼の法は内入の攝なるものなりや。答へて曰く、内身の内心において心觀に而も處すと説く所の如し。是れを法の内にして彼の法は内入の攝なるものと謂ふなり。

(四)云何んが法にして内にも非ず彼の法は内入の攝にも非ざるものなりや。答へて曰く、外痛の外法において法觀に而も處すと説く所の如し。是れを法にして内にも非ず彼の法は内處の攝にも非ざるものと謂ふなり。

諸法にして外なるものなれば、彼の法は外入の攝なりや。答へて曰く、或は法にして外なるも彼の法は外入の攝に非ざるものあり。

(一)云何んが法にして外なるも彼の法は外入の攝に非ざるものなりや。答へて曰く、外身の外心において心觀に而も處すと説く所の如し。是れを法にして外なるも彼の法は外入の攝に非ざるものと謂ふなり。

互相緣關係

因みに共緣法とは有所緣法即ち心心法にして無緣法とは無所緣法即ち色と無爲と心不相應行となり。

【二三】 因とは茲にては能作因を除く五因をいふ。

【二四】 茲に因とは俱有と同類と通行と異熟との四因なり。

【二五】 次第とは心心法を二無心定に對する時等無間緣となすをいふ。

【二六】 茲に因とは四因をいふ。

【二七】 茲に因とは四因をいふ。

【二八】 色法と無色法との相互相緣關係。

【二九】 茲に因とは俱有と同類と異熟との三因をいふ。

【三〇】 大正本には増上の上縁の字あるも三本・宮本によりてこれを除けり。

【三一】 茲に因とは三因をいふ。

【三二】 茲に因とは俱有と同類と通行と異熟との四因をいふ。

【三三】 可見法と不可見法、有對法と無對法との相緣關係。

【三四】 有漏法と無漏法との相緣關係。

【三五】 緣とは、茲にては有漏法が苦・習忍智品の心心法のために所緣となるをいふ。

【三六】 因となること無きは有漏法は無漏法に對して種子法の如くあらざるが故なり。

【三七】 茲に「因此他」の夾註あり。

上となるなり。

四四 欲界に生じて有漏の初禪に入り有漏の乃至有想無想定に入るとき、彼の根を長益し四大を増益す、彼の根と彼の四大とは、彼の心・心法のために一の増上となり、彼の心・心法は彼の根と四大とのために一の増上となるなり。

四五 欲界に生じて無漏の初禪に入り、無漏の乃至不用定に入るとき、彼の根を長益し四大を増益す。彼の根と彼の四大とは、彼の心・心法のために一の増上となり、彼の心・心法は、彼の根と四大とのために一の増上となるなり。

四六 色界に生じて有漏の初禪に入り、有漏の乃至有想無想定に入るとき、彼の根を長益し四大を増益す。彼の根と彼の四大とは、彼の心・心法のために一の増上となり、彼の心・心法は彼の根と四大とのために一の増上となるなり。

四七 色界に生じて無漏の初禪に入り、無漏の乃至不用定に入るとき、彼の根を長益し四大を増益す。彼の根と彼の四大とは、彼の心・心法のために一の増上となり、彼の心・心法は彼の根と四大とのために一の増上となるなり。

第八節 内・不内、受・不受、結・無結、見處・不見處の定義

四九 内とは何の法と爲すや。答へて曰く、自己の數名なり。不内とは何の義に名くるや。答へて曰く、自己にあらざる數名なり。

五〇 受とは何の義と爲すや。答へて曰く、有漏法の數名なり。不受とは何の義と爲すや。答へて曰く、無漏法の數名なり。

五一 結とは何の義と爲すや。答へて曰く、有漏法の數名なり。無結とは何の義と爲すや。答へて曰く、無漏法の數名なり。

の有情數の四大に望めしとき

【三】 茲に因とは俱有と同類との二因をいふ。尙、此れは種々の場合あること婆沙百三十七卷(毘曇部十四、頁六四)を參見すべし。

【四】 茲に因とは一の同類因をいひ、過去の有情數の四大が内の四大のために同類因となるをいふなり。

【五】 因相應法と因不相應法との相關係。

因みに因相應法とは一切の心

心法をいひ、因不相應法とは

色と無爲と心不相應行とをいふ。

【六】 茲に因とは相應と俱有と同類と通行と異熟との五因をいふなり。

【七】 茲に因とは同類と通行と異熟との三因をいふ。

【八】 次第とは茲にては心心法(因相應法)の等無間に無想定・滅盡定(因不相應法)が現在前するをいふ。

【九】 緣となること無しとは、因不相應法は緣ずること能はざるを以つて因相應法を所緣となすこと無きなり。

【一〇】 茲に因とは俱有と同類と通行と異熟との四因をいふ。

【一一】 因とは四因にして前註の如し。

【一二】 共緣法と無緣法との相

めに 因と 次第と増上となるも 縁となること無し、因不相應法は彼の因不相應法のために 因

と増上となり、因不相應法は因相應法のために 因と縁と増上となるも次第となること無し。

共縁法は彼の共縁法のために 因と次第と縁と増上となり、共縁法は無縁法のために 因と 次

第と増上となるも縁となること無し。無縁法は彼の無縁法のために 因と増上となり、無縁法は共

縁法のために 因と縁と増上となるも次第となること無し。

色法は彼の色法のために 因と 増上となり 色法は無色法のために 因と縁と増上となるも次

第となること無し。無色法は彼の無色法のために 因と次第と縁と増上となり、無色法は色法のため

に 因と増上となるも、縁となること無く次第となることも無きなり。

可見と不可見、有對と無對につきても亦、是くの如し。

有漏法は彼の有漏法のために 因と次第と縁と増上となり、有漏法は無漏法のために 次第と 縁と

増上となるも 因となること無し。無漏法は彼の無漏法のために 因と 次第と 縁と 増上とな

り、無漏法は有漏法のために 次第と縁と増上となるも因となること無きなり。

有爲法は彼の有爲法のために 因と次第と縁と増上となり、有爲法は無爲法のために縁となること

無く、無爲法は彼の無爲法のために縁となること無し。無爲法は有爲法のために縁と増上となるな

り。

所可纏に自ら纏ぜられて地獄有を受くるとき、彼れは諸根と四大とを得ず。彼の根と彼の四大

とは、彼の心・心法のために一の増上となり、彼の心・心法は彼の根と四大とのために一の増上と

なる。

所可纏に自ら纏ぜられて畜生・餓鬼・天・人の有を受くるとき、彼れは諸根と四大とを得ず。彼の根

と四大とは彼の心・心法のために 一の増上となり、彼の心・心法は彼の根と四大とのために一の増

(八) 有爲法と無爲法との相縁關係。

(九) 十(三) 五道(趣)の有を續くもの、の最初得の根及び四大と心法との相縁關係。

(十四) 欲界生のもの、有漏の初禪乃至有想無想定を得する時の根及び四大と心法との相縁論。

(十五) 欲界生のものが無漏の初禪乃至不用處定を得する時の根及び四大と心法との相縁論。

(十六) 十七) 色界生のものの場合の相縁論。

の所謂十七對の相縁關係を明にする段なり。

【二】、内の四大と不内の四大との相縁關係。

因みに内の四大とは有執受の大種にして、現在の剎那に有情數に攝する心心所に執受せらるる大種をいひ、不内の四大とは無執受大種にして過去未來と及び現在の一分の有情數に攝するもの並びに三世一切の非情數に攝する大種をいふなり。

【一】 因とは茲にては俱有因をいふ。但し同一果のものも異類相望めて俱有因となるは一果に非ざるものは俱有因とならず。

【二】 因とは茲にては同類因をいひ、それは内の四大を未來

【三】諸法の内なるもの、彼の法は内入の攝なりや、設し法にして内入の攝なれば、彼の法は内なりや。

諸法の外なるもの、彼の法は外入の攝なりや。設し法にして外入の攝なれば、彼の法は外なりや。

【四】二痛と三痛とあり。二痛は三痛を攝するや。三痛は二痛を攝するや。二痛と四痛と五痛と六痛と十八痛と三十六痛と百八痛とあり。二痛は乃至百八痛を攝するや、百八痛は二痛を攝するや。乃至三十六痛と百八痛とあり。三十六痛は百八痛を攝するや、百八痛は三十六痛を攝するや。

【五—七】無礙道を以つて、須陀洹果の證に趣くために、彼の道を修する時、幾く意止を現在前に修し、幾くを未來に修するや。幾く意斷、幾く神足、幾く根・力・幾く覺意、幾く道種、幾く禪、幾く等、幾く無色定、幾く解脫、幾く除入、幾く一切入、幾く智、幾く三昧を現在前に修し、幾くを未來に修するや。

無礙道を以つて斯陀含・阿那含果と飛と耳と知他人心と自識宿命と徹視と漏盡との智證通とに趣くために彼の道を修する時、幾く意止を現在前に修し、幾くを未來に修するや。幾く意斷、幾く神足、幾く根・力、幾く覺意、幾く道種、幾く禪、幾く等、幾く無色定、幾く解脫、幾く除入、幾く一切入、幾く智、幾く三昧を現在前に修し、幾くを未來に修するや。

此の章の義を願はくは具さに演說せん。

第一節 内の四大と不内の四大乃至諸根・四大と心・心法の相緣論

【一】内の四大は、彼の内の四大のために、因と増上となり、内の四大は、不内の四大のために、因と増上となり、不内の四大は彼の不内の四大のために、因と増上となり、不内の四大は、内の四大のために、因と増上となるなり。

【二】因相應法は、彼の因相應法のために、因と次第と縁と増上となり、因相應法は、因不相應法のため

【四】内・外法と内・外入所攝法との相攝論。

【五】二痛乃至百八痛の相互相攝論。

【六】前三果及び六通を證する時の十五門の習修・得修問題。

【七】大正本には「彼修」であるも、聖本・聖乙本の「修彼」に従つて斯く讀めり。

【八】以は大正本に幾とあるも、三本・宮本・聖本等によりて以と改む。

【九】本節は、(一)内の四大と不内の四大との相緣關係。

(二)因相應法と因不相應法

(三)共緣法と無緣法

(四)色法と無色法

(五)可見法と不可見法

(六)有對法と無對法

(七)有漏法と無漏法

となるや。

所可纏に自ら纏ぜられて畜生・餓鬼・天人の有を受くるとき彼れは諸根と四大とを得ず。彼の根と四大とは彼の心・心法のために幾く縁として縁となるや。彼の心・心法は彼の諸根と四大とのために幾く縁として縁となるや。

欲界に生じて有漏の初禪に入り、有漏の乃至有想無想定に入るとき、彼の根を長益し四大を増益す。彼の根と彼の四大とは彼の心・心法のために幾く縁として縁となるや。彼の心・心法は彼の根と彼の四大とのために幾く縁として縁となるや。

欲界に生じて無漏の初禪に入り、無漏の乃至不用定に入るとき彼の諸根と四大とを増益す。彼の根と四大とは彼の心・心法のために幾く縁として縁となるや。彼の心・心法は彼の根と四大とのために幾く縁として縁となるや。

色界に生じて有漏の初禪に入り、有漏の乃至有想無想定に入るとき、彼の根と四大とを増益す。彼の根と四大とは彼の心・心法のために幾く縁として縁となるや。彼の心・心法は彼の根と四大とのために幾く縁として縁となるや。

色界に生じて無漏の初禪に入り無漏の乃至不用定に入るとき、彼の根と四大とを増益す。彼の根と四大とは、彼の心・心法のために幾く縁として縁となるや。彼の心・心法は彼の根と四大とのために幾く縁として縁となるや。

二内とは何の義に名くるや。不内とは何の義に名くるや。

受とは何の義と爲すや。不受とは何の義と爲すや。

結とは何の義と爲すや。不結とは何の義と爲すや。

見處とは何の義と爲すや。不見處とは何の義と爲すや。

【三】内・不内、受・不受、結・不結、見處・不見處の定義の問題。

第四章 内の四大等の相緣論乃至十五種淨品の

習修・得修に關する論究

(阿毘曇四大捷度中、内造跋渠第四) (發智論卷第十四、大正・二六、九八八頁)

(一)内の四大は彼の内の四大のために幾く縁として縁となるや。内の四大は不内の四大のために、不内の四大は彼の不内の四大のために、不内の四大は内の四大のために、幾く縁として縁となるや。

因相應法は彼の因相應法のために幾く縁として縁となるや。因相應法は因不相應法のために、因不相應法は彼の因不相應法のために、因不相應法は、因相應法のために幾く縁として縁となるや。

共緣法は彼の共緣法のために、幾く縁として縁となるや。共緣法は無緣法のために、無緣法は彼の共緣法のために、無緣法は共緣法のために幾く縁として縁となるや。

色法は彼の色法のために幾く縁として縁となるや。色法は無色法のために、無色法は彼の無色法のために、無色法は色法のために幾く縁として縁となるや。可見と不可見、有對と無對につきても亦是くの如し。

有漏法は彼の有漏法のために幾く縁として縁となるや。有漏法は無漏法のために、無漏法は彼の有漏法のために、無漏法は有漏法のために、幾く縁として縁となるや。

有爲法は彼の有爲法のために幾く縁として縁となるや。有爲法は無爲法のために、無爲法は彼の有爲法のために、無爲法は有爲法のために幾く縁として縁となるや。

所可纏に自ら纏ぜられて地獄有を受くるとき、彼れは諸根と四大とを得ず。彼の根と四大とは彼の心心法のために幾く縁として縁となるや。彼の心・心法は彼の根と四大とのために幾く縁として縁

【一】本章は第五編四大論の結尾の章として、内の四大と不内の四大等の十七對の法の相緣論を初め内、不内等の定義或は内・外法と内・外入所攝法の相攝論、或は二痛乃至百八痛の相攝論をなし、最後に十五種の淨功德の習修・得修を論ずるものなり。

其の内容を發智の頌文によりて示せば次の如し。

「十七對幾緣、對三自他有レハ唯對レ他有レ九、八、何義内外八門、受相攝、九位、十五門

現在、未來修、此章頗具說」

【二】内の四大と不内の四大乃至諸根及び四大と心心法の相緣論。

【五】本節は、(一)共緣緣法(緣有緣法)(二)、不共緣緣法(緣無緣法)(三)、共緣緣不共緣緣法(緣有緣緣無緣法)(四)非共緣緣非不共緣緣法(非緣有緣非緣無緣法)とにつきての論究なり。

尙、此の論究ありし所以は、所緣緣に思にして所緣緣の體は實有に非ずと執するもの意を止めんが爲めなりとなり。(婆沙百三十六卷、毘曇部十四、頁四二參照)

【五七】共緣緣法につきて

こは意識及び相應法が、共緣法(有所緣法)たるの心法を緣ずるが故に共緣緣の名を得たるなり。

【五八】不共緣緣法につきて

こは五識及び相應法或は意識と相應法とが不共緣法(無緣法)たる色と無爲と心不相行法とを緣ずるが場合、不共緣緣法の名を得るなり。

【五九】「意識身と共に相應」とは大正本に無きも三本・宮本によりて補へり。

【六〇】共緣緣不共緣緣法につきて

こは意識及び相應法が有所緣法、無所緣法を緣ずるが故に此の名を得たり。
【六一】此の上に、大正本には「諸五識身共相應」の七字あれど聖本・聖乙本によりてこれを除けり。

【六二】非共緣緣非不共緣緣法につきて

【六三】本節は、八解脱中の第二解脱に相當する「内に色想無くして外に色を觀ず」の觀法を三種に分ちて説明する段なり。

【六四】第二解脱の觀法につきて

【六五】第一觀法

【六六】第二觀法

【六七】第三觀法

【六八】本節は無色想即ち除色想の觀法に三種あることを先づ明し次に、無色想無きものと未離色染者、無色想有きものと已離色染者との關係を明にする段なり。

【六九】無色想の觀法の三種

【七〇】無色想を有するものと、色愛盡者との雜無雜論

【七一】無色想無きものと、未盡色愛者との雜無雜論

【七二】本節は、四識所止即ち

(一)色隨識住

(二)受隨識住

(三)想隨識住

(四)行隨識住

(四)識住(vijñānasthitya)と、七識所止、即ち、

(一)身異想異如入一分天、

(nātvakya nantvanyā-jānah tad yathā manuṣyā ekatyā sa devāḥ)

(二)想身異想一如梵衆天謂劫初起(nātvakya ekatyā brahmanāḥ tad yathā devā brahmanāḥ)

(三)身一想異如極光淨天(ekatyāyānāntvanyānah tad yathā abhāvayā)

(四)身一想一如遍淨天(ekatyakya ekatyasojānah tad yathā dvāḥ śubhakt-snah)

(五)空無邊處(ākāśānantyānānāp)

(六)識無邊處

(vijñānāntyānāp)。

(七)無所有處(āritāyāyānāp)の七識住と、九衆生居、

即七識住に更に

(八)非想非非想處

(nātvanyānāntvanyānāp)に於て

(九)無想有情(asaṃjñasthityā)の二を加へた所謂九有情居との相攝關係を明す段なり。

尙、精しくは婆沙百三十七卷(毘曇部十四、頁五二)を參照すべし。

【七三】四識所止と七識所止との相攝關係

因みに四識所止中の識は識所止に非ざるも七識所止中の識は識所止なることを心得へ置くべし。

【七四】果實天とは廣果天にして、即ち第四禪天にあり。

【七五】四識所止と九衆生居との相攝關係

【七六】七識所止と九衆生居との相攝關係

と光音天と遍淨天と無想衆生との色・痛・想・行と、無色界の痛・想・行と、是れを四にして九なるものと謂ふなり。

(四)云何んが四にも非ず九にも非ざるものなりや。答へて曰く、地獄の心と、畜生と餓鬼と無想衆生に攝せざる果實天との心と、是れを四にも非ず九にも非ざるものと謂ふなり。

七識所止と九衆生居とあり。七識所止は九衆生居を攝するや。九衆生居は七識所止を攝するや。答へて曰く、九は七を攝するも、七は九を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、二處にして、無想衆生と、有想無想となり。

見諦跋渠第三竟(梵本一百六十九首盧、秦二千九十二言)

【四四】 三緣より生ずる法につきて。

【四四】 無想定と滅盡定とが生ずる時、増上緣と等無間緣と同類因とが作用し、滅する時に増上緣と俱有因とが作用す。故に茲に増上と等無間と因緣との三緣より生ずるものといへるなり。

【四七】 二緣より生ずる法につきて。

【四八】 (一)二無心定を説く餘の善の心不相應行と異熟に攝せざる無覆無記の心不相應行とが生ずる時、増上緣と同類因とが作用し、滅する時、増上緣と同類、遍行の心不相應行が生ずる時、増上緣と同類、遍行の

二因とが作用し、滅する時増上緣と俱有因とが作用す。

(三)異熟の心不相應行が生ずる時、増上緣と同類、遍行の二因とが作用し、滅する時増上緣と俱有因とが作用するなり。

故に増上緣と因緣との二緣によりて二無心定を除く餘の心不相應行が生ずるといふなり。

【四九】 (一)善と異熟に攝せざる無覆無記との色が生ずる時、増上緣と同類因とが作用し、滅する時、増上緣と俱有因とが作用す。

(二)染汚の色が生ずる時、増上緣と同類、遍行の二因とが作用し、滅する時、増上緣と俱有因とが作用す。

(三)異熟色が生ずる時は増上緣と同類因と異熟因とが作用し、滅する時は増上緣と俱有因とが作用するなり。

故に色法の生ずるには増上緣と因緣とが作用すといふなり。

【五〇】 一緣より生ずる法無し。

【五一】 本節は、(一)因相應法、(二)因不相應法、(三)因相應因不相應法、(四)非因相應非因相應法につきての論究なり。

而も此の論究ある所以は、相應法に愚かにして相應法の體は無實なりと執するもの意を止めんが爲めなりとなり。(婆娑百三十六卷、毘曇部十四、頁四〇参照)

とは起りて未だ已に滅せざる間即ち、生位と滅位とを合して生といへるものなれば、生ずる位に作用する、増上緣と等無間緣と同類因と遍行因と増上緣と所緣緣と相應因と俱有因とを合して、二の増上緣と、等無間緣と所緣緣と同類、遍行、異熟、相應、俱有因即ち因緣との四緣(但し二の増上緣を一種の増上緣となす)によりて生ずることとなるなり。

の自體法とが相應するが故に因相應と名けしなり。

【五二】 因不相應法につきて色と無爲と心不相應行とは相應因の自體に非ざるも而も相應因の自體と相應せざるが故に因不相應と名くるなり。

【五三】 因相應因不相應法につきて。

こは心心法の中、自が他に於ける場合を因相應といひ、自が自に於ける場合を因不相應といふなり。

【五四】 因相應に非ず不因相應にも非ざる法につきてこは心心法が自が自に於ける場合を因相應に非ずといひ、自が他に於ける場合を不因相應にも非ずといふなり。

第十節 四識所止(識住)と七識所止と九衆生居との相攝論

四識所止と七識所止とあり。四識所止は七識所止を攝するや。答へて曰く、或は四にして七に攝するに非ざるものあり。

(一)云何んが四にして七に非ざるものなりや。答へて曰く、地獄の色・痛・想・行と、畜生・餓鬼・果實天の色・痛・想・行と、有想無想の痛・想・行となり。是れを四にして七に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが七にして四に非ざるものなりや。答へて曰く、人と欲界天との心と、梵迦夷天と光音と遍淨と空處と識處と不用處との心となり。是れを七にして四に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが四にして七なるものなりや。答へて曰く、人と欲界天との色・痛・想・行と、梵迦夷天と光音と遍淨との色・痛・想・行と、空處と識處と不用處との痛・想・行となり。是れを四にして七なるものと謂ふなり。

(四)云何んが、四にも非ず七にも非ざるものなりや。答へて曰く、地獄の心と畜生と餓鬼と果實と有想無想との心となり、是れを四にも非ず七にも非ざるものと謂ふなり。

四識所止と九衆生居とあり。四識所止は九衆生居を攝するや。答へて曰く、或は四にして九に攝するに非ざるものあり。

(一)云何んが四にして九に非ざるものなりや。答へて曰く、地獄の色・痛・想・行と、畜生と餓鬼と無想衆生に攝せざる果實との色・痛・想・行と、是れを四にして九に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが九にして四に非ざるものなりや。答へて曰く、人と欲天との心と、梵迦夷天と光音天と遍淨天と無想衆生と無色界との心と、是れを九にして四に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが四にして九なるものなりや。答へて曰く、人と欲界天との色・痛・想・行と、梵迦夷天

因みに劫は五蘊、四蘊を以つて體となし、又時分を分別する故に劫となすなり。

【四】心の起・住・滅は何の法に名くるや。

【一】本節は、有爲法が生ずる時、四緣中の幾く緣が作用するやを明にせんとする段なり。而して此の論究をなす所以は、「緣は無實なり」と執するもの意を止めんが爲めなりとは婆沙論(百三十六卷、毘曇部十四、頁三五)の解釋なり。

【二】四緣より生ずる法につきて。

【三】心心法が生ずるにつきて。

(一)善と、及び異熟に攝せざる無覆無記との心心法が生ずる時は、増上緣と等無間緣と同類因とが作用し、滅する時は増上緣と所緣縁と俱有・相應の二因とが作用す。

(二)染汚の心心法が生ずる時は、増上と等無間と同類・遍行の二因とが作用し、滅する時は、増上と所緣と、相應・俱有の二因とが作用す。

(三)異熟の心心法が生ずる時は増上と等無間と同類、異熟の二因とが作用し、滅する時は増上と所緣と相應・俱有の二因とが作用す。而して茲に四緣より生ずるといへるは、生

第九節 無色想に関する論究

又、世尊の言く、「無色想有り。」と。

云何んが無色想を有するものなりや。答へて曰く、此の身は當に死すべし。已に死せば當に塚間に棄てらるべし。已に塚間に棄てらるれば、當に地に埋めらるべし。已に地に埋めらるれば、當に種種の虫に食せらるべし。已に種種の虫に食せらるれば、當に處處に散すべし。已に處處に散すれば、彼れは此の身を觀せず、亦、彼の種種の虫をも見ざるが如し。

此の身は當に死すべし、已に死せば當に塚間に棄てらるべし。已に塚間に棄てらるれば當に薪を積まるべし。已に薪を積まるれば、當に火にて燒かるべし。已に火にて燒かるれば、當に滅すべし。已に滅すれば、彼れは此の身を觀ぜず亦、火をも見ざるが如し。

此の身は雪聚・凝酥・醗醒の當に火上に置かるべきものの如し。已に火上に置かるれば當に融消すべし。已に融消すれば、當に滅すべし。已に滅すれば、彼れは此の身を觀ぜず亦、火をも見ず、是くの如きを無色想有りといふなり。

諸の色無の想を有するもの、彼の一切は色變を盡くすや。答へて曰く、是くの如し。諸の色無の想を有するもの、彼の一切は色變を盡くすや。答へて曰く、有り。色變を盡くすも彼れは三昧に入らざるものなり。

諸の色無の想を有するに不ざるもの、彼の一切は色變を未だ盡くさざるや。答へて曰く、是くの如し、諸の色變を未だ盡くさざるもの彼の一切は色無の想を有するに不ざるなり。

頗し色無の想を有するに不ざるものにして、彼れは色變を盡くさざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。色變を盡くすも彼の三昧に入らざるものなり。

【三】 化と心との關係。

【一】 修得の化は無心なり。

【二】 生得の化は有心なり。

又、(一) 他身を作すものは無心なり。

(二) 自身を作すものは有心なり。

今は修得のもの、他身を作すものを取るなり。

【三】 中陰と四大及び造色との關係

【一】 欲界の中陰の造色は九處の攝にして色界のは七處の攝なり。

【二】 中陰と心との關係

【一】 自心の力によりて表を起すが故なり。

【二】 尙、詳しくは婆沙六十九卷(毘曇部十、頁一六九以下)參照すべし。

【三】 本節は、世と劫と心の起・住・滅・即ち生・老・無常とにつきて論ずる段なり。

而かも此の論究ある所以は分別論者が、世と行とは其の體各別にして行の體は無常なるも世の體は是れ常なりと執するを破せんが爲めなりとなり。

(婆沙百三十五卷、毘曇部十四、頁二七)

【四】 世は何の法に名くるや。

【一】 數名とは發智論に、増詳所顯とあり。

【二】 劫は何の法に名くるや。

【一】 劫は何の法に名くるや。

【一】 劫は何の法に名くるや。

因不相應にして、少は因が不相應に非ざるなり。

第七節 共緣法・不共緣法に就きて

云何なる法が、共緣縁なりや。答へて曰く、諸の意識身と共に相應法とが、心心法を緣するなり。

云何なる法が不共緣縁なりや。答へて曰く、諸の五識身と共に相應法、若しくは意識身と共に

相應法とが色と無爲と心不相應行とを緣するなり。

云何なる法が共緣縁不共緣縁なりや。答へて曰く、意識身と共に相應法とが心心法を緣じ色と無

爲と心不相應行とを緣するなり。

云何なる法が非共緣縁非不共緣縁なりや。答へて曰く、色と無爲と心不相應行となり。

第八節 「内に色想無くして外に色を觀す」の觀法に就きて

又、世尊の言く、「彼れは内に色想無くして外に色を觀す」と。

云何んが内に色想無くして外に色を觀するや。答へて曰く、此の身は當に死すべし、已に死せば

當に塚間に棄てらるべし。已に塚間に棄てらるれば當に地に埋めらるべし。已に埋めらるれば當に

種々の虫に食せらるべし、已に種種の虫に食せらるれば、彼れは此の身を觀せずして、但、彼の種

種の虫のみを見るが如し。

此の身は當に死すべし。已に死すれば當に塚間に棄てらるべし。已に塚間に棄てらるれば、當に

薪を積まるべし。已に薪を積まるれば、當に火にて燒かるべし。已に火にて燒かるれば、彼れは此

の身を觀せずして、但、火のみを見るが如し。

此の身は雪聚、凝酥、醍醐の當に火上に置かるべきものの如し。已に火上に置かるれば、當に融消

すべし。已に融消すれば彼れは此の身を觀せずして、但、火のみを見る。是くの如きは内に色想無

くして外に色を觀するなり。

【二五】 色界より欲界に生ぜし場合。

【二六】 本節は化と四大との關係、及び中陰と四大との關係等を明にせんとするものなり。因みに此の論究あるは、

【一】譬喩者が諸の所化物は實有に非ずと執するを止めんが爲めと、

【二】大徳が化は實有に非ずして修の所現なりと執すを止めんが爲めと、

【三】分別論者が中陰を撥無するを止めんが爲めとなりとは婆沙論の解釋なり（婆沙百三十五卷毘曇部十四、頁一三參照）。

【二七】 欲界生のものの色界の化と化語とは何の界繋の四大の所造なりや。

【二八】 色界生のものの欲界の化と化語とは何の界繋の四大の所造なりや。

【二九】 化と四大・造色との關係。

【三〇】 化に修得と生得との二種あり。

【三一】 欲界の修得の化は四處の攝。

【三二】 欲界の生得の化は九處の攝。

【三三】 色界の修得の化は二處の攝。

【三四】 色界の生得の化は七處の攝なり。

三 中陰は當に四大なりと言ふべきや。四大に非ざるや。答へて曰く、中陰は當に四大なりと言ふべし。當に造色なりと言ふべきや、造色に非ざるや。答へて曰く、當に造色なりと言ふべし。

三六 當に有心なりと言ふべきや、無心なりや。答へて曰く、有心なりと言ふべし。當に誰の心を用ひて語ると言ふべきや。答へて曰く、當に自らの心を用ひて語ると言ふべきなり。

第四節 世と劫と心の起・住・減とに就きて

三八 世とは何の法に名くるや。答へて曰く、行の數名なり。

四〇 劫とは何の法に名くるや。答へて曰く、月・半月・春・夏・歳の數名なり。

四一 心の起・住・減は何の法に名くるや。答へて曰く、時節・須臾の數名なり。

第五節 諸法の生と四縁との關係に就きて

四三 頗し法にして四縁より生ずるものありや。答へて曰く、生ずるものあり。一切の心心法なり。

四四 三縁より生ずるものありや。答へて曰く、生ずるものあり。無想定と滅盡定となり。

四七 二縁より生ずるものありや。答へて曰く、生ずるものあり。無想定と滅盡定とを除く諸の心不相應行と色となり。

五〇 一縁より生ずるものありや。答へて曰く、生ぜざるなり。

第六節 因相應法、因不相應法等に就きて

五二 云何なる法が因相應なりや。答へて曰く、一切の心心法なり。

五三 云何なる法が因不相應なりや。答へて曰く、色と無爲と心不相應となり。

五四 云何なる法が因相應因不相應なりや。答へて曰く、彼の心心法の少は因相應にして、少は因不相應なり。

五五 云何なる法が因相應にも非ず、不因相應にも非ざるものなりや。答へて曰く、彼の心心法の少は

や。
【三】 無色界生の聖者の成就する無漏の身・口の戒律の色は何の界繋の四大の所造なりや。

因みに、こは無色界には色無きを以つて、聖者にして無色界に生ぜしもの無漏の色は四大の所造に非ざらんと疑ふを止めんが爲めに此の論をなすとなり。

【三】 本節は、無色界より没して欲界、或は色界に生ぜし場合、及び色界より没して欲界に生ぜし場合に最初に得する四大は何界の四大を以つて因となすやを明にせんとする段なり。而して發智論及び婆沙論の本論には單に四大のみならず、「最初得の諸根と大種」と言ひて、二種につきて論ぜり。

因みに本論ある所以は、無色界には色無きを以つて無色界より没して欲界に生ぜし場合生ずる四大は無因にして生ずるならんと疑ひを破せんが爲めなりとなり（婆沙百三十四卷、毘曇部十四、頁一）

【三】 無色界より欲色界に生ぜし場合、嚴密に言へば、地獄の四大は地獄の四大を因となし、天趣の四大は天趣の四大を因となすなり。

三〇 色界に生じて無漏の初禪に入るもの及び無漏の第二・第三・第四禪に入るものの彼の諸の身・口の戒律、彼の色は何の四大の所造なりや。答へて曰く、色界繫のなり。

三一 世尊の弟子にして無色界に生ずるものは、諸の無漏の身・口の戒律を成就す。彼の色は何の四大の所造なりや。答へて曰く、或は欲界繫、或は色界繫のなり。

三二 第二節 上界より下に生ずるものの初得の四大は何界の四大を因とするやに就きて

三三 無色界より没して欲界に生ずるものの最初に得する四大、彼の四大は何の四大を因となすや。答へて曰く、欲界繫のなり。

三四 無色界より没して色界に生ずるものの最初に得する四大、彼の四大は何の四大を因となすや。答へて曰く、色界繫のなり。

三五 色界より没して欲界に生ずるものの最初に得する四大、彼の四大は何の四大を因となすや。答へて曰く、欲界繫のなり。

三六 第三節 化及び中陰と四大との關係に就きて

三七 欲界に生じて色界の化を化し、色界の語を作すときの彼の色は、何の四大の所造なりや。答へて曰く、色界繫のなり。

三八 色界に生じて欲界の化を化し欲界の語を作すときの彼の色は何の所造なりや。答へて曰く、欲界繫のなり。

三九 化は當に四大なりと言ふべきや、四大に非ざるや。答へて曰く、化は當に四大なりと言ふべし。當に造色なりと言ふべきや、造色に非ざるや。答へて曰く、當に造色なりと言ふべし。

四〇 當に有心なりと言ふべきや、無心なりや。答へて曰く、無心なり。當に誰れの心を用ひて語ると言ふべきや。答へて曰く、化者の心にて語るなり。

ることを顯はさんが爲めなりとは婆沙(百三十四、卷、毘曇部十四、頁一以下)の解釋なり。

【三】 預流・一來の色界繫の身・口の戒律の色は何の界繫の四大の所造なりや。

【四】 これを克實していへば未至定の四大の造なり。

【五】 欲界生にして有漏の四禪に入るもの身・口の戒律の色は何の界繫の四大の所造なりや。

【六】 これを細説すれば初禪の世俗道に隨ふ色は初禪の四大の所造なり、乃至、第四禪のは第四禪の四大の所造なるなり。

【七】 欲界生にして無漏の四禪に入るもの身・口の戒律の色は何の界繫の四大の所造なりや。

【八】 無漏の戒律は、縛無きが故に身に依りて起るが故に、所依身の界の繫の四大の所造なるなり。

【九】 これに反して有漏の場合には必ず所造色と同一地の四大の所造なるなり。

【一〇】 色界生にして有漏の四禪に入るもの身・口の戒律の色は何の界繫の四大の所造なりや。

云何んが無色想有りや。

諸の無色想を有するもの彼の一切は色愛盡なりや。設し色愛盡なれば彼の一切は色無の想を有するや。

諸の色無の想を有せざるもの一切は色愛未盡なりや。設し色愛未盡なれば彼の一切は色無の想を有せざるや。

(十) 四識所止と七識所止とあり。四識所止は七識所止を攝するや。七識所止は四識所止を攝するや。

四識所止と九衆生居とあり。四識所止は九衆生居を攝するや、九衆生居は四識所止を攝するや。七識所止と九衆生居とあり。七識所止は九衆生居を攝するや。九衆生居は七識所止を攝するや。此の章の義を願はくば具さに演説せん。

第一節 見諦成就の聖者の成就する身・口の戒律の色は

何の界繋の四大の所造なりやに就きて

見諦成就の世尊の弟子にして欲愛未盡のものは、諸の色界繋の身・口の戒律を成就す。彼の色は何の四大の所造なりや。答へて曰く、色界繋のなり。

欲界に生じ有漏の初禪に入るもの及び有漏の第二・第三・第四禪に入るもの彼の諸の身・口の戒律、彼の色は何の四大の所造なりや。答へて曰く、色界繋のなり。

欲界に生じて無漏の初禪に入るもの及び無漏の第二・第三・第四禪に入るもの彼の諸の身・口の戒律、彼の色は何の四大の所造なりや。答へて曰く、欲界繋のなり。

色界に生じて有漏の初禪に入るもの及び有漏の第二・第三・第四禪に入るもの彼の諸の身・口の戒律、彼の色は何の四大の所造なりや。答へて曰く、色界繋のなり。

【一〇】 無色想に関する問題。

【二】 四識所止と七識所止と九衆生居との攝論。

【三】 本節は三界の見諦成就の世尊の弟子が成就する身・口の戒律の色は、何の界繋の四大の所造なりやを明にすを段なり。

而して此の論究ある理由は、(一)根本地にのみ能離の善法ありとの疑ひを止めて、近分地にも能離の善法あることを顯はすため、(二)分別論者の預流・一來は根本定を得ずとの異執を破して根本定を得せざることを顯はすため、

(三)譬喩者の近分地には唯、善法のみありとの異執を破して近分地には善・染・無記法あ

三 (二) 無色界より没して欲界に生ずるとき最初の最初に得する四大、彼の四大は何の四大を因となすや。無色界より没して色界に生ずるとき最初の最初に得する四大、彼の四大は何の四大を因となすや。色界より没して欲界に生ずるとき最初の最初に得する四大、此の四大は何の四大を因となすや。

四 (三) 欲界に生じて色界の化を化し色界の語を作すとき、彼の色は何の四大の所造なりや。

色界に生じて欲界化を化し欲界の語を作すとき、彼の色は何の四大の所造なりや。

化は當に四大なりと言ふべきや、四大に非ざるや。當に造色なりと言ふべきや、造色に非ざるや。當に有心なりと言ふべきや、無心なりや。當に誰の心を用ひて語ると言ふべきや。

中陰は當に四大なりと言ふべきや、四大に非ざるや。當に造色なりと言ふべきや、造色に非ざるや。當に有心なりと言ふべきや、無心なりや。當に誰の心を用ひて語ると言ふべきや。

五 (四) 世は何の法に名くるや。

劫は何の法に名くるや。

心の起・住・滅は何の法に名くるや。

六 (五) 頗し法にして四緣生・三緣生・二緣生・一緣生のものありや。

七 (六) 云何なる法が因相應なりや。云何なる法か因不相應なりや。云何なる法が因相應因不相應なりや。云何なる法が因相應にも非ず、亦因不相應にも非ざるものなりや。

八 (七) 云何なる法が共緣緣なりや。云何なる法が不共緣緣なりや、云何なる法が共緣緣不共緣緣なりや。云何なる法が共緣緣に非ず、不共緣緣に非ざるものなりや。

九 (八) 又、世尊の言く、「彼れは、内に色想無くして外色を觀ず」と。

云何んが内に色想無くして外に色を觀するや。

一〇 (九) 又世尊の言く、「無色想有り」と。

【三】 上昇より下生する時の初得の四大に關する問題

【四】 化及び中陰と四大とに關する問題。

【五】 世と劫と心の起・住・滅に關する問題。

因みに大正本には世の上にな久遠の二字あるも三本・宮本によりてこれを除却せり。

【六】 諸法の生と四緣とに關する問題。

【七】 因相應法・因不相應法等に關する問題。

【八】 共緣緣法・不共緣緣法等に關する問題。

【九】 第二解脱に關する問題。

卷の第二十 (第五編 四大犍度)

第三章 見諦成就者の身・口行の色と四大との

界繫分別等の論究

(四大犍度中、見諦跋渠第三) (發智論卷第十三、大正・二六、九八七)

本章の内容目次

(一)見諦成就の世尊の弟子にして欲愛未盡のものは、諸の色界繫の身・口の戒律を成就す。彼の色は、何の四大の所造なりや。

欲界に生じて有漏の初禪に入るもの及び有漏の第二・第三・第四禪に入るものの、彼の諸の身・口の戒律の彼の色は、何の四大の所造なりや。

欲界に生じて無漏の初禪に入るもの及び無漏の第二・第三・第四禪に入るものの彼の諸の身・口の戒律の彼の色は何の四大の所造なりや。

色界に生じて有漏の初禪に入るもの及び有漏の第二・第三・第四禪に入るものの彼の諸の身・口の戒律の彼の色は何の四大の所造なりや。

色界に生じて無漏の初禪に入るもの及び無漏の第二・第三・第四禪に入るものの彼の諸の身・口の戒律の彼の色は何の四大の所造なりや。

世尊の弟子にして無色界に生ずるものは、諸の無漏の身・口の戒律を成就す、彼の色は何の四大の所造なりや。

第三章 見諦成就者の身・口行の色と四大との界繫分別等の論究

四六七

【一】本章は、四大に關する諸種の雜問題を取り扱へるものにして、其の内容は多岐に渉る。而して其の組織は本論の内容目次にその説明を譲りて今は發智論の頌文によりて略示せん。

「六色何大造」

三色執爲因

化九中有七

世劫心三分

緣因緣各四

無色除色想

互攝二四七、九

此章頗具說

【二】見諦成就の聖者の身・口の戒律の色と四大所造とに關する問題。

この論究ある所以は、(一)地等には實の體無からんと疑ふものあり、(二)入の所攝に非ずと疑ふものあり、(三)識の所識に非ずと思ふものあり、(四)假と實とは同一入の所攝

にして同一識の所識なりと思ふものあり。斯かる疑ひを止めて、假の地等にも實の體あり。假りに名を立つるものは五入中の隨一の入の所攝にして五識中の隨一の識の所識な

り、又、假と實とは不同入の所攝、不同識の所識なることを顯はさんが爲めなりとなり、(婆沙百三十三、毘曇部十三、頁三六三参照)。
【一六】眼識は自相を取り、意

識は自相と共相とを取るなり。
【一六】有餘師の説によれば「風は亦色處の攝に通じ及び眼識の所識なるも少きが故に説かざるなり」とあり。

は現在の四大の所造にも非ざるものなりや、答へて曰く、過去・未來の四大と、諸色の過去・未來にして過去の四大の所造なるものと、諸色の未來にして未來の四大の所造なるものとなり、是れを色にして現在にも非ず、彼の色は現在の四大の所造にも非ざるものと謂ふなり。

一五二
第十三節 地・水・火・風と地種・水種・火種・風種とに關する論究

云何んが地と地種なりや。

云何んが水と水種なりや。

云何んが火と火種なりや。

云何んが風と風種なりや。

一五三 地とは云何ん。答へて曰く、^{一五三}形處なり。地種とは云何ん。答へて曰く、^{一五四}堅なり。

一五四 水とは云何ん。答へて曰く、形處なり。水種とは云何ん。答へて曰く、濕なり。

一五五 火とは云何ん。答へて曰く、形處なり。火種とは云何ん。答へて曰く、熱なり。

一五六 風とは云何ん。答へて曰く、^{一五七}風なり、^{一五八}風種とは云何ん。答へて曰く、動なり。

一五九 地は一入の攝にして色入をいひ、二識の所識にして、^{一六〇}眼識と意識とをいふ。地種は一入の攝にして細滑入をいひ、二識の所識にして、身識と意識とをいふ。

水は一入の攝にして色入をいひ、二識の所識にして、眼識と意識とをいふ。水種は一入の攝にして細滑入をいひ、二識の所識にして、身識と意識とをいふ。

火は一入の攝にして色入をいひ、二識の所識にして、眼識と意識とをいふ。火種は一入の攝にして細滑入をいひ、二識の所識にして、身識と意識とをいふ。

風と風種とは、^{一六一}一入の攝にして細滑入をいひ、二識の所識にして身識と意識とをいふなり。

緣數集第二竟。

四六五

【一五二】本節は、世俗の意味に於ける地 (Pṛthivī) 水 (ap) 火 (tejas) 風 (vāyu) の四と、勝義の意味に於ける

地種 (pṛthivībhūta 地界) 水種 (abdhātu 水界) 火種 (tejodhātu 火界) 風種 (vāyudhātu 風界)

との自性分別、十二入分別、六識の所識分別をなす段なり。

【一五三】地と地種との自性。形色とあり。即ち世間に於ては顯・形色に於て共に假想に依りて地の名を施設するなり。

【一五四】堅は發智論には「堅性の觸なり」とあり。

【一五五】水と水種との自性。

【一五六】火と火種との自性。

【一五七】風と風種との自性。

【一五八】風は發智論に風界とあり。

尚、有餘師は、世間には風に於て亦、假想を起し、有塵風乃至小風・大風と説くものありといへり。

【一六一】地・水・火・風と地種・水種・火種・風種の十二入分別及び六識の所識分別。

るものなり、是れを色にして過去の四大の所造なるも、彼の色は過去に非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが色の過去にして彼の色は過去の四大の所造なるものなりや。答へて曰く、^{一四三}諸色の過去にして過去の四大の所造なるものなり、是れを色の過去にして彼の色は過去の四大の所造なるものと謂ふなり。(四)云何んが色にして過去にも非ず、彼の色は過去の四大の所造にも非ざるものなりや。答へて曰く、未來・現在の四大と、諸色の未來・現在にして現在の四大の所造なるものと、諸色の未來にして未來の四大の所造なるものとなり、是れを色にして過去にも非ず、彼の色は過去の四大の所造にも非ざるものと謂ふなり。

^{一四四}諸色にして未來なるもの、彼の色の一切は、未來の四大の所造なりや。答へて曰く、^{一四五}是くの如し、諸色にして未來の四大の所造なれば、彼の色は一切未來なるなり。

頗し色にして未來なるも、彼の色は未來の四大の所造に非ざるものありや。答へて曰く、有り。

未來の四大と、^{一四六}諸色の未來にして過去・現在の四大の所造のものとなり。

^{一四七}諸色にして現在なるもの、彼の色の一切は、現在の四大の所造なりや。答へて曰く、或は色にして現在なるも、彼の色は現在の四大の所造に非ざるものなり。(一)云何んが色にして現在なるも彼の色の現在の四大の所造に非ざるものなりや。答へて曰く、現在の四大と、^{一四八}諸色の現在にして過去の四大の所造なるものとなり、是れを色にして現在なるも彼の色は現在の四大の所造に非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが、色にして現在の四大の所造なるも、彼の色は現在に非ざるものなりや。

答へて曰く、^{一四九}諸色の未來にして現在の四大の所造なるもの、是れを色にして現在の四大の所造なるも、彼の色は現在に非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが色の現在にして彼の色は現在の四大の所造なるものなりや。答へて曰く、^{一五〇}諸色の現在にして現在の四大の所造なるもの、是れを色の現在にして彼の色は現在の四大の所造なるものと謂ふなり。(四)云何んが現在の色にも非ず、彼の色

【一四三】こは、過去の一切の有對の所造色と、隨心轉の無表と、表所起の無表とをいふなり。

【一四四】未來の色と未來の四大の所造色との同異論。

【一四五】こは、未來の一切の有對の所造色と隨心轉の無表と表所起の無表にして未來の四大の所造なるものとをいふなり。

【一四六】こは、未來の表所起の無表にして過去・現在の四大の所造なるものをいふなり。

【一四七】こは、現在の表所起の無表にして過去の四大の所造なるものをいふなり。

【一四八】こは、未來の表所起の無表にして現在の四大の所造なるものをいふ。

【一四九】こは、現在の一切の有對の所造色と、隨心轉の無表と、現在の表所起の無表にして現在の四大の所造なるものとなり。

るものと、是れを色にして欲界繫にも非ず、彼の色は欲界繫の四大の所造なるものにも非ざるものと謂ふなり。

^{一三二} 諸色の色界繫なるもの、彼の色の一切は、色界繫の四大の所造なりや。答へて曰く、或は色にして色界繫なるも、彼の色は色界繫の四大の所造に非ざるものあり。(一)云何んが色にして色界繫なるも彼の色は色界繫の四大の所造に非ざるものなりや。答へて曰く、色界繫の四大なり。是れを色にして色界繫なるも彼の色は色界繫の四大の所造に非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが色にして色界繫の四大の所造なるも、彼の色は色界繫に非ざるものなりや。答へて曰く、^{一三三} 諸色の不繫にして色界繫の四大の所造なるもの、是れを色にして色界繫の四大の所造なるも彼の色は色界繫に非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが色の色界繫なるものにして彼の色は色界繫の四大の所造なるもの、是れを色の色界繫なるものにして彼の色は色界繫の四大の所造なるものと謂ふなり。(四)云何んが色にして色界繫に非ず、彼の色は色界繫の四大の所造にも非ざるものなりや。答へて曰く、欲界繫の四大と、諸色の欲界繫にして欲界繫の四大の所造なるものと、諸色の不繫にして欲界繫の四大の所造なるものと、是れを色にして色界繫に非ず彼の色は色界繫の四大の所造にも非ざるものと謂ふなり。

一三〇
第十二節 三世の色と三世の四大所造色との同異關係

^{一三一} 諸色の過去なるもの、彼の色の一切は過去の四大の所造なりや。答へて曰く、或は色にして過去なるも彼の色は過去の四大の所造に非ざるものあり。(一)云何んが色にして過去なるも彼の色は過去の四大の所造に非ざるものなりや。答へて曰く、過去の四大、是れを色にして過去なるも彼の色は過去の四大の所造に非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが色にして過去の四大の所造なるも、彼の色は過去に非ざるものなりや。答へて曰く、^{一三二} 諸色の未來・現在のものにして過去の四大の所造な

【一三二】色界繫の色は色界繫の四大の所造なりや否やに就きてこれに四句分別あり。

【一三三】こは、色界身によりて現前する類智品の隨轉色なり。

【一三〇】こは色界繫の有對の所造色と有漏の隨心轉の無表色となり。

【一三一】本節は、過去・未來・現在の三世の各の色は夫々三世の四大の所造なりや否やを明にせんとする段なり。
(婆沙百三十三卷、毘曇部十三、頁三五九參照)。

【一三二】過去の色は過去の四大の所造なりや否やに就きてこれに四句分別あり。

【一三三】こは、未來・現在の表所起の無表色にして過去の大種の所造なるものをいふ。

界繫の造色も非らざるものと謂ふなり。

第十節 欲・色界繫の四大と造色との相互相減關係

一三二 欲界繫の四大は色界繫の四大のために一の増上となる。色界繫の四大は欲界繫の四大のために一の増上となる。欲界繫の四大は色界繫の造色のために一の増上となる。色界繫の造色は欲界繫の四大のために一の増上となる。

一三三 欲界繫の造色は色界繫の四大のために一の増上となる。色界繫の四大は欲界繫の造色のために一の増上となる。欲界繫の造色は色界繫の造色のために一の増上となる。色界繫の造色は欲界繫の造色のために一の増上となるなり。

第十一節 欲・色界繫の色と欲・色界繫の四大の造色との同異關係

一三四 諸色の欲界繫なるもの、彼の色の一切は欲界繫の四大の所造なりや。答へて曰く、或は色にして欲界繫なるも、彼の色は欲界の四大の所造に非ざるものなりや。(一)云何んが色にして欲界繫なるも彼の色は欲界繫の四大の所造に非ざるものなりや。答へて曰く、欲界繫の四大なり。是れを色にして欲界繫なるも、彼の色は欲界繫の四大の所造に非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが色にして欲界繫の四大の所造なるも、彼の色は欲界繫に非ざるものなりや。答へて曰く、諸の色の不繫なるものにして欲界繫の四大の所造なるものなり。是れを色にして欲界繫の四大の所造なるも彼の色は欲界繫に非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが色の欲界繫にして彼の色は欲界繫の四大の所造なるものなりや。答へて曰く、諸の色の欲界繫なるものにして欲界繫の四大の所造なるもの、是れを色の欲界繫にして彼の色は欲界繫の四大の所造なるものと謂ふなり。(四)云何んが色にして欲界繫ならず、彼の色は欲界繫の四大の所造なるにも非ざるものなりや。答へて曰く、色界繫の四大と、諸の色の色界繫にして色界繫の四大の所造なるものと、諸の色の不繫にして色界繫の四大の所造な

【二三】本節は、欲界繫の四大と造色と、色界繫の四大と造色との間に於ける相互相減關係を明せるものにして發智論にては前の第八節の次にあり。

【三二】欲界繫の四大と色界繫の四大及び造色との相互相減關係。

【三一】欲界造の造色と色界繫の四大及び造色との相互相減關係。

【三〇】本節は、欲界繫の色は欲界繫の四大の所造なりや否や、又色界繫の色は色界繫の四大の所造なりや否やを、四句分別によりて明にせんとする段なり。

【二九】欲界繫の色は欲界繫の四大の所造なりや否やに就きてこれに四句分別あり。

【二八】こは一切の法智品の隨轉色と、欲界身に依りて現前する類智品の隨轉色となり。即ち、無漏律儀のことなり。

【二七】こは、欲界繫の有對の所造色と及び表所起の無表色とをいふなり。

は欲界繫の造色を成就するも色界繫の四大は非らざるものあり。(一)云何んが欲界繫の造色を成就するも色界繫の四大は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じて色界の四大を現在前せざるもの、是れを欲界繫の造色を成就するも、色界繫の四大は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが色界繫の四大を成就するも欲界繫の造色は非らざるものなりや。答へて曰く、色界に生じて欲界の化を化せず、欲界の語を作さざるもの、是れを色界繫の四大を成就するも欲界繫の造色は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが欲界繫の造色と色界繫の四大とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じて色界の四大を現在前するものと、若しくは色界に生じて欲界の化を化し欲界の語を作すものと、是れを欲界繫の造色と色界繫の四大とを成就するものと謂ふなり。(四)云何んが欲界繫の造色を成就せず、色界繫の四大も非らざるものなりや。答へて曰く、無色界に生ずるもの、是れを欲界繫の造色を成就せず、色界繫の四大も非らざるものと謂ふなり。

若し欲界繫の造色を成就するものなれば、彼れは色界繫の造色をも成就するや。答へて曰く、或は欲界繫の造色を成就するも色界繫の造色は非らざるものあり。(一)云何んが欲界繫の造色を成就するも色界繫の造色は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じて色界の善心得せざるもの、是れを欲界繫の造色を成就するも色界繫の造色は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが色界繫の造色を成就するも欲界繫の造色は非らざるものなりや。答へて曰く、色界に生じて欲界の化を化せず、欲界の語を作さざるもの、是れを色界繫の造色を成就するも欲界繫の造色は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが欲界繫の造色と色界繫の四大とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じて色界の善心得するものと、若しくは色界に生じて欲界の化を化し欲界の語を作すものと、是れを欲界繫の造色と色界繫の造色とを成就するものと謂ふなり。(四)云何んが欲界繫の造色を成就せず、色界繫の造色も非らざるものなりや。答へて曰く、無色界に生ずるもの、是れを欲界繫の造色を成就せず、色

の四大との成就關係。
これに四句分別あり。
【二六】欲界繫の四大と色界繫の造色との成就關係に就きて
【二七】欲界繫の造色と色界繫の四大との成就關係、

【二八】大正本には、次下に「色界繫四大云何不成就欲界繫造色非」の十六字あるも、三本、宮本によりてこれを除けり。
【二九】欲界繫の造色と色界の造色との成就關係。

の、是れを欲界繫の四大を成就するも色界繫の四大は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが色界繫の四大を成就するも欲界繫の四大は非らざるものなりや。答へて曰く、色界に生じて欲界の化を化せず、欲界の語を作さざるものなり。是れを色界繫の四大を成就するも欲界繫の四大は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが、欲界と色界との繫の四大を成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じて色界の四大を現在前するものと、若しくは色界に生じて欲界の化を化し欲界の語を作すものと、是れを欲界と色界との繫の四大を成就するものと謂ふなり。(四)云何んが欲界繫の四大を成就せず、色界繫の四大も非らざるものなりや。答へて曰く、無色界に生ずるもの、是れを欲界繫の四大を成就せず、色界繫の四大も非らざるものと謂ふなり。

若し欲界繫の四大を成就するものなれば、彼れは色界繫の造色をも成就するや。答へて曰く、或は欲界繫の四大を成就するも色界繫の造色は非らざるものあり。(一)云何んが欲界繫の四大を成就するも、色界繫の造色は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じて色界の善心得せざるもの、是れを欲界繫の四大を成就するも、色界繫の造色は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが色界繫の造色を成就するも欲界繫の四大は非らざるものなりや。答へて曰く、色界に生じて欲界の化を化せず、欲界の語を作さざるもの、是れを色界繫の造色を成就するも、欲界繫の四大は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが欲界繫の四大と色界繫の造色とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じて色界の善心得するものと、若しくは色界に生じて欲界の化を化し欲界の語を作すものと、是れを欲界繫の四大と色界繫の造色とを成就するものと謂ふなり。(四)云何んが欲界繫の四大を成就せず、色界繫の造色も非らざるものなりや。答へて曰く、無色界に生ずるもの、是れを欲界繫の四大を成就せず色界繫の造色も非らざるものと謂ふなり。

若し欲界繫の造色を成就するものなれば、彼れは色界繫の四大をも成就するや。答へて曰く、或

あり。

【二六】本節は、欲界繫の四大と造色、色界繫の四大と造色との成就關係を明にする段なり。

【二七】欲界繫の四大と欲界繫の造色との成就關係。

【二八】發智論及び婆沙論の本論は以下の第九節の文を茲に説けり。

【二九】色界繫の四大と色界繫の造色との成就關係。

【三〇】本節は、欲界繫の四大と造色、色界繫の四大と造色との間に於ける相緣關係を取り扱へるものなり。

【三一】欲界繫の四大と造色との相緣關係。

【三二】發智論及び婆沙論の本論は以下の第十節の文を置けり。

【三三】色界繫の四大と造色との相緣關係。

【三四】本節は、(一)欲界繫の四大と色界繫の四大との成就關係。(二)欲界繫の四大と色界繫の造色、(三)欲界繫の造色と色界繫の四大、(四)欲界繫の造色と色界繫の造色との相互成就關係を明にする段なり。

因みに、本節は發智論にては第七節の次に於て之れを論述せり。

【三五】欲界繫の四大と色界繫

上となるなり。^{一一五}

第七節 欲・色界繫の四大と造色との成就關係

若し欲界繫の四大を成就するものなれば、彼れは欲界繫の造色をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。設し欲界繫の造色を成就するものなれば、彼れは欲界繫の四大をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。^{一一六}

若し色界繫の四大を成就するものなれば、彼れは色界繫の造色をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。若し色界繫の四大を成就するものなれば、彼れは色界繫の造色をも成就するなり。頗し色界繫の造色を成就するも、色界繫の四大を成就するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。欲界に生じて色界の善心を得し、色界の四大が現在前せざるものなり。^{一一七}

第八節 欲・色界繫の四大と造色との相緣關係

欲界繫の四大は彼の欲界繫の四大のために因と増上となる。欲界繫の四大は欲界繫の造色のために因と増上となる。欲界繫の造色は彼の欲界繫の造色のために因と増上となる。欲界繫の造色は欲界繫の四大のために因と増上となる。^{一一八}

色界繫の四大は彼の色界繫の四大のために因と増上となる。色界繫の四大は色界繫の造色のために因と増上となる。色界繫の造色は彼の色界繫の造色のために因と増上となる。色界繫の造色は色界繫の四大のために因と増上となるなり。^{一一九}

第九節 欲・色界繫の四大と造色との相互成就關係

若し欲界繫の四大を成就するものなれば、彼れは色界繫の四大をも成就するや。答へて曰く、或は欲界繫の四大を成就するも色界繫の四大は非らざるものあり。(一)云何んが欲界繫の四大を成就するも、色界繫の四大は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ色界の四大を現在前せざるも

夾註あり。

【一〇三】過去の造色と未來・現在の四大及び造色との相緣關係。

過去の造色と未來の四大及び造色との相緣關係——

【一〇四】因とは茲にては一の異熟因をいふ。

【一〇五】過去の造色と現在の四大及び造色との相緣關係。

【一〇六】茲に因とは同類と異熟の二因をいふ。

【一〇七】茲は「過去造色竟」の夾註あり。

【一〇八】未來の四大と現在の四大及び未來・現在の造色との相互相緣關係。

未來の四大と未來の造色との相緣關係——

【一〇九】未來の四大と現在の四大及び造色との相緣關係——

【一一〇】茲に「未來四大竟」の夾註あり。

【一一一】未來の造色と現在の四大及び造色との相緣關係。

【一一二】茲に「未來造色竟」の夾註あり。

【一一三】現在の四大と造色との相緣關係。

【一一四】茲に因は、若し現在の刹那に依れば因となること無しといふべく、刹那・分位・一生の現在によりては一の異熟因となるといふべきなり。

【一一五】茲に「三世竟」の夾註

四大のために一の増上となる。

過去九九の四大は現在の四大のために因と増上となる。現在の四大は彼の現在の四大のために因と増上となる。現在の四大は過去の四大のために一の増上となる。過去の四大は現在の造色のために因と増上となる。現在の造色は彼の現在の造色のために因と増上となる。現在の造色は過去の四大のために一の増上となるなり。

過去一〇〇の造色は未來の四大のために因と増上となる。未來の四大は過去の造色のために一の増上となる。過去の造色は未來の造色のために因と増上となる。未來の造色は過去の造色のために一の増上となる。

過去一〇一の造色は現在の四大のために因と増上となる。現在の四大は過去の造色のために一の増上となる。過去の造色は現在の造色のために因と増上となる。現在の造色は過去の造色のために一の増上となるなり。

未來一〇二の四大は未來の造色のために因と増上となる。未來の造色は未來の四大のために因と増上となる。

未來一〇三の四大は現在の四大のために一の増上となる。現在の四大は未來の四大のために因と増上となる。未來の四大は現在の造色のために一の増上となる。現在の造色は未來の四大のために因と増上となるなり。

未來一〇四の造色は現在の四大のために一の増上となる。現在の四大は未來の造色のために因と増上となる。未來の造色は現在の造色のために一の増上となる。現在の造色は未來の造色のために因と増上となるなり。

現在の四大は現在の造色のために因と増上となり、現在の造色は現在の四大のために因と増

明す段なり。

【九〇】過去の四大と三世の四大及び造色との相縁關係。

過去の四大と過去の四大

及び造色との相互相縁關係

—

【九一】因とは茲にては俱有と同類との二因なり。

【九二】因とは茲にては生・依・立・持・養の五因なり。

【九三】因とは茲にては俱有と同類との三因なり。

【九四】因とは茲にては一の異熟因なり。

【九五】過去の四大と未來の四大及び造色との相互相縁關係

—

【九六】因とは茲にては一の俱有因なり。

【九七】因とは茲にては生等の五因をいふ。

【九八】因とは茲にては、俱有と異熟との二因をいふ。

【九九】過去の四大と現左の四大及び造色との相互相縁關係

—

【一〇〇】茲に因とは剎那の現在に由れば、一の俱有因なるも、剎那・分位・一生の現在によれば俱有と同類との二因となる。

【一〇一】茲に因とは剎那現在に依れば一の俱有因なるも剎那乃至一生の現在に依れば、俱有と同類と異熟との三因となるなり。

【一〇二】茲に「過去の四大竟」の

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

來の造色を成就するも現在の造色を成就するに非ざるものあり。(一)云何んが未來の造色を成就するも現在の造色は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして無色界に生ずるもの、是れを未來の造色を成就するも現在の造色は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが現在の造色を成就するも未來の造色は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて色界の善心を得せざるものと、是れを現在の造色を成就するも未來の造色を成就するに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが未來と現在との造色を成就するものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて色界の善心を得するものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを未來と現在との造色を成就するものと謂ふなり。(四)云何んが未來と現在との造色を成就するに非ざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして無色界に生ずるもの、是れを未來と現在との造色を成就するに非ざるものと謂ふなり。^{九六}若し現在の四大を成就するものなれば、彼れは現在の造色をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。設し現在の造色を成就するものなれば、彼れは現在の四大をも、成就するや。答へて曰く、是くの如し。

^{九六}第六節 三世の四大及び造色の相互相續關係

^{九七}過去の四大は彼の過去の四大のために 因と増上となる。過去の四大は過去の造色のために 因と増上となる。過去の造色は彼の過去の造色のために 因と増上となる。過去の造色は過去の四大のために 因と増上となる。

^{九八}過去の四大は未來の四大のために 因と増上となる。未來の四大は彼の未來の四大のために 因と増上となる。未來の四大は過去の四大のために 一の増上となる。過去の四大は未來の造色のために 因と増上となる。未來の造色は彼の未來の造色のために 因と増上となる。未來の造色は過去の

て此の二字を除却せり。
 【七〇】過去の造色と現在の造色との成就關係に就きての四句分別
 【七九】茲に「過去造色竟」の夾註あり。
 【八〇】未來の四大と現在の四大及び未來・現在の造色との成就關係。
 未來の四大と未來の造色との成就關係
 【八一】未來の四大と現在の四大との成就關係
 【八二】未來の四大と現在の造色との成就關係
 【八三】茲に「未來四大竟」の夾註あり。
 【八四】未來の造色と現在の四大及び造色との成就關係
 未來の造色と現在の四大との成就關係につきての四句分別
 【八五】未來の造色と現在の造色との成就關係につきての四句分別
 【八六】茲に「現在の造色竟」の夾註あるも、こは「未來造色竟」の誤なり。
 【八七】現在の四大と造色との成就關係。
 【八八】茲に「三世成就竟」の夾註あり。
 【八九】本節は、三世の四大と三世の造色とを相互相續むるに四縁中の幾く縁となるやを

^{一〇} 若し未來の四大を成就するものなれば、彼れは未來の造色をも成就するや。答へて曰く、未來の四大を成就するもの無きも未來の造色を成就するものは有り。無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて色界の善心を徯するものと、色界に生ずるものと、無垢人にして無色界に生ずるものとなり。

^{一一} 若し未來の四大を成就するものなれば、彼れは現在の四大をも成就するや。答へて曰く、未來の四大を成就するもの無きも現在の四大を成就するもの有り。欲・色界に生ずるものなり。

^{一二} 若し未來の四大を成就するものなれば、彼れは現在の造色をも成就するや。答へて曰く、未來の四大を成就するもの無きも現在の造色を成就するもの有り。欲・色界に生ずるものなり。^三

^{一三} 若し未來の造色を成就するものなれば、彼れは現在の四大をも成就するや。答へて曰く、或は未來の造色を成就するも現在の四大は非らざるものあり。(一)云何んが未來の造色を成就するも現在の四大は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして無色界に生ずるもの、是れを未來の造色を成就するも現在の四大は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて色界の善心得せざるものと、是れを現在の四大を成就するも未來の造色は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが現在の四大を成就するも未來の造色は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて色界の善心得するものと、是れを現在の四大を成就するも未來の造色は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが未來の造色と現在の四大とを成就するものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて色界の善心得するものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを未來の造色と現在の四大とを成就するものと謂ふなり。(四)云何んが未來の造色と現在の四大とを成就するに非ざるものなり。答へて曰く、凡夫人にして無色界に生ずるもの、是れを未來の造色と現在の四大とを成就するに非ざるものと謂ふなり。

^{一四} 若し未來の造色を成就するものなれば、彼れは現在の造色をも成就するや。答へて曰く、或は未

成就關係。

過去の四大と過去の造色との成就關係

^{一五} 過去の四大と未來の四大との成就關係

^{一六} 四大は、勢力羸劣なるが故に過去・未來を成就すること無きなり。

尙詳しくは婆沙百三十二卷(毘曇部・十三、頁三三九)を參見せよ。

^{一七} 過去の四大と未來の造色との成就關係

^{一八} 過去の四大と現在の四大との成就關係

^{一九} 過去の四大と現在の造色との成就關係

^{二〇} 茲に「過去四大竟」の夾註あり。

^{二一} 過去の造色と未來・現在の四大及び造色との成就關係

過去の造色と未來の四大との成就關係

^{二二} 過去の造色と未來の造色との成就關係に就きての四句分別

^{二三} 亦是、大正本に無きも、三本宮本によりて補へり。

^{二四} 過去の造色と現在の四大との成就關係に就きての四句分別

^{二五} 不の上に大正本には、處亦の二字あるも、こは正しからず、よつて發智論に准じ

現在の四大を成就するも、過去の造色は非らざるものと謂ふなり。云何んが過去の造色と現在の四大とを成就するものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて戒律に處するものと、不戒律に處するものと、亦不戒律不戒律に處して身・口の本の教を有して失せざるものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを過去の造色と現在の四大とを成就するものと謂ふなり。(四)云何んが過去の造色と現在の四大とを成就せざるものなりや。答へて曰く、阿羅漢と凡夫人との無色界に生ずるもの、是れを過去の造色と現在の四大とを成就せざるものと謂ふなり。

若し過去の造色を成就するものなれば、彼れは現在の造色をも成就するや。答へて曰く、或は過去の造色を成就するも、現在の造色は非らざるものあり。(一)云何んが過去の造色を成就するも現在の造色は非らざるものなりや。答へて曰く、學にして無色界に生ずるもの、是れを過去の造色を成就するも現在の造色は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが現在の造色を成就するも過去の造色は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ亦不戒律不戒律に處して身・口の本の教無きか教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを現在の造色を成就するも過去の造色は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが過去の造色と現在の造色とを成就するものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處するものと、不戒律に處するものと、亦不戒律不戒律に處するものにして身・口の本の教を有して失せざるものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを過去の造色と現在の造色とを成就するものと謂ふなり。(四)云何んが過去の造色と現在の造色とを成就するに非ざるものなりや。答へて曰く、阿羅漢と凡夫人との無色界に生ずるもの、是れを過去の造色と現在の造色とを成就せざるものと謂ふなり。^九

くべし。

【一】有對の造色と隨心轉の無教色とは、何の世に在るも、彼の世の四大の所造なり。

【二】教所起り無教は、造時等しからず。(1)初刹那是同世の四大の所造なり。(2)第二刹那のものにして若し過去・現在に在るものは俱に過去の四大所造なるも、若し未來に在れば、適じて現在と未來との大種の所造なり。(3)後の刹那のものにして、若し過去・現在に在れば過去の四大の所造なるも未來にあれば三世の大種の所造なり。

【六二】過去の四大と三世の造色との關係。

【六三】未來の四大と三世の造色との關係。

【六四】無しとは果が先にして因が後なることなければなり。

【六五】現在の四大と三世の造色との關係。

【六六】本節は三世の四大と三世の造色との相互の成就關係を明にせんとする段なり。

因みに此の論究ある所以は過未の二世を撰無し、成就・不成就性は非實有なりと説く異執を破せんが爲めなりとなり。

(婆沙百三十二卷、毘曇部、十三、頁三三八)

【六七】過去の四大と未來・現在の四大及び三世の造色との

若し過去の造色を成就するものなれば、彼れは未來の造色をも成就するや。答へて曰はく、或は過去の造色を成就するも未來の造色は非らざるものあり。(二)云何んが過去の造色を成就するも、未來の造色は非らざるものなりや。答へて曰はく、欲界に生じ戒律に處して色界の善心得せざるものと不戒律に處するものと、亦不戒律不戒律に處するものにして身・口の本の教を有して失せざるものと、是れを過去の造色を成就するも未來の造色は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが未來の造色を成就するも過去の造色は非らざるものなりや。答へて曰はく、阿羅漢にして無色界に生ずるもの、是れを未來の造色を成就するも過去の造色は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが過去の造色と未來の造色とを成就するものなりや。答へて曰はく、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて色界の善心得するものと、若しくは色界に生ずるものと、學にして無色界に生ずるものと、是れを過去の造色と未來の造色とを成就するものと謂ふなり、(四)云何んが過去の造色と未來の造色とを成就せざるものなりや。答へて曰はく、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ亦不戒律不戒律に處して身・口の本の教無きか教を有せしも便ち失せるかのものと、若しくは凡夫人にして無色界に生ずるものと、是れを過去・未來の造色を成就せざるものと謂ふなり。

若し過去の造色を成就するものなれば、彼れは現在の四大をも成就するや。答へて曰く、或は過去の造色を成就するも現在の四大は非らざるものあり。(一)云何んが過去の造色を成就するも現在の四大は非らざるものなりや。答へて曰く、學にして無色界に生ずるもの、是れを過去の造色を成就するも現在の四大は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが現在の四大を成就するも過去の造色は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ亦不戒律不戒律に處して身・口の本の教無きか教を有せしも便ち失するかのものと、是れを

【五】 四大と三無漏根との相

縁關係、

【五】 茲に「根竟」の夾註あり。

【六】 本節は、四大が心心法の如く一起・一住・一盡するにも拘らず、心心法を相應と説き、四大を相應と言はざる理由を明にする段なり。

【五】 一起・一住・一盡とは、一刹那の時を離れずして等しく一時に於て、生に生(起)せられ、住に住せられ、滅に滅(盡)せらるるをいふなり。

【五】 共縁とは有所縁の義なり。

【五】 法は大正本に無きも三本、宮本によりて補へり。

【六】 本節は、三世の四大が三世の所造色の何れを造るやを明にする段なり。

而して此の論究ある所以は、(一)去來を撥無し、現在は無執を止むため、

(二)外道が後法が前法の因となると執するを止むるため、

(三)四大と造色とは必ず同世なりとの異執を止むるため、

なりとは、婆沙論(百三十二卷、毘曇部十三、頁三三五)の解釋なり。

因みに以下の本文を解するに當りて次の如き事項を心得へ

六六 若し過去の四大を成就するものなれば、彼れは過去の造色をも成就するや。答へて曰はく、過去の四大を成就すること無きも、過去の造色を成就すること有り。無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處するものと、不戒律に處するものと、亦不戒律不戒律に處して身・口の本の教を有して失せざるものと、若しくは色界に生ずるものと、若しくは學にして無色界に生ずるものとなり。

六七 若し過去の四大を成就するものなれば、彼れは未來の四大をも成就するや。答へて曰はく、過去の四大を成就すること有ること無く、亦、未來の四大をも成就するに非ざるなり。

六八 若し過去の四大を成就するものなれば、彼れは未來の造色をも成就するや。答へて曰はく、過去の四大を成就するものは無きも、未來の造色を成就するものは有るなり。無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて色界の善心を得するものと、若しくは色界に生ずるものと、無垢人にして無色界に生ずるものとなり。

六九 若し過去の四大を成就するものなれば、彼れは現在の四大種をも成就するや。答へて曰はく、過去の四大を成就するもの無きも、現在の四大を成就するもの有り。欲界・色界に生ずるものなり。

七〇 若し過去の四大を成就するものなれば、彼れは現在の造色をも成就するや。答へて曰く、過去の四大を成就するものは無きも、現在の造色を成就するもの有り。欲界・色界に生ずるものなり。

七一 若し過去の造色を成就するものなれば、彼れは未來の四大をも成就するや。答へて曰はく、未來の四大を成就するものは無きも、過去の造色を成就するものは有り。無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處するものと、不戒律に處するものと、亦不戒律不戒律に處して身・口の本の教を有して失せざるものと、若しくは色界に生ずるものと、學にして無色界に生ずるものとなり。

【三九】 茲に因とは生・依・立・持・養の五因をいふ。

【四〇】 一の字は大正本に無きも三本・宮本・聖本によりて補へり。

【四一】 四大と色・聲・細滑入との相互相縁關係

【四二】 茲に因とは同類と異熟との二因をいふ。

【四三】 茲に因とは一の異熟因をいふ。

【四四】 四大と意入との相互相縁關係

【四五】 因とは茲にては一の異熟因をいふ。

【四六】 四大と法入との相互相縁關係

【四七】 因とは茲にては生等の五因と、俱有と同類との二因との七因となるなり。

【四八】 因とは茲にては俱有と同類と異熟との三因をいふ。

【四九】 茲に「入竟」の夾註あり。

【五〇】 四大と二十二根との相縁關係。

四大と七色根との相縁關係

【五一】 茲に因とは生等の五因をいふ。

【五二】 四大と意根・五受根・信等五根との相縁關係

因みに、發智論には次の命根を先に説きて說順茲と前後せり。

【五三】 四大と命根との相縁關係

り、法入は四大のために四八 因と増上となる。四九

四大は眼根のために五二 因と増上となり、眼根は四大のために一の増上となる。耳・鼻・舌・身根と男根と女根とにつきても亦、是くの如し。

四大は意根のために縁と増上となり、意根は四大のために因と増上となる。樂根と苦根と喜根と憂根と護根と信根と精進・念・定・慧根とにつきても亦、是くの如し。

四大は命根のために一の増上となり、命根は四大のために一の増上となる。已知根と無知根とにつきても亦、是くの如し。

何等を以ての故に、四大は一起・一住・一盡するに然かも相應せざるものとなし、心・心法は一起・一住・一盡して然かも彼れを相應するものとなすや。答へて曰はく、「四大は若しくは大となり、若しくは小となり得」と説くが如し。然かも心・心法は非らざればなり。復次に、心・心法は五九 共縁なるも四大は無縁なり。無縁五九 法は相應することを得ざればなり。

第三節 四大を不相應とし、心・心法を相應となす理由に就きて

第四節 三世の四大は三世の造色の何れを造るやに就きて

頗し過去の四大にして過去の色、又は未來・現在の色を造るものありや。答へて曰はく、有り。

頗し未來の四大にして未來の色を造るものありや。答へて曰はく、有り。過去と現在とは無縁六三なり。

頗し現在の四大にして現在の色を造るものありや。答へて曰はく、有り。過去のは無きも、未來のは有り。

なり。

【二八】 四大は四大及び造色のために護く縁となるや。

【二九】 因とは、茲にては俱有と同類との二因をいふ。俱生するを互に相望むるに俱有因となり、前生は後生のために同類因となればなり。

【三〇】 因とは茲にては、生因・依因・立因・持因・養因の五因をいふ、而して四大は造色のために同類因とならず。

【三一】 造色は造色及び四大のために護く縁となるや。

【三二】 茲に因とは俱有と同類と異熟との三因を指す。

【三三】 茲の因とは一の異熟因をいふ。

【三四】 本節は、(一)四大と心心法との相縁關係、(二)四大と十二入との相縁關係、(三)四大と二十二根との相縁關係を明にする段なり。

【三五】 四大と心心法との相互相縁關係。

【三六】 緣とは所縁縁の意にして、即ち四大は身識及び意識と其の相應法とのために所縁縁となるをいふ。

【三七】 茲に因とは一の異熟因をいふ。

【三八】 四大と十二入との相縁關係。

四大と五内入及び香・味入との相互相縁關係。

第五節 三世の四大と造色との相互成就關係

第六

第六

第六

第六

第五節 三世の四大と造色との相互成就關係

第六

二六 (一三)云何んが地なりや。云何んが地種なりや。

云何んが水なりや。云何んが水種なりや。

云何んが火なりや。云何んが火種なりや。

云何んが風なりや。云何んが風種なりや。

地は何の入の攝にして幾く識が識るや。地種と水と水種と火と火種と風と風種との四大は、幾く入の攝にして幾く識が識るや。

此の章の義を願くば具さに演説せん。

二七 第一節 四大と造色との相互相縁關係に就きて

二八 四大は彼の四大のために 因と増上となり。四大は造色のために 因と増上となる。

三三 造色は彼の造色のために 因と増上となり、造色は彼の四大のために 因と増上となる。

二四 第二節 四大と心・心法と十二入と二十二根との相互相縁關係

三五 四大は心・心法のために 縁と増上となり、心・心法は彼の心・心法のために、因と次第と縁と増上と

なり、心・心法は四大のために、因と増上となる。

三六 四大は眼入のために 因と増上となり、眼入は彼の眼入のために 因と増上となり、眼入は四大の

ために 一の増上となる。耳・鼻・舌・身入と香・味入とにつきても亦、是くの如し。

四一 四大は色入のために 因と増上となり、色入は彼の色入のために 因と増上となり、色入は四大の

ために 因と増上となる。聲・細滑入につきても亦、是くの如し。

四二 四大は意入のために 縁と増上となり、意入は彼の意入のために 因と次第と縁と増上となり、意入

は四大のために 因と増上となる。

四三 四大は法入のために 因と縁と増上となり、法入は彼の法入のために、因と次第と縁と増上とな

【三六】地・水・火・風と地水火風種との問題。

*大正本には、地種の上に地あるも、宮本にはなし。地は已出の故に、今は後者に據りて、之を除去す。

【三七】本節は、(一)四大は四大のために四縁中の幾く縁となるや。(二)四大は造色のために、(三)造色は造色のために、(四)造色は四大のために幾く縁となるやを明にせんとする段なり。

而して以下の論究ある所以は、譬喩者の「縁性は實有の法に非ず」との主張及び尊者(外にては大德)の「縁とは是れ諸師の假立の名號にして體は實有に非ず」との主張を遮止して「諸縁の體は是れ實有なり」と顯はさんが爲めと、更に又縁起に愚なる者が、十二因縁のみを縁起の法なりと考ふるを止めて、縁より生ずる所の内外の諸法は皆是れ縁起なることを顯はさんが爲めとなりとは婆沙論(百三十一卷、毘曇部十三、頁三一九)の解釋

若し欲界繫の造色を成就するものなれば、彼れは色界繫の造色をも成就するや。設し色界繫の造色を成就するものなれば、彼れは欲界繫の造色をも成就するや。

三〇 欲界繫の四大は色界繫の四大のために幾く縁として縁となるや。色界繫の四大は欲界繫の四大のために幾く縁として縁となるや。

欲界繫の四大は色界繫の造色のために幾く縁として縁となるや。色界繫の造色は欲界繫の四大のために幾く縁として縁となるや。

欲界繫の造色は色界繫の四大のために幾く縁として縁となるや。色界繫の四大は欲界繫の造色のために幾く縁として縁となるや。

欲界繫の造色は色界繫の造色のために幾く縁として縁となるや。色界繫の造色は欲界繫の造色のために幾く縁として縁となるや。

三一 諸色の欲界繫のもの、彼の色の一切は欲界繫の四大の所造なりや。設し色にして欲界繫の四大の所造なれば、彼の色の一切は欲界繫なりや。

諸色の色界繫のもの彼の色の一切は色界繫の四大の所造なりや。設し色にして色界繫の四大の所造なれば、彼の色の一切は色界繫なりや。

三二 諸色の過去なるもの、彼の色の一切は過去の四大の所造なりや。設し色にして過去の四大の所造なれば、彼の色の一切は過去なりや。

諸色にして未來なるもの、彼の色の一切は未來の四大の所造なりや。設し色にして未來の四大の所造なれば、彼の色の一切は未來なりや。

諸色にして現在なるもの、彼の色の一切は現在の四大の所造なりや。設し色にして現在の四大の所造なれば、彼の色の一切は現在なりや。

【三〇】 欲・色界繫の四大と造色との相互相縁論。

【三一】 欲・色界繫の色と欲・色界繫の四大の所造色との同異論。

【三二】 三世の色と三世の四大の所造色と同異論。

未來の造色は現在の造色のために幾く縁として縁となるや。現在の造色は未來の造色のために幾く縁として縁となるや。^{一、二}

現在の四大は現在の造色のために幾く縁として縁となるや。現在の造色は現在の四大のために幾く縁として縁となるや。^三

(七)若し欲界繫の四大を成就するものなれば、彼れは欲界繫の造色をも成就するや。設し欲界繫の造色を成就するものなれば、彼れは欲界繫の四大をも成就するや。

若し色界繫の四大を成就するものなれば、彼れは色界繫の造色をも成就するや。設し色界繫の造色を成就するものなれば、彼れは色界繫の四大をも成就するや。

(八)欲界繫の四大は彼の欲界繫の四大のために幾く縁として縁となるや。欲界繫の四大は欲界繫の造色のために、幾く縁として縁となるや。欲界繫の造色は彼の欲界繫の造色のために幾く縁として縁となるや。欲界繫の造色は、彼の欲界繫の四大のために幾く縁として縁となるや。

色界繫の四大は彼の色界繫の四大のために幾く縁として縁となるや。色界繫の四大は色界繫の造色のために幾く縁として縁となるや。色界繫の造色は彼の色界繫の造色のために幾く縁として縁となるや。色界繫の造色は色界繫の四大のために幾く縁として縁となるや。

(九)若し欲界繫の四大を成就するものなれば、彼れは色界繫の四大をも成就するや。設し色界繫の四大を成就するものなれば、彼れは欲界繫の四大をも成就するや。

若し欲界繫の四大を成就するものなれば、彼れは色界繫の造色をも成就するや。設し色界繫の造色を成就するものなれば、彼れは欲界繫の四大をも成就するや。

若し欲界繫の造色を成就するものなれば、彼れは色界繫の四大をも成就するや。設し色界繫の四大を成就するものなれば、彼れは欲界繫の造色をも成就するや。

【一】茲に「未來造色竟」の夾註あり。

【二】茲に「三世竟」の夾註あり。

【三】欲・色界繫の四大と造色との成就論。

【二】欲・色界繫の四大と造色との相縁論。

【三】欲・色界繫の四大と造色との相互成就論。

過去の四大は現在の四大のために幾く縁として縁となるや。現在の四大は彼の現在の四大のために幾く縁として縁となるや。現在の四大は過去の四大のために幾く縁として縁となるや。

過去の四大は現在の造色のために幾く縁として縁となるや。現在の造色は彼の現在の造色のために幾く縁として縁となるや。現在の造色は過去の四大のために幾く縁として縁となるや。^{一五}

過去の造色は未來の四大のために幾く縁として縁となるや。未來の四大は過去の造色のために幾く縁として縁となるや。

過去の造色は未來の造色のために幾く縁として縁となるや。未來の造色は過去の造色のために幾く縁として縁となるや。

過去の造色は現在の四大のために幾く縁として縁となるや。現在の四大は過去の造色のために幾く縁として縁となるや。

過去の造色は現在の造色のために幾く縁として縁となるや。現在の造色は過去の造色のために幾く縁として縁となるや。^{一六}

未來の四大は未來の造色のために幾く縁として縁となるや。未來の造色は未來の四大のために幾く縁として縁となるや。

未來の四大は現在の四大のために幾く縁として縁となるや。現在の四大は未來の四大のために幾く縁として縁となるや。

未來の四大は現在の造色のために幾く縁として縁となるや。現在の造色は未來の四大のために幾く縁として縁となるや。^{一七}

未來の造色は現在の四大のために幾く縁として縁となるや。現在の四大は未來の造色のために幾く縁として縁となるや。

【一五】茲に「過去四大竟」の夾註あり。

【一六】茲に「過去造色竟」の夾註あり。

【一七】茲に「未來四大竟」の夾註あり。

若し未來の四大を成就するものなれば、彼れは未來の造色をも成就するや。設し未來の造色を成就するものなれば、彼れは未來の四大をも成就するや。

若し未來の四大を成就するものなれば、彼れは現在の四大をも成就するや。設し現在の四大を成就するものなれば、彼れは未來の四大をも成就するや。設し現在の造色を成就するものなれば、彼れは未來の四大をも成就するや。^二

若し未來の造色を成就するものなれば、彼れは現在の四大をも成就するや。設し現在の四大を成就するものなれば、彼れは未來の造色をも成就するや。

若し未來の造色を成就するものなれば、彼れは現在の造色をも成就するや。設し現在の造色を成就するものなれば、彼れは未來の造色をも成就するや。^三

若し現在の四大を成就するものなれば、彼れは現在の造色をも成就するや。設し現在の造色を成就するものなれば、彼れは現在の四大をも成就するや。^三

(六) 過去の四大は彼の過去の四大のために幾く縁として縁となるや。過去の四大は過去の造色のために幾く縁として縁となるや。

過去の造色は彼の過去の造色のために幾く縁として縁となるや。過去の造色は過去の四大のために幾く縁として縁となるや。

過去の四大は未來の四大のために幾く縁として縁となるや。未來の四大は彼の未來の四大のために幾く縁として縁となるや。未來の四大は過去の四大のために幾く縁として縁となるや。

過去の四大は未來の造色のために幾く縁として縁となるや。未來の造色は彼の未來の造色のために幾く縁として縁となるや。未來の造色は過去の四大のために幾く縁として縁となるや。

【二】 茲に「未來四大竟」の夾註あり。

【三】 茲に「未來造色竟」の夾註あり。

【三】 茲に「三世成就竟」の夾註あり。

【四】 三世の四大と三世の造色との相互相縁論。

頗し未來の四大にして未來の色、又は過去・現在の色を造るものありや。
 頗し現在の四大にして現在の色、又は過去・未來の色を造るものありや。

ⁿ (五) 若し過去の四大を成就するものなれば、彼れは過去の造色をも成就するや。設し過去の造色を成就するものなれば、彼れは過去の四大をも成就するや。

若し過去の四大を成就するものなれば、彼れは未來の四大をも成就するや。設し未來の四大を成就するものなれば、彼れは過去の四大をも成就するや。若し過去の四大を成就するものなれば、彼れは未來の造色をも成就するや。設し未來の造色を成就するものなれば、彼れは過去の四大をも成就するや。

若し過去の四大を成就するものなれば、彼れは現在の四大をも成就するや。設し現在の四大を成就するものなれば、彼れは過去の四大をも成就するや。若し過去の四大を成就するものなれば、彼れは現在の造色をも成就するや。設し現在の造色を成就するものなれば、彼れは過去の四大をも成就するや。^{na}

若し過去の造色を成就するものなれば、彼れは未來の四大をも成就するや。設し未來の四大を成就するものなれば、彼れは過去の造色をも成就するや。若し過去の造色を成就するものなれば、彼れは未來の造色をも成就するや。設し未來の造色を成就するものなれば、彼れは過去の造色をも成就するや。

若し過去の造色を成就するものなれば、彼れは現在の四大をも成就するや。設し現在の四大を成就するものなれば、彼れは過去の造色をも成就するや。若し過去の造色を成就するものなれば、彼れは現在の造色をも成就するや。設し現在の造色を成就するものなれば、彼れは過去の造色をも成就するや。^o

【八】三世の四大と造色との相互成就論。

【九】茲に「過去四大竟」の夾註あり。

【一〇】茲に「過去造色竟」の夾註あり。

卷の第十九 (第五編 大種健度)

第二章 四大及び造色の相縁・成就等に關する論究

(四大健度中・縁跋渠第二) (發智論第十三、大正・二六、九八四頁)

本章の内容目次

一 四大は彼の四大のために幾く縁として縁となるや。四大は造色のために幾く縁として縁となるや。

二 造色は彼の造色のために幾く縁として縁となるや。造色は四大のために幾く縁として縁となるや。

三 (一)四大は心心法のために幾く縁として縁となるや。心・心法は彼の心・心法のために幾く縁として縁となるや。心・心法は四大のために幾く縁として縁となるや。

四大は眼入のために幾く縁として縁となるや。眼入は彼の眼入のために幾く縁として縁となるや。眼入は四大のために幾く縁として縁となるや。四大は乃至法入のために幾く縁として縁となるや。法入は四大のために幾く縁として縁となるや。

四大は眼根のために幾く縁として縁となるや。眼根は四大のために幾く縁として縁となるや。四大は乃至無知根のために幾く縁として縁となるや。無知根は四大のために、幾く縁として縁となるや。

(三)何等を以つての故に、四大は一起・一住・一盡して然かも相應せざるものなるに、心・心法は一起・一住・一盡して然かも彼れに相應するものなりや。

(四)頗し過去の四大にして過去の色、又は未來・現在の色を造るものありや。

【一】 本章は四大と所造色との相縁關係、相互成就關係等を主として明し、最後に地水火風と地種・水種・火種・風種との問題を論ずる段なり。其の組織は内容目次に顯はるるが如くなるも、今之を發智論の頌文によりて示せば次の如し。

「大造心處根相對縁、有レ幾相應造^ニ三世^一、世界^ノ辯^ニ成緣^一、大種與^ニ造色^一、界世^ノ爲^ニ同異^一、四體^ノ辯^ニ識^一、門^ノ此章^ノ願具說^一。

【二】 四大と造色との相縁問題。

【三】 四大と心心法^ノ十二入^ノ二十二根との相縁問題。

【四】 茲に「入竟」の夾註あり。

【五】 茲に「根竟」の夾註あり。

【六】 四大不相應論。

【七】 三世の四大は三世の造色の何れを造るやの問題。

九九 有對更樂と有覺と有觀とは或は初に依り、或は未來に依る。

一〇〇 樂根は或は三に依り、或は未來に依る。

喜根は或は二に依り、或は未來に依る。

苦根と憂根と搏食とは未來に依る。

護根と更樂食と意念食と識食とは或は七に依り或は未來に依る。

一〇一 第六節 四大乃至四食の已盡無餘(已斷遍知)は何果に任してなりやに就きて

一〇二 四大の已盡無餘は當に何果にて作すと云ふべきや。答へて曰く、阿羅漢果にてか或は處所無

一〇三 きかたり。

造色と有對更樂と有覺と有觀と樂根と喜根とは、阿羅漢果にてか、或は處所無きかなり。

一〇四 苦根と憂根と搏食とは、阿那含果にてか、阿羅漢果にてか或は處所無きかなり。

一〇五 護根と更樂食と意念食と識食とは、阿羅漢果にてなり。

(阿毘曇淨根跋婁第一竟、梵本三百九十二首虛秦五千八百八十九言)

有對更樂と有覺と有觀と五根と四食との已盡無餘、即ち已斷已遍知は四沙門果中の何の果に住して作すやに關して論

究する段なり。

【一〇四】四大乃至喜根の已盡無餘は何果に任してなりや。

【一〇五】「處所無し」は未だ果に

住せざる位をいふ。即ち第四禪の染を離るる最後の解脫道乃至、有頂の染を離るる第八無間道迄の位をいふなり。

に依りて減するやに就きて。

【九七】四とは四根本禪をいふ、未來とは未至の意にして茲にては未至と靜慮中間と空無邊處の近分とを指す。空無邊處の近分にて色を減するは世俗道に依るも他は無漏道によるなり。

【九八】有對更樂及び有覺・有觀は何定によりて減するやに就きて。

【九九】茲の未來とは初二禪の近分と靜慮中間との三をいふ。

【一〇〇】五根と四食とは何定に依りて減するやに就きて。

【一〇一】茲の未來とは未至定をいふ、苦根と憂根と搏食とは唯、欲界にのみ在るが故に、未至定によりてのみ減し得ればなり。

【一〇二】本節は四大と造色と、

【一〇三】苦・憂根及び搏食の已盡無餘は何果に任してなりや。

【一〇四】護根乃至識食の已盡無餘は何果に任してなりや。

阿毘曇八禪度論卷第十八

曰く、是くの如し。^{九六}

若し善の色を成就するものなれば、彼れは不善の色と、隱没無記・不隱没無記の色とを成就するや。答へて曰く、此れも亦、無きなり。^{九七}

若し不善の色を成就するものなれば、彼れは隱没無記の色をも成就するや。答へて曰く、此も亦無きなり。^{九八}

若し不善の色を成就するものなれば、彼れは不隱没無記の色をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。若し不善の色を成就するものなれば、彼れは不隱没無記の色をも成就するなり。^{九九}

頗し不隱没無記の色を成就するも不善の色は非らざるものありや。答へて曰く、有り。母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律儀に處して不善の身・口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのもの、亦不戒律不戒律に處して不善の身・口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのもの、若しくは色界に生ずるものとなり。^{一〇〇}

若し不善の色を成就するものなれば、彼れは隱没無記と不隱没無記との色をも成就するや。答へて曰く、無きなり。^{一〇一}

若し隱没無記の色を成就するものなれば、彼れは不隱没無記の色をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。若し隱没無記の色を成就するものなれば、彼れは不隱没無記の色をも成就するなり。^{一〇二}

頗し不隱没無記の色を成就するも隱没無記の色は非らざるものありや。答へて曰く、有り。欲界に生ずるものと、若しくは色界に生じて隱没無記の身・口の教無きものとなり。^{一〇三}

第五節 四大乃至四食は何定に依りて減するやに就きて

四大は何の三昧に由りて減するや。答へて曰く、或は 四に依り、或は 未來に依るなり。^{一〇四}

造色は或は四に依り、或は未來に依る。

第一章 四大と所造色との諸種の關係論

四四三

【九六】 茲に「雙竟」の夾註あり。

【九七】 善の色と不善・隱没・不隱没無記の色との成就關係。

【九八】 茲に「善色竟」の夾註あり。

【九九】 不善の色と隱没無記の色との成就關係。

【一〇〇】 亦は大正本に無きも三本・宮本によりて補へり。

【一〇一】 不善の色と不隱没無記の色との成就關係。

【一〇二】 不善の色と隱没・不隱没無記の色との成就關係。

【一〇三】 茲に「不善竟」の夾註あり。

【一〇四】 隱没無記の色と不隱没無記の色との成就關係。

【九五】 本節は、四大と造色と、有對更樂と有覺と有觀と、樂・喜・護・憂・苦の五根と、搏食・更樂食、意念食、識食の四食とが何の定によりて減するやを明にする段なり。

(婆沙百二十九卷、毘曇部十三、頁二七九以下參照)。

【九六】 四大及び造色は何の定

の所説のものはれを成就するものと謂ふなり。云何んが成就せざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ不戒律に處して善の身・口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して不善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかにして善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを成就せざるものと謂ふなり。

若し善の色を成就するものなれば、彼れは隱沒無記と不隱沒無記との色をも成就するや。答へて曰く、或は善の色を成就するも隱沒無記と不隱沒無記との色は非らざるものとあり、及び不隱沒無記の色を成就するも、隱沒無記の色は非らざるものあり、及び隱沒無記と不隱沒無記との色を成就するものあり。

云何んが善の色を成就するも隱沒無記と不隱沒無記との色は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ、戒律に處するものと、不戒律に處するか亦不戒律不戒律に處するかにして善の身・口の教を有するか、本に教を有して失せざるかのものと、若しくは色界に生じて隱沒無記の身・口の教無きものと、是れを善の色と及び不隱沒無記の色とを成就するも、隱沒無記の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが善の色と及び不隱沒無記の色とを成就するも隱沒無記の色は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ、戒律に處するものと、不戒律に處するか亦不戒律不戒律に處するかにして善の身・口の教を有するか、本に教を有して失せざるかのものと、若しくは色界に生じて隱沒無記の身・口の教無きものと、是れを善の色と及び不隱沒無記の色とを成就するも、隱沒無記の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが善の色と及び不隱沒無記・不隱沒無記の色とを成就するものなりや。答へて曰く、色界に生じて隱沒無記の身・口の教を有するもの、是れを善の色と隱沒無記・不隱沒無記の色とを成就するものと謂ふなり。

設し隱沒無記と不隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。答へて

【六二】善の色と隱沒・不隱沒無記の色との成就關係。

此は亦、無きなり。

若し善の色を成就するものなれば、彼れは不善と不隠没無記との色をも成就するや。答へて曰く、或は善の色を成就するも不善と不隠没無記との色は非らざるものあり、及び不隠没無記の色を成就するも不善の色は非らざるものあり、及び不善と不隠没無記との色を成就するものあり。

云何んが善の色を成就するも不善と不隠没無記との色は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして無色界に生ずるもの、是れを善の色を成就するも不善と不隠没無記との色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが善の色と及び不隠没無記の色とを成就するも不善の色は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處して不善の身・口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して善の身・口の教を有するか、本に教を有して失せざるかにして不善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを善の色と及び不隠没無記の色とを成就するも不善の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが善の色と及び不善・不隠没無記の色とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ戒律に處して不善の身・口の教を有するか、本に教を有して失せざるかのものと、不戒律に處して善の身・口の教を有するか、本に教を有せしも失せざるかのものと、亦不戒律不戒律に處して善・不善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、是れを善の色と及び不善・不隠没無記の色とを成就するものと謂ふなり。

設し不善と不隠没無記との色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。答へて曰く、或は成就するものあり、或は成就せざるものあり。云何んが成就するものなりや。答へて曰く、向

【八四】善の色と不善・不隠没無記の色との成就關係。

頗し善の色を成就するも隱沒無記の色は非らざるものありや。答へて曰く、有り。無垢人にして母胎と膜卵漸厚とに處するものと、欲界に生じ戒律に處するものと、不戒律に處するか亦不戒律不戒律に處するかにして善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、若しくは色界に生じて隱沒無記の身・口の教無きものと、若しくは無垢人にして無色界に生ずるものと、是れを善の色を成就するも隱沒無記の色は非らざるものと謂ふなり。

若し善の色を成就するものなれば、彼れは不隱沒無記の色をも成就するや。答へて曰く、或は善の色を成就するも不隱沒無記の色は非らざるものあり。

(一)云何んが善の色を成就するも不隱沒無記の色は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして無色界に生ずるもの、是れを善の色を成就するも不隱沒無記の色は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが不隱沒無記の色を成就するも善の色は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と膜卵漸厚とに處するものと若しくは欲界に生じ不戒律に處して善の身・口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと是れを不隱沒無記の色を成就するも善の色は非らざるものと謂ふなり

(三)云何んが善の色と不隱沒無記の色とを成就するものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と膜卵漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて戒律に處するものと、不戒律に處するか亦不戒律不戒律に處するかにして善の身・口の教を有するか、本に教を有して失せざるかのものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを善の色と不隱沒無記の色とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが善の色と不隱沒無記の色とを成就せざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして無色界に生ずるもの、是れを善の色と不隱沒無記の色とを成就せざるものと謂ふなり。

若し善の色を成就するものなれば、彼れは不善と隱沒無記との色をも成就するや。答へて曰く、

【八〇】「是れを……と謂ふなり」は大正本に無きも三本。宮本によりて補へり。

【八一】善の色と不隱沒無記の色との成就關係。

【八二】茲に「婁竟」の夾註あり。

因みに、大正本に雙とあるは婁の誤りなり。

【八三】善の色と不善・隱沒無記の色との成就關係。

(一)云何んが善の色を成就するも不善の色は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處して不善の身・口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して善の身・口の教を有するか、本に教を有して失せざるかにして不善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、若しくは色界に生ずるものと、無垢人にして無色界に生ずるものと、是れを善の色を成就するも不善の色は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが不善の色を成就するも善の色は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ不戒律に處して善の身・口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して不善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかにして、善の身・口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを不善の色を成就するも善の色は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが善と不善との色を成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ、戒律に處して不善の身・口の教を有するか、本に教を有して失せざるかのものと、不戒律に處して善の身・口の教を有するか、本に教を有して失せざるかのものと、亦不戒律不戒律に處し善・不善の身・口の教を有するか、本に教を有して失せざるかのものと、是れを善と不善との色を成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが、善と不善との色を成就せざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて亦不戒律不戒律に處して善と不善との身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、凡夫人にして無色界に生ずるものと、是れを善と不善との色を成就せざるものと謂ふなり。

若し善の色を成就するものなれば、彼れは隱沒無記の色をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。若し隱沒無記の色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するなり。

【无】善の色と隱沒無記の色との成就關係。

の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不不戒律に處し善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを四大と及び不隱沒無記の色とを成就するも善と隱沒無記との色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大と及び善・不隱沒無記の色とを成就するも隱沒無記の色は非らざるものなりや。答へて曰はく、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處するものと、不戒律に處するか亦不戒律不不戒律に處するかにして善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、若しくは色界に生じて隱沒無記の身・口の教無きものと、是れを四大と及び善・不隱沒無記の色とを成就するも隱沒無記の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大と及び善・隱沒無記・不隱沒無記の色とを成就するものなりや。答へて曰はく、色界に生じ、隱沒無記の身・口の教を有するもの、是れを四大と及び善・隱沒無記・不隱沒無記の色とを成就するものと謂ふなり。

設し善と隱沒無記と不隱沒非記との色を成就するものなれば彼れは四大をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。

若し四大を成就するものなれば、彼れは、不善と隱沒無記と不隱沒無記との色をも成就するや。

答へて曰く、無きなり。

若し四大を成就するものなれば、彼れは善と不善と隱沒無記と不隱沒無記との色をも成就するや。

答へて曰く、此れも亦無きなり。

第四節 善・不善・隱沒・不隱沒無記色の相互成就關係

若し善の色を成就するものなれば、彼れは不善の色をも成就するや。答へて曰く、或は善の色を成就するも不善の色は非らざるものあり。

【三】 四大と不善・隱沒・不隱沒無記の色との成就關係。
【四】 茲に「三竟」の夾註あり。
【五】 四大と善・不善・隱沒・不隱沒無記の色との成就關係。
【六】 茲に「四大竟」の夾註あり。
【七】 本節は善の色と不善の色と隱沒無記の色と不隱沒無記の色との相互成就關係を明にする段なり。
【八】 善の色と不善の色との成就關係。

のものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを四大及び善・不隠没無記の色とを成就するも、不善の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大及び不善・不隠没無記の色とを成就するも善の色は非らざるものなりや。答へて曰く、若しくは欲界に生じ不戒律に處して善の身・口の教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して不善の身口の教を有するか本に教を有して失せざるかにして善の身口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを四大及び不善・不隠没無記の色とを成就するも善の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大及び善・不善・不隠没無記の色とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ、戒律に處し不善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、不戒律に處して善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、亦不戒律不戒律に處して善・不善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、是れを四大及び善・不善・不隠没無記の色とを成就するものと謂ふなり。

設し善と不善と不隠没無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。

若し四大を成就するものなれば、彼れは善と隠没無記と不隠没無記との色をも成就するや。答へて曰く、或は四大及び不隠没無記の色とを成就するも善と隠没無記との色は非らざるものあり、及び善と不隠没無記との色を成就するも隠没無記の色は非らざるものあり、及び善と隠没無記と不隠没無記との色を成就するものあり。

云何んが四大及び不隠没無記の色とを成就するも善と隠没無記との色は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ不戒律に處し、善

【七二】 設は大正本に若とあるも三本、宮本によりて設と改む。

【七三】 四大と善・隠没・不隠没無記の色との成就關係。

び不隱沒無記の色とを成就するも、隱沒無記の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大と及び隱沒無記・不隱沒無記の色とを成就するものなりや。答へて曰く、色界に生じて隱沒無記の身・口の教を有するもの、是れを四大と及び隱沒無記・不隱沒無記の色とを成就するものと謂ふなり。

設し隱沒無記と不隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。答へて曰く、是くの如し^{六七}。

若し四大を成就するものなれば、彼れは善と不善と隱沒無記との色をも成就するや。答へて曰く、無きなり^{六八}。

若し四大を成就するものなれば、彼れは善と不善と不隱沒無記との色をも成就するや。答へて曰く、或は四大と及び不隱沒無記の色とを成就するも、善と不善との色は非らざるものあり、及び善と不隱沒無記との色を成就するも不善の色は非らざるものあり、及び不善と不隱沒無記との色を成就するも善の色は非らざるものあり、及び善と不善と不隱沒無記との色を成就するものあり。

云何んが四大と及び不隱沒無記の色とを成就するも善と不善との色は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ亦不戒律不戒律に處して善・不善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかものと、是れ四大と及び不隱沒無記の色とを成就するも善と不善との色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大と、及び善・不隱沒無記の色とを成就するも不善の色は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處して不善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかものと、亦不戒律不戒律に處して善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかにして不善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるか

【六七】 茲に「雙竟」の夾註あり。

【六八】 四大と善・不善・隱沒無記の色との成就關係。

【六九】 不善の色は欲界にのみあり、隱沒無記の色は色界にのみあるに一有情にして俱時に二界に生ずること無ければなり。

【七〇】 四大と善・不善・不隱沒無記の色との成就關係。

【七〇】 四大と善・不善・不隱沒無記の色との成就關係。

きなり。

若し、四大を成就するものなれば、彼れは不善と不隠没無記との色をも成就するや。答へて曰く、或は四大と及び不隠没無記の色とを成就するも不善の色は非らざるものあり、及び不善と不隠没無記との色を成就するものあり。

云何んが四大と及び不隠没無記の色とを成就するも不善の色は非らざるものなりや。答へて曰く、母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處して不善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して不善の身口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを四大と及び不隠没無記の色とを成就するも不善の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大と及び不善・不隠没無記の色とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ戒律に處して不善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、不戒律に處するか亦不戒律不戒律に處するかにして不善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、是れを四大と不善・不隠没無記の色とを成就するものと謂ふなり。

設し不善と不隠没無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。

若し四大を成就するものなれば、彼れは隠没無記と不隠没無記との色をも成就するや。答へて曰く、或は四大と及び不隠没無記の色とを成就するも隠没無記の色は非らざるものなり、及び隠没無記と不隠没無記との色を成就するものあり。

云何んが四大と及び不隠没無記の色とを成就するも隠没無記の色は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生ずるものと、若しくは色界に生じて隠没無記の身・口の教無きものと、是れを四大と及

【六五】 四大と不善・不隠没無記色との成就關係。

【六六】 四大と隠没・不隠没無記色との成就關係。

するも隱沒無記の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大と及び善・隱沒無記の色とを成就するものなりや。答へて曰く、色界に生じて隱沒無記の身・口の教を有するもの、是れを四大と及び善・隱沒無記の色とを成就するものと謂ふなり。

設し善と隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。

若し四大を成就するものなれば、彼れは善と不隱沒無記との色をも成就するや。答へて曰く、或は四大と及び不隱沒無記の色とを成就するも善の色は非らざるものあり、及び善と不隱沒無記との色を成就するものあり。

云何んが四大と不隱沒無記の色とを成就するも善の色は非ざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ不戒律に處して善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを四大と及び不隱沒無記の色とを成就するも善の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大と及び善・不隱沒無記の色とを成就するものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處するものと、不戒律に處するか亦不戒律不戒律に處するかにして善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを四大と及び善・不隱沒無記の色とを成就するものと謂ふなり。

設し善と不隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。

若し四大を成就するものなれば、彼れは不善と隱沒無記との色をも成就するや。答へて曰く、無

根等の不隱沒無記の色を必ず成就し身根を成就するものは必ず四大を成就す。又、無色界に生ずるものは、四大も不隱沒無記色も共に成就せざるなり。

【五八】 茲に「復竟」の夾註あり。

【五九】 四大と善・不善色との成就關係。

【六〇】 不是大正本に無きも三本・宮本によりてこれを補へり。次の※印はこれに準ず。

【六一】 四大と善・隱沒無記との成就關係。

因みに、欲界に於ては隱沒無記の色を成就するものなきことを心得へ置かば以下の文解し易し。

【六二】 四大と善・不隱沒無記色との成就關係。

【六三】 四大と不善・隱沒無記色との成就關係。

【六四】 不善の色を成就するものは必ず欲界に在り隱沒無記の色を成就するものは必ず色界に在り、然るに一有情にして俱時に二界に生ずるもの無きが故なり。

戒律に處して不善の身・口の教を有するか本に教を有し失せずして善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを四大と及び不善の色とを成就するも善の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大と及び善・不善の色とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ戒律に處して不善の身口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと不戒律に處して善の身口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、亦不戒律不戒律に處し善・不善の身口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、是れを四大と及び善・不善の色とを成就するものと謂ふなり。

設し善・不善の色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。
若し四大を成就するものなれば、彼れは善と隱沒無記との色をも成就するや。答へて曰く、或は四大を成就するも善と隱沒無記との色は非らざるものあり、及び善の色を成就するも隱沒無記の色は非らざるものあり、及び善と隱沒無記との色を成就するものあり。

云何んが四大を成就するも善と隱沒無記との色は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ不戒律に處し善の身・口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して善の身口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを四大を成就するも善と隱沒無記との色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大と及び善の色とを成就するも隱沒無記の色は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處するものと、不戒律に處するか亦不戒律不戒律に處するかにして善の身・口の教を有するか本に教を有して失せざるかのものと、若しくは色界に生じ隱沒無記の身口の教無きものと、是れを四大と及び善の色とを成就

(十)四大と隱沒、不隱沒無記色、(十一)四大と善・不善・隱沒無記色、(十二)四大と善・不善・隱沒、不隱沒無記色、(十三)四大と不善・隱沒、不隱沒無記色、(十四)四大と善・不善・隱沒、不隱沒無記色との、成就關係を明にする段なり。

【五】 四大と善の色との成就關係、
【五二】 四大と不善の色との成就關係。

【五三】 不善の色を成就するものは必ず欲界に在るを以つて四大をも成就するなり。

【五四】 四大と隱沒無記色との成就關係。

【五五】 隱沒無記の色を成就するものは必ず色界に在り、而かも色界に在りては四大を成就せざるものあることなきなり。

【五六】 欲界に在りては定んで隱沒無記の教を起すものなきなり。何となれば欲界に於ける隱沒無記の煩惱は、身見と邊見との此の二と相應する無明とのみなるに此は共に見所斷なれば教を起すこと能はざればなり。

【五七】 四大と不隱沒無記色との成就關係。
四大を成就するものは必ず身

若し五五 隱沒無記の色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するなり。頗し四大を成就するも、
隱沒無記の色は非らざるものありや、答へて曰く、有り五六。欲界に生ずるものと、若しくは色界に生じ
て隱沒無記の身・口の教無きものとなり。

若し五七 四大を成就するものなれば、彼れは不隱沒無記の色をも成就するや。答へて曰く、是くの如
し。設し不隱沒無記の色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。答へて曰く、是くの
如し五六。

若し五九 四大を成就するものなれば、彼れは善と不善との色をも成就するや。答へて曰く、或は四大を
成就するも善と不善との色は非らざるものあり及び善の色を成就するも不善の色は非らざるものあ
り、及び不善の色を成就するも善の色は非らざるものあり及び善と不善との色を成就するものあり。

云何んが四大を成就するも善と不善との色は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母
胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ亦不戒律不戒律に處して善と不善との身口
の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを四大を成就するも善と不善との色は非
らざるものと謂ふなり。

云何んが、四大と及び善の色とを成就するも不善の色は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人
にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處して不善の身・口の教無きか
本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して善の身・口の教を有するか本に
教を有し失せざるかにして不善の身口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと若しくは
色界に生ずるものと、是れを四大と及び善の色とを成就するも不善の色は非らざるものと謂ふなり。

云何んが四大と及び六〇 不善の色とを成就するも善の色は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界
に生じ不戒律に處して善の身口の教無きか本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不不

答ふ、無し。幾くか修所斷な
りや。答ふ、九と二の少分と
なり。幾くか不斷なりや、答
ふ、一の少分なり」として三斷分
別をなせり。

【四四】 茲に「入竟」の夾註あ
り。【四三】 本節は、四大と所造色
との成就關係及び不成就關係
を明にする段なり。

【四二】 四大と造色との成就關
係。色界の一切の有情は必ず
四大と造色を成就するなり。

【四一】 無色界には色無きが故
に四大を成就せざるも、無垢
人は無漏の隨轉色たる所造色
を成就するなり。

【四〇】 四大と所造色との不成
就關係。無色界の凡夫人は必ず四大と
所造色とを成就せざるなり。

【三九】 茲に「造竟」の夾註あ
り。【三五】 本節は—
（一）四大と善の色、
（二）四大と不善の色、
（三）四大と隱沒無記色、
（四）四大と不隱沒無記色、
（五）四大と善・不善の色、
（六）四大と善・隱沒無記色、
（七）四大と善・不隱沒無記色、
（八）四大と不善・隱沒無記色、
（九）四大と不善・不隱沒無記
色、

るも、善の色は非らざるものあり。

(一)云何んが四大を成就するも善の色は非ざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ不戒律に處して善の身口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのものと、不戒律不戒律に處して善の身、口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを四大を成就するも善の色は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが善の色を成就するも四大は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして無色界に生ずるもの、是れを善の色を成就するも四大は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが、四大と善の色とを成就するものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處するものと、不戒律に處するか亦不戒律不戒律に處するかにして善の身・口の教を有するか、本に教を有して失せざるかのものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを四大と善の色とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが、四大を成就するにも非ず善の色も非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして無色界に生ずるもの、是れを四大を成就するに非ず、善の色も非らざるものと謂ふなり。

若し四大を成就するものなれば、彼れは不善の色をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。若し不善の色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するなり。頗し四大を成就するも、不善の色は非らざるものありや。答へて曰く、有り。母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ戒律に處して不善の身・口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのものと、亦不戒律不戒律に處して不善の身・口の教無きか、本に教を有せしも便ち失せるかのものと、若しくは色界に生ずるものとなり。

若し四大を成就するものなれば、彼れは隱沒無記の色をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。

【三二】 四大所造の入の有爲、無爲分別。

【三三】 發智論には次に「幾くか無爲なりや。答ふ。無し」の文句あり。

【三四】 四大所造の入の三世分別。

【三五】 四大所造の入の三性分別。

【三六】 三の少入とは、色と聲と法との三入の少分をいふ。

【三七】 七とは五内入と香・味入となり。

【三八】 四大所造の入の界繫分別。

【三九】 二とは香・味の二入をいひ、九とは五内入と色・聲・更樂法入となり。

【四〇】 以下の文は、發智論及び婆沙論の本文には「幾くか無色界繫なるや、答ふ無し」とあり、且つ婆沙論にはこれに「彼れに色無きが故に」の註解を附せり(婆沙百二十八卷、毘曇部十三、頁二六〇)。

【四一】 四大所造の入の三學分別。

【四二】 一の少入とは法入の少分をいふなり。

【四三】 二の少文とは更樂入と法入との少分のこと。

【四四】 四大所造の入の思惟斷不斷分別。

發智論は以下の文を「大種所造の處は幾くか見所斷なりや。

三二 幾くか有爲なりや。答へて曰く、九と二の少入となり。

三三 幾くか過去なりや。答へて曰く、十一の少入なり。幾くか未來なりや、答へて曰く、十一の少入なり。幾くか現在なりや。答へて曰く、十一の少入なり。

三四 幾くか善なりや、答へて曰く、三の少入なり、幾くか不善なりや。答へて曰く、三の少入なり。幾くか無記なりや。答へて曰く、七と三の少入となり。

三五 幾くか欲界繫なりや、答へて曰く、二と九の少入となり。幾くか色界繫なりや。答へて曰く、九の少入なり。幾くか不繫なりや。答へて曰く、一の少入なり。

三六 幾くか學なりや。答へて曰く、一の少入なり、幾くか無學なりや。答へて曰く、一の少入なり。幾くか非學非無學なりや。答へて曰く、九と二の少入となり。

三七 幾くか思惟斷なりや、答へて曰く、九と二の少入となり。幾くか不斷なりや。答へて曰く、一の少入なり。

四四 第二節 四大と造色との成就・不成就關係に就きて

四六 若し四大を成就するものなれば、彼れは造色をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。若し四大を成就するものなれば、彼れは造色をも成就するなり。頗し造色を成就するも四大は非らざるものありや。答へて曰く、有り。無垢人にして無色界に生ずるものなり。

四八 若し四大を成就せざるものなれば、彼れは造色をも成就せざるや。答へて曰く、是くの如し。若し造色を成就せざるものなれば、彼れは四大をも成就せざるなり。頗し四大を成就せざるも造色を成就せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。無垢人にして無色界に生ずるものなり。

四五 第三節 四大種と善・不善・隱沒・不隱沒無記色との成就關係

四九 若し四大を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。答へて曰く、或は四大を成就す

天が「色は唯大種のみなり」と主張し、法救が「大種を離れて別に造色あり」と主張し、又「所造觸と法處所攝の色とは實有に非ず」と主張し、外道が「大種に五あり(四大に虚空を加ふ)」、と主張するを破せんが爲めなり、となり。(婆沙百二十七卷、毘曇部十三、頁二四〇以下参照)。
【三二】 四大所造の入の可見・不可見分別。
【三三】 四大所造の入の可見・不可見とは發智論に有見・無見とあり。
【三四】 一とは色入をいふ。
【三五】 八とは眼・耳・鼻・舌・身・聲・香・味の八入をいひ、二の少入とは更樂入と法入との少分をいふなり。因みに更樂中には堅・濕・煖・動の如く、所造に非ざるものあり、又法入中には無教色のみを取るが故に茲に少入といへるなり。
【三六】 四大所造の入の有對・無對分別。
【三七】 九とは五内入と四外入とにして、一の少分とは更樂入の少入をいふ。
【三八】 一の少入とは法入の少分にして無教色を指すなり。
【三九】 四大所造の入の有漏・無漏分別。
【四〇】 一の少入とは更樂入と法入との少分をいふ。

若し不善の色を成就するものなれば、彼れは隱沒無記の色をも成就するや。設し隱沒無記の色を成就するものなれば、彼れは不善の色をも成就するや。若し不善の色を成就するものなれば、彼れは隱沒無記の色をも成就するや。設し隱沒無記の色を成就するものなれば、彼れは不善の色をも成就するや。若し不善の色を成就するものなれば、彼れは隱沒無記と不隱沒無記との色をも成就するや。設し隱沒無記と不隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは不善の色をも成就するや。若し隱沒無記の色を成就するものなれば、彼れは不隱沒無記の色をも成就するや。設し不隱沒無記の色を成就するものなれば、彼れは不隱沒無記と不隱沒無記との色をも成就するや。設し不隱沒無記と不隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは不隱沒無記と不隱沒無記との色をも成就するや。設し不隱沒無記と不隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは不隱沒無記と不隱沒無記との色をも成就するや。

記の色を成就するものなれば、彼れは隱沒無記の色をも成就するや。
二九 (五) 四大は何の三昧に由りて滅するや。造色と瞋恚と有對更樂と有覺と有觀と樂根と喜根と憂根と護根と搏食と更樂食と意念食と識食とは何の三昧に由りて滅するや。

と憂根と護根と搏食と更樂食と意念食と識食とは何の三昧に由りて滅するや。
一〇 (六) 四大の已盡無餘は、當に何果にて作すと言ふべきや。造色と瞋恚と有對更樂と有覺と有觀と樂根と苦根と喜根と憂根と護根と搏食と更樂食と意念食と識食との已盡無餘は當に何果にて作すと言ふべきや。

此の章の義を願くは具さに演說せん。

第一節 四大所造の入の可見・不可見乃至思惟斷・不斷分別

三一 四大造の入は幾くが可見なりや。答へて曰く、一なり。幾くか不可見なりや。答へて曰く、八と

三二 二の少入となり。

三三 幾くか有對なりや。答へて曰く、九と一の少入となり。幾くか無對なりや。答へて曰く、一の少

三四 入なり。

三五 幾くか有漏なりや。答へて曰く、九と二の少入となり。幾くか無漏なりや。答へて曰く、一の少入なり。

三六 幾くか有漏なりや。答へて曰く、九と二の少入となり。幾くか無漏なりや。答へて曰く、一の少入なり。

【七】 茲に「不善覺」の夾註あり。

【八】 四大乃至四食は何定に依りて滅するやの問題。

【九】 四大乃至四食の已盡無餘は何果に任して作すやの問題。

【一〇】 更は、大正本になきも、三本・宮本によりてこれを補へり。

【一一】 食の下に「由何三昧滅」の五字あるも、三本・宮本によりてこれを除却せり。

【一二】 四大所造色は五内入と色・聲・香・味の四外入との九入の全と更樂入の少分(四大種の堅・濕・煖・動を除くもの)と、法入の少分(無教色)とに攝せらるるが、その四大所造色の可見・不可見乃至思惟斷・不斷分別をなすが本節の課題なり。

而して此の論究ある所以は覺

成就するものなれば、彼れは、四大をも成就するや。若し四大を成就するものなれば、彼れは善と隠没無記と不隠没無記との色をも成就するや、設し善と隠没無記と不隠没無記との色を成就するものなれば彼れは四大をも成就するや。

若し四大を成就するものなれば、彼れは不善と隠没無記と不隠没無記との色をも成就するや。設し不善と隠没無記と不隠没無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。

若し四大を成就するものなれば、彼れは善と不善と隠没無記と不隠没無記との色をも成就するや。設し善と不善と隠没無記と不隠没無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。

〔四〕若し善の色を成就するものなれば、彼れは不善の色をも成就するや。設し不善の色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。若し善の色を成就するものなれば、彼れは隠没無記の色をも成就するや。設し隠没無記の色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。若し善の色を成就するものなれば、彼れは不隠没無記の色をも成就するや。設し不隠没無記の色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。

若し善の色を成就するものなれば、彼れは不善と隠没無記との色をも成就するや。設し不善と隠没無記との色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。若し善の色を成就するものなれば、彼れは不善と不隠没無記との色をも成就するや。設し不善と不隠没無記との色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。若し善の色を成就するものなれば、彼れは隠没無記と不隠没無記との色をも成就するや。設し隠没無記と不隠没無記との色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。

若し善の色を成就するものなれば、彼れは不善と隠没無記と不隠没無記との色をも成就するや。設し不善と隠没無記と不隠没無記との色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。若し善の色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。設し善の色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。若し善の色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。設し善の色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。

若し善の色を成就するものなれば、彼れは不善と隠没無記と不隠没無記との色をも成就するや。設し不善と隠没無記と不隠没無記との色を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。

【一】 茲に「三竟」の夾註あり。

【二】 茲に「四大竟」の夾註あり。

【三】 善・不善・隠没・不隠没無記色の相互成就問題。

【四】 茲に「雙竟」の夾註あり。

【五】 茲に「雙竟」の註あり。

【六】 茲に「善竟」の註あり。

なれば、彼れは四大をも成就するや。

若し四大を成就するものなれば、彼れは不善の色をも成就するや。設し不善の色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。若し四大を成就するものなれば、彼れは隱沒無記の色をも成就するや。設し隱沒無記の色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。若し四大を成就するものなれば、彼れは不隱沒無記の色をも成就するや。設し不隱沒無記の色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。

若し四大を成就するものなれば、彼れは、善と不善との色をも成就するや。設し善と不善との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。若し四大を成就するものなれば、彼れは善と隱沒無記との色をも成就するや。設し善と隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。若し四大を成就するものなれば、彼れは善と不隱沒無記との色をも成就するや。設し善と不隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。

若し四大を成就するものなれば、彼れは不善と隱沒無記との色をも成就するや。設し不善と隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。若し四大を成就するものなれば、彼れは不善と不隱沒無記との色をも成就するや。設し不善と不隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。

若し四大を成就するものなれば、彼れは隱沒無記と不隱沒無記との色をも成就するや。設し隱沒無記と不隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。

若し四大を成就するものなれば、彼れは善と不善と隱沒無記との色をも成就するや。設し善と不善と隱沒無記との色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。若し四大を成就するものなれば、彼れは善と不善と不隱沒無記との色をも成就するや。設し善と不善と不隱沒無記との色を

遍知するやを明すを目的とするものなり。例によりてこれを發智論の頌文を借りて示せば次の如し。

「大種所造、處、
幾、四、二、五、三、
大造、成、不、成、
ズルト、ヲ、ル、ト、
成、三、大、對、二、造、四、
唯、成、三、所、造、四、
大、種、等、七、種、
依、レ、定、滅、住、果、二、
此、章、願、具、說、レ、
【四】 四大所造の入の諸門分別論。

【五】 茲に「入覺」の夾註あり。

【六】 四大と造色との成就不成就の問題。

【七】 茲に「造色覺」の夾註あり。

【八】 四大と善乃至不隱沒無記の色との成就問題。

【九】 茲に「兼門覺」の夾註あり。

【一〇】 茲に「雙覺」の夾註あり。

卷の第十八 (第五編 大種健度)

第五編 四大造色論 (四大健度第五)

四大造色論總目次

四大と所造と

見諦を成就するものと、

是れに縁としての縁を謂ふと
内造は後に在り。

第一章 四大と所造色との諸種の關係論

(淨根跋渠第一) (發智論卷第十三、大正・二六、九八一頁)

本章の内容目次

四 (一) 四大所造の入は幾くが可見、幾くが不可見、幾くが有對、幾くが無對、幾くが有漏、幾くが無漏、幾くが有爲、幾くが無爲、幾くが過去、幾くが未來、幾くが現在、幾くが善、幾くが不善、幾くが無記、幾くが欲界繫、幾くが色界繫、幾くが不繫、幾くが學、幾くが無學、幾くが非學非無學、幾くが思惟斷、幾くが不斷なりや。

六 (二) 若し四大を成就するものなれば、彼れは造色をも成就するや。設し造色を成就するものなれば、彼れは四大をも成就するや。

七 若し四大を成就せざれば、彼れは造色をも成就せざるや。設し造色を成就せざれば、彼れは四大をも成就せざるや。

八 (三) 若し四大を成就するものなれば、彼れは善の色をも成就するや。設し善の色を成就するもの

【一】 本編は、四大と造色とに關する諸種の論究をなすを其の目的とす。

今、其の内容を結びて頌となせる本文の偈頌を解釋して本編の概要を示せば次の如し。

「四大と所造」とは、造色の諸門分別乃至四大と造色との成就關係等を明すものにして、第一章に相當し、

「是れに縁としての縁を謂ふ」とは、四大と造色との相互相縁・相成關係を明すものにして第二章に當り、「見諦を成就するもの」とは、見諦成就の聖者の成就する身、口行の色に關する問題等を論ずる第三章に相當し、

「内造は後に在り」とは、最後の第四章に於て有執受等に關する問題を指すなり。

【二】 内は、大正本に自とあるも、明本・宮本によりて内と改む。

【三】 本章は、先づ所造色の可見・不可見等の諸門分別をなし、

次に、四大と所造色或は、所造色相互の成就關係を明し、最後に、四大乃至四食を減する定、及び何果に住して已斷

阿毘曇八鍵度論卷第十七

第五章 自行並びに行論附帶の雜論

(一) 非人が惡の色像を顯すため、
(二) 非人に捶打せらるるため、
(三) 諸大種が背違するため、
(四) 先業の異熟によるためとの四縁によるなり。

【五二】 狂象云云は發智論には、唯、惡の色像とのみあれど、婆沙論は象・馬・駝・牛羊等の可畏の色相を變作す云云と解説せり。

【五三】 纏 (pariyavasthana) とは、無慚・無愧・慳・嫉・悔・眠・掉舉・昏沈・忿・覆をいひ、此の中の如何なる纏と相應するものが不善なるやを明にせんとする段なり。而るに、忿・覆・慳・嫉は唯、不善のみなりと雖も、修所斷なるが故に一切の不善心と俱ならず。又、昏沈と掉舉とは、一切の不善心と俱なりと雖も、不善と無記とに通ずるが故に唯不

善のみならず。更に睡眠と追悔とは一切の不善と俱なるに非ず、唯、不善のみならず、而るに、無慚 (ahimsya) と無愧 (amapakāra) とは大不善地法に攝せらるるものなるが故に、一切の不善と俱に於て唯不善のみなるなり。故に今此の二のみを以つて答へたるなりとは、婆沙の解釋なり。(婆沙百二十六卷、毘曇部十三、頁二二六)。

【五四】 本節は、佛語即ち、佛敎の自性、三性分別、佛語の作用、十二分教等につきて論究するを其の目的とす。而して、此の論究ある所以は「我れは佛語を説き、我れは佛敎を聞く」といふが如く、佛語に非ざるものに對して佛語の想を起すものあるを止めしめんが爲めなりとなり。(婆沙百二十六卷)。

【五五】 佛語の自性。佛の語、所説は言、際所纏は唱、婆沙は詞、耆羅は評、尼留諦は論、語句は語音、語聲

は語路、口行は語業、口敎の語表とあり。

【五六】 茲の下に、「大竺十種皆語也」との夾註あり。因みに、以上十種の語の下に所應は隨つて一、二三、……八、九、十の夾註あり。

【五七】 佛語の三性分別。經及び論は主として善なるも律は多分に無記なり。

【五八】 佛の語の作用に就きて。因みに、發智論の譯語を示せば次の如し。

契經・應頌・記説・伽他・因緣・自説・本事・譬喩・本生・方廣・希法・論議なり。尚、此等一一の説明は婆沙百二十六卷、(毘曇部十三、頁二三一以下) にあり往見すべし。【五九】 茲に次下に、「十二部經」の夾註あり。因みに、以上十二部經の名稱の各の下に、所應に從つて一、二、……十一、十二の夾註あり。【六〇】 本節は、行論の結尾として、世間に行と稱せらるる

印乃至剋行等につきて論究する段なり。

【六一】 印に就きて。巧所造とは、發智論に「如理に轉變する」とあり。

【六二】 所剋の智とは、發智論に、「所依の諸の巧便の智」とあり。

【六三】 數に就きて。算に就きて。書に就きて。

【六四】 頌(詩)に就きて。剋行(工巧業)に就きて。

【六五】 授は、大正本に授とあるも、三本・宮本・聖乙本によりて授と改む。

【六六】 本節は、(一) 學の戒と非學非無學の戒、(二) 無學の戒と非學非無學の戒との成就關係を四句分別によりて明にする段なり。

【六七】 學戒と非學非無學戒との成就關係。

【六八】 無學戒と非學非無學戒との成就關係に就きて。

【六九】 跋は、大正本に八とありて跋と改む。

夫人との欲・色界に生ずるもの、是れを非學非無學の戒を成就するも學のは非らざるものと謂ふなり
 (三)云何んが學の戒と非學非無學の戒とを成就するものなりや。答へて曰く、學にして欲・色界に生ずるもの、是れを學の戒と非學非無學の戒とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが學の戒を成就するにも非ず、非學非無學のにも非ざるものなりや。答へて曰く、阿羅漢と凡夫人との無色界に生ずるもの、是れを學の戒を成就するにも非ず、非學非無學のにも非ざるものと謂ふなり。

若し無學の戒を成就するものなれば、彼れは非學非無學の戒をも成就するや。答へて曰く、或は無學の戒を成就するも非學非無學のは非らざるものあり。

(一)云何んが、無學の戒を成就するも非學非無學のは非らざるものなりや。答へて曰く、阿羅漢にして無色界に生ずるもの、是れを無學の戒を成就するも非學非無學のは非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが非學非無學の戒を成就するも無學のは非らざるものなりや。答へて曰く、學と凡夫人との欲・色界に生ずるもの、是れを非學非無學の戒を成就するも無學のは非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが無學の戒と非學非無學のとを成就するものなりや。答へて曰く、阿羅漢にして欲・色界に生ずるもの、是れを無學の戒と非學非無學のとを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが、無學の戒を成就するにも非ず、非學非無學のにも非ざるものなりや。答へて曰く、學と凡夫人との無色界に生ずるもの、是れを無學の戒を成就するにも非ず、非學非無學のにも非ざるものと謂ふなり。

自行 ^{七四} 跋栗第五竟(梵本、一百八十五首盧、秦二千三百七十八言)
 行糖度第四竟

害に由りて一那伽は諦觀するに一却後七日にして憍羅羅家は必ず當に殄滅すべし」との一句あり。

【四三】 姪盡きたるものとは、已離欲染者のこと。

【四四】 本節は、住壽行(Bahvii jñh samākarān aśīṅṅyati 留多壽行)と、捨壽行(Chandjivā samākarān nis janti 捨多命行)とに關する論究をなす段なり。精しくは婆沙百二十六卷(毘曇部十三、頁二一六)を參照すべし。

【四五】 住壽行の定義。
 【四六】 「發心して言く云云」は發智論によれば邊際第四禪より起ち已りてなすものにして入定以前になすには非ず。

【四七】 頂四禪とは、發智論に邊際第四靜慮とあり。
 【四八】 彼の報を得せし所のものとは、衣針等を施せし業を受くべきによりて富の報をいふなり。而かも、これが定力と願力とによりて轉じて壽の報を得するに至るなり。因みに「所得」は、大正本に所緣とあるも次の捨壽行の場合より推察するに所得の誤寫ならん故に斯く訂正せり。

【四九】 捨壽行の定義。

【五〇】 本節は、如何なる原因によりて心が狂亂するやを明にせんとする段なり。即ち、

るものと謂ふなり。云何んが無記なるものなりや。答へて曰く、無記心による如來の語、所説——上の如き十事——是れを無記と謂ふなり。

佛語は何等の法に名くるや。答へて曰く、名身・句身・語身の次第して住するものなり。

契經(sūtra)と詩(geya)と記(vyakarajya)と偈(gāthā)と因縁(nidāna)と歎(udāna)と本末

(itivṛtaka)と譬喩(avadāna)と生(jāta)と方廣(vaipulya)と未曾有(adbhutadharma)と法義(ṛtapaḍā)とは何等の法に名くるや。答へて曰く、名身・句身・語身の次第して住するものなり。

第九節 印・數・算・籌・頌・起行に就きて

印は何の法に名くるや。答へて曰く、巧所造の身行と彼の 所刻の智となり。

數は何の法に名くるや。答へて曰く、巧所造の口行と彼の所刻の智となり。

算は何の法に名くるや。答へて曰く、巧所造の意行と彼の所刻の智となり。

書は何の法に名くるや。答へて曰く、巧所造の身行と彼の所刻の智となり。

頌は何の法に名くるや。答へて曰く、巧所造の口行と彼の所刻の智となり。

種種の刻行は何の法に名くるや。答へて曰く、慧を首と爲し方便の 授くる所と、彼彼所刻の諸智となり。

第十節 學・無學・非學非無學の戒の成就關係に就きて

若し學の戒を成就するものなれば、彼れは非學非無學の戒をも成就するや。答へて曰く、或は學の戒を成就するも、非學非無學の戒は非らざるものあり。

(一)云何んが學の戒を成就するも、非學非無學の戒は非らざるものなりや。答へて曰く、學にして無色界に生ずるもの、是れを學の戒を成就するも非學非無學の戒は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが非學非無學の戒を成就するも、學のは非らざるものなりや。答へて曰く、阿羅漢と凡

知るは比智なることを顯はさんが爲めに此の論究あるなりとなり。(婆沙百二十五卷、毘曇部十三、頁二〇九)

【四〇】大正本には、四は有四法とあるも三本・宮本に依りて四と改む。

【四一】本節は、有學の聖者が非時と非處と非道とに行くと、故意に他の爲めに加害せられたるとき、これを憤りて加害者に訶責の念を起す時、天神等が此に因りて、其の加害者を治罰するが如き所謂、學の謀害につきて論究する段なり。

而して、茲に學とは、預流と一來との二聖者にして不還者は必ず退して謀害をなし、無學は退すと雖も謀害なきが、又、謀害の體は瞋と相應する思にして外道の意憤に當るものなり。されど、意憤は殺罪を得ずれど謀害は罪を得せず。何となれば、學には聖道あり止觀あり、又、單に訶責するのみなるに外道には聖道なく止觀なく、又、加行を起すが故なり。

尙、學謀害の實例等につきては、婆沙百二十五卷(毘曇部十三、頁二〇九以下)を參見すべし。

【四二】此の前に發智論には、「世尊の説くが如し」學の謀

第五節 住壽行と捨壽行とに就きて

四四
云何んが住壽行なりや。答へて曰く、阿羅漢が衣鉢・戸輪・屨屣・鉢筒及び餘の什具を以つて僧若しくは人に施し、便ち發心して言く、我れは是の報に緣りて壽を増益せしめんと、是の願を作し已りて頂四禪に入れば、彼の報を得せしものにて則ち壽の報を成するが如し、是くの如きか住壽なり。

四五
云何んが捨壽なりや。答へて曰く、阿羅漢が衣鉢・戸輪・屨屣・鉢筒及び餘の什具を以つて僧若しくは人に施し便ち發心して言く、我が壽報を得せしものにて即ち施報を成ぜんことを、との願を作し已りて頂四禪に入れば彼の壽報が即ち施報を成するが如し、是くの如きが捨壽なり。

第六節 心亂に就きて

五〇
云何んが心亂なりや。答へて曰く、四事を以つて心は亂る。非人が狂象の形、馬の形、羴の形、羴牛の形を形すを見已りて怖懼するとき心は亂る。若しくは非人が瞋りて肢節を捶打するとき、彼れは酷痛を得るによりて心は亂る。或は諸大の錯によりて心は亂る。本の行の報の對として心は亂るるなり。

第七節 何の纏と相應する法が不善なりやに就きて

五三
何等の纏と相應するを以つて法は盡く不善なりや。答へて曰く、無慚・無愧なり。

第八節 佛語(Buddhavacana)に就きて

五四
佛語とは云何ん。答へて曰く、如來の語と所説と譬訶羅(vyākāra)と婆沙(bhāṣya)と耆羅(jāṭṭya)と尼留諦(nīluta)と語句と語聲と口行と口教となり、是れを佛語と謂ふなり。

五七
佛語は當に善なりと言ふべきや、無記なりや。答へて曰く、佛語は或は善、或は無記なり。云何んが善なるものなりや。答へて曰く、善心による如來の語、所説——上の如き十事——是れを善な

ずと知るに就きて。

これは、須陀洹が三惡趣を盡くすとの疑ひあるを決して比智によることを示さんが爲めに此の論究あるなりとなり。(婆沙曰二十五卷)。

【三七】發智論は、餓鬼の次に嶮惡趣の三字あり。而して沙婆論は此の嶮惡趣と地獄・傍生(畜生)、餓鬼とは如何なる關係にありやを種種論究せりこれに依つてこれを見るに沙婆論の用ひし、本論即ち發智論と此の八鍵度と多少相違ありしならん。

【三八】四法とは、發智論に四證淨(cattāro-vedyaṅgāni)とあり。即ち、佛・法・僧證淨と戒證淨となり。

【三九】須陀洹には四諦智あるも盡智・無生智無し。

こは、(一)須陀洹が三惡趣を盡くすとの疑は、比智のみに由りて知るといふに依りて須陀洹は四諦をも比知するならんと疑ふものあり。

(二)須陀洹が見諦斷の煩惱と其の果とを斷ぜるを以つて、盡智と無生智とを生ずと疑ふものあり故に此の疑を決定して、須陀洹には四諦智ありて四諦を現の智にて、證智し、又、未だ盡智・無生智を得せざるが故に三惡趣を盡くすと

して彼れは具に參差あるをもて地獄・畜生・餓鬼に往墮せざるなり。譬へば鷹鳥の二翅が壊せざれば能く飛びて空に至るも、一翅を壊せば、空に至ること能はざるが如く、是くの如く、二種類の縛繫あれば地獄・畜生・餓鬼國中に往墮するに、彼の須陀洹は見諦斷の結を盡くすも思惟斷の結を盡くさずして、彼れは具に參差あるをもて地獄・畜生・餓鬼に往かざるなり。

又、世尊の言く、「是に謂ふ世尊の弟子は地獄を盡くし畜生・餓鬼を盡くすをもて盡く惡道に墮せず」と。

須陀洹に此の智有りて我れは地獄を盡くし畜生を盡くし餓鬼を盡くして盡く惡道に墮せずと悟るや、自ら悟らずとなすや。答へて曰く、自ら悟らず。云何んが知ることを得るや。答へて曰く、往いて世尊を信すればなり。世尊の言ふが如し諸は自ら省察して四法あれば、彼れは慇懃に自ら我れは地獄を盡くし畜生、餓鬼を盡くして盡く惡道に墮せずと進むべし。

復次に、須陀洹に四智あり、苦智と習智と盡智と道智となり。須陀洹には盡智・無生智は無きなり。

第四節 學の謀害に就きて

云何んが學の謀害なりや。答へて曰く、學の欲未盡のもの、如きは、他の捶打の若しくは手・石・杖を被らば、彼れは痛に逼られて、發心して、彼れをして酷痛せしめ、彼の婦をして子無からしむ。是くの如きは學の謀害なり。

學の婬盡きたるものの如きは、彼れを捶打せんに、若しくは手・石・杖をもつてせば、彼れは痛に逼まられて、無欲より退し、己に退して便ち發心して言く、彼れをして酷痛せしめ、彼の婦をして子無からしむと。是くの如きは學の謀害なり。

一切の學の謀害する所には果ありや。答へて曰く、不なり。諸の衆生に大力の所作行有るときは彼には則ち果あらざるなり。

【三】成就せざる行と定んで當に報を受けざる行との四句分別。

【二】本節は、(一)須陀洹は已に見諦所斷業を滅したりと雖も尙、思惟斷の不善行にして苦痛の報果を受くべきものを有するに、而かも三惡趣に墮せざるは如何なる理由に依るや。

(二)須陀洹が三惡趣を滅すと知るは、現量智に非ずして、比量なること。
(三)須陀洹は四諦智を得するも、未だ盡智・無生智を得せざること、を明にせんとするを其の課題とす。

【三】須陀洹が三惡趣に墮せざる理由。

これは、(一)(二)因は惡趣に墮せしか。謂く見所斷と修所斷との業なりとの説ありに依りて、須陀洹は見諦斷の行を斷ずと雖も思惟斷の行を斷ぜざるが故に三惡趣に墮すならんと疑ふものあり。

(二)或は又、須陀洹は惡趣に墮せずと説くを聞き、須陀洹は已に思惟斷の行をも斷ずるならんと疑ふものあり。
此等の疑を決定せんがために此の論究あるなりとなり、婆沙百二十五卷、毘曇部十三、頁二〇四。

【三】須陀洹が三惡趣に墮せ

(二)云何んが行にして必ず報を受くるも彼の行を成就せざるものなりや。答へて曰く、諸行の過去の不善か設しくは善有漏かにして報が熟せずして彼の行が失せるものと、諸行の未來の不善か設しくは善有漏かにして得せざるも必ず生ずるものと、是れを行にして必ず報を受くるも彼の行を成就せざるものと謂ふなり。

(三)云何んが行を成就し彼の行は必ず報を受くるものなりや。答へて曰く、諸行の過去の不善か設しくは善有漏かにして報が熟せずして彼の行が失せざるものと、諸行の未來の不善か設しくは善有漏かにして得して必ず生ずるものと、諸行の現在の不善か設しくは善有漏かのものと、是れを行を成就し彼の行は必ず報を受くるものと謂ふなり。

(四)云何んが行を成就せず彼の行は必ず報を受けざるものなりや。答へて曰く、諸行の過去の、不善か設しくは善有漏かにして報が熟し彼の行が失せるものと、諸行の未來の不善か設しくは善有漏かにして得せず必ず生ぜざるものと、若しくは無記か無漏かの行にして成就せざるものと、是れを行を成就せず彼の行は必ず報を受けざるものと謂ふなり。

非につきても亦、是くの如し。

第三節 須陀洹と三惡趣との關係に就きて

三五

若し須陀洹にして不善行の苦痛の報の未熟なるもの有るに、彼れは何を以つての故に地獄道・畜生・餓鬼を障ゆるや。答へて曰く、二結種の縛繫により必ず地獄・畜生・餓鬼に墮す、見諦斷の結種と思惟斷の結種となり。彼の須陀洹は見諦斷の結を盡くすも思惟斷の結を盡くさずして、彼れは具を參差するをもて地獄・畜生・餓鬼に往かざるなり。譬へば車の二輪が壞せざれば能く所至有るも、一輪壞すれば所至有らざるが如く、是くの如く、二結種の縛繫によりて地獄・畜生・餓鬼に往く、——二結種とは見諦斷と思惟斷との結種なり——。彼の須陀洹は見諦斷の結を盡くすも思惟斷の結は盡くさず

とは、其の義に多種あり、有頂の思の如く、有頂の八萬大劫の壽を感ずる場合は、千劫を最後といひ、南瞻部洲の如く人壽百歳の時は最後の二歳を最後といひ、三十刹那のみ生きるものにおいて最後の刹那が最後なり。

而して、今の場合、此の異熟を受けし行は自行なるも、而も其の異熟は最後位に在るが故に再び受くること無きが故にこれを自行なるも報を受くるに非ざる行といふなり。

【五】こは、善・惡行を已に現在し、異熟を牽き、正に異熟果が現在前して而も其の異熟果の最後位に至らざるときをいふなり。

【六】自行に非ざるものと定んで當に異熟を受くるに非ざる行との四句分別。

【三】前節に於て自行と成就する行、及び自行と異熟を受くる行につきて四句分別に依りて其の關係を明にしたるに、因みに本節は、成就する行と、定んで當に報を受くべき行との關係並に成就せざる行と定んで當に報を受けざる行との關係を四句分別によりて明にする段なり。

【三】成就する行と定んで當に報を受くべき行との四句分別。

行は必ず報を受けざるものあり。(二)云何んが行にして自行なるも彼の行は必ず報を受けざるものなりや。答へて曰く、行にして報を今、有に得し彼の行が生じ報を受けて、彼の行が後の報にあるものなり。是れを行にして自行なるも彼の行は必ず報を受けざるものと謂ふなり。

(二)云何んが行にして必ず彼を受くるも、彼の行は自行に非ざるものなりや。答へて曰く、行にして報を今有に得するに不ず彼の行が生ずるも報を受けずして彼の行の報が未だ熟せざるものなり。是れを行にして必ず報を受くるも彼の行は自行に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが行の自行にして彼の行は必ず報を受くるものなりや。答へて曰く、行にして報を今、有に得し彼の行が生じ報を受けて彼の行が後の報に非ざるものなり。是れを行の自行にして彼の行は必ず報を受くるものと謂ふなり。

(四)云何んが行にして自行に非ず、彼の行は必ず報を受けざるものなりや。答へて曰く、行にして報を今、有に得するに不ず彼の行が生ずるも報を受けずして彼の行の報が熟するものなり。是れを行にして自行にも非ず彼の行は必ず報を受けざるものと謂ふなり。

第三節 成就する行と定んで當に報を受くべき行との關係に就きて

三三 所可用行を成就すれば、彼の行は必ず報を受くるや。答へて曰く、或は行を成就するも彼の行は必ず報を受けざるものあり。

(一)云何んが行を成就するも、彼の行は必ず報を受けざるものなりや。答へて曰く、諸行の過去の不善か設しくは善の有漏かにして報が熟して彼の行が失せざるものと、諸行の未來の不善か設しくは善有漏かにして得するも必ず生ぜざるものと、若しくは無記か無漏かの行にして成就するものと、是れを行にして成就なるも彼の行は必ず報を受けざるものと謂ふなり。

果が未だ現在前せずして、此の行を失せざる場合をいふなり。

【三】「此の行が生ずるも報を受けず」とは、大正本に「此行生不受報」とあり。發智論には「業異熟非已生正受」とありて、生と受とを異熟にかけて譯せり。以下これに准ず。

【四】自行にして成就する行

こは、例へば善・惡行が已に現前し順現法受・不定受等の異熟を牽きて、而もその果が正に現前し、此の行が失せざる場合の如きなり。

【五】自行にも非ず成就する行にも非ざるもの。――

【六】行の自行に非ざるものと成就せざるものとの四句分別。こは、前の第二句を茲の第一句となし、前の第一句を茲の第二句となし、前の第四句を茲の第三句となし、前の第三句を茲の第四句となすなり。

【七】自行と報を受くる行との四句分別。

【八】「彼の行か後の報にあるものなり」とは、大正本に「彼行後報」とあり。發智論には「此の行の異熟が最後位に至るものなり」とあり。因みに、茲の後、即ち、最後

此の行が報を受くる時は、此の^{二四}意に報を受けて餘に受くるに非ざればなり。^{二五}是を以ての故に、自行は所可行なるなり。

自行あり、此の行は當に過去なりと言ふべきや、未來なりや、現在なりや。答へて曰く、彼の行は過去也。^{二七}

所可行の自行なれば彼の行を成就するや。答へて曰く、或は行にして自行なるも、此の行を成就するに非ざるものあり。^{二九}

(一)云何んが行にして自行なるも、彼の行を成就せざるものなりや。答へて曰く、行にして報を今、有に得し彼の行が生じ報を受けて彼の行が失せるものなり。是れを行にして自行なるも彼の行を成就せざるものと謂ふなり。^{三〇}

(二)云何んが行を成就するも此の行は自行に非ざるものなりや。答へて曰く、行にして報を今、有に得するに不ず、^{三三}此の行が生ずるも報を受けずして、彼の行が失せざるものなり、是れを行は成就なるも此の行は自行に非ざるものと謂ふなり。^{三三}

(三)云何んが、行の自行にして彼の行を成就なるものなりや。答へて曰く、行にして報を今、有に得し彼の行が生じ報を受けて彼の行が失せざるものなり、是れを行の自行にして彼の行は成就なるものと謂ふなり。^{三四}

(四)云何んが行にして自行にも非ず、彼の行は成就にも不ざるものなりや。答へて曰く、行にして報を今、有に得するにも不ず、彼の行が生ずるも報を受けずして彼の行が失するものなり。是れを行にして自行にも非ず、彼の行は成就にも不ざるものと謂ふなり。^{三五}

非につきても亦、是くの如し。^{三六}

所可行の自行なれば、彼の行は必ず報を受くるや。答へて曰く、或は行にして自行なるも彼の

【二四】「意に於て」とは、發智論に「自相續に於て」とあり。

【二五】以下の文は發智論に、「自相續に於て養と隨養、育と隨育、護と隨護、轉と隨轉、益と隨益となるが故に自業と名く」とあり。

【二六】自行の三世分別。

【二七】先に果を受け後に因を造るに非ざるが故に自行は未來に非ず、又、報の因果は俱時ならざるが故に現在にも非ず斯くて自行は過去となるなり。

【二八】也是、大正本に世とあるも、三本、宮本によりて也と改む。

【二九】自行と成就する行との四句分別。

【三〇】自行なるも成就せざる行。

これは、例へば善・惡行が已に現在前し、已に異熟を牽き、果が正に現在前し、此の行が已に失するもの如し。

【三一】行にして報を今、有に得すとは、大正本に「行報於今得有」とあるも、發智論に「若業已得今有異熟」とあるに依りて斯く讀めり、以下これに准ず。

【三二】成就する行なるも自行に非ざる場合。

これは、例へば善・惡行が已に現在前し、已に異熟を牽くも

須陀洹には此の智有りて、我れは地獄を盡くし畜生を盡くし餓鬼を盡くして惡趣に墮せずと悟るや、自から悟らずとなすや。

【四】云何んが學の謀害なりや。一切の學の謀害には果ありや。

【五】云何んが住壽行なりや。云何んが捨壽行なりや。

云何んが心亂なりや。

【六】何等の纏を以つて相應する法が盡く不善なりや。

【七】佛語とは云何ん。佛語は當に善なりと言ふべきや。無記なりや。佛語は何等の法に名くべきや。

契經と詩と記と偈と因縁と數と本末と譬喩と生と方廣と未曾有と法義とは何の法に名くるや。

【九】印は何の法に名くるや。數は何の法に名くるや。算は何の法に名くるや。書は何の法に名くるや。頌は何の法に名くるや。種種伎藝は何の法に名くるや。

【十】若し學戒を成就するものなれば、彼れは非學非無學戒をも成就するや。設し非學非無學戒を成就するものなれば、彼れは學戒をも成就するや。

若し無學戒を成就するものなれば、彼れは非學非無學戒をも成就するや。設し非學非無學戒を成就するものなれば、彼れは學戒をも成就するや。

此の章の義を願くは具さに演說せん。

第一節 自行(自業)に關する論究

【一】云何んが自行なりや。答へて曰く、若し行にして報を是れ今此の有に得すと謂ふものありて、彼の行が報を生じ受くるとき、是れを自行と謂ふなり。

何等を以つて自行なりや。答へて曰く、此の行に自の果、自の依、自の報あればなり。復次に、

【五】 學の謀害の問題。

【六】 住・捨壽行に關する問題。

【七】 何の纏と相應する法が不善なりやの問題。

【八】 佛語に關する問題。

【九】 印・數・算・書・頌・伎藝に關する問題。

【一〇】 三學戒の成就に關する問題。

【一一】 本節は、(一)自行の定義、(二)自行の三世分別、(三)自行と成就する行との四句分別、(四)自行に非ざる所と成就せざる行との四句分別、(五)自行と當に報を受くる行との四句分別、(六)自行に非ざる行と當に報を受くるに非ざる行との四句分別とにつきて論究するを其の課題とす。

【一二】 自行とは過去の善・惡行の報を今、此の有に於て受くるとき過去の行を指して自行といふなり。

【一三】 自行の定義。

【一四】 以下本文は發智論には、「若し業にして已に今有に異熟を得し、及び業の異熟が已に生じ正に受くるものなり」とあり。

第五章 自行並びに行論附帶の雜論

(阿毘曇行犍度、自行跋渠第五) (發智論卷第十二、大正・二六、九八〇頁)

本章内容目次

二 (一)云何んが自行なりや。何等を以つての故に自行は所可用行なりや。

自行なれば、彼の行は當に過去なりと言ふべきや。未來なりや、現在なりや。

所可用行の自行なれば、彼の行を成就するや。設し行を成就すれば、彼の行は自行なりや。所可用行なるも自行に非ざれば、彼の行を成就せざるや。設し行を成就せざれば、彼の行は自行に不ざるや。

所可用行の自行なれば、彼の行は必ず報を受くるや。設し行にして必ず報を受くれば、彼の行は自行なりや。

所可用行なるも自行に非ざれば、彼の行は必ず報を受けざるや。設し行にして必ず報を受けざれば、彼の行は自行に非ざるや。

三 (二)所可用行を成就すれば、彼の行は必ず報を受くるや。設し行にして必ず報を受ければ、彼の行を成就するや。所可用行を成就せざれば、彼の行は必ず報を受けざるや。設し行にして必ず報を受けざれば、彼の行を成就せざるや。

四 (三)如し須陀洹に不善行の苦痛報が未だ熟せざるもの有るに、彼れは何を以つての故に、地獄道・畜生・餓鬼を障ゆるや。

又、世尊の言く「是に謂ふ世尊の弟子は、地獄を盡くし畜生を盡くし餓鬼を盡くして惡道に墮せず」と。

【一】 前來四章に涉りて行に關する諸種の論究をなせしを以つて、今は其の結尾として行に關する諸問題を取り扱へるものなり。

其の内容は本文の内容目次中に出せるを以つて、今は發智論の頌文を借りて簡單に示さん。

「自業、義、世、成、

對、異、熟、成、墮、

智、謀、害、留、捨、

心、亂、纏、佛、教、

書、數、算、印、詩、

世、間、工、業、處、

成、就、學、等、戒、

此、章、願、具、說、

因みに、本章を自行跋渠といへるは本章初頭に自行(自業)に關する論究あるによるなり。

【二】 自行に關する問題。

【三】 成就する行と定んで報を受くる行とに關する問題。

【四】 須陀洹と三惡趣とに關する問題。

【〇六】茲に「無學竟」の夾註あり。

【〇七】非學非無學行と三學果との因果關係。

【〇八】世第一法の無間に苦法智忍を生ずる際には非學非無學行に對する學果に非ずやとの疑ひあらんも、こは土用果にして所依・報・解脫の三果に非ざるが故に茲に無しといへるなり。

【〇九】本節は、修り得修 (prathambhā-bhāvāna)。

習修 (jigevanā-bhāvāna)。

對治修 (pratipaksā-bhāvāna)。

除遣修 (vīrutthāvanā-bhāvāna)。

の四修ある中、後の二修によりて作論するなり、即ち、身・戒・心・慧に對治道が未だ生ぜざれば身・戒・心・慧を修せずといひ、對治道が生ずれば修すといふなり。

又、身・戒・心・慧を緣ずる所有の煩惱が未斷未遍知なれば身・戒・心・慧を修せずといひ、煩惱が已斷已遍知なれば修すといふなり。(婆沙百二十三卷、毘曇部十三、頁一五七)。
【一〇】身・戒・心・慧の不修に就きての定義。
【一一】以下は除遣修によりて

説き、無礙道以下は對治修によりて説くなり。因みに「欲を未だ盡さず云云」は、發智論に「食と欲と潤と意と渴とを離れず」とあり。
【一二】修せずとは習修せざるをいひ、習せずとは、得修せざるをいふ。
因みに、猶は發智論に安と翻ぜり。

【一三】身・戒・心・慧の不修の難・無難の相に就きて。

身不修と戒不修とにつきて。
【一四】身と戒とは、第四禪の染を離るる時、俱に斷盡するが故にかく言へるなり。

【一五】身不修と心不修とにつきて。

【一六】身不修と慧不修とにつきて。

【一七】戒不修と心不修とにつきて。

【一八】戒不修と慧不修とにつきて。

【一九】心不修と慧不修とにつきて。

【二〇】心と慧とは、共に有頂の染を離るる時、方に斷盡するが故に斯くいへるなり。

【二一】身・戒・心・慧の修の定義。

【二二】修は、大正本に無きも、

三本・宮本によりて補へり。

【二三】身・戒・心・慧の修の難・無難の相に就きて。

身修と戒修とにつきて。

【二四】身修と心修とにつきて。

【二五】茲に大正本に耶の字ありても、三本・宮本・聖乙本によりてこれを除けり。

【二六】身修と慧修とにつきて。

【二七】也は、大正本に耶とありても、三本・宮本・聖乙本によりて也と改む。

次の※印はこれに準ず。

【二八】戒修と心修とにつきて。

【二九】戒修と慧修とにつきて。

【三〇】心修と慧修とにつきて。

【三一】本節は、種即ち類に、修類・律儀類・界類・相似類の四類ある中、律儀類、即ち戒類によりて作論するものにして、即ち、教戒なれば教戒・無教戒なれば無教戒、無漏戒といふが如く同一種類の戒につきて三世に於ける成就關係を明にする段なり。

【三二】過去の戒を成制するもの未來・現在の此の戒類の成就・不成就に就きて。

成就・不成就に就きて。

【三三】こは、先に近事戒を受けし勤策に教戒が現在前せず、已に勤策戒を受けし比丘に教戒が現在前せずが如きをいふ。

【三四】茲に「過去竟」の夾註あり。

【三五】未來の戒を成就するもの過去の現在此の戒類の成就・不成就に就きて。

【三六】過去のは得果の故に捨り、現在のは現在前せざるが故に、過去・現在の戒を成就せざるなり。

【三七】こは、苦法智忍と得果と斷根との初刹那現在前位のことなり。

【三八】戒は、大正本に無きも、三本・宮本によりて補へり。

【三九】茲に「未來竟」の夾註あり。

【四〇】現在の戒を成就するもの過去の未來此の戒類の成就・不成就に就きて。

【四一】こは、別解脱律儀を初めて受け得する位をいふなり。

【四二】こは、先に近事戒を受けし勤策に教戒が現在前するが如き場合をいふなり。

若し心を修するものなれば、彼れは慧をも修するや。答へて曰く、是くの如し。設し慧を修するものなれば、彼れは心をも修するや。答へて曰く、是くの如し。

第七節 戒種(類)の三世に於ける成就關係につきて

頗し過去の戒を成就するも、未來・現在の此の種は非らざるものありや。答へて曰く、有り。^{一三三} 戒が盡きて失せずして此の種が現在前せざるものなり。及び、未來を成就するも現在の此の種は非らざるものありや。答へて曰く、有り。道共・定共戒が盡きて失せずして、此の種が現在前せざるものなり、及び現在を成就するも未來の此の種は非らざるものありや。答へて曰く、有り、教戒が已に盡きて失せずして、此の種が現在前するものなり。及び未來・現在の此の種を成就するものありや。答へて曰く、有り。道共・定共戒が盡きて失せずして此の種が現在前するものなり。^{一三四}

頗し未來の戒を成就するも、過去・現在の此の種は非らざるものありや。答へて曰く、有り。^{一三五} 阿羅漢にして無色界に生ずるものなり。及び過去を成就するも現在の此の種は非らざるものありや。答へて曰く、有り。道共・定共戒が盡きて失せずして此の種が現在前せざるものなり。及び現在を成就するも過去の此の種は非らざるものありや。答へて曰く、有り。^{一三七} 最初得の無漏の戒律なり。及び過去・現在の此の種を成就するものありや。答へて曰く、有り。道共・定共戒が盡きて失せずして此の種が現在前するものなり。^{一三五}

頗し現在の戒を成就するも過去・未來の此の種は非らざるものありや。答へて曰く、有り。^{一四一} 最初得の戒律儀なり。及び過去を成就するも、未來の此の種は非らざるものありや。答へて曰く、有り。^{一四二} 教戒が盡きて失せずして此の種が現在前するものなり。及び未來を成就するも過去の此の種は非らざるものありや。答へて曰く、有り。最初得の無漏律儀なり。及び過去・未來の此の種を成就するものありや。答へて曰く、有り。道共・定共戒が盡きて失せずして、此の種が現在前するものなり。

阿毘曇有教無教跋藁第四(梵本三百七十三首盧、秦四千九百五十四言)

【九八】有漏・無漏行と有漏・無漏果との因果關係。

【九九】茲に「有漏無漏竟」の夾註あり。

【一〇〇】本節は、學・無學・非學・非無學の行の各と學果・無學果・非學・非無學果との間に於ける因果關係を明にする段なり。

【一〇一】學行と三學果との因果關係。

【一〇二】茲に「學竟」の夾註あり。

【一〇三】無學行と三學果との因果關係。

【一〇四】學果は無學法に比して劣なり、劣法に勝法の果に非ざるが故に無しといへるなり(但し、こは、所依果につきてのことなり)。

【一〇五】發智論及び婆沙論の本論には、「無きなり」と答へたり。何となれば、解脱果は非二學法なりと雖も無學は既に三界の惑を斷ぜざるが故に更に斷じて解脱果を得するもの無く、又、時解脱が練根して不動と作る第九無間道の時、頓に三界の見修所斷の一切の結の斷を證するところあるも、こは、道の士用果にして解脱果に非ざるが故に無しといふなりと婆沙論は註釋せり。婆沙百二十三卷、毘曇部十三、頁一五六參照)。

きを身を修するものといふなり。

戒を修するにつきても亦、是くの如し。

云何んが心を修するものなりや。答へて曰く、心において愛を盡くし貪を盡くし念を盡くし渴を盡くすものと、復次に、無礙道を以つて無色の愛を盡くし彼の道を修し猗するものと、是くの如きを心を修するものと謂ふなり。

慧を修すにつきて亦、是くの如し。

若し身を修するものなれば、彼れは戒をも修するや。答へて曰く、是くの如し、設し戒を修するものなれば、彼れは身をも修するや。答へて曰く、是くの如し。

若し身を修するものなれば、彼れは心をも修するや。答へて曰く、是くの如し、若し心を修するものなれば、彼れは身をも修するなり。

頗し身を修するも、心を修せざるものありや。答へて曰く、有り。色愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさざるものなり。

若し身を修するものなれば、彼れは慧をも修するや。答へて曰く、是くの如し、若し慧を修するものなれば、彼れは身をも修する也。頗し、身を修するも慧を修せざるものありや。答へて曰く、有り。色愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさざるものなり。

若し戒を修するものなれば、彼れは心をも修するや。答へて曰く、是くの如し、若し心を修するものなれば、彼れは戒をも修するなり。頗し戒を修するも心を修せざるものありや。答へて曰く、有り。色愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさざるものなり。

若し戒を修するものなれば、彼れは慧をも修するや。答へて曰く、是くの如し、若し慧を修するものなれば、彼れは戒をも修するなり。頗し戒を修するも慧を修せざるものありや。答へて曰く、有り。色愛を盡くせるも上の愛を未だ盡くさざるものなり。

の果との因果關係。

【九二】非無漏行と非無漏の果との因果關係。

【九一】本節は、行が有漏或は無漏なる場合、其の行の果が有漏なりや、無漏なりやを判定し且つ、依果(等流)、報果(異熟)、解脱(離繫)の三果の何れに當るやを分別する段なり。

而して、此の論を解するに、迦濕彌羅國の諸論師は一因多果説に依るといふ。然るに西方の諸師は、多因一果説に依るといひて多少本論と異れる説をなせ。

(婆沙百二十三卷、毘曇部十三、頁一五四参照)。

【九二】有漏行と有漏果との因果關係。

【九三】依果(又は所依果)とは、等流果をいひ、報果とは異熟果をいふ。

【九四】解脱果とは、離繫果のこと。

【九五】若し西方師の多因一果説に依れば、此の答が「無きなり」となる。何んとなれば多因一果説なれば、一果が有漏にして又無漏なること無きが故なり。

【九六】茲に「有漏竟」の夾註あり。

【九七】無漏行と無漏果との因果關係。

慧を修せざるにつきても亦、是くの如し。

二二 若し身を修せざるものなれば、彼れは戒をも修せざるや。答へて曰く、是くの如し。設し戒を修せざるものなれば、彼れは身をも修せざるや。答へて曰く、是くの如し。

二五 若し身を修せざるものなれば、彼れは心をも修せざるや。答へて曰く、是くの如し、若し身を修せざれば、彼れは心をも修せざるなり。頗し心を修せずして身を修せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。色愛を盡くせるも上の愛を未だ盡くさざるものなり。

二六 若し身を修せざるものなれば、彼れは慧をも修せざるや。答へて曰く、是くの如し。若し身を修せざるものなれば、彼れは慧をも修せざるなり。頗し慧を修せざるものにして身を修せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。色愛を盡くせるも上の愛を未だ盡くさざるものなり。

二七 若し戒を修せざるものなれば、彼れは心をも修せざるや。答へて曰く、是くの如し、若し戒を修せざるものなれば、彼れは心をも修せざるなり。頗し心を修せざるものにして戒を修せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。色愛を盡くせるも上の愛を未だ盡くさざるものなり。

二八 若し戒を修せざるものなれば、彼れは慧をも修せざるや。答へて曰く、是くの如し。若し戒を修せざるものなれば、彼れは慧をも修せざるなり。頗し慧を修せざるものにして戒を修せざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。色愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさざるものなり。

二九 若し心を修せざるものなれば、彼れは慧をも修せざるや。答へて曰く、是くの如し。設し慧を修せざるものなれば、彼れは心をも修せざるや。答へて曰く、是くの如し。

又世尊の言く、「身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修す」と。

三〇 云何んが身を修するものなりや。答へて曰く、身において愛を盡くし、貪を盡し、念を盡くし、渴を盡くすものと、復次に、無礙道を以つて色の愛を盡くし彼の道を修し猗するものと、是くの如

教には無教無きなり。

【七】 茲に「現在竟」の夾註あり。

【七】 口教と口無教との成就關係。

【七】 本節は、欲界行・色界行・無色界行・不繫行の所謂四界行と、其の行の果（増上果を除く）との因果關係を界分別に配して明す段なり。

【九】 欲界行と欲界の果との因果關係。

【八】 欲界の果とは、異熟・等流・土用の三果か、異熟と土用、或は等流と土用の二果かをいふ。

【八】 欲界の化及び化語は色界道の土用果なり。

【八】 色界行と色界の果との因果關係。

【八】 彼靜慮の近分に依る世俗道の諸の斷は道の離繫果と土用果となり。

【四】 無色界行と無色界の果との因果關係。

【五】 なり（也）は、大正本になきも、三本・宮本によりて補へり。

【六】 無漏行と無漏の果との因果關係。

【七】 非欲界行と非欲界の果との因果關係。

【八】 非色界行と非色界の果との因果關係。

【九】 非無色界行と非無色界

く、有り。解脱果なり。^{〇九}

第五節 三學行と三學果との因果關係

一〇一 頗し學行に學果あることありや。答へて曰く、有り、所依果なり。頗し學行に無學果あることありや。答へて曰く、有り、所依果なり。頗し學行に非學非無學果あることありや。答へて曰く、有り、所依果なり。頗し學行に無學果あり。^{一〇二}

一〇二 頗し無學行に無學果あることありや。答へて曰く、有り、所依果なり。頗し無學行に學果あることありや。答へて曰く、無きなり。頗し無學行に非學非無學果あることありや。答へて曰く、有り、解脱果なり。^{一〇三}

一〇三 頗し非學非無學行に非學非無學果あることありや。答へて曰く、有り、所依果と報果と解脱果とな

り。頗し非學非無學行に學果あることありや。答へて曰く、無きなり。頗し非學非無學行に無學果あることありや。答へて曰く、無きなり。

第六節 身・戒・心・慧の修・不修に關する論究

一〇四 又、世尊の言く「身を修せず、戒を修せず、心を修せず、慧を修せず」と。

一〇五 云何んか身を修せざるものなりや。答へて曰く、身において、欲を未だ盡くさず、貪を未だ盡くさず、念を未だ盡くさず、渴を未だ盡くさざるものと、復次に、無礙道を以つて色愛を盡くすとき、彼の道を、修せず猶せざるものと、是くの如きを身を修せざるものといふなり。

戒を修せざるものなりや。答へて曰く、心において欲を未だ盡くさず、貪を未だ盡くさ

ず、念を未だ盡くさず、渴を未だ盡くさざるものと、復次に、無礙道を以つて無色の愛を盡くすも彼の道を修せず猶せざるものと、是くの如きを心を修せずといふなり。

が故に、諸餘の刹那をも取る

と説くものなり。

【六六】「不戒律に處するもの」

は、大正本になきも、三本、

宮本によりて補へり。

【六七】大正本には、母胎の上

に凡夫人の三字あるも、聖乙

本に従つてこれを除けり。

因みに、發智論にもこは無き

所なり。

【六八】入定せずとは、現在の

無教を成就せざることを顯は

すなり。

【六九】現在の善の身故と身無

數との成就關係。

【七〇】色界に生じ善の身故を

有するものは、必ず定中に在

らざるが故に現在の無教無き

ことを顯はすなり。

【七一】「不律儀に處するもの」

は、大正本にはなきも、三本、

宮本によりてこれを補へり。

【七二】現在の不善の身故と、

身無數との成就關係。

【七三】大正本には、母の上に

凡夫人の三字あるも、母胎と

卵膜とに處して現在の教と無

表と無きは單に凡夫人に限る

ことなく無垢人も亦然るを以

つてこれを除けり。

因みに、發智論にはこは無き

なり。

【七四】現在の隱沒無記の身故

には無數は無し。

【七五】現在の不隱沒無記の身

にして色界に非ざれば、彼の行に色界の果あるに非ざるなり。頗し行にして色界の果あるに非ざるも、彼の行は色界ならざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。色界道による欲界の化と化作せし欲界の語との如きと、色界道によりて結を斷じ趣證するが如きとなり。

諸行にして無色界に非ざるものなれば、彼の行に無色界の果あるに非ざるものありや。答へて曰く、是くの如し。諸行にして無色界に非ざれば、彼の行に無色界の果あるに非ざるなり。頗し行にして無色界の果あるに非ざるも、彼の行は無色界ならざるに非ざるありや。答へて曰く、有り。無色界道によりて結を斷じ趣證するが如し。

諸行にして無漏に非ざるものなれば、彼の行に無漏の果あるに非ざるや。答へて曰く、是くの如し。諸行にして無漏の果あるに非ざれば、彼の行は無漏に非ざるなり。頗し行にして無漏に非ざるも、彼の行は無漏の果あらざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。色・無色界道によりて結を斷じ趣證するが如し。

第四節 有漏・無漏行と有漏・無漏果との因果關係

頗し有漏行に有漏の果あることありや。答へて曰く、有り。所謂 依果と報果となり。頗し有漏行に無漏の果あることありや。答へて曰く、有り。解脱果なり。頗し有漏行に有漏・無漏の果あることありや。答へて曰く、有り。所謂、依果と報果と解脱果となり。

頗し無漏行に無漏果あることありや。答へて曰く、有り。所依果と解脱果となり。頗し無漏行に有漏果あることありや。答へて曰く、無きなり。頗し無漏行に有漏・無漏の果あることありや。答へて曰く、無きなり。

頗し有漏・無漏行に有漏・無漏の果あることありや。答へて曰く、無きなり。頗し有漏・無漏行に有漏果あることありや。答へて曰く、無きなり。頗し有漏・無漏行に無漏果あることありや。答へて曰く、無きなり。

三本・宮本によりてこれを補へり。

【六二】入定するものとは、定んで無教あることを顯はし、又、教有ることを遮するなり。

【六三】「彼の無教を得ず」とは、過去の身教が發する所の無教が現在に隨轉することを顯はすなり。

【六四】「戒律儀に處するもの不律儀に處するものにして身教無きもの」といふに就きて二の解釋あり、一は、彼の初利那には必ず教あるが故に第二利那以後なりと説くもの、二は、身教無くして不律儀を受くるものあり、又、定中に在りても具戒を受くるものあるが故に、初利那も亦、可なりとするものなり。(婆沙百二十二、毘曇部十三、頁一四三) 因みに、戒律儀に處するもの……不律儀亦不律儀に處するもの」は、大正本に戒律儀不律亦不不律處」とあるも、三本・宮本に従つて斯く訂正せり。

【六五】「戒律儀に處するもの不律儀に處するものにして身教を有するもの」といふにつきて亦、二の解釋あり、一は、初利那のみを取る、何となれば以後の諸利那には身表無きが故なりと説くものと、二は、後位にも身表が亦起り得べき

若しくは色界に生じて不隱沒無記の身の教を有するものなり。^{七六}
口教につきても亦、是くの如し。

第三節 四界の行と四界の果との因果關係

諸行にして欲界なれば、彼の行には欲界の果ありや。答へて曰く、是くの如し、諸行にして欲界なれば彼の行には、^{八〇}欲界の果あるなり。頗し行に欲界の果あるも、彼の行は欲界に非ざるものありや。答へて曰く、有り、色界道による。^{八一}欲界の化と化作せし欲界の語との如きなり。

諸行にして色界なれば、彼の行に色界の果ありや。答へて曰く、是くの如し、諸行に色界の果あれば、彼の行は色界なるなり。頗し行にして色界なるも彼の行に色界の果あるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。色界道による欲界の化と化作せし欲界の語との如きと、^{八三}色界道により結を斷じ趣證するが如きとなり。

諸行にして無色界なれば、彼の行に無色界の果ありや。答へて曰く、是くの如し。諸行に無色界の果あれば、彼の行は無色界なるなり。^{八五}頗し行にして無色界なるも、彼の行は無色界の果あるに非ざるものありや。答へて曰く、有り。無色界道によりて結を斷じ趣證するが如きなり。

諸行にして無漏なれば、彼の行に無漏の果ありや。答へて曰く、是くの如し。諸行にして無漏なれば彼の行に無漏の果あるなり。頗し行に無漏の果あるも彼の行は無漏に非ざるものありや。答へて曰く、有り、色・無色界道によりて結を斷じ趣證するが如きなり。

諸行にして欲界に非ざれば、彼の行に欲界の果あるに非ざるや。答へて曰く、是の如し。諸行に欲界の果あるに非ざれば、彼の行は欲界に非ざるなり。頗し行にして欲界に非ざるも彼の行に欲界の果にあらざるに非ざるものありや。答へて曰く、有り、色界道による欲界の化と化作せし欲界の語との如し。諸行にして色界に非ざれば、彼の行に色界の果あるに非ざるや。答へて曰く、是くの如し、諸行

【五四】大正本には、無の上に非の字あるも、翻乙本によりてこれを除けり。
次の※印はこれに准ず。

【五五】茲に「過去竟」の夾註あり。

【五六】未來の身故と身無教との成就關係に就きて。

因みに、未來の身口教を成就せざるは若し未來を成就すとならば未だ業を作らざるに而も受用するとの不都を來せばなり。

これに反して無教は心と共に未來修として心に隨つて修することあればなり。

【五七】未來の善の身故と身無教との成就關係。

【五八】未來の不善と隱沒無記と不隱沒無記との教・無教を成就するもの無し。

發智論は此の三者を別別に説けり。

因みに、未來及び過去の隱沒無記・不隱沒無記の教を成就すること無きは其の成就と得との力が唯同利那の行のみを成就するのみにて力の能く已滅と未至とを成就するもの無きが爲めなり。

【五九】現在の身故と無教との成就關係。

【六〇】大正本には、律の上に戒の字あるも、三本・宮本によりてこれを除けり。

【六一】僕は大本本に無きも、

謂ふなり。

(二)云何んが無教を成就するも教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ戒律儀に處し不善の身の教無く、本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得するものと、不律儀に處するもの及び不律儀亦不律儀に處するものにして不善の身の教無く、本に教を有せしも便ち失して彼の無を得するものと、是れを無教を成就するも教は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが教と無教とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處し不善の身の教を有し彼の無教をも得するものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せるものと、不律儀に處するもの及び不律儀亦不律儀に處するものにして不善の身の教を有し彼の無教を得するものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得するものと、是れを教と無教とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが教と無教とを成就するに非ざるものなりや。答へて曰く、母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ律儀に處して不善の身の教無く、本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處し不善の身の教無く、本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せざるものと、若しくは色・無色界に生ずるものと、是れを教と無教とを成就するに非ざるものと謂ふなり。

若し現在の隱沒無記の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、無教を成就するもの有ること無し。

頗し教を成就するものありや。答へて曰く、有り。色界に生じて隱沒無記の身の教を有するものなり。

若し現在の不隱沒無記の身表を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、無教を成就するもの有ること無し。頗し教を成就するものありや。答へて曰く、有り。欲界に生じ

得の字あるも、聖乙本に従ひて之れを除けり。

【四〇】過去の善の身教と身無就教との成關係。

【四一】色界に生じ過去の善の身教を有して失せざるものは、佛が且つて梵世に往至せしとき梵衆天が禮拜し乃至彼の加行を未だ捨せざる以來、過去の善の身教を成就するが如きをいふなり。

【四二】「本は善の身」とは、大正本に「善身本」とあるも意味通じ難きを以つて斯く訂正せり。

【四三】大正本には、失の上に不の字あるも、三本・宮本によりてこれを除けり。

【四四】「彼の無教を得せざるもの」とは、大正本に無きも、三本・宮本によりて補へり。

【四五】不律儀は、大正本に律儀處とあるも、三本・宮本によりて斯く訂正せり。

【四六】過去の不善の身教と身無就との成關係。

茲に順後句あるも、三本・宮本は四句分別をなすこと、前節の註に出せし四句に准じて知るべし。

【四七】過去の隱沒無記と不隱沒無記との教及び無教を成就するものなし。因みに、發智論は此の二者を別別に説けり。

て彼の無教を得せるものと、戒律儀に處するもの及び不律儀に處するもの及び不律儀亦不律儀に處するものにして善の身の教無く、本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得するものと、若しくは色界に生じて入定するものと、是れを無教を成就するも教は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが教と無教とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せずして善の身の教を有し彼の無教を得するものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得するものと、戒律儀に處するもの及び不律儀に處するものにして善の身の教を有し彼の無教を得するものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得するものと、是れを教と無教とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが教と無教とを成就するに非ざるものなりや。答へて曰く、母胎と膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せず、入定せずして善の身の教無く本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せざるものと、不律儀に處するもの及び不律儀亦不律儀に處するものにして善の身の教無く本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せざるものと、若しくは色界に生じて入定せずして善の身の教無きものと、無色界に生ずるものと、是れを教と無教とを成就するに非ざるものと謂ふなり。

若し現在の不善の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、或は教を成就するも無教は非らざるものあり。

(一)云何んが教を成就するも無教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ戒律儀に處して不善の身の教を有するも彼の無教を得せざるものと、本に教を有せしも失せずして彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處し不善の身の教を有するも彼の無教を得せざるものと、本に教を有せしも失せずして彼の無教を得せざるものと、是れを教を成就するも無教は非らざるものと

は等至の煩惱にして生の煩惱に非ざるが故に、身口行を起すこと能はざるなり。

【三】 不隱沒無記の身教には無教無し。

【四】 茲に「不定教竟」の夾註あり。

【四】 前節に於て身教とその無教との成就關係を論究したるに引き續きて、本節は之れを更に三世に配して其の成就關係を明にせんとする段なり。因みに、最後に口教と其の無教との成就關係に一言觸れて、身教と身口教との如しといへり。

尙、心得へ置くべきことは欲界中には隨心轉の無表無く、色界中には表による無表無きことなり。

【四二】 過去の身教と無教との成就關係。

【四三】 發智論には次に、「設ひ有せしも而も失するもの」の一句あり。

【四四】 戒律儀に處するものと、不律儀に處するものとに關しては第二剎那以後なりと説くものと、初剎那にても可なりと、するものとの二説あり。

而して、後者は初剎那なりと雖も前の加行位の教・無教を成就するが故にといふ立場なり。

【四五】 大正本には、不の次に

(二)云何んが教と無教とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せずして身の教を有し彼の無教をも得するものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得ずものと、戒律儀に處するもの、不律儀に處するもの、不律儀亦不律儀に處するものにして身の教を有し彼の無教を得せるものと、本に教を有し失せずして彼の無教をも得せるものと、是れを教と無教とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが教と無教とを成就するに非ざるものなりや。答へて曰く、母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せず入定もせずして、身の教無く本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處し身の教無く本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せざると、若しくは色界に生じて入定せず、身の教無きものと、無色界に生ずるものと、是れを教と無教とを成就するに非ざるものと謂ふなり。

若し現在の善の身教を成就するものなれば、彼れは無教をもなりや。答へて曰く、或は教を成就するも無教は非、ざるものあり。

(二)云何んが教を成就するも無教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せずして善の身の教を有するも彼の無教を得せざるものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せざるものと、不律儀に處するもの及び不律儀亦不律儀に處するものにして善の身の教を有するも彼の無教を得せざるものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せざるものと、若しくは色界に生じ善の身の教を有するものと、是れを教を成就するも無教は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無教を成就するも教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せずして入定するものと、入定せざるも善の身の教無く、本に教を有せしも便ち失し

て、前者は抽象的一般的に完全を期して答へたるに對して後者は具體的なる例を示して答へたるものなれば意味の上にて於いて大なる相違なし。而るに此は、婆沙に依れば口教によりて身の無教を得れた場合にして謂はば異類にして同類に非ず。婆沙評者は、此の四句を評して、語を發して他を遣はし殺等をなさしめて無表を得ずるものは必ず其の際身手等を動かして身表を成就するが故にとの立場より「唯、不善の無表のみを成就するもの有るこゝ無きを以つて、此は但、應に順後句を作すべきなり」と言へり。

【三】律儀に處して不善の身教を有すとは、靜慮・無漏・別解脱の三律儀に住して而かも人を捶打するが如き不善の身教を起す場合をいふなり。

【七〇】隱沒無記の身教には無教無し。

色界にのみ隱沒無記の身口教あるも、欲界には無し何となれば、身見と邊見と彼の二と相應する無明とは隱沒無記なりと雖も見諦所斷にして内門にのみ轉じ微細なるが故に身口行を起すこと能はざればなり。

又、欲界生の已離欲染者には初禪の煩惱ありと雖も、こは

して無色界に生ずるものとなり。

五五 若し未來の善の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、教を成就するもの有ること無し。

頗し無教を成就するものありや。答へて曰く、有り。無垢人にして母胎と膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて色界の善心を得するものと、色界に生ずるものと、無垢人にして無色界に生ずるものとなり。

五八 若し未來の不善と隱沒無記と不隱沒無記との身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、教と無教とを成就するもの有ること無し。

五九 若し現在の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、或は教を成就するも無教は非らざるものあり。

(一)云何んが教を成就するも無教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せずして身の教を有するも彼の無教を得せざるものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處し身の教を有するも彼の無教を得せざるものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せざるものと、若しくは色界に生じ身の教を有するものと、是れを教を成就するも無教は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無教を成就するも教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せずして入定するものと、入定せざるも身の教無きか、本に教を有せしも便ち失するかにして彼の無教を得するものと、戒律儀に處するもの、不律儀に處するもの、不律儀亦不律儀に處するものにして身の教無きか本に教を有せしも便ち失するかにして彼の無教を得するものと、若しくは色界に生じて入定せるものと、是れを無教を成就するも教は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが教と無教とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處するもの、不律儀に處するもの、不律儀亦不律儀に處するものにして不善の身の教を有し彼の無教を得するもの、本に教を有し失せずして彼の無教を得するものなり。是れを教と無教とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが教を成就するに非ず無教も非らざるものなりや。答へて曰く、母胎と卵膜漸厚とに處するものと、欲界に生じ律儀に處するもの、不律儀亦不律儀に處するものにして不善の身の教無く彼の無教を得せざるか、本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せざるものなり、若しくは色・無色界に生ずるものとなり、是れを教を成就するに非ず無教も非らざるものと謂ふなり。

而るに、婆沙論第二百二十二卷(毘曇部十三、頁一三五)には有人の説として大體右の四句分別と一致するものを掲げ居れり。但し第二句の答へが「欲界に生じて律儀に住するもの及び非律儀非律儀に住するものにして他を遣はして殺等をなさしむるものなり」とある點に相違あるのみなり。而し

を得せず本に善の身の教を有し失せずして彼の無教をも得するものと、律儀に處するものと、不律儀に處するものと、不律儀亦不律儀に處するものにして本に善の身の教を有し失せずして彼の無教を得するものと、若しくは色界に生じ本に善の身の教を有して失せざるものと、是れを教と無教とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが教と無教とを成就するに非ざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ不律儀に處し本に善の身の教無きか、教を有せしも便ち失せるかにして彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處し本に善の身の教無きか、教を有せしも便ち失せるかのものと、阿羅漢と、凡夫人とにして無色界に生ずるものと、是れを教と無教とを成就するに非ざるものと謂ふなり。

若し過去の不善の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、是くの如し、若し無教を成就するものなれば、彼れは教を成就するなり。

頗し教を成就するも無教は非らざるものありや。答へて曰く、有り。欲界に生じ律儀に處し本に不善の身の教を有して失せずして彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處し本に不善の身の教を有し失せずして彼の無教を得せざるものとなり。

若し過去の隱没無記・不隱没無記の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、教と無教とを成就するもの有ること無し。

若し未來の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、教を成就するもの有ること無きなり。

頗し無教を成就するものありや。答へて曰く、有り。無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ、色界の善心を得するものと、若しくは色界に生ずるものと、無垢人に

れを示せば次の如し。

若し不善の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、或は教を成就するも無教は非らざるものあり。

(一)云何んが教を成就するも無教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處し不善の身の教を有し彼の無教を得せざるものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處し不善の身の教を有し彼の無教を得せざるものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せざるものとなり、是れを教を成就するも無教は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無教を成就するも教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處して不善の身の教無く彼の無教を得するか、本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せるかのものと、不律儀亦不律儀に處し、不善の身の教無くして彼の無教を得するか本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せるかのものとなり。是れを無教を成就するも教は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが教と無教とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せずして本に身の教を有し失せずして彼の無教を得せるものと、戒律儀に處するものと、不律儀に處するものと、不律儀亦不律儀に處し本に身の教を有し失せずして、彼の無教を得せるものと、若しくは色界に生じ本に身の教を有して失せざるものと、是れを教と無教とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが教と無教とを成就するに非ざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ^{四五}不律儀亦不律儀に處し本に身の教無く、設ひ教を有せしも便ち失せるものと、阿羅漢と、凡夫人とにして無色界に生ずるものと、是れを教と無教とを成就せざるものと謂ふなり。

若し過去の善の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、或は教を成就するも無教は非らざるものあり。

(一)云何んが教を成就するも無教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ不律儀に處し本に善の身の教を有し失せずして彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處して本に善の身の教を有し失せずして彼の無教を得せざるものと、是れを教を成就するも無教は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無教を成就するも教は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人して母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せずして本に善の身の教無きか教を有せしも便ち失せるかのものと、若しくは色界に生じ本に善の身の教無きものと、若しくは學にして無色界に生ずるものと、是れを無教を成就するも、教は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが教と無教とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處するも戒律儀

斯く訂正せり。

【七】大本本には、不の上に亦の字あるも、三本・宮本によりて之れを除けり。

【八】凡夫人にして無色界に生ずるものは、已に有漏のを捨し、無漏のは未だ得せず、又彼の地には色無きによりて、教と無教とを成就せざるなり。

【九】善の身教と無教との成就關係。

【一〇】不律儀に處するものにして善の身教を有するものとは、屠羊者等が、父母・師長・佛・獨覺・諸の佛弟子等に於て供養・恭敬して善の身教を起すが如きをいふなり。

【一一】戒律儀に處すれば必ず善の身教を有するが故に、茲に、戒儀を得せずしてといへるなり。

【一二】大本本には、亦の字無きも、三本・宮本によりて之を補へり。

【一三】大本本には、處の字無きも、三本・宮本によりて之を補へり。

【一四】發智論には、「彼の無教を得せざるもの」との一句無し、次も亦、同じ。

【一五】不善の身教とその成就關係。

これに順後句あり。

因みに、三本・宮本に依ればこれにも四句分別あり。今こ

善の身の教を有し彼の無教を得せざるものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處し不善の身の教を有し彼の無教を得せざるものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せざるものとなり。

【三六】 若し隱没無記の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、無教を成就するもの有ること無し。

【三七】 頗し教を成就するもの有りや。答へて曰く、有り。色界に生じて隱没無記の身教あるものなり。

【三八】 若し不隱没無記の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、無教を成就するもの有ること無し。

【三九】 頗し教を成就するものありや。答へて曰く、有り。欲界に生じ若しくは色界に生じて不隱没無記の身の教を有するものなり。

第二節 三世の身教と身無教との成就關係(附、口教と口無教との成就論)

【四〇】 若し過去の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、或は教を成就するも無教は非らざるものあり。

【四一】 云何んが教を成就するも無教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ不律儀亦不律儀に處し本に身の教を有し失せずして彼の無教を得せざるもの、是れを教を成就するも無教は非らざるものと謂ふなり。

【四二】 云何んが無教を成就するも教は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ律儀に處するも戒律儀を得せずして本に身の教無きか、教を有せしも便ち失せるかのものと、若しくは色界に生じ本に身の教無きもの、若しくは學にして無色界に生ずるものと、是れを無教を成就するも教は非らざるものと謂ふなり。

を起すこと無く、前世の教は已に失せり。但し靜慮と無漏との無教のみを成就するなり。

【四九】 律儀に處するものとは、ここに於ては靜慮と無漏との律儀に住するものをいふ。

【五〇】 身の教無きものとは、或は眠り、或は醉ひ、或は悶して諸の加行を捨し、教を起すことを求めざるものをいふなり。

【五一】 本に教を有せしも便ち失すとは、意樂息むが故にと、加行を捨するが故にと、限られたる勢が過ぐるが故にとの三緣の故に失するをいふなり。

【五二】 色界に生じて身教無きものとは、加行を捨して教を起すことを求めざるものをいふなり。

【五三】 發智論には、次下に、「設ひ有せしも而も失するもの」との一句あり。

【五四】 無垢人にして無色界に生ずるものとは、學なれば學の無教を、無學なれば無學の無教を成就するをいふなり。

【五五】 戒律儀(別解脱律儀)に處するものと戒不律儀(不律儀)に處するものとは、定んで身の教と無教とを成就するなり。

【五六】 戒不律儀に處すとは、大正本に、戒律儀に處せずとあるも、三本・宮本によりて

るものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せざるものと、是れを教を成就するも無教は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無教を成就するも教は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じて律儀に處するも、戒律儀を得せずして善の身の教無きものと、本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得するものと、若しくは色界に生じ善の身の教なきものと、無垢人にして無色界に生ずるものと、是れを無教を成就するも教は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが教と無教とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ律儀に處し戒律儀を得せずして、身の教を有し彼の無教を得するものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得するものと、戒律儀に處するものと、不律儀に處するものと、亦、不律儀亦不律儀に處するものにして善の身の教を有し彼の無教を得するものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得するものと、若しくは色界に生じ善の身の教を有するものと、是れを教と無教とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが教と無教とを成就するに非ざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ不律儀に處し善の身の教無く、本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處し善の身の教無く、本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せざるものと、若しくは凡夫人にして無色界に生ずるものと、是れを教と無教とを成就せざるものと謂ふなり。

若し不善の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、是くの如し、若し不善の身の無教を成就するものなれば、彼れは教をも成就するなり。

頗し教を成就するも無教は非らざるものありや。答へて曰く、有り。欲界に生じ律儀に處し不

相續して斷ぜざるなり。或は又、(一)意樂に由ると、(二)所依に由ると(未だ命終せざるなり)、(三)事物に由るとの三縁の故に無教は相續して斷ぜざるなり。

(婆沙百二十二卷、毘曇部十三、頁一八以下参照)。

【五】身教と無教との成就關係。

【六】身の教を有すとは、不眠・不醉・不悶にして加行を捨てず身教を起すことを求むるものをいひ、彼の無教を得せずとは身教を起すも雖も嚴重なる信或は猛利なる譚所起のものに非ざるが故に其の無教を得せざるをいふなり。

【七】本に教を有して失せずとは、(一)意樂息まざると、(二)加行を捨てざると、(三)限られたる勢が未だ過ぎざるとの三縁に由るが故に、教を捨てざるをいひ、彼の無教を得せずとは、前註に釋せしが如し。

【八】無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものといふ中、卵膜漸厚(卵體)に處する聖者は、寶智論、及び婆沙論(百二十卷、毘曇部十三、頁九四)はこれを許さざるも八種度論のみはこれを許せしなり。

而して、母胎及卵體中に在りては心・身微劣なるが故に教

せざるものなり。是れを教を成就するも無教は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無教を成就するも教は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ、律儀に處するも戒律儀を得せずして、身の教無きか。三本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せるかものと、若しくは、色界に生じて身の教無きものと、若しくは、無垢人して無色界に生ずるものと、是れを無教を成就するも、教は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが教と無教とを成就するものなりや。答へて曰く、欲界に生じ、律儀に處するも戒律儀を得せざるものにして身の教を有し彼の無教を得するものと、本に教を有して失せず、彼の無教を得せるものと、戒律儀に處するものと、戒不律儀に處するものと、不律儀亦不律儀處に處し身の教を有し、彼の無教を得するものと、本に教を有して失せず、彼の無教を得するものと、若しくは色界に生じ身の教を有するものと、是れを教と無教とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが教と無教とを成就するに非ざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして母胎と卵膜漸厚とに處するものと、若しくは欲界に生じ不律儀亦不律儀に處するものにして身の教無く、本に教を有せしも便ち失して彼の無教を得せざるものと、凡夫人にして無色界に生ずるものと、是れを教と無教とを成就するに非ざるものと謂ふなり。

若し善の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、或は教を成就するも無教は非をざるものあり。

(一)云何んが教を成就するも無教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生じ不律儀に處するものにして善の身の教を有するも彼の無教を得せざるものと、本に教を有し失せずして彼の無教を得せざるものと、不律儀亦不律儀に處するものにして善の身の教を有するも彼の無教を得せざるものと、

無教(但し無記には無教無きなり)、(五)不隱没無記の身教と無教との關係を論究するを其の課題とす。

因みに、此の論を作す所以は「表・無表業には、實の體性無し」と主張する譬喩者の異執を遣せんが爲めなりとは婆沙(百二十二卷)の解釋なり。

而して、以下の本文を解釋するには次の如き事項を心得へ置かば便宜多からん。即ち、散心にありては、身三口四の七根本業道の中、邪淫を除く所餘の根本業道には定んで無教あるも、教は不定にして若し自ら作し即時に究竟すれば彼れに教あるも、他を遣して作すか或は究竟する時教が已に息めば無教のみ有りて教は無きなり。邪淫は教・無教共に定んで有り。

加行位には、教は必ず有るも無教は、利猛なる纏か殷重なる信かの所起なれば有るも、然らざれば無きなり。更に後起の位には、定んで無教有り、教は作すときは則ち有るも作されざるときは則ち無きなり。

更に又、處中の律儀所攝の妙行惡行の無教は、(一)意樂息まざると、(二)加行を捨せざると、(三)限られたる勢が未だ過ぎざるとの三縁によりて

云何んが身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修するものなりや。若し身を修すれば彼れは戒をも修するや、乃至……心を修するや……、慧をも修するや。設し慧を修すれば、彼れは身をも修するや。若し戒を修すれば彼れは心をも修するや、乃至……慧をも修するや。設し慧を修すれば、彼れは戒をも修するや。若し心を修すれば、彼れは慧をも修するや。設し慧を修すれば、彼れは心をも修するや。

(七) 頗し過去の戒を成就するも、未來・現在の此の種は非らざるものありや。及び未來を成就するも現在に非らざるものありや、及び現在を成就するも、未來は非らざるものありや。及び未來、現在の此の種を成就するものありや。

頗し未來の戒を成就するも、過去・現在の此の種は非らざるものありや。及び過去を成就するも、現在は非らざるものありや。及び現在を成就するも過去は非らざるものありや。及び過去・未來の此の種を成就するものありや。

頗し現在の戒を成就するも、過去・未來の此の種は非らざるものありや、及び過去を成就するも、未來は非らざるものありや、及び未來を成就するも過去は非らざるものありや。及び過去・未來の此の種を成就するものありや。

此の章の義を願はくは具さに演說せん。

第一節 身教(身表業)と身無教(身無表業)との成就關係に就きて

若し身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。答へて曰く、或は教を成就するも無教は非らざるものあり。

(一) 云何んが教を成就するも無教は非らざるものなりや。答へて曰く、欲界に生ずる非律儀亦不處律儀のもの、身の教を有するも彼の無教を得せざるか、本に教を有し失せずして彼の無教を得

〔三〕 戒種の三世に於ける成就に關する問題。

〔四〕 本節は、教(vijāpiti)と無教(avijāpiti)。

即ち、表業と無表業との成就關係を明にするに當りて、先づ、(一)身教と無教との成就關係を明し、次に(二)善の身教と無教、(三)不善の身教と無教、(四)隱沒無記の身教と

ば、彼の行は無漏に非ざるや。

(四) 頗し有漏行に有漏の果あるものありや。有漏行に無漏の果あるものありや。有漏行に有漏無漏の果あるものありや。

頗し無漏行に無漏の果あるものありや。無漏行に有漏の果あるものありや。無漏行に有漏・無漏の果あるものありや。

頗し有漏・無漏行に有漏・無漏の果あるものありや。有漏・無漏行に有漏の果あるものありや。有漏・無漏行に有漏・無漏の果あるものありや。

(五) 頗し學行に學果あるものありや。學行に無學果あるものありや。學行に非學非無學果あるものありや。

頗し無學行に無學果あるものありや。無學行に學果あるものありや。無學行に非學非無學果あるものありや。

頗し非學非無學行に非學非無學果あるものありや。非學非無學行に學果あるものありや。非學非無學行に無學果あるものありや。

(六) 又世尊の言く「身を修せず、戒を修せず、心を修せず。智慧を修せず」と。

云何んが身を修せず、戒を修せず、心を修せず、智慧を修せざるものなりや。

若し身を修せざれば、彼れは戒をも修せざるや、乃至……心を修せず、……智慧をも修せざるや。設し慧を修せざれば、彼れは身をも修せざるや。若し戒を修せざれば、彼れは心をも修せざるや、乃至……慧をも修せざるや。設し慧を修せざれば、彼れは戒をも修せざるや。若し心を修せざれば、彼れは智慧をも修せざるや。設し智慧を修せざれば、彼れは心をも修せざるや。

又世尊の言く「身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修す」と。

【一〇】有漏・無漏行と有漏・無漏果との因果關係に關する問題。

【一一】三學行と三學果との因果關係に關する問題。

【一二】身・戒・心・慧の・修不修に關する問題。

設し無教を成就するものなれば、彼れは教をも成就するや。

若し現在の身教を成就するものなれば、彼れは無教をもなりや。設し無教を成就するものなれば、彼れは教をも成就するや。

若し現在の善・不善・隱没無記・不隱没無記の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。設し無教を成就するものなれば、彼れは教をも成就するや。

口教につきても亦、是くの如し。

五 (三) 諸行にして欲界繫ならば、彼の行に欲界繫の果ありや。設し行に欲界繫の果があれば、彼の行は欲界繫なりや。

諸行にして色界繫なれば、彼の行に色界繫の果ありや。設し行に色界繫の果があれば、彼の行は色界繫なりや。

諸行にして無色界繫なれば、彼の行に無色界繫の果ありや。設し行に無色界繫の果があれば、彼の行は無色界繫なりや。

諸の無漏行あり、彼の行に無漏の果ありや。設し行に無漏の果があれば、彼の行は無漏なりや。諸行にして欲界に非ざれば、彼の行に欲界の果あるに非ざるや。設し行に欲界の果があるに非ざれば、彼の行は欲界に非ざるや。

諸行にして色界に非ざれば、彼の行に色界の果あるに非ざるや。設し行に色界の果があるに非ざれば、彼の行は色界に非ざるや。

諸行にして無色界に非ざれば、彼の行に無色界の果があるに非ざるや。設し行に無色界の果があるに非ざれば、彼の行は無色界に非ざるや。

諸行にして無漏に非ざれば、彼の行に無漏の果あるに非ざるや。設し行に無漏の果あるに非ざれば、彼の行は無漏に非ざるや。

業果界、是非

有漏等、學等、

身戒、與心慧、

總別、修、不修、

戒類、三世成、

此章願具說、

【三】 身教と身無教との成就の問題。

【四】 三世の身教と身無教との成就の問題。

【五】 四界の行と四界の果との因果關係に關する問題。

【六】 大正本には、繫の次下に果の字あるも、三本によりてこれを除けり。

【七】 大正本には、果の字無きも三本・宮本によりて果の字を補へり。

【八】 非は大正本に不とあるも、三本・宮本によりて非と訂正せり。

【九】 非は大正本に不とあるも、明本に従つて非と改む。

卷の第十七 (第四編 業變度)

第四章 教行・無教行に關する論究

(行健度中、有教無教跋渠第四) (發智論卷第十二、大正・二六、九七七頁)

本章の内容目次 第一

有教と及び無教と、

或は有漏と學者と

諸行と彼の果實と、

思惟と戒は後に在り。

本章の内容目次 第二

三 (一) 若し身教を成就するものなれば、彼れは無教を成するものなれば、彼れは教をも成就するや。

若し善・不善・隱沒無記・不隱沒無記の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。設し無教を成就するものなれば、彼れは教をも成就するや。

四 (二) 若し過去の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。設し無教を成就するものなれば、彼れは教をも成就するや。

若し過去の善・不善・隱沒無記・不隱沒無記の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。設し無教を成就するものなれば、彼れは教をも成就するや。

若し未來の身教を成就するものなれば、彼れは無教をも成就するや。設し無教を成就するものなれば、彼れは教をも成就するや。

若し未來の善・不善・隱沒無記・不隱沒無記の身教を成就するものなれば、彼れは無教を成するものなりや。

【一】 本章は、教行と無教行、即ち表業と無表業とに關する諸種の問題を論究するなり。其の内容の概要は註二に讓る。

【二】 「有教と及び無教」とは、身・口教と身・口無教との成就に關する諸問題を取り扱ふを指し、

「諸行と彼の果實」とは、三界行及び無漏行と、三界の果及び無漏果との間に於ける因果關係を論ずるをいひ、

「或は有漏」とは有漏、無漏行と有漏無漏果との因果關係を論ずるを指し、

「學者」とは、三學行と三學果との因果關係を明すを言ひ、

「思惟」とは身、戒、心、慧の修不修に關する問題を取り扱へるを指し、

「戒は後に在り」とは戒種の三世に於ける成就關係を論ずるを指すなり。

因みに此れに相當する發智論の頌文を示せば次の如し。

「表無表、總別、四性、三世成」

若し欲界行と色・無色界行と無漏行とを成就するものなれば、此は命終して後、當に何の所に生ずべきや。答へて曰く、或は一〇五 欲界、或は色界、無色界、或は處所無きなり。

阿毘曇書衆生品第三竟、(梵本三百九首盧、四千六百三十一言)

の成就關係を明せる一句あり。即ち、「若し欲界繫の善行を成就するものなれば、彼れは色・無色界繫の業をも成就するや。答ふ、諸の欲界繫の善行を成就するものなれば彼れは定んで、色・無色界繫の業を成就するなり。

有るは色・無色界繫の業を成就するも欲界繫の善業は非ざるものあり。謂く斷善根の補特伽羅か若しくは色界に生ずるものかなり。」

【九二】 欲界の善行と色・無色界の善行との成就關係。

【九三】 善本とは、善根のこと。

【九四】 本節は、欲・色・無色の

三界繫行及び不繫無漏行との四行の相互成就關係を明にする段なり。

【九五】 欲界行と色界行との成就關係。

【九六】 色界生のものといへども、欲界の化語を起すことあるを以つて色界行を成就するものは必ず欲界行を成就するなり。

【九七】 欲界行と無色界行との成就關係。

【九八】 無色界に生ずるものは、欲界を已に捨せしが故に欲界行を成就せず。

【九九】 無色界生の未離無色染にして無漏無記との三行を成就し、異熟生心に住せざれば善と染汚と成就す、已離無色染にして異熟生心に住すれば二行を成就し、異熟生心に住せざれば善行のみを成就するなり。

【一〇】 欲界行と無漏行との成就關係。

【一一】 色界行と無色界行との成就關係。

【一二】 色界行と無漏行との成就關係。

【一三】 聖者の欲・色界生のものにして無色界の善心を得せざれば、學行と無色の染汚行とを成就し、善心を得ずるも未離無色染のものなれば學行と無色の善と染汚との二行とを成就し、若し無色染を離れば無學行と無色の善行とを成就す。

聖者の無色界生にして未離無色染のものが異熟生心に住すれば學行と無色の三行を成就し、異熟心に住せざれば學行と二行とを成就す。

無色染を離れ異熟生心に住す

已離無色染なれば色界の二行と無色の善行とを成就するなり。

【一四】 發智論には、此の次に欲界の善行と色・無色界行とれば無學行と二行とを成就し、異熟生心に住せざれば無學行と無色の善行とを成就するなり。

【一五】 本節は、欲・色・無色の三界繫行と不繫行とを成就するものゝ生處に關する論究なり。

【一六】 聖者にして欲界生の未離欲染のものは色界に生じ、已離欲染のものは色界に生じ、已離色染のものは無色界に生じ、已離無色染のものは生處無し。聖者にして色界生の未離色染のものは色界に生じ、已離色染のものは無色界に生じ、已離無色染のものは生處無し。

聖者にして無色界生のものは欲・色界行を成就せざるが故にここに説かず。

【一七】 聖本及び聖乙本には、「秦四千五百六言」とあり。

阿毘曇八鍵度論卷第十六

第三章 殺生並びに業の異熟果等に關する論究

(四)云何んが欲界の行と無漏行とを成就せざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして無色界に生ずるもの、是れを欲界行と無漏行とを成就せざるものと謂ふなり。

若し色界の行を成就するものなれば、彼れは無色界の行をも成就するや。答へて曰く、是くの如し、若し色界の行を成就するものなれば、彼れは無色界の行を成就するなり。

頗し無色界の行を成就するも色界の行は非らざるものありや。答へて曰く、有り。無色界に生ずるものなり。

若し色界の行を成就するものなれば、彼れは無漏行をも成就するや。答へて曰く、或は色界の行を成就するも無漏行は非らざるものあり。

(一)云何んが色界の行を成就するも無漏行は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして欲界・色界に生ずるもの、是れを色界の行を成就するも無漏行は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無漏行を成就するも色界の行は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして無色界に生ずるもの、是れを無漏行を成就するも色界の行は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが色界の行と無漏行とを成就するものなりや。答へて曰く、無垢人にして欲界・色界に生ずるもの、是れを色界の行と無漏行とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが色界の行と無漏行とを成就せざるものなりや。答へて曰く、凡夫人にして無色界に生ずるもの、是れを色界の行と無漏行とを成就せざるものと謂ふなり。

若し無色界の行を成就するものなれば、彼れは無漏行をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。若し無漏行を成就するものなれば、彼れは無色界の行をも成就するなり。

頗し無色界の行を成就するも無漏行は非らざるものありや。答へて曰く、有り。凡夫人なり。

第十二節 三界行と無漏行とを成就するもの生處に就きて

との成就關係。

因みに、欲界生の斷善根者と及び未だ色界の善心を得せざる不斷善根者とは、不善行と色・無色界の染汚行とを成就す。色界の善心を得するも未離欲染者は不善行と、色界の善と染汚との二行と無色界の染汚行とを成就するなり。

【八〇】 欲界生の已離欲染のものにして、未だ無色の善心を得せざるものは、色界の善と染汚と無覆無記との三行と無色界の染汚行とを成就す。

無色界の善心を得するも未離色染のものなれば、色界の三行と無色界の善と染汚との二行を成就す、色界の染を離るるも無色界の染を離れざれば、色界の善と無覆無記との二行と無色の善と染汚との二行を成就す。

無色界の染を離るれば色界の二行と無色の善行とを成就するなり。

【八一】 色界生のものにして未だ無色の善心を得せざれば、色界の三行と無色の染汚行とを成就す。

無色の善心を得するも未離色染の善と染汚との二行を成就す。已離色染なるも未離無色染なれば、色界の善と無覆無記の二行と無色の二行とを成就す。

(三)云何んが欲界の善行と色・無色界の善行とを成就するものなりや。答へて曰く、若しくは欲界に生じ、色・無色界の善心を得するもの、是れを欲界の善行と色・無色界の善行とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが欲界の善行を成就せず、色・無色界の善行も非らざるものなりや。答へて曰く、善根本を斷ぜるもの、是れを欲界の善行を成就せず、色・無色界の善行をも非らざるものと謂ふなり。

第十一節 三界行及び無漏行の相互成就關係に就きて

若し欲界の行を成就するものなれば、彼れは色界の行をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。

設し色界の行を成就するものなれば、彼れは欲界の行をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。

若し欲界の行を成就するものなれば、彼れは無色界の行をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。

若し欲界の行を成就するものなれば、彼れは無色界の行をも成就するなり。

頗し無色界の行を成就するものにして、彼れは欲界の行を成就せざるものありや。答へて曰く、

有り。若しくは、無色界に生ずるものなり。

若し欲界の行を成就するものなれば、彼れは無漏をも成就するや。答へて曰く、或は欲界の行を成就するも、無漏行を成就せざるものあり。

(一)云何んが欲界の行を成就するも、無漏行は非らざるものなりや。答へて曰く、若し凡夫人にして欲・色界に生ずるもの、是れを欲界の行を成就するも、無漏行は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無漏行を成就するも欲界の行は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして無色界に生ずるもの、是れを無漏行を成就するも欲界の行は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが欲界の行と無漏行とを成就するものなりや。答へて曰く、無垢人にして若しくは欲界・色界に生ずるもの、此れを欲界の行と無漏行とを成就するものと謂ふなり。

るを見て」とあり。

【九】此の猶、云云と直後の猶云云とは發智論にて前後せり。以下これに準じて皆前後入りかはれることを知れ。

【一〇】見とは、眼識の所受をいひ、聞とは耳識の所受をいひ、別(覺)とは鼻・舌・身識の所受をいひ、識とは、意識の所受をいふなり。

【一一】顛倒にして不善ならざる行。

【一二】「見無く果實無し」とは、發智論に「因果無しと見て」とあり。

【一三】不善にして顛倒なる行

【一四】不善にも顛倒にもあらざる行

【一五】善行と不顛倒との四句分別。

尚、發智論は茲の文を次の如くに言へり。若し業にして是れ善なれば、彼の業は不顛倒なりや。答ふ、應に四句を作すべし、前の第二句を此の第一句と作し、前の第一句を此の第二句と作し、前の第四句を此の第三句と作し、前の第三句を此の第四句と作す、廣くは前説の如し」と。

【一六】本節は、善行・不善行と三界繫行との相互成就關係を明にせんとする段なり。

【一七】不善行と色・無色界行

彼れに身妙行、口、意妙行あるが如し。猶、一有り見、ざるに見ずとの想有り、聞かず別たす識らざるに聞かず別たす識らずとの想有るとき、彼れは此の想を以つて、此の忍を以つて、此の欲を以つて、此の智慧を以つて、我れは見ず、聞かず、識らずといふが如し。猶一有り、見るに見るとの想有り、聞き別ち識るに聞き別ち識るとの想有るとき、彼れ此の想を以つて此忍を以つて、此の見を以つて、此の欲を以つて、此の智慧を以つて、我れは見、聞き別ち識るといふが如し、是れを行の不善に非ざるものにして此の行は顛倒にも非ざるものと謂ふなり。

非につきても亦、是くの如し。

第十節 善・不善行と三界繫行との相互成就關係に就きて

若し不善行を成就するものなれば、彼れは色・無色界の行をも成就するや。答へて曰く、是くの如し。若し不善行を成就するものなれば、彼れは色・無色界の行を成就するなり。

頗し色・無色界の行を成就するも不善行を成就するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。若しくは欲界に生じて欲愛を盡くせるものと、若しくは色界に生ずるものとなり。

若し欲界の善行を成就するものなれば、彼れは色・無色界の善行をも成就するや。答へて曰く、或は欲界の善行を成就するも色・無色界の善行は非らざるものあり。

(一)云何んが欲界の善行を成就するも色・無色界の善行は非らざるものなりや。答へて曰く、若しくは欲界に生じ、善本を斷ぜずして色・無色界の善心を得せざるもの、是れを欲界の善行を成就するも、色・無色界の善行は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが色・無色界の善行を成就するも欲界の善行は非らざるものなりや。答へて曰く、若しくは色界に生じて無色界の善心を得するもの、是れを色・無色界の善行を成就するも欲界の善行は非らざるものと謂ふなり。

加行・解脫・勝進道の業と無記業とは、離繫と異熟とを除く三果に由りて有果と名くるなり。

因みに、此の論究ある所以は外道が善惡業には果も異熟も無しと主張するに對して一切の業は有果ならざる無く、有漏善と不善との業には皆異熟有ることを顯はさんが爲めなりとなり。

(婆沙百二十一卷、毘曇部十三、頁一〇六參照)。

【七二】 行の有果・有報分別。

【七三】 大正本には、盡の上の有の字あるも不要なるを以つて除却せり。

【七四】 無漏行は堅實なりと雖も愛の潤すこと無きを以つて異熟果無く、無記行は愛の潤すことありと雖も堅實ならざるが故に異熟果無きなり。

【七五】 行の無果・無報分別。本節は、先づ不善行と顛倒との關係を四句分別によりて明し、次に善行と不顛倒との關係を四句分別に依りて明にする段なり。但し後者はこれを省略して讀けり。

【七六】 不善行と顛倒との四句分別。

【七七】 不善にして顛倒ならざる行。

【七八】 「見あり果實有り」としては、發智論には「因果有

せずして、我は見、聞き別ち識るといふが如し。是れを行にして不善なるも彼れは顛倒に非ざるものと謂ふなり。

【二】云何んが行にして顛倒なるも此の行は不善に非ざるものなりや。答へて曰く、猶一有り、見無く果實無しとして是くの如き見、是くの如き語——行無く行の果報無し——をなし、彼れに身妙行、口・意妙行あるが如し。猶、一有り、見ることに無きに見るとの想有り、聞かず別たす識らざるに聞き則ち識るとの想有るとき、彼れ此の想を以つて、此の忍を以つて此の欲を以つて此の欲を以つて此の智慧を以つて我れは見、聞き別ち識るといふが如し。猶、一有り、見るに見るとの想無く、聞き別ち識るに聞き別ち識るとの想無きとき、彼れは此の想を以つて、此の忍を以つて、此の見を以つて此の欲を以つて此の智慧を以つて我れは見、聞かず別たす識らずといふが如し。是れを、行は顛倒なるも彼の行は不善に非ざるものと謂ふなり。

【三】云何んが行の不善にして彼の行が顛倒なるものなりや。答へて曰く、猶、一有り。見無く果實無しと見て、是くの如き見、是くの如き語——行無く行の果報無し——をなし、彼れに身惡行、口、意惡行あるが如し。猶、一有り、見ざるに見ずとの想あり、聞かず別たす識らざるに聞かず別たす識らずとの想有るとき、彼れは此の想を以つてせず、此の忍を以つてせず、此の見を以つてせず、此の欲を以つてせず、此の智慧を以つてせずして、我れは見、聞き別ち識るといふが如し。猶、一有り。見るに見るとの想有り。聞き別ち識るに聞き別ち識るとの想有るとき彼れは此の想を以つてせず、此の忍を以つてせず、此の見を以つてせず、此の欲を以つてせず、此の智慧を以つてせず、此の忍を以つてせずして、我れは見、聞かず別たす、識らずといふが如し。是れを行の不善にして彼の行が顛倒なるものと謂ふなり。

【四】云何んが行にして不善にも非ず彼の行は顛倒にも非ざるものなりや。答へて曰く、猶、一有り、見あり果實有りとして、是くの如き見、是くの如き語——行有り、行の果報有り——をなし、

道の斷のみあるなり。
(婆沙百二十一、毘曇部十三、頁一〇四參照)。

【六】未離染業と其の異熟との離染時の關係。

【七】總未盡とは、未離染のこと。

【八】須陀洹の具諸斷の行は既に四法忍の時離染せるも、其の異熟は其の時に非ずして、第九無間道の時離染するなり。

【九】離染業と異熟との離染時の關係。

【十】本節は、行が有果なれば彼の行は有報(有異熟)なりや否や。又、行が無果なれば彼の行は無報なりや否やに就きて論究せんとする段なり。而して、一切の行は有果にして無果なるものなきも、行には有報なるも、無報なるもあり。

即ち、世俗の對治道の行は等流果(riṅgyandapha)。

異熟果(vipākapha)。

士用果(purīṣakārapha)。

增上果(adhipatiṣa)。

の五果を有するが故に有果と名け、世俗の加行、解脫、勝進道の業と、不善業と、諸餘の有漏善の業とは離繫果を除く四果に由りて有果と名け、無漏の對治道は異熟を除く四果に由りて有果と名け、無漏の

れば、彼の行も婬盡なるなり。頗し行が婬盡なるも報は非らざるものありや。答へて曰く、有り。須陀洹の見諦所斷の行は婬盡なるも、彼の報は婬未盡なるなり。

^{七〇} 第八節 行の有果と有報、無果と無報の關係に就きて

^{七一} 若し行にして有果なれば、彼の行は盡く有報なりや。答へて曰く、是くの如し、若し行にして有報なれば此の行は ^{七二} 盡く有果なるなり。

頗し行にして有果なるも彼の行は無報なるものありや。答へて曰く、有り。無記と無漏との行な

^{七四} 若し行にして無果なれば、彼の行は盡く無報なりや。答へて曰く、行にして有果ならざるもの無きなり。頗し行にして無報なるものありや。答へて曰く、有り。無記と無漏との行なり。

^{七五} 第九節 善・不善行と顛倒・不顛倒の關係に就きて

^{七六} 若し行にして不善なれば、彼の行は盡く顛倒なりや。答へて曰く、或は行にして不善なるも此の行は顛倒に非ざるものあり。

(一)云何んが行にして不善なるも彼の行は顛倒に非ざるものなりや。答へて曰く、猶、一有 ^{七九} 見あり果實有りとして、是くの如き見、是くの如き語——行有り行の果報有り——をなし、彼れに身惡行、口・意惡行あるが如し。猶、一有りて ^{八〇} 見ざるに見るとの想有り、聞かず別たす、識らざるに聞き別ち識るとの想有るとき、彼れは此の想を以つてせず、此の忍を以つてせず、此の忍を以つてせず、此の見を以つてせず、猶、一有り。見るに見るとの想無く、聞き別ち識るに聞き別ち識るとの想無きとき、彼れは此の想を以つてせず、此の忍を以つてせず、此の忍を以つてせず、此の欲を以つてせず、此の智慧を以つて

熟果を五部に通ずと説くを破して業は五部に通ずるも異熟は唯修所斷のみなることを顯はさんが爲めなりとなり。因みに、以下の文を解するに當りて次の事項を心得へ置かば解し易すからん。

(一)、有る業は先に離染し後其の異熟が離染す。

(二)、有る業はその異熟と同時に離染す。

(三)、異熟が業より先に離染することなし。即ち、四法忍の時四部所攝の諸の不善業は先に離染を得ずるも彼の異熟は非らず、又、欲染を離るる前八無間道の時、前八品の修所斷の諸の不善業は先に離染を得ずるも彼の異熟は非らず、彼の諸の異熟は要す第九無間道の時に至りて離染を得ずればなり。以上は業が先に離染し其の異熟が後に離染する場合なり。

欲染を離るる第九無間道の時は第九品の不善業と一切の不善の身・語業と欲界の有漏の善業と及び彼の異熟とが俱時に離染するなり、乃至有頂の第九無間道の場合も亦、然り。而して、非色の不善業は五部所攝なるを以つて九品道の斷あるも、不善の色業と有漏の善業と一切の異熟とは唯修所斷のみなるが故に、上上品の

有せしも便ち失せるかのものなり是れを身行と及び意行とを成就するも口行は非らざるものと謂ふなり。云何んが身行と及び口・意行とを成就するものなりや。答へて曰く、卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの無垢人と、若しくは欲界に生ずる處威儀のものと、不處威儀のものと、不威儀亦不處威儀のもの、身口教を有するか、設ひ教を有せしも失せざるかのものと、若しくは色界に生ずるものと無垢人にして無色界に生ずるものとなり、是れを身行と及び口・意行とを成就するものと謂ふなり。設し口・意行を成就するものなれば、彼れは身行をもなりや。答へて曰く、或は成就するものあり、或は成就せざるものあり。云何んが成就するものなりや。答へて曰く、向の所説のものなり、是れを成就するものと謂ふなり。云何んが成就せざるものなりや。答へて曰く、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、身の教無きか設ひ身の教を有せしも便ち失せるかにして口の教を有するか設ひ口の教を有せしも失せざるかのもの、是れを成就せざるものと謂ふなり。

^{六四}若し口行を成就するものなれば、彼れは意行をも成就するや。答へて曰く、是くの如し、若し口行を成就するものなれば、彼れは意行を成就するなり。

頗し意行を成就するも口行は非らざるものありや。答へて曰く、有り。卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの凡夫人と、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、口の教無きか、設ひ口の教を有せしも便ち失せるかのものと、凡夫人にして無色界に生ずるものとなり。

^{六五}第七節 行と報との離染の關係に就きて

^{六六}若し行にして 姪未盡なれば、彼の報も姪未盡なりや。答へて曰く、是くの如し、若し行にして 姪未盡なるものなれば、彼の報は姪未盡なり。頗し報にして姪未盡なるも行は非らざるものありや。

^{六七}答へて曰く、有り。須陀洹の見諦所斷の行は姪盡なるも、彼れの報は姪未盡なるなり。

^{六八}若し行にして姪盡なれば、彼の報も姪盡なりや。答へて曰く、是くの如し、若し報にして姪盡な

【六四】口行と意行との成就關係に就きて。

【六五】本節は、見所斷の不善の意業及び、修所斷の不善の身・語・意業並に一切の有漏の善業と、其等が感ずる異熟果との離染の時間的關係を明にせんとする段なり。而して、此の論究ある所以は、犍子部が五部の業の所得の異

へて曰く、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、口の教を有するか、設ひ口の教を有せしも失せずして身の教無きか、設ひ身の教を有せしも便ち失せるかのもの、是れを口行を成就するも身行は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが身・口行を成就するものなりや。答へて曰く、卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの無垢人と、若しくは欲界に生ずる處威儀のもの、不處威儀のものと、不威儀亦不處威儀のもの、身口の教を有するか、設ひ教を有せしも失せざるかのもの、若しくは色界に生ずるものと、無垢人にして無色界に生ずるものとなり。是れを身・口行を成就するものと謂ふなり。(四)云何んが身・口行を成就せざるものなりや。答へて曰く、卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの凡夫人と、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、身・口の教無きか設ひ教を有せしも便ち失せるかのもの、若しくは無色界に生ずる凡夫人となり。是れを身・口行を成就せざるものと謂ふなり。

若し身行を成就するものなれば、彼れは意行をも成就するや。答へて曰く、是くの如し、若し身行を成就するものなれば彼れは意行をも成就するなり。

頗し意行を成就するも、彼れは身行を成就するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの凡夫人と、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、身の教無きか、設ひ身の教を有せしも便ち失せるかのもの、若しくは凡夫人にして無色界に生ずるものとなり。

若し身行を成就するものなれば、彼れは口・意行をも成就するや。答へて曰く、或は身行と及び意行とを成就するも口行は非らざるものあり、及び口・意行を成就するものあり。云何んが身行と及び意行とを成就するも口行は非らざるものなりや。答へて曰く、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、身の教を有するか設ひ身の教を有せしも失せざるかにして口の教無きか設ひ口の教を

【三】 身行と意行との成就關係。

【三】 身行と口・意行との成就關係。

何んが身及び身・意行を成就するも口行は非らざるものなりや。答へて曰く、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、身の教を有するか設ひ身の教を有せしも失せざるものにして、口の教無きか設ひ口の教を有せしも便ち失せるかのもの、是れを身及び身・意行を成就するも口行は非らざるものと謂ふなり。云何んが身及び口・意行を成就するも身行は非らざるものなりや。答へて曰く、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、口の教を有するか設ひ口の教を有せしも失せざるかにして身の教無きか設ひ身の教を有せしも便ち失せるかのもの、是れを身及び口・意行を成就するも身行は非らざるものと謂ふなり。云何んが身及び身・口・意行を成就するものなりや。答へて曰く、卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの無垢人と、若しくは欲界に生ずる處威儀のものとな威儀のものと、不威儀亦不處威儀のもの、身の口・意行を成就するも設ひ教を有せしも失せざるかのものと、若しくは色界に生ずるものと、是れを身及び身・口・意行を成就するものと謂ふなり。

設し身・口・意行を成就するものなれば、彼れは、身をも成就するや。答へて曰く、或は成就するものあり。或は成就せざるものあり。云何んが成就するものなりや。答へて曰く、向の所説のものなり、是れを成就するものと謂ふなり。云何んが成就せざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして無色界に生ずるものなり。是れを成就せざるものと謂ふなり。^{五九}

第六節 身・口・意行の相互成就關係に就きて

若し身行を成就するものなれば、彼れは口行をも成就するや。答へて曰く、或は身行を成就するも口行は非らざるものあり。(一)云何んが身行を成就するも口行は非らざるものなりや。答へて曰く、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、身の教を有するか、設身のひ教を有せしも失せざるかにして口の教無きか設ひ口の教を有せしも便ち失せるかのもの、是れを身行を成就するも口行は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが口行を成就するも身行は非らざるものなりや。答

【五〇】 或は亦、身表をも成就するものとあり。

【五一】 凡夫人にして無色界に生ずるものは、無色界なるが故に身無く、凡夫人なるが故に界地を越ゆるとき有漏の身行を捨せるなり。

【五二】 身と口行との成就關係に就きて。

【五三】 身と意行との成就關係に就きて。

【五四】 身と身行と口行との成就關係に就きて。

【五五】 身と身行と意行との成就關係に就きて。

【五六】 以下の文は、發智論に「此は昔、前の身を身業・意行に對する中に説けるが如し、差別あるをいへば、此に語表を説くことなり」とて省略せらる。

【五七】 身と身行と口行と意行との成就關係に就きて。

【五八】 以下の文は、發智論に「此は皆、前の身を身業・語表に對する中に説くが如し」とて省略され居れり。

【五九】 茲に「身覺」の夾註あり。

【六〇】 本節は、身・口・意の三行の相互成就關係を明かにする段なり。

【六一】 身行と口行との成就關係。

て無色界に生ずるものなり。是れを成就せざるものと謂ふなり。

【五五】若し身を成就するものなれば、彼れは口・意行を成就するや。答へて曰く、或は身及び意行を成就するも口行は非らざるものあり、及び口行・意行を成就するものあり。云何んが身及び意行を成就するも口行は非らざるものなりや。答へて曰く、卵膜漸厚に處するとの凡夫人と、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、口の教無きか、設ひ口の教を有せしも便ち失するかのものとなり、是れを身及び意行を成就するも口行は非らざるものと謂ふなり。云何んが身及び口行・意行を成就するものなりや。答へて曰く、卵膜漸厚に處するとの無垢人と、若しくは欲界に生ずる處威儀のものと、不處威儀のものと、不威儀亦不處威儀のもの、口の教を有するか設ひ口の教を有せしも失せざるかのものと、若しくは色界に生ずるものとなり。是れを身及び口行・意行を成就するものと謂ふなり。

設し口・意行を成就するものなれば、彼れは身をも成就するや。答へて曰く、或は成就するものあり、或は成就せざるものあり。云何んが成就するものなりや。答へて曰く、向の所説のものなり。是れを成就するものと謂ふなり。云何んが成就せざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして無色界に生ずるものなり、是れを成就せざるものと謂ふなり。

【五七】若し身を成就するものなれば、彼れは身・口・意行をも有するや。答へて曰く、或は身と及び意行とを成就するも身・口行は非らざるものあり及び身・意行を成就するも、口行は非らざるものあり、及び口・意行を成就するも身行は非らざるものあり、及び身・口・意行を成就するものあり。云何んが身と及び意行とを成就するも身・口行は非らざるものなりや。答へて曰く、卵膜漸厚に處するとの凡夫人と、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、身・口の教無きか設ひ教を有せしも便ち失せるかのものと、是れを身及び意行を成就するも身・口行は非らざるものと謂ふなり。云

は、發智論及び婆沙論の本論にも共に、諸の聖者の胎藏中に住するものとのみあり。故に聖者にして卵胎に住するものを認めざるなり。之に對して八健度はこれをも認容したるなり。

因みに、婆沙論百二十卷（毘曇部十三、頁九四）には聖者が卵・濕の二生を受けざる理由に就きて詳論せり。而して、聖者は母胎中には未だ表を起さざるも、先の靜慮と無漏との無表を成就することを得るなり。

【四六】處威儀のものは、律儀に住するものとの意にして即ち、欲界に生じて律儀に住するものは、別解脱・靜慮・無漏の律儀に住することを得るなり。

【四七】不處威儀のものは、不律儀に住するものとの意にして、即ち、屠羊者の如きものをいふ。

【四八】不威儀亦不處威儀のもの、の身教を有するものとは、非律儀非不律儀に住し現に身表有るものとの意にして、即ち、不眠・不醉・不問のものと、加行を捨せずして表業を起すことを求むるものとをいふなり。

【四九】色界に生ずるものは、決定して身の無表を成就し、

の。是れを身及び口行を成就するも身行は非らざるものと謂ふなり。云何んが身及び身行・口行を成就するものなりや。答へて曰く、膜漸厚に處すると母胎に處するとの無垢人と、若しくは欲界に生ずる處儀儀のものと、不處威儀のものと、不威儀亦不處威儀のもの身、口の教を有するか設ひ教を有せしも失せざるかのものと、若しくは色界に生ずるものとなり。是れを身及び身・口行を成就するものと謂ふなり。設し身・口行を成就するものなれば、彼れは身をも成就するや。答へて曰く、或は成就するものあり、或は成就せざるものあり。云何んが成就するものなりや。答へて曰く、向の所説のもの、是れを成就するものと謂ふなり。云何んが成就せざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして無色界に生ずるものなり。是れを成就せざるものと謂ふなり。

若し身を成就するものなれば、彼れは身行・意行をも成就するや。答へて曰く、或は身及び意行を成就するも身行は無きものあり、及び身行・意行を成就するものあり。云何んが身及び意行を成就するも身行は非らざるものなりや。答へて曰く、卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの凡夫人と、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、身の教無きか設ひ教を有せしも便ち失するかのものとなり。是れを身及び意行を成就するも身行は非らざるものと謂ふなり。云何んが身と及び身行・意行とを成就するものと謂ふなり。

設し身行と意行とを成就するものなれば、彼れは身をも成就するや。答へて曰く、或は成就するものあり。或は成就せざるものあり。云何んが成就するものなりや。答へて曰く、向の所説のものなり。是れを成就するものと謂ふなり。云何んが成就せざるものなりや。答へて曰く、無垢人にし

に就きて。

【四二】「卵膜漸厚に處するものとは、發智論に母胎に處するものとあり。又、母胎に處する凡夫人とは發智論に異生の胎藏中に住するものとあり。而して、卵殿及び母胎中に住するものは身を成就するも、身も心も微劣なるを以つて表を起すこと能はず。又、先に發せし表業も死する時に已に失せるを以つて成就せざるなり。

【四三】「欲界に生じて不有威儀不處非威儀のもの身の教無きか」とは、發智論に、「欲界に生じて非律儀非不律儀に住し都て身表無きものか」とあり。

こは、即ち、眠と醉と悶と諸の加行を捨して表を起すことを求めざるものといふなり。
【四四】「失すとは、教は（一）意樂息むが故に、（二）加行を捨するが故に、（三）限られたる勢が過ぐるが故にの三緣の故に失するなり。

【四五】「無垢人とは、聖者のこととして、即ち、有學は學の隨轉の身業を成就し、無學は無學の隨轉の身業を成就す。無漏は、無色界に生ずるも捨せざるが故なり。

【四六】「卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの無垢人」と

無色界に生ずるものなり。是れを口行を成就するも身は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが身と口行とを成就するものなりや。答へて曰く、膜漸厚に處すると母胎に處するとの無垢人と、若しくは欲界に生ずる處威儀のものと、不處威儀のものと、不威儀亦不處威儀のもの、口に教有るか設ひ教を有して失せざるかのものと、若しくは色界に生ずるものとなり。是れを身と口行とを成就するものと謂ふなり。(四)云何んが身を成就せず口行も非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人の無色界に生ずるもの、是れを身を成就せず、口行も非らざるものと謂ふなり。

若し身を成就するものなれば、彼れは意行をも有するや。答へて曰く、是くの如し、若し身を成就するものなれば、彼れは意行をも有するなり。頗し意行を成就するも身は非らざるものありや。答へて曰く、有り。無色界に生ずるものなり。

若し身を成就するものなれば、彼れは身・口行をも有するや。答へて曰く、或は身を成就するも身・口行は非らざるものあり、及び身行を成就するも口行は非らざるものあり、及び口行を成就するも身・口行は非らざるものあり。

云何んが身を成就するも身・口行は非らざるものあり、及び口行を成就するも身・口行は非らざるものありや。答へて曰く、卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの凡夫人と、若しくは欲界に生ずる非威儀亦不處威儀のもの、身口の教無きか設ひ教を有せしも便ち失するかのものとなり、是れを身を成就するも身・口行は非らざるものと謂ふなり。云何んが身及び身行を成就するも口行は非らざるものなりや。答へて曰く、若しくは欲界に生ずる非威儀亦不處威儀のもの、身の教を有するか設ひ教を有せしも失せざるかにして口の教無きか、設ひ口の教を有せしも便ち失するかのもの。是れを身及び身行を成就するも口行は非らざるものと謂ふなり。云何んが身及び口行を成就するも身行は非らざるものなりや。答へて曰く、若しくは欲界に生ずる不威儀亦不處威儀のもの、口の教を有するか設ひ教を有せしも失せざるかにして身の教無きか、設ひ身の教を有せしも便ち失するかのもの

【三】戒は發智論に學處とあり。以下*印はこれに准ず。

【三】こは、別解股律儀と靜慮律儀と無漏律儀との三律儀を成就する人と、靜慮と無漏との二律儀を成就する人とを除く所餘の人。天と餘趣の全とをいふなり。

【三】本節は。(一)身と身行との成就關係、(二)身と口行との成就關係、(三)身と意行との成就關係を四句分別に依りて明にせる段なり。(婆沙百二十卷、毘曇部十三、頁八六以下參照)。

尙、以下の本文を解するに際して次の事項を心得へ置かば解し易し。

(一)、身は無色界に生ぜば定んで、成就せざるも欲・色界に生ぜば定んで成就す。
 (二)、身行・口行は、凡夫人にして母胎に住するもの、凡夫人にして母胎に住するもの、凡夫人の無色界に生ずるものとは定んで成就せず。一切の聖者と色界の異生と欲界の異生にして善・惡戒に住するものとは定んで成就す。餘は或は成就し或は成就せず。
 (三)、意行は一切が皆定んで成就するなり。

(婆沙百二十卷、毘曇部十三、頁一〇三參照)。

【四】身と身行との成就關係

へて曰く^{三八} 上の爾所の事を除くものなり。

第五節 身と身・口・意行との成就關係に就きて

若し身を成就するものなれば、彼れは身行をも有するや。答へて曰く、或は身を成就するも身行は非らざるものあり。

(一)云何んが身を成就するも身行は非らざるものなりや。答へて曰く、^{四一} 卵膜漸厚に處するものと、母胎に處する凡夫と、若しくは^{四二} 欲界に生じて不有威儀不處非威儀のものゝ身の教無きか、設ひ教を有せしも便ち^{四三} 失するかのものとなり。是れを身を成就するも身行は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが身行を成就するも身は非らざるものなりや。答へて曰く、^{四四} 無垢人にして無色界に生ずるもの、是れを身行を成就するも身は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが身と身行とを成就するものなりや。答へて曰く、^{四五} 卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの無垢人と、若しくは欲界に生ずる^{四六} 處威儀のもの、^{四七} 不處威儀のもの、^{四八} 不威儀亦不處威儀のものゝ身の教を有するか設ひ教を有せしも失せざるかのもの、若しくは^{四九} 色界に生ずるものとなり。是れを身と身行とを成就するものと謂ふなり。

(四)云何んが身を成就せず身行も非らざるものなりや。答へて曰く、^{五〇} 凡夫人の無色界に生ずるもの。是れを身を成就せず、身行も非らざるものと謂ふなり。

若し身を成就するものなれば、彼れは口行をも有するや。答へて曰く、或は身を成就するも口行は非らざるものあり。(一)云何んが身を成就するも口行は非らざるものなりや。答へて曰く、^{五一} 卵膜漸厚に處すると母胎に處するとの凡夫人と、若しくは欲界に生じて不威儀亦非不處威儀のもの口の教無きか、設ひ教を有せしも便ち失するかのものとなり。是れを身を成就するも口行は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが口行を成就するも、身は非らざるものなりや。答へて曰く、無垢人にして

生處にあり、而かも色蘊の異熟をも受くることを顯はさんが爲めの論起として、無間業をなして地獄の中有を受くる時、染汚心あることを得といへるなり。尙、婆沙論は此の文を解釋するに乘じて五無間業に関する諸種の論究を試みたり。(婆沙百十九卷、毘曇部十三、頁六〇以下參照)。

【二六】戒即ち別解脱律儀を受くること無く、唯、正性離生に入り法性を證見する時、不作律儀を得するに依りて、淨即ち防護を得する場合と、別解脱律儀を受けて淨を得する場合との二あり、これを論究するが本節の課題なり。(婆沙百十九卷、毘曇部十三、頁七一參照)。

【二七】殺生の加行中に戒を受けずして淨を得する場合。

【二八】法に値ふとは、發智論に法性を證見すとあり、即ち、正性離生に入ること。

【二九】淨の得・不得と戒の受・不受とに由る四句分別。

【三〇】茲に「見諸人」の夾註あり。

【三一】戒は發智論には遠離とあり。以下これに准ず。

【三二】茲に「受戒改往」の夾註あり。

【三三】茲に「此言質約譯人欲示」の夾註あり。

や。答へて曰く、有り。無救の方便を作す中間に命終するものゝ如し。

第三節 中陰中に受くる無救行(無間業)の報に就きて

頗し行の不善、苦痛にして、行が未だ熟せざるものなれば、彼の行は彼れが初めに報を受くるとき、必ず染汚心あることありや。答へて曰く、有り。無救行を作して彼れ初めて地獄の中陰を受くることきなり。

第四節 二種の淨(防護)に就きて

頗し衆生の命を害し彼れは後、戒を受けずして、當に一切衆生中に淨なりと言ふべきものありや。答へて曰く、有り。方便して衆生を害せんと欲し、中間に法に値ふものなり。

若し一切衆生中に淨なるものなれば、彼れは一切衆生中に戒を受くるや。答へて曰く、或は一切衆生中に淨なるも彼れは一切衆生中に戒を受くるに非ざるものあり。

(一)云何んが一切衆生中に淨なるも、彼れは一切衆生中に戒を受くるに非ざるものなりや。答へて曰く、戒を受けずして中間に法に値ふものゝ如し。是れを一切衆生中に淨なるも一切衆生中に戒を受くるに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが一切衆生中に戒を受くるも、彼れは一切衆生中に淨に非ざるものなりや。答へて曰く、戒を受けて戒を越ゆるものゝ如し。是れを一切衆生中に戒を受くるも、彼れは一切衆生中に淨なるに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが、一切衆生中に淨にして、彼れは一切衆生中に戒を受くるものなりや。答へて曰く、戒を受けて戒を越へざるものゝ如し。是れを一切衆生中に淨にして一切衆生中に戒を受くるものと謂ふなり。

(四)云何んが一切衆生中に淨ならず、彼れは一切衆生中に戒を受くるにもあらざるものなりや。答

【二四】殺生の根本已に成じ、加行も已に息む場合。

【二五】殺生の根本成せず加行も息まざる場合。

【二六】本節は、通例、殺生業道を完成せしものが地獄の果報を受くるに、未だ業道を完成せずして加行時に命終せるものも地獄の果報を必ず受くることありを示し、そは殺母等の無間業の加行時に命終せるものなることを明す段なり。因みに、婆沙論(百十八卷)はこの解説に於て、五蘊假和合のものを殺して何故殺罪を得するやの問題を初めとして、殺生に關する諸種の理論を述べ居れり、往見すべし。

【二七】大正本には、彼の次に彼の字あるも、三本・宮本によりてこれを除けり。

【二八】本節は、(一)中有無しと説くもの、(二)惡趣に生ずるものには中有無しと説くもの、(三)地獄に生ずるものには中有無しと説くもの、(四)無間業を造るものには中有無しと説くもの、(五)中有中には無間業の異熟を受けず説くもの、(六)中有に住する時は無間地獄の四蘊の異熟のみを受けて色蘊を受けずと説くもの、等の異執を破して、中有は實有にして有色界の一切の

若し^{二六}色界の行を成就するものなれば、彼れは無色界の^{二七}行を成就するや。設し無色界の行を成就するものなれば、彼れは色界の行をも成就するや。

若し色界の行を成就するものなれば、彼れは無漏行をも成就するや。設し無漏行を成就するものなれば、彼れは色界の行をも成就するや。

若し無色界の行を成就するものなれば、彼れは無漏行をも成就するや。設し無漏行を成就するものなれば、彼れは無色界の行をも成就するや。

（二二）若し欲界行と色・無色界行と無漏行とを成就するものなれば、彼れは命終して後、何の處に生ずるや。

此の章の義を願くば具さに演說せん。

第一節 殺生の加行と根本と後起との關係に就きての四句分別

（一）頗し衆生を害して、衆生を害すること盡きざるものありや。答へて曰く、有り。衆生の命を斷じて^{二八}方便が息求せざるものゝ如し。

（二）頗し衆生を害せずして、衆生を害すること盡くるものありや。答へて曰く、有り。衆生の命を害せずして方便が息求するものゝ如し。

（三）頗し衆生を害し、衆生を害すること盡くるものありや。答へて曰く、有り。衆生の命を害して方便が息求するものゝ如し。

（四）頗し衆生を害せずして、衆生を害すること盡きざるものありや。答へて曰く、有り。衆生の命を害せずして方便が息求せざるものゝ如し。

第二節 加行のみにて必ず地獄の報を受くる行に就きて

頗し衆生を害せず衆生を害すること盡きずして、彼の行は報を受け必ず地獄に生ずるものあり

【二六】色は、大正本に欲とあるも、三本・宮本によりて色と改む、次も亦然り。

【二七】大正本には、行の次下に無漏行の三字あるも、三本・宮本に依りてこれを除けり。

次の※印はこれに準ず。

【二八】大正本には、無の上に無色界行の四字あるも、三本・宮本に従つてこれを除けり。

次の※印はこれに準ず。

【二九】三界行及び無漏行を成就するものを生處問題。

【三〇】本節は、殺生（害衆生）の根本業道の成立不成立と、加行（方便）と後起との息・不息との關係を四句によりて分別する段なり。

因みに、茲の文中には殺生の加行をも殺生と名け、殺生の後起をも加行と名くることあり。これを心得へ置かば以下の文は解し易し。婆沙百十八卷（毘曇部十三、頁五四）參照。

【三一】殺生の根本已に成じ加行未だ息まざる場合。

【三二】茲に方便（加行）とは、後起を方便の名にて呼べるなり。

【三三】殺生の根本未だ成せずして加行已に息む場合。

欲未盡なりや。

若し行にして欲盡なれば、彼の報も欲盡なりや。設し報にして欲盡なれば彼の行も欲盡なりや。

二 (八) 若し行にして有果なれば、彼の行の一切は有報なりや。設し行にして有報なれば、彼の行の一切は有果なりや。

若し行にして無果なれば、彼の行の一切は無報なりや。設し行にして無報なれば、彼の行の一切は無果なりや。

三 (九) 若し行にして不善なれば、彼の行の一切は顛倒なりや。設し行にして顛倒なれば、彼の行の一切は不善なりや。

若し行にして不善に非ざれば、一切の彼の行は顛倒に非ざるや。設し行にして顛倒に非ざれば、彼の行の一切は不善に非ざるや。

四 (一〇) 若し不善行を成就するものなれば、彼れは色・無色界の行をも成就するや。設し色・無色界の行を成就するものなれば、彼れは不善行をも成就するや。

若し欲界の善行を成就するものなれば、彼れは色・無色界の善行をも成就するや。設し色・無色界の善行を成就するものなれば、彼れは欲界の善行をも成就するや。

五 (一一) 若し欲界の行を成就するものなれば、彼れは色界の行をも成就するや。設し色界の行を成就するものなれば、彼れは欲界の行をも成就するや。

若し欲界の行を成就するものなれば、彼れは無色界の行をも成就するや。設し無色界の行を成就するものなれば、彼れは欲界の行をも成就するや。

若し欲界の行を成就するものなれば、彼れは無漏行をも成就するや。設し無漏行を成就するものなれば、彼れは欲界行をも成就するや。

【二】 行の有果と有報、無果と無報問題。

【三】 善・不善行と顛倒・不顛倒との問題。

【四】 善・不善行と三界行との成就問題。

【五】 三界行及び無漏行の相互成就問題。

【五】 大正本には、無の次に色界行の三字あるも、三本・宮本及び發智論に従ひてこれを除却せり。
次の※印もこれに准ず。

を有するや。

若し身を成就するものなれば、彼れは意行を有するや。設し意行を成就するものなれば、彼れは身を有するや。

若し身を成就するものなれば、彼れは身行・口行を有するや。設し身行・口行を成就するものなれば、彼れは身を有するや。

若し身を成就するものなれば、彼れは身行・意行を有するや。設し身行・意行を成就するものなれば、彼れは身を有するや。

若し身を成就するものなれば、彼れは口行・意行を有するや。設し口行・意行を成就するものなれば、彼れは身を有するや。

若し身を成就するものなれば、彼れは身行・口行・意行を有するや。設し身行・口行・意行を成就するものなれば、彼れは身を有するや。ⁿ

(六)若し身行を成就するものなれば、彼れは口行を有するや。設し口行を成就するものなれば、彼れは身行を有するや。

若し身行を成就するものなれば、彼れは意行を有するや。設し意行を成就するものなれば、彼れは身行を有するや。

若し身行を成就するものなれば、彼れは口行・意行を有するや。設し口行・意行を成就するものなれば、彼れは身行を有するや。ⁿ

若し口行を成就するものなれば、彼れは意行を有するや。設し意行を成就するものなれば、彼れは口行を有するや。

(七)若し行にして欲未盡なれば、彼の報も欲未盡なりや。設し報にして欲未盡なれば、彼の行も

【七】 茲に「身竟」の夾註あり。

【八】 三行相互成就問題。

【九】 茲に「身行竟」の夾註あり。

【一〇】 行と報との離染問題。

卷の第十六 (第四編 業禪度)

第三章 殺生並びに業の異熟果等に關する論究

(行禪度、害衆生跋渠第三)

本章の内容目次

二 (一) 頗し衆生を害して、衆生を害すること盡きざるものありや。頗し衆生を害せずして衆生を害すること盡くるものありや。頗し衆生を害し、衆生を害すること盡くるものありや。頗し衆生を害せずして衆生を害すること盡きざるものありや。

三 (二) 頗し衆生を害せず衆生を害すること盡きずして、彼の行は報を受けて必ず地獄に生ずることありや。

四 (三) 頗し行の不善・苦痛にして行が不熟なるものなれば、彼の行は彼れが初めに報を受くるとき彼れに必ず染汚心あることありや。

五 (四) 頗し衆生の命を害し後、戒を受けずして、當に一切衆生中において淨なりと言ふべきものありや。

六 若し一切衆生中において淨なれば、彼れは一切衆生中において戒を受くるや。設し一切衆生中において戒を受くれば、彼れは一切衆生中において淨なりや。

七 (五) 若し身を成就するものなれば、彼れは身行を有するや。設し身行を成就するものなれば、彼れは身を有するや。

八 若し身を成就するものなれば、彼れは口行を有するや。設し口行を成就するものなれば、彼れは身

【一】 本章の内容は頗る多岐に渉る・其の組織を發智論の頌文に依りて示せば次の如し。

「害生命、四種、二熟、二防護、身及業、成就、離染、果、異熟、不善顛倒等、聚不聚、成就、命終受生處、此章願具說」

而して、本章を害衆生跋渠と名けしは、本章最初の害衆生の論究に因みしものなり。

【二】 殺生の加行と根本と後起との關係に關する問題。

【三】 殺生の加行によりて地獄の報を受くる行の問題。

【四】 中陰中に受くる無救行の報の問題。

【五】 二種の淨に關する問題。

【六】 身と三行との成就問題。

阿毘曇八犍度論卷第十五

第二章 諸種の善惡行及び其の果報論

三七七

【八】 色とは、茲にては色・味・香・觸の四處の異熟なり。

所を受くるときなり。「又、順現法受業は心心所法を、順次生受業は心不相應行を、順後次受業は色を受くるときなり」とあり。

【九】 心不相應行とは、命根と衆同分と得と三相となり。

【八四】 茲に「三竟」の夾註あり。

【一〇】 以下の文は、發智論及び婆沙論の本論と異る、即ち發智論等には「又、順現法受業は心不相應行を、順次生受業は色を、順後次受業は心

【八五】 三痛行が不前不後に異熟を受くるに就きて。因みに、發智論及び婆沙論は茲の文を省略することなく廣説せり。

【一一】 三界繫行が不前不後に異熟果を受くるに就きて。因みに、理論上は此の論は成立せざれども、今非理を以つて非理に答ふるか、或は異熟果に依らずして増上果に依りてならば、成立せんと婆沙は言ふ。婆沙百十八卷（毘曇部十三、頁四八）參照。

【八六】 茲に「三界竟」の夾註あり。

【八七】 以下の文は、發智論及び婆沙論の本論と相違することなく廣説せり。

【八八】 茲に「三界竟」の夾註あり。

【一二】 善惡行が不前不後に異熟を受くるに就きて。因みに、發智論及び婆沙論の本論には茲の文を省略することなく廣説せり。

【八九】 善惡行が不前不後に異熟を受くるに就きて。

【九〇】 茲に「善不善竟」の夾註あり。

【九一】 見諦斷・思惟斷行が不前不後に異熟を受くるに就きて。因みに、發智論及び婆沙論の本論には茲の文を省略することなく廣説せり。

於て善心有るが如きと、是れを身行・口行が報を受くるが如く意行も亦然りと謂ふなり。

頗し身行・口行・意行の如く報を受けずして而も報を受くるものありや、答へて曰く、有り。諸の心不相應行が報の色と心・心念法と心不相應行とを受くるなり。

第九節 三時行乃至見諦斷・思惟斷行が不前不後に報を受くるに就きて

頗し三行が不前不後に報を受くることありや。三行とは現法報と生報と後報となり。答へて曰く、報を受くることあり、即ち現法報は色を、生報は心・心所念法を、後報は心不相應行を受くるときなり。復次に、現法報は心・心所念法を、生報は色を、後報は心不相應行を受くるときなり。復次に

樂報と苦報と不苦不樂報とも亦、是くの如し。

欲界繫は色を、色界繫は心・心所念法を、無色界繫は心不相應行を受くるときなり。復次に、欲界繫は心・心所念法を、色界繫は色を、無色界繫は心不相應行を受くるときなり。復次に、欲界繫は心不相應行を、色界繫は色を、無色界繫は心・心所念法を受くるときなり。

頗し二行にして不前不後に報を受くるものありや。二行とは善と不善となり。答へて曰く、報を受くるものあり。善は色を、不善は心・心所念法と心不相應行とを受くるときなり。復次に、善は心・心所念法と心不相應行とを、不善は色を受くるときなり。見諦所斷と思惟所斷とも亦、是くの如し。

阿毘曇邪語品第二竟(梵本二百四十五首處、秦五千一百言)

三相とをいふなり。
【六六】本節は、三時行、三痛行、三界行、善惡行、見・思惟所

斷行が不前不後、即ち同一時に異熟果を受くる場合ありや。且つ其等の諸行は五蘊の異熟

異熟を感じるも、無記心なれば異熟を感じざるなり。
【六六】不淨とは發智論に不淨とありて即ち惡行を行ずるをいひ、淨とは護とありて妙行を行ずるをいふ。
【六七】口行が報を受くるが如くに身・意行が報を受けざる場合。
【七〇】意行が報を受くるが如くに身・口行が報を受けざる場合。
【七二】身・口行が報を受くるが如くに、意行が報を受けざる場合。
【七三】身・意行が報を受くるが如くに口行が報を受けざる場合。
【七四】口・意行が報を受くるが如く、身行が報を受けざる場合。
【七五】身・口行が報を受くるが如く意行が報を受けざる場合。
【七六】心不相應行が報を受くる場合。
【七七】こは、無想定と滅盡定と得と及び彼の生・老・無常の頁四五以下參照。
【七九】三時行が不前不後に異熟を受くるに就きて。

は然らざるものと謂ふなり。

七〇 頗し意行が報を受くるが如く、身行口行は然らざるものありや。答へて曰く、有り。身は不淨、口も不淨なるとき、當に爾の時に於て善心有るが如きと、身は淨、口も淨なるとき、當に爾の時に於て不善心有るが如きと、是れを意行が報を受くるが如く、身行・口行は然らざるものと謂ふなり。

七一 頗し身行と口行とが報を受くるが如く、意行は然らざるものありや。答へて曰く、有り。身は不淨、口も不淨なるとき、當に爾の時に於て善心若しくは無記心有るが如きと、身は淨、口も淨なるとき、當に爾の時に於て不善心若しくは無記心有るが如きと、是れを身行と口行とが報を受くるが如く、意行は然らざるものと謂ふなり。

七二 頗し身行・意行が報を受くるが如く、口行は然らざるものありや。答へて曰く、有り。身は有淨、口は淨なるとき、當に爾の時に於て不善心有るが如きと、身は淨、口は不淨なるとき、當に爾の時に於て善心有るが如きと、是れを身行・意行が報を受くるが如く、口行は然らざるものと謂ふなり。

七三 頗し口行・意行が報を受くるが如く、身行は然らざるものありや。答へて曰く、有り。身は有淨、口は不淨なるとき、當に爾の時に於て不善心有るが如きと、身は不淨、口は淨なるとき、當に爾の時に於て善心有るが如きと、是れを口行・意行が報を受くるが如く、身行は然らざるものと謂ふなり。

七四 頗し身行・口行が報を受くるが如く、意行も亦、然らざるものありや。身は不淨、口は淨なるとき、當に爾の時に於て善心有るが如き、是れを口行・意行が報を受くるが如く、身行は然らざるものと謂ふなり。

七五 頗し身行・口行が報を受くるが如く、意行も亦、然るものありや。答へて曰く、有り。身は有淨、口は不淨なるとき、當に爾の時に於て不善心有るが如きと、身は淨、口は淨なるとき、當に爾の時に

十一字あるも、三本・宮本によりて除却せり。

【六二】 應理論者の釋疏

【六三】 本節は三世の諸行が受くる果報に何の世の中におりやを明にする段なり。

而して、此の論究ある所以は、過未の實有を否定する説を破し、又、外道の後法が前法の因となると主張するをも破せんが爲めなりとなり。(婆沙百十八卷、毘婆沙十三、頁三八參照)。

【六四】 報とは、茲にては異熟果のこと。

【六五】 茲に「三世竟」の夾註あり。

【六六】 本節は身・口・意の三行の各自が受くる報果即ち異熟果の異同を愛・非愛の上に就きて分別する段にして、これに七句を生じ、最後に三行即ち不相應行所受の異熟果に關する一句を加へて八ヶの頌問あるなり。

(婆沙百十八卷、毘婆沙十三、頁四〇參照)。

【六七】 身行が報を受くるが如く、口・意行が報を受けざる場合。

【六八】 身行は不淨即ち不善なるが故に非愛の異熟を感じ口行は淨なるが故に愛の異熟を感じ、意行は善心なれば愛の

五九 我が所説を聴け、若し報の義によれば、諸法の行に由りて得するもの、彼の法は無記なりといはば、應に是の説——本無の、如來の善心にて説く語・軟語・妙語・軟美語、此の語は善なり——を作すべからず。是の語は有りと雖も此の事は然らざればなり。若し是の語——本無の、如來の善心にて説く語・軟語・妙語・軟美語、此の語は善なり——を作せば、應に是の語——報の義によれば、諸法の行に由りて得するもの、此の法は無記なり——を作すべからず。此の事は然らざればなり。

六一 當に是の語——本無の、如來が本餘生の時善行の報を受くべきを作せしによる、報が現在前し、彼れは此の因縁に由りて咽喉に四大を得し、四大を行じて、四大より聲を出すなり、而も聲は報に非ざるなり——を作すべし。

六二 第七節 三世行の報の三世分別

頗し過去の行なれば、過去の報ありや。未來・現在の報ありや。答へて曰く、是くの如し。

頗し未來の行なれば、未來の報ありや。答へて曰く、有り。されど過去・現在の報は無し。

頗し現在の行なれば現在の報ありや。答へて曰く、有り。過去の報は無きも未來の報は有り。

六三 第八節 身・口・意三行各自所受の報果(異熟果)の愛・非愛分別

頗し身行が報を受くるが如く、口行・意行が報を受くること、然らざるものありや。答へて曰く、有り。身は不淨、口は淨なるとき、當に爾の時に於て善心若しくは無記心有るが如きと、身は淨、口は不淨なるとき、當に爾の時に於て不善心若しくは無記心あるが如きと、是れを身行が報を受くるが如く、口行・意行が報を受くること然らざるものと謂ふなり。

六九 頗し口行が報を受くるが如く、身行・意行は然らざるものありや。答へて曰く、有り。身は淨、口は不淨なるとき當に爾の時に於て、善心若しくは無記心有るが如きと、身は不淨、口は淨なるとき、當に爾の時に於て不善心若しくは無記心有るが如きと、是れを口行が報を受くるが如く、身行・意行

【五二】 意の三妙行とは、無貪・無瞋・等見なり。

【五三】 こは、無貪・無瞋・等見と善の思と不隱沒無記の巧便の思とを除く所餘の行蘊と四蘊の全と無爲とをいふなり。

【五四】 茲に「妙行竟」の夾註あり。

【五五】 本節は、行(業)に由りて得する果報が無記なることを論定するを其の主目的とす而して、此の論究ある所以は婆沙に據るに、犢子部及び分別論者が施設論の「何に緣りて菩薩は梵音の大士夫相を感じせしや。菩薩は昔、餘生中龐惡語を離れたりしを以つて此の業が究竟して梵音聲を得せしなり」との文に據りて聲を異熟果なりとし、而して、異熟果なり、善なるものもありと主張せんとするを破せんが爲めなり。

(婆沙百十八卷、毘曇部十三、頁三四参照)。

【五五】 犢子部及び分別論者の問

【五五】 應理論者の答

【五七】 犢子部及び分別論者の問

【五七】 應理論者の答

【五九】 犢子部及び分別論者の難

【六〇】 此の上に大正本には、
【報義諸法由行得此法無記】の

記の巧便の口行なり。

諸の意妙行あり、彼れは盡く巧便の意行なりや。答へて曰く、或は意妙行にして彼れは巧便の意行に非ざるものあり。

(一)云何んが意妙行にして彼れは巧便の意行に非ざるものなりや。答へて曰く、意の三妙行なり、是れを意妙行にして彼れは巧便の意行に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが巧便の意行にして彼れは意妙行に非ざるものなりや。答へて曰く、不隱沒無記の巧便の思なり、是れを巧便の意行にして彼れは意妙行に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが意妙行にして彼れは是れ巧便の意行なるものなりや。答へて曰く、善の思なり、是れを意妙行にして彼れは是れ巧便の意行なるものと謂ふなり。

(四)云何んが意妙行にも非ず、巧便の意行にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

第六節 行に由りて得する報の三性分別論

諸法の行に由りて得するもの彼の法は當に善なりと言ふべきや、不善なりや、無記なりや。答へて曰く、報の義によれば、諸法にして行に由りて得するもの、此の法は當に無記なりと言ふべきなり。

是くの如く一報の義によれば、諸法の行に由りて得するもの、彼の法は無記なりや。

答へて曰く、是くの如し。

若し是の説——本無より如來が善心にて説く語・軟語・妙語・軟美語、此の語は善なり——を作す

や。

答へて曰く、是くの如し。

【四三】 隱沒無記の思とは、欲界の身見・邊見と相應する思と、色・無色界の一切の煩惱と相應する思となり。

【四四】 不隱沒無記の無巧便の思とは、不隱沒無記の無巧便の身・口行を起す思をいふなり。

【四五】 こは、貪・瞋・邪見と染汚の思と不隱沒無記の無巧便の思とを除く所餘の行蘊と四蘊の全と無爲とをいふなり。

【四六】 本節は、身・口・意の三妙行と、巧便(如理所引)の身・口・意の三行との難・無雜論を作す段なり。

【四七】 身妙行と巧便の身行との難・無雜論。

【四八】 不隱沒無記の巧便の身行とは、是くの如く來去すべくして而も是くの如く來去する等をいふなり。

【四九】 口妙行と巧便の口行との難・無雜論。

【五〇】 意妙行と巧便の意行との難・無雜論。

無記の身行と 不隱沒無記の無巧便の身行となり。

諸の口惡行は盡く無巧便の口行なりや。答へて曰く、是くの如し、諸の口惡行は盡く無巧便の口行なり。頗し無巧便の口行にして彼れは口惡行に非ざるものありや。答へて曰く、有り。隱沒無記の口行と不隱沒無記の無巧便の口行となり。

諸の意惡行あり。彼れは盡く無巧便の意行なりや。答へて曰く、或は意惡行にして彼れは無巧便の意行に非ざるものあり。

(一)云何んが意惡行にして彼れは無巧便の意行に非ざるものなりや。答へて曰く、意の三惡行なり、是れを意惡行にして彼れは無巧便の意行に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無巧便の意行にして彼れは意惡行に非ざるものなりや。答へて曰く、隱沒無記の思と、不隱沒無記の無巧便の思と、是れを無巧便の意行にして彼れは意惡行に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが意惡行にして彼れは是れ無巧便の意行なりや。答へて曰く、不善の思なり、是れを意惡行にして彼れは是れ無巧便の意行なるものと謂ふなり。

(四)云何んが意惡行に非ず、彼れは無巧便の意行にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の兩所の事を除くものなり。

第五節 三妙行と巧便の三行との相攝關係

諸の身妙行は盡く巧便の身行なりや。答へて曰く、是くの如し、諸の身妙行は彼れは盡く巧便の身行なり。頗し巧便の身行にして彼れは身妙行に非ざるものありや。答へて曰く、有り。不隱沒無記の巧便の身行なり。

諸の口妙行は盡く巧便の口行なりや。答へて曰く、是くの如し、諸の口妙行は彼れは盡く巧便の口行なり。頗し巧便の口行にして彼れは口妙行に非ざるものありや。答へて曰く、有り。不隱沒無記の口妙行は盡く巧便の口行なりや。答へて曰く、是くの如し、諸の口妙行は彼れは盡く巧便の口行なり。頗し巧便の口行にして彼れは口妙行に非ざるものありや。答へて曰く、有り。不隱沒無記の口妙行は盡く巧便の口行なりや。答へて曰く、是くの如し、諸の口妙行は彼れは盡く巧便の口行なり。

をいふなり。

【三四】 三淨と三滿との相攝關係。

【三五】 茲に「滿竟」の夾註あり。

【三六】 本節は、身・口・意の三惡行と、無巧便即ち非理所引の身・口・意の三行との難・無難論を明す段なり。

【三七】 無巧便の意行は不善に限るに、無巧便の口行は不善と無記とに通ずるを以つて其の點、惡行は狭く、無巧便行は廣し、されど意惡行たる貪・瞋・邪見は無巧便に非ざるが故に其の點、惡行は廣く、無巧便行は狭し、此れを心得置かば以下の本文は解し易し。

(婆沙百十七卷、毘曇卷十三、頁三〇以下)參照。

【三二】 身惡行と無巧便の身行との難・不難論。

【三一】 隱沒無記の身行とは、初禪の語・愛等の、惱所起の身行をいふ。

【三〇】 不隱沒無記の無巧便の身行とは、是くの如く來去すべきには是くの如く來去せざる等をいふなり。

【二九】 口惡行と無巧便の口行との難・無難論。

【二八】 意惡行と無巧便の意行との難・不難論。

【二七】 意の三惡行とは、貪欲と瞋恚と邪見なり。

三 三妙行と三滿とあり。三妙行は三滿を攝するや。答へて曰く、或は妙行にして滿に非ざるものあり。

(一)云何んが妙行にして滿に非ざるものなりや。答へて曰く、無學の身・口の妙行を除く諸餘の身口の妙行と、盡くことごとくの意妙行となり、是れを妙行にして滿に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが滿にして妙行に非ざるものなりや。答へて曰く、無學心なり、是れを滿にして妙行に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが妙行にして滿なるものなりや。答へて曰く、無學の身・口の妙行なり、是れを妙行にして滿なるものと謂ふなり。

(四)云何んが妙行にも滿にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

三淨と三滿とあり。三淨は三滿を攝するや。答へて曰く、或は淨にして滿に非ざるものあり。

(一)云何んが淨にして滿に非ざるものなりや。答へて曰く、無學の身・口淨を除く諸餘の身口淨と、盡くの意淨となり、是れを淨にして滿に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが滿にして淨に非ざるものなりや。答へて曰く、無學心なり、是れを滿にして淨に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが淨にして滿なるものなりや。答へて曰く、無學の身・口淨なり、是れを淨にして滿なるものと謂ふなり。

(四)云何んが淨にも滿にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

第四節 三惡行と無巧便の三行との相攝關係

諸の身惡行は盡く無巧便の身行なりや。答へて曰く、是くの如し、諸の身惡行は盡く無巧便の身行なり。頗し無巧便の身行にして、彼れは身惡行に非ざるものありや。答へて曰く、有り、隱沒

【二】こは、色蘊中にては、不善の色と諸、食所起の有覆無記の色とを除く所餘の色蘊と、行蘊中にては不善の思と貪と瞋と邪見と諸・食所起の有覆無記の思とを除く餘の相應と不相應との行蘊と、三蘊の全と無爲とをいふなり。

【三】本節は、(一)身・口・意の三妙行(amanatta)と身・口・意の三淨(samaya)清淨との相攝關係及び(二)三妙行と身・口・意の三滿(manna)寂滅との相攝關係、並びに(三)三淨と三滿との相攝關係を明かにする段なり。

【四】因みに、三淨とは、三妙行にして、三滿とは無學の身・語業と無學の意(意業に非ず)と業といふなり。精しくは婆沙百十七卷(毘曇部十三、頁二七以下)を参照すべし。

【一】三妙行と三淨との相攝關係。

【二】三妙行と三滿との相攝關係。

【三】無學心は、滿なるも、思に非ざるを以つて行とは云はれざるなり。

【四】こは、善の色を除く所餘の色蘊と、無貪・無瞋・正見と善の思とを除く所餘の行蘊と、無學心を除く所餘の識蘊と、受想の二蘊の全と、無爲と

三 惡行と三曲・穢・濁とあり。身曲・身穢・身濁と口曲・口穢・口濁と意曲・意穢・意濁となり。

身曲とは云何ん。答へて曰く、虚偽の盛なる身行なり、身穢とは云何ん。答へて曰く、瞋恚の盛なる身行なり。身濁とは云何ん。答へて曰く、姪の盛なる身行なり。口曲とは云何ん。答へて曰く、虚偽の盛なる口行なり。口穢とは云何ん。答へて曰く、瞋恚の盛なる口行なり。口濁とは云何ん。答へて曰く、姪の盛なる口行なり。意曲とは云何ん。答へて曰く、虚偽の盛なる意行なり。意穢とは云何ん。答へて曰く、瞋恚の盛なる意行なり。意濁とは云何ん。答へて曰く、姪の盛なる意行なり。

三 惡行は三曲・穢・濁を攝するや。答へて曰く、或は三惡行にして曲・穢・濁に非ざるものあり。

(一)云何んが、惡行にして曲・穢・濁に非ざるものなりや。答へて曰く、欲界繫の虚偽と欲との盛なると瞋恚の盛なるとの身・口・意の惡行を除く諸餘の身・口・意の惡行なり、是れを惡行にして曲・穢・濁に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが曲・穢・濁にして惡行に非ざるものなりや。答へて曰く、色界繫の虚偽と愛との身口意行と無色界繫の愛の盛なる意行となり、是れを曲・穢・濁にして惡行に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが惡行にして曲・穢・濁なるものなりや。答へて曰く、欲界繫の虚偽と欲との盛なると瞋恚の盛なるとの身・口・意の惡行なり、是れを惡行にして曲・穢・濁なるものと謂ふなり。

(四)云何んが惡行にも曲・穢・濁にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

第三節 三妙行と三淨と三滿との相攝關係

三 妙行と三淨とあり。三妙行は三淨を攝するや。三淨は三妙行を攝するや。答へて曰く、種に隨つて相ひ攝す。

濁の自性を明し、次に身・口・意の三惡行と、身・口・意の三曲と、身・口・意の三穢と身・口・意の三濁との雜・不雜論を明すを其の課題とす。

因みに、曲とは語(Chetana)に依りて生ずる身・口・意行をいひ、穢とは瞋に依りて生ずる身・口・意行をいひ、濁とは貪に依りて生ずる身・口・意行をいふなり。

而して、語は欲界と初禪とに在り、瞋は唯欲界にのみ在り、貪は欲界より乃至有頂に在るなり。精しくは婆沙百十七卷(毘曇部十三、頁一八以下)を參照すべし。

【三】 三曲・穢・濁の自性。虚偽の盛なるとは、發智論には語所起とあり、以下之れに准じて知るべし。

【四】 姪の盛なるとは、發智論に貪所起とあり。

【五】 三惡行と三曲・穢・濁との相攝關係。

【六】 虚偽と欲との盛なると瞋恚の盛なるとの身・口・意の惡行とは發智論に、語・瞋・貪所起の身・語・意の惡行とあり。

【七】 色界繫云云の文は、發智論には、「初靜慮の語・貪所起の身・語・意業と及び餘の色界無色界の貪所起の意業となり」とあり、此の中後者の所説は嚴密にてよし。

の口悪行なり、是れを邪業にも邪命にも非ざるものと謂ふなり。^{二六}

諸の等語あり。彼れは是れ等命なりや。答へて曰く、或は等語なるも等命に非ざるものあり。

(一)云何んが等語にして等命に非ざるものなりや。答へて曰く、等命作の口の四妙行を除く諸餘の口妙行なり、是れを等語にして等命に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等命にして等語に非ざるものなりや。答へて曰く、等命作の身の三妙行なり、是れを等命にして等語に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等語にして等命なるものなりや。答へて曰く、等命作の口の四妙行なり、是れを等語にして等命なるものと謂ふなり。

(四)云何んが等語にも等命にも非ざるものなりや。答へて曰く、等命作の身の三妙行を除く諸餘の身妙行なり、是れを等語にも等命にも非ざるものと謂ふなり。^{二九}

諸の等業あり。彼れは是れ等命なりや。答へて曰く、或は等業にして等命に非ざるものあり。

(一)云何んが等業にして等命に非ざるものなりや。答へて曰く、等命作の身の三妙行を除く諸餘の身妙行なり、是れを等業にして等命に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等命にして等業に非ざるものなりや。答へて曰く、等命作の口の四妙行なり、是れを等命にして等業に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等業にして等命なるものなりや。答へて曰く、等命作の身の三妙行なり、是れを等業にして等命なるものと謂ふなり。

(四)云何んが等業にも等命にも非ざるものなりや。答へて曰く、等命作の口の四妙行を除く諸餘の口妙行なり、是れを等業にも等命にも非ざるものと謂ふなり。^{三〇}

三 第二節 三惡行と三曲・穢・濁との相攝關係

とを離れて別に正命と邪命との體性有り」と執するを破せんが爲めなりとなり。

〔三〕 邪語と邪命との難・無難論。

〔四〕 邪命作は、大正本の發智論には食所起とあるに、三本・宮本の發智には趣邪命とあり、又、婆沙論の本文も亦、然り。

〔五〕 邪業と邪命との難・無難論。

〔六〕 茲に「邪竟」の夾註あり。

〔七〕 等語と等命との難・無難論。

〔八〕 茲に「等語竟」の夾註あり。

〔九〕 等業と等命との難・無難論。

〔一〇〕 茲に「業竟」の夾註あり。

〔一一〕 本節は、先づ三曲・穢・濁

頗し二行にして不前不後に報を受くるものありや。二行とは善と不善と及び見諦所斷と思惟所斷なり。

此の章の義を願はくは具さに演說せん。

第一節 邪命と邪語・邪業及び等命と等語・等業の相攝關係

諸の邪語あり。彼れは是れ邪命なりや。答へて曰く、或は邪語にして邪命に非ざるものあり。

(一)云何んが邪語にして邪命に非ざるものなりや。答へて曰く、邪命作の口の四惡行を除く諸餘の口惡行なり、是れを邪語にして邪命に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが邪命にして邪語に非ざるものなりや。答へて曰く、邪命作の身の三惡行なり。是れを邪命にして邪語に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが邪語にして邪命なるものなりや。答へて曰く、邪命作の口の四惡行なり、是れを邪語にして邪命なるものと謂ふなり。(四)云何んが、邪語にも、邪命にも非ざるものなりや。答へて曰く、邪命作の身の三惡行を除く諸餘の身惡行なり、是れを邪語にも邪語にも非ざるものと謂ふなり。

諸の邪業あり。彼れは是れ邪命なりや。答へて曰く、或は邪業にして邪命に非ざるものあり。

(一)云何んが邪業にして邪命に非ざるものなりや。答へて曰く、邪命作の身の三惡行を除く諸餘の身惡行なり、是れを邪業にして邪命に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが邪命にして邪業に非ざるものなりや。答へて曰く、邪命作の口の四惡行なり、是れを邪命にして邪業に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが邪業にして邪命なるものなりや。答へて曰く、邪命作の身の三惡行なり、是れを邪業にして邪命なるものと謂ふなり。

(四)云何んが邪業にも邪命にも非ざるものなりや。答へて曰く、邪命作の口の四惡行を除く諸餘

【三】本節は、(一)邪語と邪命との雜・無雜論、(二)邪業と邪命との雜・無雜論(三)及び等語と等命との、(四)等業と等命との雜・無雜論を明にするを其の課題とす。

而して、不善の語業道中、貪・瞋・癡所起のものを邪語 (Cattāya-jāṇāya) といひ、就中、貪所起のものを亦邪命 (Cattāya-jāṇāya) とも名くるなり。

更に不善の身業道中貪所起のものを邪業 (Cattāya-jāṇāya) とも邪命とも名け、瞋・癡所起のものを但、邪業とのみ名く。尙精しくは婆沙百十六卷(毘曇部十三、頁五)を參照すべし。

復、善の語業道中、無貪所起のものなれば、等語とも等命とも名くるに、無瞋・無癡所起のものは等語と名くるも等命と名けず。等業の場合もこれに准じて知るべし、以上を心得へ置かば以下の本文は解し易し。

因みに、此の論究ある所以は譬喩者が「八支の聖道あり」との契經に依據して「語と業

なりや。

七 (五) 諸の身妙行あり。彼れは盡く巧便の身行なりや。設し巧便の身行なれば、彼れは盡く是れ身妙行なりや。

諸の口妙行あり。彼れは盡く巧便の口行なりや。設し巧便の口行なれば、彼れは盡く口妙行なりや。

諸の意妙行あり。彼れは盡く巧便の意行なりや。設し巧便の意行なれば、彼れは盡く意妙行なりや。

八 (六) 諸法にして行に由りて得するもの、彼の法は當に善なりと言ふべきや、不善なりや、無記なりや。

九 (七) 頗し過去の行なれば、過去の報ありや、未來・現在の報ありや。頗し未來の行なれば、未來・過去の報ありや。頗し現在の行なれば、現在・過去・未來の報ありや。

一〇 (八) 頗し身行の報を受くるが如く、口行・意行の報を受くること然らざるものありや。頗し口行の報を受くるが如く、身行意行の報を受くること然らざるものありや。頗し意行の報を受くるが如く、身行・口行の報を受くること然らざるものありや。頗し身行口行の報を受くるが如く、意行の報を受くること然らざるものありや。頗し口行意行の報を受くるが如く、口行の報を受くること然らざるものありや。頗し身行意行の報を受くるが如く、身行の報を受くること然らざるものありや。頗し口行の報を受くるが如く、意行も亦然るものありや。頗し身行・口行・意行の如く報を受けずして、而かも報を受くるものありや。

一一 (九) 頗し三行にして不前不後に報を受くるものありや。三行とは現法報・生報・後報と樂報・苦報・不苦不樂報と欲界繫と色・無色界繫となり。

【六】 口行は大正本に口惡行とあるも、三本・宮本に依りて口行と訂正す。
【七】 三妙行と巧便の三行との相攝論。

【八】 行に由りて得する法の三性分別論。

【九】 三世行の報の三世分別論。

【一〇】 三行各自所受の報果の同異分別論。

【一一】 三時行が不前不後に報を受くるにつきての問題。

第二章 諸種の善・悪行及び其の果報論

(阿毘曇行健度中、邪語跋渠第二) (發智論卷第十一、大正・二六、九七三頁中)

本章の内容目次

二 (一) 諸の邪語あり、彼れは是れ邪命なりや。設し是れ邪命なれば、彼れは是れ邪語なりや。

諸の邪業あり、彼れは是れ邪命なりや。設し是れ邪命なれば、彼れは是れ邪業なりや。

諸の等語あり、彼れは是れ等命なりや。設し是れ等命なれば、彼れは是れ等語なりや。

諸の等業あり、彼れは是れ等命なりや。設し是れ等命なれば、彼れは是れ等業なりや。

三 (二) 三悪行と三曲と三穢と三濁とあり。身曲・身穢・身濁と口曲・口穢・口濁と意曲・意穢・意濁とな

り。彼の中、云何んが身曲・身穢・身濁なりや。云何んが口曲・口穢・口濁なりや。云何んが意曲・意

穢・意濁なりや。三悪行は三曲・穢・濁を攝するや、三曲・穢・濁は三悪行を攝するや。

四 (三) 三妙行と三淨とあり。三妙行は三淨を攝するや。三淨は三妙行を攝するや。

三妙行と三滿とあり。三妙行は三滿を攝するや、三滿は三妙行を攝するや。

五 三淨と三滿とあり。三淨は三滿を攝するや、三滿は三淨を攝するや。

(四) 諸の身悪行あり。彼れは盡く無巧便の身行なりや。設し無巧便の身行なれば、彼れは盡く身

悪行なりや。

諸の口悪行あり。彼れは盡く無巧便の口行なりや。設し無巧便の口行なれば、彼れは盡く口悪行

なりや。

諸の意悪行あり。彼れは盡く無巧便の意行なりや。設し無巧便の意行なれば、彼れは盡く意悪行

【一】本章は、契經中に説かれし諸種の善悪行にして而も前章中に説明せられざりしものを主として解説し、次に諸種の行と其の果報との關係を種種究明せるものなり。

而して、其の内容は本論初頭の目次によりて容易に知り得べけんも、今、發智論の頌文を借りて簡単に示せば次の如し。

「三、邪正、一異

三、惡行、曲等

妙、淨、寂、相攝

非理等六句

業、得果、三世

八句、異熟果

五業、非前非後

此章願具説

因みに、本章を邪語跋渠と名くるは本章の最初に邪語と邪命とに關する論あるに基くものなり。

【二】邪命と邪語、邪業、等命と等語、等業の相攝論。

【三】三悪行と三曲・穢・濁の相攝論。

【四】三妙行と三淨と三滿との相攝論。

【五】三悪行と無巧便の三行との相攝論。

次の有覺行の場合もこれに准ず。

【七六】心・身痛を受くる行。

【七七】善の有覺行の異熟は欲界にては五識身と相應する樂根の異熟と意識身と相應する喜根の異熟とをいひ、初禪にては、三識身と相應する樂根の異熟と意識身と相應する喜根の異熟とをいふ。

而して、これも一應の説にして異説あり。

【七八】心・身痛を受けざる行。

【七九】色の下に、大正本には

「心心所念法」の五字あるも、これは法相上間違なるのみならず、發智論には無く、又、聖本・聖乙本にも無きを以つてこれを除却せよ。

【八〇】本節は、聖道と聖道の加行の善根とに隙をなすものの中で、最も甚しき行障(kaṭṭhā-kamma-samvaraṇa)、垢障(kāśaya-samvaraṇa)、報障(vijāyā-samvaraṇa)の三障に就きて論ずる段なり。

因みに、此の三障に、不信と不樂と惡慧との三を加へて六

法となし、これあるものは、如來の教を聞くも淨法眼を得せずと云はるるものなり。(婆沙百十五卷、毘曇部十二、頁三八九以下參照)。

【八一】五無救行とは、殺父・殺母・殺阿羅漢・出佛身血・破和合僧の五無間業のこと。

【八二】發智論にはこれを「本性に熾然の貪・瞋・癡の煩惱を具するもの……」と翻ぜり。

【八三】本節は、身・口・意の三惡行中の最大の罪にして無間地獄の一劫壽量の異熟の苦果

を感ずる業たる、破和合僧をなす妄語と、身・口・意の三妙行中、最大の異熟果たる有頂の八萬大劫の壽量を感じずる非想非非想定之思とにつきての論究なり。

【八四】最大罪を受くる行。

【八五】最大果を受くる行。

【八六】有の第一とは、有頂の有のこと。

【八七】大正本には、三昧の上の有の字あるも、三本・宮本によりて之れを除けり。

第二十節 最大罪と最大果とに就きて

此の三惡行の中、何者か最大なりや。答へて曰く、壞僧の妄語なり。此の行に由る報は阿鼻大地獄(a.Yemahānarka)の劫壽を受くればなり。
此の三妙行の中、何者に最大の果ありや。答へて曰く、有の第一の、三昧の思なり。この行の報は有想無想の八十千劫の壽を受くればなり。

阿毘曇惡行品第一竟(梵本一百九十二首盧、二千七百八言)

- 【四七】 本節は、現法報・生報・後報の三時行と三痛行或は三世行、或は三性行、或は三學行、或は三斷行、或は三界繫行との雜・無雜論を明す段なり。
- 【四八】 三時行と三痛行との相攝關係。
- 【四九】 三時行と三世行・三性行・三學行・三斷行との相攝關係。
- 【五〇】 三時行と三界繫行との相攝關係。
- 【五一】 茲に「現・生・後報三竟」の夾註あり。
- 【五二】 本節は、樂報・苦報・不苦不樂報の所謂三痛行と三世行、或は三性行、或は三學行、或は三斷行、或は三界繫行との雜・不雜論をなす段なり。(婆沙百十五卷、毘曇部十二、頁三八三參照)。
- 【五三】 三痛行と三世行乃至三斷行との相攝關係。
- 【五四】 三痛行と三界繫行との相攝關係。
- 【五五】 茲に「三痛竟」の夾註あり。
- 【五六】 本節は、過去・未來・現在の三世行と、三性行、或は三學行、或は三斷行、或は三界繫行との雜・不雜をなす段なり。
- 【五七】 三世行と三性行乃至三斷行との相攝關係。
- 【五八】 三世行と三界繫行との相攝關係。
- 【五九】 茲に「三世竟」の夾註あり。
- 【六〇】 本節は、善・不善・無記の三性行と、三學行、或は三斷行、或は三界繫行との雜・不雜論をなす段なり。
- 【六一】 三性行と三界繫行との相攝關係。
- 【六二】 三性行と三學行・三斷行との相攝關係。
- 【六三】 茲に「善・不善竟」の夾註あり。
- 【六四】 本節は、三界繫行と、三學行、或は三斷行との相攝關係を明す段なり。
- 【六五】 三界繫行と三學行、三斷行との相攝關係。
- 【六六】 茲に「三界竟」の夾註あり。
- 【六七】 本節は、三學行と三斷行の雜・不雜論をなす段なり。
- 【六八】 三學行と三斷行との相攝關係。
- 【六九】 茲に「三三稍除二三痛至此七也」の夾註あり。
- 【七〇】 本節は、心痛(受)を感じる行(業)と身痛(受)を感じる行とを四句分別によりて明にする段なり。(婆沙百十五卷

- 【四三】 大正本には、白黑白黑報とあるも、三本・宮本に依りて黑白黑白報と改む。
- 【四四】 黑等の四行と三世行・三性行・三學行・三斷行との相攝關係。
- 【四五】 黑等の四行と三界繫行との相攝關係。
- 【四六】 茲に「四行竟」の夾註あり。
- 【七二】 身痛を受け心痛を受けざる行。
- 【七三】 不善行は、唯苦根の異熟のみを受くるに苦根は身痛にして心痛に非ず。心痛の此の類のものには憂根なれど憂根は異熟に非ざれば、不善行の異熟果となること無きなり。
- 【七三】 心痛を受け身痛を受けざる行。
- 【七四】 善の無覺行の異熟とは、第二禪の喜根と第三禪の樂根と第四禪及び無色界の捨根とを云ふも、こは一應の説なり。其他種種の説あること婆沙百十五卷(毘曇部十二、頁三八七)を參見せよ。
- 【七五】 覺は、大正本に學とあるも、三本・宮本・聖本に従つて覺に改む。

何等を攝せざるや。答へて曰く、無漏行なり。^{六六}

第十七節 三行と三斷行との相攝關係

三行あり。學と無學と非學非無學となり。復次に、三行あり。見諦所斷と思惟所斷と無斷となり。前は後々攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、種に隨つて相ひ攝するなり。^{六九}

第十八節 心・身痛を受くる行に就きて

(一)頗し行の報を受くるものにして身痛の報を受くるも、心の非ざるものありや。答へて曰く、報を受くるものあり、不善行なり。^{七二}

(二)頗し行の報を受くるものにして心痛の報を受くるも、身の非ざるものありや。答へて曰く、報を受くるものあり、善の無覺行なり。^{七四}

(三)頗し行の報を受くるものにして身・心痛の報を受くるものありや。答へて曰く、報を受くるものあり、善の有覺行なり、^{七六}

(四)頗し行の報を受くるものにして身・心痛の報を受けずして報を受くるものありや。答へて曰く、報を受くるものあり、善・不善行にして受くる報が、色と心不相應行となるものなり。^{七九}

第十九節 三障行に就きて

三障あり。行障と垢障と報障となり。彼の中、云何んが行障なりや。云何んが垢障なりや、云何んが報障なりや。

行障とは云何ん。答へて曰く、五無救行なり。垢障とは云何ん。答へて曰く、諸の衆生の婬欲の偏重なるもの、瞋恚・愚癡の偏重なるものなり。彼の婬欲の偏重なるもの、瞋恚・愚癡の偏重なるものは、教へ難く、語り難く、濟ひ難く、脱し難ければなり。是れを垢障と謂ふ。云何んが報障なりや。答へて曰く、地獄處と畜生處と餓鬼處と壽單曰と無想天處と、是れを報障と謂ふなり。

るなり。

【娑沙百十五卷、毘曇部十二、頁三七六參照】

【毛】本節は、身・口・意の三行と、(1)過去・未來・現在の三行或は、(2)善・不善・無記の三行或は(3)學・無學・非學非無學の三行或は(4)見諦所斷・思惟所斷・無斷の三行、との雜論を明にせんとする段なり。

【娑沙百十五卷、毘曇部十二、頁三八〇參照】

【三八】本節は、身・口・意の三行と、欲界繫・色界繫・無色界繫の三行との雜・無雜論を明す段なり。

【娑沙百十五卷、毘曇部十二、頁三八一參照】

【三九】茲に「三行竟」の夾註あり。

【四〇】本節は、黒有黒報等の四行と、三時行、或は三痛行、或は三世行、或は三性行、或は三學行、或は三斷行、或は三界學行との雜・不雜論を明す段なり。

【娑沙百十五卷、毘曇部十二、頁三八一參照】

【四一】黒有黒報等の四行と三時行との相攝關係。

以下は第六節の所に於て註せる四行に關する定義及び第七節に於て註せる三時行の定義を記憶せば解し易し。

【四二】黒等の四行と三痛行と

五三 三行あり。樂報と苦報と不苦不樂報となり。復次に、三行あり。欲界繫と色・無色界繫となり。

前は後を攝するや後は前を攝するや。答へて曰く、後は前を攝するも、前は後を攝するに非ざるものあり。何等を攝せざるや。答へて曰く、無記行なり。^{五五}

第十四節 三性行乃至三斷行との相攝關係

五七 三行あり。過去と未來と現在となり。復次に、三行あり。善と不善と無記、學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷なり。

前は後を攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、種に隨つて相ひ攝するなり。

五八 三行あり。過去と未來と現在となり。復次に、三行あり。欲界繫と色・無色界繫となり。

前は後を攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、前は後を攝するも、後は前を攝するに非ず、何等を攝せざるや。答へて曰く、無漏行なり。^{五九}

第十五節 三性行と三學行乃至三斷行との相攝關係

六一 三行あり。善と不善と無記となり。復次に、三行あり。欲界繫と色・無色界繫となり。前は後を攝するや後は前を攝するや。答へて曰く、前は後を攝するも後は前を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、無漏行なり。

六二 三行あり。善と不善と無記となり。復次に、三行あり。學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷なり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、種に隨つて相ひ攝す。^{六三}

第十六節 三界繫行と三學行、三斷行との相攝關係

六五 三行あり。欲界繫と色・無色界繫となり。復次に、三行あり。學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷なり。

前は後を攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、後は前を攝するも前は後を攝するに非ず。

頁三五三參照)

【三五】本節は、身・口・意の三行と、現法報 (vipakadhamma ve hanīya 順現法受業) 生報 (upapadyavedanīya 順次生受業) 後報 (aparapaccayavedanīya 順後次受業) の三時行との難無雜論を明す段なり。

因みに、(1)現法報とは、業にして此の生に造作し增長して此の生に異熟果を受くるものをいひ、(2)生報とは、此生に業を造作し增長して第二生に異熟果を受くるものをいひ、(3)後報とは、業にして此の生に於て造作し增長して、第三生以後の生に於て異熟果を受くるものをいふなり。

(婆沙百十四卷、毘曇部十二、頁三六一以下參照)

【三六】本節は、身・口・意の三行と、樂報 (anukāvedanīya karma 順樂受業)・苦報 (dukkhavedanīya karma 順苦受業)・不苦不樂報 (adukkhamānukāvedanīya karma 順不苦不樂受業) の三痛行との難無雜論を明す段なり。

色界繫の善行と、無記行となり。是れを三にして四に非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが四にして三なるものなりや。答へて曰く、欲界繫の善・不善行と色界繫の善行となり、是れを四にして三なるものと謂ふなり。(四)云何んが四にも非ず三にも非ざるものなりや。答へて曰く、學の思にして盡を作すものを除く諸餘の無漏行なり、是れを四にも非ず三にも非ざるものと謂ふなり。

四七
第十二節 三時行と三痛行乃至三斷行との相攝關係

四八
三行あり。現法報と生報と後報となり。復次に、三行あり。樂報と苦報と不苦不樂報となり。

前が後を攝するや、後が前を攝するや、答へて曰く、後は前を攝するも、前は後を攝するに非ず。何等を攝せざるや、答へて曰く、不定行なり。

四九
三行あり。現法報と生報と後報となり。復次に、三行あり。過去と未來と現在、善と不善と無記、學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷なり。

前は後を攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、後は前を攝するも、前は後を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、不定と無記と無漏との行なり。

五〇
三行あり。現法報と生報と後報となり。復次に、三行あり。欲界繫と色、無色界繫となり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、後は前を攝するも、前は後を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、不定と無記との行なり。

五二
第十三節 三痛行と三世行乃至三斷行との相攝關係

五三
三行あり。樂報と苦報と不苦不樂報となり。復次に、三行あり。過去と未來と現在、善と不善と無記、學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷なり。

前は後を攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、後は前を攝するも、前は後を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、無記と無漏との行なり。

んが爲めとの故なりとなり。
(婆沙百十三卷、毘曇部十二、頁三四二以下)

【三】 意思とは、發智論に「意業の全なり」とあり。

【四】 此は、業色を除く所餘の色蘊と、不善の貪・瞋・邪見と無貪・無瞋・正見と一切の思とを除く餘の相應・不相應の行蘊と、三蘊の全と無爲とをいふなり。

【五】 本節は、身・口・意の三行(業)と、黒有黒報(Kammam-kammavijāka) 黒黒異熟業、白有白報(Kammam-sukkha-vijāka) 白白異熟業、黒白黒報(Kammam-kammavijāka) 黒白黒白異熟業、不黒不白無報行蘊(Kammam-akammavijāka) 不黒不白無報行蘊、非黒非白無異熟業能盡諸行の四行との雜・無雜論をなす段なり。

因みに、(1)黒有黒報とは、不善業にして能く嶮惡趣の異熟を感ずるものをいひ、(2)白有白報とは、色界の善業をいひ、(3)黒白黒報とは、欲界繫の善業にして能く人、天趣の異熟を感ずるものを云ひ、(4)不黒不白無報行蘊とは、能く諸行を永斷する學の思をいふなり。

(婆沙百十四卷、毘曇部十二、

無記行となり、是れを四にも非ず三にも非ざるものと謂ふなり。

四行あり。黒有黒報と白有白報と、^{四三}黒白黒白報と、不白不黒無報行行盡となり。三行あり。樂報と苦報と不苦不樂報となり。

四行は三行を攝するや、答へて曰く、或は四にして三に非ざるものあり。(一)云何んが四にして三に非ざるものなりや。答へて曰く、學の思にして盡を作すものなり。是れを四にして三に非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが三にして四に非ざるものなりや。答へて曰く、無色界繫の善行なり、是れを三にして四に非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが四にして三なるものなりや。答へて曰く、欲界繫の善と不善との行と色界繫の善行となり、是れを四にして三なるものと謂ふなり。(四)云何んが四にも非ず三にも非ざるものなりや。答へて曰く、學の思にして盡を作すものを除く諸餘の無漏行と無記行となり。是れを四にも非ず三にも非ざるものと謂ふなり。

四行あり。黒有黒報と白有白報と黒白黒白報と不黒不白無報行行盡となり。三行あり。過去と未來と現在、善と不善と無記、學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷なり。

四行は三行を攝するや、三行は四行を攝するや。答へて曰く、三は四を攝するも四は三を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、學の思にして盡を作すものを除く諸餘の無漏行と無色界繫の善と無記との行となり。

四行あり。黒有黒報と白有白報と黒白黒白報と不黒不白無報行行盡となり。三行あり、欲界繫と色、無色界繫となり。

四行は三行を攝するや、三行は四行を攝するや。答へて曰く、或は四にして三に非ざるものあり。

(一)云何んが四にして三に非ざるものなりや。答へて曰く、學の思にして盡を作すものなり、是れを四にして三に非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが三にして四に非ざるものなり。答へて曰く、無

na 身業)、口行(vakkaṃma 語業)、意行(Manosikkama 意行)との三行と身三・口・四・意三の十行迹(Gaṃmupada 業道)との雜・無雜論を明す段なり。就中、身・口の二行は又思已業(cehāvikāraṃ)と稱せられ、意行は思業(ceṭanākarāṇa)とも稱せらる。

又、行(業)とは、(一)作用の故に、(二)法式を持つるが故に、(三)果を分別するが故に、業と名けられ、行迹(業道)とは、思を業となし、その思の遊履する所にして究竟して轉ずるを業道と名くるとなり。(婆沙百十三卷、毘曇部十二、頁三四四—五)

更に又、此の論究ある所以は、(一)契經に思業と思已業とあるを分別せんが爲めと、(二)勝論が取・捨・屈・申・行の五業を説く中、第五の行を業となすを説くを破し、又、數論が取・捨・屈・申・擧・下・開・閉・行の九業を説き、其中第九の行を業と説くを破し、又、十二處は皆業性なりと説く有説を破し、更に譬喩者が、身・語・意業は一思なりと説くを破し、復、分別説部が、貪欲・瞋恚・邪見は是れ業の自性なりと説くを破せんが爲めと、

(二)世間には業の果に於て業の名を説くことあるを注意せ

るや。答へて曰く、前は後を攝するも、後は前を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰はく、無記と無漏との行なり。

第九節 三行と三世行・三性行・三學行・三斷行との相攝關係

三行あり。復次に、三行あり。過去と未來と現在、善と不善と無記、學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷なり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、種に隨つて相ひ攝するなり。

第十節 三行と三斷行との相攝關係

三行あり。復次に、三行あり。欲界繫と色・無色界繫となり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、前は後を攝するも、後は前を攝するに非ず、何等を攝せざるや。答へて曰はく、無漏行なり。

第十一節 黒有黒報等の四行と三時行乃至三斷行との相攝關係

四行あり。黒有黒報と白有白報と黒白黒報と不黒不白無報行行盡となり。三行あり、現法報と生報と後報となり。

四行は三行を攝するや。答へて曰く、或は四にして三に非ざるものあり。(一)云何んが四にして三に非ざるものなりや。答へて曰く、學の思にして盡を作すものと、欲界繫の善・不善の不定行と色界繫の善の不定行となり、是れを四にして三に非ざるものと謂ふなり。(二)云何が三にして四に非ざるものなりや。答へて曰く、無色界繫の善の定行なり、是れを三にして四に非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが四にして三なるものなりや。答へて曰く、欲界繫の善・不善の定行と色界繫の善の定行となり、是れを四にして三なるものと謂ふなり。(四)云何んが、四にも非ず三にも非ざるものなりや。答へて曰く、學の思にして盡を作すものを除く諸餘の無漏行と、無色界繫の善の不定行と

nya) 妄語 (māṅghāya) 惡口 (paṭisaṅḅhā) 綺語 (saṃbhinnapralāpa) 貪欲 (abhidhā) 瞋恚 (vyāpāda) 邪見 (mithyā-dṛṣṭi) の十不善行迹との雜・無雜論を明す其の課題とす。而して、三惡行は、十不善行迹のみならず其の加行及び後起をも含む所謂一切の不善の身・口・意業を攝するが故に十不善行迹よりも廣きなり。

【二八】以下の文は發智論と說相を異にす、即ち、發智論には「業道所攝の身・語・意の惡行を除く所餘の身・語・意行なり」といへり。されど其の意味に於ては異なる所なし、何となれば、「所餘の意惡行」とは不善の思を指すが故なり。

【二九】(婆沙百十三卷、毘曇部十二、頁三二九參照)

【三〇】本節は、身・口・意の三妙行と、離殺生乃至等見の十善行迹との雜・無雜論をなすを其の目的とす。

【三一】三妙行は、十善行迹のみならず其の加行及び後起をも含みて、一切の善の身・口・意業を自性となすが故に十善行迹よりも廣きなり。

【三二】以下の文は發智論に「業道所攝の身・語・意の妙行を除く所餘の身・語・意の妙行なり」とあり。

【三三】本節は、身行 (kāyāṅkanā-

三行と十行迹とあり。三行は十行迹を攝するや。答へて曰く、或は行にして行迹に非ざるものあり。

(一)云何んが行にして行迹に非ざるものなりや。答へて曰く、行迹に攝する身、口の行を除く諸餘の身口の行と意思となり、是れを行にして行迹に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが行迹にして行に非ざるものなりや。答へて曰はく、後の三行迹なり、是れを行迹にして行に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが行にして行迹なるものなりや。答へて曰く、七行迹なり、是れを行にして行迹なるものと謂ふなり。

(四)云何んが行にも非ず行迹にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

第六節 三行と黒有黒報等の四行との關係

三行と四行——黒有黒報と白有白報と黒白黒白報と不黒不白無報行行盡となり——とあり。三行は四行を攝するや、四行は三行を攝するや。答へて曰く、三は四を攝するも、四は三を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、學の思にして盡を作すものを除く諸餘の無漏行と及び無色界の善行と無記行となり。

第七節 三行と三時行との相攝關係

三行あり。復次に三行あり。現法報と生報と後報となり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。答へて曰く、前は後を攝するも後は前を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、不定と無記と無漏との行なり。

第八節 三行と三痛行との相攝關係

三行あり。復次に三行あり。樂報と苦報と不苦不樂報となり。前は後を攝するや、後は前を攝す

無癡善根(amoḥakṛtsāmanā)との相攝關係をなすを其の課題とす。

而して、三妙行の自性に關しては契經・集異門足論・施設論・發智論等の間に於て多少其の説明を異にするものあること、前の三惡行のそれの場合と同じ。

今、八健度論(發智論)の説によれば、身妙行とは所有の善の身業をいひ、口妙行とは所有の口の善業をいひ、意妙行とは所有の意の善業をいふなり。

又、無貪善根は心所にして心と相應し貪を對治するもの、無瞋善根は心所にして心と相應し瞋を對治するもの、無癡善根は心所にして心と相應し、癡を對治するものなり。

【五】等見(正見)は唯意識にのみ在るに無癡善根は六識に通ずるを以つて、等見に攝せざる無癡善根とは五識身と相應する無癡善根をいふなり。

【三】こは、善の色を除く所餘の色蘊と、三善根と善の思とを除く所餘の相應・不相應行蘊と、三蘊の全と無爲とをいふなり。

【七】本節は、身・口・意の三惡行と、殺生(parāṇātipāṭa)、偷盜(ādattakāraṇa)、邪淫(Cāṇamunīyācāraṇa)、兩舌(ḍoṣṭhā)

二四 第二節 三妙行と三善根との相攝關係

三妙行と三善根とあり。三妙行は三善根を攝するや。答へて曰く、或は妙行にして善根に非ざるものあり。

(一)云何んが妙行にして善根に非ざるものなりや。答へて曰く、身・口の妙行と善の思となり、是れを妙行にして善根に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが善根にして妙行に非ざるものなりや。答へて曰く、等見に攝せざる無癡善根なり、是れ善根にして妙行に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが妙行にして善根なるものなりや。答へて曰く、不貪・不瞋・善根と等見となり、是れを妙行にして善根なるものと謂ふなり。

(四)云何んが妙行にも非ず善根にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

二七 第三節 三惡行と十不善行迹との相攝關係

三惡行と十不善行迹とあり。三惡行は十不善行迹を攝するや、十不善行迹は三惡行を攝するや。答へて曰く、三は十を攝するも、十は三を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、行迹に攝する身、口の惡行を除く諸餘の身、口の惡行と及び不善の思となり。

二九 第四節 三妙行と十善行迹との相攝關係

三妙行と十善行迹とあり。三妙行は十善行迹を攝するや、十善行迹は三妙行を攝するや。答へて曰く、三は十を攝するも十は三を攝するに非ず。何等を攝せざるや。答へて曰く、行迹に攝する身、口の妙行を除く諸餘の身、口の妙行と及び善の思となり。

三一 第五節 三行と十行迹との相攝關係

發智論の説明に依れば、身惡行とは、殺生・偷盜・邪淫の身の根本業道のみならず、其の加行も後起をも合せたる所謂、所有の不善の身業を攝取るなり。

口惡行とは、兩舌・妄語・惡口・綺語の口の四根本業道のみならず所有の不善の口業をいひ、意惡行とは、貪欲・瞋毒・邪見の意の三業道のみならず所有不善の意業をいふなり。

又、貪不善根は欲界繫の五部所斷の愛を自性とし、瞋不善根は五部所斷の恚を自性とし、癡不善根は欲界の見集・滅・道と修所斷との無明と、見苦所斷中より身・邊の二見と相應する無明を除く所餘の無明とを自性とすなり。

尚、三不善根に就きては婆沙四十七卷(毘曇部九、頁一〇二)を參照すべし。

【三】こは、不善の色を除く所餘の色蘊と、三不善根と不善の邪見と不善の思とを除く所餘の相應・不相應行蘊と、三蘊の全と、無爲法とをいふなり。

【四】本節は、三妙行即ち、身妙行(Kāyasancāra)、口妙行(Vāsisancāra)、意妙行(Mānasancāra)と三善根即ち、無貪善根(alobhakāraṃ)、無瞋善根(adveṣakāraṃ)、無癡善根(adveṣakāraṃ)なり。

なり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。

一八 頗し行にして報を受くるに身痛の報を受くるも心の非ざるものありや。頗し行にして報を受くるに心痛の報を受くるも身の非ざるものありや。頗し行にして報を受くるに身・心痛の報を受くるものありや。頗し行にして報を受くるに身・心痛の報を受くるに非ざるものありや。

一九 三障あり。行障と垢障と報障となり。彼の中、云何んが行障なりや、云何んが垢障なりや、云何んが報障なりや。

二〇 此の三悪行は何者が最大なりや。此の三妙行の何者に最大果ありや。

第一節 三悪行と三不善根との相攝關係

三悪行と三不善根とあり。三悪行は三不善根を攝するや。答へて曰く、或は悪行にして不善根に非ざるものあり。

一 云何んが悪行にして不善根に非ざるものなりや。答へて曰く、身・口の悪行と邪見と不善の思と、是れを悪行にして不善根に非ざるものと謂ふなり。

二 云何んが不善根にして、悪行に非ざるものなりや。答へて曰く、癡不善根なり、是れを不善根にして悪行に非ざるものと謂ふなり。

三 云何んが悪行にして不善根なるものなりや。答へて曰く、貪と瞋恚との不善根なり。是れを悪行にして不善根なるものと謂ふなり。

四 云何んが悪行にも非ず不善根にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の兩所の事を除くものなり。

行との相攝論。

【一】 四行と三時行乃至三斷行との相攝關係。

【二】 報行は、大正本に行報とあるも、聖乙本に従つて報行と改む。

【三】 三時行と三癩行乃至三斷行との相攝論。

【四】 三癩行と三世行乃至三斷行との相攝論。

【五】 三世行と三性行乃至三斷行との相攝論。

【六】 三性行と三學行乃至三斷行との相攝論。

【七】 三罪行と三學行三斷行との相攝論。

【八】 三學行と三斷行との相攝論。

【九】 身・心痛を受くる行の問題。

【一〇】 三障の問題。

【一一】 最大罪・最大果の問題。

【一二】 本節は、身惡行 (kāraṇa-dussarīta)、口惡行 (vāgīti-sarīta)、意惡行 (mano-du-sarīta) の三惡行と、貪不善根 (lobha-akusalamūla)、瞋不善根 (dveṣa-akusalamūla)、癡不善根 (moha-akusalamūla) との三不善との相攝關係を明にする段なり。

因みに、此の三惡行の自性に關する説明に就きては、契經・集異門足論・施設論・發智論と種種其の説に相違あるも、今、

善と不善と無記、欲界繫と色・無色界繫、學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷の行なり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。

二 (十一) 四行あり。黒有黒報と白有白報と黒白黒白報と不黒不白無報行盡となり。三行あり、現法報と生報と後報、樂報と苦法と不苦不樂報、過去と未來と現在、善と不善と無記、欲界繫と色、無色界繫、學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷の行なり。四行は三行を攝するや、三行は四行を攝するや。

三 (十二) 三行あり。現法報と生報と後報となり。復次に三行あり。樂報と苦報と不苦不樂報、過去と未來と現在、善と不善と無記、欲界繫と色・無色界繫、學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷の行なり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。

四 (十三) 三行あり。樂報と苦報と不苦不樂報となり。復次に過去と未來と現在、善と不善と無記、欲界繫と色無色界繫、學と無記と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷の行なり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。

五 (十四) 三行あり。過去と未來と現在となり。復次に三行あり。善と不善と無記、欲界繫と色・無色界繫、學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷の行なり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。

六 (十五) 三行あり。善と不善と無記となり。復次に三行あり。欲界繫と色・無色界繫、學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷の行なり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。

七 (十六) 三行あり。欲界繫と色・無色界繫となり。復次に三行あり。學と無學と非學非無學、見諦所斷と思惟所斷と無斷の行なり。前は後を攝するや、後は前を攝するや。

八 (十七) 三行あり。學と無學と非學非無學となり。復次に三行あり。見諦所斷と思惟所斷と無斷と

四句分別、三障行・最大罪・最大果等に關する論究をなすを其の課題とす。而して、本章の内容を發智は頌文を結びて次の如く示せり。

「三行對三根」

及對十業道

三業對十道

九門業相攝

身・心受四句

三障體云何

何大罪大果

此章頗具說」と。

因みに、本章を惡行跋渠といへるは最初に三惡行に關する論究あるが爲なり。

(婆沙一・二、毘婆沙十二、頁三一〇参照)。

【三】 三惡行と三不善根との相攝論。

【四】 三妙行と三善根との相攝論。

【五】 三惡行と十不善行述との相攝論。

【六】 三妙行と十善行述との相攝論。

【七】 三行と十行述との相攝論。

【八】 三行と四行との相攝論。

【九】 報行は、大正本に行報とあるも、宮本に従つて報行と改む。

【一〇】 三行と三時行乃至三斷

卷の十五 (第四編 行瓊度)

第四編 行 論

行論總目次

惡行と邪語と

衆生と及び命と

身の無と有との教と、

自行は後に在り。

第一章 善・惡行に關する論究

(阿毘曇惡行跋渠第一) (發智論卷第十一、大正・二六、九七二頁上)

本章の内容目次

- 三 (一) 三惡行と三不善根とあり。三惡行は三不善根を攝するや、三不善根は三惡行を攝するや。
- 四 (二) 三妙行と三善根とあり。三妙行は三善根を攝するや、三善根は三妙行を攝するや。
- 五 (三) 三惡行と十不善行迹とあり。三惡行は十不善行迹を攝するや、十不善行迹は三惡行を攝するや。
- 六 (四) 三妙行と十善行迹とあり。三妙行は十善行迹を攝するや、十善行迹は三妙行を攝するや。
- 七 (五) 三行と十行迹とあり。三行は十行迹を攝するや、十行迹は三行を攝するや。
- 八 (六) 三行と四行——黒有黒報と白有白報と白黒白黒報と不黒白無報行行盡となり——とあり。

三行は四行を攝するや、四行は三行を攝するや。

(七一十) 復次に、三行あり。現法報と生報と後報、樂報と苦報と不苦不樂報、過去と未來と現在、

【一】本編は、行即ち業 (karma) に關する諸種の論究をなす段なり。其の内容は本論の「行論總目次」によりて知らる。今、それを解説すれば次の如し。

「惡行」とは、善・惡行に關する論究を指し、

「邪語」とは、諸種の善惡行と其の報果に關する論究、

「衆生及び命」とは、殺生並びに行の報果等に關する論究、

(因みに、命とは此章の最後の命終者の生處に關する問題を取り扱へるを指すものもの如し)。

「身の無、有との教」とは、有教無教に關する論究、

「自行は後に在り」とは、本編最後の「自行並びに行論附帶の雜論」を指すなり。

【二】本章は、(1)三惡行と三不善根、(2)三妙行と三善根、(3)三惡行と十不善行迹、(4)三妙行と十善行迹、(5)三行と十行迹の相攝關係を先づ明し、

更に、三行と黒等の四行と三時行と三受行と三世行と三性行と三學行と三斷行と三界繫行との相互相攝關係を明し、

次に、心・身痛を受くる行の

過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。^{四〇}

習・盡・道智につきても亦、是くの如し。^{四一}

乃至道智につきても亦、是くの如し。^{四二}

過去の法智と過去の^{四三}未知智とを、過去の知他人心智に、未來の、現在の、過去・現在の、未來

現在の、過去・未來の、過去・未來・現在の知他人心智^{四四}に對して大の七句あり。

乃至道智につきても亦、是くの如し。^{四五}

(智相應品第五竟、梵本一千四十三首盧、秦一萬五千一百九言)

因みに、發智論には茲の文を次の如く作れり。法智を後に對して小七を作すが如く、乃至、滅智を道智に對して其所應に隨つて小七を作すことも亦爾り」と

大七句問答。
茲の文句は發智論と多少相違あり、即ち發智論には次の如くいへり、「小七の如く、大七も亦爾り。差別あるをいへば二或は多を以つて一に對し、或は一を以つて、二或は多に對することなり。過去を首と

なして七有るが如く、未來乃至過去・未來・現在を首と爲すも亦、各、七有ること應の如く當に知るべきなり」と。
【四三】未知智は大正本に未來知智とあるも三本・宮本・聖本に依りて未知智と改む。
【四四】智の下に大正本に七の

【四〇】茲に「苦智七竟」の夾註あり。

【四一】過去の法智を習・盡・道智に對しての小七句問答。

因みに、此の文句は發智論は前の法智を類智に對して小七句問答をなせし直後に置けり。

【四二】大正本には茲に「小七竟」の夾註あるも宮本、聖本の如く無き方よし。

【四三】過去の未知智乃至盡智を後の智に對しての小七句問答。

この文は大正本に無きも三本によりて補へり。

字あるも宋・元・明・宮・聖の五本に従つて夾註となす。

【四七】過去の未知智・過去の知他人心智を等智に對しての大七句乃至過去の習智過去の盡智を道智に對しての大七句問答。

【四八】茲に「大七竟」の夾註あり。

阿毘曇八鍵度論卷第十四

七聖者の八智乃至八道種の成就等に關する論究

るも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。設し過去・未來の苦智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

二九
(7) 若し過去の法智を成就すれば、彼れは過去・未來・現在の苦智をもなりや。答へて曰く、或は過去の法智を成就し、及び未來の苦智をも成就するも、過去・現在のは非らざるものあり、及び過去・未來の苦智を成就するも現在のは非らざるものあり、及び未來・現在の苦智をも成就するも過去の非らざるものあり、及び過去・未來・現在の苦智を成就するものあり。(一)云何んが過去の法智を成就し、及び未來の苦智を成就するも過去・現在のは非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき苦智が已に盡きて失せずして又此のとき苦智を得し若しくは盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかにして現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し、及び未來の苦智を成就するも過去・現在のは非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが過去の法智を成就し及び過去・未來の苦智を成就するも現在のは非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智と苦智とが已に盡きて失せずして又此のとき苦智を現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し及び過去・未來の苦智を成就するも現在のは非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが過去の法智を成就し及び過去・未來の苦智を成就するも現在のは非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき苦智を現在前して若しくは盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば、是れを過去の法智を成就し及び未來・現在の苦智を成就するも過去の非らざるものと謂ふなり。(四)云何んが過去の法智を成就し及び過去・未來・現在の苦智をも成就するものなれば、彼れは過去の法智を成就し及び過去・未來・現在の苦智をも成就するものなれば、是れを過去の法智を成就し及び過去・未來・現在の苦智をも成就するものなれば、設し過去・未來・現在の苦智を成就するものなれば、彼れは

【三元】小七句中の第七句——
(過去の法智——過去・未來・
現在の苦智)。

へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき苦智が盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかにして現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就するも過去・現在の苦智は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが過去の法智を成就し及び過去の苦智を成就するも現在の非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智と苦智とが已に盡きて失せずして又此のとき苦智が現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し、及び過去の苦智を成就するも現在の非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが、過去の法智を成就し及び現在の苦智を成就するも過去の非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき苦智が現在前し、若しくは盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば、是れを過去の法智を成就し及び現在の苦智を成就するも過去の非らざるものと謂ふなり。(四)云何んが過去の法智を成就し及び過去・現在の苦智をも成就するものなりや。答へて曰く、若し法智と苦智とが已に盡きて失せずして、又此のとき苦智が現在前するものなれば、是れを過去の法智を成就し及び過去・現在の苦智をも成就するものと謂ふなり。設し過去・現在の苦智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

一三七

(5)若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは未來・現在の苦智をもなりや。答へて曰く、未來のは則ち成就するも、現在の若し現在前すれば成就す。設し未來・現在の苦智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

(6)若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去・未來の苦智をもなりや。答へて曰く、未來のは則ち成就するも、過去の若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡く

【二三】 小七句中の第五句——
 (過去の法智——未來・現在の苦智)。

【二四】 小七句中の第六句——
 (過去の法智——過去・未來の苦智)。

三三
 (7) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去・未來・現在の等智をまなりや。答へて曰く、過去・未來のは則ち成就するも、現在のは若し現在前すれば成就す。設し過去・未來・現在の等智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をまなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。^{三三}

(1) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去の苦智をまなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。設し過去の苦智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をまなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。^{三四}

(2) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは未來の苦智をまなりや。答へて曰く、是くの如し。設し未來の苦智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をまなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。^{三五}

(3) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは現在の苦智をまなりや。答へて曰く、若し現在前すれば成就するなり。設し現在の苦智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をまなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。^{三六}

(4) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去・現在の苦智をまなりや。答へて曰く、或は過去の法智を成就するも、過去・現在の苦智は無きものあり、及び過去の苦智を成就するも現在の無きものあり、及び現在の苦智を成就するも過去の無きものあり、及び過去・現在の苦智を成就するものあり。(一)云何んが過去の法智を成就するも、過去・現在の苦智は非らざるものなりや。答

【三三】小七句中の第七句——(過去の法智——過去・未來・現在の等智)。

【三四】茲に、「等智七竟る」の夾註あり。

【三五】過去の法智を苦智に對しての小七句問答。

小七句中の第一句——(過去の法智——過去の苦智)。

【三六】小七句中の第二句——(過去の法智——未來の苦智)。

【三五】小七句中の第三句——(過去の法智——現在の苦智)。

【三六】小七句中の第四句——(過去の法智——過去・現在の苦智)。

り。

二三

(2) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは未來の等智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。設し未來の等智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

二二七

(3) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは現在の等智をもなりや。答へて曰く、若し現在前すれば成就するなり。設し現在の等智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

二二八

(4) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去・現在の等智をもなりや。答へて曰く、過去の法智を成就するも現在の若し現在前すれば成就するなり。設し過去・現在の等智を成就すれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

二二九

(5) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは未來・現在の等智をもなりや。答へて曰く、未來の法智を成就するも現在の若し現在前すれば成就するなり。設し未來・現在の等智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

二三〇

(6) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去・未來の等智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。設し過去・未來の等智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

【三六】 小七句中の第二句——
(過去の法智——未來の等智)。

【三七】 小七句中の第三句——
(過去の法智——現在の等智)。

【三八】 小七句中の第四句——
(過去の法智——過去・現在の等智)。

【三九】 小七句中の第五句——
(過去の法智——未來・現在の等智)。

【四〇】 小七句中の第六句——
(過去の法智——過去・未來の等智)。

は非らざるものあり、及び過去・未來・現在の知他人心智をも成就するものあり。(一)云何んが過去の法智を成就するも過去・未來・現在の知他人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき知他人心智を得せざるか、設ひ得するも便ち失するかなれば、是れを過去の法智を成就するも、過去・未來・現在の知他人心智は非らざるもの謂ふなり。(二)云何んが過去の法智を成就し、及び未來の知他人心智を成就するも過去・現在のは無きものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき知他人心智を得して失せず、若しくは盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかにして現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し、及び、未來の知他人心智をも成就し、過去・現在のは非らざるものと謂ふなり、(三)云何んが過去の法智を成就し、及び過去・未來の知他人心智をも成就するも、現在のは非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智と知他人心智とが已に盡きて失せずして、又此のとき知他人心智が現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し及び過去・未來の知他人心智をも成就するも、現在のは非らざるものと謂ふなり。(四)云何んが過去の法智を成就し、及び過去・未來・現在の知他人心智をも成就するものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして、又此のとき知他人心智が現在前するものなれば、是れを過去の法智を成就し、及び過去・未來・現在の知他人心智をも成就するものと謂ふなり。設し過去・未來・現在の知他人心智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せずれば則ち成就するも若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

(一)若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去の等智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。設し過去の等智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せずれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

【二三】茲に、「知他人心智七竟」の夾註あり。

【二五】過去の法智を等智に對しての小七句問答。

小七句中の第一句——

(過去の法智——過去の等智)。

し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも即ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

二三

若し過去の法智を成就すれば、彼れは過去・未來の知他人心智をもなりや。答へて曰く、或は過去の法智を成就するも、過去・未來の知他人心智は無きものあり、及び未來の知他人心智を成就するも過去の非らざるものあり、及び過去・未來の知他人心智をも成就するものあり。(一)云何んが過去の法智を成就するも過去・未來の知他人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき知他人心智を得ざるか、設ひ得するも便ち失するかなれば、是れを過去の法智を成就するも過去・未來の知他人心智は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが過去の法智を成就し及び未來の知他人心智をも成就するも過去の非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき知他人心智を得して若しくは盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば、是れを過去の法智を成就し及び未來の知他人心智をも成就するも過去の非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが過去の法智を成就し、及び過去・未來の知他人心智をも成就するものなりや。答へて曰く、若し法智と知他人心智とが已に盡きて失せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し及び過去・未來の知他人心智をも成就するものと謂ふなり。設し過去・未來の知他人心智を成就するものなれば彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

二三

(7)若し過去の法智を成就すれば彼れは過去・未來・現在の知他人心智をもなりや。答へて曰く、或は過去の法智を成就するも過去・未來・現在の知他人心智は非らざるものあり、及び未來の知他人心智を成就するも過去・現在の非らざるものあり、及び過去・未來の知他人心智を成就するも現在の

【二三】小七句中の第六句——
(過去の法智——過去・未來の
知他人心智)。

【二三】小七句中の第七句——
(過去の法智——過去・未來・
現在の知他人心智)。

現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し及び過去の知他人心智を成就するも現在の是非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが過去の法智を成就し、及び過去・現在の知他人心智をも成就するものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして、又此のとき知他人心智が現在前するものなれば、是れを過去の法智を成就し、及び過去・現在の知他人心智を成就するものと謂ふなり。設し過去・現在の知他人心智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。

(5)若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは未來・現在の知他人心智をもなりや。答へて曰く、或は過去の法智を成就するも、未來・現在の知他人心智は非らざるものあり、及び未來の知他人心智を成就するも現在の非らざるものあり、及び未來・現在の知他人心智を成就するものあり。

(一)云何んが過去の法智を成就するも未來・現在の知他人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又、此のとき知他人心智を得せざるか、設ひ得するも便ち失するかなれば、是れを過去の法智を成就するも、未來・現在の知他人心智は無きものと謂ふなり。(二)云何んが過去の法智を成就し、及び未來の知他人心智を成就するも現在の非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして、又此のとき知他人心智を得し失せずして現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し及び未來の知他人心智をも成就するも、現在のは非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが過去の法智を成就し及び未來・現在の知他人心智をも成就するものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又、此のとき知他人心智が現在前するものなれば、是れを過去の法智を成就し、及び未來・現在の知他人心智をも成就するものと謂ふなり。設し未來・現在の知他人心智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若

【三〇】小七句中の第五句——
(過去の法智——未來・現在の知他人心智)。

【三二】大正本には法の上には是の字あるも三本、宮本によりてこれを除けり。

し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば、則ち成就せず。設し過去の知他人心智を成就すれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。
二(2)若し過去の法智を成就すれば、彼れは未來の知他人心智をもなりや。答へて曰く、若し得して失せざれば成就するも、若し得せざるか、設ひ得するも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。設し未來の知他人心智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

二(3)若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは現在の知他人心智をもなりや。答へて曰く、若し現在前すれば則ち成就す。設し現在の知他人心智を成就するものなれば彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば、則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

二(4)若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去・現在の知他人心智をもなりや。答へて曰く、或は過去の法智を成就するも過去・現在の知他人心智は非らざるものあり、及び過去の知他人心智をも成就するも現在の非らざるものあり、及び過去・現在の知他人心智をも成就するものあり。

(一)云何んが過去の法智を成就するも過去・現在の知他人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又、此のとき知他人心智が盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失して現在前せざれば、是れを過去の法智を成就するも過去・現在の知他人心智は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが、過去の法智を成就し、及び過去の知他人心智を成就するも現在の非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智と知他人心智とが已に盡きて失せずして又此のとき知他人心智が

に對して小七を作すが如く、集・滅・道智に對しても亦、爾りとあり。

【二六】過去の法智を知他人心智に對しての小七句問答。

小七句中の第一句——
（過去の法智——過去の知他人心智）

【二七】小七句中の第二句——
（過去の法智——未來の知他人心智）。

【二八】小七句中の第三句——
（過去の法智——現在の知他人心智）。

【二九】小七句中の第四句——
（過去の法智——過去・現在の知他人心智）。

在の未知智を成就するものあり。(一)云何んが過去の法智を成就するも、過去・未來・現在の未知智は非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき未知智を得せざるものなれば、是れを過去の法智を成就するも過去・未來・現在の未知智は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが、過去の法智を成就し、及び未來の未知智を成就するも過去・現在の非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき未來の未知智を得し、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかにして、現在前せざれば、是れを過去の法智を成就し及び未來の未知智をも成就するも過去・現在非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが過去の法智を成就し、及び過去・未來の未知智を成就するも、現在非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智と未知智とが已に盡きて失せず又此のとき未知智が現在前せざれば、是れを過去の法智を成就し及び過去・未來の未知智を成就するも現在非らざるものと謂ふなり。(四)云何んが過去の法智を成就し、及び過去・未來・現在の未知智を成就するも、過去非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして、又此のとき未知智が現在前し若しくは盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば、是れを過去の法智を成就し及び未來・現在の未知智を成就するも、過去非らざるものと謂ふなり。(五)云何んが過去の法智を成就し及び過去・未來・現在の未知智をも成就するものなりや、答へて曰く、若し法智と未知智とが已に盡きて失せずして、又此のとき未知智を現在前するものなれば、是れを過去の法智を成就し及び過去・未來・現在の未知智を成就するものと謂ふなり。設し過去・現在・未來の未知智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて、曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。^{二五}

(一)若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去の知他人心智をもなりや。答へて曰く、若

(未知智忍)と、一來果不還果

を得するもの及び學の續根し已れるもの若し法智が已に滅するも失せずして未知智が未だ滅せざるか、先に滅するも已に失するかにして現在前せざるときをいふなり。

【二〇】大正本には在の下に前の字あるも三本・宮本に從つてこれを除けり。

【二一】大正本には智の下に也の字あるも三本・宮本・聖本に從つてもこれを除けり。

【二二】小七句中の第五句——(過去の法智——未來・現在の未知智)。

【二三】こは、苦未知忍のときをいふなり。

【二四】「失せず」は發智論にはあるも婆沙論中の本論には無し、而して見道位中には失することなれば、失せずとの文句を必ずしも必要とせず。

【二五】小七句中の第六句——(過去の法智——過去・未來の未知智)。

【二六】已は大正本に以とあるも三本・宮本によりて已と改む。

【二七】小七句中の第七句——(過去の法智——過去・未來・現在の未知智)。

【二八】茲に「法智未知智七竟る」の夾註あり。

尙、發智論は此の次に「類智

の未知智を成就するものなれば、彼れは、過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くも、便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。

(6)若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去・未來の未知智をもなりや。答へて曰く、或は過去の法智を成就するも、過去・未來の未知智は非らざるものあり、及び未來の未知智を成就するも過去の非らざるものあり、及び過去・未來の未知智を成就するものあり。(一)云何んが、過去の法智を成就するも、過去・未來の未知智は非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき未知智を得せざるものなれば、是れを過去の法智を成就するも過去・未來の未知智は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが過去の法智を成就し及び未來の未知智をも成就するも過去の非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき未知智を得するも若しくは盡きざるか設ひ盡くも失するかなれば、是れ過去の法智を成就し、及び未來の未知智を成就するも過去の非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが、過去の法智を成就し、及び過去・未來の未知智をも成就するものなりや。答へて曰く、若し法智と未知智とが、已に盡くも失せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し及び過去・未來の未知智を成就するものと謂ふなり。設し過去・未來の未知智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就し、若し盡きざるか設ひ盡くも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

(7)若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去・未來・現在の未知智をもなりや。答へて曰く、或は過去の法智を成就するも、過去・未來・現在の未知智は無きものあり、及び未來の未知智をも成就するも、過去・現在の非らざるものあり、及び過去・未來の未知智は成就するも現在の非らざるものあり、及び未來・現在の未知智を成就するも過去の非らざるものあり、及び過去・未來・現在

と、一來・不還果を得するもの及び學の練根し已れるもの。若し法智が已に滅するも失せずして未知智が未だ滅せざるか、設ひ滅するも已に失するかのときと、をいふなり。

【九九】こは、四沙門果を得するもの及び學・無學の練根し已れるもの未知智が已に滅するも失せずして、法智が未だ滅せざるか設ひ滅するも已に失すかのときをいふなり。

【一〇〇】小七句中の第二句——(過去法智)未來の未知智。こは、苦未知智已生のときなり。

【一〇一】小七句中の第三句——(過去の法智)現在の未知智。こは、苦・習・滅現觀の三末未知智の頃と、四沙門果を得するもの及び學・無學の練根し已れるもの若し法智が已に滅するも失せずして未知智が現在前する時となり。

【一〇二】こは、四沙門果を得するもの及び學・無學の練根し已れるもの法智が未だ滅せざるか設ひ滅するも已に失するかにして而も未知智が現在前するときにいふなり。

【一〇三】小七句中の第四句——(過去の法智)過去・現在の未知智。こは苦現觀一心の頃

は非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが過去の法智を成就し及び現在の未知智を成就するも過去の非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして、又、此の未知智が現在前し若しくは盡きざるか已に盡くるも便ち失するかなれば、是れを過去の法智を成就し、及び現在の未知智を成就するも過去の非らざるものと謂ふなり。(四)云何んが過去の法智を成就し及び過去・現在の未知智を成就するものなりや。答へて曰く、若し法智と未知智とが已に盡きて失せずして、又、此の未知智が現在前するものなれば、是れを過去の法智を成就し及び過去現在の未知智を成就するものと謂ふなり。設し過去・現在の未知智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失すかなれば則ち成就せざるなり。

(5)若し過去の法智を成就すれば、彼れは未來・現在の未知智をもなりや。答へて曰く、或は過去の法智を成就するも未來・現在の未知智は非らざるものあり、及び未來の未知智を成就するも現在の無きものあり、及び未來・現在の未知智を成就するものあり。(一)云何んが、過去の法智を成就するも未來・現在の未知智は非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき未知智を得ずして又此のとき未知智を得せざるものなれば是れを過去の法智を成就するも、未來・現在の未知智は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが過去の法智を成就し及び未來の未知智をも成就するに現在の非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき未知智を得するも現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し、及び未來の未知智を成就するも、現在の非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが過去の法智を成就し及び未來・現在の未知智をも成就するものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此のとき未知智が現在前するものなれば、是れを過去の法智を成就し及び未來・現在の未知智を成就するものと謂ふなり。設し未來・現在

在りて已に無漏の知他人心智を起して失せずして、無色界に生ずるも未だ無學果を得せざるときをいふなり。

【九二】茲に、「他人心智解竟」の夾註あり。

【九三】等智の成就に關する歴六問答。

【九四】茲に、「六寛る」の夾註あり。

【九五】本節は頌文の「小七」に相當する段にして、八智の

一につきて三世に涉りて其の成就關係を小七句問答の形式によりて分別し、大七句問答につきては之れを廣說せず。

因みに、小七句の形式は既に卷第五(毘曇部十七、頁三三三)に出せるを以つて今は省略す。

尙、婆沙百十一卷(毘曇部十二、頁二八六)を參考するを便とす。

【九六】過去の法智を未知智に對しての小七句問答。

小七句中の第一句——(過去の法智——過去の未知智)。

【九七】こは、習・盡現觀の各の四心の頃と、道現觀の三心の頃と、四沙門果を得するもの及び學・無學の練根し已れるもの法の智と未知智とを起して已に滅して失せざるときをいふなり。

【九八】こは、苦現觀二心の頃

せざるなり。設し過去の未知智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば、則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。

【二〇】若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは未來の未知智をもなりや。答へて曰く、若し得すれば成就す。設し未來の未知智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。

【二一】若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは現在の未知智をもなりや。答へて曰く、若し現在前すれば、成就するなり。設し現在の未知智を成就するものなれば、彼れは過去の法智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか設ひ盡くるも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。

【二二】若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去、現在の未知智をもなりや。答へて曰く、或は、過去の法智を成就するも、過去、現在の未知智は無きものあり、及び、過去の未知智を成就するも、現在の無きものあり、及び現在の未知智を成就するも、過去の無きものあり。及び過去、現在の未知智を成就するものあり。(一)云何んが過去の法智を成就するも、過去、現在の未知智は無きものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又此の未知智が盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかにして現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就するも、過去、現在の未知智は非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが過去の法智を成就し及び過去の未知智を成就するも、現在の非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智と未知智とが已に盡きて失せず、及び此の未知智が現在前せざるものなれば、是れを過去の法智を成就し及び未來の未知智を成就するも、現在の

未だ無學果を得せざるものをいふなり。
【二七】こは、欲・色界に在りて未だ無漏の知他人心智を起さざると、設ひ起すも已に失して無色界に生ずると、設ひ起し失せずして無色界に生ずるも無學果を得ずるとをいふなり。

【二八】知他人心智を現在前する時は必ず過去の有漏の知他人心智を成就し、無漏のは不定なるなり。

【二九】「得して失せず」とは未來の知他人心智を成就することを現はし、若しくは盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかにして」とは過去の知他人心智の無きことを顯はし、「現在前せず」とは現在の無きことを現はすなり。而してこは、學にして欲色界に在りて未だ無漏の知他人心智を起さざると、設ひ起すも已に失して無色界に生ずると、設ひ起し失せずして無色界に生ずるも無學果を得ずるとをいふなり。

【三〇】大正本には、是は見もあるも是の誤植なり。

【三一】欲界に生じ已離欲染なるも知他人心智を現在前せざるときと、色界に生ずるときと、他人心智を現在前せざるときと、若し學にして欲・色界に

設し彼れが過去・未來のを成就すれば、彼れは現在のをもなりや。答へて曰く、若し現在前すれば成就するなり。^{九二}

^{九三}(1) 若し過去の等智を成就すれば、彼れは未來のもなりや。答へて曰はく、是くの如し。設し彼れが未來のを成就すれば、彼れは過去のもなりや。答へて曰はく、是くの如し。

(2) 若し彼れが過去のを成就すれば、彼れは現在のをもなりや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。設し彼れが現在のを成就すれば、彼れは過去のもなりや。答へて曰く、是くの如し。

(3) 若し彼れが未來のを成就すれば、彼れは現在のをもなりや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。設し彼れが現在のを成就すれば、彼れは未來のもなりや。答へて曰く、是くの如し。

(4) 若し彼れが過去のを成就すれば、彼れは未來・現在のをもなりや。答へて曰く、未來のは則ち成就するも、現在の若し現在前すれば成就す。設し彼れが未來・現在のを成就すれば、彼れは過去のをもなりや。答へて曰く、是くの如し。

(5) 若し彼れが未來のを成就すれば、彼れは過去・現在のをもなりや。答へて曰く、過去のは則ち成就するも現在の若し現在前すれば成就す。設し彼れが過去・現在のを成就すれば、彼れは未來のもなりや。答へて曰く、是くの如し。

(6) 若し彼れが現在のを成就すれば、彼れは過去・未來のもなりや。答へて曰く、是くの如し。設し彼れが過去・未來のを成就すれば、彼れは現在のをもなりや。答へて曰はく、若し現在前すれば、成就するなり。^{九四}

^{九五}第十六節 八智の成就に関する小七句・六七句問答

^{九六}(1) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去の未知智をもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設し盡くるも便ち失するかなれば、則ち成就

合と同じきなり。

【七二】 此は、四沙門果を得するもの及び學・無學の練根し已れるもの若し法智が未だ已に滅を起さざるが、先に已に滅を起せるも已に失するかにして現在前せざるときをいふなり。

【七三】 此は、苦現觀の後の二心の頃と、習・盡現觀の三心の頃(法智の頃を除く)と、道現觀の二忍の頃と、四沙門果を得するもの及び學・無學の練根已れるもの若し法智が已に滅するも失せずなり。現在前せざるときをいふなり。

【七四】 此は苦現觀一心の頃と四沙門果を得するもの及び學・無學の練根已れるもの若し法智が未だ滅せざるか、先に滅し已に失せるも而も現在前するるときとなり。

【七五】 此は、前の第二句の場合も同じとなるなり。

【七六】 茲に、「法智經竟」の夾註あり。

【七七】 未知智・四諦智の成就に関する歴六問答。

【七八】 知他人心智の成就に関する歴六問答。

【七九】 此は、欲界生の已離欲染のもの、色界生のものと、學の欲・色界に在りて已に無漏の知他人心智を起して失せざるものと、無色界に生じて

れば成就するも、若し盡きざるか、設し盡くるとも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。

(2) 若し彼れが過去のを成就すれば、彼れは現在のをもちなりや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。設し彼れが現在のを成就すれば、彼れは過去のをもちなりや。答へて曰く、是くの如し。

(3) 若し彼れが未來のを成就すれば、彼れは現在のをもちなりや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。設し彼れが現在のを成就すれば、彼れは未來のをもちなりや。答へて曰く、是くの如し。

(4) 若し彼れが過去のを成就すれば、彼れは未來・現在のをもちなりや。答へて曰く、未來のは則ち成就するも現在のは若し現在前すれば成就す。設し彼れが未來・現在のを成就すれば、彼れは過去のをもちなりや。答へて曰く、是くの如し。

(5) 若し彼れが未來のを成就すれば、彼れは過去・現在のをもちなりや。答へて曰く、或は未來のを成就するも過去・現在のは無きものあり、及び過去のを成就するも現在のは無きものなり、及び過去・現在のをもち成就するものあり。(一)云何んが未來のを成就するも、過去・現在のは無きものなりや。答へて曰く、若し知他人心智を得して失せずして、若しくは盡きざるか、設し盡くるとも便ち失するかにして現在前せざるものなれば、是れを未來のを成就するも過去・現在のは無きものと謂ふなり。(二)云何んが未來と及び過去のを成就するも、現在のは非らざるものなりや。答へて曰く、若し知他人心智が已に盡きて失せず又此の知他人心智が現在前せざるものなれば、是れを未來と及び過去のを成就するも現在のは非らざるものと謂ふなり。(三)云何んが未來と及び過去・現在のを成就するものなりや。答へて曰く、若し知他人心智が已に盡きて失せず又此の知他人心智が現在前するものなれば、是れを未來と及び過去・現在のを成就するものと謂ふなり。設し彼れが過去・現在のを成就すれば、彼れは未來のをもちなりや。答へて曰く、是くの如し。

(6) 若し彼れが現在のを成就すれば、彼れは過去・未來のをもちなりや。答へて曰く、是くの如し。

六問答。

【七〇】 是くの如しとは過去のを成就すれば必ず未來のを成就するが故なり。即ち若し現觀二心の頃と、習・盡現觀の各の四心の頃と、道現觀の三心の頃と、四沙門果を得せるもの及び學・無學の練根し已れるもの若し法智を已に滅して失せざる時となり。

【七一】 「盡く」とは滅するの義なり。

【七二】 こは、苦・習・盡・道現觀(苦法智)と、四沙門果を得するもの及び學・無學の練根し已れるもの法智を未だ滅せざるときなり。

【七三】 無漏法は得果と練根と退との三緣の故に失するなり。

【七四】 現在前すとは、未知智・諸忍・等智も起らず無心位にも非ざる時には法智は定んで現在前す。即ち、今の場合は習・盡・道現觀の三法智の時と、四沙門果を得するもの及び學・無學の練根し已れるもの若し法智が已に滅して而かも失せず且つ現在前するときとをいふなり。

【七五】 こは、苦・習・盡・道現觀の四法智の時と、四沙門果を得するもの及び學・無學の練根し已れるものが法智を現在前するときとなり。

【七六】 こは、前の第二句の場

(5) 若し彼れが未來のを成就すれば、彼れは過去・現在のをもなりや。答へて曰く、或は未來のを成就するも、過去・現在のは無きものあり、及び過去のを成就するも現在のは無きものあり、及び現在のをも成就するも過去は無きものあり、及び過去・現在のをも成就するものあり。(一)云何んが未來のを成就するも過去・現在のは非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智を得して盡きざるが、設ひ盡くるも便ち失するかにして現在前せざるものなれば、是れを未來のを成就するも過去・現在のは非らざるものと謂ふなり。(二)云何んが未來と及び過去とのを成就するも現在のは非らざるものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せず又此の法智が現在前せざるもの智なれ、是れを未來と及び過去とのを成就するも、現在のは無きものと謂ふなり。(三)云何んが未來と及び現在ののを成就するも、過去のは無きものなりや。答へて曰く、若し法智が現在前して盡きざるか、設ひ盡くるも則ち失するかなれば、是れを未來と及び現在ののを成就するも、過去のは非らざるものと謂ふなり。(四)云何んが未來と及び過去・現在ののを成就するものなりや。答へて曰く、若し法智が已に盡きて失せずして又、此の法智が現在前するものなれば、是れを未來と過去・現在ののを成就するものと謂ふなり。設し彼れが過去・現在のを成就すれば、彼れは未來のをもなりや、答へて曰く、是くの如し。

(6) 若し彼れが現在のを成就すれば、彼れは過去・未來のをもなりや。答へて曰く、未來のは則ち成就するも、過去のは、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。設し彼の過去・未來のを成就するものなれば、彼れは現在のをもなりや。答へて曰く、若し現在前すれば成就するなり。

未知智と苦智と習・盡・道智とにつきても亦、是くの如し。

(1) 若し過去の知他人心智を成就するものなれば、彼れは未來のをもなりや。答へて曰く、是くの如し。設し彼れが未來のを成就すれば、彼れは過去のをもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざ

きての一行問答、

【六〇】發智論は以下の文を省略せずして一廣説せり。

【六一】茲に、「未知智覺る」の夾註あり。

【六二】知他人心智の成就關係に就きての一行問答。

【六三】發智論は以下の文を一につけて廣説し居れり。

【六四】茲に、「知他心覺る」の夾註あり。

【六五】等智の成就關係に就きての一行問答。

【六六】苦智の成就關係に就きての一行問答。

【六七】習智の成就關係に就きての一行問答。

【六八】靈智の成就關係に就きての一行問答。

【六九】茲に、大正本には「一觀覺る」の夾註あるもこれは三本、宮本の如く、「二行覺る」となす方良し。

【七〇】本節は、頌文の「六」に相當するものにして、八智の一一に就きて、三世に於ける成就關係を、歷六問答の形式によりて分別するを其の目的とす。

因みに、歷六問答の形式に就きては既に第五卷、毘曇部十七、頁三三一に九結の歷六問答を論ぜし場合に説明せるを以つてこれを省略す。

【七一】法智の成就に關する歷

若し苦智を成就するものなれば、彼れは習・盡……乃至若し苦智を成就するものなれば、彼れは道智をもなりや。答へて曰く、彼し得すれば成就す。設し、道智を成就するものなれば、彼れは苦智をもなりや。答へて曰く、是くの如し、

若し習智を成就するものなれば、彼れは盡・道智をもなりや。答へて曰く、若し得すれば成就す。

設し盡・道智を成就するものなれば、彼れは習智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。

若し盡智を成就するものなれば、彼れは道智をもなりや。答へて曰く、若し得すれば成就す。設し道智を成就するものなれば、彼れは盡智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。

第十五節 八智の成就に關する歷六問答

(1) 若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは未來のものなりや。答へて曰く、是くの如し。設し彼れが未來の成就すれば、彼れは過去のものなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

(2) 若し彼れが過去の成就すれば、彼れは現在のものなりや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。設し彼れが現在の成就すれば、彼れは過未のものなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せず。

(3) 若し彼れが未來の成就すれば彼れは現在のものなりや。答へて曰く、若し現在前すれば成就す。設し彼れが現在の成就すれば、彼れは未來のものなりや。答へて曰く、是くの如し。

(4) 若し彼れが過去の成就すれば彼れは未來・現在のものなりや。答へて曰く、未來のは則ち成就し、現在のは若し現在前すれば成就す。設し彼れが未來・現在の成就すれば、彼れは過去のをもなりや。答へて曰く、若し盡きて失せざれば、則ち成就するも、若し盡きざるか、設ひ盡くるも便ち失するかなれば則ち成就せざるなり。

欲染にして若し退して欲界の煩惱を起さざるものと、無色界に生ぜざるものと、恒時に成就し、無漏の知人心智は已離欲染にして若し退して欲界の煩惱を起さざれば恒時に成就す。

(三) 等智は一切の有情が恒時に成就するなり。婆沙卷第一百十一毘曇部十二頁二七七參照

【五一】法智の成就關係に就きての一行問答。

【五二】得とは、已得をいふなり、以下之れに準じて知れ。

因みに、茲にては、若未知智現前以後をいふ。

【五三】こは、苦法智現前以後なれば、法智は恒に成就するが故に是くの如しといへるなり。

【五四】知他人人心智の場合得すとは、已離欲染者をいふなり。

又、失せずとは退して欲界の煩惱を起さざるをいふなり。

【五五】得すとは茲にては苦法智現前以後なり。

【五六】一切有情にて等智を成就せざるものなきを以つて、是くの如しといへるなり。

【五七】發智論は茲の文を省略せず一につきて論述し居れり。

【五八】茲に、「法智覺る也」の夾註あり。

【五九】未知智の成就關係に就

されば則ち成就するも、若し得せざるか設ひ得するも便ち失するかなければ則ち成就せざるなり。設し知他人心智を成就するものなれば、彼れは未知智をもちたりや、答へて曰く、若し得すれば成就するなり。

若し未知智を成就するものなれば、彼れは等智をもちたりや。答へて曰く、是くの如し。設し等智を成就するものなれば彼れは未知智をもちたりや。答へて曰く、若し得すれば成就するなり。

若し未知智を成就するものなれば、彼れは苦智をもちたりや。答へて曰く、是くの如し。設し苦智を成就するものなれば彼れは未知智をもちたりや。答へて曰く、若し得すれば成就するなり。

若し未知智を成就するものなれば彼れは習・盡・智……乃至若し未知智を成就するものなれば彼れは道智をもちたりや。答へて曰く、若し得すれば成就す。設し道智を成就するものなれば、彼れは未知智をもちたりや。答へて曰く、是くの如し。

若し知他人心智を成就するものなれば、彼れは等智をもちたりや。答へて曰く、是くの如し。設し等智を成就するものなれば、彼れは知他人心智をもちたりや。答へて曰く、若し得して失せざれば則ち成就するも若し得せざるか、設ひ得するも便ち失するかなければ則ち成就せざるなり。

若し知他人心智を成就するものなれば、彼れは苦智・習智・盡智……乃至若し知他人心智を成就するものなれば彼れは道智をもちたりや。答へて曰く、若し得すれば成就す。設し道智を成就するものなれば、彼れは知他人心智をもちたりや。答へて曰く、若し得して失せざれば則ち成就するも若し得せざるか、設ひ得するも便ち失するかなければ、則ち成就せざるなり。

若し等智を成就するものなれば、彼れは苦智・習智・盡智……乃至若し等智を成就するものなれば彼れは道智をもちたりや。答へて曰く、若し得すれば成就す。設し道智を成就するものなれば、彼れは等智をもちたりや。答へて曰く、是くの如し。

【六】餘を縁とせずして云云とは、生以外のものも縁となりて老死あるならんとの疑を決定するために生以外のものは老死の縁とならざることを明せるなり。

【七】過去久遠よりとは、現在世に於てのみならず、久遠の過去世に於て人壽の無量なりし時に於ても尙、生は老死に縁たりしことを明にせんがためなり。(成實論卷第十六第二百二、七十七智品を參見すべし)。

【四】十一有支を知る智のみにとときて無明支を知る智を説かざる理由は前の四十四智袖の場合と同じ。

【九】茲に、「七十七智門竟る」の夾註あり。

【五】本節は、頌文の「一行」に相當するものにして八智の成就に關する一行問答、即ち八智中に於て、前の一に對してそれを成就するや否や、又、後を成就すれば前を成就するや否やに就きて分別する段なり。固みに、以下の本文を解するに當りて次の事項を心得え置かば解し易し。

(一)法智・未知智・四諦智は得して以後なれば恒時に成就す。
(二)有漏の知他人心智は已離

智となり。未來久遠に、生を縁として老死ありと知る智は、四智にして、法智と未知智と習智と等智となり。餘を縁とせずして未來久遠に生のみを縁として老死ありと知る智は、四智にして法智と未知智と習智と等智となり。如法界住智の、無常・有爲・心所・縁より生ずるもの、盡法・變易法・無欲法・盡法と斷智慧するものなれば、此の智は一智にして等智なり。乃至、無明を縁として 行ありと知る智につきても亦、是くの如し。

五〇 第十四節 八智の成就に關する一行問答

一 若し法智を成就するものなれば、彼れは未知智をもなりや。答へて曰く、若し 得せば成就す。設し未知智を成就するものなれば、彼れは法智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。

若し法智を成就するものなれば、彼れは知他人心智をもなりや。答へて曰く、若し 得して失せざれば則ち成就するも、若し得せざるか設し得するも便ち失するかなれば、則ち成就せざるなり。設し知他人心智を成就するものなれば、彼れは法智をもなりや。答へて曰く、若し 得すれば成就するなり。

若し法智を成就するものなれば、彼れは等智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。設し等智を成就するものなれば、彼れは法智をもなりや。答へて曰く、若し得すれば成就するなり。

若し法智を成就するものなれば、彼れは苦智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。設し苦智を成就するものなれば、彼れは法智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。

若し法智を成就するものなれば、彼れは習智、盡智……乃至若し法智を成就するものなれば彼れは道智をもなりや。答へて曰く、若し得すれば、成就す。設し道智を成就するものなれば、彼れは法智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。

若し未知智を成就するものなれば、彼れは知他人心智をもなりや。答へて曰く、若し得して失せ

等を参照すべし。
【三五】發智論は以下に四十四智種の名前を連記し居れり。

【三六】四十四智種の八智分別。因みに、老死の苦の智は發智論には老死の智とあり、雜阿含も亦然り。成實論卷第十六、

第二百一、四十四智品には、老死智を苦智と名くることの不可なる理由を説明せり往見すべし。

【四〇】十二有支中の十一有支につきてのみ論じ、無明を知る智を説かざる理由を婆沙論

(卷第一百、毘婆沙部十二、頁二六五)は説明して、無明は有支に攝せられ、有支を以つて因となさず有支の果にも非ざるが故に説かざるなりと言ひ、或は又有支の集を緣する智を起さずして但、三智のみを起すが故なりと言へり。

【四一】茲に「四十四智門覺る」の夾註あり。

【四二】こは、頌文の「二智種」中の一智種に相當する段にして、七十七智種の八智分別をなすを其の目的とす。

【四三】この經文は雜阿含卷第十四、第三五七經(大正・二、頁九九下)及び M.N.12, 38-39. Avijjapucchāya 等なり。

【四四】發智論は以下に七十七智種の名目を連記し居れり。

【四五】七十七智種の八智分別。

根と相應するも等志とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが等志と相應するも無知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、無知根と相應せざる等志と相應する法、是れを等志と相應するも無知根とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが無知根と等志とに相應するものなりや。答へて曰く、無知根と相應する等志と相應する法、是れを無知根と等志とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが無知根と相應するにも非ず等志とに非ざるものなりや。答へて曰く、無知根と相應せざる等志と、諸餘の無知根と等志とに相應せざる心・心法と色と無爲と心不相應行と、是れを無知根と相應するにも非ず等志とに非ざるものと謂ふなり。

餘殘は^{三三}上の如く相應するなり。^{三五}

第十二節 四十四智種に就きて

又、世尊の言く「我は今當に四十四智種を説くべし」と。^{三六}

老死の苦の智は、四智にして法智と未知智と苦智と等智となり。老死の集の智は、四智にして法智と未知智と習智と等智となり。老死の盡の智は、四智にして法智と未知智と盡智と等智となり。老死の盡の道迹の智は、四智にして法智と未知智と道智と等智となり。生と有と乃至行との智につきても亦、是くの如し。^{四一}

第十三節 七十七智種に就きて

又、世尊の言く、「我今當に七十七智種を説くべし」と。^{四二}

生を縁として老死ありと知る智は、四智にして、法智と未知智と習智と等智となり。餘を縁とせずして生のみを縁として老死ありと知る智は、四智にして法智と未知智と習智と等智となり。過去久遠より生を縁として老死ありと知る智は、四智にして法智と未知智と習智と等智となり。餘に非ずして過去久遠より生のみを縁として老死ありと知る智は、四智にして法智と未知智と習智と等

【三】覺意相應法と道種相應法との相應に關する論究。

こは、發智論には「念覺支乃至正念を後に對して廣く説くこと學支納息の如し」とあり。

【四】上とは、八健度論卷第九(大正・二六・頁八一四中)のを指す。

【五】茲に「相應門竟る」の制註あり。

【六】上來智に關する諸種の論究をなし來れるに因みて、經中に説かるる四十四智種(智事)に就きて解説を試みるは本節の課題なり。

因みに、こは、頌文の「二智種」中の一智種に相當するものなり。

【七】この經文に關しては雜

阿含・卷第十四、第三五六經、(大正・二・頁九九下)SK. 12, 33; *Āṅguttara-vāṅṅhī*.

も無知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、無知根に攝せざる喜覺意と相應する法、是れを喜覺意と相應するも無知根とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが無知根と喜覺意とに相應するものなりや。答へて曰く、無知根に攝する喜覺意と相應する法、是れを無知根と喜覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが無知根と相應するにも非ず喜覺意とにも非ざるものなりや。答へて曰く、無知根に攝せざる喜覺意と、諸餘の無知根と喜覺意とに攝せず相應もせざる心・心法と色と無爲と心不相應行と、是れを無知根と相應するにも非ず喜覺意とにも非ざるものと謂ふなり。

等見につきても亦、是くの如し。

三 諸法にして無知根と相應するものなれば、彼れは喜覺意ともなりや。答へて曰く、或は無知根と相應するも、喜覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが無知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、無知根と相應する喜覺意、是れを無知根と相應するも喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが喜覺意と相應するも無知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、無知根と相應せざる喜覺意と相應する法、是れを喜覺意と相應するも未知根とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが無知根と喜覺意とに相應するものなりや。答へて曰く、無知根と相應する喜覺意と相應する法、是れを無知根と喜覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが無知根と相應するにも非ず喜覺意とにも非ざるものなりや。答へて曰く、無知根と相應せざる喜覺意と及び餘の心心法と色と無爲と心不相應行と、是れを無知根と相應するにも非ず喜覺意とにも非ざるものと謂ふなり。

護覺意につきても亦、是くの如し。

三 諸法にして無知根と相應するものなれば、彼れは等志ともなりや。答へて曰く、或は無知根と相應するも等志とに非ざるものあり。(一)云何んが無知根と相應するも等志とに非ざるものなりや。答へて曰く、無知根と相應する等志と、諸の等志と相應せざる無知根と相應する法と、是れを無知

【三】有る法にして具知根と相應し亦、正見ともなるものあり、謂く、具知根に攝せらるる正見と相應する法なり。

【四】有る法にして具知根と相應するにも非ず、亦正見とにも非ざるものあり。謂く具知根に攝せざる所の正見と、及び正見と具知根とに攝せず相應もせざる諸餘の心心所法(こは一切の有漏の心心所法をいふなり)と色と無爲と心不相應行となり」と。

【五】無知根相應法と擇法・精進・定覺意及び等方便・等念・等定との相應關係。

【六】無知根相應法と喜覺意・等見との相應關係。

【七】無知根相應法と喜覺意・護覺意との相應關係。

【三】無知根相應法と等志との相應關係。

に非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが未知根と等志とに相應するものなりや。答へて曰く、未知根と相應する等志と相應する法、是れを未知根と等志とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが未知根と相應するに非ず等志とにも非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應せざる等志と、

諸餘の未知根と等志とに相應せざる心・心法と、色と、無爲と、心不相應行と、是れを未知根と相應するにも非ず等志とにも非ざるものと謂ふなり。

已知根門につきても亦、是くの如し。

諸法にして未知根と相應するものなれば、彼れは念覺意ともなりや。答へて曰く、或は未知根と相應するも念覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが未知根と相應するも念覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝する念覺意、是れを未知根と相應するも念覺意とに非ざるものとなふなり。(二)云何んが念覺意と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝せざる念覺意と相應する法、是れを念覺意と相應するも未知根とに非ざるものとなふなり。(三)云何んが未知根と念覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが未知根と相應するにも非ず念覺意とにも非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝せざる念覺意と、及び餘の心・心法と色と無爲と心不相應行と、是れを未知根と相應するにも非ず念覺意とにも非ざるものと謂ふなり。

擇法・精進・定覺意と等方便と等念と等定とにつきても亦、是くの如し。

諸法にして未知根と相應するものなれば、彼れは喜覺意ともなりや。答へて曰く、或は未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝する喜覺意と、諸の喜覺意に攝せず相應もせざる未知根と相應する法、是れを未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが喜覺意と相應する

【五】こは、十大地法と十大善地法と壽と伺と心とをいふなり。

【六】こは、中間定と後三禪と前三無色との地中の已知根、未知根と俱生する衆中の心心法と一切の有漏の心心法とをいふなり。

【七】已知根相應法と未知根七覺意・八道種との相應關係。

【八】未知根相應法と念覺意との相應關係。

因みに、發智論は以下、本節の終り迄を左の如く言ひて凡て是を省略せり、發智に曰く、未知當知根を後に對するが如く、已知根・具知根を後に對するも亦、爾り。差別あるをいへば、具知根を正見に對するとき應に四句を作すべきなり。

【一】有る法にして具知根と相應するも正見とに非ざるものあり。謂く具知根に攝せらるる正見と、及び正見に攝せず相應もせざる具知根と相應する法(こは盡智・無生智と俱生する衆中の具知根と相應する法をいふなり)となり。

【二】有る法にして正見と相應するも具知根とに非ざるものあり。謂く、具知根に攝せざる所の正見と相應する法なり。

なりや。答へて曰く、未知根に攝する喜覺意と相應する法、是れを未知根と喜覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが未知根と相應するにも非ず喜覺意とにも非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝せざる喜覺意と、諸餘の未知根と喜覺意とに攝せず相應もせざる心・心法と、色と、無爲と、心不相應行と、是れを未知根と相應するにも非ず喜覺意とにも非ざるものと謂ふなり。

諸法にして未知根と相應するものなれば、彼れは喜覺意ともなりや。答へて曰く、或は未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應する喜覺意、是れを未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなり。(二)云何んが喜覺意と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなり。(三)云何んが未知根と喜覺意とに相應するものなりや。答へて曰く、未知根と相應する喜覺意と相應する法、是れを未知根と喜覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが未知根と相應するにも非ず喜覺意とにも非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなり。(五)云何んが喜覺意と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなり。(六)云何んが喜覺意と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなり。(七)云何んが喜覺意と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなり。(八)云何んが喜覺意と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなり。(九)云何んが喜覺意と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなり。(十)云何んが喜覺意と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなり。

護覺意につきても亦、是くの如し。

諸法にして未知根と相應するものなれば、彼れは等志ともなりや。答へて曰く、或は未知根と相應するも等志とに非ざるものあり。(一)云何んが未知根と相應するも等志とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應する等志と、諸の等志と相應せざる未知根と相應する法と、是れを未知根と相應するも等志とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが等志と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應する等志と、諸の等志と相應せざる未知根と相應する法と、是れを等志と相應するも未知根と

【五】未知根相應法と喜覺意との相應關係。

【六】こは、未至定と中間定と第三・第四禪との地中の未知根と相應する法をいふなり。因みに、未知根は下三無色地には無きなり。

【七】こは、未至定と中間定と後二禪と下三無色との地中の已知根・無知根と俱生する衆中の心心法と一切の有漏の心心法とをいふなり。

【八】大正本には心の上に、「及餘」の二字あるも法相上安當ならざるを以つてこれを除けり。以下※印あるはこれに准ず。

【九】未知根相應法と喜覺意・護覺意との相應關係。

【一〇】こは、已知根・無知根と俱生する衆中の喜と相應する法をいふなり。

【一一】こは、十大地法と喜を除く九大善地法と尋と伺と心とをいふなり。

【一二】餘の心心法とけ一切の有漏の心心法をいふなり。

【一三】未知根相應法と等志との相應關係。

【一四】こは、中間定と後三禪との地中の未知根と相應する法をいふなり。

等定につきても亦是くの如し。

六 無相門につても亦、是くの如し。

第十一節 三無漏根相應法と三無漏根・七覺意・八道種との相應關係

八 諸法にして未知根と相應するものなれば彼れは已知根・無知根と相應するに非ず。

九 諸法にして未知根と相應するものなれば、彼れは念覺意ともなりや。答へて曰く、或は未知根と相應するも念覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが未知根と相應するも念覺意とに非ざるもの

なりや。答へて曰く、未知根に攝する念覺意、是れを未知根と相應するも念覺意とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが念覺意と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝せざる念覺意と相應する法、是れを念覺意と相應するも未知根とに非ざるものと謂ふなり。(三)

云何んが未知根と念覺意とに相應するものなりや。答へて曰く、未知根に攝する念覺意と相應する法、是れを未知根と念覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが未知根と相應するに非ず念覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝せざる念覺意と、及び餘の心・心法と色と、無爲と、心不相應行と、是れを未知根と相應するにも非ず、念覺意とにも非ざるものと謂ふなり。

一四 擇法・精進・定覺意と等見と等方便と等念と等定とにつきても亦、是くの如し。

一五 諸法にして未知根と相應するものなれば、彼れは喜覺意ともなりや。答へて曰く、或は未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝する喜覺意と、諸の喜覺意に攝せず相應もせざる未知根と相應する法と、是れを未知根と相應するも喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが喜覺意と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝せざる喜覺意と相應する法、是れを喜覺意と相應するも未知根とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが未知根と喜覺意とに相應するもの

【七六】 無相相應法と三無漏根・七覺意・八道種との相應關係。
【七】 本節は、頌文の「相應」の一部分に相當する段にして、即ち三無漏根と相應する法は無漏根・覺意・道種と相應するや否やと就きて論究するを其の目的とす。

【七六】 覺意相應法及び道種相應法との相應關係を論ずべきなれど已に第九卷に於て論じため茲には省略せられたり。

【七八】 未知根相應法と已知根・無知根との相應關係。
【七九】 未知根相應法と念覺意との相應關係。

【八〇】 こは、已知根・無知根と俱生する聚中の念と相應する法をいふなり。

【八一】 こは、見道位に在る無漏の九根より念根を除く餘の八根と及び彼れと相應する非根の心所法とをいふなり。

【八二】 未知根に攝せざる念覺意とは已知根・無知根と俱生する聚中の念をいふ。

【八三】 餘の心心法とは一切の有漏の心心法をいふ。

【八四】 未知根相應法と擇法・精進・定覺意及び等見・等方便・等念・等定との相應關係

意と相應するも未知根とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが未知根と喜覺意とに相應するもの

卷の第十四 (第二編 智蘊)

(智健度中相應跋渠第五之餘)

第十節 三昧相應法と三昧乃至八道種との相應關係(續き)

諸法にして無願と相應するものなれば、彼れは喜覺意ともなりや。答へて曰く、或は無願と相應するも喜覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが無願と相應するも喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、無願と相應する喜覺意と、諸餘の喜覺意と相應せず無願と相應する法と、是れを無願と相應するも喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが喜覺意と相應するも無願とに非ざるものなりや。答へて曰く、喜覺意と相應する無願と、諸の無願と相應せずして喜覺意と相應する法と、是れを喜覺意と相應するも無願とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが無願と喜覺意とに相應するものなりや。答へて曰く、無願と喜覺意とを除く諸餘の無願を喜覺意とに相應する法、是れを無願と喜覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが無願と相應するにも非ず喜覺意とにも非ざるものなりや。答へて曰く、無願と相應せざる喜覺意と、喜覺意と相應せざる無願と、及び餘の心・心法と色と無爲と心不相應行と、是れを無願を相應するにも非ず喜覺意とにも非ざるものと謂ふなり。

等見と等志とにつきても亦、是くの如し。

諸法にして無願と相應するものなれば、彼れは定覺意ともなりや。答へて曰く、是くの如し。諸法にして無願と相應するものなれば、彼れは定覺意とも相應するなり。頗し諸法にして定覺意と相應するも彼れは無願とに非ざるものありや。答へて曰く、有り。無願に攝せざる定覺意と相應する法なり。

【一】 本節は、前節の續行なるも分卷に隨ひて分節せしのみ。

【二】 無願相應法と喜覺意との相應關係。

【三】 大正率には喜の上に、相應の二字あるも法相上妥當ならず、依つて之れを除けり。

【四】 無願相應法と等見・等志との相應關係。

【五】 無願相應法と定覺意・等定との相應關係。

未知根に攝する無願と相應する法、是れを無願と未知根とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが無願と相應するに非ず未知根とにも非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝せざる無願と、諸餘の無願と未知根とに攝せず相應もせざる心、心法と色と無爲と心不相應行と、是れを無願と相應するにも非ず未知根とにも非ざるものと謂ふなり。

已知根と未知根とにつきても亦、是くの如し。

諸法にして無願と相應するものなれば、彼れは念覺意ともなりや。答へて曰く、或は無願と相應するも念覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが無願と相應するも念覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、無願と相應する念覺意、是れを無願と相應するも念覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが念覺意と相應するも無願とに非ざるものなりや。答へて曰く、無願と、諸の無願と相應せずして念覺意と相應する法と、是れを念覺意と相應するも無願とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが無願と念覺意とに相應するものなりや。答へて曰く、念覺意を除く、諸餘の無願と相應する法、是れを無願と念覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが無願と相應するに非ず念覺意とにも非ざるものなりや。答へて曰く、無願と相應せざる念覺意と、及び餘の心・心法と色と無爲と心不相應行と、是れを無願と相應するに非ず念覺意とにも非ざるものと謂ふなり。

擇法・精進・猗・護覺意と等方便と等念とにつきても亦、是くの如し。

如くに略説せり。

「空を後に對するが如く無願・無相を後に對するも亦、爾り、差別あるをいへば、空を喜覺

支・正思惟に對するが如く無願・無相を喜覺支・正見・正思惟に對するも亦、爾りとなり。」

【二六】無願相應法と念覺意との相應關係。
【二九】無願相應法と擇法・精

【二五】發智論には、「二と相應する法」とあり。
即ち、初二禪の空と俱生する聚中より空及び喜を除く諸餘の心心法をいふ。
【二六】大本には、喜の上に相應の二字あるも、法相上妥當ならざるを以つてこれを除けり。

【二五】餘の心心法とは、未至・中間・後二禪・前三無色地中の無願、無相と俱生する聚中の心心法と一切の有漏の心心法とをいふなり。

【二六】空・三昧相應法と定覺意・等定との相應關係。

【二七】こは、無願・無相と俱生する聚中の定覺意と相應する法をいふ。

【二八】無願相應法と無相との相應關係。

相應せず——
因みに、以下の無願・無相相應法に關する文は、發智論及び婆沙論中の本論も共に次の進・猗・護覺意、等方便・等念との相應關係——

三昧とに非ざるものなりや。答へて曰く、喜覺意と相應する空三昧と、諸の空三昧と相應せざる喜覺意と相應する法と、是れを喜覺意と相應するも空三昧とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが空三昧と喜覺意とに相應するものなりや。答へて曰く、^{一八三}空三昧と^{一八四}喜覺意とを除く、諸餘の空三昧と喜覺意とに相應する法、是れを空三昧と喜覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが空三昧と相應するに非ず喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、空三昧と相應せざる喜覺意と、喜覺意と相應せざる空三昧と、及び^{一八五}餘の心、心法と色と無爲と心不相應行と、是れを空三昧と相應するに非ず喜覺意とにも非ざるものと謂ふなり。

等志につきても亦、是くの如し。

^{一八六}諸法にして空三昧と相應するものなれば、彼れは定覺意ともなりや。答へて曰く、是くの如し。設し諸法にして空三昧と相應するものなれば、彼れは定覺意ともなり。頗し諸法にして定覺意と相應するも、彼れは空三昧とに非ざるものありや。答へて曰く、有り、^{一八七}空三昧に攝せざる定覺意と相應する法なり。

等定につきても亦、是くの如し。

^{一八八}諸法にして無願と相應するものなれば、彼れは無相と相應するに非ず。
^{一八九}諸法にして無願と相應するものなれば、彼れは未知根と相應するや。答へて曰く、或は無願と相應するも未知根とに非ざるものあり。(一)云何んが無願と相應するも未知根とに非ざるものなりや。

答へて曰く、未知根に攝せざる無願と相應する法、是れを無願と相應するも未知根とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが未知根と相應するも無願とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝する無願と、諸の無願に攝せず相應もせずして未知根と相應する法と、是れを未知根と相應するも無願とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが無願と未知根とに相應するものなりや。答へて曰く、

の一部分に相當する段にして、三三昧と相應する法が三昧・三無漏根・七覺意・八道種と相應するや否やの關係を明にせんとするを其の課題とするなり。

【七】空三昧相應法と無願・無想との相應關係。
相應せず。

【七】空三昧相應法と三無漏根との相應關係。

【七】こは、此の聚中の八根と及び彼れと相應する諸の非根の心所法となり。

【七】こは、已知根・無知根に攝する無願・無相と俱生する聚中の心所法と有漏の心所法とをいふ。

【七】空三昧相應法と念覺意との相應關係。

【七】發智論はこれを「二と相應する法」とのみ言へり。因みに、こは、即ち、空と俱生する聚中より空及び念を除く諸餘の心所法をいふなり。

【七】茲に、餘の心所法とは、一切の有漏の心所法をいふ。

【七】空三昧相應法と擇法・精進・禱・護覺意及び等見・等方便・等念との相應關係。

【七】空三昧相應法と喜覺意・等志との相應關係。

【七】こは、未至定と中間定と後二禪と下三無色との地中の空と相應する法をいふ。

ものなりや。答へて曰く、^{一七五}未知根に攝する空三昧と相應する法、是れを空三昧と未知根とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが空三昧と相應するに非ず未知根とにも非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝せざる空三昧と、^{一七六}諸餘の空三昧と未知根とに攝せず相應もせざる心・心法と、色と、無爲と心不相應行と、是れを空三昧と相應するに非ず未知根とにも非ざるものと謂ふなり。

^{一七七}已知根と未知根につきても亦、是くの如し。

諸法にして空三昧と相應するものなれば、彼れは念覺意ともなりや、答へて曰く、或は空三昧と相應するも念覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが空三昧と相應するも念覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、空三昧と相應する念覺意、是れを空三昧と相應するも念覺意とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが念覺意と相應するも空三昧とに非ざるものなりや。答へて曰く、空三昧と諸餘の空三昧と相應せざる念覺意と相應する法と、是れを念覺意と相應するも空三昧とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが空三昧と念覺意とに相應するものなりや。答へて曰く、^{一七八}念覺意を除く諸餘の空三昧と相應する法、是れを空三昧と念覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが空三昧と相應するに非ず念覺意とにも非ざるものなりや。答へて曰く、空三昧と相應せざる念覺意と、及び^{一七九}餘の心心法と、色と、無爲と、心不相應行と、是れを空三昧と相應するに非ず念覺意とにも非ざるものと謂ふなり。

^{一八〇}擇法・精進・猗・護覺意と等見と等方便と等念とにつきても亦、是くの如し。

諸法にして空三昧と相應するものなれば、彼れは喜覺意ともなりや。答へて曰く、或は空三昧と相應するも喜覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが空三昧と相應するも喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰く、空三昧と相應する喜覺意と、^{一八一}諸の喜覺意と相應せずして空三昧と相應する法と、是れを空三昧と相應するも喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが喜覺意と相應するも空

【一五】習智相應法と盡・道智との相應關係。

【一六】こは、苦忍・苦智・習忍・道忍・道智と俱生する聚中の無願と相應する法をいふなり。

【一七】こは、苦忍・苦智・習忍・道忍・道智と俱生する聚中の無願をいふなり。

【一八】こは、空・無相と俱生する聚中の心心所法と有漏の心心所法とをいふなり。

【一九】習智相應法と三無漏根・七覺意・八道種との相應關係。

【二〇】盡智相應法と道智及び三三昧との相應關係。

【二一】こは、盡忍と俱生する無相と相應する法をいふ。

【二二】餘の心心法とは、空・無願と俱生する心心法と、一切有漏の心心法となり。

【二三】盡智相應法と三無漏根・七覺意・八道種との相應關係。

【二四】道智相應法と三三昧との相應關係。

【二五】こは、苦忍・苦智・習忍・習智・道忍と俱生する聚中の無願と相應する法をいふなり。

【二六】道智相應法と三無漏根・七覺意・八道種との相應關係。

【二七】本節は、頌文の「相應」

一六九 餘殘は法智の如し。

諸法にして道智と相應するものなれば、彼れは無願と相應するに非ず、無相とも非ず。

諸法にして道智と相應するものなれば、彼れは無願と相應するや。答へて曰く、或は道智と相應するも無願とに非ざるものあり。(一)云何んが道智と相應するも無願とに非ざるものなりや。答へて曰く、道智と相應する無願、是れを道智と相應するも無願とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが無願と相應するも道智とに非ざるものなりや。答へて曰く、道智と、諸の道智と相應せざる無願と相應する法と、是れを無願と相應するも道智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが道智と無願とに相應するものなりや。答へて曰く、無願を除く諸の道智と相應する法、是れを道智と無願とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが道智と相應するに非ず無願とも非ざるものなりや。答へて曰く、道智と相應せざる無願と及び餘の心・心法と色と無爲と心不相應行と、是れを道智と相應するに非ず無願とも非ざるものと謂ふなり。

一七〇 餘殘は法智の如し。

第九節 三三昧相應法と三三昧乃至八道種の相應關係

一七一 諸法にして空三昧と相應するものなれば、彼れは無願と無相とに相應するに非ず。

諸法にして空三昧と相應するものなれば、彼れは未知根と相應するや。答へて曰く、或は空三昧と相應するも未知根とに非ざるものあり。(一)云何んが空三昧と相應するも未知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝せざる空三昧と相應する法、是れを空三昧と相應するも未知根とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが未知根と相應するも空三昧とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝する空三昧と、諸の空三昧に攝せず相應もせずして未知根と相應する法と、是れを未知根と相應するも空三昧とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが空三昧と未知根とに相應する

【一六九】こは、八無漏根と彼れと相應する非根の心所法とをいふなり。

【一七〇】等智相應法と苦智乃至等定との相應關係。

相應せず

【一七一】下は大正本に上とあるも、宋・元・宮本によりて下と改む。

【一七二】苦智相應法と習・盡・道智との相應關係。

【一七三】以下苦智相應法と三三昧との相應關係。

【一七四】こは、無願と俱生する苦智と相應する法をいふなり。

【一七五】こは、苦忍と俱生する空と相應する法をいふなり。

【一七六】大正本には、空の上に相應の二字あるも、妥當ならざるを以つて除却せり。

因みに、發智論は茲の文を單に「二と相應する法」とのみ言へり。

【一七七】苦智と相應せざる空三昧とは、苦忍と俱生する空三昧をいひ、空三昧と相應せざる苦智とは無願と俱生する苦智をいふなり。

【一七八】こは、苦智と相應せざる無願と俱生する聚中の心心所法と、無相と俱生する聚中の心心所法と有漏の心心所法とをいふ。

【一七九】苦智相應法と三無漏根・七覺意・八道種の相應關係

諸法にして習智と相應するものなれば、彼れは無願と相應するや。答へて曰く、或は習智と相應するも無願とに非ざるものあり。(一)云何んが習智と相應するも無願とに非ざるものなりや。答へて曰く、習智と相應する無願、是れを習智と相應するも無願とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが無願と相應するも習智とに非ざるものなりや。答へて曰く、習智と、諸餘の習智と相應せざる無願と相應する法と、是れを無願と相應するも習智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが習智と無願とに相應するものなりや。答へて曰く、無願を除く諸餘の習智と相應する法、是れを習智と無願とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが習智と相應するに非ず無願とにも非ざるものなりや。答へて曰く、^{一六三}習智と相應せざる無願と及び餘の心心法と色と無爲と心不相應行と、是れを習智と相應するに非ず無願とにも非ざるものと謂ふなり。

餘は法智の如し。

諸法にして盡智と相應するものなれば、彼れは道智と空と無願とに相應するに非ず。

諸法にして盡智と相應するものなれば、彼れは無相と相應するや。答へて曰く、或は盡智と相應するも無相とに非ざるものあり。(一)云何んが盡智と相應するも無相とに非ざるものなりや。答へて曰く、盡智と相應する無相、是れを盡智と相應するも無相とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが無相と相應するも盡智とに非ざるものなりや。答へて曰く、盡智と、^{一六六}諸餘の盡智と相應せざる無相と相應する法と、是れを無相と相應するも盡智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが盡智と無相とに相應するものなりや。答へて曰く、無相を除く諸餘の盡智と相應する法、是れを盡智と無相とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが盡智と相應するに非ず無相とにも非ざるものなりや。答へて曰く、盡智と相應せざる無相と、及び餘の心・心法と、色と、無爲と、心不相應行と、是れを盡智と相應するに非ず無相とにも非ざるものと謂ふなり。

他人人心智に攝せざる道智と俱生する聚の心心所法をいふなり。

【一四】知他人人心智相應法と道智・擇法覺意・等見との相應關係

【一五】知他人人心智相應法と苦・盡智との相應關係

【一六】知他人人心智相應法と三昧との相應關係

【一七】こは、有漏の知他人人心智と相應する法なり。

【一八】大本には、無願の上に相應の二字あるも法相上妥當ならず、故にこれを除けり。因みに、茲の文は發智論には單に「二と相應す法なり」とのみあり。

而して、こは無漏の知他人人心智と俱生する聚中より知他人人心智と無願とを除く諸餘の心心所法をいひ、即ち、八大地法と十大善地法と等と何と心となり。

【一九】知他人人心智相應法と念・精進・喜・捨・定・護覺意及び等志・等方便・等念・等定との相應關係

【二〇】知他人人心智相應法と三無漏根との相應關係

【二一】こは、即ち、無知根所攝の知他人人心智と相應する法及び有漏の知他人人心智と相應する心心所法なり。

心智と相應するにも非ず已知根にも非ざるものなりや。答へて曰く、已知根に攝せざる知他人心智と、諸餘の知他人心智と已知根とに攝せず相應もせざる心・心法と色と無爲と心不相應行と、是れを知他人心智と相應するにも非ず已知根にも非ざるものと謂ふなり。

無知根につきても亦、是くの如し。

諸法にして等智と相應するものなれば、彼れは^{一五〇}下と相應せず。

諸法にして苦智と相應するものなれば、彼れは習智・盡智・道智と相應するに非ず、無相にも非ず

諸法にして苦智と相應するものなれば、彼れは空三昧と相應するや。答へて曰く、或は苦智と相應するも空三昧とに非ざるものあり。(一)云何んが苦智と相應するも空三昧とに非ざるものなりや。

答へて曰く、苦智と相應する空三昧と、^{一五一}諸餘の空三昧と相應せずして苦智と相應する法と、是れ

を苦智と相應するも空三昧とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが空三昧と相應するも苦智とに

非ざるものなりや。答へて曰く、空三昧と相應する苦智と、^{一五二}諸の苦智と相應せざる空三昧と相應

する法と、是れを空三昧と相應するも苦智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが苦智と空三昧

とに相應するものなりや。答へて曰く、苦智と^{一五三}空三昧とを除く諸餘の苦智と空三昧とに相應する

法、是れを苦智と空三昧とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが苦智と相應するにも非ず空三

昧とにも非ざるものなりや。答へて曰く、^{一五六}苦智と相應せざる空三昧と、空三昧と相應せざる苦智

と、及び^{一五七}餘の心・心法と色と無爲と心不相應行と、是れを苦智と相應するに非ず空三昧とにも非ざ

るものと謂ふなり。

無願につきても亦、是くの如し。

餘殘は法智の如し。

諸法にして習智と相應するものなれば、彼れは盡智・道智と相應するに非ず、^{一六〇}空・無相とにも非ず。

と俱生する法智をいふなり。

【二元】こは、無漏忍及び未知智と俱生する念覺意と相應する法をいふなり。

【三】「念覺意……相應法」は發智論に單に「二と相應する法」とのみあり、二と相應する法とは、即ち、法智と俱生する衆中の法智と及び念とを除く諸餘の心心所法にして、二と相應する法なり。

こは、法智と念覺意とに相應する八大地法と十大善地法と等と何と心とをいふなり。

【三】餘の心心法とは、有漏の心心所法をいふ。

【三】法智相應法と精進・猗・定・護覺意及び等方便・等念・等定との相應關係

【三】法智相應法と擇法覺意との相應關係

【三】こは、無漏忍・未知智と俱生する衆中の擇法覺意と相應する法をいふなり。

【三】茲に「法智覺る」の夾註あり。

【三】未知智相應法と知他人心智乃至等定との相應關係

【三】知他人心智相應法と等智との相應關係

【三】こは、此の二と相應する九大地法と十大善地法と等と何と心とをいふなり。

【三】「諸餘……心心法」とは、無漏忍と苦・習・盡智と及び知

ものなりや。答へて曰く、知他人心智と相應する無願と、諸の無願と相應せずして知他人心智と相應する法と、是れを知他人心智と相應するも無願とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが無願と相應するも知他人心智とに非ざるものなりや。答へて曰く、無願と相應する知他人心智と、諸の知他人心智と相應せずして無願と相應する法と、是れを無願と相應するも知他人心智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが知他人心智と無願とに相應するものなりや。答へて曰く、知他人心智と無願とを除く諸餘の知他人心智と無願とに相應する法、是れを知他人心智と無願とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが知他人心智と相應するにも非ず無願とに非ざるものと謂ふなり。

念覺意と精進・喜・猗・定・護覺意と等志と等方便と等念と等定とにつきても亦、是くの如し。

諸法にして知他人心智と相應するものなれば、彼れは未知根と相應するに非ず。

諸法にして知他人心智と相應するものなれば、彼れは已知根と相應するや。答へて曰く、或は知他人心智と相應するも已知根とに非ざるものあり。(一)云何んが知他人心智と相應するも已知根とに非ざるものなりや。答へて曰く、已知根に攝せざる知他人心智と相應する法、是れを知他人心智と相應するも已知根とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが已知根と相應するも知他人心智とに非ざるものなりや。答へて曰く、已知根に攝する知他人心智と、諸の知他人心智に攝せず相應もせずして已知根と相應する法と、是れを已知根と相應するも知他人心智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが知他人心智と已知根とに相應するものなりや。答へて曰く、已知根に攝する知他人心智と相應する法、是れを知他人心智と已知根とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが知他人

味とは、苦未知智及び苦忍と俱生する空三昧をいふ。

【二】空三昧と相應せざる法智とは、無願・無相と俱生する法智をいふなり。

【一九】こは、法智と相應せずして無願・無相と相應する衆と及び一切の有漏の心心所法とをいふなり。

【二〇】法智相應法と無願・無相・喜覺意・等志との相應關係

【二一】法智相應法と三無漏根との相應關係

【二二】こは、已知根・無知根に攝する法智と相應する法をいふなり。

【二三】こは、未知智及び無漏忍と俱生する衆中の未知根と相應する法をいふなり。

【二四】こは、未知根中の慧根を除く餘の八根と、及び彼れと相應する餘の非根の心心所法とをいふなり。

【二五】「諸餘……」心心所法とは、法智に攝せず、相應もせずして已知根・無知根と俱生する衆中の心心所法と、一切の有漏の心心所法とをいふなり。

【二六】餘の字は、大正本に無きも、三本・宮本・聖乙本に従つてこれを附加せり。

【二七】法智相應法と念覺意との相應關係

【二八】茲に法智とは、念覺意

一三三 精進・猗・定・護覺意と等方便と等念と等定とにつきても亦、是くの如し。

一三四 諸法にして法智と相應するものなれば彼れは擇法覺意ともなりや。答へて曰く、是くの如し、諸法にして法智と相應するものなれば、彼れは擇法覺意とも相應するなり。頗し擇法覺意と相應するも法智とに非ざるもの有りや。答へて曰く、有り。法智に攝せざる擇法覺意と相應する法なり。

一三五 未知智門につきても亦、是くの如し。

一三六 諸法にして知他人心智と相應するものなれば、彼れは等智ともなりや。答へて曰く、或は知他人心智と相應するも等智とに非ざるものあり。(一)云何んが知他人心智と相應するも等智とに非ざるものなりや。答へて曰く、等智に攝せざる知他人心智と相應する法、是れを知他人心智と相應するも等智とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが等智と相應するも知他人心智とに非ざるものなりや。答へて曰く、知他人心智に攝せざる等智と相應する法、是れを等智と相應するも知他人心智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが知他人心智と等智とに相應するものなりや。答へて曰く、知他人心智に攝する等智と相應する法、是れを知他人心智と等智とに相應するものと謂ふなり。

一三七 (四)云何んが知他人心智と相應するにも非ず等智とに非ざるものなりや。答へて曰く、知他人心智と、等智と、諸餘の知他人心智と等智とに攝せず相應もせざる心、心法と色と無爲と心不相應行と、是れを知他人心智と相應するにも非ず等智とに非ざるものと謂ふなり。

一三八 道智と擇法覺意と等見とにつきても亦、是くの如し。

一三九 諸法にして知他人心智と相應するものなれば、彼れは苦智・習智・盡智と相應するに非ず。

一四〇 諸法にして知他人心智と相應するものなれば、彼れは、空三昧、無相三昧と相應するに非ず。

諸法にして知他人心智と相應するものなれば彼れは無願三昧ともなりや。答へて曰く、或は知他人心智と相應するも無願とに非ざるものあり。(一)云何んが知他人心智と相應するも無願とに非ざる

【二〇】大正本には、心の上に「及・餘」の二字あるも意味通て之れを除けり、反つて誤なるを以つて之れを除けり。

【二一】法智相應法と空三昧との相應關係。

法智は三三昧と相應し空三昧は苦法智・苦未知智の二智及び苦法智忍・苦未知智忍の二忍と相應するが故に大の四句あるなり。

【二二】法智と相應する空が空と相應せざるは自性は自性と相應せざるが故なり。

【二三】諸餘の云云とは、無願無相と俱生する法智と相應する法なり。

【二四】こは、苦未知智及び苦忍と俱生する空三昧と相應する法をいふなり。

【二五】大正本には、空の上に相應の二字あるも法相上妥當ならず、故にこれを除けり。

因みに、發智論には茲の文は單に「二と相應する法なり」とのみあり。

【二六】法智と空三昧に相應する法とは、法智と空とに相應する八大地法(十大地法より慧と定を除くもの)と十善地法と尋と伺と心とをいふなり。

【二七】法智と相應せざる空三

諸法にして法智と相應するものなれば、彼れは未知根ともなりや。答へて曰く、或は法智と相應するも未知根とに非ざるものあり。(一)云何んが法智と相應するも未知根とに非ざるものなりや。

答へて曰く、未知根に攝せざる法智と相應する法、是れを法智と相應するも未知根とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが未知根と相應するも法智とに非ざるものなりや。答へて曰く、未知根と相應する法智と、諸餘の法智に攝せず相應もせずして未知根と相應する法と、是れを未知根と

相應するも法智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが法智と未知根とに相應するものなりや。答へて曰く、未知根に攝する法智と相應する法、是れを法智と未知根とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが法智と相應するにも非ず未知根とも非ざるものなりや。答へて曰く、未知根に攝せざる法智と、諸餘の法智と未知根とに攝せず相應もせざる心・心法と、色と、無爲と、心不

相應行と、是れを法智と相應するにも非ず未知根とも非ざるものと謂ふなり。
 已知根と未知根とにつきても亦、是くの如し。

諸法にして法智と相應するものなれば、彼れは念覺意ともなりや。答へて曰く、或は法智と相應するも念覺意とに非ざるものあり。(一)云何んが法智と相應するも念覺意とに非ざるものなりや。

答へて曰く、法智と相應する念覺意、是れを法智と相應するも念覺意とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが念覺意と相應するも法智とに非ざるものなりや。答へて曰く、法智と、諸餘の法智と相應せずして念覺意と相應する法と、是れを念覺意と相應するも法智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが法智と念覺意とに相應するものなりや。答へて曰く、念覺意を除く諸餘の法智と相應する法、是れを法智と念覺意とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが法智と相應するにも非ず念覺意とも非ざるものなりや。答へて曰く、法智と相應せざる念覺意、及び餘の心心法と色と無爲と心不相應行と、是れを法智と相應するにも非ず念覺意とも非ざるものと謂ふなり。

するや否やを一一論究するを其の目的とす。
 而して、此の論究をなす所以を次の如く、婆沙論は説明せり。
 (一)、心心所法は一一に生じ相應する義無しとする異執を破して心心所法は俱生し相應することを顯はさんが爲め、
 (二)、心心所法は前後相應すとの義を破するため、
 (三)、自性は自性と相應すとの義を破せんが爲めなりと。
 (婆沙百九卷、毘婆沙十二、頁二二一参照)。
 【〇五】法智相應法と未知智【乃至道智】との相應關係。
 【〇六】こは、苦・習・滅法智と及び知他人心智に攝せざる所の道法智とに相應する法をいふなり。
 【〇七】こは、未知智と等智とに攝する所の知他人心智と相應する法なり。
 【〇八】こは、これと相應する九大地法(慧を除くなり)と十大善地法と、尋と伺と心となり。
 【〇九】「諸餘の……心心所法」こは、苦・習・盡未知智と知他人心智に攝せざる所の道智とに相應する衆と、無漏忍と相應する衆と知他人心智と相應せざる一切の有漏の心心所法とをいふなり。

人心智と相應する法、是れを知他人人心智と相應するも法智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが法智と知他人人心智とに相應するものなりや。答へて曰く、法智に攝する知他人人心智と相應する法、是れを法智と知他人人心智とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが法智と相應するにも非ず知他人人心智とに非ざるものなりや。答へて曰く、法智と、知他人人心智と、諸餘の法智と知他人人心智とに攝せず相應もせざる。心・心所法と、色と無爲と、心不相應行と、是れを法智と相應するにも非ず知他人人心智とに非ざるものと謂ふなり。

苦智と習・盡・道智と等見とにつきても亦、是くの如し。

諸法にして法智と相應するものなれば、彼れは等智と相應するに非ず。

二 諸法にして法智と相應するものなれば、彼れは空三昧ともなりや。答へて曰く、或は法智と相應するも空三昧とに非ざるものあり。(一)云何んが法智と相應するも空三昧とに非ざるものなりや。答へて曰く、法智と相應する空三昧と、諸餘の空三昧と相應せずして法智と相應する法と、是れを法智と相應するも空三昧とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが空三昧と相應するも法智とに非ざるものなりや。答へて曰く、空三昧と相應する法智と、諸餘の法智と相應せずして空三昧と相應する法と、是れを空三昧と相應するも法智とに非ざるものと謂ふなり。(三)云何んが法智と空三昧とに相應するものなりや。答へて曰く、法智と空三昧とを除く、諸餘の法智と空三昧とに相應する法、是れを法智と空三昧とに相應するものと謂ふなり。(四)云何んが法智と相應するにも非ず空三昧とも非ざるものなりや。答へて曰く、法智と相應せざる空三昧と、空三昧と相應せざる法智と及び法智と空三昧とに攝せず相應もせざる。餘の心・心所念法と、色と無爲と心不相應行と、是れを法智と相應するにも非ず、空三昧とも非ざるものと謂ふなり。

無願と無相と喜覺意と等志とにつきても亦、是くの如し。

漏の九根を、無知根は無學道位の無漏の九根を自體となすなり。

【七】堅信・堅法人が未知根を現前する時、現前する智に就きて。

覺意・道種につきても同じ。

【八】茲に忍とは、發智論に八忍とありて、即ち、四法忍四未知忍との八忍をいふなり。

【九】信解脫・見到・身證が已知根を現前する時、現前する智に就きて。

覺意・道種を現前する時に就きても亦、同じ。

【一〇】慧解脫・俱解脫が無知根を現前する時、現前する智に就きて。

覺意・道種を現前するときに就きても亦、同じ。

【一一】七は、大正本に八とあるも、聖本・聖乙本に従つて七と訂正す。何となれば、等見は次に別に論ぜられ居り、又、發智論も亦、七に作ればなり。

【一二】茲に等見を別に論ぜしは、無學の等見は盡智・無生智を攝せざるが故なり。

【一三】茲に「三根覺る」の夾註あり。

【一四】本節は、頌文の「相應」に相當する段にして、八智と相應する法は八智・三三昧・三無漏根・七覺意・八道種と相應

智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。習智と未生智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。盡智と法智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。盡智と未知智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。道智と法智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。道智と法智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かが知他人人心智かがあれば三なり。道智と未知智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かが知他人人心智かが無ければ三なり。若し盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かが知他人人心智かが無ければ三なり。若し盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かが知他人人心智かが無ければ三なり。

七覺意と 七道種とにつきても亦、是くの如し。

等見を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は三なり。苦智と法智との二か、苦智と未知智との二か、習智と法智との二か、習智と未知智との二か、盡智と法智との二か、盡智と未知智との二か、道智と法智とにして知他人人心智が無ければ二なるも、若し知他人人心智があれば三なり。道智と未知智とにして知他人人心智が無ければ二なるも、若し知他人人心智があれば三なり。俱解説につきても亦、是くの如きなり。

第八節 八智相應法と八智乃至八道種との相應關係

諸法にして法智と相應するものなれば、彼れは未知智とに非ず。

諸法にして法智と相應するもの彼れは知他人人心智ともなりや。答へて曰く、或は法智と相應するも知他人人心智とに非ざるものあり。

(一)云何んが法智と相應するも知他人人心智とに非ざるものなりや。答へて曰く、知他人人心智に攝せざる法智と相應する法、是れを法智と相應するも知他人人心智とに非ざるものと謂ふなり。(二)云何んが知他人人心智と相應するも法智とに非ざるものなりや。答へて曰く、法智に攝せざる知他

に就きて。
【九二】幾は、大正本に差とあるも、幾の誤植なり。

【九三】慧解脱・俱解脱が三昧を現前する時、現前する智に就きて。

【九四】茲に空三昧の時のみは二といひて、無願・無相三昧のときは二或は三といふは、空三昧と盡智無生智とは其の行相を異にし、且つ前者は其の性なるに後者は智性なれば空三昧と盡智・無生智とが相應すること無き爲めなり。

【九五】茲に「三三昧竟る」の夾註あり。

【九六】本節は、頌文の「根と覺意と道」とに相當するものにして、七聖者が所應に隨つて、三無漏根を現在前する時、現在前する智は十智中の幾智なりやを分別すると同時に又、所應に隨つ七覺意八道種を現在前する時、現在前する智は十智中の幾智なりやを分別する段なり。

因みに、三無漏根とは、未知根(Cāṭṭhamāṅgīyāraṇī 未知當知)。

已知根(Cakkhā)。

無知根(Chāṭṭhāraṇī 具知)。

の三根をいふ。就中未知根は見道位の無漏の信・勸・念・定・慧・喜・樂・捨・意の九根を自體となし、已知根は修道位の無

幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は三なり。盡智と法智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。盡智と未知智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。

俱解脱につきても亦、是くの如し。

第七節 七聖者が無漏根・覺意・道種を現前する時、現前する智の數に就きて

九七 堅信人は未知根を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は無なり。苦智と法智との二か、苦智と未知智との二か、習智と法智との二か、習智と未知智との二か、盡智と法智との二か、盡智と未知智との二か、道智と法智との二か、忍のときの無かなり。

七覺意と八道種とにつきても亦、是くの如し。

堅法につきても亦、是くの如きなり。

九八 信解脱人は已知根を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は三なり。苦智と法智との二か、苦智と未知智との二か、習智と法智との二か、習智と未知智との二か、盡智と法智との二か、盡智と未知智との二か、道智と法智とにして知他人心智無ければ二なるも、若し知他人心智あれば三なり、道智と未知智とにして知他人心智無ければ二なるも、若し知他人心智あれば三なり。

七覺意と八道種とにつきても亦、是くの如し。

見到と身證とにつきても亦、是くの如きなり。

一〇 慧解脱人は無知根を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二、或は三なり。苦智と法智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。苦智と未知智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。習智と法

【八一】 茲に「無相」の割註あり。

【八二】 二は大正本に三とあるも、法相上正しからず、何となれば無願によりて入正性離生せしものは過去に空三昧を成就することなければなり。

故に今は三本・宮本・聖乙本に従つて二と訂正す。

【八三】 茲に「無願」の夾註あり。

【八四】 茲に「無願」の夾註あり。

【八五】 信解脱乃至俱解脱の三世に於ける三昧の成就關係。【八六】 本節は、頌文の「三昧」の一部分に相當するものにして、七聖者が、三三昧を現在前する時、現在前する智は十智中の幾智なりやを分別せんとする段なり。

【八七】 堅信・堅法人が三昧を現前する時、現在前する智の十智分別。

【八八】 忍は、發智論に二忍とあり、即ち、善法智忍と苦未知智忍との二忍を指す。

【八九】 忍は、發智論には六忍とあり、即ち、苦・習・智・道の法、未知忍の六忍をいふなり。

【九〇】 忍は、發智論に二忍とあり、即ち、盡法忍・盡未知忍の二忍をいふ。

【九一】 信解脱・見到・身證が三昧を現前する時、現前する智

法智との二か習智と未知智との二か、道智と法智との二か、忍九のときの無かなり。無相三昧を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は無なり。盡智と法智との二か、盡智と未知智との二か、忍九のときの無かなり。

堅法人九につきても亦、是くの如し。

信解脫人は空三昧を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、二なり。苦智と法智との二か、苦智と未知智との二かなり。無願三昧を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二、或は三なり。苦智と法智との二か、苦智と未知智との二か、習智と法智との二か、習智と未知智との二か、道智と法智とにして、知他人人心智無ければ二なるも、若し知他人人心智あれば三なり。道智と未知智とにして知他人人心智無ければ二なるも、若し知他人人心智あれば三なり。無相三昧を現在前する時、幾く智を現在前するや。答へて曰く、一なり。盡智と法智との二か、盡智と未知智の二かなり。

見到と身證につきても亦、是くの如し。

慧解脫人は空三昧を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、二なり。苦智と法智との二か、苦智と未知智との二かなり。無願三昧を現在前する時、幾く智を現在前するや。答へて曰く、或は二、或は三なり。苦智と法智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。苦智と未知智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。習智と法智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。習智と未知智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かがあれば三なり。道智と法智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かが無生智か知他人人心智かがあれば三なり。道智と未知智とにして、盡智か無生智かが無く知他人人心智も無ければ二なるも、若し盡智か無生智か知他人人心智かがあれば三なり。無相三昧を現在前する時、

いふ。

【六八】 茲に「空也」の割註あり。

【六九】 茲に「益三無願」の割註あり。

【七〇】 茲に「空也」の割註あり。

【七一】 茲に「無願」の割註あり。

【七二】 茲に「同上」の割註あり。

【七三】 茲に「益三無相」の割註あり。

【七四】 茲に「無相」の割註あり。

【七五】 茲に「無願」の割註あり。

【七六】 茲に「無願」の割註あり。

【七七】 茲に「空・無願」の割註あり。

【七八】 茲に「無願也」の割註あり。

【七九】 一は大正本に二とあるも、法相上正しからず、故に三本・宮本・聖乙本に依りて一と訂正せり。

因みに、茲の下に「空・無願」の夾註あるも、こは宮本・聖本、聖乙本の如く「無願」となすべきなり。

【八〇】 茲に「無相」の割註あり。

【八一】 茲に「無願無相」の割註あり。

六四

堅信人は此の三三昧に於て過去の幾くと未來の幾くと現在の幾くとを成就するや。答へて曰く、若し空三昧に依りて越次取證せしものなれば、彼れは苦法忍のとき過去のは有ること無く、未來は

二、現在は一なり。苦法智のときは、過去は一、未來は二、現在は一なり。苦未知忍と

苦未知智と習法忍のときは、過去は一、未來は二、現在は一なり。習法智のときは過去、未來

は二、現在は一なり。習未知忍と習未知智とのときは、過去、未來は二にして現在は一なり。盡

法忍のときは過去は二、未來は三、現在は一なり。盡法智のときは過去、未來は三、現在は一な

り。盡未知忍と盡未知智と道法忍と道法智とのときは、過去、未來は三、現在は一なり。

若し無願三昧に依りて越次取證するものなれば、彼れは苦法忍のとき過去は有ること無く、未來

は二、現在は一なり。苦法智のとき、過去は一、未來は二、現在は一なり。苦未知忍と苦未知智と

習法忍と習法智と習未知忍と習未知智とのときは、過去は一未來は二、現在は一なり。盡法忍

のときは過去は一、未來は三、現在は一なり。盡法智のときは、過去は二、未來は三、現在は

一なり。盡未知忍と盡未知智と道法忍と道法智とのときは、過去は二、未來は三、現在

は一なり。

堅法人につきても亦、是くの如し。

信解脫と見到と身證と慧解脫と俱解脫とは、一切未來の三三昧を成就し、若し己に盡きて失せざれば

則ち過去のを成就し、諸の現在前するものなれば則ち現在のを成就す。

第六節 七聖者が三三昧を現在前する時、現在前する智の十智分別

堅信人は空三昧を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は無なり。苦智と

法智との二か、苦智と未知智との二か、忍のときの無かなり。無願三昧を現在前する時、幾智を現

在前するや。答へて曰く、或は二或は無なり。苦智と法智との二か苦智と未知智との二か、習智と

應する等持、無相とは滅・靜・妙・離の四行相と相應する等持なり。

而も、此の論究ある所以は、一三三昧の體は是れ一なるも、義によりて三種と説く」と説く異執を破して三三昧には各自性あることを顯はさんが爲めなりとなり。

〔婆沙百九卷、毘曇部十二、頁二二四參照〕

〔六〇〕堅信・堅法と三三昧との成就關係。

〔六一〕二とは、空と無願にして此の二が苦法智忍の時、雙び修するが故なり。

〔六二〕信解脫乃至俱解脫と三三昧との成就關係。

〔六三〕本節は、頌文の「三昧」の一部分にして、七聖者は三世に於ける三三昧の幾くを成就するやを明にするを其の課題とするなり。

〔六四〕堅信・堅法人の三世に於ける三三昧の成就關係。

〔六五〕越次取證とは入正性離生のこと。

因みに、見行者は空によりて正性離生に入り、愛行者は無願に依りて正性離生に入る、精しくは婆沙百九卷（毘曇部十二、頁二二六）參照。

〔六六〕二とは、空と無願との三三昧をいふ。

〔六七〕一とは、一の空三昧を

して盡智か無生智かが無く知他人人心智も無ければ二なるも、若し盡智か無生智か知他人人心智かゞあれば三なり。

知他人人心智を現在前する時は、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或三なり。知他人人心智にして道智無ければ^{五九}二なるも、若し道智あれば^{五七}三なり。

等智を現在前する時、幾智を現在前するや、答へて曰く、或は一或は二なり。等智にして知他人人心智無ければ一なるも、若し知他人人心智あれば二なり。

苦智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は三なり、苦智と法智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かゞあれば三なり。苦智と未知智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かゞあれば三なり、習智と盡智とにつきても亦是くの如し。道智を現在前する時、幾く智を現在前するや。答へて曰く、或は二、或は三なり。道智と法智とにして盡智か無生智かが無く知他人人心智も無ければ二なるも、若し盡智か無生智か知他人人心智かゞあれば三なり。道智と未知智とにして盡智か無生智かが無く知他人人心智も無ければ二なるも、若し盡智か無生智か知他人人心智かゞあれば三なり。

俱解脱につきても亦、是くの如し。^{五八}

【五九】 第四節 七聖者の三昧に於ける成就關係に就きて

【六〇】 堅信人は此の三三昧に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は二或は三なり。

盡法忍が未だ生ぜざれば^{六一}二を成就し一は成就せず、盡法忍が生ずれば一切を成就す。

堅法人につきても亦、是くの如し。^{六二}

信解脱と見到と身證と慧解脱と俱解脱とは一切を成就す。

【六一】 第五節 七聖者の三世の三三昧の成就關係に就きて

盡智との三か、或は法智と苦智と、無生智との三かなり。

因みに、對治の故に法智と名行相の故に苦智と名け、所作已辨の故に盡智と名け、見・修・無學道の因圓かなるが故に無生智と名くるなり。

【五七】 二とは、知他人人心智と等智となり。

【五八】 茲に「八智竟る」の夾註あり。

【五九】 三とは、知他人人心智と道智と法智との三か、知他人人心智と道智と類智との三かなり。

【六〇】 本節は、頌文の「三昧」の一部分にして、即ち、七聖者が空(Samvatta)無願(Aparāhiṅka)無相(Animitta)の三三昧の幾くを成就するやを明す段なり。

因みに、空とは、空と非我の二行相と相應する等持にして、無願とは苦・無常・因・集・生・緣・道・如・行・出の十行相と相

知他人心智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は三なり。知他人心智に道智無きものなれば^{五二}二なり、若し道智あれば^{五三}三なり。

等智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は一或は二なり。等智にして知他人心智無ければ一、若し知他人心智あれば二なり。

苦智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、二なり。苦智と法智との二か、苦智と未知智との二かなり。習智と盡智とにつきても亦、是くの如し。道智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は三なり。道智と法智とにして知他人心智無ければ二なるも、若し知他人心智あれば^{五三}三なり。道智と未知智とにして知他人心智無ければ二なるも、若し知他人心智あれば三なり。

見到と身證とにつきても亦、是くの如し。

慧解脱人は法智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は三なり。法智と苦智とにして盡智と無生智と無ければ二なるも、若し盡智か無生智かゞあれば^{五五}三なり。法智と習智とにして盡智と無生智が無ければ二なるも、若し盡智か無生智かゞあれば三なり。法智と盡智とにして盡智と無生智とが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かゞあれば三なり。法智と道智とにして、盡智と無生智と無く、知他人心智も無ければ二なるも、若し盡智か無生智か知他人心智かゞあれば三あり。

未知智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は三なり。未知智と苦智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かゞあれば三なり。未知智と習智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かゞあれば三なり。未知智と盡智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かゞあれば三なり。未知智と道智とにして盡智か無生智かが無ければ二なるも、若し盡智か無生智かゞあれば三なり。未知智と道智とに

り。

〔波沙百九卷、毘曇部十二、頁二一九参照。〕

〔七〕 堅信・堅法人が現在前する智の十智分別。

〔八〕 茲に法智は對治の故に法智と名け、行相の故に苦智と名けしなり。

〔九〕 信解脱・見到・身證の現前する智の十智分別。

〔一〇〕 知他人心智には有漏と無漏とあり、而して無漏の知他人心智は道智の所攝なるが故に今は此の場合を取りて三といへるなり。即ち、對治の故に法智といひ、行相の故に道智といひ、加行の故に知他人心智といへるなり。

〔一一〕 二とは、知他人心智と等智との二なり、發智論はこれを明記せり。

因みに、こは自性の故に等智といひ、加行の故に知他人心智といへるなり。

〔一二〕 三とは、知他人心智と道智と法智との三か、或は知他人心智と道智と未知智との三かなり。

因みに、發智論にはこれを明記す。

〔一三〕 三とは、道智と法智と知他人心智となり。

〔一四〕 慧解脱・俱解脱の現前する智の十智分別。

〔一五〕 三とは、法智と苦智と

を成就し、諸の已に盡きて失せざるものなれば、則ち過去のを成就し、諸の現在前するものなれば、則ち現在のを成就す。

見到につきて亦、是くの如し。

身證と慧解脱と俱解脱とは、盡く未來のを成就し、若し已に盡きて失せざるときは則ち過去のを成就し、諸の現在前するものなれば、則ち現在のを成就す。

第三節 七聖者が八智の隨一を現在前する時、其の智の十智分別

堅信人は法智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、二なり、法智と苦智との二か、法智と習智との二か、法智と盡智との二か、法智と道智との二かなり。

未知智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、二なり。未知智と苦智との二か、未知智と習智との二か、未知智と盡智との二かなり。

苦智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、二なり、苦智と法智との二か、苦智と未知智との二かなり。習智と盡智につきて亦、是くの如し。道智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、二にして、道智と法智との二なり。

堅法につきて亦、是くの如し。

信解脱人は法智を現在前する時、幾智を現在前するや。答へて曰く、或は二或は三なり。法智と苦智との二か、法智と習智との二か、法智と盡智との二か、法智と道智にして知他人心智無きものとの二か、知他人心智あるものとの三かなり。

未知智を現在前する時、幾智を現在前するや、答へて曰く、或は二或は三なり。未知智と苦智との二か、未知智と習智との二か、未知智と盡智との二か、未知智と道智にして知他人心智無きものとの二か、知他人心智あるものとの三かなり。

根と退との三縁によりて捨せるものは成就せず、故に「已に滅して失せざるもの」といへるなり。

【四】身證・慧解脱・俱解脱の三世の八智に於ける成就關係。

【五】茲に「三世竟る」の夾註あり。

【四六】本節は、頌文の「人智」の一部分にして、七聖者が八智の隨一を現在前するとき、其の智を自性・行相・對治・加行等の諸方面より觀察して、それが十智中の幾智を現在前せしことになるやを明にするを其の課題とす。

而して、此の論究を作す所以を婆沙論は次の如く解せり、(一)、「諸智は一に現在前す可しと雖も二有ることを得ず」との異執を破して、一或は二或は三種なるを得ること

を顯はさんが爲め、(二)、「現觀に入る時は總じて四諦を觀じ四智頓に起る」との執を破して、現觀する時は各諦を別觀し二諦智すら俱起すること無きことを顯はさんが爲め、

(三)、「多識俱生し、多智並起す」との執を破して、一識のみ起り、智の體も亦、一のみ起ることを顯はさんが爲めな

知他人心智あれば、過去は四、未來は五、現在は二なり。習法忍のとき、知他人心智なければ過去、未來は四にして現在は無きなり、知他人心智あれば過去、未來は五にして現在は無きなり。習法智のとき、知他人心智なければ過去は四、未來は五、現在は二なり、知他人心智あれば過去は五、未來は六、現在は二なり。習未知忍のとき、知他人心智なければ過去、未來は五にして現在は無きなり、知他人心智あれば過去、未來は六にして現在は無きなり。習未知智のとき、知他人心智なければ過去、未來は五にして現在は二なり、知他人心智あれば過去、未來は六にして現在は二なり。盡法忍のとき、知他人心智なければ過去、未來は五にして、現在は無きなり、知他人心智あれば過去、未來は六にして、現在は無きなり。盡法智のとき、知他人心智なければ過去は五、未來は六にして、現在は二なり、知他人心智あれば過去は六、未來は七にして現在は二なり。盡未知忍のとき、知他人心智なければ過去、未來は六にして、現在は無きなり、知他人心智あれば過去、未來は七にして、現在は無きなり。盡未知智のとき、知他人心智なければ過去、未來は六にして、現在は二なり、知他人心智あれば過去、未來は七にして、現在は無きなり。道法忍のとき、知他人心智なければ過去、未來は六にして、現在は二なり、知他人心智あれば過去、未來は七にして、現在は無きなり。道法智のとき、知他人心智なければ過去は六、未來は七にして現在は二なり、知他人心智あれば過去は七、未來は八にして、現在は二なり。道未知忍のとき、知他人心智なければ過去、未來は七にして、現在は無きなり、知他人心智あれば過去、未來は八にして、現在は二なり。道未知智のとき、知他人心智あれば過去、未來は七にして、現在は無きなり、知他人心智あれば過去、未來は八にして、現在は無きなり。

堅法につきても亦、是くの如し。

信解説人は此の八智に於て過去の幾くと未來の幾くと現在の幾くとを成就するや。答へて曰く、知他人心智無きときは、未來は七を成就し、諸の已に滅して失せざるものなれば、則ち過去の智を成就し、諸の現在前するものなれば、則ち現在の智を成就す。知他人心智あるときは、未來の八

鈍の相違あるのみに依るものなれば、堅法人につきても亦、是くの如しといへるなり。

【三三】 信解説・見到の八智に於ける成就關係。

【三四】 身體・慧解脫・俱解脫の八智に於ける成就關係。

【三五】 茲に「成就竟る」の夾註あり。

【三七】 本節は、頌文の「人智」の一部分に相當する段にして、即ち、七人（聖者）が三世に於ける八智の幾くを成就せるやを明にせんとするものなり。

而も、此の論究ある所以は過去、未來は俱に實有に非ずと主張するもの異執を止めんが爲めなりとなり。（婆沙百九卷、毘婆沙十二、頁二一六參見）

【三〇】 堅信・堅法人の三世の八智に於ける成就關係。

【三一】 忍は智に非ざるが故に現在は智を成就せざるなり。

【三二】 三とは、法智と苦智と等智となり。

【三四】 二とは、法智と苦智とをいふ。此に知他人心智のなきは、見道中には知他人心智は現在前せざればなり。

【三五】 信解説見到の三世の八智に於ける成就關係に就きて。

【三六】 智の已に滅せるものに非ざれば、過去の智を成就することを得ず。又、得果と練

して知他人心智あれば四なり。苦未知忍のときも、知他人心智なければ三にして知他人心智あれば四なり。苦未知智のときは、知他人心智無ければ四にして知他人心智あれば五なり。習法忍のときも、知他人心智なければ四にして知他人心智あれば五なり。習智のときは知他人心智なければ五にして知他人心智あれば六なり。習未知忍と習未知智と盡法忍とのときも知他人心智なければ五にして知他人心智あれば六なり。盡法智のときは、知他人心智なければ六にして知他人心智あれば七なり。盡未知忍と盡未知智と道法忍とのときも知他人心智なければ六にして知他人心智あれば七なり。道法智のときは、知他人心智なければ七にして知他人心智あれば八なり。道未知忍のときも、知他人心智なければ七にして知他人心智あれば八なり。

三三 堅法につきても亦是くの如し。

三四 信解脫人は此の八智に於て幾くを成就し、幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は七或は八智を成就するものあり。知他人心智無ければ七にして、知他人心智あれば八なり。

三五 見到につきても亦、是くの如し。

身證と慧解脫と俱解脫とは一切を成就す。

三七 第二節 七聖者の三世の八智に於ける成就關係に就きて

三六 堅信人は此の八智に於て過去の幾くと未來の幾くと現在の幾くとを成就するや。答へて曰く、苦法忍のときは、知他人心智無ければ過去・未來は一にして、現在は無きなり、知他人心智あれば過去・未來は二にして現在は無きなり。苦法智のときは、知他人心智なければ過去は一、未來は二、現在は無きなり。知他人心智あれば過去は二、未來は四、現在は無きなり。苦未知忍のときは、知他人心智なければ過去・未來は三にして、現在は無きなり、知他人心智あれば過去は三、未來は四、現在は無きなり。苦未知智のときは、知他人心智無ければ過去は三、未來は四、現在は無きなり、知他人心智あれば過去は三、未來は四、現在は無きなり。

堅信 (śradhānāstī 隨信行)。
堅法 (ūharamānāri 隨法行)。
信解脫 (śradhābhimukti 信勝解)。
見到 (dṛṣṭiparjā 見至)。
身證 (kārya tīrṇī)。

慧解脫 (prajñāvimukti)。
俱解脫 (ubhayatohāgavinīti)。

が、八智即ち法智乃至道智の幾くを成就するやを明にせんとするなり。

因みに、堅信・堅法は見道位の聖者にして前者は鈍根者後者は利根者なり。信解脫と見到は修道位の聖者にして、これも根の鈍利によりて二の區別を生ぜしなり。身證は滅定に入りし不還者。慧解脫・俱解脫は共に無學の聖者なれど後者は滅定を得せるものなり。而して、此の論究ある所以は「實の成就性・不成就性は無し」と主張する異執を破せんが爲めなり。(婆沙百九卷、毘曇部十二、頁二四参照)

【三】堅信人と堅信人とは、共に欲界にあり、見道に在り、人の三界乃至六欲天の身に依り、具縛乃至下天地の染を離れたるものにして、唯根に利

未來の未知智をまなりや。設し彼れが未來の未知智を成就すれば、彼れは過去の法智をまなりや。若し過去の法智を成就するものなれば彼れは現在の未知智をまなりや。設し彼れが現在の未知智を成就すれば、彼れは過去の法智をまなりや。若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去の法智を成就するものなれば彼れは過去・現在の未知智をまなりや。設し彼れが過去・現在の未知智を成就すれば、彼れは過去の法智をまなりや。若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは未來・現在の未知智をまなりや。設し彼れが未來・現在の未知智を成就すれば、彼れは過去の法智をまなりや。若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは過去・未來・現在の未知智をまなりや。設し彼れが過去・未來・現在の未知智を成就すれば、彼れは過去の法智をまなりや。乃至、道智につきても亦、是くの如し。

過去の法智と過去の未知智とを過去の知他人心智に三三 未來の三四 現在の三五、過去の三六、現在の三七、過去の三八・未來の三九・現在の四〇の知他人心智四一に對して大の七句あり、乃至道智につきても亦、是くの如し。

此の章の義を願くは具さに演說せん。

第一節 七聖者の八智に於ける成就關係に就きて

七人あり、堅信と堅法と信解脫と見到と身證と慧解脫と俱解脫となり。八智あり、法智と未知智と知他人心智と等智と苦智と習智と盡智と道智となり。

堅信人は此の八智に於て幾くを成就し、幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は一・二・三・四・五・六・七・八智を成就するものあり。云何んが一を成就するものなりや。答へて曰く、苦法忍のときは、知他人心智無ければ一にして知他人心智あれば二なり。苦法智のときは知他人心智無ければ三三に

【三】 茲に「七竟る」の夾註あり。
【四】 茲に「一也」の夾註あり。
【五】 茲に「二也」の夾註あり。
【六】 茲に「三也」の夾註あり。
【七】 茲に「四也」の夾註あり。
【八】 茲に「五也」の夾註あり。
【九】 茲に「六也」の夾註あり。
【一〇】 茲に「七也」の夾註あり。
【一一】 本節は、頌文の「八智」の一部分に相當する段にして、七人即ち、

て老死ありと知る智と、餘を緣とせずして未來久遠に生のみを緣として老死ありと知る智と、如法界住智——無常・有爲・心所を因とするもの緣より生ずるもの、盡法・變易法・無欲法・滅法・散法の斷智慧する法なり——となり」と。此の智は當に法智なりと言ふべきや、乃至道智なりや。乃至無明を緣として行ありと知る智につきても亦是くの如し。

(十四)若し法智を成就するものなれば彼れは未知智をもなりや。設し未知智を成就するものなれば彼れは法智をもなりや。若し法智を成就するものなれば彼れは知他人心智・等智・苦智・習智・盡智……乃至若し法智を成就するものなれば、彼れは、道智をもなりや。設し道智を成就するものなれば、彼れは法智をもなりや。乃至、盡智を成就するものなれば彼れは道智をもなりや、設し道智を成就するものなれば彼れは盡智をもなりや。

(十五)若し過去の法智を成就するものなれば、彼れは未來のものなりや、設し彼れが未來のを成就すれば彼れは過去のものなりや。若し彼れが過去のを成就すれば彼れは現在のものなりや。設し彼れが現在のを成就すれば彼れは過去のものなりや。若し彼れが未來のを成就すれば彼れは現在のものなりや。若し彼れが過去のを成就すれば彼れは未來のものなりや。設し彼れが未來・現在のを成就すれば彼れは過去のものなりや。若し彼れが未來のものを成就すれば、彼れは過去・現在のものなりや。設し彼れが過去・現在のを成就すれば彼れは未來のものなりや。若し彼れが現在のを成就すれば、彼れは過去・未來のものなりや。設し彼れが過去・未來のものを成就すれば彼れは現在のものなりや。

乃至道智につきても亦、是くの如し。

(十六)若し過去の法智を成就するものなれば彼れは過去の未知智をもなりや。設し過去の未知智を成就するものなれば彼れは過去の法智をもなりや。若し過去の法智を成就するものなれば彼れは

【二七】 八智成就の一行問答。

【二八】 茲に「一行竟る」の註あり。

【二九】 八智成就の歷六問答。

【三〇】 大正本には、茲に「歷六竟る」の割註あり。但し、三本・宮本には、次の行の終りにあり、此の方妥當なり。

【三一】 八智成就の小七句大七句問答。

脫人は無知根を現在前する時、幾智を現在前するや。俱解脫につきても亦、是くの如し。

堅信人は念覺意を現在前する時、幾智を現在前し、乃至護覺意を現在前する時、幾智を現在前するや。乃至俱解脫人は念覺意を現在前する時、幾智を現在前し、乃至護覺意を現在前する時、幾智を現在前するや。

堅信人は等見を現在前する時、幾智を現在前し、乃至等定を現在前する時、幾智を現在前するや。乃至俱解脫人は等見を現在前する時、幾智を現在前し、乃至等定を現在前する時、幾智と現在前するや。

(八一十一) 諸法にして法智と相應するものなれば、彼れは未知智ともなりや。設し諸法にして未知智と相應するものなれば彼れは法智ともなりや。諸法にして法智と相應するものなれば、彼れは知他人心智・等智・苦智・智智・盡智・道智・空・無願・無相・未知根・已知根・無知根・念覺意・擇法・精進・喜・猗・定・護覺意・等見・等志・等方便・等念……乃至諸法にして法智と相應するものなれば、彼れは等定ともなりや。設し諸法にして等定と相應するものなれば、彼れは法智ともなりや。

諸法にして乃至等念と相應するものなれば、彼れは等定ともなりや、設し諸法にして等定と相應するものなれば彼れは等念ともなりや。

(十二) 又、世尊の言く「當に四十四智種を説くべし、老死の苦の智・老死の習の智・老死の盡の智・老死の盡の道迹智なり」と。此の智は當に法智なりと言ふべきや、乃至道智なりや。生・有乃至行の智も亦、是くの如し。

(十三) 又、世尊の言く「當に七十七智種を説くべし、生を縁として老死ありと知る智と、餘を縁とせずして生のみを縁として老死ありと知る智と、過去久遠よりの生を縁として老死ありと知る智と、餘を縁とせずして過去久遠よりの生のみを縁として老死ありと知る智と、未來久遠に生を縁とし

【三】 法智相應法と未知智との相應關係乃至等念相應法と等定との相應關係。

【四】 四十四智種の問題。

【五】 七十七智種の問題。

【六】 去は大正本に失とあるも、こは去の誤なり。

四 二智種とは四十四智種と七十七智種となり。一行と六と七と六七とあり。

五 (一) 七人あり、堅信と堅法と信解脫と見到と身證と慧解脫と俱解脫となり。八智あり、法智と未知智と知他人心智と等智と苦智と習智と盡智と道智となり。堅信人は此の八智に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや、乃至、俱解脫人は此の八智に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。

六 (二) 堅信人は此の八智に於て幾くの過去の智を成就し、幾くの未來の智を成就し、幾くの現在の智を成就するや。乃至俱解脫人は此の八智に於て幾くの過去の智を成就し、幾くの未來の智を成就し、幾くの現在の智を成就するや。

七 (三) 堅信人は法智を現在前する時、幾智を現在前するや、乃至道智を現在前する時幾智を現在前するや。乃至俱解脫人は法智を現在前する時、幾智を現在前するや。乃至道智を現在前する時、幾智を現在前するや。

八 (四) 堅信人は此の三三昧に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや、乃至俱解脫人は此の三三昧に於て幾くを成就し、幾くを成就せざるや。

九 (五) 堅信人は此の三三昧に於て幾くの過去の三昧を成就し、幾くの未來の三昧を成就し、幾くの現在の三昧を成就するや、乃至俱解脫人は此の三三昧に於て幾くの過去の三昧を成就し、幾くの未來の三昧を成就し、幾くの現在の三昧を成就するや。

一〇 (六) 堅信人は空三昧を現在前する時、幾智を現在前し、無願・無相三昧を現在前する時、幾智を現在前するや、乃至俱解脫人は空三昧を現在前する時、幾智を現在前し、無願・無相三昧を現在前する時、幾智を現在前するや。

一一 (七) 堅信人は未知根を現在前する時、幾智を現在前するや。堅法人につきても亦是くの如し。信解脫人は已知根を現在前する時、幾智を現在前するや。見到と身證とにつきても亦是くの如し。慧解

【四】 二智は、大正本に及とも、三本・宮本に従つて二智と改む。

【五】 七人の八智の成就問題。

【六】 七人の三世の八智の成就問題。

【七】 七人が八智の隨一を現前する時、其の智の十智分別の問題。

【八】 七人の三三昧の成就の問題。

【九】 七人の三世の三三昧の成就の問題。

【一〇】 七人が三昧を現前する時、現前する智の十智分別の問題。

【一一】 七人が無漏根・覺意・道種を現前する時、現前する智の問題。

【一二】 信は、大正本に俱とも、三本・宮本・聖本等に従つて信と改む。

卷の第十三 (第二編 智變度)

第五章 七聖者の八智乃至八道種の成就等に

關する論究

(智變度智相應跋渠第五之一) (發智論卷第九、大正・二六、九六四頁中)

本章の内容目次 第一

一 人の智と三昧と根と

二 二智種と、一行と、

本章の内容目次 第二

七人の、八智と三三昧と三根と七覺意と八道種と、智との相應と、及び二智種と、一行と、歴

六と、二の七とあり。

七人とは堅信と堅法と信解説と見到と身證と慧解説と俱解説となり。

八智とは法智と未知智と知他人心智と等智と苦智と習智と盡智と道智となり。

三三昧とは空と無願と無相となり。

三根とは未知根と已知根と無知根となり。

七覺意とは念覺意と擇法覺意と精進覺意と喜覺意と猗覺意と定覺意と護覺意となり。

八道種とは等見と等志と等語と等業と等活と等方便と等念と等定となり。

智との相應あり。

覺意と道と、相應と、

六と、小七と、大七とあり。

【一】本章は、堅信人・堅法人・信解説・見到・身證・慧解説・俱解説の七聖者の八智と三三昧と三無漏根と七覺意と八道種との所謂五德に於ける成就關係、或は現在前に關する論究をなし、次に、五德各自の相應法と五德との相應關係を明し、更に四十四智種及び七十七智種を論究し、最後に八智の成就に關する一行・歴六・小七句・大七句問答をなすを其の主要なる内容とす。尙、詳しくは本文の内容目次第二の項を見るべし。

【二】此の頌文に相應する發智論の頌文を示せば次の如し。
七聖於ニ五德一
 二成現三現
 相應事四門
 此章頗具說一

【三】大正本には二の上に種ノの字あるも、三本・宮本に從つて之れを除却せり。

【九六】速は大正本に達とあるも、三本・宮本・聖本等に從ひて速と改む。

【九七】七處善に就きて。
【九八】色の盡と色の棄出との區別に就きて。

【九七】「愛の色具」とは、發智論に、「由此愛諸色集起」とあり。

【一〇〇】「痛と想と行と識との棄出」は大正本に無きも、三本・宮本によりて補へり。

色の盡を知るは、四智にして法智と未知智と盡智と等智となり。

色の盡の道迹を知るは、四智にして法智と未知智と道智と等智となり。

色の味を知るは、四智にして法智と未知智と習智と等智となり。

色の患を知るは、四智にして法智と未知智と苦智と等智となり。

色の棄出を知るは、四智にして法智と未知智と盡智と等智となり。

痛・想・行・識につきて亦、是くの如し。

云何んが色の盡なりや、云何んが色の棄出なりや。色の盡とは云何ん。答へて曰く、若し愛九の

色具、彼れを若し滅するときは、是れを色の盡と謂ひ、諸餘の色を縁する愛、彼れを若し滅すると

きは是れを色の棄出と謂ふなり。復次に、垢の色具、彼れを若し滅するときは是れを色の盡と謂ひ、

諸餘の色を縁する垢、彼れを若し滅するときは、是れを色の棄出と謂ふなり。復次に、若しくは愛

若しくは垢の色具、彼れを若し滅するときは、是れを色の盡と謂ひ、諸餘の色を縁する若しくは愛、

若しくは垢、彼れを若し滅するときは、是れを色の棄出と謂ふなり。色の盡と色の棄出との、是れ

を差別といふなり。

痛と想と行と識との盡と、痛と想と行と識との棄出とにつきての説も色の如し、是れを差別と謂

ふなり。

阿毘曇修智品第四竟(梵本九百三十二首盧秦一萬五千九百七十二首)

【九二】 憍慢、無明を盡くす無常想の諸門分別。

因みに、發智論には「掉舉を除く無常想を説くに八健度論は之れを缺く。」

尙、婆沙論の用びし發智論にも掉舉を除く無常想を説けり。

【九三】 次下に「盡」の字あるも、聖本・聖乙本に従つて除けり。

因みに、茲に「九無常門」の制註あり。

【九四】 本節は、頌文中の「七處は最も後に在り」に相當する段にして、即ち、修智論の

今は修智論の謂はば附論として智には非ざるも煩惱を對治する無常想(anitya samjñā)につきて論究せんとするは本節の課題なり。(婆沙一〇八) 【八七】 發智論は「一切の欲食、色食、無色食、掉舉、慢、無明を除く」とて、八健度論と少しく説明を異にす、

【八八】 欲愛を盡くす無常想の諸門分別。

こは欲食を盡くすが故に苦法智と相應し、未至定にあるが故に、有覺有觀にして護根と相應し、又、苦、無願と相應し欲界の五蘊を緣するなり。

【八九】 色愛を盡くす無常想の諸門分別。

【九〇】 色愛を盡くす無常想は未至・中間・四根本の大地にあることを心得へば以下は解し易し。

【九一】 無色愛を盡くす無常想の諸門分別。

此の無常想は未至・中間・四根本・下三無色の九地にあるなり。

謂はば附論として契經中に説ける七處善に就きて論究するを其の課題とす、 【九五】 此の經文は雜阿含卷第二、第四十二經、(大正・二、頁一〇上)にあり。

智と盡智と道智とを除くなり、無色界のは六智が知る、法智と知他人心智と盡智と道智とを除くなり。^{九八}

第十節 無常想に関する論究^{九六}

又、世尊の言く「無常想を習し修行し廣布せば盡く欲愛を盡くす」と。此の想は當に法智と相應し、苦智と相應すと言ふべく、當に有覺有觀なりと言ふべく、當に護根と相應すと言ふべく、當に無願と相應すと言ふべく、當に欲界繫を緣すと言ふべし。

「盡く色界の愛を盡くす」と。此の無常想は、當に未知智と相應し苦智と相應すと言ふべく、或は有覺有觀、或は無覺有觀、或は無覺無觀なり。或は樂根と相應し或は喜根と相應し或は護根と相應し、當に無願と相應すと言ふべく、當に色界繫を緣すと言ふべし。

「盡く無色界の愛を盡くす」と。此の無常想は、當に未知智と相應し苦智と相應すと言ふべく、或は有覺有觀、或は無覺有觀、或は無覺無觀なり、或は樂根と相應し或は喜根と相應し或は護根と相應し、當に無願と相應すと言ふべく、當に無色界繫を緣すと言ふべし。

「憍慢を盡くし無明を盡くす」と。此の無常想は或は法智と相應し或は未知智と相應し、苦智と相應す、或は有覺有觀、或は無覺有觀、或は無覺無觀なり、或は樂根と相應し、或は喜根、護根と相應す。當に無願と相應すと言ふべく、或は欲界繫を緣じ、或は色・無色界繫を緣るなりす。^{九三}

第十一節 七處善に関する論究^{九四}

又、世尊の言く、「比丘よ、七處善と三種觀義とは速かに此の法に於て有漏を盡くすことを得」と。^{九五}

色の苦を知るは、四智にして法智と未知智と苦智と等智となり。^{九七}
色の習を知るは、四智にして法智と未知智と習智と等智となり。

【七五】 五陰並に五盛陰を知る智に就きて。

【七六】 六種(界)を知る智に就きて。

【七七】 色法乃至無為法を知る智に就きて。

【七八】 三世法乃至三斷法を知る智に就きて。

【七九】 四諦乃至四無色を知る智に就きて。

【八〇】 八解脱乃至一切入を知る智に就きて。

【八一】 八智及び三三昧を知る智に就きて。

【八二】 三結・三不善根・三漏を知る智に就きて。

【八三】 四流・四軛・四受・(取)四縛(身繫)を知る智に就きて。

【八四】 五蓋・五結・五下分結・五見を知る智に就きて。

因みに、茲に五上分結を説かざるは發智論と相違する所なり。

【八五】 六更受(愛身) 七使(隨眠) 九結を知る智に就きて。

【八六】 九十八使を知る智に就きて。

【八七】 茲に「八智知門」の夾註あり。

【八八】 本節は、頌文の「無常想を作す」に相當する段なり。

前來數節に涉りて智に関する諸種の論究をなせるに、その智の主なる役目は云ふ迄も無く、煩惱の對治にあり。故に

^{A0} 身見と戒盜と疑とは八智が知る、盡智と道智とを除くなり。貪と瞋恚と愚癡と及び欲漏とは七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。有漏は七智が知る、法智と盡智と道智とを除くなり。餘殘は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

^{A1} 流中、欲流は七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。有漏は七智が知る、法智と盡智と道智とを除くなり。餘殘は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。柅も亦是くの如し。

受中、欲受は七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。我受は七智が知る、法智と盡智と道智とを除くなり。餘殘は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

縛中、欲愛身縛と瞋恚身縛とは七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。餘殘は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

^{A2} 蓋と及び瞋恚結と慳結と嫉結とは七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり、餘殘は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

下分中、貪欲と瞋恚とは七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。餘殘と及び五見とは八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

^{A3} 愛身中、鼻舌更愛は七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。餘殘は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

使中、貪欲使と瞋恚使とは七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。有愛使は七智が知る、法智と盡智と道智とを除くなり。餘殘は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

結中、瞋恚結と慳結と嫉結とは七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。餘殘は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

^{A4} 九十八使中、欲界のは七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。色界のは七智が知る、法

は婆沙の解釋なり。
因みに、本節を理解するためには次の如き法相を心得へ置くべし。

(一) 欲界の苦・集諦所攝の相應法は類と滅と道とを除く七智の所知にして、不相應法は更に他心智を除く六智の所知なり。

(二) 色界の苦・集諦所攝の相應法は法と滅と道とを除く七智の所知にして、不相應法は更に他心智を除く六智の所知なり。

(三) 無色界の苦・集諦所攝の相應法と不相應法とは法と他心と滅と道とを除く六智の所知なり。

(四) 滅諦所攝の法は他心と苦と集と道とを除く六智の所知なり。

(五) 道諦所攝の相應法は苦と集と滅とを除く七智の所知にして不相應法は他心と苦と集と滅とを除く六智の所知なり。

(六) 諦に攝せざる法は世俗智の所知なり。
(婆沙百八卷、毘曇部十二、頁一九五參照)

【七〇】 二十二根を知る智に就きて。
【七一】 十八持を知る智に就きて。
【七二】 十二入を知る智に就きて。

欲界繫法は七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。色界繫法は七智が知る、法智と盡智と道智とを除くなり。無色界繫法は六智が知る、法智と知他人心智と盡智と道智とを除くなり。

學法と無學法とは七智が知る、苦智と習智と盡智とを除くなり。非學非無學法は九智が知る、道智を除くなり。

見諦所斷法と思惟所斷法とは八智が知る、盡智と道智とを除くなり。無斷法は八智が知る、苦智と習智とを除くなり。

苦諦と習諦とは八智が知る、盡智と道智とを除くなり。盡諦は六智が知る、知他人心智と苦智と習智と道智とを除くなり。道諦は七智が知る、苦智と習智と盡智とを除くなり。

禪は九智が知る、盡智を除くなり。

四等は七智が知る、法智と盡智と道智とを除くなり。

無色中、空處と識處と不用處とは七智が知る、法智と知他人心智と盡智とを除くなり。有想無想處は六智が知る、法智と知他人心智と盡智と道智とを除くなり。

初と第二と第三との解脫と八除入と八一切入とは七智が知る、法智と盡智と道智とを除くなり。

空處解脫と識處解脫と不用處解脫とは七智が知る、法智と知他人心智と盡智とを除くなり。有想無想解脫と滅盡解脫とは六智が知る、法智と知他人心智と盡智と道智とを除くなり。空處一切入と識處一切入とも亦、是くの如し。

法智は六智が知る、未知智と苦智と習智と盡智とを除くなり。未知智は六智が知る、法智と苦智と習智と盡智とを除くなり。知他人心智は九智が知る、盡智を除くなり。等智は八智が知る、盡智と

道智とを除くなり。苦智と習智と盡智と道智と空と無願と無相とは七智が知る、苦智と習智と盡智とを除くなり。

智を以つて第九品を斷じ無學界を得する時の無間道の未知智は、先に忍にて斷ぜし三界の見所斷の結の滅と、法智或は世俗道にて斷ぜし下八地の修所斷の結の滅と、法智にて斷ぜし有頂の前八品の修所斷の結の滅とを證するが如き場合なり。

【六七】四諦智が滅を盡作證する場合。

因みに、發智論は苦智の場合と集・滅・道智の場合との二つに分ちて論じ、八鍵度論が四諦智を一度に説くのと異なる。

【六八】茲に「七正滅門」の割註あり。

【六九】本節は、頌文中の「智」に相應するものにして、二十二根乃至九十八使の一一を知する智は十智中の幾く智なりやを分別する段なり。二十二根乃至九十八使は發智論にては四十二章と稱せらるるものなれど八鍵度論中には五順上分結と三重三摩地を説かざるを以つて四十章となるなり。而して、此の論究をなす所以は「覺慧に實の所緣なし」とする異執と、「能知の智にして所知を知らざるものあり、所知の境にして智の所知に非ざるものあり」との異執を破して正義を顯はさんが爲めなりと

知他人心智と盡智と道智とを除くなり。鼻識・舌識持は七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。意持と意識持とは九智が知る、盡智を除くなり。法持は十智が知るなり。

七三 眼入と耳・鼻・舌・身入と色・聲・細滑入とは七智が知る、知他人心智と盡智と道智とを除くなり。香入と味入とは六智が知る、未知智と知他人心智と盡智と道智とを除くなり。意入は九智が知る、盡智を除くなり。法入は十智が知るなり。

七二 色陰は八智が知る、知他人心智と盡智とを除くなり。痛・想・行・識陰は九智が知る、盡智を除くなり。

七四 色盛陰は七智が知る、知他人心智と盡智と道智とを除くなり。痛・想・行・識盛陰は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

七五 地種乃至空種は七智が知る、知他人心智と盡智と道智とを除くなり。識種は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

七六 色法は八智が知る、知他人心智と盡智とを除くなり。無色法は十智が知るなり。

七七 可見法と有對法とは七智が知る、知他人心智と盡智と道智とを除くなり。不可見法と無對法とは十智が知るなり。

七八 有漏法は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。無漏法は八智が知る、苦智と習智とを除くなり。有爲法は九智が知る、盡智を除くなり。無爲法は六智が知る、知他人心智と苦智と習智と道智とを除くなり。

七九 過去・未來・現在法は九智が知る、盡智を除くなり。

八〇 善法は十智が知る。不善法は七智が知る、未知智と盡智と道智とを除くなり。無記法は八智が知る、盡智と道智とを除くなり。

して、即ち、諸結を滅するものと、其の滅を證するものとの關係を明にするを其の課題とす。

而して、此の論究ある所以は、外國の諸論師が、無間道は諸結の得を斷じ、解脫道は彼の滅の得を證す」と説くを止めて、無間道は能く諸結の得を斷じ亦、彼の滅の得をも證することを顯はさんが爲めなりとは婆沙論の解釋なり。(婆沙百八卷、毘曇部十二、頁一九〇參照)

【三】 法智が結の滅を盡作證する場合。

【四】 例へば預流者が、世俗道を以つて欲界の一品乃至五品の結を斷じ已りて復法智を無間道となして第六品を斷じて一來果を得する時、その時の無間道の法智は先に忍にて斷ぜし三界の見所斷の結の滅を證し、及び先に世俗智にて斷ぜし欲界前五品の修所斷の結の滅をも證するが如し。尙、精しくは婆沙百八卷(毘曇部十二、頁一九一)を往見すべし。

【五】 未知智が滅を盡作證する場合。

【六】 聖者が法智或は世俗道を以つて欲界乃至無所有處の染を離れ、法智を以つて有頂の八品の結を斷じ已りて未知

り。

諸結にして未知智が滅するものなれば、彼の結の滅は未知智が盡作證するや。答へて曰く、是くの如し、諸結にして未知智が滅するものなれば、彼の結の滅は未知智が盡作證するなり。

頗し結の滅にして未知智が盡作證するも彼の結は未知智が滅するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。諸結の忍が滅するもの、亦餘智が滅するものにして彼の結の滅を未知智が盡作證するをいふなり。

諸結にして苦智・習智・盡智……乃至諸結にして道智が滅するものなれば、彼の結の滅は道智が盡作證するものなりや。答へて曰く、是くの如し。諸結にして道智が滅するものなれば、彼の結の滅は道智が盡作證するなり。

頗し結の滅にして、道智が盡作證するも彼の結は道智が滅するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。諸結の忍が滅するもの亦、餘の智が滅するものにして彼の結の滅を道智が盡作證するをいふなり。

第九節 眼根と乃至無色界思惟所斷の無明とを知る智の十智分別

眼根は七智が知る。知他人心智と盡智と道智とを除くなり。耳・鼻・舌・身根も亦是くの如し。意根は九智が知る。盡智を除くなり。樂根と喜根と護根と信・精進・念・定・慧根とも亦復、是くの如し。男根と女根とは六智が知る。未知智と知他人心智と盡智と道智とを除くなり。命根は七智が知る。知他人心智と盡智と道智とを除くなり。苦根と憂根とは七智が知る。未知智と盡智と道智とを除くなり。未知根と已知根と無知根とは七智が知る。苦智と習智と盡智とを除くなり。

眼持と耳・鼻・舌・身持と色・聲・細滑持とは七智が知る。知他人心智と盡智と道智とを除くなり。眼識・耳識・身識持は八智が知る。盡智と道智とを除くなり。香持と味持とは六智が知る。未知智と

【五二】 忍が滅すとは、四法忍が欲界の見諦所斷の結を滅するをいふ。

【五三】 餘智とは、茲にては等智を指す。

【五四】 滅せざるものとは、已に滅せるが故に再び滅する必要なものか、或は未だ滅の加行を起さざるものかをいふ。

【五五】 上二界の思惟所斷の結は盡法智・道法智もこれを滅することを得るなり。

【五六】 欲界繫の思惟所斷の結が法智に滅せらるるをいふなり。

【五七】 忍とは茲にては四未知智忍をいひ、餘智とは未知智と等智とをいふ。

【五八】 色・無色界繫の結は未知智が滅するや否やに就きてこれに順後句あり。

【五九】 四諦斷の結は四諦智が滅せず。

【六〇】 發智論には以下に「或は餘智の斷なり、或は不斷なり」の文句あり。八禪度論の方は完全ならざるが如し。次の具智・盡・道斷の結の場合も同じ。

【六一】 茲に「六の滅法門」の夾註あり。

【六二】 本節は、前卷初の頌文の「作證」に相當するものに

(四)云何んが諸結の欲界繫ならざるものにして彼の結は法智が滅するに非ざるものなりや。答へて曰く、諸結の色・無色界繫なるものにして、忍が滅するもの、亦餘智が滅するもの、亦滅せざるもの、是れを結の欲界繫ならざるものにして彼の結は法智が滅するに非ざるものと謂ふなり。

^{五八}諸結の色・無色界繫なるものなれば、彼の結は未知智が滅するものなりや。答へて曰く、是くの如し、諸結にして未知智が滅するものなれば、彼の結は色・無色界繫なるなり。

頗し結にして色・無色界繫なるも彼の結は未知智が滅するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。諸結の色・無色界繫なるものにして忍が滅するもの亦、餘智が滅するもの、亦滅せざるものなり。

^{五九}諸結にして見苦斷なれば、彼の結は苦智が滅するや。答へて曰く、彼の結は苦智が滅するに非ずして、彼の結は忍が滅するなり。

設し諸結にして苦智が滅するものなれば、彼の結は見苦斷なりや。答へて曰く、彼の結は見苦斷に非ずして、彼の結は思惟斷なるなり。

諸結にして見習・盡……乃至諸結にして見道斷なれば、彼の結は道智が滅するや。答へて曰く、彼の結は道智が斷するに非ずして彼の結は忍が滅するなり。

設し諸結にして道智が滅するものなれば彼の結は見道斷なりや。答へて曰く、彼の結は見道斷に非ずして、彼の結は思惟斷なるなり。

^{六二}第八節 法・未知智及び四諦智の結の斷と、其の盡作證とに就きて

^{六三}諸結にして法智が滅するものなれば、彼の結の滅は法智が盡作證するや。答へて曰く、是くの如し、諸結にして法智が滅するものなれば彼の結の滅は法智が盡作證するなり。

頗し結の滅にして法智が盡作證するも、彼の結は法智が滅するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。諸結の忍が滅するもの、亦餘智が滅するものにして彼の結の滅を法智が盡作證するをいふな

るが故に、有漏の知他人心智は苦・習智のために因となることなきなり。

【四三】等智に八智の與めに幾縁となるやに就きて。

【四四】茲に因とは、同類と異熟と遍行との三因をいふ。

【四五】苦智・習智・盡智は八智の與めに幾縁となるやに就きて。

【四六】發智論は、此の二智に就きても略説すること無く廣説せり。

【四七】道智は八智の與めに幾縁となるやに就きて。

【四八】本節は、前卷初頭の頌文の「滅」に相當する段にして、諸智が結を斷する即ち滅する場合に於ける其の智の能力と眼界とを定めんとするを其の課題とす。

而して、婆沙論の解説に依れば此の論究ある所以は、類智が欲界の結を斷じ、或は法智が上界の結を斷ずること無し、等との疑ひを決定せんが爲めなりとなり。

(婆沙百七卷、毘婆沙十二、頁一八三参照)。

因に婆沙論の茲の解釋中に滅道法智が上二界の結を斷ずる理由を詳説せるは注意すべき點なり。

【四九】欲界繫の結は法智が滅(斷)するや否やに就きて。

ために因と次第と縁と増上となるなり。

苦智は、彼の苦智のために因と次第と増上となるも縁となること無し。習智と盡智とのために因と次第と増上となるも、縁となること無し、道智と法智と未知智と知他人心智とのために因と次第と縁と増上となり、等智のために次第と縁と増上となるも、因となること無し。

習智と盡智とも亦、是くの如し。

道智は彼の道智のために因と次第と縁と増上となり、法智と未知智と知他人心智とのために因と次第と縁と増上となり、等智のために次第と縁と増上となるも因となること無し、苦智と習智と盡智とのために因と次第と増上となるも縁となること無し。

第五節 結の斷に於ける智の能力及び其の限界

諸結にして欲界繫に在るもの、彼の結は法智が滅するや。答へて曰く、或る結は欲界繫なるも彼の結は法智が滅するに非ざるものあり。

(一)云何んが結にして欲界繫に在るも彼の結は法智が滅するに非ざるものなりや。答へて曰く、諸結の欲界繫なるものにして、忍が滅するもの亦、餘智が滅するもの、亦、滅せざるもの、是れを結にして欲界繫なるも此の結は法智が滅するに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが結にして法智が滅するも此の結は欲界繫に非ざるものなりや。答へて曰く、諸結の色、無色界繫なるものにして法智が滅するもの、是れを結にして法智が滅するも此の結は欲界繫ならざるものと謂ふなり。

(三)云何んが結の欲界繫なるものにして彼の結は法智が滅するものなりや。答へて曰く、諸結の欲界繫なるものにして法智が滅するもの、是れを結の欲界繫なるものにして彼の結は法智が滅するものなりと謂ふなり。

縁となるやに就きて。

【三】茲に因とは、一の同類因をいふ。以て因に就き特別に註を施さざるときは同類因と知るべし。

【四】發智論は、「他心智の奥めに四縁と爲る。若し彼れの奥めに因・等無間と爲るときは所縁となるに非ず、若し彼れの奥めに所縁となるときは因・等無間に非ず」と言ひて、八覺度論より詳説せり。以下※印は之れに準ず。

【五】因とは、種子法の如くなるに、無漏法は有漏法に對して種子法に非ざるが故に法智は等智に對して因となること無きなり。

【六】法智が苦・習・滅智の所縁に非ざること就きては前節を參照すべし。

【七】未知智は八智のために幾縁となるやに就きて。

【八】茲に、「頗似習四」の夾註あり。

【九】知他人心智は八智の奥めに幾縁となるやに就きて。

【一〇】茲に因とは、同類と異類との二因を謂ふ。

【一一】因となるとは、同類因となるの義にして、即ち此は無漏の知他人心智の場合なり。故に苦・習智の所縁に非ざるなり。此れに反して苦・習智の所縁となる時は必ず有漏なり。

三二 頗し盡智なれば、盡智を縁することありや。答へて曰く、無きなり。餘殘も亦、縁すること無きなり。

三三 頗し道智なれば、道智を縁することありや。答へて曰く、有り。等智を縁することは無し。餘殘を縁することは有り。

第六節 八智の一一は八智の與めに機縁と爲るやに就きて

三五 法智は、彼の法智のために因と次第と縁と増上となり、未知智のために因と次第と増上となるも縁縁となること無し、^{三七}知他人心智のために因と次第と縁と増上となり、等智のために次第と縁と増上となるも^{三八}因となること無きなり。苦智と習智と盡智とのために因と次第と増上となるも^{三九}縁となること無し、道智のために因と次第と縁と増上となるなり。

四〇 未知智は、彼の未知智のために因と次第と縁と増上となり、^{四一}知他人心智のために因と次第と縁と増上となり、等智のために次第と縁と増上となるも^{四二}因となること無し、苦智と習智と盡智とのために因と次第と増上となるも縁縁となること無し、道智のために因と次第と縁と増上となり、^{四三}法智のために因と次第と増上となるも縁縁となること無きなり。

四四 知他人心智は、彼の知他人心智のために因と次第と縁と増上となり、^{四五}等智のために因と次第と縁と増上となり、^{四六}苦智と習智とのために因と次第と縁と増上となる、^{四七}若し因となること有れば縁縁となること無く、^{四八}若し縁縁となること有れば因となること無し。盡智のために因と次第と増上となり、縁となること無し、道智と法智と未知智とのために因と次第と縁と増上となるなり。

四五 等智は、彼の等智のために因と次第と縁と増上となり、^{四六}苦智と習智とのために次第と縁と増上となるも^{四七}因となること無し。盡智と道智とのために次第と増上となるも^{四八}因となること無く、縁と爲ることも無し。法智と未知智とのために次第と縁と増上となるも^{四九}因となること無し、^{五〇}知他人心智の

は、法智は欲界を緣じ未知智は上二界を緣ずるが故なり。

【二六】未知智の所縁となる智に就きて。

【二七】知他人心智の所縁となる智に就きて。

【二八】等智の所縁となる智に就きて。

【二九】苦・習智の所縁となる智に就きて。

【三〇】苦・習の二智は有漏のみを緣ずるが故に有漏の知他人心智と等智とを除く所餘の智を緣ぜざるなり。

【三一】盡智の所縁となる智は無し。

盡智は無爲を緣ずるが故に有爲の智を緣ずること無きなり。

【三二】道智の所縁となる智に就きて。

【三三】此の下に「四の縁起門」の劉註あり。

【三四】本節は、前卷初の頌文の「縁となる」に相當する段にして、八智の一一をそれぞれ八智に相ひ望むる時、四縁中の幾縁となるやを明にせんとするを其の主目的とす。

而して、婆沙論は此の論を作す緣由を、「四縁に破の體無し」と言ふ異執を破せんが爲めなりと説明せり。

(婆沙百七卷、毘婆沙十二、頁一七九参照)。

【三五】法智は八智のために縁

(三)云何んが盡智と道智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が若しくは本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時盡智と道智とを修することを得るときと、是れを盡智と道智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが盡智と道智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と苦未知智と習法智と習未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが盡智と道智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時盡智と道智とを修することを得ざるときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときには、盡智と道智とを修せざるをもて、是れを盡智と道智とを修せざるものと謂ふなり。

第五節 八智は幾智を緣するやに就きて

二四 頗し法智なれば、法智を緣することありや。答へて曰く、有り。未知智を緣すること無きも、餘殘を緣することも有り。

二五 頗し未知智なれば、未知智を緣することありや。答へて曰く、有り。法智を緣すること無きも、餘殘を緣することも有り。

二六 頗し知他人心智なれば、知他人心智を緣することありや。答へて曰く、有り。餘殘を緣すること有り。

二七 頗し等智なれば、等智を緣することありや。答へて曰く、有り。餘殘を緣することも有り。

二八 頗し苦智なれば、苦智を緣することありや。答へて曰く、無きなり。知他人心智と等智とを緣すること有り。餘殘を緣することは無し。

習智も亦、是くの如し。

【三】若の字は大正本に無きも、三本・宮本に依りて附加せり。

【三】茲に、「三の修智門竟る」の夾註あり。

【三】本節は前卷初頭の頌文の「緣する」に相應する段にして、八智の一が八智の幾くを緣するやを明にせんとするを其の課題とするなり。

而して、此の論究ある所以は所緣の體は實有に非ずとの異執を破して所緣の體の實有なることを顯はさんがためなりとは、婆沙論の解釋なり。因みに、婆沙論が茲の所説と異なる別説を紹介せるは注目に價す。

(婆沙百七卷、毘曇部十二、頁一七八参照)。

【三】法智の所緣となる智に就きて。

【五】法智が未知智を緣せざ

(一)云何んが道智を修するも習智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の道法智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の道智を現在前するるときと、是れを道智を修するも習智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが習智と道智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本不得の無漏智若しくは本不得の世俗智を現在前して是の時習智と道智とを修することを得るときと、是れを習智と道智とを修するものと謂ふなり。

(三)云何んが習智と道智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と苦未知智と盡法智と盡未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが習智と道智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時習智と道智とを修するを得ざるときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するるときには、習智と道智とを修せざるをもて、是れを習智と道智とを修せざるものと謂ふなり。

若し盡智を修する時は彼れは道智をもなりや。答へて曰く、或は盡智を修するも道智は非らざるものあり。

(一)云何んが盡智を修するも道智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の盡法智と盡未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の盡智を現在前するるときと、是れを盡智を修するも道智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが道智を修するも盡智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の道法智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の道智を現在前するるときと、是れを道智を修するも盡智は非らざるものと謂ふなり。

【三〇】盡智を修する時、道智を修するや否やに就きて。これに四句分別あり。

(一)云何んが習智を修するも盡智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の習法智と習未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の習智を現在前するときと、是れを習智を修するも盡智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが盡智を修するも習智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の盡法智と盡未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の盡智を現在前するときと、是れを盡智を修するも習智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが習智と盡智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が若しくは本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時習智と盡智とを修するを得るときと、是れを習智と盡智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが習智と盡智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と苦未知智と道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが習智と盡智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前して是の時習智と盡智を修するを得ざるときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときとは、習智と盡智とを修せざるをもて、是れを習智と盡智とを修せざるものと謂ふなり。

若し習智を修する時は、彼れは道智をもなりや。答へて曰く、或は習智を修するも道智は非らざるものあり。

(一)云何んが習智を修するも道智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の習法智と習未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の習智を現在前するときと、是れを習智を修するも道智は非らざるものと謂ふなり。

【二九】習智を修する時、道智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

を修せざるものと謂ふなり。

若し苦智を修する時は、彼れは道智をもちたりや。答へて曰く、或は苦智を修するも道智は非らざるものあり。

(一)云何んが苦智を修するも道智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と苦未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の苦智を現在前するときと、是れを苦智を修するも道智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが道智を修するも苦智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の道法智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の道智を現在前するときと、是れを道智を修するも苦智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが苦智と道智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智若しくは本得の世俗智を現在前して是の時苦智と道智とを修することを得るときと、是れを苦智と道智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが苦智と道智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の習法智と習未知智と盡法智と盡未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが苦智と道智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本得の世俗智を現在前するも是の時苦智と道智とを修することを得ざるときと、一切の凡人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときとには、苦智と道智とを修せざるをもて、是れを苦智と道智とを修せざるものと謂ふなり。

若し習智を修する時は、彼れは盡智をもちたりや。答へて曰く、或は習智を修するも盡智は非らざるものあり。

【七】苦智を修する時、道智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

【八】習智を修する時、盡智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

るときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時苦智と習智とを修することを得ざるときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときに、苦智と習智とを修せざるをもて、是れを苦智と習智とを修せざるものと謂ふなり。

【一五】若し苦智を修する時は彼れは盡智をもちたりや。答へて曰く、或は苦智を修するも盡智は非らざるものあり。

【一六】云何んが苦智を修するも盡智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と苦未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の苦智を現在前するときに、是れを苦智を修するも盡智は非らざるものと謂ふなり。

【一七】云何んが盡智を修するも苦智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の盡法智と盡未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の盡智を現在前するときに、是れを盡智を修するも苦智は非らざるものと謂ふなり。

【一八】云何んが苦智と盡智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が若しくは本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時苦智と盡智とを修することを得るときと、是れを苦智と盡智とを修するものと謂ふなり。

【一九】云何んが苦智と盡智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の習法智と習未知智と道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが苦智と盡智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時苦智と盡智とを修することを得ざるときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときに、苦智と盡智とを修せざるをもて、是れを苦智と盡智と

【一四】大正本には、一切の上に一具謂不修苦智習智の八字あるも、不要なるを以つて宮本に從つて之れを除却せり。

【一五】苦智を修する時、盡智を修するや否やに就きて。

これに四句分別あり。

【一六】若の字は大正本に無きも、三本・宮本に依りて附せり。

(三)云何んが等智と道智とを修するものなりや。答へて曰く、學見迹若しくは阿羅漢が本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時等智と道智とを修することを得るときと、是れを等智と道智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが等智と道智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と習法智と盡法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智も現在前するも此れが道智に非ざるときと、一切の染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときに、等智と道智とを修せざるをもて、是れを等智と道智とを修せざるものと謂ふなり。

若し苦智を修する時は彼れは習智をもちたりや。答へて曰く、或は苦智を修するも習智は非らざるものあり。

(一)云何んが苦智を修するも習智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と苦未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の苦智を現在前するときと、是れを苦智を修するも習智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが習智を修するも苦智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の習法智と習未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の習智を現在前するときと、是れを習智を修するも苦智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが苦智と習智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時苦智と習智とを修することを得るときと、是れを苦智と習智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが苦智と習智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の盡法智と盡未知智と道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが苦智と習智とに非ざ

【二三】苦智を修する時、習智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の盡智を現在前するるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも是の時等智を修せざることを得るときと、是れを盡智を修するも等智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等智と盡智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の盡未知智邊のときと、學見迹若しくは阿羅漢が若しくは本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時等智と盡智とを修することを得るときと、是れを等智と盡智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが等智と盡智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と習法智と道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが盡智に非ざるるときと、一切の染汚心・無記心のときと、無想定・滅盡定に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するるときと、等智と盡智とを修せざるをもて、是れを等智と盡智とを修せざるものと謂ふなり。

三 若し等智を修する時は彼れは道智をもなりや。答へて曰く、或は等智を修するも道智は非らざるものあり。

(一)云何んが等智を修するも道智は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人が若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するるときと、所修行の苦未知智邊と習・盡未知智邊とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時道智を修せざることを得るときと、是れを等智を修するも道智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが道智を修するも等智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の道法智と道未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の道智を現在前するるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも是の時等智を修せざることを得るときと、是れを道智を修するも等智は非らざるものと謂ふなり。

【三】等智を修する時、道智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

くは阿羅漢が本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時習智を修せざることを得るときと、是れを等智を修するも習智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが習智を修するも等智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の習法智と道未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の習智を現在前するるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも是の時等智を修せざることを得るときと、是れを習智を修するも等智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等智と習智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の習未知智邊のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時等智と習智とを修することを得るときと、是れを等智と習智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが等智と習智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と盡・道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが習智に非ざるときと、一切の染汚心・無記心のときと、無想・三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときに、等智と習智とを修せざるをもて、是れを等智と習智とを修せざるものと謂ふなり。

若し等智を修する時は、彼れは盡智をもなりや。答へて曰く、或は等智を修するも盡智は非らざるものあり。

(一)云何んが等智を修するも盡智は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人が若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するるときと、所修行の苦未知智邊と習未知智邊とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時盡智を修せざることを得るときと、是れを等智を修するも盡智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが盡智を修するも等智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の盡法智と道未知

【二】等智を修する時、盡智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

るものあり。

(一)云何んが等智を修するも苦智は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人が若しくは本得、若しくは本不得の世俗智を現在前するときと、所修行の習・盡未知智邊のときと、學見迹若しくは阿羅漢が若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時苦智を修することを得ざるときと、是れを等智を修するも苦智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが苦智を修するも等智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と、道未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の苦智を現在前するときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも是の時等智を修することを得ざるときと、是れを苦智を修するも等智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等智と苦智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の苦未知智邊のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時等智と苦智とを修することを得るときと、是れを等智と苦智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが等智と苦智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の習法智と盡・道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが苦智に非ざるときと、一切の染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときと、等智と苦智とを修せざるをもて、是れを等智と苦智とを修せざるものと謂ふなり。

若し等智を修する時は、彼れは習智をもちなりや。答へて曰く、或は等智を修するも習智は非らざるものあり。

(一)云何んが等智を修するも習智は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人が若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するときと、所修行の苦未知智邊と盡未知智邊とのときと、學見迹若し

【八】道未知智は各本に無きも、所修行の道未知智のときは必ず未來に世俗智を除く七智(但し未離欲染者なれば更に知他人心智を除く六智)を修するを以つて、茲に道未知智を説くべきなり。而して、又、發智論にも明かに、「道類智の時」と言へり。故に今、道未知智の一句を補へり。

【九】此の位には、苦智を現修すると同時に未來修として現觀邊の世俗智を修するを以つて、等智と苦智とを俱修するなり。

【一〇】等智を修する時、習智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

を現在前するも此れが知他人心智に非ずして是の時知他人心智を修することを得るときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の知他人心智を現在前するも此れが道智に非ざるときと、是れを知他人心智を修するも道智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが道智を修するも知他人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の道法智のときと、知他人心智無きものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の道智を現在前するも此れが知他人心智に非ざるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも是の時知他人心智を修することを得ざるときと若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時道智を修することを得て知他人心智は非らざるときと、是れを道智を修するも知他人心智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが知他人心智と道智とを修するものなりや。答へて曰く、知他人心智のあるものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の知他人心智を現在前して此れが是れ道智なるときと、若しくは本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時知他人心智と道智とを修することを得るときと、是れを知他人心智と道智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが知他人心智と道智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と苦未知智と習法智と習未知智と盡法智と盡未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが知他人心智と道智とに非ざるときと、若しくは本得の世俗智を現在前するも此れが知他人心智に非ざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時知他人心智と道智とを修することを得ざるときと、一切の知他人心智無き凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と一切の忍を現在前するときに、知他人心智と道智とを修せざるをもて、是れを知他人心智と道智とを修せざるものと謂ふなり。

若し等智を修する時は、彼れは苦智をもちや。答へて曰く、或は等智を修するも苦智は非らざ

【七】等智を修する時、苦智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

(二)云何んが盡智を修するも知他人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の盡法智と盡未知智とのときと、知他人心智無きものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の盡智を現在前するるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも是の時知他人心智を修せざることを得るときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時盡智を修することを得るも知他人心智は非らざるものと、是れを盡智を修するも知他人心智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが知他人心智と盡智とを修するものなりや。答へて曰く、知他人心智のあるものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時知他人心智と盡智とを修することを得るときと、是れを知他人心智と盡智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが知他人心智と盡智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と苦未知智と習法智と習未知智と道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが知他人心智と盡智とに非ざるるときと、若しくは本得の世俗智を現在前するも此れが知他人心智に非ざるるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時知他人心智と盡智とを修せざることを得るときと、一切の知他人心智無き凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と一切の忍を現在前するるときとに、知他人心智と盡智とを修せざるをもて、是れを知他人心智と盡智とを修せざるものと謂ふなり。

若し知他人心智を修する時は彼れは道智をもちや。答へて曰く、或は知他人心智を修するも道智は非らざるものあり。

(一)云何んが知他人心智を修するも道智に非らざるものなりや。答へて曰く、知他人心智のある凡夫人が、若しくは本得若しくは本不得の知他人心智を現在前するるときと若しくは本不得の世俗智

【六】知他人心智を修する時、道智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

本得の習智を現在前するときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも是の時知他人心智を修することを得ざるときと、若しくは本不得の世俗智が現在前するも是の時習智を修することを得て知他人心智は非らざるときと、是れを習智を修するも知他人心智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが知他人心智と習智とを修するものなりや。答へて曰く、知他人心智のあるもの所の修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時知他人心智と習智とを修することを得るときと、是れを知他人心智と習智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが知他人心智と習智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と苦未知智と盡法智と盡未知智と道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが知他人心智と習智とに非ざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時知他人心智と習智とを修せざることを得るときと、一切の知他人心智無き凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときとに、知他人心智と習智とを修せざるをもて、是れを知他人心智と習智とを修せざるものと謂ふなり。

若し知他人心智を修する時は、彼れは盡智をもなりや。答へて曰く、或は知他人心智を修するも盡智は非らざるものあり。

(一)云何んが知他人心智を修するも盡智は非らざるものなりや。答へて曰く、知他人心智のある凡人が、若しくは本得若しくは本不得の知他人心智を現在前するときと若しくは本不得の世俗智を現在前するも此れが知他人心智に非ずして是の時知他人心智を修することを得るときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の知他人心智を現在前するときと、是れを知他人心智を修するも盡智は非らざるものと謂ふなり。

【三】 修するは、大正本に修せずとあるも、三本・宮本・聖乙本には修すとあり、今は後者に據りてかく訂正す。

【四】 習智は大正本に無きも、三本・宮本に依りて補へり。

【五】 知他人心智を修する時、盡智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

卷の第十一 (第二編 智變度)

(智變度之四、修智跋栗之餘) (發智論卷第八、大正・二六、九六〇頁中)

第四節 八智の相修關係に就きて(續き)

(四)云何んが知他人心智と苦智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の習法智と習未知智と盡法智と盡未知智と道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが知他人心智と苦智とに非ざるるときと、本得の世俗智を現在前するも此れが知他人心智に非ざるるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時知他人心智と苦智とを修せざることを得るときと、一切の知他人心智無き凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときに、知他人心智と苦智とを修せざるをもて、是れを知他人心智と苦智とを修せざるものと謂ふなり。

若し知他人心智を修する時は、彼れは習智をもなりや。答へて曰く、或は知他人心智を修するも習智は非らざるものあり。

(一)云何んが知他人心智を修するも習智は非らざるものなりや。答へて曰く、知他人心智のある凡夫人が若しくは本得若しくは本不得の知他人心智を現在前するとき、若しくは本不得の世俗智を現在前するも此れが知他人心智に非ずして是の時知他人心智を修することを得るときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の知他人心智を現在前するときと、是れを知他人心智を修するも習智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが習智を修するも智他人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の習法智と習未知智とのときと、知他人心智無きものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が

【一】本節は、全く前節の續行なるも分卷せるにより便宜上節を分ちしのみ。

因みに、本節は前節の終りの知他人心智を修する時、修する諸智に關する論究の中の知他人心智と苦智との相修論の第四俱非句より始る。

【二】知他人心智を修する時、習智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

凡夫人が若しくは本得若しくは本不得の知他人心智を現在前するときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも此れが知他人心智に非ずして是の時知他人心智を修することを得るときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の知他人心智を現在前するときと、是れを知他人心智を修するも苦智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが苦智を修するも知他人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と苦未知智とのときと、知他人心智の無きものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の苦智を現在前するときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも是の時知他人心智を修することを得ざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前して是の時苦智を修することを得るも知他人心智は非らざるときと、是れを苦智を修するも知他人心智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが知他人心智と苦智とを修するものなりや。答へて曰く、知他人心智のあるものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本不得の無漏智を現在前し若しくは本不得の世俗智を現在前して是の時知他人心智と苦智とを修することを得るときと、是れを知他人心智と苦智とを修するものと謂ふなり。

阿毘曇八變度論卷十一

【七】 知他人心智無きものは、發智論に未離欲染者とあり。

夫人が若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するときと、所修行の苦未知智邊と習・盡未知智邊とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の世俗智を現在前するも此れが知他人心智に非ざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時知他人心智を修せざるときと、是れを等智を修するも知他人心智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが知他人心智と等智とを修するものなりや。答へて曰く、知他人心智のある凡夫人が若しくは本得若しくは本不得の知他人心智を現在前するときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも此れが知他人心智に非ずして是の時知他人心智を修するを得るときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の知他人心智を現在前して此れが是れ等智なるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前して是の時知他人心智を修するを得るときと、若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時知他人心智と等智とを修するを得るときと、是れを知他人心智と等智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが知他人心智と等智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と習・盡道法智とのときと、知他人心智無きものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前して此れが知他人心智に非ざるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時知他人心智と等智とを修せざるときと、^{六〇}一切の染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときとに、知他人心智と等智とを修せざるをもて、是れを知他人心智と等智とを修せざるものと謂ふなり。

^{六一}若し知他人心智を修する時は、彼れは苦智をもなりや。答へて曰く、或は知他人智を修するも苦智は非らざるものあり。

(一)云何んが知他人心智を修するも苦智は非らざるものなりや。答へて曰く、知他人心智のある

【六〇】各本共、一切の次に「無知他人心智凡夫人」の九字あるも、發智論には無く、又、法相上より、知他人心智無き凡夫人と雖も善心のときは等智を修するを得るを以つて「無知他人心智凡夫人」の規定のみに第四句に當嵌らず、故に發智論に従つて之れを除却せり。

【六一】知他人心智を修する時、苦智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

(二)云何んが道智を修するも未知智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の道法智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の道智を現在前するも此れが未知智に非ざるときと、是れを道智を修するも未知智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが未知智と道智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前して此れが是れ道智なるときと、若しくは本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時未知智と道智とを修することを得るときと、是れを未知智と道智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが未知智と道智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と習・盡法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが未知智と道智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時未知智と道智とを修せざるときと、得るときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときに、未知智と道智とを修せざるをもて、是れを未知智と道智とを修せざるものと謂ふなり。^{六五}

若し知他人心智を修する時は、彼れは等智をもなりや。答へて曰く、或は知他人心智を修するも等智は非らざるものあり。

(一)云何んが知他人心智を修するも等智は非らざるものなりや。答へて曰く、知他人心智のあるものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前して此れが是れ知他人心智なるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時知他人心智を修することを得るも等智は非らざるときと、是れを知他人心智を修するも等智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等智を修するも知他人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、知他人心智無き凡

【六五】茲に「未知智覺る」の夾註あり。

【六六】知他人心智を修する時、等智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

【六七】「知他人心智のあるもの」とは、發智論に、已離欲染者とあり。

知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前するも此れが盡智に非ざるときと、是れを未知智を修するも盡智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが盡智を修するも未知智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の盡法智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の盡智を現在前するも此れが未知智に非ざるときと、是れを盡智を修するも未知智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが未知智と盡智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の盡未知智と道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前して此れが是れ盡智なるときと、若しくは本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時未知智と盡智とを修することを得るときと、是れを未知智と盡智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが未知智と盡智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と習・道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが未知智と盡智とに非ざるときと、若しくは本得、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時未知智と盡智とを修せざるときと、得るときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときに、未知智と盡智とを修せざるをもて、是れを未知智と盡智とを修せざるものと謂ふなり。

六四 若し未知智を修する時は、彼れは道智をもなりや。答へて曰く、或は未知智を修するも道智は非ざるものあり。

(一)云何んが未知智を修するも道智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦未知智と習・盡未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前するも此れが道智に非ざるときと、是れを未知智を修するも道智は非らざるものと謂ふなり。

【六四】未知智を修する時、道智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

ざるものあり。

(一)云何んが未知智を修するも習智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦未知智と盡未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前するも此れが習智に非ざるときと、是れを未知智を修するも習智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが習智を修するも未知智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の習法智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の習智を現在前するも此れが未知智に非ざるときと、是れを習智を修するも未知智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが未知智と習智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の習未知智と道未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前して此れが是れ習智なるときと、若しくは本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時未知智と習智とを修することを得るときと、是れを未知智と習智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが未知智と習智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と盡・道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが未知智と習智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時未知智と習智とを修せざることを得るときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときに、未知智と習智とを修せざるをもて、是れを未知智と習智とを修せざるものと謂ふなり。

^{六三}若し未知智を修する時は、彼れは盡智をもなりや。答へて曰く、或は未知智を修するも盡智は非らざるものあり。

(一)云何んが未知智を修するも盡智は非ざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦未知智と習未

【六三】未知智を修する時、盡智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

るときとに、未知智と等智とを修せざるをもて、是れを未知智と等智とを修せざるものと謂ふなり。
六二若し未知智を修する時は彼れは苦智をもちなりや。答へて曰く、或は未知智を修するも苦智は非らざるものあり。

(一)云何んが未知智を修するも苦智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の習未知智と盡未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前するも此れが苦智に非ざるときと、是れを未知智を修するも苦智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが苦智を修するも未知智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の苦智を現在前するも此れが未知智に非ざるときと、是れを苦智を修するも未知智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが未知智と苦智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の苦未知智のときと、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前して此れが是れ苦智なるときと、若しくは本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時未知智・苦智を修することを得るときと、是れを未知智と苦智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが未知智と苦智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の習・盡・道法智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが未知智と苦智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時未知智と苦智とを修せざることを得るときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するるときとに未知智と苦智とを修せざるをもて、是れを未知智と苦智とを修せざるものと謂ふなり。

六三若し未知智を修する時は彼れは習智をもちなりや。答へて曰く、或は未知智を修するも習智は非ら

【六二】未知智を修する時、苦智を修するや否やに就きて。これに四句分別あり。

【六三】未知智を修する時、習智を修するや否やに就きて。これに四句分別あり。

切の知他人心智の無き凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときとに、未知智と知他人心智とを修せざるをもて、是れを未知智と知他人心智とを修せざるものと謂ふなり。

若し未知智を修する時は、彼れは等智をもちたりや。答へて曰く、或は未知智を修するも等智は非らざるものあり。

(一)云何んが未知智を修するも等智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前するときと、若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時未知智を修することを得るも等智は非らざるときと、是れを未知智を修するも等智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等智を修するも未知智は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人が若しくは本得、若しくは本本得の世俗智を現在前するときと、學見迹若しくは阿羅漢が若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時未知智を修せざることを得るときと、是れを等智を修するも未知智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが未知智と等智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の苦未知智邊と習・盡未知智邊とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本不得の世俗智を現在前して是の時未知智を修することを得るときと、若しくは本不得の無漏智が現在前するも是の時等智を修することを得るときと、是れを未知智と等智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが未知智と等智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と習・盡・道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが未知智に非ざるときと、一切の染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前す

【六】 未知智を修する時、等智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

他人心智は非らざるものあり。

(一)云何んが未知智を修するも、知他人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦未智と習・盡未知智のときと、知他人心智無きものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前して此れが知他人心智に非ざるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前して是の時未知智を修することを得るも知他人心智は非らざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前して是の時未知智を修することを得るも知他人心智は非らざるときと、是れを未知智を修するも知他人心智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが知他人心智を修するも未知智は非らざるものなりや。答へて曰く、知他人心智のある凡夫人が、若しくは本得若しくは本不得の知他人心智を現在前するときと、若しくは本不得の世俗智を現在前して此れが知他人心智に非ずして是の時知他人心智を修することを得るときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の知他人心智を現在前するも此れが未知智に非ざるときと、是れを知他人心智を修するも未知智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが未知智と知他人心智とを修するものなりや。答へて曰く、知他人心智のあるものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前して此れが是れ知他人心智なるときと、若しくは本不得の無漏智若しくは本不得世俗智を現在前して是の時未知智と知他人心智とを修することを得るときと、是れを未知智と知他人心智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが未知智と知他人心智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と習・盡・道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが未知智と知他人心智とに非ざるときと、若しくは本得の世俗智を現在前するも此れが知他人心智に非ざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時未知智・知他人心智を修せざることを得るときと、一

のと謂ふなり。

^{五七}若し法智を修する時は彼れは道智をもなりや。答へて曰く、或は法智を修するも道智は非らざるものあり。

(一)云何んが法智を修するも道智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と習・盡法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前するも此れが道智に非ざるときと、是れを法智を修するも道智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが道智を修するも法智は非らざるものなりや。答へて曰く、學見迹若しくは阿羅漢が本得の道智を現在前するも此れが法智に非ざるとき是れを道智を修するも法智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが法智と道智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の道法智のときと、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前するに此れが是れ道智なるるときと、若しくは本不得の世俗智若しくは本不得の無漏智を現在前するに是の時法智と道智とを修することを得るときと、是れ法智と道智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが法智と道智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦未知智と習・盡未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが法智と道智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時法智と道智とを修することを得ざるときと、一切の凡夫人と染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するるときとに、法智と道智とを修せざるをもて、是れを法智と道智とを修せざるものと謂ふなり。^{五八}

^{五九}若し未知智を修する時は、彼れは知他人人心智をもなりや。答へて曰く、或は未知智を修するも知

【五七】 法智を修する時、道智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

【五八】 茲に「法智竟る」の夾註あり。

【五九】 未知智を修する時、知他人人心智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときとに、法智と習智とを修せざるをもて、是れを法智と習智とを修せざるものと謂ふなり。

若し法智を修する時は、彼れは盡智をもちたりや。答へて曰く、或は法智を修するも盡智は非らざるものあり。

(一)云何んが法智を修するも盡智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と習・道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前するも此れが盡智に非ざるときと、是れを法智を修するも盡智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが盡智を修するも法智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の盡未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の盡智を現在前するも此れが法智に非ざるときと、是れを盡智を修するも法智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが法智と盡智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の盡法智のときと、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前し此れが是れ盡智なるときと、若しくは本不得の世俗智、若しくは本不得無漏智を現在前して是の時法智と盡智とを修することを得るときと、是れを法智と盡智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが法智と盡智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦未知智・習未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが法智と盡智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時法智と盡智とを修することを得ざるときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍が現在前するときとに、法智と盡智とを修せざるをもて、是れを法智と盡智とを修せざるも

【癸】法智を修する時、盡智を修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するに彼れが法智にも非ず亦、苦智にも非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時法智と苦智とを五智修することを得ざるときと、一切の凡夫人と、染汚心・無記心のとときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときに、法智と苦智とを修せざるをもて、是れを法智と苦智とを修せざるものと謂ふなり。

五五若し法智を修する時は、彼れは習智をもちたりや。答へて曰く、或は法智を修するも習智は非らざるものあり。

(一)云何んが法智を修するも習智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と盡・道法智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前するも此れが習智に非ざるときと、是れを法智を修するも習智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが習智を修するも法智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の習未知智のとときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の習智を現在前するも此れが法智に非ざるときと、是れを習智を修するも法智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが法智と習智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の習法智のとときと、所修行の道未知智のとときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前するも彼れが是れ習智なるときと、若しくは本不得の無漏智若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時法智と習智とを修することを得るときと、是れを法智と習智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが法智と習智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の盡未知智のとときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するも此れが法智と習智とに非ざるときと、若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前するも、是の時法智と習智とを修することを得ざるときと、

【四】大正本には不修とあるも、三本・宮本に依りて修と改む。

【五】法智を修する時、習智をも修するや否やに就きて、これに四句分別あり。

(三)云何んが法智と等智とを修するや。答へて曰く、學見迹若しくは阿羅漢が本不得の無漏智を現在前して是の時世俗智を修することを得るときと、若しくは本不得の世俗智を現在前して是の時無漏智を修することを得るときと、是れを法智と等智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが法智と等智とを修せざるものなりや。答へて曰く、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するに彼れが法智に非ざるときと、一切の染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入るときと、無想天と、一切の忍を現在前するときに、法智と等智とを修せざるをもて、是れを法智と等智とを修せざるものと謂ふなり。

若し法智を修する時は、彼れは苦智をもなりや。答へて曰く、或は法智を修するも苦智は非らざるものあり。

(一)云何んが法智を修するも苦智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の習・盡・道法智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前するも彼れが苦智に非ざるときと、是れを法智を修するも、苦智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが苦智を修するも、法智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の苦智を現在前するも彼れが法智に非ざるときと、是れを苦智を修するも法智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが法智と苦智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智のときと、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前するも此れが是れ苦智なるときと、若しくは本不得の無漏智、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時法智と苦智とを修することを得るときと、是れを法智と苦智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが法智と苦智とを修せざるものなりや。答へて曰く、所修行の習・盡未知智のときと、

を修せざるは、道未知智は有頂を對治するものなるに、等智は有頂を對治すること能はざればなり。(俱舍二六卷)

【三】本の字は大正本に無きも、三本・宮本によりて附せり。

【五】三未知智の後邊に等智を未來修として修するは、等智は無始以來、苦を知り集を斷じ滅を證し來れを以つて今無漏の未知智にて苦を知り集を斷じ滅を證するも亦、之れと同じければなり。されど道に對しては未だ曾て事現觀をなしたること無きを以つて、道未知智のときその後邊に未來修として世俗智を修せざるなり。(俱舍、二六)

【六】法智を修する時、苦智を修するや否やに就きて。

これに四句分別あり。

人心智なるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前し是の時法智と知他人人心智とを修することを
得るときと、若しくは本不得の世俗智を現在前し是の時法智と知他人人心智とを修することを
得るときと、是れを法智と知他人人心智とを修するものと謂ふなり。

(四)云何んが法智を修せず知他人人心智をも修するに非ざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦
未知智と習未知智と盡未知智とのときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の無漏智を現在前するに彼
れが法智、知他人人心智に非ざるときと、若しくは本得の世俗智を現在前するに彼れが知他人人心智に非
ざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するに是の時法智と知他人人心智とを修するを得ざ
るときと、一切の知他人人心智無き凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧・滅盡三昧に入ると
きと、無想天と、一切の忍が現在前するときに、法智と智他人人心智とを修せざるをもて、是れを
法智を修せず知他人人心智をも修するに非ざるものと謂ふなり。

若し法智を修する時は、彼れは等智をもなりや。答へて曰く、或は法智を修するも等智は非ざる
ものあり。

(一)云何んが法智を修するも等智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智と習・盡
道法智とを修するときに、道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前すると
きと、若しくは本不得の無漏智を現在前するに是の時法智を修することを得るも等智は非らざる
ときと、是れを法智を修するも等智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等智を修するも法智は非らざるものなりや。答へて曰く、凡夫人が若しくは本得若し
くは本不得の世俗智を現在前するときに、所修行の苦未知智邊と習・盡未知智邊とのときと、學
見迹若しくは阿羅漢が若しくは本得若しくは本不得の世俗智を現在前して是の時法智を修すること
を得ざるときと、是れを等智を修するも法智は非らざるものと謂ふなり。

きて。

【四三】 知他人人心智無きものと
は、發智論に未離欲染者とあ
り。即ち未だ欲染を離れざれ
ば知他人人心智無きを以つて兩
者は語異も義同じきなり。

【四四】 道未知智との二智のみ
は道智と未知智との二智のみ
を修するも、未來には世俗智
を除く七智を修することを
得るなり。故に今の場合「知他
人心智無きもの」といふ限
定を附せるなり。

【四五】 大正本には、得是時不
修とあるも、三本・宮本に「是
時不得修」とあるに従ひて斯
く讀みしなり。

【四六】 知他人人心智あるもの、
とは發智論に已離欲染者とあ
り、已に欲界の染を離れしも
のには知他人人心智あるを以つ
て兩者は語異も義は同じき
なり。

【四七】 大正本には彼の上に修
の字あるも、三本・宮本に依
りて之を除けり。

【四八】 大正本には是の上に得
の字あるも、三本・宮本に依
りて之を除けり。

【四九】 法智を修する時、等智
を修するや否やに就きて。

【五〇】 道未知智のとき、等智

(四)云何んが法智を修せず未知智をも修せざるものなりや。答へて曰く、學見迹若しくは阿羅漢が本得の世俗智を現在前するときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するも是の時法智と未知智とを修することを得ざるときと、一切凡夫人と、染汚心・無記心のときと、無想三昧に入るときと、滅盡三昧に入るときと、無想天と一切の忍が現在前するときとに、法智を修せず、未知智を修せざるをもて、是れを法智を修せず未知智をも修せざるものと謂ふなり。

若し法智を修する時なれば、彼れは知他人人心智をものなりや。答へて曰く、或は法智を修するも知他人人心智は非らざるものあり。

(一)云何んが法智を修するも知他人人心智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智・習法智・盡法智・道法智のときと、知他人人心智無きものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前するも彼れが知他人人心智に非ざるときと、若しくは本不得の無漏智を現在前するも、是の時知他人人心智を修することを得ざるときと、若しくは本不得の世俗智を現在前し是の時法智を修することを得るも知他人人心智は非らざるときと、是れを法智を修するも知他人人心智は非らざるものといふなり。

(二)云何んが知他人人心智を修するも法智は非らざるものなりや。答へて曰く、知他人人心智のある凡夫人が若しくは本得若しくは本不得の知他人人心智を現在前するときと、若しくは本不得の世俗智を現在前するに彼れが知他人人心智に非ずして是の時知他人人心智を修することを得るときと、學見迹若しくは阿羅漢が若しくは本得の知他人人心智を現在前するに此れが法智に非ざるときと、是れを知他人人心智を修するも法智は非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが法智と知他人人心智とを修するものなりや。答へて曰く、知他人人心智のあるものの所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が、本得の法智を現在前するに、彼れが是れ知他人

慧を以つて已に具きに四聖諦の迹を見るが故に有學の聖者を學見迹といふなり。

【三七】本得とは、曾得の意にして、即ち、曾得法の現在前する時は勢力微弱なるが故に第二剎那に及ぶこと能はず、従つて餘類の未來のものを修することは不可能なるなり。

【三二】凡夫人には、無漏智無きが故に法智・未知智を修すること能はざるなり。

【三九】染汚心は、順退分にして其の性沉重且つ懈怠と相應するを以つて、自らをも尙修すること能はざるものなれば況んや他の無漏を修すること能はざるなり。即ち、順勝分にして其の性輕妙且つ精進と相應するもののみが能く善を修することを得るなり。

【四〇】無記心は卑下羸劣にして腐れたる種子の如きを以つて自らをすら修すること能はざるなり。

何となれば、堅勝なる心のみが能く修することを得るなり。

【四一】無想天に善心なしとする者あり。或は善心ありと許すものもそは生得の善心のみなれば、有漏善心すら修すること無し況んや無漏心を修することあらんと言へり。

【四二】法智を修する時、知他人人心智をも修するや否やに就

人心智無ければ六にして、知他人人心智あれば七なり。盡未知忍と盡未知智と道法忍とのときも、知他人人心智無ければ六にして、知他人人心智あれば七なり。道法智のとき、知他人人心智無ければ七にして、知他人人心智あれば八なり。道未知忍と道未知智とのときも、知他人人心智無ければ七にして、知他人人心智あれば八なり。

若し道智を成就するものなれば、此の八智に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は七・八智を成就するものあり。云何んが七なりや。答へて曰く、道法智のとき、知他人人心智無ければ七にして、知他人人心智あれば八なり。道未知忍と道未知智とのときも、知他人人心智無ければ七にして、知他人人心智あれば八なり。

第三節 八智の相修關係に就きて

若し法智を修する時は、彼れは未知智をも修するや。答へて曰く、或は法智を修するも未知智を修するに非ざるものあり。

(一)云何んが法智を修するも未知智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦法智・習法智・盡法智・道法智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の法智を現在前するときと、是れを法智を修するも未知智は非らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが未知智を修するも法智は非らざるものなりや。答へて曰く、所修行の苦未知智・習未知智・盡未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が本得の未知智を現在前するときと、是れを未知智を修するも法智は非らざるものと謂ふなり。

(三)云何んが法智と未知智とを修するものなりや。答へて曰く、所修行の道未知智のときと、學見迹若しくは阿羅漢が若しくは本未得の無漏智、若しくは本未得の世俗智を現在前して是の時法智と未知智とを修するを得るときと、是れを法智と未知智とを修するものと謂ふなり。

就する智の數に就きて。
【三】盡智を成就する時、成就する智の數に就きて。
【三】道智を成就する時、成就する智の數に就きて。
【三】此の下に「二成就門竟る」の夾註あり。

【四】本節は、卷初の頌文の「修」に相應するものにして八智の一に就いて、その各各を修する時、幾智を修するやを明にせんとする段なり。而して、茲に修とは、得修・習修・對治修・除遣修の四修の中、得修と習修との二修を指す。

因みに、此の論を作す所以は、「善と染と淨記とは皆修の義あり」との異執、及び「過去・未來には實體無きが故に未來修無し」との異執を破して、修は唯、善有爲法にのみあり、又、未來修もあることを顯さんが爲めなりとなり。尙、本節を理解せんが爲めには、婆沙百七卷(毘婆沙十二、一五二頁以下)の「八智の習修得修に就きての補特伽羅分別」の項を參考すべし。
【三】法智を修する時、未知智を修するや否やに就きて。これに四句分別あり。

【三】學見迹の學とは、預流・一來・不還の補特伽羅を謂ひ、迹とは四聖諦を謂ひ、無漏の

とのとき、知他人心智無ければ六にして知他人心智あれば七なり。道法智のとき、知他人心智無ければ七にして、知他人心智あれば八なり。道未知忍と道未知智とのとき、知他人心智無ければ七にして、知他人心智あれば八なり。

若し知他人心智を成就するものなれば、此の八智に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は二・四・五・六・七・八智を成就するものあり。云何んが二なりや。答へて曰く、凡夫人は二なり。無垢人にして苦法忍が現在前するときは二なり。苦法智のときは四なり。苦未知忍のときは四なり。苦未知智のときは五なり、習法忍のときは五なり。習法智のときは六なり。習未知忍と習未知智と盡法忍とのときは六なり。盡法智のときは七なり、盡未知忍と盡未知智と道法忍とのときは七なり。道法智のときは八なり、道未知忍と道未知智とのときは八なり。

若し等智を成就するものなれば、此の八智に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は一・二・三・四・五・六・七・八智を成就するものあり。云何んが一なりや。答へて曰く、知他人心智無ければ、凡夫人は一にして、無垢人の苦法忍の現在前するときは二なり。知他人心智あれば、凡夫人は二にして、無垢人の苦法忍現在前のときは二なり。苦法智のとき知他人心智無ければ三にして、知他人心智あれば四なり。苦未知忍のとき、知他人心智無ければ三にして、知他人心智あれば四なり。苦未知智のとき、知他人心智無ければ四にして、知他人心智あれば五なり。習法忍のとき、知他人心智無ければ四にして、知他人心智あれば五なり。習法智のとき、知他人心智無ければ五にして、知他人心智あれば六なり。習未知忍と習未知智と盡法忍とのとき、知他人心智無ければ五にして、知他人心智あれば六なり。盡法智のとき、知他人心智無ければ六にして、知他人心智あれば七なり。盡未知忍と盡未知智と道法忍とのとき、知他人心智無ければ六にして、知他人心智あれば七なり。道法智のとき、知他人心智無ければ七にして、知他人心智あれば八なり。道未知忍と道未知

【五】云何んが苦智なりや。答ふ、諸行に於て苦・非常・空・非我の行相と作りて轉ずる智なり。

【六】云何んが集智なりや。答ふ、諸行の因に於て因・集・生・縁の行相と作りて轉ずる智なり。

【七】云何んが滅智なりや。答ふ、諸行の滅に於て滅・靜・妙・離の行相と作りて轉ずる智なり。

【八】云何んが道智なりや。答ふ、諸行の對治道に於て道・如・行・出の行相と作りて轉ずる智なり。

尚、此等の智の解説に就きては婆沙百六卷、(毘曇部十二、頁一四〇)を參見すべし。

【七】此の下に「攝門竟る」の割註あり。

【八】本節は、卷頭の頌文の「成就」に相應する段にして八智の一一に就きて、其の一を成就するときは八智の幾くを成就するやをあらゆる場合に就きて考察したるもの。

因みに、此の論を作す所以は譬喩者が實の成就性・不成就性無しと執するを破せんが爲めなりとなり。

(婆沙百六卷、毘曇部十二、一四五頁參照)。

【九】法智を成就する時成就する智の數に就きて。

習智と盡智とにつきても亦、是くの如し。

道智は、道智と三智の少有入とを攝す、法智と未知智と知他人心智とのなり。^七

第二節 八智相互の成就關係に就きて

九 若し法智を成就するものなれば、此の八智に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。答へて曰く、或は三・四・五・六・七・八智を成就するものあり。云何んが三なりや。答へて曰く、苦法智のとき、知他人心智無ければ三にして、知他人心智あれば四なり。苦未知智のとき、知他人心智無ければ四にして、知他人心智あれば五なり。習法智のとき、知他人心智無ければ五にして、知他人心智あれば六なり。習未知智と盡法忍とのとき、知他人心智無ければ六にして、知他人心智あれば七なり。盡法智のとき、知他人心智無ければ七にして、知他人心智あれば八なり。道未知忍と道未知智とのとき、知他人心智無ければ七にして、知他人心智あれば八なり。道未知忍と道未知智とのとき、知他人心智無ければ七にして、知他人心智あれば八なり。

する段なり。其の作論の緣由は分別論者の「他性を攝し、自性を攝するに非ず」との主張を破せんが爲めなりとは婆沙論の説明する所なり。因みに、分別論者が他性を攝し自性を攝せずと主張する理由並びに其れに對する反駁等に就きては婆沙卷第五九、八毘曇部九、三六四頁以下を參見すべし。

【二】發智論(卷第八、大正二六、九五七頁中)は、茲に八智の各々の定義を附せり。即ち次の如し。

(一)云何んが法智なりや。答ふ、欲界の諸行、諸行の因、諸行の滅、諸行の能斷の道に於ける所有の無漏智と、又法智及び法智の地に於ける所有の無漏智と、是れを法智といふ。

(二)云何んが類智なりや。答ふ、色・無色界の諸行、諸行の因、諸行の滅、諸行の能斷の道に於ける所有の無漏智と、又類智及び類智の地に於ける所有の無漏智と、是れを類智といふ。

(三)云何んが他心智なりや。答ふ、若し智の心れ修の果にして他の現在の心所法を知るものなり。

(四)云何んが世俗智なりや。答ふ、三界の有漏慧なり。

此の想は當に法智と相應すと言ふべきや、未知智・知他人心智・等智・苦智・習智・盡智・道智と相應すと言ふべきや。當に有覺有觀なりと言ふべきや、無覺有觀なりや、無覺無觀なりや。當に樂根と相應すと言ふべきや、喜根・譚根と相應するや。當に空なりと言ふべきや、無相・無願なりや。當に欲界繫を緣すと言ふべきや。色・無色界繫を緣するや、不繫を緣するや。

〔三〕又、世尊の言く「比丘よ、七處善と三觀義とは、速かに此の法に於て有漏を盡くすことを得」と。

色の苦色の習・色の盡・色の道迹・色の味の患・色の棄出を分別して如實に之れを知る、此の智は當に法智なりと言ふべきや。當に乃至、道智なりと言ふべきや。痛・想・行・識につきても、亦是くの如し。

云何んが色の盡なりや。云何んが色の棄出なりや。色の盡と色の棄出とに何の差別有りや。云何んが痛・想・行の……なりや。云何んが識の盡なりや。云何んが識の棄出なりや。識の盡と識の棄出とに何の差別有りや。

此の章の義を願はくは具さに演說せん。

一五 第一節 八智の相攝關係に就きて

一六 八智あり。法智と未知智と知他人心智と等智と苦智と習智と盡智と道智となり。

法智は、法智と五智の少有入とを攝す、知他人心智と苦智と習智と盡智と道智との少有入なり。

未知智は、未知智と五智の少有入とを攝す、知他人心智と苦智と習智と盡智と道智とのなり。

知他人心智は、知他人心智と四智の少有入とを攝す、法智と未知智と等智と道智とのなり。

等智は、等智と一智の少有入とを攝す、知他人心智のなり。

苦智は、苦智と二智の少有入とを攝す、法智と未知智とのなり。

〔三〕 七處善に關する問題。

〔四〕 速は大正本に達とあるも、三本・宮本・聖本・聖乙本に從つて速と改む。

因みに、發智論も亦速なり。

【五】 本節は、本卷初頭の頌文中の「攝」に相當するものにして、八智、即ち

法智(dhamma-jāna)。

未知智(avayya-jāna)。

知他人心智(paricaita-jāna)。

等智(samvṛti-jāna)。

苦智(duḥkha-jāna)。

習智(samudaya-jāna)。

盡智(nirodha-jāna)。

道智(mārga-jāna)。

相互の相攝關係を明にせんと

苦智・習智・盡智を緣するや。

(五) 法智は法智のために幾縁として縁たること有りや。法智は未知智・知他人心智・等智・苦智・習智・盡智・道智のために幾縁として縁たりや。……乃至……道智は道智のために幾縁として縁たりや。道智は法智・未知智・知他人心智・等智・苦智・習智・盡智のために幾く縁として縁たりや。

(六) 若し諸の結にして欲界繫に在るものなれば、彼の結は法智が滅するものなり。設し結にして法智が滅するものなれば、是は欲界繫の結なりや。諸の結にして色・無色界繫に在るものなれば、彼の結は未知智が滅するものなりや。設し彼の結にして未知智が滅するものなれば、是は色・無色界繫の結なりや。

(七) 諸の結にして苦諦所斷なれば、彼の結は苦智所斷なりや。設し彼の結にして苦智所斷なれば、彼の結は苦諦所斷なりや。諸の結にして習諦・盡諦……諸の結にして道諦所斷なれば、彼の結は道智所斷なりや。設し彼の結にして道智所斷なれば、彼の結は道諦所斷なりや。

(八) 諸の結にして法智の所滅なれば、法智は彼の結の盡を證することを得るや。設し彼の結にして法智が盡を證することを得るものなれば、法智は彼の結の盡を證することを得るや。諸の結にして未知智の所滅なれば、未知智は彼の結の盡を證することを得るや。設し彼結にして未知智が盡を證することを得るものなれば、未知智は彼の結を滅するや。諸の結にして苦智・習智・盡智……諸の結にして道智の所滅なれば、道智は彼の結の盡を證することを得るや。設し彼の結にして道智が盡を證することを得るものなれば、道智は彼の結を滅するや。

(九) 眼根は幾智を用ひて知るや。乃至、無色界思惟所斷の無明使は幾智を用ひて知るや。

(十) 又世尊の言く「無常想を習し修行し廣布せば、欲愛を盡くし、色愛・無色愛を盡し、調を盡し、憍慢を盡し無明を盡す」と。

も、三本・宮本に従つて想と訂正す。

【四】 八智相攝の問題。

【五】 八智相互成就の問題。

【六】 八智相修の問題。

【七】 八智は幾く智を緣するやの問題。

【八】 八智は八智のために幾く縁となるやの問題。

【九】 結斷に於ける智の能力と限界との問題。

【一〇】 法智・未知智・四論智の結斷と其の盡作證の問題。

【一一】 眼根と乃至無色界思惟所斷の無明使とを知る智の十智分別の問題。

【一二】 無常想の問題。

卷の第十一 (第三編 智健度)

第四章 八智十智等に關する論究

(智健度修智跋渠第四之一) (發智論第八卷、大正・二六、九五七頁中)

本章の内容目次第一

攝と成就と修と縁すると

亦無常 想を作すと

縁となると滅と作證と智と

七處は最も後に在り。

本章の内容目次第二

四 (一)八智あり。法智と未知智と知他人心智と等智と苦智と習智と盡智と道智となり。法智は幾智を攝するや。乃至、道智は幾智を攝するや。

五 (二)若し法智を成就するものなれば、此の八智に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。乃至、道智を成就するものなれば、此の八智に於て幾くを成就し幾くを成就せざるや。

六 (三)若し法智を修するものなれば、彼れは未知智をも修するや。設し未知智を修するものなれば、法智をも修すること有りや。若し法智を修する時には知他人心智・等智・苦智・習智・盡智・道智をも修すること有りや。設し道智を修するものなれば彼れは法智をも修するや。若し乃至、盡

智を修するものなれば、道智をも修すること有りや。設し道智を修するものなれば盡智をも修すること有りや。

七 (四)頗し法智なれば、法智を縁するや。頗し法智なれば、知他人心智・等智・苦智・習智・盡智・道智を縁するや……。頗し道智なれば道智を縁するや。頗し道智なれば法智・未知智・智他人心智・等智・

【一】本章を修智跋渠と名けしは本章中に最も力説されし八智の相修論に因みしものならんか？

本章の内容は本文に本章内容目次として掲げられしが如くなるもこれを簡単に述べれば次の如し。

(一)八智の相攝論。

(二)八智の相互成就論。

(三)八智の相互修論。

(四)八智は八智を縁するや否や。

(五)八智は八智の與めに幾縁となるや。

(六)結を滅する智の能力とその限界。

(七)結を滅するものと、その滅を作證する智との關係。

(八)二十二根乃至九十八使を知る智の十智分別。

(九)無常想の諸門分別。

(十)七處善の論究。

【二】此の頌文に相當する發智論の頌文を示せば次の如し。

八智攝成修
相縁縁斷證
智知相七善

此章願具説。

【三】想は大本に念とある

【四九】法を修行すとは、諦を現觀すること。

【五〇】本節は、常・樂・我・淨の四顛倒(anthropoplisty)は、見所斷の惑を全斷せる須陀洹が一切皆斷盡せることを明す段なり。

而して、此の論ある所以は分別論者が顛倒に十二種を立て就中八種は見所斷なるも四種は修所斷なりと主張するを破せんが爲めなりとなり。

婆沙百四卷(毘曇部十二、頁九二)參照。
【五一】本節は、空・無相・無願の三三昧を須陀洹が三世に幾くを成就するやを明す段なり。而して、此の論究ある所以は

「過去・未來には實の自性無し」及び「實の成就性・不成就性無し」といふが如き異執を破せんが爲めなりとなり。

婆沙百四卷(毘曇部十二、頁九七以下)參照。
【五二】本節は、三世の諸道の習修得修に就きて、論究する段なり。

【五三】過去の道と已修已捨との關係。
大正本には過去の上に「前」の字あるも、三本・宮本に従つて之れを除却せり。

【五四】未嘗得の不淨觀乃至盡智が現在前する時なり。

の善をいひ、「已に捨す」とは、過去法をいふ。

因みに、「已に捨す」は發智論には「已に息む」とあり。

【五五】これは、不淨觀乃至盡智が現在前する時能く未來の無量剎那の善有爲法を修するに、其のときの第二剎那以後なり。

【五六】未嘗得道が初めて現在前するとき修する所の未來の彼の種類の道なり。因みに、本未得道とは未嘗得道のこと。

【五九】これは、不淨觀乃至盡智が現在前する時能く未來の無量剎那の善・有爲法を修するをいひ、而かも初剎那なるものをいふ。

【六〇】本得とは、曾得のこと。
【六一】現在の道と正修・正捨との關係。

【六二】未嘗得道が初めて現在前するとき修する所の未來の彼の種類の道なり。因みに、本未得道とは未嘗得道のこと。

【六三】大正本には、言の次に「一萬三千一百六十九言」の十字あるも、聖本・聖乙本に従つて之れを除けり。

に修せざるに非ず、已に猗せざるに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが道にして已に修せず、已に猗せざるも、此の道は未來ならざるものなりや。答へて曰く、未曾得道の現在前するものなれば、是れを道にして已に修せず已に猗せざるも此の道は未來ならざるものと爲すなり。

(三)云何んが道の未來にして此の道は已に修せず已に猗せざるものなりや。答へて曰く、若し道の未來にして已に修せず、已に猗せざるものなれば、是れを道の未來にして此の道は已に修せず、已に猗せざるものと謂ふなり。

(四)云何んが道にして未來にも非ず、此の道は已に修せざるにも非ず、已に猗せざるにも非ざるものなりや。答へて曰く、過去の道と。本得の道とが現在前するものなれば、是れを道にして未來にも非ず、此の道は已に修せざるにも非ず、已に猗せざるにも非ざるものと謂ふなり。

若し道にして現在前すれば一切の彼の道は、盡く修し猗するや。答へて曰く、是くの如し、若し道にして現在前せば一切の彼の道は盡く修し猗するなり。

頗し有る道にして修し猗するも此の道が現在前せざるものありや。答へて曰く、有り。本未得道の現在前するとき、餘の未來の彼の種の所修の道の如きなり。

阿毘曇知他人心智跋渠第三竟(梵本百三十二首盧也、秦二千七十四言)三

【五】學位の無漏慧なり。

【六】學位の四法智と四類智となり。

【七】無學の明及び智の自性。

【八】本節は、四諦を現觀する時最初に何等の證淨を得するやを明す段なり。

而して、八鍵度論の文相より

すれば四諦を現觀するとき各々に佛法僧に證淨を得するが

如し、而るに發智論、婆沙論、

阿毘曇毘婆沙論(五十三卷)等

に依れば何れも前三諦を現觀する時は法に於てのみ證淨を

得し道現觀の時、三寶に於て

證淨を得することになり居れり。

尙、此の外に戒證淨も得すべき

なれど戒には所緣無きを以つて

説かざりしなりといへり。因みに、證淨は舊婆沙には不

【九】等意解脱と盡智相應法との相應關係。

【一〇】智は大正本に學とあるも、聖本・聖乙本に従つて智と改む。

【一一】この下に「三世」との夾註あり。三世とは、心脫が現在、已脫が過去、當脫が未來なるをいふなり。

【一二】無疑竟解脱と無生智相應法との關係。

【一三】本節は、學の明及び智と無學の明及び智との自性を明にせる段なり。

而して、此の論究をなす所以は、世間に支明・事明、歌明乃至火明・水明等の種々の呪論を執して眞明となすが故に此れを適して勝義の眞明あることを明さんがためなりとなり。

婆沙百二卷(毘婆沙部十二、頁六六)を參照すべし。

因みに、婆沙論には明に關する精しき研究あり往見すべし。(婆沙百二卷)參照。

【一四】學の明及び智の自性。

壞信とあり。

而して、此の論究ある所以は分別論者の「四諦に於て一時に現觀す」との異執を破せんが爲めなりとなり。

婆沙百三卷(毘婆沙部十二、頁七九以下)參照。

無學の明とは云何ん。答へて曰く、無學の慧なり。
無學の智とは云何ん。答へて曰く、無學の八智なり。

第四節 諦現觀時に得する三證淨に就きて

法を修行する時、最初に何等の信を得するや。佛なりや、法なりや、僧なりや。答へて曰く、苦法を修行し、習法を修行し、盡法を修行し、道法を修行するとき、佛と法と僧とに信を得するなり。

第五節 四顛倒を須陀洹が滅するに就きて

此の四顛倒は須陀洹が幾くを滅し幾くを未だ滅せざるや。答へて曰く、一切を滅するなり。

第六節 三三昧を須陀洹が成就するに就きて

此の三三昧は須陀洹が幾く過去を成就し、幾く未來を成就し、幾く現在を成就するや。答へて曰く、盡く未來を成就し、已に滅して失せざれば即ち過去を成就し、若し現在前すれば現在を成就するなり。

第七節 三世の道の習修・得修に就きて

若し道にして過去なれば、一切の彼の道は已に修し、已に猗するや。答へて曰く、是くの如し、若し道にして過去なれば一切の彼の道は、已に修し已に猗するなり。

頗し有る道にして已に修し已に猗するも此の道は過去にあらざるものありや。答へて曰く、有り。未來の道にして已に修し已に猗するものなり。

若し道にして未來なれば、一切の彼の道は已に修せず、已に猗せざるや。答へて曰く、或は道は未來なるも、此の道は已に修せざるに非ず、已に猗せざるに非ざるものあり。

(一)云何んが道は未來なるも此の道は已に修せざるに非ず、已に猗せざるに非ざるものなりや。答へて曰く、未來の道にして已に修し已に猗せるものなれば、是れを道は未來なるも、此の道は已

【三】本節は、等意解脱即ち時愛心解脱と無疑意解脱即ち不動心解脱との定義及び等意解脱を愛と名くる理由、並びに等意解脱と盡智相應法との關係、無疑意解脱と無生智相應法との關係を明す段なり。而して此の論究をなす所以は、婆沙に據れば、

(一)時愛心解脱は有學にして有所作、不動心解脱は無學にして無所作なりとする説、
(二)時愛心解脱は有漏にして不動心解脱は無漏なりとする説、

(三)時愛心解脱は有爲にして不動心解脱は無爲なりとする説等の三の異執を破せんが爲めなりとなり。
婆沙百一卷(毘曇部十二、頁四六以下)参照。

【四】等意解脱の定義。
等意解脱とは時愛心解脱(samānanyidhi kāmā oti vinnatti)のこと。

【五】心脱とは心勝解と譯さる。
【六】無疑意解脱の定義。
無疑意解脱とは、不動心解脱(akopyā oti vinnatti)のこと。

【七】等意解脱を愛と名くる理由。
【八】念は大正本に忍とあるも、明本に従つて念と改む。

(一)云何んが等意解脱にして盡智と相應せざるものなりや。答へて曰く、等意解脱阿羅漢の無學の等見と相應すべき所の心脱・已脱・當脱なり。是れを等意解脱にして盡智と相應せざるものと言ふなり。

(二)云何んが盡智と相應するも等意解脱に非ざるものなりや。答へて曰く、無疑法阿羅漢の盡智と相應すべき所の心脱・已脱・當脱なり。是れを盡智と相應するも、等意解脱に非ざるものと言ふなり。

(三)云何んが等意解脱にして盡智と相應するものなりや。答へて曰く、等意解脱阿羅漢の盡智と相應すべき所の心脱・已脱・當脱なり。是れを等意解脱にして盡智をと相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが等意解脱にも非ず、盡智と相應するにも不ざるものなりや。答へて曰く、無疑法阿羅漢の無生智と無學の等見とに相應すべき所の心脱・已脱・當脱なり。是れを等意解脱にも非ず、盡智と相應するにも不ざるものと謂ふなり。

諸の無疑意解脱は盡く無生智と相應するや。答へて曰く、是くの如し。諸の無生智と相應するものは盡く無疑意解脱なり。

頗し有るは無疑意解脱にして無生智と相應せざるものありや。答へて曰く、有り。無疑法阿羅漢の盡智と無學の等見とに相應すべき所の心脱・已脱・當脱なり。

第三節 學・無學の明・智に就きて

云何んが學の明なりや。云何んが學の智なりや。

學の明とは云何ん。答へて曰く、學の慧なり。

學の智とは云何ん。答へて曰く、學の八智なり。

云何んが無學の明なりや。云何んが無學の智なりや。

を自相續と他相續との二に分ち、又、過去を此の生の過去と前生の過去との二に區別して、以つて四句分別をなせるものなり。

【二五】過去生時とは、現在の此の生の時に對するものにして即ち過去前生の時代に於てといふ程の意なり。

【二六】こは、自相續を緣ずる宿住隨念智なり。

【二七】「過去の此の生に於ける他の衆生……」とは、發智に「他の前生の過去に蘊・處・界の心相續を知る」とあり。

【二八】知は大正本に智とあるも、聖本・聖乙本に従つて知と改む。

【二九】こは、他相續を緣ずる願智と他相續を緣ずる宿住隨念智の加行となり。

而して、願智に通じて三世を緣ずるも今は此の生の過去事を緣ずるもののみを取り、又、宿住隨念智の加行は此の生の過去事のみを緣じ、前生のものを緣ずること能はざるなり。

【三〇】知は大正本に智とあるも、三本・宮本に依りて知と改む。

【三一】こは、他相續を緣ずる願智と宿住隨念智となり。

【三二】こは、自相續を緣ずる願智と自相續を緣ずる宿住隨念智の加行となり。

にして所修・所修の果・憶の所修・已得不失にして用ふべき所に智が現在前して過去生時の他の衆生の即ち他人の所更の持・陰・入・心三〇を 知るものなり。是れを識宿命智にして亦、過去の他人の心所念法を知るものと謂ふなり。

(四)云何んが識宿命智にも非ず、亦、過去の他人の心所念法をも知らざるものなりや。答へて曰く若し智にして所修・所修の果・憶の所修・已得不失にして用ふべき所に智が現在前して過去の、此の生に於ける自の所更の持・陰・入・心を知るものなれば、是れを識宿命智にも非ず亦、過去の他人の心所念法をも知らざるものと謂ふなり。

第二節 等意解脫・無疑意解脫に關する論究

云何んが等意解脫なりや。云何んが無疑意解脫なりや。

等意解脫とは云何ん。答へて曰く、等意解脫阿羅漢の盡智と無學の等見とに相應すべき所の心脫。

已脫・當脫なり。是れを等意解脫と謂ふなり。

無疑意解脫とは云何ん。答へて曰く、無疑意法阿羅漢の盡智、無生智と無學の等見とに相應すべき所の心脫已脫・當脫なり。是れを無疑意解脫と謂ふなり。

何等を以つての故に等意解脫を愛と言ふや。答へて曰く、等意解脫阿羅漢は此の法を護り、自らを受し取藏すればなり。彼の等意解脫阿羅漢は善く自らを護り愛し取藏し、我れ此の法に於て退すること莫らんとす。譬へば母人に一子有り、愛念して常に目を離たず、彼の母人は此れを養護し

攝覆して寒からず、熱からず、飢へず、渴せず、衆惱有ること無からしむるが如く、是くの如く、等意解脫阿羅漢も此の法を自ら護り取藏するなり。彼の等意解脫阿羅漢は善く自ら護り取藏して我れ此の法より退くこと莫らんとする、是れを以つての故に等意解脫を愛と言ふなり。

諸の等意解脫は盡智と相應するや。答へて曰く、或は等意解脫にして盡智と相應せざるものあり。

ま知るものとの難・不難論。

こは、知他人心智と知他人心智に非ざるものにして而も他人の心を知る智との難・不難論を明すものなり。

【一〇】相を視て他人の心を知るは視相智にして、他の語を聞きて他人の心を知るは聞語智なり。

此の二智の説明は婆沙百卷(毘曇部十二、頁三〇)にあり往見すべし。

尚、此の外發智論には茲に生處得智をも説けり。

【一一】非は大正本に不とあるも、三本・宮本に從つて非とせり。

【一二】識宿命智と宿命を知るものとの難・不難論。

こは、識宿命智と識宿命智に非ずして而も宿命を知る所の智との難・不難關係を明すなり。

【一三】以下の文に相應する發智論の文を擧ぐれば次の如し。一人有り本性念生智を得し或は是くの如き生處得智を得して能く現に諸の宿住の事を憶知するが如しと。

【一四】識宿命智は過去の他人の心所念法を知るや否やに就きて。こは、能縁の智を識宿命智と識宿命智に非ずして過去の事を知る智(願智と識宿命智の加行と)とに分ち、所縁の境

過去・未來なるものなれば、是れを識宿命智にして彼れは宿命を知らざるものと謂ふなり。

(二)云何んが宿命を識るも識宿命智に非ざるものなりや。答へて曰く、^{三三}生により宿命を其の色像の如くに識るものと、生により此の智を得して宿命を識るものとの如き、是れを宿命を識るも識宿命智に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが識宿命智にして彼れが宿命を識るものなりや。答へて曰く、若し智にして所修・所修の果、憶の所修・已得不失にして用ふべき所に智が現在前して其の相貌の如く無数の生の宿命を識るものなれば、是れを識宿命智にして彼れが宿命を識るものと謂ふなり。

(四)云何んが識宿命智にも非ず、宿命を識るにも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

若し識宿命智なれば、彼れは過去の他人の心所念法を知るや。答へて曰く、或は識宿命智にして彼れは過去の他人の心所念法を知らざるものあり。

(一)云何んが識宿命智にして彼れは過去の他人の心所念法を知らざるものなりや。答へて曰く、若し智にして所修・所修の果、憶の所修・已得不失にして用ふべき所に智が現在前して^{三三}過去生時に自が更し持・陰・入・心を知るものなれば、是れを識宿命智にして彼れは過去の他人の心所念法を知らざるものと謂ふなり。^{三三}

(二)云何んが、過去の他人の心所念法を知るも識宿命智に非ざるものなりや。答へて曰く、若し智にして所修・所修の果・憶の所修・已得不失にして用ふべき所に智が現在前して^{三七}過去の、此の生に於ける他の衆生の他人の即ち所更の持・陰・入・心を知るものなれば、是れを過去の他人の心念法を知るも識宿命智に非ざるものと謂ふなり。^{三七}

(三)云何んが識宿命智にして亦、過去の他人の心所念法を知るものなりや。答へて曰く、若し智

欲界と初禪との心心所法をいひ、所觀(有所伺察)とは、中間定(或は欲界乃至中間定)の心所を謂ひ、

所行(有所攝受)とは、後三禪(或は欲界乃至第四禪)の心心所法をいひ、

已覺意性(意及意所有)とは、心所法をいふ。

【七】識宿命智(宿住隨念智)の定義。

【八】其の相貌の如く無数の生の宿命を知る」とは、發智論に「諸の宿住事の種々の相貌と及び所言説とを憶知す」とあり。

而かも、その中の相貌と所言説とが何を指すやに就きては五の異説あり。

(一)相狀とは、生有・本有・死有をいひ、所言説とは中有をいふとする説。

(二)相狀とは、中有をいひ、所言説とは生有・本有・死有をいふとするもの。

(三)相狀とは、前生の事を略顯し、所言説とは前生の事を廣顯するとなす説。

(四)相狀とは、過去の所詮表の事を顯はし、所言説とは過去の能詮表の事を顯すと説。

(五)相狀とは、外の六處をいふとする説。

【九】知他人心智と他人の心

識宿命智 (pūva-nivāsanusmṛti-jñāna) とは云何ん。答へて曰く、若し智にして所修、所修の果、憶の所修、已得不失にして、用ふべき所に智が現在前して、^{二六}其の相貌の如く、無数の生の宿命を識るものなれば、是れを識宿命智と謂ふなり。

若し知他人心智なれば、即ち他人の心を知るや。答へて曰く、或は知他人心智にして他人の心を知るに非ざるものあり。

(一)云何んが知他人心智にして他人の心を知るに非ざるものなりや。答へて曰く、若し知他人心智にして過去・未來なるものなり。是れを知他人心智にして、即ち他人の心を知るに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが他人の心を知るも知他人心智に非ざるものなりや。答へて曰く、是の相を觀、他の語を聞きて他人の心を知るが如きもの、是れを他人の心を知るも知他人心智に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが知他人心智にして亦、他人の心を知るものなりや。答へて曰く、若し智にして所修、所修の果、憶の所修、已得不失にして用ふべき所に智が現在前して他の衆生の即ち他人の所覺・所觀・所行・已覺・意性を如實に之れを知るものなり。是れを知他人心智にして亦、他人の心を知るものと謂ふなり。

(四)云何んが知他人心智にも、^{二七}非ず亦、他人の心を知るに不ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

若し識宿命智なれば即ち宿命を識るや。答へて曰く、或は識宿命智にして即ち宿命を識らざるものあり。

(一)云何んが識宿命智にして即ち宿命を識らざるものなりや。答へて曰く、若し識宿命智にして

頁一以下参照すべし。

【三】 知他人心智(他心智)の定義。

因みに、發智論は次の如く譯し居れり。

「若し智の修所成、是れ修の果、修に依止し已得不失にして能く他の相續の現在の欲・色界の心心所法或は無漏の心心所法を知るものなれば是れを他心智と謂ふ」と。

【四】 所修とは、知他人心智が修所成の慧を自性ととなすをいひ、

所修の果とは、此の智が四支五支の禪の果なるをいひ、憶の所修とは、此の智が數智によりて成就するをいふ。

【五】 以下の文は、婆沙論が別論有りて言く、とて「若し智の現起するものにして他の有情の尋求する所有り、伺察する所有り、攝受する所有り、衆縁より起る所の意と意の所有りとを如實に知るものなれば是れを他心智と謂ふ」と言へる文と一致するもの如し。

又、此の文の解釋に就きても異説を唱へしものあること婆沙論中に見ゆ。此の事柄は婆沙論編纂當時已に八健度論の原本が發智論の原本よりも異なるものとして取扱はれて一の證據たるべし。

【六】 所覺(有所尋求)とは、

解脱なりや。

諸の無疑意解脱の彼の一切は、無生智と相應するや。設し無生智と相應するものなれば、彼の一切は無疑意解脱なりや。

六 (二)云何んが學の明なりや。云何んが學の智なりや。

云何んが無學の明なりや。云何んが無學の智なりや。

七 (四)法を修行する時、最初に得するものは何等の信なりや。佛なりや。法なりや。僧なりや。

八 (五)此の四顛倒を須陀洹は幾く減し、幾く減せざるや。

九 (六)此の三三昧を須陀洹は幾く過去に成就し、幾く未來に成就し、幾く現在に成就するや。

一〇 (七)若し道にして過去なれば、一切の彼の道は、已に修し已に修すや。設し道にして已に修し已に修すものなれば、一切の彼の道は過去なりや。

若し道にして未來なれば、一切の彼の道は修せず修せざるや。設し道にして修せず修せざるものなれば、一切の彼の道は未來なりや。

若し道にして現在なれば、一切の彼の道は當に修し、當に修すべきや。設し道にして當に修し、當に修すべきものなれば、一切の彼の道は現在なりや。

此の章の義を願くは具さに演說せん。

第一節 知他人心智及び識宿命智に關する論究

云何んが知他人心智なりや。云何んが識宿命智なりや。

一三 知他人心智 (Paricetiḥhāna) とは云何ん。答へて曰く、若し智にして、^{一四}所修、所修の果、憶の所

修、已得不失にして、^{一五}用ふべき所に智が現在前して、他の衆生の即ち他人の^{一六}所覺と所觀と所行と

已覺と意性とを如實に之れを知るものなれば、是れを知他人心智と謂ふなり。

明智^ト三證淨^ト、
顛倒等持修、
此章頗具說

【一四】 知他人心智と識宿命智とに關する問題。

【一五】 等意解脱と無疑意解脱とに關する問題。

【一六】 學明と無學明とに關する問題。

【一七】 諦現觀時に得する信(證淨)の問題。

【一八】 四顛倒に關する問題。

【一九】 三三昧に關する問題。

【二〇】 三世の道の修に關する問題。

【二一】 當修は大正本に無きも三本・宮本によりて補へり。次も同じ。

【二二】 本節は、知他人心智即ち他心智と識宿命智即ち宿住隨念智との二智の定義及び知他人心智と他の心を知る智との雜・不雜論並びに識宿命智と過去を知る智との雜・不雜論をなす段なり。
婆沙九十九卷、毘婆沙十二、

第二章 知他人心智(他心智)乃至善法の習修

得修に關する論究

(阿毘曇智度、知他心跋渠第三) (發智論卷第八、大正、二六頁九五六)

二 本章の內容目次 第一

三 知他人心に四あり、

及び愛にも亦五有り、

明と信と顛倒を滅すると、

三昧と道とを修行するとなり。

四 本章の內容目次 第二

(一)云何んが知他人心智なりや。

云何んが識宿命智なりや。

若し知他人心智なれば、即ち他人の心を知るや。設し他人の心を知るものなれば、是は知他人心智なりや。

若し識宿命智なれば即ち宿命を識るや。設し宿命を識るものなれば是は識宿命智なりや。

若し識宿命智なれば、彼れは過去の他人の心所念法を知るや。設し過去の他人の心所念法を知るものなれば、是は識宿命智なりや。

五 (二)云何んが等意解脱なりや。

云何んが無疑意解脱なりや。

何等の故を以つて等意解脱を愛と言ふや。

諸の等意解脱の彼の一切は盡智と相應するや。設し盡智と相應するものなれば、彼の一切は等意

【一】本章を知他人心智跋渠といへるは本章初頭に論ずる知他人心智論に因みて附せる名目なり。
而して、本章の内容は註三に示せるが如し。

【二】以下に於て本章の内容を簡條的に列擧するなり。

【三】「知他人心に四あり」とは、知他人心智及び識宿命智の定義等の四問題につきて論ずるをいひ、

「及び愛にも亦五あり」とは、等意解脱、無疑意解脱の定義等に關する五種問題を指し、

「明」とは、學・無學の明及び智の自性を明すをいひ、

「信」とは、諦現觀時に得する三證淨に關する論究を指し、

「顛倒を滅す」とは、須陀洹が四顛倒を滅するをいひ、

「三昧」とは、須陀洹の三世に於ける三三昧の成就關係を明すをいひ、

「道を修行す」とは、三世の諸道の習修・得修に關する論究を指すなり。
因みに、此の頌文に相應する發智論の頌文を示せば次の如し。

二智、二解脱

ひ、論事には「魔衆天が阿羅漢に不淨漏精を近く招來す。

(Māraḥāyika devatā Aruḥato anuśoṣaḥavisaḥāḥiṃ ṛā anu-
pharantit) K. V. II. 1.]
とあり。

【八四】第三惡見とその對治。

宗輪論には「阿羅漢にも猶無知あり」といひ、論事には「阿羅漢に無知あり。」(Athhi

Aruḥato aññāṇanti) K. V. II. 2.]とあり。

【八五】邪は大正本に耶とあるも、三本・宮本に従つて、邪と改む。

因みに發智論には、謗と譯せり。

【八六】第三惡見と其の對治。

宗輪論には「阿羅漢にも亦、猶預あり」といひ、論事も之

れと同じ。

(Athhi Aruḥato kaḥkhaṭṭu) K. V. II. 3.

【八七】第四惡見と其の對治。

宗輪論には「阿羅漢は他が悟入せしむ」といひ、論事も亦同じ。

(Athhi Aruḥato paravīraṇaṇṭu) K. V. II. 4.

【八八】第五惡見と其の對治。

宗輪論には「道は聲に因りて起る」といひ、十八部論には「聖道は亦、言の爲めに顯はさる」といひ、論事には

(Samaṇṇamasa athhi vaoi-
bhaddo) K. V. II. 5.]とあり。

【八九】この下に「五竟る此の品は以つて名となすなり」の夾註あり。

「衆生類を造るものなり」といふは、無作を作と言ふものなるをもつて、此は是れ戒盜にして苦諦所斷なり。

彼の長爪梵志の是の語——「一切を瞿曇よ、我れは忍ぜず」——を作すが如きは、此れ邊見中の斷滅の所攝にして苦諦所斷なり。「一切を、瞿曇よ、我れは忍ず」といふは此れ邊見中の有常の所攝にして苦諦所斷なり。「我れは有るは忍じ有るは忍ぜず」との中、彼の「有るは忍ず」といふは、此は邊見中の有常の所攝にして苦諦所斷なり。彼の「有るは忍ぜず」といふは、此れ邊見中の斷滅の所攝にして苦諦所斷なり。

第八節 阿羅漢に關する五種の惡見に就きて

(一)所謂、此の見——阿羅漢は不淨を失す、其の形像の精なる魔迦夷天が阿羅漢をして不淨を失して床褥を汚せしむるなり。——は、無作を作と言ふものなるをもつて、此は是れ戒盜にして苦諦所斷なり。

(二)所謂、此の見——阿羅漢は自ら脱するを知らず——は、阿羅漢には此の智無しと言ふ、此れを邪するものなるをもつて、邪見にして道諦所斷なり。

(三)所謂、此の見——阿羅漢は自ら脱するも狐疑す——は、阿羅漢が已に狐疑を越ゆるといふ、此れを邪するものなるをもつて、邪見にして道諦所斷なり。

(四)所謂、此の見——阿羅漢を得するを他に由りて知る——は、阿羅漢を得するは他に由らずして知るといふ、此れを邪するものなるをもつて、邪見にして道諦所斷なり。

(五)所謂、此の見——苦と稱言して道あり、苦と稱言して道種あり——は、無作を作と言ふものなるをもつて、此は是れ戒盜にして苦諦所斷なり。

阿毘曇五種跋渠第十四竟(梵本二百首盧長十四字、秦言三千五百四十九言)

ものなるが故に、梵王が世間を造化すと云ふが如きは、非因を因と計すものなるを以つて戒盜(戒禁取)なりとなり。

【七〇】梵迦夷天の惡見の自性と其の對治。

梵迦夷天(Chamukayana)とは梵衆天とも翻す。

【七一】造化は大正本に造業生類とあるも、宮本・聖乙本に従つて造化と改む。

【七二】長爪梵志の惡見の自性と其の對治。

こは忍論、不忍論、一分忍、一分不忍論なり。

【七三】長爪梵志の此の記事は巴利中部尼柯耶、第七十四經(Dighanika sutthanto)に出ず。

【七四】本節は、婆沙論に大天の五事の妄言にして教團の根本分派の原因となりしものと傳へられたる所の所謂阿羅漢に關する五種の惡見を取り扱へるものなり。

而して、茲に注目すべきことは、八健度論も發智論も共に

此の惡見を大天の主張と明顯せざるに婆沙論に來りて始めて大天と關係附けしめたりといふことなり。

(婆沙九十九卷毘曇部十一、頁三八六、以下參照)。

【七五】第一惡見と其の對治。

宗輪論には「阿羅漢にも餘の爲めに誘はること有り」とい

(四)云何んが見にも非ず慧の攝にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の兩所の事を除くものなり。

^{七三}非學非無學の智は非學非無學の慧を攝するや。答へて曰く、是くの如し。非學非無學の慧は非學非無學の智を攝するや。答へて曰く、是くの如し。

^{七三}成就と滅とも亦、是くの如し。

こは問と定理と攝と成就と滅となり。

^{七四}第七節 大梵天と梵衆天と長爪梵志との惡見に就きて

^{七五}彼の梵天は是の説「我れは此に於て梵なり、大梵なり、富めるものなり。」を作すが如きは、^{七六}卑法を盗みて最と爲すものなるを以つて、此は是れ見盜にして苦諦所斷なり。

「造化するものなり」と言ふは、^{七七}無作を作と云ふものなるをもつて、此は是れ戒盜にして苦諦所斷なり。

「妙なものなり」と言ふは、卑法を盗みて最と爲すものなるを以つて、此は是れ見盜にして苦諦所斷なり。

「衆生類を造るものなり」といふは、無作を作と言ふものなるをもつて、此は是れ戒盜にして苦諦所斷なり。

^{七八}彼の梵迦夷天が是の言「此は梵なり大梵なり、富めるものなり」——を作すが如きは、卑法を盗みて最と爲すをもつて、此は是れ見盜にして苦諦所斷なり。

^{七九}「造化するものなり」といふは、無作を作と言ふものなるをもつて此は是れ戒盜にして苦諦所斷なり。「妙なるものなり」と言ふは、卑法を盗みて最と爲すものなるを以つて此は是れ見盜にして苦諦所斷なり。

【七三】非學非無學の智と慧との相攝關係。

【七五】非學非無學の見・智・慧の成就論並びに已滅論。

發智論には茲に省略されし文が廣説され居れり。

【七四】本節は、(一)大梵天の起せし惡見の自性及びその對治、

(二)梵衆天の起せし惡見と其の對治、

(三)長爪梵志の起せし惡見とその對治等の所謂の惡見の問題を取り扱ふ段なり。

而して、斯かる論究をなすは、諸惡見は有情輪廻の根本なるを以つてそれを斷せしめんが爲めなりとなり。

婆沙九十八卷(毘婆沙部十一、頁三七二以下)參照。

【七五】大梵天の起せし惡見の自性と其の對治。

此の惡見に就きては、長阿含十四卷梵動經(大正一、頁九〇頁)、同十一卷阿夷夷經(大正一、頁六九)卷に出ず。

【七六】卑法とは、劣法のこと。

【七七】諸の有情は各々自業によりて内身と外物とを感ずる

七、非學非無學の見は非學非無學の智を攝するや。答へて曰く、或は非學非無學の見にして非學非無學の智の攝に非ざるものあり。

(一)云何んが見にして智の攝に非ざるものなりや。答へて曰く、眼根なり。是れを見にして智の攝に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが智にして見の攝に非ざるものなりや。答へて曰く、五見と世俗の等見とを除く諸餘の意識身と相應する有漏の慧と五識身と相應する慧となり。是れを智にして見の攝に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが見にして智の攝なるものなりや。答へて曰く、五見と世俗の等見となり。是れを見にして智の攝なるものと謂ふなり。

(四)云何んが見にも非ず、智の攝にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の兩所の事を除くものなり。

七、非學非無學の見は非學非無學の慧を攝するや。答へて曰く、或は非學非無學の見にして非學非無學の慧の攝に非ざるものあり。

(一)云何んが見にして慧の攝に非ざるものなりや。答へて曰く、眼根なり。是れを見にして慧の攝に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが慧にして見の攝に非ざるものなりや。答へて曰く、五見と世俗の等見とを除く諸餘の意識身と相應する有漏の慧と五識身と相應する慧となり。是れを慧にして見の攝に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが見にして慧の攝なるものなりや。答へて曰く、五見と世俗の等見となり。是れを見にして慧の攝なるものと謂ふなり。

【七】非學非無學の見と智との相攝關係。

【七】非學非無學の見と慧との相攝關係。

智に非ざるものあり。

(一)云何んか見にして智に非ざるものなりや。答へて曰く、^{六五}眼根なり、是れを見にして智に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが智にして見に非ざるものなりや。答へて曰く、五見と世俗の等見とを除く諸餘の意識身と相應する有漏の慧と^{六六}五識身と相應する慧となり。是れを智にして見に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが見にして智なるものなりや。答へて曰く、五見と世俗の等見となり。是れを見にして智なるものと謂ふなり。

(四)云何んが見にも非ず、智にも非ざるものなりや。答へて曰く、^{六七}上の爾所の事を除くものなり。

非學非無學の見は是れ非學非無學の慧なりや。答へて曰く、或は見にして慧に非ざるものあり。

(一)云何んが見にして慧に非ざるものなりや。答へて曰く、眼根なり。是れを見にして慧に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが慧にして見に非ざるものなりや。答へて曰く、五見と世俗の等見とを除く諸餘の意識身と相應する有漏の慧と五識身と相應する慧となり。是れを慧にして見に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが見にして慧なるものなりや。答へて曰く、五見と世俗の等見となり。是れを見にして慧なるものと謂ふなり。

(四)云何んが見にも非ず慧にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

非學非無學の智は是れ非學非無學の慧なりや。答へて曰く、是くの如し。設し非學非無學の慧なれば、是れ非學非無學の智なりや。答へて曰く、是くの如し。

【六五】眼根は能く観視するも審決するに非ざるが故なり。

【六六】五識身と相應する慧は能く審決するも推度の相無きが故なり。

【六七】「上の爾所の事を除くもの」とは、眼根を除く所餘の色蘊と、有漏の慧を除く諸餘の行蘊と、三蘊の全と、無爲となり。

【六八】非學非無學の見と慧との難・不雜論。これに四句分別あり。

【六九】非學非無學の智と慧との難・不雜論。

へて曰く、是くの如し。

【五九】 無學の見が無學の智を攝するや、無學の智が無學の見を攝するや。答へて曰く、無學の智は無學の見を攝するも、無學の見は無學の智を攝するに非ず。何等をか攝せざるや。答へて曰く、盡智と無生智となり。

無學の見が無學の慧を攝するや、無學の慧が無學の見を攝するや。答へて曰く、無學の慧は無學の見を攝するも、無學の見は無學の慧を攝するに非ざるあり。何等をか攝せざるや。答へて曰く、盡智・無生智なり。

無學の智は無學の慧を攝するや。答へて曰く、是くの如し。無學の慧は無學の智を攝するや。答へて曰く、是くの如し。

【六〇】 成就も亦、是くの如きなり。こは問と定理と攝と成就となり。

【六一】 第六節 非學非無學の見・智・慧に關する論究

【六二】 云何んが非學非無學の見なりや。云何んが非學非無學の智なりや。云何んが非學非無學の慧なりや。

非學非無學の見とは云何ん。答へて曰く、眼根と五見と世俗の等見となり。

非學非無學の智とは云何ん。答へて曰く、意識身と相應する有漏の慧と【六三】 五識身と相應する慧となり。

非學非無學の慧とは云何ん。答へて曰く、意識身と相應する有漏の慧と五識身と相應する慧となり。

【六四】 若し非學非無學の見なれば是は非學非無學の智なりや。答へて曰く、或は非學非無學の見にして

【五七】 無學の八智とは、無學の四法智・四類智のこと。

【五八】 無學の見・智・慧の難・不難論。

【五九】 頌：…無生智なり」の一文は大正本には無きも、三本・宮本に據りて之を補へり。

發智論にも此の文あり。

【六〇】 無學の見・智・慧の相攝論。

【六一】 無學の見・智・慧の成就論。

發智論に於て此文を省略せずして廣説し居れり。

【六二】 本節は非學非無學の見・智・慧の(一)自性、(二)雜・不雜論、(三)相攝論、(四)成就論、(五)已滅論等の問題を取り扱へる段なり。

而して、此の論究ある所以は前に見・智・慧を總説せしも未だ非學非無學の見・智・慧を特説せざりしが爲めなりとなり。

婆沙九十八卷(毘曇部十一、頁三七以下)參照。

【六三】 非學・非無學の見・智・慧の自性。

【六四】 五識身と相應する慧は必ず有漏なるが故に殊更に「有漏の」といふ必要なきなり。

【六五】 非學非無學の見と智との難・不難論。

これに四句分別あり。

五二 若し學の見を成就するものなれば、彼れは學の智をもちたりや。答へて曰く、是くの如し、若し學の智を成就するものなれば、彼れは學の見をも成就するなり。頗し學の見を成就するも學の智を成就するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。^{五三} 苦法忍を現在前するものなり。

若し學の見を成就するものなれば、彼れは學の慧をもちたりや。答へて曰く、是くの如し。設し學の慧を成就するものなれば、彼れは學の見をもちたりや。答へて曰く、是くの如し。

若し學の智を成就するものなれば、彼れは學の慧をもちたりや。答へて曰く、是くの如し。若し學の智を成就するものなれば、彼れは學の慧をも成就するなり。頗し學の慧を成就するも學の智を成就するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。苦法忍を現在前するものなり。

こは問と定理と攝と成就となり。

五三 第五節 無學の見・智・慧に關する論究

五四 云何んが無學の見なりや。云何んが無學の智なりや。云何んが無學の慧なりや。

五五 無學の見とは云何ん。答へて曰く、盡智・無生智に攝せざる無漏の慧なり。

無學の智とは云何ん。答へて曰く、^{五六} 無學の八智なり。

無學の慧とは云何ん。答へて曰く、無學の見と無學の智となり、無學の慧は此れ之の謂ひなり。^{五七} 無學の見は是れ無學の智なりや。答へて曰く、是くの如し。無學の見は是れ無學の智なり。頗し有るは無學の智にして無學の見に非ざるものありや。答へて曰く、有り。盡智と無生智となり。

五八 頗し無學の見なれば是れは無學の慧なりや。答へて曰く、是くの如し、無學の見は是れ無學の慧なり。頗し無學の慧なるも、無學の見に非ざるものありや。答へて曰く、有り、盡智と無生智となり。

無學の智は是れ無學の慧なりや。答へて曰く、是くの如し。無學の慧は是れ無學の智なりや。答へて曰く、是くの如し。

【三】相攝論、【四】成就論等に就きて論究するを目的とす、而かも今此の論をなすは先に見智・慧を論ぜしも、學の見・智・慧を特別に論ぜざりしを以つてなり。

婆沙九十八卷(毘婆沙十一、頁三六五以下)參照。

【四六】學の見・智・慧の自性。

【四七】學見とは、無漏忍と學の八智となり。

【四八】學の八智とは學の四法智と四漏智となり。

【四九】學の見・智・慧の雜・不雜論。

【五〇】學の見・智・慧の相攝關係。

【五一】學の見・智・慧の成就論。

【五二】此の位には忍を現前するが故に學の見を成就するも未だ苦法智を起さざるが故に學の智を成就せざるなり。

【五三】本節は無學の見・智・慧の(一)自性、(二)雜・不雜論、(三)相攝論、(四)成就論等の問題を取り扱ふ段なり。

而して、此の論を茲に作す理由は前に見・智・慧を論ぜしも特に無學の見・智・慧を論ぜざりしが爲めなりとなり。

婆沙九十八卷(毘婆沙十一、頁三六五以下)參照。

【五四】無學の見・智・慧の自性。

【五五】無學の見とは、無學の正見のこと。

(四)云何んが逆慧にも非ず、結にも非ざるものなりや。答へて曰く、^{四四}上の爾所の事を除くものなり。

四五 第四節 學の見・智・慧に關する論究

^{四六}云何んが學の見なりや。云何んが學の智なりや、云何が學の慧なりや。

^{四七}學の見とは云何ん。答へて曰く、學の慧なり。

學の智とは云何ん。答へて曰く、^{四八}學の八智なり。

學の慧とは云何ん。答へて曰く、學の見と學の智となり。學の慧とは此れ之れを謂ふなり。

^{四九}若し學の見なれば、是れ學の智なりや。答へて曰く、是くの如し、學の智は學の見なるなり。頗し有るは學の見なるも學の智に非ざるものありや。答へて曰く、有り。所修行の忍なり。

若し學の見なれば、是れ學の慧なりや。答へて曰く、是くの如し、設し是れ學の慧なれば、是は學の見なりや。答へて曰く、是くの如し。

若し學の智なれば、是は學の慧なりや。答へて曰く、是くの如し。若し學の智なれば、是は學の慧なるなり。頗し有るは學の慧なるも學の智に非ざるものありや。答へて曰く、有り。所修行の忍なり。

學の見が學の智を攝するや、學の智が學の見を攝するや。答へて曰く、學の見は學の智を攝するも、學の智は學の見を攝するに非ず。何等をか攝せざるや。答へて曰く、所修行の忍なり。

學の見は學の慧を攝するや。答へて曰く、是の如し。學の慧は學の見を攝するや。答へて曰く、是くの如し。

學の智が學の慧を攝するや。學の慧が學の智を攝するや。答へて曰く、學の慧は學の智を攝するも、學の智は學の慧を攝するに非ざるなり。何等をか攝せざるや。答へて曰く、所修行の忍なり。

學の智は學の慧を攝するに非ざるなり。何等をか攝せざるや。答へて曰く、所修行の忍なり。

學の慧は學の智を攝するに非ざるなり。何等をか攝せざるや。答へて曰く、所修行の忍なり。

學の慧は學の智を攝するに非ざるなり。何等をか攝せざるや。答へて曰く、所修行の忍なり。

なり。

【三七】 等見と等智との相攝關係。

【三八】 等見と等智との成就論及び已滅論。

因みに、發智論及び婆沙論は本論の如く省略せずして廣説し居れり。

【三九】 本節は逆慧(左慧)即ち染汚の慧と結との廣狹關係を明にする段なり。

而して、此の論究ある所以は「諸の染汚の慧は結の自性に非ず」と執するもの意を止め、染汚の慧にして見を性と爲すものは是れ結なることを顯はさんが爲めなりとなり。

婆沙九十八卷(毘曇部十一、頁三六〇以下)參見すべし。

【四〇】 逆慧と結との廣狹關係これに四句分別あり。

【四一】 この下に「見と失願と」の夾註あり。

【四二】 「諸餘の染汚の慧」とは、貪・瞋・慢・疑不共無明と及び餘の纏垢と相應する慧なり。

【四三】 七結とは、愛・恚・慢・無明・疑・嫉・慳の七結をいふ。

【四四】 「上の爾所の事を除くもの」とは、行蘊中の染汚の慧と及び餘の七結とを除く所餘の行蘊と四蘊の全と無爲となり。

【四五】 本節は、學の見・智・慧の(一)自性、(二)雜・不雜論、

り。

等見は等智を攝するや。答へて曰く、或は等見にして等智を攝するに非ざるものあり。

(一)云何んが等見にして等智を攝するに非ざるものなりや。答へて曰く、所修行の忍なり。是れを等見にして等智を攝するに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等智にして等見を攝するに非ざるものなりや。答へて曰く、五識身と相應する善の慧と盡智・無生智となり。是れを等智にして等見を攝するに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等見にして等智を攝するものなりや。答へて曰く、所修行の忍と盡智・無生智とを除く諸餘の意識身と相應する善の慧なり。是れを等見にして等智を攝するものと謂ふなり。

(四)云何んが等見にも非ず等智を攝するにも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

成就と滅とにつきても亦、是くの如し。

こは問と定理と攝と成就と滅となり。

第三節 逆慧(左慧)に関する論究

諸の逆慧は盡く是れ結なりや。答へて曰く、或は逆慧にして結に非ざるものあり。

(一)云何んが逆慧にして結に非ざるものなりや。答へて曰く、二結を除く諸餘の染汚の慧なり、是れを逆慧にして結に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが結にして逆慧に非ざるものなりや。答へて曰く、七結なり。是れを結にして逆慧に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが逆慧にして是れ結なるものなりや。答へて曰く、二結なり。是れを逆慧にして結なるものと謂ふなり。

前に見・智・慧論をなせるも等見と等智とに關する解説をなさざりしにより、今之れを爲さんとす、及び前節の邪見と邪智との近對治を明さんが爲めとなり。

婆沙九十七卷(毘曇部十一、頁三五五以下)參照。

【一】等見と等智との自性に就きて。

【二】等見には有漏と無漏とあり、有漏なるは世俗の等見にして前章に述べしが如し。無漏なるは、無漏忍と學の八智と無學の正見となり。

【三】等智(正智)には有漏と無漏とあり。有漏なるは世俗の等見にして、無漏なるは學・無學の八智なり。

【四】等見と等智との難・不雜論。

等見は、無漏忍を含むが故にその點等智より廣く、等智は盡智・無生智を含むが故にその點等見より廣し、故に四句分別せるなり。

【五】此の第三句中の等見等智は、大正本には等智と等見の順序となり居るも、こは、等見・等智の順となす方妥當なり、故に今は斯く訂正し置けり。

【六】「爾所の事を除くもの」とは、諸の善なる慧を除く諸餘の行蘊と四蘊の全と無爲と

若し邪見を成就するものなれば、彼れは邪智をまなりや。答へて曰く、是くの如し、若し邪見を成就するものなれば彼れは、邪智をも成就するなり。頗し邪智を成就するも、邪見を成就するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。學見迹なり。

若し邪見を已滅して無餘なれば、彼れは邪智をまなりや。答へて曰く、是くの如し、若し邪智を已滅し無餘なれば、彼れは邪見をまなるなり。頗し有るは邪見を已滅して無餘なるも邪智は非らざるものありや。答へて曰く、有り。學見迹なり。

こは問と定理と攝と成就と滅となり。

第二節 等見と等智とに關する論究

云何んが等見なりや、云何んが等智なりや。

等見とは云何ん。答へて曰く、盡智・無生智に攝せざる意識身と相應する善の慧なり。

等智とは云何ん。所修行の忍を除く諸餘の意識身と相應する善の慧と、五識身と相應する善の慧となり。

等見は是れ等智なりや。答へて曰く、或は等見にして等智に非ざるものあり。

(一)云何んが等見にして等智に非ざるものなりや。答へて曰く、所修行の忍なり。是れを等見にして等智に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等智にして等見に非ざるものなりや。答へて曰く、五識身と相應する善の慧と盡智・無生智となり。是れを等智にして等見に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等見にして等智なるものなりや。答へて曰く、所修行の忍と盡智・無生智とを除く諸餘の意識身と相應する善の慧なり。是れを等見にして等智なるものと謂ふなり。

(四)云何んが等見にも非ず等智にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものな

婆沙九十八卷(毘曇部十一、頁三五八)にあり往見すべし。

【一〇】 邪智の自性。

【一一】 意識身と相應する染汚の慧とは、五見及び貪・瞋・慢・疑・不共無明並びに餘の纏垢と相應する慧をいふ。

【一二】 五識身と相應する染汚の慧とは、茲にては貪・瞋と相應する慧をいふ。

【一三】 邪見と邪智との雜・不雜論。

【一四】 邪に推求するものけ、必ず邪に審決するが故に邪見は邪智なり。

【一五】 邪見と邪智との相攝關係。

【一六】 邪見と邪智との成就關係。

【一七】 こは、道類智未已生位なり。

【一八】 學見迹とは、具さに四聖諦の迹を見しものとの意にして即ち有學の聖者をいふ。

【一九】 こは、己に見惑を斷ぜざるが故に邪見を成就せざるも未だ修惑を存せるが故に修所斷の貪等と相應する邪智あり。

【二〇】 邪見と邪智との已滅無餘に就きて。

【二一】 本節は、等見と等智との(一)自性、(二)雜・不雜論、(三)相攝論、(四)成就論、(五)已滅論の論究をなす段なり。

而して、此の論を作す所以は、

をして不淨を失せしむるなりは、此の五見に於て、是れ何等の見なりや。何等の諦を用ひて、此の見を斷するや。

所謂、此の見——阿羅漢は自から脱するも知らず、阿羅漢は自から脱するも狐疑あり、阿羅漢を得するを他に由りて知る——は、此の五見に於て、是れは何等の見なりや。何等の諦を用ひて此の見を斷するや。

所謂、此の見——唯、苦と稱えて道あり、苦と稱へて道種あり——は此の五見に於て、何等の見なりや。何等の諦を用ひて此の見を斷するや。

此の章の義を願くは具さに演說せん。

第一節 邪見と邪智とに關する論究

云何んが邪見なりや。云何んが邪智なりや。

邪見とは云何ん。答へて曰く、五見なり。義を定めざれば五見は盡く邪見なるも、若し定むれば所謂、此の見——^一施無く、報無く、說無し——は、是れを邪見と謂ふなり。

邪智とは云何ん。答へて曰く、意識身と相應する染汚の慧と、^二五識身と相應する染汚の慧となり是れを邪智と謂ふ。

若し邪見なれば、是は邪智なりや。答へて曰く、是くの如し、^三邪見は是れ邪智なるなり。頗し有る邪智にして邪見に非ざるものありや。答へて曰く、有り。五見を除く諸餘の意識身と相

應する染汚の慧と、五識身と相應する染汚の慧となり。^四邪見が邪智を攝するや。答へて曰く、邪智は邪見を攝するも邪見は邪智を攝するに非ざるなり。何等をか攝せざるや。答へて曰く、五見を除く諸餘の意識身と相應する染

汚の慧と五識身と相應する染汚の慧となり。

【七】本節は、邪見と邪智との(一)自性、(二)雜・不雜論、(三)相攝論、(四)成就論、(五)已滅論等の五種の問題を取り扱へるもの。

而して、此の論究ある所以は前に見・智・慧に就きて論ぜしも邪見・邪智に關して說かざりしを以つて今之れを說かんとするなりとなり。
婆沙卷第九十七(毘曇部十一、頁三五二)參照。

【八】邪見の自性。
無の行相と作りて轉ずる見なり。

【九】發智論には、「施與無く、愛樂無く、祠祀無く、妙行無く、惡行無く、妙惡行の業果と異熟無し」とあり。尙、此の意義に關する詳しき解説は

や。設し無學の慧なれば是れ無學の智なりや。

無學の見が無學の智を攝するや。無學の智が無學の見を攝するや。無學の見が無學の慧を攝するや。無學の慧が無學の智を攝するや。無學の智が無學の慧を攝するや。無學の慧が無學の智を攝するや。

若し無學の見を成就するものなれば、彼れは無學の智をもちたりや。設し無學の智を成就するものなれば、彼れは無學の慧をもちたりや。設し無學の慧を成就するものなれば、彼れは無學の見をもちたりや。若し無學の見を成就するものなれば、彼れは無學の智をもちたりや。設し無學の智を成就するものなれば、彼れは無學の慧をもちたりや。設し無學の慧を成就するものなれば、彼れは無學の見をもちたりや。若し無學の見を成就するものなれば、彼れは無學の智をもちたりや。設し無學の智を成就するものなれば、彼れは無學の慧をもちたりや。

こは問と定理と攝と成就となり。

一。(六)云何んが非學非無學の見なりや。云何んが非學非無學の智なりや。云何んが非學非無學の慧なりや。

二。若し非學非無學の見なれば、是は非學非無學の智なりや。設し是れ非學非無學の智なれば、是れ非學非無學の見なりや。若し非學非無學の見なれば、是れは非學非無學の慧なりや。設し非學非無學の慧なれば、是れは非學非無學の見なりや。若し非學非無學の見なれば、是は非學非無學の慧なりや。設し非學非無學の慧なれば、是は非學非無學の智なりや。

三。非學非無學の見が、非學非無學の智を攝するや。非學非無學の智が非學非無學の見を攝するや。非學非無學の見が非學非無學の慧を攝するや。非學非無學の慧が非學非無學の見を攝するや。非學非無學の見が非學非無學の慧を攝するや。非學非無學の慧が非學非無學の智を攝するや。非學非無學の智が非學非無學の慧を攝するや。非學非無學の慧が非學非無學の智を攝するや。

若し非學非無學の見を成就するものなれば、彼れは非學非無學の智をも成就するや。設し非學非

【一〇】非學非無學の見・智・慧に關する問題。

【二】「若非學」は大正本に「非學若」とあるも、三本・宮本に従つて「若非學」と訂正せり。

【三】非の上に大正本には「若」の字あるも聖乙本に従つて是れを除却せり。

若し等見を成就するものなれば、彼れは等智をもなりや。設し等智を成就するものなれば、彼れは等見をもなりや。

若し等見を已滅し無餘なれば、彼れは等智をもなりや。設し等智を已滅し無餘なれば、等見をもなりや。

こは問と定理と攝と成就と滅となり。

(三)諸の逆慧は盡く是れ結なりや。設し是れ結なれば盡く是れ逆慧なりや。

(四)云何んが學の見なりや。云何んが學の智なりや。云何んが學の慧なりや。

若し學の見なれば、是は學の智なりや。設し是れ學の智なれば是れ學の見なりや。學の見は是れ學の慧なりや。設し學の慧なれば是れ學の見なりや。學の智は是れ學の慧なりや。設し學の慧なれば是れ學の智なりや。

學の見が學の智を攝するや。學の智が學の見を攝するや。學の見が學の慧を攝するや。學の慧が學の見を攝するや。學の智が學の慧を攝するや。學の慧が學の智を攝するや。

若し學の見を成就するものなれば、彼れは學の智をもなりや。設し學の智を成就するものなれば彼れは學の見をもなりや。若し學の見を成就するものなれば、彼れは學の慧をもなりや。設し學の慧を成就するものなれば、彼れは學の智をもなりや。若し學の智を成就するものなれば、彼れは學の慧をもなりや。設し學の慧を成就するものなれば、彼れは學の智をもなりや。

こは問と定理と攝と成就となり。

(五)云何んが無學の見なりや。云何んが無學の智なりや。云何んが無學の慧なりや。

無學の見は是れ無學の智なりや。設し無學の智なれば是れ無學の見なりや。無學の見は是れ無學の慧なりや。設し是れ無學の慧なれば是れ無學の見なりや。若し無學の智なれば是れ無學の慧なり

因みに、今、發智論の此れに相應する頌文を示せば次の如し。

邪ト正ト見ト智ト五ト

左ト慧ト學ト等ト三ト

梵ト忍ト五ト惡ト見ト

此章願具說。

【五】邪見と邪智とに關する問題。

【六】等見と等智とに關する問題。

【七】逆慧に關する問題。

【八】學の見・智・慧に關する問題。

【九】無學の見・智・慧に關する問題。

卷の第十 (第二編 智健度)

第二章 邪見等見乃至五種惡見に關する論究

(阿毘曇智健度五種跋渠第二) (發智論卷第七、大正、二六、頁九五四下)

第一章 本章の内容目次

邪見と等見と逆と、

非學非無學と

學者と亦、無學と

梵と忍と及び五種となり。

第二章 本章の内容目次

(一)云何んが邪見なりや。云何んが邪智なりや。

若し邪見なれば、是れは邪智なりや。設し是れが邪智なれば、是れは邪見なりや。

邪見が邪智を攝するや。邪智が邪見を攝するや。

若し邪見を成就するものなれば、彼れは邪智をもなりや。設し邪智を成就するものなれば、彼れは邪見をもなりや。

見をもなりや。

若し邪見を已滅し無餘なれば、彼れは邪智をもなりや。設し邪智を已滅し無餘なれば、彼れは邪見をもなりや。

こは問と定理と攝と成就と滅となり。

(二)云何んが等見なりや。云何んが等智なりや。

若し等見なれば、是れ等智なりや。設し是れが等智なれば、是れは等見なりや。

等見が等智を攝するや。等智が等見を攝するや。

【一】本章の内容は註四に示せるが如し。

而して、此れを五種跋渠と名けしは、邪見・等見等を問と定理と攝と成就と滅との五種問分別せしに依るか、或は最後の五種惡見論の名に據りしものならん。

(本章最後の夾註を參照せよ)

【二】二は大正本に三とあるも三本・宮本・聖本・聖乙本に従つて二と改む。

【三】以下本章を論ずるに先ちて、その内容を簡條書にして列擧せる段なり。

【四】「邪見」とは、邪見・邪智の自性等の五門分別、

「等見」とは、等見・等智の自性等の五門分別、

「逆」とは、逆慧(左慧)即ち染汚の慧の五門分別、

「學者」と、亦、無學と非學非無學と、

「學」とは、學・無學・非學非無學の見・智・慧の諸門分別、

「梵」とは、梵天及び梵衆天の惡見とその對治論、

「忍」とは、長爪梵志の忍論・不忍論・一分忍一分不忍論の惡見とその對治、

「五種」とは、阿羅漢に關する五種の惡見とその對治なり。

無生智とを除く諸餘の無漏^{一六}智なり、是れを無漏の等見にして無漏の等智の攝なるものと謂ふなり。

(四)云何んが無漏の等見にも非ず、無漏の等智の攝にも非ざるものなりや。答へて曰く、上の爾所の事を除くものなり。

若し無漏^{一七}の等見を成就すれば、彼れは無漏の等智をもなりや。答へて曰く、是くの如し。若し無漏の等智を成就すれば亦、無漏の等見をもなり。

頗し無漏の等見を成就するも無漏の等智を成就するに非ざるものありや。答へて曰く、有り。苦法忍を現在前するものなり。

こは問と定理と攝と成就となり。

阿毘曇智犍度八・十種跋葉第一竟。(梵本四百三十三首盧秦七千二百四十六言)

【六】智は發智論には慧とあり。

【六】無漏の等見と無漏の等智との成就關係。

云何んが無漏の等見なりや。云何んが無漏の等智なりや。

無漏の等見とは云何ん。答へて曰く、盡智と無生智とを攝せざる無漏の慧なり。

無漏の等智とは云何ん。答へて曰く、所修の忍を除く諸餘の無漏の慧なり。

一五八
若し無漏の等見なれば是れ無漏の等智なりや。答へて曰く、或は無漏の等見なるも無漏の等智に非ざるものあり。

(一)云何んが無漏の等見なるも無漏の等智に非ざるものなりや。答へて曰く、所修行の忍なり。是れを無漏の等見なるも無漏の正智に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無漏の等智なるも無漏の等見に非ざるものなりや。答へて曰く、盡智無生智なり。是れを無漏の等智なるも無漏の等見に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが無漏の等見にして無漏の等智なるものなりや。答へて曰く、所修行の忍と盡智と無生智とを除く諸餘の無漏の慧なり。是れを無漏の等見にして無漏の等智なるものと謂ふなり。

(四)云何んが無漏の等見にも非ず無漏の等智にも非ざるものなりや。答へて曰く、^{一五九}上の爾所の事を除くものなり。

一六〇
無漏の等見が無漏の等智を攝するや。無漏の等智が無漏の等見を攝するや。答へて曰く、或は無漏の等見なるも無漏の等智の攝に非ざるものあり。

(一)云何んが無漏の等見なるも無漏の等智の攝に非ざるものなりや。答へて曰く、所修行の忍なり。是れを無漏の等見なるも無漏の等智の攝に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが無漏の等智なるも無漏の等見の攝に非ざるものなりや。答へて曰く、盡智・無生智なり。是れを無漏の等智なるも無漏の等見の攝に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが無漏の等見にして無漏の等智の攝なるものなりや。答へて曰く、所修行の忍と盡智・

【五二】世俗の等見・等智の自性に就きて。

【五三】世俗の等見と世俗の等智との難・不難論。

【五四】世俗の等見と世俗の等智との相攝關係。

【五五】世俗の等見・等智の成就及び已滅關係に就きて。

發智論及び婆沙論にはこの文を省略せず詳細に記述せり。

【五六】本節は無漏の等見と等智との(一)自性、(二)難・不難論、(三)相攝論、(四)成就論の四種の問題を取り扱へるものなり。

而して此の論究をする所以は、前の見・智・慧論に於て無漏の等見・等智を分別せざりしが故に今分別せんが爲めと、此の無漏の等見・等智は前の世俗の等見・等智の近對治なるが爲めとの故に茲に之れをなすなりとなり。

【五七】無漏の等見・等智の自性に就きて。

【五八】無漏の等見と無漏の等智との難・不難論。

これに四句分別あり。

【五九】上の爾所の事を除くものとは、無漏慧を除く所餘の行蘊と四蘊の全と無爲法となり。

【六〇】無漏の等見と無漏の等智との相攝關係。

これに四句あり。

(三)云何んが等念とも相應し等定とも相應するものなりや。答へて曰く、等定を除く諸餘の等念と相應する法なり。是れを等念と相應し等定とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが等念と相應するにも非ず、等定とも非ざるものなりや。答へて曰く、諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを等念と相應するにも非ず等定とも非ざるものと謂ふなり。

一五
第七節 世俗の等見・等智に關する論究

一五二
云何んが世俗の等見なりや。云何んが世俗の等智なりや。

世俗の等見とは云何ん。答へて曰く、意識身と相應する善の有漏の慧なり。

世俗の等智とは云何ん。答へて曰く、意識身と相應する善の有漏の慧と、五識身と相應する善の慧となり。

一五三
若し世俗の等見なれば、是れ世俗の等智なりや。答へて曰く、是くの如し。若し世俗の等見ならば彼れは世俗の等智なり。

頗し有る世俗の等智にして世俗の等見に非ざるものありや。答へて曰く、有り。五識身と相應する善の慧なり。

一五四
世俗の等見は世俗の等智を攝するや、世俗の等智は世俗の等見を攝するや。答へて曰く、世俗の等智は世俗の等見を攝するも、世俗の等見は世俗の等智を攝するに非ず。何等をか攝せざるや。答へて曰く、五識身と相應する善の慧なり。

一五五
成就と滅とも亦復、是くの如し。

こは問と定理と攝と成就と滅となり。

一五六
第八節 無漏の等見・等智に關する論究

【一五】本節は、世俗の等見 (samvṛti-samyoḡhīṣitī) と世俗の等智 (samvṛti-saḡhyag-īṣāna) との(一)自性、(二)雜不雜論、(三)相攝關係、(四)成就關係、(五)已滅關係の五種の問題を取り扱へるものなり。而して此の論究をなす理由は、(一)契經中に於ける世俗の等見等の意義を分別せんが爲め、(二)前に見・智・慧論を作せしも等見に就きて述べざりしを以つて今之れを爲さんとする爲め、(三)「意識と相應する善の有漏慧は皆是れ見のみなりといふに非ず」との譬喩者の主張を破せんが爲めなりとなり。(婆沙九十七卷、毘曇部十一、頁三四三以下參照)。因みに、世俗の意義に關しては婆沙九十七、(毘曇部十一、頁三四六)に詳しく説明あり、往見すべし。

便とにも非ざるものと謂ふなり。

^{一四七}等念と等定とも亦、是くの如し。

^{一四八}諸法にして等方便と相應するものなれば、彼れは等念ともなりや。答へて曰く、或は等方便と相應するも等念とに非ざるものあり。

(一)云何んが等方便と相應するも等念とに非ざるものなりや。答へて曰く、等念なり。是れを等方便と相應するも等念とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等念と相應するも等方便とに非ざるものなりや。答へて曰く、等方便なり。是れを等念と相應するも等方便とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等方便と相應し等念とも相應するものなりや。答へて曰く、等念を除く諸餘の等方便と相應する法なり。是れを等方便と相應し等念とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが等方便と相應するに非ず等念とにも非ざるものなりや。答へて曰く、諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを等方便と相應するにも非ず、等念とにも非ざるものと謂ふなり。

^{一四九}等定も亦、是くの如し。

^{一五〇}諸法にして等念と相應するものなれば、彼れは等定ともなりや。答へて曰く、或は等念と相應するも等定とに非ざるものあり。

(一)云何んが等念と相應するも等定とに非ざるものなりや。答へて曰く、等定なり。是れを等念と相應するも、等定とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等定と相應するも等念とに非ざるなりや。答へて曰く、等念なり。是れを等定と相應するも等念とに非ざるものと謂ふなり。

【一四七】等志相應法と等念・等定相應法との關係。
【一四八】等方便相應法と等念相應法との關係。
これに小の四句あり。

【一四九】等方便相應法と等定相應法との關係。
【一五〇】等念相應法と等定相應法との關係。
これに小の四句あり。

(一)云何んが等見と相應するも等方便とに非ざるものなりや。答へて曰く、等見と相應する等方便なり。是れを等見と相應するも等方便とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等方便と相應するも等見とに非ざるものなりや。答へて曰く、等見と及び等見と相應せずして等方便と相應する法となり。是れを等方便と相應するも等見とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等見と相應し等方便とも相應するものなりや。答へて曰く、等方便を除く諸餘の等見と相應する法なり。是れを等見と相應し等方便とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが等見と相應するにも非ず等方便とにも非ざるものなりや。答へて曰く、等見と相應せざる等方便と諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを等見と相應するにも非ず等方便とにも非ざるものと謂ふなり。

^{一四五}等念と等定とも亦、是くの如し。

^{一四六}諸法にして等志と相應するものなれば、彼れは等方便ともなりや。答へて曰く、或は等志と相應するも等方便とに非ざるものあり。

(一)云何んが等志と相應するも等方便とに非ざるものなりや。答へて曰く、等志と相應する等方便なり。是れを等志と相應するも等方便とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等方便と相應するも等志とに非ざるものなりや。答へて曰く、等志と及び等志と相應せずして等方便と相應する法となり。是れを等方便と相應するも等志とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等志と相應し等方便とも相應するものなりや。答へて曰く、等方便を除く諸餘の等志と相應する法なり。是れを等志と相應し等方便とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが等志と相應するにも非ず等方便とにも非ざるものなりや。答へて曰く、等志と相應せざる等方便と諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを等志と相應するに非ず、等方

【一四四】等見相應法と等念・等定相應法との關係。

【一四五】等志相應法と等方便相應法との關係。

これに中の四句あり。

(四)云何んが護覺意と相應するにも非ず、等方便とにも非ざるものなりや。答へて曰く、諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを護覺意と相應するにも非ず、等方便とにも非ざるものと謂ふなり。

^{一四一}等念と ^{一四二}等定とも亦復、是くの如し。

諸法にして等見と相應するものなれば、彼れは等志ともなりや。答へて曰く、或は等見と相應するも等志とには非ざるものあり。

(一)云何んが等見と相應するも、等志とに非ざるものなりや。答へて曰く、等見と相應する等志と及び等志と相應せずして等見と相應する法となり。是れを等見と相應するも等志とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等志と相應するも等見とに非ざるものなりや。答へて曰く、等志と相應する等見と及び等見と相應せずして等志と相應する法となり。是れを等志と相應するも等見とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等見と相應し、等志とも相應するものなりや。答へて曰く、等見と相應する等志を除く諸餘の等見と等志とに相應する法なり。是れを等見と相應し、等志とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが等見と相應するにも非ず等志とにも非ざるものなりや。答へて曰く、等見と相應せざる等志と等志と相應せざる等見と諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを等見と相應するにも非ず等志とにも非ざるものと謂ふなり。

諸法にして等見と相應するものなれば、彼れは等方便ともなりや。答へて曰く、或は等見と相應するも等方便とに非ざるものあり。

【一四一】護覺意相應法と等念・等定相應法との關係。

【一四二】大正本には「等定等」とあり、三本・宮本には「等定・等志」とあるも等志は前に述べたり。更に又發智論によれば「正定」とのみあり。故に今は「等」を除けり。

【一四三】等見相應法と等志相應法との關係。

これに大の四句あり。

【一四四】等見相應法と等方便相應法との關係。

これに中の四句あり。

一三六 諸法にして護覺意と相應するものなれば彼れは等見ともなりや。答へて曰はく、或は護覺意と相應するも等見とに非ざるものあり。

(一)云何んが護覺意と相應するも等見とに非ざるものなりや。答へて曰はく、等見と及び等見と相應せずして護覺意と相應する法となり。是れを護覺意と相應するも等見とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等見と相應するも護覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、等見と相應する護覺意なり、是れを等見と相應するも、護覺意に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが護覺意と相應し、等見とも相應するものなりや。答へて曰はく、護覺意を除く諸餘の等見と相應する法なり。是れを護覺意と相應し等見とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが護覺意と相應するに非ず、等見とも非ざるものなりや。答へて曰はく、等見と相應せざる護覺意と諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを護覺意と相應するに非ず等見とも非ざるものと謂ふなり。

一四九 等志も亦、是くの如し。

一四〇 諸法にして護覺意と相應するものなれば、彼れは等方便ともなりや。答へて曰はく、或は護覺意と相應するも等方便とに非ざるものあり。

(一)云何んが護覺意と相應するも等方便とに非ざるものなりや。答へて曰く、等方便なり。是れを護覺意と相應するも等方便に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等方便と相應するも、護覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、護覺意なり。是れを等方便と相應するも護覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが護覺意と相應し、等方便とも相應するものなりや。答へて曰はく、等方便を除く諸餘の護覺意と相應する法なり。是れを護覺意と相應し等方便とも相應するものと謂ふなり。

【二三】護覺意相應法と等見相應法との關係。これに中の四句あり。

【三九】護覺意相應法と等志相應法との關係。

【四〇】護覺意相應法と等方便相應法との關係。これに小の四句あり。

餘の定覺意と相應する法なり。是を定覺意と相應し護覺意とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが定覺意と相應するに非ず、護覺意にも非ざるものなりや。答へて曰はく、諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを定覺意と相應するにも非ず、護覺意にも非ざるものと謂ふなり。

^{二三四} 等方便と等念とも亦復、是くの如し。

^{二三五} 諸法にして定覺意と相應するものなれば、彼れは等見ともなりや。答へて曰はく、或は定覺意と相應するも等見とに非ざるものあり。

(一)云何んが定覺意と相應するも等見とに非ざるものなりや。答へて曰はく、等見と及び等見と相應せずして定覺意と相應する法となり。是れを定覺意と相應するも等見とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等見と相應するも定覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、等見と相應する定覺意なり。是れを等見と相應するも定覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが定覺意と相應し等見とも相應するものなりや。答へて曰はく、定覺意を除く諸餘の等見と相應する法なり。是れを定覺意と相應し等見とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが定覺意と相應するにも非ず、等見とに非ざるものなりや。答へて曰はく、等見と相應せざる定覺意と、諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを定覺意と相應するにも非ず等見とも非ざるものと謂ふなり。

^{二三六} 等志も亦、是くの如し。

^{二三七} 諸法にして定覺意と相應するものなれば、彼れは等定ともなりや。答へて曰く、是くの如し。設し諸法にして等定と相應するものなれば、彼れは定覺意ともなりや。答へて曰はく、是く如し。

【二三四】定覺意相應法と等方便・等念相應法との關係。

【二三五】定覺意相應法と等見相應法との關係。

定覺意は一切地一切無漏に遍き、等見は一切地に遍きも一切無漏は非らざるが故に中の四句あり。

【二三六】定覺意相應法と等志相應法との關係。

【二三七】定覺意相應法と等定相應法との關係。

一〇五 護覺意と等方便と等念と等定とも亦復、是くの如し。

二〇 諸法にして猗覺意と相應するものなれば、彼れは等見ともなりや。答へて曰はく、或は猗覺意と相應するも等見とに非ざるものあり。

(一)云何んが猗覺意と相應するも等見とに非ざるものなりや。答へて曰はく、等見と及び等見と相應せずして猗覺意と相應する法となり。是れを猗覺意と相應するも等見とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等見と相應するも猗覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、等見と相應する猗覺意なり。是れを等見と相應するも猗覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが猗覺意と相應し等見とも相應するものなりや。答へて曰はく、猗覺意を除く諸餘の等見と相應する法なり。是れを猗覺意と相應し、等見とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが猗覺意と相應するにも非ず等見とに非ざるものなりや。答へて曰はく、等見と相應せざる猗覺意と及び餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを猗覺意と相應するにも非ず、等見とにも非ざるものと謂ふなり。

一一〇 等志も亦復、是くの如し。

一二〇 諸法にして定覺意と相應するものなれば、彼れは護覺意ともなりや。答へて曰はく、或は定覺意と相應するも護覺意とに非ざるものあり。

(一)云何んが定覺意と相應するも護覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、護覺意なり。是れを定覺意と相應するも、護覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが護覺意と相應するも定覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、定覺意なり。是れを護覺意と相應するも定覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが定覺意と相應し、護覺意とも相應するものなりや。答へて曰はく、護覺意を除く諸

【二〇】猗覺意相應法と定覺意相應法との關係。

共に一切の無漏・一切地に遍きが故に小の四句あり。

【二一】猗覺意相應法と護覺意相應法及び等方便・等念・等定相應法との關係。

【二二】猗覺意相應法と等見相應法との關係。

猗は一切地・一切無漏に遍きに、等見は一切地に遍きも一切無漏には非ざるが故に中の四句あり。

【二三】猗覺意相應法と等志相應法との關係。

【二四】定覺意相應法と護覺意相應法との關係。

共に一切地一切無漏に遍きが故に小の四句あり。

意と諸餘の喜覺意と相應せずして等見と相應する法となり、是れを等見と相應するも喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが喜覺意と相應し等見とも相應するものなりや。答へて曰く、喜覺意と相應する等見を除く諸餘の喜覺意と等見とに相應する法なり。是れを喜覺意と相應し等見とも相應する法と謂ふなり。

(四)云何んが喜覺意と相應するにも非ず等見とも非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と相應せざる等見と、等見と相應せざる喜覺意と諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。

是れを喜覺意と相應するにも非ず等見とも非ざるものと謂ふなり。

諸法にして喜覺意と相應するものなれば、彼れは定覺意ともなりや。答へて曰はく、或は喜覺意と相應するも定覺意とに非ざるものあり。

(一)云何んが喜覺意と相應するも、定覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、定覺意なり。是れを喜覺意と相應するも定覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが定覺意と相應するも喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意なり。是れを定覺意と相應するも喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが喜覺意と相應し、定覺意とも相應するものなりや。答へて曰はく、定覺意を除く諸餘の喜覺意と相應する法なり。是れを喜覺意と相應し定覺意とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが喜覺意と相應するにも非ず定覺意とも非ざるものなりや。答へて曰はく、諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを喜覺意と相應するにも非ず定覺意とに非ざるものと謂ふなり。

【三】喜覺意相應法と喜覺意相應法との關係。

喜は一切無漏に過ぎも一切地には非ず、喜は一切無漏及び一切地に過ぎが故に中の四句あり。

【三】發智論は「喜覺意を除く諸餘の喜覺意と相應する法なり」を「二と相應する法なり」といへり。

【三】喜覺意相應法と、定・薩婆意相應法及び等方便・等念・等定相應法との關係。

【三】喜覺意相應法と等見相應法との關係。

喜は一切無漏に過ぎも一切地には非ず、等見は一切地に過ぎも一切無漏には非ず、故に大の四句なす。

【二】こは初二禪にて盡智・無生智と俱生し喜覺意と相應する法なり。

【三】こは、未至・中間・後二禪・前三無色に於ける正見と相應する法なり。

【二】受と慧とを除く八大地法と十大善地法と尋と伺と心となり。

【三】諸餘の心・心法とは、未至・中間・後二禪・前三無色の盡智・無生智と俱生する衆の心・心所法及び一切の有漏の心・心所となり。

【三】喜覺意相應法と等志相應法との關係。

是くの如し。

諸法にして喜覺意と相應するものなれば、彼れは猗覺意ともなりや。答へて曰はく、或は喜覺意と相應するも猗覺意とは非ざるものあり。

(一)云何んが喜覺意と相應するも猗覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と相應する猗覺意なり。是れを喜覺意と相應するも猗覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが猗覺意と相應するも、喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と及び喜覺意と相應せずして猗覺意と相應する法となり。是れを猗覺意と相應するも喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが喜覺意と相應し猗覺意とも相應するものなりや。答へて曰はく、猗覺意を除く諸餘の喜覺意と相應する法なり。是れを喜覺意と相應し猗覺意とも相應するものなりと謂ふなり。

(四)云何んが喜覺意と相應するにも非ず猗覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と相應せざる猗覺意と、諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを喜覺意と相應するにも非ず猗覺意とに非ざるものと謂ふなり。

定・護覺意と等方便・等念・等定とも亦復、是くの如し。

諸法にして喜覺意と相應するものなれば、彼の法は等見ともなりや。答へて曰はく、或は喜覺意と相應するも等見とに非ざるものあり。

(一)云何んが喜覺意と相應するも等見とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と相應する等見と及び餘の等見と相應せずして喜覺意と相應する法となり。是れを喜覺意と相應するも等見とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが等見と相應するも喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、等見と相應する喜

一切無漏に通きが故に小の四句なり。

【一〇八】こは慧を除く九大地法と十大善地法と尋と伺と心となり。

【一〇九】擇法覺意相應法と定・護覺意相應法並びに等方便・等定・等念相應法との關係。

【一一〇】擇法覺意相應法と喜覺意相應法との關係。

これに中の四句あり。

【一一一】擇法覺意相應法と等志相應法との關係。

【一一二】擇法覺意相應法と等見相應法との關係。

【一一三】等見云とは盡智・無生智を指す。

【一一四】大正本には「相應法」の三字無きも、三本・宮本に依りて補へり。

【一一五】精進覺意相應法と喜覺意相應法との關係。

これに中四句あり。

【一一六】精進覺意相應法と等見等志相應法との關係。

【一一七】精進覺意相應法と捨覺意相應法との關係。

こは共に一切地・一切無漏に通きが故に小の四句あり。

【一一八】精進覺意相應法と定・護覺意相應法並びに等念・等定相應法との關係。

【一一九】精進覺意相應法と、等方便相應法との關係。

(三)云何んが精進覺意と相應し喜覺意とも相應するものなりや。答へて曰はく、精進覺意を除く諸餘の喜覺意と相應する法なり。是れを精進覺意と相應し喜覺意とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが精進覺意と相應するにも非ず、喜覺意とも非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と相應せざる精進覺意と、諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを精進覺意と相應するにも非ず、喜覺意とも非ざるものと謂ふなり。

二六 等見と等志とも亦復、是くの如し。

二七 諸法にして精進覺意と相應するものなれば、彼れは猗覺意ともなりや。答へて曰はく、或は精進覺意と相應するも猗覺意とに非ざるものあり。

(一)云何んが精進覺意と相應するも猗覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、猗覺意なり。是れを精進覺意と相應するも猗覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが猗覺意と相應するも、精進覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、精進覺意なり。是れを猗覺意と相應するも精進覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが精進覺意とも相應し猗覺意とも相應するものなりや。答へて曰はく、猗覺意を除く諸餘の精進覺意と相應する法なり。是れを精進覺意とも相應し、猗覺意とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが精進覺意と相應するにも非ず、猗覺意とも非ざるものなりや。答へて曰はく、諸餘の心心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを精進覺意と相應するにも非ず、猗覺意とも非ざるものと謂ふなり。

二八 定・護覺意と等念・等定とも亦復、是くの如し。

二九 諸法にして精進覺意と相應するものなれば、彼れは等方便ともなりや。答へて曰はく、是くの如し。設し諸法にして等方便と相應するものなれば、彼れは精進覺意ともなりや、答へて曰はく、

依るが故に自性と相應せざるが故なり。因に三緣とは(一)二體は俱時に起らざるが故に、(二)前と後とは和合せざるが故に、(三)一切法は自體を觀ぜず、必ず他體を緣となして生ずるが故なり。

〔婆沙九十七、毘曇部十一、頁三二五〕。

【〇〇】念覺意相應法と、精進・猗定・護覺意相應法並びに等方便・等定相應法との關係。

【〇一】念覺意相應法と喜覺意相應法との關係。

念覺意は一切地。一切無漏心に遍きに、喜覺意は一切無漏心に遍きも、一切地に遍かざるが故に中の四句あり。

【〇二】こは未至、中間・上二禪下三無色に於ける念覺意と相應する法なり、彼の地には喜なきを以つて喜覺意と相應せざるなり。

【〇三】こは八大地法と十大善地法と尋と伺と心となり。

【〇四】こは未至、中間・上二禪、下三無色に於ける念覺意を指す。

【〇五】念覺意相應法と等見・等志相應法との關係。

【〇六】念覺意相應法と等念相應法との關係。

【〇七】擇法覺意相應法と精進覺意相應法との關係。

擇法と精進とは共に一切地

ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが喜覺意と相應するも、擇法覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と相應する擇法覺意なり、是れを喜覺意と相應するも擇法覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが擇法覺意とも相應し喜覺意とも相應するものなりや。答へて曰はく、擇法覺意を除く諸餘の喜覺意と相應する法なり。是れを擇法覺意とも相應し、喜覺意とも相應する法と謂ふなり。

(四)云何んが擇法覺意と相應するにも非ず、喜覺意とも非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と相應せざる擇法覺意と及び餘の心、心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを擇法覺意と相應するにも非ず亦、喜覺意とも非ざるものと謂ふなり。

等志も亦復、是くの如し。

諸法にして擇法覺意と相應するものなれば、彼れは等見ともなりや。答へて曰はく、是くの如し。諸法にして等見と相應するもの、彼れは擇法覺意とも相應するなり。

頗し擇法覺意と相應するも、等見と相應すること無きものありや。答へて曰はく、有り。等に攝せずして擇法覺意と相應する法なり。

諸法にして精進覺意と相應するものなれば、彼れは喜覺意と相應すること有りや。答へて曰はく、或は精進覺意と相應するも、喜覺意とに非ざるものあり。

(一)云何んが精進覺意と相應するも、喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と及び喜覺意と相應せずして精進覺意と相應する法となり。是れを精進覺意と相應するも喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが喜覺意と相應するも精進覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と相應する精進覺意なり。是れを喜覺意と相應するも、精進覺意とに非ざるものと謂ふなり。

學・無學の覺意・這種の現前關係に就きて。
【九三】この下に「喜無きなり」の夾註あり。

【九四】この下に「等志無きなり」の夾註あり。

【九五】等業・等命の現前時に於ける學・無學の覺意・這種の現前關係に就きて。

【九六】本節は、覺意と相應する法及び道種と相應する法の各各と、七覺意及び五道種(等語・等業・等命は戒を自性となす)が故に相應法に非ざるを以つて之れを除くなり)の各各との相應關係を明にせんとする段なり。

而して、此の論究をなす所以は、「諸の心心所は俱起せざるが故に、實の相應無し」と主張せる有説を破して相應實有説を顯はさんが爲めなりとなり。

(婆沙九十七卷、毘曇部十一、頁三二五以下)。

【九七】念覺意相應法と擇法覺意相應法の關係。

此の二は一切地及び一切の無漏法に遍きを以つて小の四句分別あり。

【九八】大正本には唯、「覺」とのみあるも三本・宮本に従つて覺意とせり。

【九九】擇法覺意が擇法覺意と相應せざるは、自性は三緣に

〇五 等見と等志とも亦復、是くの如し。

諸法にして念覺意と相應するものなれば、彼れは等念ともなりや。答へて曰はく、是くの如し。

〇六 設し諸法にして等念と相應するものなれば、彼れは念覺意ともなりや。答へて曰はく、是くの如し。

諸法にして擇法覺意と相應するものなれば、彼れは精進覺意ともなりや。答へて曰はく、或は擇法覺意と相應するも精進覺意とに非ざるものあり。

(一)云何んが擇法覺意と相應するも精進覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、精進覺意なり。是れを擇法覺意と相應するも、精進覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが精進覺意と相應するも、擇法覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、擇法覺意なり。是れを精進覺意と相應するも、擇法覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが擇法覺意とも相應し、精進覺意とも相應するものなりや。答へて曰はく、精進覺意を除く諸餘の擇法覺意と相應する法なり。是れと擇法覺意とも相應し、精進覺意とも相應するものと謂ふなり。

(四)云何んが擇法覺意とも相應するに非ず亦、精進覺意とも非ざるものなりや。答へて曰はく、諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを擇法覺意と相應するにも非ず亦、精進覺意とも非ざるものと謂ふなり。

〇七 猗・定・護覺意と等方便・等定・等念とも亦復、是くの如し。

二〇 諸法にして擇法覺意と相應するものなれば、彼れは喜覺意ともなりや。答へて曰はく、或は擇法覺意と相應するも喜覺意とに非ざるものあり。

(一)云何んが擇法覺意と相應するも、喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と及び喜覺意と相應せずして擇法覺意と相應する法となり。是れを擇法覺意と相應するも喜覺意とに非

に就きては婆沙九十六卷、毘曇部十一、頁三〇八を見よ。

【八三】 九道種とは、無學の十種中、等見或は等智の隨一を除く所餘をいふ。

【八四】 七道種とは、學の八道種中より等志を除く所餘をいふ。中間定以上には等志の自性たる覺(尋)無ければなり。

【八五】 六覺意とは、喜覺意を除くなり。第三禪以上には喜無きが故に。

【八六】 四道種とは、覺を自性とす等志と、色を所依とする等語・等業・等命との四を除く所餘の四道種なり。

【八七】 擇法・精進・猗・定・護覺意と等見・等方便・等念・等定との現前時に於ける學・無學の覺意・道種の現前關係に就きて。

【八八】 大正本には、覺護意とあるも三本・宮本・聖本・聖乙本に従つて、護覺意と訂正せり。

【八九】 喜覺意現前時に於ける學・無學の覺意・道種の現前關係に就きて。

【九〇】 等志現前時に於ける學・無學の覺意・道種の現前關係に就きて。

【九一】 この下に「智と見とは並ばざればなり」との夾註あり。

【九二】 等語現前時に於ける

(二)云何んが擇法覺意と相應するも、念覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、念覺意なり。是れを擇法覺意と相應するも念覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが念覺意とも相應し擇法覺意ともなるものなりや。答へて曰はく、擇法覺意を除く諸餘の念覺意と相應する法なり。是れを念覺意とも相應し擇法覺意ともなるものと謂ふなり。

(四)云何んが念覺意と相應するにも非ず擇法覺意とも非ざるものなりや。答へて曰はく、諸餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを念覺意と相應するにも非ず、擇法覺意とも非ざるものと謂ふなり。

精進・猗・定・護覺意と等方便と等定とも亦復、是くの如し。

諸法にして念覺意と相應するものなれば、彼れは喜覺意ともなりや。答へて曰はく、或は念覺意と相應するも喜覺意とは非ざるものあり。

(一)云何んが有るは念覺意と相應するも、喜覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と及び喜覺意と相應せずして念覺意と相應する法となり。是れを念覺意と相應するも、喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが喜覺意と相應するも、念覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と相應する念覺意なり。是れを喜覺意と相應するも念覺意とに非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが念覺意と相應し喜覺意とも相應するものなりや。答へて曰はく、念覺意を除く諸餘の喜覺意と相應する法なり。是れを念覺意と相應し喜覺意とも相應すなものと謂ふなり。

(四)云何んが念覺意と相應するにも非ず、亦喜覺意とも非ざるものなりや。答へて曰はく、喜覺意と相應せざる念覺意と及び餘の心・心法と色と無爲と心不相應行となり。是れを、念覺意と相應するにも非ず亦、喜覺意とに非ざるものと謂ふなり。

無學は幾何くの覺意と幾何くの道種とを現在前するやを明にせんとする段なり。

而かも此の論究のある所以は「諸の心所法は次第して生じ、一時に生ずるものに非ず」との譬喩者及び大徳の異執を破して諸の心所は一時に生ずることを顯はさんが爲めなりと

(婆沙九十五、毘曇部十一、頁三〇二以下参照)。

因みに、七覺意(支)とは、

(一)念覺意 (amrti-samjho = dhyanas)

(二)擇法覺意 (dhammaparivaya-s)

(三)精進覺意 (vīrya-s)

(四)喜覺意 (prīti-s)

(五)猗覺意 (kāya-prasrabhi-s)

(六)定覺意 (samādhi-s)

(七)護覺意 (捨 napeka-s)

【20】念覺意現前時に於ける學・無學の覺意・道種の現前關係に就きて。

【八】未來の有覺有觀三昧とは、未至定のこと。

【九】六覺意とは、七覺意中より喜覺意を除く所餘をいふ。

近分定には捨のみありて喜無ければなり。

因みに、近分定に喜無き理由

なれば六覺意を現在前し、及び九道種を現在前するなり。^{九二}

若し初禪に依りて學が等志を現在前すれば、彼れは七覺意を現在前し及び八道種を現在前す、無學なれば、七覺意を現在前し、及び九道種を現在前するなり。

等語を現在前する時、幾く覺意と幾く道種とを現在前するや。答へて曰はく、若し未來の有覺有觀三昧に依りて學が等語を現在前すれば、彼れは六覺意を現在前し及び八道種を現在前す。無學なれば、六覺意を現在前し及び九道種を現在前するなり、

若し初禪に依りて學が等語を現在前すれば、彼れは七覺意を現在前し及び八道種を現在前す。無學なれば、七覺意を現在前し及び九道種を現在前するなり。

若し禪中間に依りて學が等語を現在前すれば、彼れは六覺意を現在前し、及び七道種を現在前す。無學なれば六覺意を現在前し及び八道種を現在前するなり。

若し第二禪に依りて學が等語を現在前すれば、彼れは七覺意を現在前し及び七道種を現在前す。無學なれば、七覺意を現在前し、及び八道種を現在前するなり。

若し第三禪・四禪に依りて學が等語を現在前すれば、彼れは六覺意を現在前し、及び七道種を現在前す。無學なれば六覺意を現在前し、及び八道種を現在前するなり。

等業と等命とにつきても亦復、是くの如し。

第六節 覺意相應法と道種相應法とに就きて

諸法にして念覺意と相應するものなれば、彼れは擇法覺意とも相應するや。答へて曰はく、或は念覺意と相應するも擇法覺意とに非ざるものあり。

(一)云何んが念覺意と相應するも、擇法覺意とに非ざるものなりや。答へて曰はく、擇法覺意なり。是れを念覺意と相應するも、擇法覺意とに非ざるものと謂ふなり。

いへども、擇法覺意と、有漏と無漏との等見・等智との雜・不雜論をなさざりしかば、之れを明にせんが爲めに此の論究あるなり。

因みに、發智論の決定の相として、覺支の後に道支を設けば道支は唯無漏なるも覺支の前に設けば道支は有漏と無漏とに隨するなり。而るに今は覺意の前に道種を説くが故に茲の等見、等智は有漏と無漏のものを指すなり。

(婆沙九十五、毘婆沙十一、二九以下參照)。

【七三】等見と擇法覺意との雜不雜論。

これに四句分別あり。
【七四】世俗の等見は有漏なるが故に覺意に非ず。

【七五】盡・無生智は見性に非ざるが故に等見に非ず。

【七六】上の兩所の事を除くものとは、意識と相應する善慧を除く餘の行蘊、四蘊の全と無爲となり。

【七七】等智と擇法覺意との雜不雜論。

これに四句分別あり。
【七八】上の兩所の事を除くものとは、六識と相應する善慧を除く餘の行蘊と四蘊の全と無爲法となり。

【七九】本節は、七覺意・八道種の一一が現在前する時、學・

す。無學なれば六覺意を現在前し及び九道種を現在前するなり。

若し初禪に依りて學が念覺意を現在前すれば彼れは七覺意を現在前し及び八道種を現在前す。無學なれば七覺意を現在前し及び九道種を現在前するなり。

若し禪中間に依りて學が念覺意を現在前すれば、彼れは六覺意を現在前し及び七道種を現在前す。無學なれば六覺意を現在前し及び八道種を現在前するなり。

若し第二禪に依りて學が念覺意を現在前すれば彼れは七覺意を現在前し、及び七道種と現在前す。無學なれば七覺意を現在前し、及び八道種を現在前するなり。

若し第三禪・四禪に依りて學が念覺意を現在前すれば、彼れは六覺意を現在前し、及び七道種を現在前す。無學なれば六覺意を現在前し、及び八道種を現在前するなり。

若し無色定に依りて學が念覺意を現在前すれば、彼れは六覺意を現在前し及び四道種を現在前す。無學なれば六覺意を現在前し及び五道種を現在前するなり。

法と精進と猗と定とA₇護との覺意とにつきても、等見と等方便と等念と等定とにつきても亦復、是くの如し。

A₉喜覺意を現在前する時、幾く覺意と幾く道種とを現在前するや。答へて曰はく、若し初禪に依りて學が喜覺意を現在前すれば、彼れは七覺意を現在前し及び八道種を現在前す。無學なれば七覺意を現在前し及び九道種を現在前するなり。

若し第二禪に依りて學が喜覺意を現在前すれば、彼れは七覺意を現在前し及び七道種を現在前す。無學なれば七覺意を現在前し及び八道種を現在前するなり。

等志を現在前する時、幾く覺意と幾く道種とを現在前するや。答へて曰はく、若し未來の有覺有觀三昧に依りて學が等志を現在前すれば、彼れは六覺意を現在前し、及び八道種を現在前す。無學

故なり。

【六】上の爾所の事を除くものとは、眼根を除く餘の色蘊と、慧を除く餘の行蘊と三蘊の全と無爲との法となり。

【七】見と慧との雜・不雜論。この下に「梵に言く、明智は十智之一なり」との夾註あり。

【八】智と慧との雜・不雜論。この下に「定理寛る」の夾註あり。

【九】見と智との相攝關係。見と慧との相攝關係。

【一〇】智と慧との相攝關係。この下に「忍は智を得せざる慧なればなり」との夾註あり。

因みに、所修行の忍は智を得せざる慧なりとは、重觀を智と名くるに、無始より以來、四聖諦に於て未だ一念も聖慧の會觀せること有らざる時、忍起りて創めて觀ずるが故に、其の時は智と名けざるをいふなり。

【一一】見・智・慧の成就論及び已滅無餘論に就きて。

發智論及び婆沙論に於ては、成就論及び斷過智論を詳しく説きて、茲の如く省略せず。因みに、已滅無餘とは斷過知のこと。

【一二】本節は、前節に於て見・智・慧の雜・不雜論をなせりと

(一)云何んが等見にして擇法覺意に非ざるものなりや。答へて曰はく、世俗の等見なり、是れを等見にして擇法覺意に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが擇法覺意にして等見に非ざるものなりや。答へて曰はく、盡智と無生智となり、是れを擇法覺意にして等見に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等見にして擇法覺意なるものなりや。答へて曰はく、盡智と無生智とを除く諸餘の無漏の慧なり、是れを等見にして擇法覺意なるものと謂ふなり。

(四)云何んが等見にも非ず亦、擇法覺意にも非ざるものなりや。答へて曰はく、上の兩所の事を除くものなり。

所謂、等智は是れ擇法覺意なりや。答へて曰はく、或は等智にして擇法覺意に非ざるものあり。

(一)云何んが等智にして擇法覺意に非ざるものなりや。答へて曰はく、世俗の等智なり、是れを等智にして擇法覺意に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが擇法覺意にして等智に非ざるものなりや。答へて曰はく、所修行の忍なり、是れを擇法覺意にして等智に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが等智にして擇法覺意なるものなりや。答へて曰はく、所修行の忍を除く諸餘の無漏の慧なり。是れを等智にして擇法覺意なるものと謂ふなり。

(四)云何んが等智にも非ず、擇法覺意にも非ざるものなりや。答へて曰はく、上の兩所の事を除くものなり。

第五節 覺意と道種との現在前に關する論究

念覺意が現在前する時、幾く覺意と幾く道種とが現在前するや。答へて曰はく、若し未來の有覺有觀三昧に依りて學が念覺意を現在前すれば、彼れは六覺意を現在前し、及び八道種を現在前

【五】 智は、發智論には慧とあり。次も亦然り。

【六】 この下に「問竟る」との夾註あり。

【七】 見と智との難、不雜論。

【八】 智は非色なるに、眼根は見なるも色なるが故に、眼根は智に非ざるなり。

【九】 所修行の忍、即ち諦現觀の無漏の忍は、所觀の諦を忍ずと雖も未だ非決せざるが故に智に非ざるなり。婆沙論には此の外、尊者世友、大德、犍尊者等の諸説あり、住見すべし。

(婆沙九十五卷、毘曇部十一、頁二八七)。

【一〇】 五識身と相應する慧が見性に非ざるは、見は、行相猛利にして、深く所緣に入り能く分別し、深く所緣に入り能く分別し、三世及び無爲を緣じ、數數境を緣じ、所緣を籌量して觀察するに五識と相應する慧は、行相猛利に非ざるを以つて所緣に深く入ることを能はず、分別すること能はず、自相のみを緣じ、能く一刹那の境のみを取り所緣を籌量し、觀察すること能はざるが故に見に非ざるなり。

【一一】 盡智と無生智とが、見に非ざるは此の二智は、所作究竟するを以つて復び推度せざるに、見は推度の性なるが

非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが見にして智の攝なるものなりや。答へて曰はく所修の忍と及び盡智と無生智とを除く諸餘の無漏慧と五見と世俗の等見とを、是れを見にして智の攝なるものと謂ふなり。

(四)云何んが智にも非ず見の攝にも非ざるものなりや。答へて曰はく、上の爾所の事を除くもの所謂、見は彼の慧の所攝なりや。答へて曰はく、或は見にして慧の所攝に非ざるものあり。

(一)云何んが見にして慧の所攝に非ざるものなりや。答へて曰はく、眼根なり、是れを見にして慧の所攝に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが慧にして見の所攝に非ざるものなりや。答へて曰はく、五見と世俗の等見とを除く諸餘の意識身と相應する有漏の慧と五識身と相應する慧と盡智と無生智とを、是れを慧にして見の所攝に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが見にして慧の所攝なるものなりや。答へて曰はく、盡智と無生智とを除く諸餘の無漏の慧と五見と世俗の等見とを、是れを見にして慧の所攝なるものと謂ふなり。

(四)云何んが見にも非ず慧の所攝にも非ざるものなりや。答へて曰はく、上の爾所の事を除くものなり。

智が慧を攝するや、慧が智を攝するや。答へて曰はく、慧は智を攝するも智は慧を攝するに非ず。何等をか攝せざるや。答へて曰はく、所修行の忍なり。

成就と滅とも亦復、是くの如し。これ問と定理と攝と成就と滅となり。

第四節 等見・等智と擇法覺意との雜・不雜論

所謂、等見は是れ擇法覺意なりや。答へて曰はく、或は等見にして擇法覺意に非ざるものあり。

夾註あり。

【四〇】この下に「無覺觀竟る」との夾註あり。

【四一】無色定に依りて初めて無學智を起す時の無學種の成就關係。

【五〇】この下に「智竟る」の夾註あり。

【五一】この下に「眞人竟る」の夾註あり。

眞人とに阿羅漢のこと。

【五二】本節は、見(法智)・智(Jñāna)・慧(Parijāna)の(一)自性、(二)雜不雜論、(三)相攝論、(四)成就論、(五)已滅論(斷通智論)等の諸種の論究をなす段なり。

而して此の論究をなす所以は、(一)「諸の有爲法は皆是れ見の性なり」との説、

(二)「現觀忍の忍も亦、是れ智の性なり」との譬喩者の説、

(三)下智を忍と名け上智を智と名くとの大徳の説、

(四)盡智・無生智も亦、是れ見の性なりとの説、

等の諸の異執を破せんが爲めなりとは婆沙論の解釋する所なり。

(婆沙九十五卷、毘曇部十一、頁二八三以下參照)。

【五三】見・智・慧の自性に就きて。

【五四】所修行の忍とは、諦現觀の忍なり。

て見に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが智にして見なるものなりや。答へて曰はく、所修行の忍と及び盡智と無生智とを除く諸餘の無漏の慧と五見と世俗の等見とを是れを智にして見なるものと謂ふなり。

(四)云何んが智にも非ず見にも非ざるものなりや。答へて曰はく、^{六二}上の兩行の事を除くものなり。所謂、見は是れ慧なりや。答へて曰はく、或は是れ見にして ^{六三}慧に非ざるものあり。

(一)云何んが是れ見にして慧に非ざるものなりや。答へて曰はく、眼根なり。是れを見にして慧に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが是れ慧にして見に非ざるものなりや。答へて曰はく、五見と及び世俗の等見とを除く諸餘の意識身と相應する有漏の慧と、五識身と相應する慧と、盡智と無生智とを、是れを慧にして見に非ざるものと謂ふなり。

(三)云何んが見にして慧なるものなりや。答へて曰はく、盡智と無生智とを除く諸餘の無漏の慧と及び五見と世俗の等見とを是れを見にして慧なるものと謂ふなり。

(四)云何んが見にも非ず慧にも非ざるものなりや。答へて曰はく、上の兩所の事を除くものなり。諸の智は彼れは慧なりや。答へて曰はく、是くの如し、智は是れ慧なり。

^{六四}頗し有る慧にして智に非ざるものありや。答へて曰はく、有り。所修行の忍なり。

所謂、見は是れ智の攝なりや。答へて曰はく、或は見にして智の攝に非ざるものあり。

(一)云何が見にして智の攝に非ざるものなりや。答へて曰はく、眼根と所修行の忍とを是れを見にして智の攝に非ざるものと謂ふなり。

の初をいふ。

【三九】この下に「等見無き也」の夾註あり。等見無きは、智は決斷を相とするに、見は推度を相となすが故に兩相、互に相ひ異なるを以つて同時に俱起せざればなり。

【四〇】無學智とは茲にては盡智、無生智の隨一を指す。

【四一】この下に「等志と等見と無きなり」との夾註あり。

【四二】この下に「初と上と戒と無きなり」の夾註あり。就中、「初」とは茲にては十無學種の最初の等見をいひ、上とは十無學種の第二位たる等志をいひ、「戒」とは十無學種中の戒を自性となす等語・等業・等命の三種をいふ。故に十無學種中より此の五を除く餘の、等勤・等念・等定・等解脱・等智の五を成就することとなるなり。

【四三】此の下に「智覺る」の夾註あり。

【四四】この下に「有覺觀覺る」の夾註あり。

【四五】無覺無觀三昧に依りて、初めて無學智を起す時の無學種の成就關係。

【四六】智は大正本には見とあるも、三本・宮本及び發智論に依りて智と訂正す。以下の※印は之れに準ず。

【四七】この下に「智覺る」の

は八なり。

彼れ滅し已りて失せずして復無色定に依りて無學の初の見を現在前すれば、彼れは過去は五、未來は十、現在に五なり。彼れ滅し已りて失せずして復、無色定に依りて無學の若しくは智、若しくは見を現在前すれば、彼れは過去は六、未來は十、現在に五なり。彼れ滅し已りて失せずして復、滅盡三昧に入るか、世俗心を現在前するかなれば、彼れは過去は六、未來は十、現在に無きなり。彼れ滅し已りて失せずして復、有覺有觀三昧に依りて無學の若しくは智、若しくは見を現在前すれば、彼れは過去は六、未來は十、現在に九なり。彼れ滅し已りて失せずして復、無覺無觀三昧に依りて無學の若しくは智、若しくは見を現在前すれば、彼れは過去は六、未來は十、現在に八なり。

第三節 見・智・慧に關する論究

云何んが見と爲すや。云何んが智と爲すや。云何んが慧と爲すや。

云何んが見と爲すや。答へて曰はく、眼根と五見と世俗の等見と學見と無學見となり。

云何んが智と爲すや。答へて曰はく、所修行の忍を除く諸餘の意識身と相應する智と及び五識身と相應する智と盡智と無生智となり。

云何んが慧と爲すや。答へて曰はく、意識身と相應する慧と及び五識身と相應する慧と盡智と無生智となり。

諸の見は、彼れは智なりや。答へて曰はく、或は見にして智に非ざるものあり。

(一)云何んが見にして智に非ざるものなりや。答へて曰はく、眼根と所修行の忍とを是れを見にして智に非ざるものと謂ふなり。

(二)云何んが智にして見に非ざるものなりや。答へて曰はく、五見と及び世俗の等見とを除く諸餘の意識身と相應する有漏の慧と、及び五識身と相應する慧と盡智と無生智とを是れを智にし

こと無く、又、學位の練根も無きが故に、入正性離生の初得果の初、轉根の初の義は無きなり。

【三四】此の下に「學述竟る」の夾註あり。

【三五】本節は、漏を永盡せる阿羅漢即ち無學者が、有覺有觀三昧・無覺無觀三昧・無色定の三定に依りて初めて無學智を起せし時と、それ以後此の三定に依りて、無學智を起せし時と、此の三定に依りて、初めて無學見を起せし時と、それ以後無學智或は無學見を起せし時等の場合に於て、三世の十無學種の幾くを成就するやを明にせんとしたる段なり。因みに、十無學種(全)とは、無學の八聖道と無學の等解脫(正解脫 samyagvimukti)と無學の等智(正智 samyagjñāna)との十種なり。

尚、精しくは、婆沙九十四卷(毘曇部十一、頁二六九以下)を參照すべし。

【三六】以下、漏盡阿羅漢の三世の十無學種の成就關係に就きて。

【三七】有覺有觀三昧に依りて初めて無學智を起す時の無學種の成就關係。

【三八】無學の初の智とは茲に因みに、初とは四種の初の中、得果の初と轉根の初のとの二

四五 若し無覺無觀三昧に依りて無學の初の智を現在前すれば、彼れは、過去は無く、未來は十、現在は無く、彼れ減し已りて失せずして復、無覺無觀三昧に依りて無學智を現在前すれば、彼れは過去は八、未來は十、現在は八なり。彼れ減し已りて失せずして復、無色定に依りて無學智を現在前すれば、彼れは過去は八、未來は十、現在は五なり。彼れ減し已りて失せずして復、滅盡定に入るか世俗心を現在前するかなれば、彼れは過去は八、未來は十、現在は無きなり。彼れ減し已りて失せずして復、有覺有觀三昧に依りて無學智を現在前すれば、彼れは過去は八、未來は十、現在は九なり。彼れ減し已りて失せずして復、無覺無觀三昧に依りて無學の初の見を現在前すれば、彼れは過去は八、未來は十、現在は八なり。

彼れ減し已りて失せずして復、無覺無觀三昧に依りて無學の若しくは智、若しくは見を現在前すれば、彼れは過去は九、未來は十、現在は八なり。彼れ減し已りて失せずして復、無色定に依りて無學の若しくは智、若しくは見を現在前すれば、彼れは過去は九、未來は十、現在は五なり。彼れ減し已りて失せずして復、滅盡三昧に入るか、世俗心を現在前するかなれば、彼れは過去は九、未來は十、現在は無きなり。彼れ減し已りて失せずして復、有覺有觀三昧に依りて無學の若しくは智、若しくは見を現在前すれば、彼れは過去は九、未來は十、現在は九なり。

四九 若し無色定に依りて無學の初の智を現在前すれば、彼れは過去は無く、未來は十、現在は五なり。彼れ減し已りて失せずして復、無色定に依りて無學智を現在前すれば、彼れは過去は五、未來は十、現在は五なり。彼れ減し已りて失せずして若しくは滅盡定に入るか、世俗心を現在前するかなれば、彼れは過去は五、未來は十、現在は無きなり。彼れ減し已りて失せずして復、有覺有觀三昧に依りて無學の智を現在前すれば、彼れは過去は五、未來は十、現在は九なり。彼れ減し已りて失せずして復、無覺無觀三昧に依りて無學の智を現在前すれば、彼れは過去は五、未來は十、現在は

即ち此の地には覺(等)無きを以つて、尋求の相たる正思惟は在り得ざればなり。

【二】 無色定とは、前三無色をいふ。有頂を説かざるは彼の地に聖道無きが故なり。

【三】 此の下に「等志と等語」と等業と等命とを除く。無色に無ければなり」の夾註あり。

因みに、無色に等語(正語)等業(正業)等命(正命)無きが此の三の自性は戒なるに、無色界には大種無きが故に大種の所造たる戒も無ければなり。

尚、詳しくは婆沙九十六卷、毘曇第十一、頁三一〇を見よ。

尚、無は大正本には「義」とあるも、三本・宮本には「無也」とあるに依り、無とせり。

【二】 此の下に「有覺有觀覺る」の夾註あり。

【三】 無覺無觀三昧に依りて初めて學見を起す時の學種の成就關係。

【三】 此の下に「無覺觀覺る」の夾註あり。

【三】 無色定に依りて、初めて學見を起す時の學種の成就關係。

【三】 「初」とは、茲にては、離染の初の意なり。即ち世俗道に依りて諸の色染を離れ已りて初めて無漏を起すが故に。而して、無色に依りては、見道に入らず、學の果を得する

有覺有觀三昧に依りて學見を現在前すれば、彼れは過去は四、未來は八、現在は八を成就す。彼れ減し已りて失せずして復、無覺無觀三昧に依りて學見を現在前すれば、彼れは過去は四、未來は八、現在は七を成就するなり。

第五節 阿羅漢の三世に於ける十無學種(支)の成就論

十種中、漏盡阿羅漢は、幾く種を過去に成就し、幾く種を未來に成就し、幾く種を現在に成就するや。答へて曰く、若し、有覺有觀三昧に依りて、無學の初の智を現在前すれば、彼れは過去には無く、未來は十、現在は九三五を成就するなり。彼れ減し已りて失せずして復、有覺有觀三昧に依りて

無學智を現在前すれば、彼れは過去は九、未來は十、現在は九なり。彼れ減し已りて失せずして若し無覺無觀三昧に依りて無學智を現在前すれば、彼れは過去は九、未來は十、現在は八なり。彼れ減し已りて失せずして若し無色定に依りて無學智を現在前すれば、彼れは過去は九、未來は十、現在は五三四なり。彼れ減し已りて失せずして若しくは滅盡定に入り、若しくは世俗心を現在前すれば、彼れは過去は九、未來は十、現在は無きなり。

彼れ減し已りて失せずして若し有覺有觀三昧に依りて、無學の初の見を現在前すれば、彼れは過去は九、未來は十、現在は九を成就す。

彼れ減し已りて失せずして復、有覺有觀三昧に依りて、無學の若しくは智、若しくは見を現在前すれば、彼れは過去、未來は十を、現在は九を成就す。彼れ減し已りて失せずして復、無覺無觀三昧に依りて、無學の若しくは智若しくは見を現在前すれば、彼れは過去、未來は十、現在は八なり。彼れ減し已りて失せずして復、無色定に依りて無學の若しくは智、若しくは見を現在前すれば、彼れは過去、未來は十、現在は五なり。彼れ減し已りて失せずして復、滅盡定に入るか世俗心を現在前するかならば、彼れは過去、未來は十、現在は無きなり。

成就關係。

【一〇】有覺有觀三昧とは、未至定と初禪となり。

【一一】「依」の義に(一)俱生するは依の義なり、(二)等無間縁は是れ依の義なりとの二説あるも婆沙評者は、

茲にては未至と初禪とを總じて説きて依となすといへり。

【一二】「初」とは、(一)入正性離生の初(四)得果の初(三)轉根の初(四)離染の初の四種あり。

【一三】「未來」とは、未來修としてその剎那に成就するなり。

【一四】「減し已る」とは、無常なるを顯はし、「失せず」とは(一)得果と、(二)轉根と、(三)退捨との三縁に逢はざるが故に失せざるをいふ。

【一五】初めて學見を起せる地と同一地に再び學見を起すは、或は「恩を報ぜん」と念ずるが故なり」といひ、或は又「(一)現法樂住の爲め、(二)遊戲の功徳の爲め、(三)本所作を觀ぜんが爲め、(四)聖財を受用せんが爲めなり」ともいへり。

【一六】無覺無觀三昧とは、茲に於ては第二、第三、第四禪をいふ。

【一七】次に、(等志無きなり)との夾註あり。此の中、等志とは、正思惟のことにして、

八種中、學迹は幾く種を過去に成就し、幾く種を未來に成就し、幾く種を現在に成就するや。答へて曰く、若し、^{一八}有覺有觀^{一九}三昧に依りて學の^{二〇}初の^{二一}見を現在前するものなれば、彼れは過去は成就せずして八種を^{二二}未來に成就し、八種を現在に成就す。彼れ^{二三}滅し已りて失せずして、若し有覺有觀三昧に依りて學見を現在前すれば、彼れは八種を過去に成就し、八を未來に、八を現在に成就す。彼れ滅し已りて失せずして、若し無覺無觀三昧に依りて學見を現在前すれば、彼れは八を過去に、八を未來に、七を現在に、成就す。彼れ滅し已りて失せずして若し、無色定に依りて學見を現在前すれば、彼れは八を過去に、八を未來に、四を現在に成就す。彼れ滅し已りて失せずして、若しくは滅盡三昧に入り、若しくは世俗心を現在前すれば、彼れは八を過去に、八を未來に成就し、現在には有ること無きなり。^{二九}

若し無覺無觀三昧に依りて學の初の^{三〇}見を現在前すれば彼れは過去のは無く、未來は八、現在は七を成就す。彼れ滅し已りて失せずして復、無覺無觀三昧に依りて學見を現在前すれば、彼れは過去は七、未來は八、現在は七を成就す。彼れ滅し已りて失せずして若し無色定に依りて學見を現在前すれば、彼れは過去は七、未來は八、現在は八、現在は四を成就す。彼れ滅し已りて失せずして若しくは滅盡定に入り、若しくは世俗心を現在前すれば、彼れは過去は七、未來は八を成就し、現在は無きなり。彼れ滅し已りて失せずして復、有覺有觀三昧に依りて學見を現在前すれば、彼れは過去は七、未來は八、現在は八を成就するなり。^{三三}

若し無色定に依りて、學の^{三四}初の^{三五}見を現在前すれば、彼れは過去は無く、未來は八、現在は四を成就す。彼れ滅し已りて失せずして復、無色定に依りて學見を現在前すれば、彼れは過去は四、未來は八、現在は四を成就す。彼れ滅し已りて失せずして復、滅盡定に入り若しくは、世俗心を現在前すれば、彼れは過去は四、未來は八を成就し、現在は無きなり。若し滅し已りて失せずして復、

三種の定に依りて初めて學の八種(支)を起せし時、と及びこれ以後、此の三定に依りて學見を起せし時とは三依りて於て學の八支の幾くを成就するやを明にせんとしたる段なり。

因みに、學の八種(支)とは、

(一)等見(正見 samyagditthi)
(二)等志(正思惟 samyaksamīti)
(三)等語(正語 samyagvāk)

(四)等業(正業 samyakkamma)

(五)等命(正命 samyagajiva)

(六)等方便(正精進 samyagvyāyāma)

(七)等念(正念 samyaksamīti)

(八)等定(正定 samyaksamāpatti)

なり。尙、此の論究をなせし理由は(一)過未無體・現在は無爲説(二)成就・不成就性を撰無する譬喩者の説。

(三)不成就性を撰無する説
(四)樂道無爲を唱ふる分別論者の説

等の異執を破らんが爲めなり。(婆沙九十三卷、毘曇部十一、頁二四〇以下参照)。

【七】以下學迹の三世の八學種の成就關係に就きて。
【八】有覺有觀三昧に依りて初めて學見を起す時の學種の

設し是れ世俗の等智なれば、是れ世俗の等見なりや。

世俗の等見は世俗の等智の所攝なりや。

設し是れ世俗の等智なれば、世俗の等見の所攝なりや。

若し世俗の等見を成就するものなれば、彼れは世俗の等智をも成就するや。

設し世俗の等智を成就するものなれば、彼れは世俗の等見をも成就するや。

若し世俗の等見が已滅し無餘なれば、彼の世俗の等智もなりや。

設し世俗の等智が已滅し無餘なれば、彼れは世俗の等見もなりや。

これ問と定理と攝と成就と滅となり。

^{一五}(八)云何んが無漏の等見なりや。

云何んが無漏の等智なりや。

若し無漏の等見なれば是れ無漏の等智なりや。

設し是れ無漏の等智なれば、是れ無漏の等見なりや。

無漏の等見は無漏の等智の所攝なりや。

設し無漏の等智なれば、無漏の等見の所攝なりや。

若し無漏の等見を成就するものなれば、彼れは無漏の等智をもなりや。

設し無漏の等智を成就するものなれば、彼れは無漏の等見をもなりや。

これ問と定理と攝と成就となり。

此の章の義を願はくば具さに演説せん。

一六

第一節 學迹の三世に於ける學種(支)の成就論

又、世尊の言く「八種あり、學迹に成就さる。十種あり、漏盡の阿羅漢に成就さる」と。

【一五】無漏の等見・等智に關する論究。

【一六】本節は、學迹即ち見諦者が有覺有觀三昧(有尋有伺定)無覺無觀三昧・無色定の

設し智が已滅し無餘なれば、彼の見もなりや。

若し見が已滅し無餘なれば、彼の慧もなりや。

設し慧が已滅し無餘なれば、彼の見もなりや。

若し智が已滅し無餘なれば、彼の慧もなりや。

設し慧が已滅し無餘なれば、彼の智もなりや。

これ問と定理と攝と成就と滅となり。

一〇 (四) 謂ふ所の等見は是れ擇法覺意なりや。設し是れ擇法覺意なれば、是れ等見なりや。

謂ふ所の等智は是れ擇法覺意なりや。設し是れ擇法覺意なれば、是れ等智なりや。

二 (五) 念覺意が現在前する時、幾く覺意と幾く道種とが現在前するや。

精進と喜と猗と定と護との覺意と等見と等志と等語と^二等業と等命と等方便と等念と等定とが現在前する時、幾く覺意と幾く道種とが現在前するや。

三 (六) 諸法と念覺意とが相應するとき、擇法覺意は彼れとも相應するや。設し諸法と擇法覺意とが

相應すれば念覺意は彼れとも相應するや。

諸法と念覺意とが相應するとき、精進・喜・猗・定・護覺意と等見・等志・等方便・等念・等定とは彼れ

とも相應するや。設し諸法と等定とが相應すれば、念覺意は彼れとも相應するや。

諸法と乃至等念とが相應するとき、等定は彼れとも相應するや。設し諸法と等定とが相應すれば

等念は彼れとも相應するや。

一四 (七) 云何んが世俗の等見なりや。

云何んが世俗の等智なりや。

若し世俗の等見なれば是れ世俗の等智なりや。

若し世俗の等見なれば是れ世俗の等智なりや。

譯文としては後者の方がその意味明了なるを以つて可なり。

【七】 學迹の學の八種(支)の成就論。

【八】 漏盡阿羅漢の無學の十種(支)の成就論。

【九】 見・智・慧に関する問題。

【一〇】 等見・等智と擇法覺意とに関する問題。

【一一】 覺意と道種との現在前に關する問題。

【一二】 此の下に「身也」の夾註あり。

【一三】 覺意相應法と道種相應法とに関する問題。

【一四】 世俗の等見・等智に關する問題。

するや。

(三)云何んが見と爲すや。

云何んが智と爲すや。

云何んが慧と爲すや。

若し見なれば、是れ智なりや。

設し智なれば、是れ見なりや。

若し見なれば、是れ慧なりや。

設し慧なれば、是れ見なりや。

若し智なれば、是れ慧なりや。

設し慧なれば、是れ智なりや。

見が智を攝すとせんや、智が見を攝すとせんや。

見が慧を攝すとせんや、慧が見を攝すとせんや。

智が慧を攝すとせんや、慧が智を攝すとせんや。

若し見を成就すれば、彼れは智をも成就するや。

設し智を成就すれば、彼れは見をも成就するや。

若し見を成就すれば、彼れは慧をも成就するや。

設し慧を成就すれば、彼れは見をも成就するや。

若し智を成就すれば、彼れは慧をも成就するや。

設し慧を成就すれば、彼れは智をも成就するや。

若し見が已滅し無餘なれば、彼の智もなりや。

學迹の三世に於ける八學種(支)の成就論及び漏盡の阿羅漢の三世に於ける十無學種の成就論を指す。

「智」とは、見・智・慧の諸種の問題に就きての論究をいひ、「擇」とは、等見・等智と擇法覺意との關する問題をいひ、現在前とは念覺意・擇法覺意等の七覺意と、八道種との一が現在前する時、七覺意と八道種との幾くが現在前するやを明にするをいふ。因みに、現在前は、大正本に恒在前とあるも、これは現在前の誤植ならん。

「諸の覺と相應するもの」とは、覺意相應法と道種相應法との關係論をいひ、

「世の見」とは、世俗の等見・等智に關する論究を指し、

「無漏」とは、無漏の等見・等智に關する論究を指す。

因みに、發智論の此れに相應する頌文を示せば次の如し。

「八學、十無學、見等覺道三、

俗、無漏、見、智、

此章顯具說」

【六】此の文は、發智論七卷に依れば「學行迹は學の八支を成就す。漏盡の阿羅漢は十無學支を成就す」とあり。

卷の第九 (第三編 智健度)

第三編 智 論

(智健度第三) (發智論卷第七、大正二六、頁九五—以下)

本編の總目次

五跋渠の頌に曰く、

八種有ると、五處と

若し能く智を修行すると、相應は最後に在り。

知他人心智と

第一章 學・無學種(支)論及び見・智・慧論

(阿毘曇八道跋渠第一)

本章の内容目次 第一

八と十との種と智と、

諸の覺と相應するものと、

本章の内容目次第二

擇と現在前と、

世の見と無漏のとなり。

(一)又、世尊の言く「八種あり學迹に成就さる。十種あり漏盡の阿羅漢に成就さる」と。

八種中、學迹は幾く種を過去に成就し、幾く種を未來に成就し、幾く種を現在に成就するや。

(二)十種中、漏盡の阿羅漢は幾く種を過去に成就し、幾く種を未來に成就し、幾く種を現在に成就

【一】第一編雜論に於て、法の覺は結の斷に由りて明淨ならしむものなることを述べ、第二編結論に於て、其の結とは如何なるものなりやを明せしを以つて、本編に於てはその結の斷を證するものたる智に關する論究をなすを其の目的とす、而しその内容の大綱は〔註二〕に示せるが如し。

【二】「八種有」とは、八道跋渠を指し、

【三】「五處」とは、五種跋渠をいひ、「知他人心智」とは、知他人心智跋渠を指し、

【四】「若し能く智を修行す」とは、修智跋渠をいひ、

【五】「相應は最後に在り」とは、智健度の最後の章たる相應跋渠をいふなり。即ち智論中の各章の名前を挙げたるなり。

【六】本章の内容は次の目次の中に於て列舉せらるるが如し。

【七】以下の目次第一は本章の内容を頌文の形によりて一箇條書きにて列舉せるものなり。次の内容目次第二は、同じく之れを論題式に列舉するものなり。

【八】「八と十との種」とは、

無色界の苦諦所斷の使を作證する時、苦未知智が現在前すれば十八使の盡を作證し結を悉く盡くさず、須陀洹果を得るものなれば……乃至阿羅漢果を得るものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。無色界の習諦所斷の使の盡を作證する時、習未知智が現在前すれば、十二使の盡を作證し結を悉く盡くさず、須陀洹果を得るものなれば……乃至阿羅漢果を得るものなれば、九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。盡諦所斷も亦復、是くの如し。無色界の道諦所斷の使の盡を作證する時、須陀洹果を得るものなれば……乃至阿羅漢果を得るものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。無色界の思惟所斷の使の盡を作證する時、阿羅漢果を得るものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。^{二八二}

結使變度十門跋渠第四竟（梵本一千六百首盧長十二字）

【二八二】この下に「盡證十門竟る」の夾註あり。

九結を永盡するなり。盡諦所斷の使も亦復、是くの如し。欲界の道諦所斷の使の盡を作證する時、凡夫人の欲愛盡に到るものなれば三十六使の盡を作證し三結を永盡す、無垢人にして道法智が現在前すれば八使の盡を作證し結を悉く盡くさす、須陀洹果を得するものなれば……乃至阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。欲界の思惟所斷の盡を作證する時、凡夫人の欲愛盡に到るものなれば三十六使の盡を作證し三結を永盡す、阿那含果を得するものなれば九十二使の盡を作證し六結を永盡す、阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

色界の苦諦所斷の使の盡を作證する時、凡夫人の色愛盡に到るものなれば三十一使の盡を作證し結を悉く盡くさす、無垢人にして苦未知智が現在前すれば十八使の盡を作證し結を悉く盡くさす、須陀洹果を得するものなれば……乃至阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡す。色界の習諦所斷の使の盡を作證する時、凡夫人の色愛盡に到るものなれば三十一使の盡を作證し結を悉く盡くさす、無垢人にして習未知智が現在前すれば十二使の盡を作證し結を悉く盡くさす。須陀洹果を得するものなれば……乃至阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。盡諦所斷の使の盡を作證する時も亦復、是くの如し。色界の道諦所斷の使の盡を作證する時、凡夫人の色愛盡に到るものなれば三十一使の盡を作證し結を悉く盡くさす、無垢人にして道未知智が現在前すれば十四使の盡を作證し三結を永盡す、須陀洹果を得するものなれば……乃至阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡す。色界の思惟所斷の使の盡を作證する時、凡夫人の色愛盡に到るものなれば三十一使の盡を作證し結を悉く盡くさす、無垢人なれば三使の盡を作證し結を悉く盡くさす。阿羅漢果を得するものなれば、九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

【二八】「無垢人……三結を永盡す」の一句は發智論には無し。此の中、無垢人とは聖者のことなり。

と縛中の欲愛身縛と瞋恚身縛と蓋中の貪欲・瞋恚・睡眠・調戲と結中の瞋恚・慳・嫉結と下分中の貪欲・瞋恚と愛身中の鼻・舌更愛と使中の貪欲使・瞋恚使と結中の瞋恚結・慳結・嫉結との盡を作證する時、凡夫人の欲愛盡に到るものなれば三十六使の盡を作證し三結を永盡す。阿那含果を得するものなれば九十二使の盡を作證し六結を永盡す、阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

^{二七六}有漏と無明漏との盡を作證する時、阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。流中の有漏・無明流と、有軌・無明軌と、^{二七七}我受と愛結と慳慢結と意更愛と有愛使と慳慢使と無明使と愛結と慳慢結と無明結との盡を作證する時、阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

^{二七八}疑蓋の盡を作證する時、凡夫人の欲愛盡に到るものなれば三十六使の盡を作證し三結を永盡す、無垢人にして道法智が現在前すれば八使の盡を作證し結を悉く盡くさす、須陀洹果を得するものなれば……、乃至阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

^{二七九}眼・耳・身更愛の盡を作證する時、梵天上愛の盡に到る。即ち彼れは三愛身の盡を作證し結使を悉く盡くさす、阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

^{二八〇}九十八使中、欲界の苦諦所斷の使の盡を作證する時、凡夫人の欲愛盡に到るものなれば三十六使の盡を作證し三結を永盡す、無垢人にして苦法智が現在前すれば十使の盡を作證し結を悉く盡くさす、須陀洹果を得するものなれば……、乃至阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。欲界の習諦所斷の使の盡を作證する時、凡夫人の欲愛盡に到るものなれば、三十六使の盡を作證し三結を永盡す。無垢人にして習法智が現在前すれば七使の盡を作證し結を悉く盡くさす、須陀洹果を得するものなれば……、乃至阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し

【二七六】有漏等の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

【二七七】我受は大正本には、我とあるも宮本・聖本・聖二本に従つて我受とせり。

【二七八】疑蓋の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

【二七九】眼・耳・身更愛の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

【二八〇】九十八使の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

盡くさず、阿羅漢を得するものなれば、九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。空處解脫と空處入とも亦復、是くの如し。識處の盡を作證する時、識處愛の盡に到る。即ち彼れは識處の盡を作證し、結使を悉く盡くさず、阿羅漢を得するものなれば、九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。識處解脫と識處入とも亦復、是くの如し。不用處の盡を作證する時、不用處愛の盡に到る。即ち彼れは不用處の盡を作證し結使を悉く盡くさず、阿羅漢を得するものなれば、九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。不用處解脫も亦復、是くの如し。

【三〇】結中、身見の盡を作證する時、苦未知智を現在前するものなれば十八使の盡を作證し、結を悉く盡くさざるも、須陀洹を得するものなれば八十八使の盡を作證し三結を永盡す、斯陀含を得するものも亦、爾り。阿那含を得するものなれば九十二使の盡を作證し六結を永盡す、阿羅漢を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。下分中の身見と見中の身見邊見との盡を作證する時、苦未知智を現在前するものなれば十八使の盡を作證し結を悉く盡くさず、須陀洹……、

斯陀含……、阿那含……、阿羅漢を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。【三一】戒盜と疑との盡を作證する時、須陀洹……、斯陀含……、阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。是くの如く、見流と見軛と戒受と見受と戒盜身縛と我見身縛と下分中の戒盜・疑と、見中の邪見・見盜・戒盜と使中の見使・疑使と結中の見結・失願結・疑結との盡を作證する時も須陀洹果……、斯陀洹果……、阿那含果……、阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し、九結を永盡するなり。

【三二】貪と瞋恚と愚癡と及び欲漏との盡を作證する時、凡夫の欲愛盡に到るものなれば三十六使の盡を作證し三結を永盡す。阿那含果を得するものなれば九十二使の盡を作證し六結を永盡す、阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。是くの如く、欲流と欲軛と欲受

【三七】身見等の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

【三〇】「須陀洹……九結を永盡するなり」は原文には「須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢果九十八使盡作證九結永盡」とあるも、意味明了ならざるが故に、發智論に據りて斯くの如く補譯せり。

【三一】戒盜・疑等の盡を作證する時作證する使及び結の盡に就きて。

【三二】貪等の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

【三五】欲受は大正本に欲愛とあるも宋本・聖本・聖乙本に従つて欲受と訂正せり。

なれば九十二使の盡を作證し六結を永盡す、阿羅漢を得するものなれば九十八使の盡を作證し、九結を永盡するなり。

二四 樂根の盡を作證する時、遍淨天愛盡に到る。即ち彼れは樂根の盡を作證し、結使を悉く盡くさす、阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し、九結を永盡するなり。

二六 喜根の盡を作證する時、光音天愛盡に到る、即ち彼れは喜根の盡を作證し結使を悉く盡くさす、阿羅漢を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

二七 眼識・耳識・身識持の盡を作證する時、梵天上愛盡に到る、即ち彼れは三識持の盡を作證し、結使を悉く盡くさす、阿羅漢を得するものなれば、九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

二八 見諦所斷法の盡を作證する時、須陀洹果を得するものれば、八十八使の盡を作證し三結を永盡す、斯陀含果を得するものなれば八十八使の盡を作證し、三結を永盡す、阿那含果を得するものなれば九十二使の盡を作證し六結を永盡す、阿羅漢果を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

二九 禪中、初禪の盡を作證する時、初禪愛の盡に到る。即ち彼れは初禪の盡を作證し結使を悉く盡くさす、阿羅漢を得するものなれば、九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。第二禪の盡を作證する時、第二禪愛の盡に到る。即ち彼れは第二禪の盡を作證し結使を悉く盡くさす、阿羅漢を得するものなれば九十八使の盡を作證し、九結を永盡するなり。喜と初第二解脱と初四除入とも亦復、是

るものなれば九十八使の盡を作證し、九結を永盡するなり。喜と初第二解脱と初四除入とも亦復、是くの如し。

第三禪の盡を作證する時、第三禪愛の盡に到る。即ち彼れは第三禪の盡を作證し結使を悉く盡くさす、阿羅漢を得するものなれば、九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

三〇 無色中、空處の盡を作證する時、空處愛の盡に到る。即ち彼れは空處の盡を作證し、結使を悉く

の夾註あり。就中、道迹の三とは、愛・慢・無明の三結をいひ、この三を除くものは見・取・疑の三結なり。此の見・取・疑の三結は見所斷なるを以つて阿那含果を得する時、永盡するなり。

【三五】大正本には證の下に「時」の字あるも、宮本に依りて之れを除却せり。

【三六】喜根を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

【三七】眼・耳・身識持の盡を作證する時作證する使及び結の盡に就きて。

【三八】見諦所斷法の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

【三九】前三禪等の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

【四〇】前三無色等の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

眼根の盡を作證する時、凡夫人にして色愛盡に到るものなれば、三十一使の盡を作證し結を悉く盡さず、無垢人なれば三使の盡を作證し結を悉く盡くさず、阿羅漢を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。眼根の如く、是くの如く耳・鼻・舌・身根と眼持と耳・鼻・舌・身持と色・聲・細滑持と眼入と耳・鼻・舌・身入と色・聲・細滑入と色陰と色盛陰と地種乃至空種と、色法と可見法と有對法と色界繫法と第四禪と慈・悲・護と淨解脫と後四除入と八一切入と、知他人心智との盡を作證する時も、凡夫人なれば色愛盡に到り三十一使の盡を作證し結を悉く盡くさず、無垢人なれば三使の盡を作證し結を悉く盡くさず、阿羅漢を得するものなれば九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。

意根の盡を作證する時、阿羅漢を得するものなれば、九十八使の盡を作證し九結を永盡するなり。意根の如く、是くの如く、命根と護根と信・精進・念・定・慧根と意持と法持と意識持と意入と法入と痛陰と想・行・識陰と痛盛陰と想・行・識盛陰と識種と無色法と不可見法と無對法と有漏法と有爲法と過去・未來・現在法と善法と無記法と無色界繫法と非學非無學法と思惟所斷法と苦諦と習諦と有想無想處と有想無想解脫と滅盡解脫と等智との盡を作證する時、阿羅漢を得するものなれば九十八使の盡を作證し、九結を永盡するなり。

男根と女根との盡を作證する時、凡夫人にして欲愛盡に到るものなれば三十六使の盡を作證し三結を永盡す。阿那含果を得するものなれば九十二使の盡を作證し六結を永盡す、阿羅漢を得するものなれば、九十八使の盡を作證し、九結を永盡するなり。男根と女根との如く、是くの如く、

苦根と憂根と香持と味持と鼻識持と舌識持と香入と味入と不善法と欲界繫法との盡を作證する時、凡夫人にして欲愛盡に到るものなれば三十六使の盡を作證し三結を永盡す、阿那含果を得するもの

【三五】本節は、四十章の一一盡を作證する時、九十八使中の幾く種の盡を作證し、九結中の幾く結の盡を作證するやを明にせんとする段なり。因みに、此の記述中には發智論の記述の順序一致せざるものあり。

而して此の論を作す所以は、頓斷沙門の「金剛喻定の時、頓に三界の一切の見・修所斷の煩惱を斷じ、此の前後には唯、纏を伏するのみにて隨眠を皆斷すること能はず」との異執と、及び西方沙門の「唯、無間道のみ隨眠の得を斷じ、唯、解脫道のみ能く彼の滅を證す」との異執とを破せんが爲めなりとなり。

(婆沙九十卷、毘曇部十一、頁一八六以下参照)。
【二五】眼根等の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。

【二六】意根等の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に就きて。
【二七】男根等の盡を作證する時、作證する使及び結に就きて。

【二八】三結とは、瞋・恚・嫉の三結なり。
【二九】此の下に「慳と嫉と瞋と道迹の三を除くものと也」

盡するも、聖人にして道法智が現在前すれば八使を斷智し結を悉く盡くさざるなり。欲界の思惟所斷の使を斷智する時、凡夫人なれば欲愛盡に到り、三十六使を斷智し、三結を永盡するも、聖人なれば四使を斷智し三結を永盡するなり。

色界の苦諦所斷の使を斷智する時、凡夫人なれば色愛盡に到り、三十一使を斷智し結を悉く盡くさざるも、無垢人にして苦未知智が現在前すれば十八使を斷智し結を悉く盡くさざるなり。色界の習諦所斷の使を斷智する時、凡夫人なれば色愛盡に到り三十一使を斷智し結を悉く盡くさざるも、無垢人にして習未知智が現在前すれば十二使を斷智し、結を悉く盡くさざるなり。盡諦所斷の使も亦復、是くの如し。色界の道諦所斷の使を斷智する時、凡夫人なれば色愛盡に到り、三十一使を斷智し結を悉く盡くさざるも、無垢人にして道未知智が現在前すれば十四使を斷智し三結を永盡するなり。色界の思惟所斷の使を斷智する時、凡夫人なれば色愛盡に到り、三十一使を斷智し結を悉く盡くさざるも、無垢人なれば三使を斷智し、結を悉く盡くさざるなり。

無色界の苦諦所斷の使を斷智する時、色愛を盡くさざるものにして苦未知智が現在前すれば十八使を斷智し結を悉く盡くさざるも、色愛を已に盡くせるものにして苦未知智が現在前すれば九使を斷智し結を悉く盡くさざるなり。無色界の習諦所斷の使を斷智する時、色愛を未だ盡くさざるものにして習未知智が現在前すれば十二使を斷智し結を悉く盡くさざるも、色愛を已に盡くせるものにして習未知智が現在前すれば六使を斷智し結を悉く盡くさざるなり。盡諦所斷の使も亦復、是くの如し。無色界の道諦所斷の使を斷智する時、色愛を未だ盡くさざるものにして道未知智が現在前すれば十四使を斷智し三結を永盡するも、色愛を已に盡くせるものにして道未知智が現在前すれば七使を斷智し三結を永盡す。無色界の思惟所斷の使を斷智する時、無色界愛盡に到り三使を斷智し三結を永盡するなり。三五七

【三五】「習」は大正本に無きも、三本・宮本・聖乙本に依りて之れを補へり。

【三五】此の下に「斷智九門竟る」の夾註あり。

る時も、色愛を未だ盡くさざるものにして道未知智が現在前すれば十四使を斷智し三結を永盡するも、色愛を已に盡くせるものにして道未知智が現在前すれば七使を斷智し三結を永盡するなり。

二五〇

貪欲と瞋恚と愚癡と及び欲漏とを斷智する時、凡夫人にして欲愛盡に到るものなれば、三十六使を斷智し、三結を永盡するも、聖人なれば四使を斷智し三結を永盡するなり。是くの如く、欲流と欲軛と欲受と欲愛身縛と瞋恚身縛と、蓋中の貪欲・瞋恚・睡眠・調戲と、結中の瞋恚・慳・嫉結と、下分中の貪欲・瞋恚と、愛身中の鼻・舌更愛と、使中の貪欲・瞋恚使と、結中の瞋恚・慳・嫉結とを斷智する時、凡夫人なれば欲愛盡に到り三十六使を斷智し三結を永盡するも、聖人なれば四使を斷智し三結を永盡するなり。

二五一

有漏と無明漏とを斷智する時、無色界愛盡に到り、三使を斷智し三結を永盡す。是くの如く、有流と無明流と有軛と無明軛と我受と愛結と憍慢結と、無明結と意更愛と有愛使と憍慢使と無明使と愛結と憍慢結と無明結とを斷智する時も、無色界愛盡に到り、三使を斷智し三結を永盡するなり。

二五二

疑蓋を斷智する時、凡夫人なれば欲の愛盡に到り、三十六使を斷智し、三結を永盡するも、聖人にして、道法智が現在前すれば八使を斷智し結を悉く盡くさざるなり。

二五三

眼・耳・身更愛を斷智する時、梵天上愛盡に到る。即ち彼れは三愛身を斷智し、結使を悉く盡くさざるなり。

二五四

九十八使中、欲界の苦諦所斷の使を斷智する時、凡夫人なれば欲愛盡に到り、三十六使を斷智し、三結を永盡するも、聖人にして苦法智が現在前すれば十使を斷智し結を悉く盡くさざるなり。欲界の習諦所斷の使を斷智する時、凡夫人なれば欲愛盡に到り、三十六使を斷智し三結を永盡するも、聖人にして、習法智が現在前すれば七使を斷智し結を悉く盡くさざるなり。盡諦所斷も亦復、是くの如し。欲界の道諦所斷の使を斷智する時、凡夫人なれば欲愛盡に到り、三十六使を斷智し三結を永

【二五〇】貪欲等を斷智する時、斷する使及び結に就きて。こは欲愛盡に到る場合なり。

【二五一】有漏等を斷智する時、斷する使及び結に就きて。こは無色愛盡に到る場合なり。

【二五二】茲の無明結は、發智論には無し、但し發智論は此處に「後四順上分結」を置けり。故に今此の無明結は無明順上分結ならん。されど八捷度論中には五順上分結を説かざるを以つて、此の無明結は依然として不明なり。

尙、可考。因みに、無明にして結なるものは九結中の無明結と五順上分結中の無明順上分結とのみなり。

【二五三】疑蓋を斷智する時、斷する使及び結に就きて。

【二五四】眼・耳・身更愛を斷智する時、斷する使及び結に就きて。

【二五五】九十八使を斷智する時、斷する使及び結に就きて。

斷智し^{二四三}三結を永盡するも、色愛を已に盡くせるものにして道未知智が現在前すれば七使を斷智し

三結を永盡するなり。

^{二四四}

禪中、初禪を斷智する時、初禪愛の盡に到る、即ち彼れは初禪を斷智するも、結使を悉く盡くさ

ざるなり。第二禪を斷智する時、^{二四五}第二禪愛の盡に到る、即ち彼れは第二禪を斷智するも、結使を

悉く盡くさざるなり。第二禪の如く、喜と初・第二解脫と初四除入とも亦復、是くの如し。第三禪を

斷智する時、第三禪愛の盡に到る。即ち彼れは第三禪を斷智するも、結使を悉く盡くさざるなり。

^{二四六}

無色中、空處を斷智する時、空處の愛盡に到る。即ち彼れは空處を斷智するも、結使を悉く盡く

さざるなり。空處解脫と空處入とも亦復、是くの如し、識處を斷智する時、識處愛の盡に到る。即

ち彼れは識處を斷智するも結使を悉く盡くさざるなり。識處解脫と識處入とも亦復、是くの如し。

不用處を斷智する時、不用處愛の盡に到る、即ち彼れは不用處を斷智するも結使を悉く盡くさざる

なり。不用處解脫も亦復、是くの如し。

^{二四七}

結中、身見を斷智する時、色愛を未だ盡くさざるものにして、苦未知智が現在前すれば^{一四八}十八使

を斷智し結を悉く盡くさざるも、色愛を已に盡くせるものにして苦未知智が現在前すれば、九使を斷

智し結を悉く盡くさざるなり。身見の如く是くの如く、下分中の身見と見中の身見・邊見とを斷智す

る時も色愛を未だ盡くさざるものにして苦未知智が現在前すれば十八使を斷智し結を悉く盡くさざ

るも、色愛を已に盡くせるものにして苦未知智が現在前すれば九使を斷智し結を悉く盡くさざる

^{二四九}

り。戒盜を疑とを斷智する時、色愛を未だ盡くさざるものにして、道未知智が現在前すれば十四使を

斷智し三結を永盡するも、色愛を已に盡くせるものにして道未知智が現在前すれば七使を斷智し三

結を永盡するなり。戒盜と疑との如く是くの如く、見流と見軌と戒受と見受と戒盜身縛と我見身縛

と下分中の戒盜・疑と見中の邪見・見盜・戒盜と、使中の見使・疑使と結中の見・失願・疑結とを斷智す

なり。

【二四〇】眼・耳・身・識を斷智する時斷ずる使及び結に就きて。

こは梵天の愛を盡くす場合なり。

【二四一】見諦所斷を斷智する時斷ずる使及び結に就きて。

【二四二】十四使とは、色・無色界の道諦所斷の各の七使をいふ。

【二四三】三結とは見結と取結と疑結をいふ。

【二四四】前三種等を斷智する時斷ずる使及び結に就きて。

【二四五】大正本には禪の下に「處」の字あるも、三本・宮本・聖乙本に従つて之れを除けり。

【二四六】前三無色等を斷智する時斷ずる使及び結に就きて。

【二四七】身見等を斷智する時、斷ずる使及び結に就きて。

【二四八】十八使とは、色・無色界の苦諦所斷の各の九使をいふ。

【二四九】戒盜・疑等を斷智する時、斷ずる使及び結に就きて。

さざるも、^{三三八}聖人なれば^{三三九}三使を^{三三〇}斷智し、結を悉く盡さざるなり。眼根の如く、是くの如く耳・鼻・舌・身根と眼持と耳・鼻・舌・身持と色・聲・細滑持と眼入と耳・鼻・舌・身入と色・聲・細滑入と色陰と色

盛陰と地種乃至空種と色法と可見法と有對法と色界繫法と第四禪と慈・悲・護と淨解脫と後四除入と

八一切入と知他人心智とを斷智する時、凡夫人にして色愛盡に到るものなれば、三十一使を斷智し、

結を悉く盡さず。聖人なれば三使を斷智し、結を悉く盡さざるなり。

^{三三二}意根を^{三三三}斷智する時、無色愛盡に到り、^{三三三}三使を斷智し、^{三三三}三結を永盡す。意根の如く、是くの如

く、命根を護根と信・精進・念・定・慧根と意持と法持と意識持と意入と法入と痛陰と想・行・識陰と痛・

盛陰と想・行・識盛陰と識種と無色法と不可見法と無對法と有漏法と有爲法と過去・未來・現在法と善

法と無記法と無色界繫法と非學非無學法と思惟所斷法と苦諦と習諦と有想無想處と有想無想處解脫

と滅盡解脫と等智とを斷智する時、無色界愛盡に到り、三使を斷智し、三結を永盡す。

^{三三六}男根・女根を斷智する時、凡夫人にして欲愛盡に到るものなれば、三十六使を斷智し、^{三三六}三結を

永盡するも、聖人なれば^{三三七}四使を斷智し、三結を永盡するなり。男根・女根の如く、是くの如く、

苦根と憂根と香持と味持と鼻識・舌識持と香入と味入と不善法と欲界繫法とを斷智する時、凡夫人

なれば欲愛盡に到り三十六使を斷智し三結を永盡するも、聖人なれば四使を斷智し三結を永盡する

なり。

^{三三八}樂根を斷智する時、遍淨天愛盡に到る。即ち彼れは樂根を斷智するも、結使を悉く盡くさず。

^{三三九}喜根を斷智する時、光音天愛盡に到る、即ち彼れは喜根を斷智するも、結使を悉く盡くさず。

^{三三〇}眼識・耳識・身識持を斷智する時、梵天上愛盡に到る、即ち彼れは三識持を斷智するも結使を悉く

盡くさず。^{三三一}見諦所斷法を斷智する時、色愛を未だ盡くさざるものにして道未知智が現在前すれば、十四使を

【三八】「聖者なれば」とは、茲に到るものなれば」の意、以下之に準ず。

【三九】三使とは色界の修所斷の三使なり。

【三〇】斷の上に大正本は「得」の字あるも三本・宮本・聖本・聖乙本に従つて得の字を除けり。

【三一】意根等を斷智する時斷ずる使及び結に就きて。

【三二】無色愛を盡す場合なり。

【三三】大正本には斷の上に「得」の字あるも三本・宮本に従つて之を除けり。

【三四】三使とは、無色界思惟所斷の三使なり。

【三五】三結とは、九結中の愛・慢・無明結なり。

【三六】男根等を斷智する時斷ずる使及び結に就きて。

【三七】欲愛を盡くす場合なり。

【三八】三結とは、悲・嫉・慳結なり。

【三九】四使とは、欲界の思惟所斷の貪・瞋・癡・慢なり。

【四〇】樂根を斷智する時斷ずる使及び結に就きて。

【四一】遍淨の愛を盡くす場合なり。

【四二】喜根の斷智を得する時斷ずる使及び結に就きて。

【四三】光音天の愛を盡くす場合

を生ぜるものとなり。誰れが欲界の盡諦所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものと、若しくは欲愛を未だ盡くさざるも盡法智を生ぜるものとなり。誰れが欲界の道諦所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものと、若しくは欲愛を未だ盡くさざるも道法智を生ぜるものとなり。誰れが欲界の思惟所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。

誰れが色界の苦諦所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、色愛を已に盡くせるものと、若しくは色愛を未だ盡くさざるも苦未知智を生ぜるものとなり。「誰れが色界の習諦所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、色愛を已に盡くせるものと、若しくは色愛を未だ盡くさざるも習未知智を生ぜるものとなり。誰れが色界の道諦所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、色愛を已に盡くせるものと、若しくは色愛を未だ盡くさざるも道未知智を生ぜるものとなり。誰れが色界の思惟所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、色愛を已に盡くせるものなり。

誰れが無色界の苦諦所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、苦未知智を生ぜるものなり。誰れが無色界の習諦所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、習未知智を生ぜるものなり。誰れが無色界の道諦所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、道未知智を生ぜるものなり。誰れが無色界の思惟所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、無色界の愛を已に盡くせるものなり。

三三三

第九節 四十章の斷智を得する時、斷盡する使と結とに關する論究

眼根を斷智する時、凡夫人にして色愛盡に到るものなれば、三十一使を斷智し、結を悉く盡く

【三三】この下に「不成就八門覺る也」の夾註あり。

【三四】本節は、四十章の一一を斷智(通知)する時、九十八使中の幾く結を斷じ、九結中の幾く結を永盡するやを明にせんとする段なり。

因みに、此の記述中には發智論の記述と其の順序を異にするものあり。

而かもこの論究をなす緣由は、婆沙論に依れば(一)「色法にも亦、見所斷のものあり」(二)「異生は見所斷の隨眠を斷ずること能はず」(三)「異生は諸の隨眠を斷ずること能はずして唯、能く制伏するのみなり」の異執を破せんが爲めなりとなり。

(婆沙下卷毘曇部十一、頁一七八以下參照)。

【三五】眼等を斷智する時、斷する使及び結に就きて。

こは色愛を盡くす揚合なり。

【三六】三十一使とは、色界の

三十一使なり。

【三七】斷の上に大正本は「得」の字あるも三本・宮本・聖乙本に従つて得の字を除却せり。

くさざるも道法知を生ぜるものとなり。

結中、誰れが瞋恚・慳・嫉結を成就せざるや。答へて曰はく、欲愛を已に盡くせるものなり。誰れが愛結・憍慢結を成就せざるや。答へて曰く、無色界の愛を已に盡くせるものなり。

下分中、誰れが貪欲・瞋恚を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。誰れが身見を成就せざるや。答へて曰く、苦未知智を生ぜるものなり。誰れが戒盜・疑を成就せざるや。答へて曰く、道未知智を生ぜるものなり。

見中、誰れが身見・邊見を成就せざるや。答へて曰く、苦未知智を生ぜるものなり。誰れが邪見・見盜・戒盜を成就せざるや。答へて曰く、道未知智を生ぜるものなり。

二九 愛身中、誰れが鼻・舌更愛を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。誰れが眼・耳・身更愛を成就せざるや。答へて曰く、梵天上の愛を已に盡くせるものなり。誰れが意更愛を成就せざるや。答へて曰く、無色界の愛を已に盡くせるものなり。

三〇 使中、誰れが貪欲・瞋恚使を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。誰れが有愛使・憍慢使・無明使を成就せざるや。答へて曰く、無色界の愛を已に盡くせるものなり。誰れが見使・疑使を成就せざるや。答へて曰く、道未知智を生ぜるものなり。

三一 結中、誰れが瞋恚・慳・嫉結を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。誰れが愛結・憍慢結・無明結を成就せざるや。答へて曰く、無色界の愛を已に盡くせるものなり。誰れが見・失願・疑結を成就せざるや。答へて曰く、道未知智を生ぜるものなり。

三二 九十八使中、誰れが欲界の苦諦所斷の使を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものと、若しくは欲愛を未だ盡くさざるも苦法智を生ぜるものとなり。誰れが欲界の習諦所斷の使を成就せざるや。答へて曰はく、欲愛を已に盡くせるものと若しくは欲愛を未だ盡くさざるも習法智

【二九】六愛身を成就せざる者に就きて。

【三〇】七使を成就せざる者に就きて。

【三一】九結を成就せざる者に就きて。

【三二】九十八使を成就せざる者に就きて。

得するも便ち失せるものとなり。

二二五

誰れが法智・未知智を成就せざるや。答へて曰く、未だ得せざるものなり。誰れが知他人心智を成就せざるや、答へて曰く、若しくは未だ得せざるものと、若しくは得して便ち失せるものとなり。等智を成就せざるもの無し。誰れが苦智・習智・盡智・道智・空・無相・無願を成就せざるや。答へて曰く、未だ得せざるものなり。

二二六

結中、誰れが身見を成就せざるや。答へて曰く、苦未知智を生ぜるものなり。誰れが戒盜・疑を成就せざるや、答へて曰く、道未知智を生ぜるものなり。

誰れが貪・瞋・恚・愚癡及び欲漏を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。誰れが有漏・無明漏を成就せざるや。答へて曰く、無色界の愛を已に盡くせるものなり。

二二七

流中、誰れが欲流を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。誰れが有漏・無明漏を成就せざるや。答へて曰く、無色界の愛を已に盡くせるものなり。誰れが見流を成就せざるや。答へて曰く、道未知智を生ぜるものなり。

輓も亦、是くの如し。

受中、誰れが欲受を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。誰れが戒受・見受を成就せざるや、答へて曰く、道未知智を生ぜるものなり。誰れが我受を成就せざるや。答へて曰く、無色界の愛を已に盡くせるものなり。

縛中、誰れが欲愛身縛・瞋恚身縛を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。誰れが戒盜身縛・我見身縛を成就せざるや。答へて曰く、道未知智を生ぜるものなり。

二二八

蓋中、誰れが貪欲・瞋恚・睡眠・調戲を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。誰れが疑蓋を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものと、若しくは欲愛を未だ盡

【三五】八智・三三昧を成就せざる者に就きて。

【三六】三結・三善根・三漏を成就せざる者に就きて。

【三七】四流・四輓・四受・四縛を成就せざる者に就きて。

【三八】五蓋・五結・五下分結・五見を成就せざる者に就きて。

るや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。無記法を成就せざるもの無し。

誰れが欲界繫法を成就せざるや。答へて曰はく、無色界のものなり。誰れが色界繫法を成就せざるや。答へて曰く、無色界のものなり。無色界繫法を成就せざるもの無し。

三二 誰れが學・無學法を成就せざるや。答へて曰く、若しくは未だ得せざるものと、若しくは得するも便ち失せるものとなり。非學非無學法を成就せざるもの無し。

誰れが見諦所斷法を成就せざるや。答へて曰く、道未知智を生ずるものなり。思惟所斷法と無斷減法と苦諦と習諦とは成就せざるもの無し。誰れが盡諦を成就せざるや。答へて曰はく、若しくは未だ得せざるものと、若しくは得するも便ち失せるものとなり。誰れが道諦を成就せざるや。答へて曰く、未だ得せざるものなり。

三三 禪中、誰れが初禪を成就せざるや。答へて曰く、凡夫人の梵天の上に生ずるものなり。誰れが第二禪を成就せざるや。答へて曰く、凡夫人の光音天の上に生ずるものなり。誰れが第三禪を成就せざるや。答へて曰く、凡夫人の遍淨天の上に生ずるものなり。誰れが第四禪を成就せざるや。答へて曰く、凡夫人の無色界に生ずるものなり。^{三三}

誰れが四等を成就せざるや。答へて曰く、若しくは未だ得せざるものと若しくは得するも便ち失せるものとなり。

無色中、誰れが空處を成就せざるや。答へて曰く、凡夫人の空處の上に生ずるものなり。誰れが識處を成就せざるや。答へて曰く、凡夫人の識處の上に生ずるものなり。誰れが不用處を成就せざるや。答へて曰く、凡夫人の不用處の上に生ずるものなり。有想無想處を成就せざるもの無し。

三四 誰れが解脱・除入・一切入を成就せざるや。答へて曰く、若しくは未だ得せざるものと、若しくは

【二二】三學法・三斷法・四諦法を成就せざる者に就きて。

【二三】四禪・四等・四無色を成就せざる者に就きて。

【三三】この下に「譯人の云く經本爾りと」の夾註あり。

【三四】八解脱・八除入・一切入を成就せざる者に就きて。

さるものなりや。答へて曰く、無色界のものなり。誰れが眼識・耳識・身識持を成就せざるものなりや。答へて曰く、梵天の上に生じて現在前せざるものなり。誰れが香持・味持・鼻識持・舌識持を成就せざるものなりや。答へて曰く、色・無色界のものなり。意持と法持と二〇五 意識持とを成就せざるもの無し。

二〇六 誰れが眼入、耳・鼻・舌入を成就せざるや。答へて曰く、無色界のものと、欲界の若しくは未だ得せざるものと、若しくは得するも便ち失せるものとなり。誰れが身入、色・聲・細滑入を成就せざるや。答へて曰く、無色界のものなり。誰れが香入、味入を成就せざるや、答へて曰く、色・無色界のものなり。意入と法入とを成就せざるもの無し。

二〇七 誰れが色陰を成就せざるや。答へて曰はく、凡夫人の無色界に生ずるものなり。痛・想・行・識陰を成就せざるものなし。

二〇八 誰れが色盛陰を成就せざるや。答へて曰く、無色界のものなり。痛・想・行・識盛陰を成就せざるものなし。

二〇九 誰れが地種乃至空種を成就せざるや。答へて曰く、無色界のものなり。識種を成就せざるもの無し。

二一〇 誰れが色法を成就せざるや。答へて曰く、凡夫人の無色界に生ずるものなり。無色法を成就せざるものなし。

誰れが可見法・有對法を成就せざるや。答へて曰く、無色界のものなり。不可見法・無對法を成就せざるもの無し。

二一一 有漏・無漏・有爲・無爲・過去・未來・現在法を成就せざるもの無し。

二一二 誰れが善法を成就せざるや。答へて曰く、善根本を斷ぜるものなり。誰れが不善法を成就せざるものなり。

【二〇五】意は大正本に竟とある。も意の誤植につき訂正せり。

【二〇六】十二入を成就せざる者に就きて。

【二〇七】五陰・五盛陰を成就せざる者に就きて。

【二〇八】六種（六界）を成就せざる者に就きて。

【二〇九】色・無色法乃至三世法を成就せざる者に就きて。

【二一〇】三性法・三界繫法を成就せざる者に就きて。

が無色界の盡諦所斷の使を成就するや。答へて曰く、盡未知智を未だ生ぜざるものなり。誰れが無色界の道諦所斷の使を成就するや。答へて曰く、道未知智を未だ生ぜざるものなり。誰れが無色界の思惟所斷の使を成就するや。答へて曰く、無色界の愛を未だ盡くさざるものなり。¹⁰⁰

第八節 四十章の不成就論

¹⁰¹誰れが眼根を成就せざるや。答へて曰く、無色界のものと、欲界の若しくは未だ得せざるものと、若しくは得して便ち失せるものとなり。耳・鼻・舌根も亦復、是くの如し。

誰れが身根を成就せざるや。答へて曰く、無色界のものなり。

意根は成就せざるもの無し。

誰れが男根・女根を成就せざるや。答へて曰く、色・無色界のものと、欲界の未だ得せざるものと、若しくは得して便ち失するものとなり。

命根は成就せざるものなし。

誰れが樂根を成就せざるや。凡夫人にして遍淨天の上に生ずるものなり。誰れが苦根を成就せざるや。答へて曰く、色・無色界のものなり。誰れが喜根を成就せざるや。答へて曰く、凡夫人にして光音天の上に生ずるものなり。誰れが憂根を成就せざるや。答へて曰く、欲愛を已に盡くせるものなり。護根を成就せざるもの無し。

誰れが信・精進・念・定・慧根を成就せざるや。答へて曰く、善根本を斷ぜるものなり。

誰れが未知根・已知根・無知根を成就せざるや。答へて曰く、若しくは未だ得せざるものと、若しくは得して便ち失せるものとなり。

¹⁰²誰れが眼持と耳・鼻・舌持とを成就せざるや。答へて曰はく、無色界のものと、欲界の若しくは未だ得せざるものと、若しくは得して便ち失せるものとなり。誰れが身持と色・聲・細滑持とを成就せ

【100】この下に「成就第七竟る」の夾註あり。

【101】本節は、四十章の一一を成就せざる者は誰れなりやを明す段なり。

因みに、此の論究ある所以は、不成就性の實有を撥無する説を止めんが爲めなりとなり。

婆沙九十卷（毘曇部十一、頁一六七以下）參照。

【102】二十二根を成就せざる者に就きて。

【103】未だ得せざるものとは鉢羅奢位以前のものをいふ。

【104】十八持を成就せざる者に就きて。

疑使を成就するや、答へて曰く、道未知智を未だ生ぜざるものなり。

二九八 結中、誰れが瞋恚・慳・嫉結を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが愛・憍慢・無明結を成就するや。答へて曰く、無色界の愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが見結・失願結・疑結を成就するものなりや。答へて曰く、道未知智を未だ生ぜざるものなり。

二九九 九十八使中、誰れが欲界の苦諦所斷の使を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。若しくは苦法智を未だ生ぜざるものとなり。誰れが欲界の習諦所斷の使を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものとなり。若しくは習法智を未だ生ぜざるものとなり。誰れが欲界の盡諦所斷の使を成就するや、答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものとなり。若しくは盡法智を未だ生ぜざるものとなり。誰れが欲界の道諦所斷の使を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものとなり。誰れが欲界の思惟所斷の使を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。

誰れが色界の苦諦所斷の使を成就するや。答へて曰く、色愛を未だ盡くさざるものなり。若しくは苦未知智を未だ生ぜざるものとなり。誰れが色界の習諦所斷の使を成就するや。答へて曰く、色愛を未だ盡くさざるものなり。若しくは習未知智を未だ生ぜざるものとなり。誰れが色界の盡諦所斷の使を成就するや。答へて曰く、色愛を未だ盡くさざるものなり。若しくは盡未知智を未だ生ぜざるものとなり。誰れが色界の道諦所斷の使を成就するや。答へて曰く、色愛を未だ盡くさざるものなり。若しくは道未知智を未だ生ぜざるものとなり。誰れが色界の思惟所斷の使を成就するや。答へて曰く、色愛を未だ盡くさざるものなり。

誰れが無色界の苦諦所斷の使を、成就するや。答へて曰く、苦未知智を未だ生ぜざるものなり。誰れが無色界の習諦所斷の使を成就するや、答へて曰く、習未知智を未だ生ぜざるものなり。誰れ

【六】九結を成就する者に就きて。

【七】九十八使を成就する者に就きて。

受中、誰れが欲受を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが戒受・見受を成就するや。答へて曰く、道未知智を未だ生ぜざるものなり。誰れが我受を成就するや。答へて曰く、無色界の愛を未だ盡くさざるものなり。

縛中、誰れが欲愛身縛・瞋恚身縛を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。

誰れが戒盜身縛・我見身縛を成就するや。答へて曰く、道未知智を未だ生ぜざるものなり。

蓋中、誰れが貪欲・瞋恚・睡眠・調戲蓋を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが疑蓋を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものと、若しくは道法智を未だ生ぜざるものとなり。

結中、誰れが瞋恚・慳・嫉結を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが愛結・憍慢結を成就するや。答へて曰く、無色界の愛を未だ盡くさざるものなり。

下分中、誰れが貪欲・瞋恚を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが身見を成就するや。答へて曰く、苦未知智を未だ生ぜざるものなり。誰れが疑を成就するや。答へて曰く、道未知智を未だ生ぜざるものなり。

見中、誰れが身見、邊見を成就するや。答へて曰く、苦未知智を未だ生ぜざるものなり。誰れが邪見・見盜・戒盜を成就するや。答へて曰く、道未知智を未だ生ぜざるものなり。

愛身中、誰れが鼻・舌更愛を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが眼・耳・身更愛を成就するや。答へて曰く、梵天の上の愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが意更愛を成就するや。答へて曰く、無色界の愛を未だ盡くさざるものなり。

使中、誰れが貪欲・瞋恚使を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが有愛・憍慢・無明使を成就するや。答へて曰く、無色界の愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが見使。

【五】五蓋・五結・五下分結・五見を成就する者に就きて。

【六】六愛身を成就する者に就きて。

【七】意は大正本に竟とあるも意の眼植につき訂正す。

【七】七使を成就する者に就きて。

く、果實天と若しくは下果實と若しくは聖人にして上に生ずるものとなり。

誰れが四等を成就するや。答へて曰く、若しくは得して失せざるものなり。

無色中、誰れが空處を成就するや。答へて曰く、空處に生ずるものと、若しくは空處の下のもの

と、若しくは聖人にして上に生ずるものとなり。誰れが識處を成就するや。答へて曰く、識處に生

ずるものと、若しくは下識處と、若しくは聖人にして上に生ずるものとなり。誰れが不用處を成就

するや。答へて曰く、不用處に生ずるものと、若しくは下不用處と、若しくは無垢の人八九にして上

に生ずるものとなり。誰れが有想無想處を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが解脫・除入・一切入を成就するや。答へて曰く、若し得して失せざるものなり。

誰れが法智・未知智を成就するや。答へて曰く、若し得するものなり。誰れが知他人心智を成就

するや。答へて曰く、若し得して失せざるものなり。誰れが等智を成就するや。答へて曰く、一切

の衆生なり。誰れが苦智・習・盡・道智・空・無願・無相を成就するや。答へて曰く、若し得するものな

り。

結中、誰れが身見を成就するや。答へて曰く、若し未知智が未だ生ぜざるものなり。誰れが戒

盜・疑を成就するや。答へて曰く、道未知智が未だ生ぜざるものなり。

誰れが貪欲・瞋恚・愚癡及び欲漏を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰

れが有漏・無明漏を成就するや。答へて曰く、無色界の愛を未だ盡くさざるものなり。

流中、誰れが欲流を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが有漏・無

明流を成就するや。答へて曰く、無色界の愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが見流を成就する

や。答へて曰く、道未知智を未だ生ぜざるものなり。 鞭も亦、是くの如し。

【二〇】こは偕起識の場合なり。

抑も五識身は性羸劣なるが故

に他地に現起するとき勢力堅

強ならざるを以つて現在する

ときは便ち、成就するも若し

現在前せざれば則ち成就せざ

るなり。

【二一】十二入を成就する者に

就きて。

【二二】五陰・五盛陰を成就す

る者に就きて。

【二三】この下に「法身なり」の

夾註あり。法身とは茲にては

無漏の無表色なり。

【二四】六種を成就する者に就

きて。

【二五】色・無色法乃至三世法

を成就する者に就きて。

【二六】三性法・三界繫法を成

就する者に就きて。

誰れが可見法・有對法を成就するや。答へて曰く、欲・色界のものなり。誰れが不可見法・無對法を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが有漏法・無漏法・有爲法・無爲法・過去・未來・現在法を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが善法を成就するや。答へて曰く、不斷善根のものなり。誰れが不善法を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが無記法を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが欲界繫法を成就するや。答へて曰く、欲・色界のものなり。誰れが色界繫法を成就するや。答へて曰く、欲・色界のものなり。誰れが無色界繫法を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが學法・無學法を成就するや。答へて曰く、若しくは得して失せざるものなり。誰れが非學非無學法を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが見諦所斷法を成就するや。答へて曰く、未だ道未知智を生ぜざるものなり。誰れが思惟所斷法・無斷滅法・苦諦・習諦を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。誰れが盡諦を成就するや。

答へて曰く、若しくは得して失せざるものなり。誰れが道諦を成就するや。答へて曰く、若しくは得するものなり。

禪中、誰れが初禪を成就するや。答へて曰く、梵迦夷天と若しくは下梵迦夷と、若しくは聖人にして上に生ずるものとなり。誰れが第二禪を成就するや。答へて曰く、光音天と若しくは下光音と若しくは聖人にして上に生ずるものとなり。誰れが第三禪を成就するや。答へて曰く、遍淨天と若しくは下遍淨と若しくは聖人にして上に生ずるものとなり。誰れが第四禪を成就するや。答へて曰

五見・六愛身に使用する使の受根相應分別。

【七】茲に睡とは昏沈をいひ、調とは掉舉をいふ。

【七】眠とは睡眠にして就とは惡作なり。

【七】七使に使用する使の受根相應分別。

【七】九結に使用する使の受根相應分別。

【七】九十八使に使用する使の受根相應分別。

【七】此の下に「根門第六竟」の夾註あり。

【七】本節は四十章の一一を誰れが成就するやを明にする段なり。

尙、此の論究をなす所以は婆沙論に依れば「成就性は實有に非ず」との異執を破せんが爲めなり。

因みに、發智論及び婆沙論は此の成就論と次節の不成就論とを合説せり。

(發智論六卷、婆沙論九十卷、毘曇部十一、頁一六七以下、參照)。

【七】二十二根を成就する者に就きて。

【七】無漏は上に生ずるも捨せざるが故に聖者は、遍淨以上を生ずるも無漏の樂根を成就するなり。

【七】十八持を成就する者に就きて。

誰れが信根・精進・念・定・慧根を成就するや。答へて曰く、不斷善根のものなり。

誰れが未知根・已知根・無知根を成就するや。答へて曰く、若し得して失せざるものなり。

誰れが眼持と耳・鼻・舌持とを成就するや。答へて曰く、色界のものど欲界の若しくは得して失せざるものとなり。誰れが身持と色・聲・細滑持とを成就するや。答へて曰く、欲・色界のものなり。

誰れが眼識持と耳・身識持とを成就するや。答へて曰く、梵迦夷天と若しくは下梵迦夷と若しくは上三禪に生ずるものにして而も現在前するものとなり。誰れが香持と味持と鼻識・舌識持とを成就するや。答へて曰く、欲界の愛を未だ盡くせざるものなり。誰れが意持・法持・意識持を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが眼入と耳・鼻・舌入とを成就するや。答へて曰く、色界のものど欲界の若しくは得して失せざるものとなり。誰れが身入と色・聲・細滑入とを成就するや。答へて曰く、欲・色界のものなり。

誰れが香入・味入を成就するや。答へて曰く、欲界のものなり。誰れが意入・法入を成就するや、答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが色陰を成就するや。答へて曰く、欲・色界のものと、若しくは聖人にして無色界に生ずるものとなり。誰れが痛・想・行・識陰を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが色盛陰を成就するや。答へて曰く、欲・色界のものなり。誰れが痛・想・行・識盛陰を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが地種乃至空種を成就するや。答へて曰く、欲・色界のものなり。誰れが識種を成就するや、答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが色法を成就するや。答へて曰く、欲・色界のものと、若しくは聖人にして無色界に生ずるものとなり。誰れが無色法を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

下) 参照。

【一五】二十二根に使用する使の受根相應分別。

【一六】苦根を除くは、苦根は唯、五識とのみ相應するに、眼根等を緣する諸の使は五識中に無きが故なり。

【一七】女・男根に使用する使は唯、欲界、唯、意識中のみあるに欲界の樂根は唯、五識中のみに在るを以つて樂根と相應せず、故に之れを除くなり。

【一八】苦根に使用する使が苦根に相應繩を作すとき苦根と相應し、所緣繩をなすとき喜・憂・捨の三根と相應するも樂根と相應せざるは樂根にして欲界に在るものは五識中に在ればなり。

【一九】十八持・十二入に使用する使の受根相應分別。

【二〇】五陰乃至四諦に使用する使の受根相應分別。

【二一】大正本には「苦根を除く」は無きも、三本・宮本によりて之れを補えり。

【二二】四種乃至十一切入に使用する使の受根相應分別。

【二三】八智・三三昧に使用する使の受根相應分別。

【二四】三結・三不善根・三漏に使用する使の受根相應分別。

【二五】四流・四軛・四愛・四縛に使用する使の受根相應分別。

見と六愛身との四にして苦根を除くなり。

一七二 使中、貪欲使と憍慢使と見使と疑使との四にして苦根を除く。瞋恚使のは、四にして樂根を除き、有愛使のは三にして苦根と憂根とを除き無明使のは五なり。

一七三 結中、瞋恚結のは四にして樂根を除き、愛結と憍慢結と見結と失願結と疑結との四にして苦根を除く。無明結のは五なり。慳・嫉結のは三にして樂根と苦根とを除くなり。

一七四 九十八使中、欲界見諦所斷のは三にして樂根と苦根とを除く。思惟所斷の愛のは四にして苦根を除き、瞋恚のは四にして樂根を除き、憍慢のは三にして樂根と苦根とを除き、無明のは五なり。色界の使のは三にして苦根と憂根とを除き、無色界の使のは、一にして護根なり。

一七六 第七節 四十章の成就論

一七七 誰が眼根を成就するや。答へて曰く、色界のものと欲界の若し得して失せざるものとなり。耳・鼻・舌根も亦復、是くの如し。

誰れが身根を成就するや。答へて曰く、欲・色界のものなり。

誰れが意根を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが男根・女根を成就するや。答へて曰く、欲界の若し得して失せざるものなり。

誰れが命根を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

誰れが樂根を成就するや。答へて曰く、遍淨天と若しくは下遍淨天と、若しくは一七九聖人にして

上に生ずるものとなり。誰れが苦根を成就するや。答へて曰く、欲界のものなり。誰れが喜根を成就するや。答へて曰く、光音天と若しくは下光音天と、若しくは聖者にして上に生ずるものとなり。誰れが憂根を成就するや。答へて曰く、欲愛を未だ盡くさざるものなり。誰れが護根を成就するや。答へて曰く、一切の衆生なり。

【一七〇】四禪乃至十一切入に使用する使の覺・觀分別。

【一七一】八智・三三昧に使用する使の覺・觀分別。

【一七二】三結・三不善根・三漏に使用する使の覺・觀分別。

【一七三】四流・四弊・四受・四縛に使用する使の覺・觀分別。

【一七四】五蓋・五結・五下分別・五見に使用する使の覺・觀分別。

【一七五】六愛身に使用する使の覺・觀分別。

【一七六】七使に使用する使の覺・觀分別。

【一七七】九結に使用する使の覺・觀分別。

【一七八】九十八使に使用する使の覺・觀分別。

【一七九】此の下に「五門覺覺る」の夾註あり。

【一八〇】本節は四十章の「一」に使用する使は、五受根中の幾何くの根と相應するやを明にする段なり。

而して此の論究をなす所以は「樂・苦の二受は所依の身に隨ひて欲界乃至第四禪に有り、喜・憂の二受は所依の心に隨つて欲界乃至有頂に依り」とする異説と及び「心心所法は次第して起り互に相應せず」との譬喩者の異執とを破せんが爲めなりとなり。婆沙九十卷（毘曇部十一、頁一六三以

のは二にして樂根と護根となり。第四禪のは一にして護根なり。

四等中、慈と悲と護との三にして苦根と憂根とを除き、喜のは二にして喜根と護根となり。

無色定のは一にして護根なり。

初と第二との解脫と初四除入との二にして喜根と護根となり。餘殘の解脫・除入と一切入とのは一にして護根なり。

法智と未知智との無し。知他人心智のは三にして苦根と憂根とを除く。等智のは五なり。苦智と習智と盡智と道智と空・無願・無相との無し。

身見と戒盜と疑と及び貪とに使用する使は、四根と相應し、苦根を除くなり。瞋恚のは四にして樂根を除く。愚癡と及び欲漏と無明漏との五なり。有漏のは三にして苦根と憂根とを除く。

流中、欲流と無明流との五なり。有流のは三にして苦根と憂根とを除く。見流のは四にして苦根を除く。

鞭も亦、是くの如し。

受中、欲受のは五なり。戒受と見受との四にして苦根を除く。我受のは三にして苦根と憂根とを除く。

縛中、瞋恚身縛のは四にして樂根を除く。餘殘の縛のは四にして苦根を除く。

蓋中、貪欲のは四にして苦根を除き、瞋恚のは四にして樂根を除く。睡と調との五なり。眠と戲と疑との三にして樂根と苦根とを除くなり。

結中、瞋恚結のは四にして樂根を除き、愛結と憍慢結との四にして苦根を除く。慳・嫉結のは三にして樂根と苦根とを除くなり。

下分中、貪欲のは四にして苦根を除き、瞋恚のは四にして樂根を除く。身見と戒盜と疑と及び五

る心に就きて。

【七】七使の等無間に生ずる心に就きて。

【八】九結の等無間に生ずる心に就きて。

【九】九十八使の等無間に生ずる心に就きて。

【十】此の下に「仍ち下のものなり。次第門竟る」の夾註あり。

【十一】本節は四十章の一一に使用する使の覺・觀(尋・伺)分別を作す段にして、作論の因由を婆沙論は「尋・伺は心の施・細の相なるが故に三界に皆有り」と主張する譬喩者の異説を破せんが爲めなりと説けり。發智論六卷、婆沙論九十卷(毘曇部十一、頁一六一以下)參照。

【十二】二十二根に使用する使の覺・觀分別。

【十三】大正本には無は「無覺無觀」とあるも、三無漏根に使用する使は無きが故にその覺觀分別を爲すこと能はず、故に茲に「無し」と讀みて、「覺無觀」の三字を除去せり。

因みに、宮本・聖本・聖乙本は此の三字を除けり。

【十四】三行とは有覺有觀と無覺有觀と無覺無觀とをいふ。

【十五】十八持、十二入に使用する使の覺・觀分別。

【十六】五陰乃至四諦に使用する

一五五 九十八使中、欲界の使のは有覺有觀、色界の使のは、三行にして無色界の使のは無覺無觀なり。一五六

一五七 第六節 四十章に使用する使の五受根相應分別

一五八 眼根は諸使に使せらる。此の使は、四根と相應し、苦根を除くなり。耳・鼻・舌・身根も亦復、是くの如し。

意根に使用する使は、五根と相應す。

男根と女根とのは、三にして、樂根と苦根とを除き、命根のは四にして苦根を除く。樂根のは四にして苦根を除き、苦根のは四にして樂根を除く。喜根と憂根とのは三にして樂根と苦根とを除き、護根と、信・精進・念・定・慧根とのは四にして苦根を除く。

一六〇 未知根と已知根と無知根とは使の使用するもの無きなり。

一六一 眼持と耳・鼻・舌・身持と意識持とに使用する使は、四根と相應し、苦根を除くなり。餘殘の持のは五なり。

一六二 眼入と耳・鼻・舌・身入とのは四にして苦根を除き、餘殘の入のは五なり。

一六三 陰と盛陰と種と色法と無色法と可見法と不可見法と有對法と無對法と有漏法と有爲法とのは五なり。無漏法と無爲法とのは無し。

過去・未來・現在と善法と不善法と無記法と欲界繫法とのは五なり。色界繫法のは三にして苦根と憂根とを除く。無色界繫法のは一にして護根なり。

學法と無學法とのは無し。非學非無學法のは五なり。

一六四 四諦所斷法のは四にして、苦根を除く。思惟所斷法のは五にして、無斷滅法のは無し。苦諦と習諦とのは五にして、盡諦と道諦とのは無し。

一六五 禪中、初禪のは三にして苦根と憂根とを除く。第二禪のは第二にして喜根と護根となり。第三禪

空處遍處、識處遍處の所謂後二遍處の等無間には唯、無色の五心のみを生じ、色界修所斷心を生ぜず、何となれば、是れ假想觀なるを以つて色界の定心を引き起すこと能はざればなり。故に茲に六心を生ずといへるは誤りか。
【一六六】發智論(六卷)及び婆沙論(八十九卷)は五心とせり。
【一六七】此の下に「無色の五と色の一となり」の夾註あり。
【一六八】滅盡解脫は心の等無間に生ずるも心の等無間縁に非ざるが故に、心を生ぜずといへるなり。
【一六九】八智・三三昧の等無間に生ずる心に就きて。
【一七〇】二心とは、欲色界の修所斷心なり。
【一七一】三心とは、三界の修所斷心なり。
【一七二】此の下に「色の五と欲の一となり」の夾註あり。
【一七三】三結・三不書根・三漏の等無間に生ずる心に就きて。
【一七四】四流・四轉・四受・四縛の等無間に生ずる心に就きて。
【一七五】心は大正本に無きも三本に従つて附加せり。下の※印を附せるは之れに準ず。
【一七六】五蓋・五結・五下分結・五見の等無間に生ずる心に就きて。
【一七七】六愛心の等無間に生ず

有覺有觀にして、無色界繫法に使用する使は無覺無觀なり。學法と無學法とに使用する使は無し。非學非無學法と四諦・思惟所斷法とに使用する使は三行にして、無斷滅法に使用する使は無し。苦諦と習諦とに使用する使は三行にして、盡諦と道諦とに使用する使は無し。

一四七 禪中、初禪に使用する使は、或は有覺有觀、或は無覺有觀にして、餘殘の禪は無覺無觀なり。四等に使用する使は三行にして、無色定に使用する使は無覺無觀なり。初二解脫と初四除入とに使用する使は三行にして、餘殘の解脫と除入と一切入とに使用する使は無覺無觀なり。

一四八 法智と未知智とに使用する使は無し。知他人心智と等智とに使用する使は三行なり。苦智・習智・盡智・道智と空・無願・無相とに使用する使は無きなり。

一四九 身見と戒盜と疑とに使用する使は三行なり。

一五〇 貪と瞋恚と愚癡と及び欲漏とに使用する使は有覺有觀にして、餘殘の漏は三行なり。

一五一 流中、欲流のは、有覺有觀にして、餘殘の流は三行なり。

一五二 軌も亦、是くの如し。

一五三 受中、欲受のは有覺有觀にして餘殘の受のは三行なり。

一五四 縛中、欲愛身縛と瞋恚身縛とのは有覺有觀にして、餘殘の縛のは三行なり。

一五五 五蓋と及び瞋恚・慳・嫉結とのは有覺有觀にして、餘殘の結のは三行なり。下分中、貪欲と瞋恚と

一五六 のは有覺有觀にして、餘殘の結と及び五見とのは三行なり。

一五七 愛身中、鼻・舌更愛のは有覺有觀にして、眼・耳・身更愛のは或は有覺有觀、或は無覺無觀にして

一五八 意更愛のは三行なり。

一五九 使中、貪欲・瞋恚使のは有覺有觀にして、餘殘の使のは三行なり。

一六〇 結中、瞋恚・慳・嫉結のは有覺有觀にして、餘殘の結のは三行なり。

毘曇部十一、頁一五八）
因みに、大正本には二心の下に「未來・現在二世思惟」の夾註あるも、此の夾註が誤りなることは今は三世の心を問へるに非ずして三界十五部の心を問へるに徴して、明かなり。故に今は此の誤れる夾註を除去すべきなり。尙、宮本には此の夾註無し。

【二】未來には等無間緣無きが故なり。

【三】四禪乃至一切入の等無間に生ずる心に就きて。

【四】此の下に「欲の一の思惟と色の五となり」の夾註あり。

因みに、茲に無色界心を説かざるは四等（無量）は欲界を緣するが故に、有情を緣するが故に等無間に無色界心を生ぜざればなり。

【五】淨解脫等は事を別觀するが故に無色界心を等無間に生ずる色界の五部心のみを生ずるなり。

因みに、此の下に「四色と四大となり」の割註あるも、其の場所は適當ならず、恐らく「八一一切入」の下に置くを妥當とす。蓋し、四色とは青・黃・赤・白の四色。四大とは地・水・火・風の四大にして即ち前八一切入の所緣なればなり。

【六】空處入と識處入、即ち

觀も亦、是くの如し。

受中、欲受の次第に五心を生じ、餘殘の受の次第に十五心を生ず。

縛中、欲愛身縛と瞋恚身縛との次第に五心を生じ、餘殘の縛の次第に十五心を生ず。

五蓋と及び瞋恚・慳・嫉結との次第に五心を生じ、餘殘の二結の次第に十五心を生ず。

下分中、貪欲と瞋恚との次第に五心を生じ、餘殘の三下分と五見との次第に十五心を生ず。

愛身中、鼻舌更愛の次第に五心を生じ、眼・耳・身更愛の次第に十心を生じ、意更愛の次第に十

五心を生ず。

使中、貪欲・瞋恚使の次第に五心を生じ、餘殘の五使の次第に十五心を生ず。

結中、瞋恚・慳・嫉結の次第に五心を生じ、餘殘の六結の次第に十五心を生ず。

九十八使中、欲界の使の次第に五心を生じ、色界の使の次第に十心を生じ、無色界の使の次第に

十五心を生ずるなり。

第五節 四十章に使用する使の覺・觀分別

男根と女根と苦根と憂根とは諸使に使せらる。此の使は有覺有觀なり。

未知根と已知根と無知根とに使用する使は無し。

餘殘の根に使用する使は三行なり。

眼識・耳識・身識持に使用する使は、或は有覺有觀なり、或は無覺有觀なり。香持と味持と鼻識・舌

識持とに使用する使は有覺有觀にして、餘殘の持に使用する使は三行なり。

香入と味入とに使用する使は有覺有觀にして餘殘の入に使用する使は、三行なり。

陰と盛陰と種と色法と無色法と可見法と不可見法と有對法と無對法と有漏法と有爲法と過去・未

來・現在法と善法と無記法と色界繫法とに使用する使は三行なり。不善法と欲界繫法とに使用する使は

【二四】此の下に「十五心文更無也」の割註あり。見道十五心は經に無相なりと説かるるが如く、無間に有漏心を生ずること無きをいふなり。

【二五】三心とは、三界の修所斷の善心なり。

【二六】眼識持乃至、四諦の等無間に生ずる心に就きて。

【二七】此の下に「欲界の五と一禪の五とにして四諦と思惟となり」の割註あり。

因みに、四諦は大正本に習諦とあるも三本宮本に従つて四諦と改む。

【二八】此の下に「欲界の五心なり」の割註あり。

【二九】此の下に「三界の思惟なり」の夾註あり。

【三〇】二心とは、色・無色界の修所斷心にして即ち滅定と無想異熟と無想定とを出でて心が用を生ずるに至る時、過去の能入の心・心所法は爾の時方に等無間緣となり、取果、與果の用有るを謂ふなり。

但し、茲に問題となるは、無想異熟を出ずる心が色界の修所斷心のみなりや五部の心に通ずるやに關しては異説あり、されど評者は五部の心に通ずと許す、然らば嚴密には、「過去法の次第に六心を生ず」といふべきなり。(婆沙八十九卷

根と憂根との次第に五心を生じ、護根と信根と精進根と念根と定根と慧根との次第に十五心を生ず。

未知根の次第には心を生ぜず、已知根と無知根との次第に三心を生ず。

眼識・耳識・身識持の次第に十心を生じ、鼻識・舌識持の次第に五心を生じ、意持と法持と意識持と意入と法入と痛陰と想・行・識陰と痛盛陰と想・行・識盛陰と識種と無色法と不可見法と無對法と有漏法と有爲法との次第に十五心を生ず。無漏法の次第に三心を生ず。無爲法の次第には心を生ぜざるなり。過去法の次第に二心を生じ、未來法の次第には心を生ぜず、現在法と善法と無記法と欲界繫法と色・無色界繫法との次第に十五心を生じ、不善法の次第に五心を生ず。學法と無學法との次第に三心を生じ、非學非無學法と見諦所斷法と思惟所斷法との次第に十五心を生ず。無斷法の次第に三心を生ず。苦諦と習諦との次第に十五心を生じ、盡諦の次第には心を生ぜず。道諦の次第に三心を生ず。

禪の次第に十五心を生じ、四等の次第に六心を生ず。無色定の次第に十五心を生じ、初と第二との解脱と初四除入との次第に六心を生じ、淨解脱と後四除入と八一切入との次第に五心を生ず。空處解脱と空處入と識處解脱と識處入との次第に六心を生ず。不用處解脱と有想無想解脱との次第に五心を生ず。滅盡解脱の次第には心を生ぜざるなり。

法智の次第に二心を生じ、未知智の次第に三心を生ず。知他人心智の次第に六心を生じ、等智の次第に十五心を生ず。苦智と習智と盡智と、道智と、空・無願・無相との次第に三心を生ずるなり。

身見と戒盜と疑との次第に十五心を生ず。

貪と瞋恚と愚癡と及び欲漏との次第に五心を生じ、餘殘の漏の次第に十五心を生ず。

流中、欲流の次第に五心を生じ、餘殘の流の次第に十五心を生ず。

乃至無色界思惟所斷の無明使の如き心心法に屬するものが等無間緣と作りて生ずる心は三界十五部の心中幾くなりやを明す段なり。而して有漏心を生ずることを説きて無漏心を生ずることを説かざるは、本節は結蘊中に在るを以てなりとなり。

因みに婆沙論は此の論究の因由を説明して「心は心の與めに、心所は心所の與めにのみ等無間となり、心所は展轉して等無間緣とならず」との譬喩者の異執を遮しせんが爲めなり、といへり。

發智論卷第六初、婆沙論、八十九卷(毘曇部十一、頁一五三以下)參照。

【二〇】意等の十四根の等無間【二一】十五心とは三界五部の有漏心なり。

【二三】此の下に「二界の五と無色界の一となり」の割註なり。

因みに、二は大正本に三とあるも三本・宮本・聖乙本に従つて二と改む。

又、無色界の一とは無色界の修所斷心にして即ち三靜慮の樂根の等無間に空無邊處の有漏定に超入する場合なり。

【二三】此の下に「欲界の五と二禪の五となり」の夾註あり。

【二三】此の下に「欲界の五と二禪の五となり」の夾註あり。

【二三】此の下に「欲界の五と二禪の五となり」の夾註あり。

【二三】此の下に「欲界の五と二禪の五となり」の夾註あり。

【二三】此の下に「欲界の五と二禪の五となり」の夾註あり。

なり。習諦所斷の使と思惟所斷の使とは亦復、是くの如し。欲界の盡諦所斷の使の緣識は欲界の三種と及び欲界の盡諦所斷の有漏緣と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の有爲緣と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。欲界の道諦所斷の使の緣識は欲界の三種と及び欲界の道諦所斷の有漏緣と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と及び色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

色界の苦諦所斷の使の緣識は欲・色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣欲緣識は界の三種と色・無色界の四種との使に使せらるるなり。習諦所斷の使と思惟所斷の使とも亦復、是くの如し。色界の盡諦所斷の使の緣識は欲・色界の三種と及び色界の盡諦所斷の有漏緣と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色界の有爲緣と無色界の四種との使に使せらるるなり。色界の道諦所斷の使の緣識は欲・色界の三種と及び色界の道諦所斷の有漏緣と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色・無色界の四種との使に使せらるるなり。

無色界の苦諦所斷の使の緣識は三界の三種の使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色・無色界の四種との使に使せらるるなり。習諦所斷の使と思惟所斷の使とは亦復、是くの如し。無色界の盡諦所斷の使の緣識は三界の三種と及び無色界の盡諦所斷の有漏緣との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色界の四種と無色界の有爲緣との使に使せらるるなり。無色界の道諦所斷の使の緣識は三界の三種と及び無色界の道諦所斷の有漏緣との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色・無色界の四種との使に使せらるるなり。

第四節 四十章の次第(等無間)に生ずる有漏心に關する論究

意根の次第に 十五心を生ず。樂根の次第に十一心を生じ、喜根の次第に十心を生じ、苦

【〇七】 及は大正本に無きも三本・宮本によりて之れを補へり。

【〇八】 此の下に「三門竟る」の刺註あり。

【〇九】 本節は四十章中の意根

見中、身見と邊見との緣識は三界の三種の使に使せられ、緣緣識は四種の使に使せらるるなり。戒盜の緣識は三界の三種と及び道諦所斷の有漏縁との使に使せられ、緣緣識は四種の使に使せらるるなり。餘殘の見の緣識は有漏縁の使に使せられ、緣緣識は有爲縁の使に使せらるるなり。

九八 愛身中、鼻・舌更愛の緣識は欲界の三種と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の四種と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。眼・耳・身更愛の緣識は欲・色界の三種の使に使せられ、緣緣識は欲・色界の四種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。意更愛の緣識は有漏縁の使に使せられ、緣緣識は有爲縁の使に使せらるるなり。

九九 使中、貪欲使と瞋恚使との緣識は欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。有愛使の緣識は欲界の三種と色・無色界の有漏縁との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色・無色界の有爲縁との使に使せらるるなり。餘殘の使の緣識は有漏縁の使に使せられ、緣緣識は有爲縁の使に使せらるるなり。

一〇〇 結中、瞋恚結の緣識は欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。慳・嫉・結の緣識は欲界の三種と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の四種と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。餘殘の結の緣識は有漏縁の使に使せられ、緣緣識は有爲縁の使に使せらるるなり。

一〇一 九十八使中、欲界の苦諦所斷の使の緣識は欲界の三種と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の四種と、色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるる

【九八】六愛身の二緣識に使用する使に就きて。

【一〇〇】四種とは盡諦所斷を除く他の四種なり。

【一〇一】大正本には「二種及通一切」とあり、元・明・宮本は「三種及通一切」とあるも共に、法相上妥當ならず依つて發智論の「通行及修所斷」に従つて斯く訂正せり。

【一〇二】七使の二緣識に使用する使に就きて。

【一〇三】九結の二緣識に使用する使に就きて。

【一〇四】九十八使の二緣識に使用する使に就きて。

【一〇五】此の下に「苦と習と思惟となり」の夾註あり。

【一〇六】此の下に「盡を除くなり」の文あるも發智論には無し。而るに三本は之れを夾註とせり。故に今は三本に隨ひ夾註とし置く。

るるなり。

縛中、欲愛身縛と瞋恚身縛との縁識は、欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。戒盜身縛の縁識は三界の三種と及び道諦所斷の有漏縁との使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。我見身縛の縁識は有漏縁の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

蓋中、貪欲と瞋恚と睡眠と調と九六疑との縁識は欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切及び思惟所斷との使に使せらるるなり。九八戲の縁識は欲界の三種と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の四種と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

結中、瞋恚結の縁識は欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。慳結と嫉結との縁識は欲界の三種と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の四種と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。餘殘の結の縁識は有漏縁の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

下分中、貪欲と瞋恚との縁識は欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。身見の縁識は三界の三種の使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。戒盜の縁識は三界の三種と及び道諦所斷の有漏縁との使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。疑の縁識は有漏縁の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

【九六】五蓋・五結・五下分結・五見の二緣識に使用する使に就きて。

【九七】疑は大正本には戲とあるも三本・宮本・聖乙本に従つて疑と改む。

因みに茲の文句に相當する發智論の文句は、「除・惡作・餘蓋」なり。

【九八】戲は大正本に緣とあるも三本・宮本に従つて戲と訂正す。因みに、戲とは惡作のこと。

と空・無願・無相との縁識は三界の二種と通一切との使にせられ、縁縁識は三界四種の使にせらるるなり。

結中、身見の縁識は三界の三種の使にせられ、縁縁識は四種の使にせらるるなり。戒盜の縁識は三界の三種と及び道諦所斷の有漏縁との使にせられ、縁縁識は四種の使にせらるるなり。疑の縁識は有漏縁の使にせられ、縁縁識は有爲縁の使にせらるるなり。

貪と瞋恚と愚癡と及び欲漏との縁識は、欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使にせられ、縁縁識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使にせらるるなり。有漏の縁識は欲界の三種と色・無色界の有漏縁との使にせられ、縁縁識は欲界の三種と色・無色界の有爲縁との使にせらるるなり。無明漏の縁識は有漏縁の使にせられ、縁縁識は有爲縁の使にせらるるなり。

流中、欲流の縁識は欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使にせられ、縁縁識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使にせらるるなり。有流の縁識は欲界の三種と色・無色界の有漏縁との使にせられ、縁縁識は欲界の三種と色・無色界の有爲縁との使にせらるるなり。餘殘の縁識は有漏縁の使にせられ、縁縁識は有爲縁の使にせらるるなり。一扼も亦、是くの如し。

受中、欲受の縁識は欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使にせられ、縁縁識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使にせらるるなり。戒受の縁識は三界の三種と及び道諦所斷の有漏縁との使にせられて、縁縁識は四種の使にせらるるなり。見受の縁識は有漏縁の使にせられ、縁縁識は有爲縁の使にせらるるなり。我受の縁識は欲界の三種と色・無色界の有漏縁との使にせられ、縁縁識は欲界の三種と色・無色界の有爲縁との使にせら

使する使に就きて。

【五】此の下に「無色・有色を治すること同じ」の夾註あり。

【六】八智と三三昧との二縁識に使用する使に就きて。

【九】三結・三不善根・三漏の二縁識に使用する使に就きて。婆沙八十九卷毘曇部十一、頁一四六以下参照。

【先】四流・四軛・四受・四縛の二縁識に使用する使に就きて。

禪の緣識は欲界の四種と色界の有爲緣と無色界の二種と及び通一切との使に使せられ、緣緣識は欲界・無色界の四種と色界の有爲緣との使に使せらるるなり。

四等中、慈と悲と護との緣識は欲・色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色・無色界の四種との使に使せらるるなり。淨解脫と後四除入と八一切入とにつきても、亦復、是くの如し。喜の緣識は欲・色界の三種の使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色界の四種と無色界の二種と及び通一切との使に使せらるるなり。初と第二との解脫と、初四除入とにつきても亦復是の如し。無色中、空處と識處と不用處との緣識は欲界の三種と色界の四種と無色界の有爲緣との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色界の四種と無色界の有爲緣との使に使せらるるなり。有想無想處の緣識は欲・色界の三種と無色界の有爲緣との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色界の四種と無色界の有爲緣との使に使せらるるなり。解脫中、空處解脫と識處解脫と不用處解脫との緣識は欲界の三種と色・無色界の四種との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色・無色界の四種との使に使せらるるなり。有想無想處解脫と及び滅盡解脫との緣識は三界の三種の使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色・無色界の四種との使に使せらるるなり。空處入と識處入とにつきても亦復是の如し。

法智の緣識は欲界の二種と欲界の通一切と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の四種と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。未知智の緣識は色・無色界の二種と及び色・無色界の通一切と欲界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の三種と色・無色界の四種との使に使せらるるなり。知他人心智の緣識は欲・色界の四種と無色界の二種と及び通一切との使に使せられ、緣緣識は、四種の使に使せらるるなり。等智の緣識は有漏緣の使に使せられ、緣緣識は有爲緣の使に使せらるるなり。苦智と習智と盡智と道智

【七】 可見・不可見法と有對、無對法との二緣識に使用する使に就きて。

【七〇】 此の下に「四諦と思惟との通じて三界のもの也」の割註あり。

【七〇】 有漏・無漏法の二緣識に使用する使に就きて。

【八一】 此の下に「盡と道と思惟となり」の割註あり。

【八一】 有爲・無爲法の二緣識に使用する使に就きて。

【八二】 此の下に「思惟と盡と也」の割註あり。

【八二】 此の下に「思惟と盡と也」の割註あり。

【八三】 三世法の二緣識に使用する使に就きて。

【八四】 三性法の二緣識に使用する使に就きて。

【八五】 三界繫法の二緣識に使用する使に就きて。

【八六】 三聖法の二緣識に使用する使に就きて。

【八七】 三斷法の二緣識に使用する使に就きて。

【八八】 四諦の二緣識に使用する使に就きて。

【八九】 此の下に「盡諦と思惟なり」の夾註なり。

【九〇】 四禪の二緣識に使用する使に就きて。

【九一】 四等・八解脫・八除入・八一切入・四無色の二緣識に

^{A三}過去・未來・現在法の縁識は、有爲縁の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

^{A四}善法の縁識は一切の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。不善法の縁識は欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。無記法の縁識は欲界の三種と色・無色界の有漏縁との使に使せらるるなり。

^{A五}欲界繫法の縁識は、欲界の有漏縁と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の有爲縁と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。色界繫法の縁識は欲界の三種と色界の有漏縁と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の三種と色界の有爲縁と無色界の四種との使に使せらるるなり。無色界繫法の縁識は欲・色界の三種と無色界の有漏縁との使に使せられ、縁縁識は欲界の三種と色界の四種と無色界の有爲縁との使に使せらるるなり。

^{A六}學法と無學法との縁識は二種と及び通一切との使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。非學非無學法の縁識は四種と道諦所斷の有漏縁との使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

^{A七}見諦所斷法の縁識は有漏縁の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。思惟所斷法の縁識は三界の三種の使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。無斷滅法の縁識は三種と及び通一切との使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

^{A八}苦・習諦の縁識は有漏縁の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。盡諦の縁識は二種^{A九}と及び通一切との使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。道諦の縁識は二種と及び通一切との使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。

頁一〇九以下参照。
【六六】二十二根の二緣識に使用する使に就きて。
※三種とは見苦・集諦斷と思惟所斷との三種の使の意なり。以下、三種の意は、之に准ず。

【六七】此の下に「二門を合して解す」の割註あり。因みに二門を合して解すとは、緣識に使用する使と縁縁識に使用する使との二門を合して説くとの意なり。

【六八】四種は、發智論には三界の四部とあり、即ち三界の苦・集・道諦所斷の使と思惟所斷の使とに使せらるるなり。

【六九】此の下に「四諦より盡中のを除くと並びに思惟となり」との割註あり。

【七〇】この下に「苦と習と思惟となり」の夾註なり。
【七一】十八持の二緣識に使用する使に就きて。
婆沙八十八卷毘曇部十一、頁一三〇以下を参照せよ。

【七二】十二入の二緣識に使用する使に就きて。
【七三】五陰の二緣識に使用する使に就きて。
【七四】五盛陰の二緣識に使用する使に就きて。
【七五】六種の二緣識に使用する使に就きて。

【七六】色・無色法の二緣識に使用する使に就きて。

法入の縁識は一切の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

七三 色陰の縁識は欲・色界の四種と無色界の二種と及び通一切との使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。痛・想・行・識陰の縁識は有爲縁の使に使せられ、縁縁識も有爲縁の使に使せらるるなり。

七四 色盛陰の縁識は欲色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。痛・想・行・識盛陰の縁識は有漏縁の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

七五 地種乃至空種の縁識は欲・色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。識種の縁識は有漏縁の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

七六 色法の縁識は欲界と色界との四種と無色界の二種と及び通一切との使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。無色法の縁識は一切の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

七七 可見法と有對法との縁識は欲・色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。不可見法と無對法との縁識は一切の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

七八 有漏法の縁識は有漏縁の使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。無漏法の縁識は三種と及び通一切との使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

八九 有爲法の縁識は有爲縁の使に使せられ、縁縁識も亦、有爲縁の使に使せらるるなり。無爲法の縁識は二種と及び通一切との使に使せられ、縁縁識は有爲縁の使に使せらるるなり。

と相應する識と不遍行と相應する識とあり。見滅所斷に有爲縁の隨眠と相應する識と無爲縁の隨眠と相應する識とあり、見道所斷に有漏縁の隨眠と相應する識と無漏縁の隨眠と相應する識とあり。修所斷に染汚の識と不染汚の識とあり、無漏に法智品の無漏識と類智品の無漏識とあり。

(三) 所縁の百二十種とは、三界五部の染汚に九十八種(九十八隨眠)あり、不染汚に十七種(欲界の七・生得・工巧の二善と異熟・威儀路・工巧處・通果・自性の五無覆無記)と、色界の六・工巧處を除く——と、無色界の四(威儀路・工巧處・通果を除く)智品と三無爲)あるなり。

能縁の識の百十四種とは、染汚の九十八隨眠と相應する識と、不染の十四識(前の十七より、三界の自性無記を除くもの)と、無漏の二識(法・類智品の識)となり。

又、斯の論究をなす所以は、「眼等の六識身の所縁の境は各別なり」との異執と、

「六識は唯、外境のみを緣じ内根を緣せず、亦、識をも緣せず」との異執とを遮止せんが爲めなりとなり。

(婆沙八十七卷毘曇部十一、

一切との使に使せられ、緣緣識は欲・色界の有爲緣と無色界の四種との使に使せらるるなり。憂根の緣識は欲界の有漏緣と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の有爲緣と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。護根の緣識は有爲緣の使に使せられ、緣緣識も有爲緣の使に使せらるるなり。

信・精進・念・定・慧根の緣識は四種の使に使せられ、緣緣識も四種の使に使せらるるなり。

未知根と已知根と無知根との緣識は二種と及び通一切との使に使せられ、緣緣識は四種の使に使せらるるなり。

眼持と耳・鼻・舌・身持と、色持と聲・細滑持との緣識は欲・色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は四種の使に使せらるるなり。眼識・耳識・身識持の緣識は、欲・色界の三種の使に使せられ、緣緣識は欲・色界の四種と無色界の二種と及び通一切との使に使せらるるなり。香持と味持と鼻識持と舌識持との緣識は、欲界の三種と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の四種と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

意持と意識持との緣識は有爲緣の使に使せられ、緣緣識も有爲緣の使に使せらるるなり。法持の緣識は一切の使に使せられ、緣緣識は有爲緣の使に使せらるるなり。

眼入と耳・鼻・舌・身入と色・聲・細滑入との緣識は欲・色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は四種の使に使せらるるなり。

香入と味入との緣識は欲界の三種と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、緣緣識は欲界の四種と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

意入の緣識は有爲緣の使に使せられ、緣緣識も有爲緣の使に使せらるるなり。

るが故に盡諦所斷の使に所緣縛を作らず、又、不共なるが故に相應縛もなさざるを以つて、之れを除くを可とす。

【六三】一切は發智論及び婆沙論には「無漏緣の不共無明を除く餘の一切」とあり、此の方かなること前註より推して知るべし。

【六四】此の下に「使門竟る」の劉註あり。

【六五】本節は二十二根乃至九十八使の所謂四十章の一一を緣ずる識即ち緣識と、更にその緣識を緣ずる識たる緣緣識とに使する使は如何なる種類の使なりやを明にする段なり。尙、婆沙論に依れば所緣の諸法に(一)十六種、(二)三十二種、(三)百二十種の三種と、能緣の識に(一)十六種、(二)三十二種、(三)百十四種の三種あり。

就中(一)所緣の十六種とは、三界各の五部と無漏法とをいひ、能緣の十六種も亦、同じきなり。

(二)所緣の三十二種とは、十六種の各に二種あるなり、即ち前四部の各に相應と不相應とあり、修所斷に染汚と不染汚とあり、無漏に有爲と無爲とあるなり。能緣の三十二種とは、十六種に復各二種あるなり、見苦・集所斷に通行

見諦所斷の有漏縁と及び疑と相應する無明の無漏縁との使に使せられ、慳結と嫉結とは欲界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

九十八使中、欲界の苦諦所斷の使は、欲界の苦諦所斷の一切と及び欲界の習諦所斷の通一切との使に使せられ、欲界の習諦所斷の使は欲界の習諦所斷の一切と及び欲界の苦諦所斷の通一切との使に使せられ、欲界の盡諦所斷の使は、欲界の盡諦所斷の一切と及び欲界の通一切との使に使せられ、欲界の道諦所斷の使は、欲界の道諦所斷の一切と及び欲界の通一切との使に使せられ、欲界の思惟所斷の使は欲界の思惟所斷の一切と及び欲界の通一切との使に使せらるるなり。

色・無色界の使につきても、亦復、是くの如し。

第三節 四十章の縁識及び縁縁識に使用する使に關する論究

眼根の縁識は幾く使に使せらるるや。答へて曰く、欲・色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。縁縁識は四種の使に使せらるるなり。

耳・鼻・舌・身根も亦復、是くの如し。

意根の縁識は有爲縁の使に使せられ、縁縁識も、有爲縁の使に使せらるるなり。

男根と女根との縁識は欲界の三種と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の四種と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

命根の縁識は三界の三種の使に使られ、縁縁識は四種の使に使せらるるなり。

樂根の縁識は欲界の四種と色界の有爲法と無色界の二種と及び通一切との使に使せられ、縁縁識は、欲界と無色界との四種と色界の有爲縁との使に使せらるるなり。苦根の縁識は欲界の三種と色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、縁縁識は欲界の四種と色界の三種と無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。喜根の縁識は欲・色界の有爲縁と無色界の二種と及び通

之れを除くなり。

因みに大正本には「見相應」とあるも三本・宮本・聖本・聖乙本に従つて「相應」を除却せり。

【五三】三結・三不善根・三漏に使用する使に就きて。

婆沙八十六卷、毘婆沙十一、頁九六以下參照。

【五四】斷の下に大正本には割註として「略云一切四諦思惟」の文句あるも三本・宮本に従つて之れを除却せり。

【五五】欲界の無明の無漏縁を除くは、こは無漏縁なるが故に愚癡に於て所縁縛を作さず、又、自性は自性と相應せざるが故に相應縛も作さざればなり。

【五六】四流・四纏・四受・四縛に使用する使に就きて。

【五七】五蓋・五結・五下分・五見に使用する使に就きて。

【五八】六愛身に使用する使に就きて。

【五九】七使に使用する使に就きて。

【六〇】九結に使用する使に就きて。

【六一】九十八使に使用する使に就きて。

【六二】「一切」は發智論及び婆沙論には「無漏縁の不共無明を除く餘の一切」とあり。即ち無漏縁の不共無明は無漏縁な

戲は欲界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、疑蓋は欲界の見諦所斷の有漏縁と及び欲界の疑と相應する無明の無漏縁との使に使せらるるなり。

結中、瞋恚結は欲界の有漏縁の使に使せられ、愛結と憍慢結とは三界の有漏縁の使に使せられ、慳結と嫉結とは欲界の通一切と思惟所斷との使に使せらるるなり。

下分結中、貪欲と瞋恚とは欲界の有漏縁の使に使せられ、身見は苦諦所斷の一切と及び習諦所斷の通一切との使に使せられ、戒盜は苦諦所斷の一切と及び習諦所斷の通一切と道諦所斷の有漏縁との使に使せられ、疑は見諦所斷の有漏縁と及び疑と相應する無明の無漏縁との使に使せらるるなり。

見中、身見と憍見とは苦諦所斷の一切と及び習諦所斷の通一切との使に使せられ、邪見は見諦所斷の有漏縁と及び邪見と相應する無明の無漏縁との使に使せられ、見盜は見諦所斷の有漏縁の使に使せられ、戒盜は苦諦所斷の一切と及び習諦所斷の通一切と道諦所斷の有漏縁との使に使せらるるなり。

愛身中、鼻・舌更愛は、欲界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、眼・耳・身更愛は欲・色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、意更愛は三界の有漏縁の使に使せらるるなり。

使中、貪欲使と瞋恚使とは欲界の有漏縁の使に使せられ、有愛使は色・無色界の有漏縁の使に使せられ、憍慢使は三界の有漏縁の使に使せられ、無明使は一切——無明の無漏縁のものを除く——の使に使せられ、見使は見諦所斷の有漏縁と及び見と相應する無明の無漏縁との使に使せられ、疑使は見諦所斷の有漏縁と及び疑と相應する無明の無漏縁との使に使せらるるなり。

結中、瞋恚結は欲界の有漏縁の使に使せられ、愛結を憍慢結とは三界の有漏縁の使に使せられ、無明結は一切——無明の無漏縁のものを除く——の使に使せられ、見結は見諦所斷の有漏縁と及び見と相應する無明の無漏縁との使に使せられ、失願結は見諦所斷の有漏縁の使に使せられ、疑結は

【三九】 有漏・無漏法に使用する使に就きて。

【四〇】 有爲・無爲法に使用する使に就きて。

【四一】 三世法に使用する使に就きて。

【四二】 三性法に使用する使に就きて。

【四三】 三界繫法に使用する使に就きて。

【四四】 三學法に使用する使に就きて。

【四五】 三斷法に使用する使に就きて。

【四六】 四諦に使用する使に就きて。

【四七】 四禪に使用する使に就きて。

【四八】 四等（無慮）に使用する使に就きて。

【四九】 四無色に使用する使に就きて。

【五〇】 八解脱・八陰入（勝處）十一切入（遍處）に使用する使に就きて。

【五一】 八智及び三三昧に使用する使に就きて。

【五二】 見の無漏縁のものとは滅・道諦下の邪見なり。邪見は世俗智を自性となすが故に自性は自性と相應せざるを以つて世俗智に於て相應縛を作さず、又無漏を緣するが故に所緣縛をも作さず、故に茲に

との使に使せらるるなり。等智は一切——見の無漏縁のものを除く——の使に使せらるるなり。苦智と習智と盡智と道智と空・無相・無願三昧とは、使に使せらるること有ること無きなり。

結中、身見は苦諦所斷の一切と及び習諦所斷の通一切との使に使せられ、戒盜は苦諦所斷の一切と及び習諦所斷の通一切と道諦所斷の有漏縁との使に使せられ、疑は見諦所有の有漏縁と及び疑と相應する無明の無漏縁との使に使せらるるなり。

不善根中、貪と瞋恚とは、欲界の有漏縁の使に使せられ、愚癡は欲界の一切——欲界の無明の無漏縁のものを除く——の使に使せらるるなり。

漏中、欲漏は欲界の一切の使に使せられ、有漏は色・無色界の一切の使に使せられ、無明漏は一切無明の無漏縁のものを除く——の使に使せらるるなり。

流中、欲流は欲界の一切の使に使せられ、有漏は色・無色界の一切の使に使せられ、無明流は一切の無明の無漏縁のものを除く——の使に使せられ、見流は見諦所斷の有漏縁と及び見と相應する無明の無漏縁との使に使せらるるなり。

軌も亦、是くの如し。

受中、欲受は欲界の一切の使に使せられ、戒受は苦諦所斷の一切と及び習諦所斷の通一切と道諦所斷の有漏縁との使に使せられ、見受は見諦所斷の有漏縁と及び見と相應する無明の無漏縁との使に使せられ、我受は色・無色界の一切の使に使せらるるなり。

縛中、欲愛身縛と瞋恚身縛とは欲界の有漏縁の使に使せられ、戒盜身縛は苦諦所斷の一切と及び習諦所斷の通一切と道諦所斷の有漏縁との使に使せられ、我見身縛は見諦所斷の有漏縁の使に使せらるるなり。

蓋中、貪欲と瞋恚とは欲界の有漏縁の使に使せられ、睡眠と調とは欲界の一切の使に使せられ、

【三〇】 喜根にして欲界に在るものは、五部に通ず、歡行相轉なるが故に感行相轉なる瞋・疑と相應せず。而して茲に無漏縁の疑と彼れと相應する無明とを除くは、こは無漏縁縁するが故に喜根に於て所縁縛をなさず、又、疑と喜とは相應せざるが故に相應縛をなさざればなり。されど初二靜慮の喜は有漏・無漏に通じ、有漏の喜には一切の使が使す。何となれば、定地の疑は喜と相應するが故に、相應縛をなすを以つて無漏縁の疑とそれと相應する無明とを除く必要なければなり。

【三一】 無漏法に使がせざる理由に就きては婆沙八十六卷(毘曇部十一、頁九〇)に諸種の異説あり。往見すべし。

【三二】 十八持(界)に使用する使に就きて。婆沙八十六卷毘曇部十一、頁九〇以下参照。

【三三】 十二入(處)に使用する使に就きて。

【三四】 五陰(蘊)及び五盛陰に使用する使に就きて。

【三五】 六種(界)に使用する使に就きて。

【三六】 色・無色法に使用する使に就きて。

【三七】 可見・不可見法及び有對・無對法に使用する使に就きて。

三六 可見法と有對法とは欲・色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、不可見法と無對法とは、一切の使に使せらるるなり。

三九 有漏法は一切の使に使せらるるも、無漏法は使に使せらるること有ること無し。

四〇 有爲法は一切の使に使せらるるも、無爲法は使に使せらるること有ること無し。

四一 過去・未來・現在法は一切の使に使せらるるなり。

四二 善法は三界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、不善法は欲界の一切の使に使せられ、無記法は色・無色界の一切と、及び欲界の二種と欲界の習誥所斷の通一切との使に使せらるるなり。

四三 欲界繫法は欲界繫の一切の使に使せられ、色界繫法は色界繫の一切の使に使せられ、無色界繫法は無色界繫の一切の使に使せらるるなり。

四四 學法と無學法とは使に使せらるること有ること無く、非學非無學法は一切の使に使せらるるなり。

四五 見諦所斷法は見諦所斷の一切の使に使せられ、思惟所斷法は思惟所斷の一切と及び通一切との使に使せられ、無斷法は使に使せらるること有ること無し。

四六 苦諦と習誥とは一切の使に使せらるるも、盡諦と道諦とは使に使せらるること有ること無きなり。

四七 禪の中のものは、色界の一切の使に使せらるるなり。

四八 四等は色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

四九 無色の中のもの、無色界の一切の使に使せらるるなり。

五〇 初と第二と第三との解脫と、八除入と八一除入とは、色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

五一 餘殘の解脫と一切入とは、無色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

法智と未知智とは使に使せらるること有ること無し。知他人心智は色界の通一切と及び思惟所斷

を逐はず便宜に従つて、同一の使が使するものを、一處に一括して論ずるは兩者間の相違點なり。

尙、此の論究を爲す緣由は婆沙論の解脫によれば

(一)無學の身中の眼等の法も亦、是れ無漏なり。

(二)煩惱は顛倒なるを以つて實の所緣無し。

(三)所緣縛、相應縛の義無し、等の異執を遮止せんが爲めなりといふ。

婆沙八十六卷(毘曇部十一、頁八七)以下には此の節に對する註釋あり往見すべし。

【七】二十二根に使する使に就きて。

【八】使すとは隨増すの意なり。

【九】通一切使とは通行隨眠のこと。

【一〇】業根にして欲界のものは五識にあり、初靜慮のものは眼・身・身の三識にあるを以つて唯、修所斷のみなるが故に、一一に自地の通一切(通行)と思惟所斷(修所斷)との使が使するも、第三靜慮のもの、意識に在り、有漏なるものは五部に通じ、又、通じて一切の使と相應するが故に、自他の一切の使が使するなり。但し、無漏なるものには使は使せざるなり。

命根は三界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

樂根は色界の一切と欲界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。苦根は欲界の通一切

と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。喜根は色界の一切と欲界の一切——但し、欲界の疑の無

漏縁のものと、彼れと相應する無明とを除く——との使に使せらるるなり。憂根は欲界の一切の使

に使せらるるなり。護根は一切の使に使せらるるなり。

信根と精進根と念根と定根と慧根とは三界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

未知根と已知根と無知根とは使に使せらるること有ること無きなり。

眼持と、耳・舌・身持と、色持と、聲持と、細滑持と、眼識・耳識・身識持とは、欲・色界の通一切

と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。香持と、味持と、鼻識持と、舌識持とは、欲界の通一切

と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。意持と法持と意識持とは一切の使に使せらるるなり。

眼入と耳・鼻・舌・身入と色・聲・細滑入とは欲・色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるな

り。香・味入は欲界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。意入と法入とは一切の使に

使せらるるなり。

色陰は欲・色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、痛・想・行・識陰は一切の使に使せらる

るなり。

色盛陰は欲・色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、痛・想・行・識盛陰は一切の使に使せ

らるるなり。

地乃至空種は、欲・色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、識種は一切の使に使せら

るるなり。

色法は欲・色界の通一切と及び思惟所斷との使に使せられ、無色法は一切の使に使せらるるなり。

有漏心の問題。

【三】此の下に「四門」の割註あり。

【四】四十章に使用する使の覺・觀分別。

【五】此の下に「五門」の割註あり。

【六】四十章に使用する使の受根相應分別。

【七】此の下に「六門」の割註あり。

【八】四十章を成就する人分別。

【九】此の下に「七門」の割註あり。

【一〇】四十章を成就せざる人分別。

【一一】此の下に「八門」の割註あり。

【一二】四十章を斷智する時、斷智する使と結との問題。

【一三】此の下に「九門」の割註あり。

【一四】四十章の盡を作證する時、作證する使と結との盡の問題。

【一五】此の下に「十門」の割註あり。

【一六】本節は、二十二根乃至九十八使の所謂四十章の一に使用する使は如何なる種類のものなりやを明にする段なり。

而して八渡度論は四十章の順序を逐ひて一一を明せるに對して、發智論が必ずしも順序

せらるるや。^一

(四) 意根の次第に幾く心を生ずること有りや。乃至無色界思惟所斷の無明使の次第に幾く心を生ずることありや。^三

(五) 眼根は諸使に使せらる。此の使は當に有覺有觀なりと言ふべきや、無覺有觀なりや、無覺無觀なりや。乃至無色界思惟所斷の無明使は諸使に使せらる、此の使は當に有覺有觀なりと言ふべきや、無覺有觀なりや、無覺無觀なりや。^五

(六) 眼根は諸使に使せらる。此の使は幾く根と相應するや、乃至無色界思惟所斷の無明使は諸使に使せらる、此の使は幾く根と相應するや。^七

(七) 誰れが眼根を成就し、乃至誰れが無色界思惟所斷の無明使を成就するや。^九

(八) 誰れが眼根を成就せず、乃至誰れが無色界思惟所斷の無明使を成就せざるや。^三

(九) 眼根を斷智する時、幾く使と幾く結とを斷智するや乃至無色界思惟所斷の無明使を斷智する時、幾く使と幾く結とを斷智するや。^三

(十) 眼根の盡を作證する時、幾く使と幾く結との盡を作證するや、乃至無色界思惟所斷の無明使の盡を作證する時、幾く使と幾く結との盡を作證するや。^五

此の章の義を願はくは具さに演說せん。

第一節 四十章に使用する使に関する論究

眼根は、幾く使に使せらるるや。欲界と色界との通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。耳・鼻・舌・身根も亦復、是くの如し。

意根は、一切の使に使せらるるなり。

男根と女根とは、欲界の通一切と及び思惟所斷との使に使せらるるなり。

作證する時作證する使及び結の盡に関する論究をいふなり。因みに此の頌文に相當する發智論の頌文を示せば次の如し。

「四十二、證智、二緣、無間、有、根、成、不知、證、」

此章願具說

【四十章の名目】

發智論には此の四十章の外に、三重三摩地と五順上分結との二章を附加し、發智・婆沙論はこれを四十二章の名稱を以つて呼べり。

【四十章に使用する使の問題】

【五】 此の下に「一門」の割註あり。

【六】 四十章の緣識に使用する使の問題。

【七】 緣識は大正本には緣緣識とあるも三本・宮本・聖乙本に従つて緣識と改む、次下も同じ。

【八】 乃の字は大正本に無きも三本・宮本に依りて補へり。以下も同じ。

【九】 此の下に「二門」の割註あり。

【十】 四十章の緣緣識に使用する使の問題。

【一】 此の下に「三門」の割註あり。

【二】 意根等の次第に生ずる

卷の第八 (第二編 結使健度)

第四章 十種問題の論究

(阿毘曇結使健度、十門跋渠第四) (發智論第五卷、大正・二六、九四三頁)

本章の内容目次第一

二 幾く使に使せらるると

並びに及び二縁と

次第と有覺と

相應と諸根を

亦、成就すると、根を

若しくは成就せざると

斷智と作證との

十門にて普周す。

四十章の名目と本章の内容目次

三 二十二根と十八持と十二入と五陰と五盛陰と六、大と色法・無色法と可見法・不可見法と有對法・無對法と有漏法・無漏法と有爲法・無爲法と、過去法・未來法・現在法と善法・不善法、無記法と欲界繫法・色界繫法・無色界繫法と、學法・無學法・非學非無學法と見諦所斷法・思惟所斷法・無斷法と、四諦と四禪と四等と四無色と八解脫と八除入と十一切入と八智と三三昧と三結と三不善根と三有漏と四流と四扼と四受と四縛と五蓋と五結と五下分結と五見と六身愛と七使と九結と九十八使とあり。

四 (一) 眼根は、幾く使に使せらるるや。乃至無色界思惟所斷の無明使は幾く使に使せらるるや。^五

五 (二) 眼根の縁識は幾く使に使せらるるや、乃至無色界思惟所斷の無明使の縁識は幾く使に使せらるるや。^九

六 (三) 眼根の縁識は幾く使に使せらるるや、乃至無色界思惟所斷の無明使の縁識は幾く使に使せらるるや。^九

七 (三) 眼根の縁識は幾く使に使せらるるや、乃至無色界思惟所斷の無明使の縁識は幾く使に使せらるるや。^九

八 (三) 眼根の縁識は幾く使に使せらるるや、乃至無色界思惟所斷の無明使の縁識は幾く使に使せらるるや。^九

九 (三) 眼根の縁識は幾く使に使せらるるや、乃至無色界思惟所斷の無明使の縁識は幾く使に使せらるるや。^九

十 (三) 眼根の縁識は幾く使に使せらるるや、乃至無色界思惟所斷の無明使の縁識は幾く使に使せらるるや。^九

十一 (三) 眼根の縁識は幾く使に使せらるるや、乃至無色界思惟所斷の無明使の縁識は幾く使に使せらるるや。^九

十二 (三) 眼根の縁識は幾く使に使せらるるや、乃至無色界思惟所斷の無明使の縁識は幾く使に使せらるるや。^九

【一】 本章は(註三)に示すが如き二十二根乃至九十八使の四十章に關する十種の問題を取り扱へるものなり。故に本章を十門跋渠と稱するなり。

【二】 (一)「幾く使に使せらるる」とは四十章に使用する使に關する論究を指し、(二)(三)「二縁」とは四十章を緣ずる識と及びその緣ずる識を更に緣ずる識とに使用する使に關する論究。

【四】 次第とは意根乃至無色界思惟所斷の無明使の等無間に生ずる有漏心に關する論究。(五)「有覺」とは四十章に使用する使の覺觀分別。(六)「相應」とは四十章に使用する使の五受根相應分別。

(七)「諸根を亦成就する」とは、二十二根乃至九十八使の所謂四十章を成就する人に關する論究。(八)「成就せず」とは四十章を成就せざる人に關する論究。(九)「斷智」とは四十章を斷智する時斷智する使及び精に關する論究。

(十)「作證」とは四十章の盡を

第三節 眞の梵志と及び清淨と稱し得者とに就きて……………五八

第四節 佛の無量行に就きて……………五九

第五節 佛世尊は愛の網を斷滅し、其の所行は無量無邊なるに就きて……………六一

第六節 愛・慢等を斷滅する佛世尊こそ眞の梵志と稱し得べきに就きて……………六一

第七節 學は無明乃至諸煩惱を當に度すべく、無學は一切を度せしもの
に就きて……………五二

第八節 佛の聖弟子(阿羅漢)が無上士たるに就きて……………五三

第九節 三十六愛行の所依に就きて……………五四

第十節 十惡業を捨するに就きて……………五四

第十一節 見・聞・覺・知する所を如實に、見・聞・覺・知せば終に苦の邊際に
至ると言ふに就きて……………五五

第十二節 三毒を厭離し、三寶に歸依し、三毒を制し、三界を越ゆれば
苦邊に至るに就きて……………五五

第十三節 身を聚沫の如しと覺知し煩惱魔を斷盡せば老病死の苦迫を免
ると言ふに就きて……………五六

第十四節 三三昧に依りて内外を守り三行を圓滿し、有の滅盡を遍盡せ
ば心解脱すと言ふに就きて……………五七

第十五節 世間は煩惱を暫斷するも還た退墮し、佛弟子は泥洹に至ると
言ふに就きて……………五七

第十六節 無明・慢・愛無き者は解脱するを以て稱譽すべしと言ふに就きて……………五八

八 犍度論解題……………卷末

第三節 無因無縁にして有情をして垢有らしめ淨を生ぜしむ等の惡

見論と其の對治道 五七

第四節 七士身は常住なり等の常見論と其の對治道 五八

第五節 四百千の生門等を八十四百千大劫流轉し盡せば法爾に苦邊に

至るとの惡見と其の對治道 五九

第六節 一切人の所受は宿作又は自在變化に因るとの惡見と其の對治道 六〇

第七節 苦樂等は自作或は他作なり等とする諸惡見と其の對治道 六一

第八節 我及び世我(世間)は常恒なりとの惡見論と其の對治道 六二

第九節 我に關する六見論と其の對治道 六三

第十節 五種淨脫出(現法涅槃法)と其の對治道 六四

第十一節 九慢と七慢との關係 六五

第十二節 風無く乃至日月出沒せず垢・淨の住する處無しとの惡見と其の

對治道 六六

第十三節 我作又は他作の二種の外道論に就きて 六七

第十四節 具慢の衆生の生死輪迴に就きて 六八

第十五節 外道の諸種の戒盜・見盜と其の對治道、並に佛の如實見等に就きて 六九

第六章 諸種の偈(伽他)の意義に就きて 七〇

本章の内容目次 七〇

第一節 已見諦者と未見諦者との差別に就きて 七一

第二節 阿羅漢を害せず供養すべきに就きて 七二

第六節 見又は疑と相應し或は相應せざる痛(受)に、所使たる使に就きて…………… 五五

第七節 因と道と縁生(縁起)等の持・入・陰所攝分別…………… 五六

第四章 智(能通達)と斷(能遍知)等に關する論究…………… 五七

本章の内容目次……………

第一節 智(能通達)と斷(能遍知)とに關する論究…………… 五八

第二節 厭と無欲(能離)と修厭とに就きて…………… 五九

第三節 諸法に因縁等となる法が、時として、彼の法の爲めに因縁等
とならざることありやに就きて…………… 五〇

第四節 意更(意觸)と三等更(三事和合觸)との關係に就きて…………… 五〇

第五節 慢と自己(自執)と心増盛(不寂靜)との關係…………… 五〇

第六節 行(業)と護(律儀)と並に不護(不律儀)との關係…………… 五一

第七節 不淨觀乃至無學道等の聚の未得と不成就、並に得と成就との
關係…………… 五一

第八節 苦諦と法處とを除く餘の法等の持・入・陰所攝分別…………… 五二

第九節 一切法を攝する一持・一入・一陰に就きて…………… 五四

第五章 外道の諸見趣と其の對治道の論究(附、諸種の慢論)…………… 五五

本章の内容目次……………

第一節 施與世無く福(愛樂)無く等の邪見論と其の對治道…………… 五五

第二節 命者も死後は斷壞すの斷見等と其の對治道…………… 五七

第二章 三有等に關する論究……………五五〇

本章の内容目次……………

第一節 三有の一を棄てて一を受くる者の滅し現在前する法に關する論究……………五五三

第二節 使(隨眠)が他界法に所使たらざる所以に就きて……………五五五

第三節 非一切遍使が遍く自界法に所使たらざる所以に就きて……………五五八

第四節 十想の習修と其の所縁とに關する論究……………五六一

第五節 三惡覺(惡尋)の一を覺する時、其を意の所念とするや否やに就きて……………五五七

第六節 三善覺を覺する時、其を意の所念とするや否やに就きて……………五五七

第七節 明及び無明を因又は縁と爲す法に關する論究……………五五六

卷の第三十 (第八編 見犍度)……………〔七六—七六〕……………五六〇

第三章 十想の無間に生ずる法等に關する論究……………五六〇

本章の内容目次……………

第一節 十相の無間に生ずる法は十想と相應するや否やに就きて……………五六二

第二節 十想の無間に生ずる法は、十想と同一所縁なりやに就きて……………五六三

第三節 智分別(所通達・所遍知)法の斷・修・作證分別……………五六三

第四節 得と生・老・無常の三有爲相とに就きて……………五六四

第五節 心と俱生し心と離れざる法と、心との關係に就きて……………五六五

第二十三節 金剛喻定時の六智の所縁の界繫分別

五三

卷の第二十九 (第八編 見變度) [七二—七五]

五五

第八編 見論

五五

見論總目次

五五

第一章 四意止(念住)等に關する論究

五五

本章の内容目次

五五

第一節 四意止(念住)の相修論

五三八

第二節 四意止の自性・地・相應・行相・所縁の五門分別

五四二

第三節 樂受・苦受・不苦不樂受等を受くと如實に知る智に關する論究

五四三

第四節 有貪心乃至解脫心を如實に知る智に關する論究

五四三

第五節 六内結と五蓋との有無等を如實に知る智に關する論究

五四四

第六節 七覺意の有無等を如實に知る智に關する論究

五四五

第七節 婬・瞋・恚・愚癡の盛・薄(増・減)に就きて

五四五

第八節 死時痛(死邊際受)に就きて

五四六

第九節 羅漢の般涅槃心が無記心なるに就きて

五四六

第十節 舍利弗・目連が佛に先んじて般涅槃せし所以に就きて

五四六

第十一節 佛は出定して般涅槃するに就きて

五四六

第十二節 四有に關する論究

五四六

第十三節 欲・色・無色の三有と行(蘊)との關係

五四七

第四節	空と無相との成就等に關する小七句問答	五九
第五節	三三昧の成就に關する大七句問答	五四
第六節	三三昧の相修關係に就きて	五四
第七節	三三昧の滅する結に關する論究	五七
第八節	越次取證(正性離生に入る)時の意の所念(作意)等に就きて	五七
第九節	盡智と無生智との意止(念住)に就きて	五七
第十節	無漏の初二禪の樂と猗(輕安)覺意との無差別に就きて	五八
第十一節	三昧より起つ時所緣よりも起つや否やの論究	五八
第十二節	有頂の聖者は不用處(無所有處)定に依りて羅漢果を得するに就きて	三八
第十三節	入定者は聲を聞かざる事に就きて	五九
第十四節	性決定者と性不定者とに關する論究	五九
第十五節	覺意(覺支)と無漏法との成就・不成就及び得・棄・捨に關する論究	五〇
第十六節	不盡(未斷)・盡(已斷)と不知(未遍知)・知(已遍知)との關係	五〇
第十七節	生盲・生聾者が天眼天耳を起すに就きて	五一
第十八節	凡夫人と聖者との退・不退に關する論究	五一
第十九節	上三果の有退と須陀洹果の不退とに關する論究	五一
第二十節	上三果を退する時、得する無漏法は唯、本得(會得)なるに就きて	五二
第二十一節	上界より下界に生ずる時、得する法の本得・本不得分別	五三
第二十二節	五通の能力の限界に關する論究	五三

用とに就きて 五〇五

第九節 願智に就きて 五〇五

第十節 他迹(無淨行)に就きて 五〇五

第十一節 四雙の佛弟子論 五〇五

第十二節 學は多く五蓋の滅に遊ぶとの契經の意義 五〇六

第十三節 法知足と比尼知足とに就きて 五〇七

第十四節 「法の次法もて彼に向ふ」との經意 五〇七

第十五節 法轉の自性並に轉法輪に就きて 五〇七

第十六節 等法(正法)の定義並に等法の住と滅とに就きて 五〇八

第十七節 生と滅と及び初入の無漏の七定に依りて得する法との法の三世分別 五〇八

卷の第二十八 (第七編 定鍵度) [六七—七〇] 五二〇

第五章 三三味の成就論乃至羅漢果所得時の智と所

縁とに關する論究 五二〇

本章の内容目次第一 五二〇

本章の内容目次第二 五二〇

第一節 三三味の成就に關する一行問答 五二五

第二節 三三味の成就に關する歷六問答 五二五

第三節 空と無相との成就に關する小七句問答 五〇七

第六節	七無垢人の味相應等の四禪四無色に於ける成就不成就論	四八五
第七節	味相應と淨と無漏との四禪の相互成就・不成就に關する七句問答	四九二
第八節	味相應と淨と無漏との四禪の相互得・棄・退に關する七句問答	四九三
第九節	味相應と淨と無漏との無色定の成就・不成就に關する七句問答	四九四
第十節	味相應と淨と無漏との無色の得・棄・退に關する七句問答	四九四
第十一節	味相應と淨と無漏との禪と無色の頓得・頓棄(捨)と漸得・漸棄に就きて	四九五
第十二節	身口の教・無教行乃至等智は何の定に依りて滅するやの論究	四九七

第四章 不還に關する諸問題乃至生・滅の三世分別等に

關する論究

本章の内容目次

第一節	五阿那含と一切の阿那含との關係及び五阿那含相互の勝劣論	五〇一
第二節	學と未得を得せんが爲めに學する者との關係	五〇二
第三節	無學と未得を得せん爲めに學するに非ざるものとの關係	五〇三
第四節	順流と逆流と及び實住との意義	五〇三
第五節	還迹と到彼岸との關係	五〇四
第六節	菩薩と相報行(相異熟業)	五〇四
第七節	彌勒を當來佛たりと授記せし佛智と其の作用とに就きて	五〇五
第八節	世尊の弟子が聖教を體得するや否やを記別する佛智と其の作	五〇五

第二章 八三昧に於ける味相應と淨と無漏との三昧に

關する論究

本章の內容目次

第一節 八三昧と味相應の三三昧(等至)に就きて

第二節 初禪の味相應等の三三昧の成就・不成就に關する論究

第三節 初禪の味相應等の三三昧の得・捨・退に關する論究

第四節 世俗(淨)定と無漏定との習修・得修に就きて

第五節 無漏定初入時、所得の未來の無漏の心心法(心心所)の諸門分別

第六節 味相應と淨と無漏との禪(靜慮)・無色の相緣論

卷の第二十七

(第七編 定犍度)

[六四〇——六七五]

第二章 等至と十想との相攝等に關する論究

本章の內容目次第一

第一節 十想と四禪乃至三三昧との相攝論

第二節 四禪乃至三三昧は、四禪乃至三三昧の幾くを攝するやの論究

第三節 十想乃至三三昧の共在(可能)に關する論究

第四節 十想乃至三三昧は四禪乃至三三昧の幾くと相應するやの論究

第五節 四禪の一を成就する者は、四禪乃至三三昧の幾くを成就する

やの論究

第一章 得等に關する論究……………四四一

本章の內容目次……………四四一

第一節 得の三性等の五門分別……………四四五

第二節 無色と俱生する法との三性分別に於ける相互關係……………四四五

第三節 無色と俱生する法との三界繫、不繫分別に於ける相互關係……………四四七

第四節 無色と俱生する法との三學分別に於ける相互關係……………四五五

第五節 無色と俱生する法との三斷分別に於ける相互關係……………四五四

卷の第二十六 (第七編 定犍度)……………〔六三—六九〕……………四五六

第六節 無色と俱生する法と三斷の分別に於ける相互關係 (續き)……………四五六

第七節 染汚不染汚の四禪(靜慮)の支に就きて……………四五九

第八節 味相應定の入起(出)と味との關係等の論究……………四五九

第九節 入定の次第に關する論究……………四五九

第十節 入定せずして其の地に生ずるに就きて……………四五九

第十一節 下定を得するも上の根本定を得せざる者の生處に就きて……………四五九

第十二節 何等の行相を意所念(思惟)して四等(無量)に入るやに就きて……………四五九

第十三節 等(無量)・淨定・解脫・除入(勝處)一切入(遍處)智・三味の斷結に就きて……………四五九

第十四節 等・淨定・解脫・除入・一切入・智の報(異熟果)を受くる處所に就きて……………四六二

本章の内容目次第一 四〇一

本章の内容目次第二 四〇一

第一節 根の因縁と所縁縁との三世分別 四〇四

第二節 根の因縁と所縁縁との三性分別 四〇七

第三節 根の因縁と所縁縁との三界繫分別 四一〇

第四節 根の因縁と所縁縁との三學分別 四一三

第五節 根の因縁と所縁縁との三斷分別 四一六

第六節 根の因縁と所縁縁との四諦斷不別 四一九

第七節 因の四諦斷なる根の所縁の八智斷分別並に縁の四諦斷なる根の因の八智斷分別 四二三

卷の第二十四 (第六編 根躰度) [五九一—六〇六] 四三五

第八節 因の四諦斷なる根の所縁の八智斷分別並に縁の四諦斷なる根の因の八智斷分別(續き) 四三五

第九節 根の因縁と所縁縁との八智斷分別 四三七

第十節 根の因又は所縁が八智斷なる彼の根の所縁又は因の四諦斷分別 四三四

卷の第二十五 (第七編 定躰度) [六〇七—六三二] 四四一

第七編 定論 四四一

定論總目次 四四二

第七節 初の盡・無生智と其の次第(等無間)と及び其れ等の所縁とに就きて……………二六六

第八節 盡智と無生智と無學の等見との自性乃至所縁の五門分別……………二六七

第九節 無學の等見・等志・等方便・等念・等解脫・等智の相互相應關係……………二六八

第六章 二十二根の成就・不成就、並に三性根を因と爲す

根に關する論究……………二六九

本章の内容目次……………二七〇

第一節 二十二根の隨一を成就する者は、二十二根の幾くを定んで成就し、幾くを成就せざるやに就きて……………二七〇

第二節 二十二根の隨一を成就する者は、三世の二十二根の幾くを定んで成就し、幾くを成就せざるやに就きて……………二七五

第三節 二十二根の隨一を成就せざる者は、二十二根の幾くを成就し幾くを成就せざるやに就きて……………二七七

第四節 二十二根の隨一を成就せざる者は、三世の二十二根の幾くを成就し幾くを成就せざるやに就きて……………二七八

第五節 善・不善・無記根は夫々善根本(善根)等を因と爲すやに就きて……………二九〇

卷の第二十三 (第六編 根健度)……………[二六六—二九〇]……………二九三

第七章 根の因縁と緣縁(所緣縁)とに關する論究……………二九三

第三節 無想三昧に出入する時、滅起する根並に心心法（心心所）に就きて……………三三

第四節 滅盡三昧に出入する時、滅起する根並に心心法に就きて……………三三

第五節 無想天に生没する時、滅起する根並に心心法に就きて……………三三

第六節 無想衆生の想と及び食とに關する論究……………三三

第七節 二十二根・五力・七覺意・八道種・八智・三三昧の攝する根に就きて……………三五

第八節 意根乃至三無漏根・五力・七覺意・八道種・八智・三三昧と相應する根に就きて……………三五

第九節 三界に生じ没する時、滅起する根並心に心法に就きて……………三六

第十節 阿羅漢が般涅槃する時、滅する根に就きて……………三七

第五章 心と一起・一住・一盡する諸法と、心との相應等に關する論究……………六一

本章の内容目次……………六七

第一節 心と一起・一住・一盡（滅）する諸法と心との相應・所緣に於ける關係……………六三

第二節 心を離れざる色法の起・住・盡に就きて……………六三

第三節 眼根乃至意根の修・不修に就きて……………六三

第四節 學根を成就せずした學根を得するものに就きて……………六四

第五節 無漏根を棄てて無漏根を得するものに就きて……………六五

第六節 未知根の一切は不修の四諦を修（現觀）するやに就きて……………六六

第十六節 等意解脫・無疑意解脫及び一切結盡を得する根の學・無學分別……………三六

第十七節 四沙門果を證する時の、無礙道の忍・智乃至所緣分別……………三六

第十八節 四沙門果を得する時、滅・盡・起する根の數に就きて……………三六

第二章 十六更樂(觸)論並に二十二根の成就遍知・滅作證論……………六一

本章の內容目次……………

第一節 十六更樂(觸)の自性並に相攝論……………六一

第二節 十六更樂と根との相應論……………六一

第三節 十六更樂を因と爲す根と十六更樂との相應關係……………六二

第四節 眼・耳・鼻・舌根と身根との成就關係……………六四

第五節 地獄乃至俱解脫者の成就する根の數に就きて……………六五

第六節 眼根乃至慧根が斷智(遍知)を得する時、斷智を得する根の數に就きて……………六五

第七節 眼根乃至慧根が盡(滅)作證する時、盡作證する根の數に就きて……………六七

卷の第二十二 (第六編 根鍵度)……………〔五三六——五三七〕……………七五

第四章 心・心法の起(興)住・滅乃至三界に生滅する根・心……………

心法に關する論究……………七〇

本章の內容目次……………

第一節 諸種の心の興(起)住滅に關して……………七〇

第二節 壽の與心廻(隨心轉)等に關する諸種の問題に就きて……………七二

第一節 三界續生位、初得の根の數に就きて……………三〇八

第二節 三界繫の思惟と三界の曉了(遍知)との關係……………三〇八

第三節 三界を曉了する時曉了さるる根の數に就きて……………三〇八

第四節 三界を曉了する根の數に就きて……………三〇九

第五節 四沙門果を得する根の數に就きて……………三〇九

第六節 四沙門果を得する諸根の、得果時に於ける成就不成就關係……………三〇九

第七節 四沙門果を得する諸根は何界の結を滅し何果の所攝なりやに就きて……………三〇九

第八節 四沙門果を得する時棄捨する諸根は、何繫の結を滅し何果の所攝なりやに就きて……………三〇〇

第九節 四沙門果を得する時得する根は、何界の結を滅し何果の所攝なりやに就きて……………三一

第十節 四沙門者が成就する根は何界の結を滅し、何果の所攝なりやに就きて……………三一

第十一節 須陀洹等の結斷時の根は、何繫の結を滅し何果の所攝なりやに就きて……………三一

第十二節 四沙門果所攝の諸根は何界の結を滅するやに就きて……………三一

第十三節 四諦智と四諦に於ける無漏智との關係……………三一

第十四節 三界繫・不繫を緣ずる無漏根と法智・未智智との相應關係……………三一

第十五節 法智・未知智の自性乃至所緣の五門分別……………三一

第一節	二十二根と其の學・無學・非學・非無學分別	三二
第二節	二十二根の善・不善・無記の三性分別	三三
第三節	二十二根の有報・無報分別	三四
第四節	二十二根の三斷分別	三五
第五節	二十二根の五部所斷・不斷分別	三六
第六節	二十二根の見・不見分別	三七
第七節	二十二根の有尋有伺等の三門分別	三八
第八節	二十二根の五受根相應分別	三九
第九節	二十二根の三界繫及び不繫分別	四〇
第十節	二十二根の因相應等の四句分別	四一
第十一節	二十二根の共緣・相緣不共緣相緣等の四句分別	四二
第十二節	二十二根の非凡夫の成就するものと凡夫の成就するものとの關係	四三
第十三節	五陰は幾根を攝するやに就きて	四四
第十四節	善根・不善根等の七法は幾持・入・陰の攝なりやに就きて	四五
第十五節	根・不根の相緣・相生論	四六
第十六節	二十二根は相互幾緣となるやに就きて	四七

第二章 三界續生位初得の根乃至得果時に斷・滅盡起する

根等に關する論究

本章の内容目次

第十節 四識所止(識住)と七識所止と九衆生居との相攝論……………三〇八

第四章 内の四大等の相縁論乃至十五種淨品の習修・得

修に關する論究……………三二

本章の内容目次……………三二

第一節 内の四大と不内の四大乃至諸根・四大と心法の相縁論……………三三

第二節 内・不内、受・不受、結・不結、見處・不見處の定義……………三五

第三節 内・外法と内・外入所攝法との相攝關係……………三六

第四節 二痛・三痛・四痛・五痛・六痛・十八痛・三十六・痛百八痛の相互

相攝關係……………三七

第五節 須陀洹等の三果を證する時の意止(念住)乃至三昧の十五門の

習修・得修に就きて……………三八

第六節 神足等の五通を證する時の十五門の習修・得修に就きて……………三二

第七節 盡漏智證通を證する時の十五門の習修・得修に就きて……………三五

卷の第二十一 (第六編 根捷度)……………〔四九五—五三五〕……………三元

第六編 根論……………三元

根論總目次……………三元

第一章 二十二根及び其の諸門分別論……………三元

本章の内容目次(附根の名目)……………三元

第十節 欲・色界繫の四大と造色との相互相縁關係……………二六六

第十一節 欲・色界繫の色と欲・色界繫の四大の造色との同異關係……………二六六

第十二節 三世の色と三世の四大所造色との同異關係……………二六七

第十三節 地・水・火・風と地種・水種・火種・風種とに關する論究……………二六九

卷の第二十 (第五編 四大變度)……………〔四六七—四九四〕……………二七一

第三章 見諦成就者の身・口行の色と四大との界繫分別

等の論究……………二〇二

本章の內容目次……………二〇二

第一節 見諦成就の聖者の成就する身・口の戒律の色は何の界繫の四大の所造なりやに就きて……………二〇一

第二節 上界より下に生ずるものの初得の四大は何界の四大を因とするやに就きて……………二〇四

第三節 化及び中陰と四大との關係に就きて……………二〇四

第四節 世と劫と心の起・住・滅とに就きて……………二〇五

第五節 諸法の生と四縁との關係に就きて……………二〇五

第六節 因相應法・因不相應法等に就きて……………二〇五

第七節 共縁縁法・不共縁縁法に就きて……………二〇六

第八節 内に色想無くして外に色を觀ずの觀法に就きて……………二〇六

第九節 無色想(除色想)に關する論究……………二〇七

本章の內容目次

第一節 四大所造の入の可見・不可見乃至思惟斷・不斷分別……………三六〇

第二節 四大と造色との成就・不成就關係に就きて……………三六四

第三節 四大種と善・不善・隱沒無記・不隱沒無記色との成就關係……………三六四

第四節 善・不善・隱沒無記・不隱沒無記色の相互成就關係……………三七二

第五節 四大乃至四食は何定に依りて滅するやに就きて……………三七七

第六節 四大乃四食の已盡無餘(已斷遍知)は何果に住してなりやに就きて……………三八八

卷の第十九 (第五編 大種鍵度)……………〔四五—四六〕……………三九〇

第二章 四大及び造色の相縁成就等に關する論究……………三九〇

本章の內容目次

第一節 四大と造色との相互相縁關係に就きて……………三九二

第二節 四大と、心・心法と十二入と二十二根との相互相縁關係……………三九五

第三節 四大を不相應とし、心・心法を相應となす理由に就きて……………三九六

第四節 三世の四大は三世の造色の何れを造るやに就きて……………三九六

第五節 三世の四大と造色との相互成就關係……………三九六

第六節 三世の四大及び造色の相互相縁關係……………三九二

第七節 欲・色界繫の四大と造色との成就關係……………三九二

第八節 欲・色界繫の四大と造色との相縁關係……………三九二

第九節 欲・色界繫の四大と造色との相互成就關係……………三九二

第六節 身・戒・心・慧の修・不修に關する論究……………三二五

第七節 戒種(類)の三世に於ける成就關係に就きて……………三二八

第五章 自行並びに行論附帶の雜論……………三三〇

本章の內容目次……………三三〇

第一節 自行(自業)に關する論究……………三五二

第二節 成就する行と定んで當に報を受くべき行との關係に就きて……………三五三

第三節 須陀洹と三惡趣との關係に就きて……………三五四

第四節 學の謀害に就きて……………三五五

第五節 住壽行と捨壽行とに就きて……………三五六

第六節 心亂に就きて……………三五六

第七節 何の纏と相應する法が不善なりやに就きて……………三五六

第八節 佛語 (Buddhavacana) に就きて……………三五六

第九節 印・數・算・書・頌・剋行(工巧業)に就きて……………三五七

第十節 學・無學・非學非無學の戒の成就關係に就きて……………三五七

卷の第十八 (第五編 大種犍度)……………[四三六—四四四]……………三六〇

第五編 四大造色論……………三六〇

四大造色論總目次……………三六〇

第一章 四大と所造色との諸種の關係論……………三六〇

第三節 中陰中を受くる無救行（無間業）の報に就きて……………三六

第四節 二種の淨（防護）に就きて……………三六

第五節 身と身・口・意行との成就關係に就きて……………三七

第六節 身・口・意行の相互成就關係に就きて……………三二

第七節 行と報との離染の關係に就きて……………三三

第八節 行の有果と有報、無果と無報の關係に就きて……………三四

第九節 善・不善行と顛倒・不顛倒の關係に就きて……………三四

第十節 善・不善業と三界繫行との相互成就關係に就きて……………三六

第十一節 三界行及び無漏行の相互成就關係に就きて……………三七

第十二節 三界行と無漏行とを成就するものの生處に就きて……………三八

卷の第十七（第四編 業躰度）……………〔三九六—四一五〕……………三〇

第四章 教行・無教行に關する論究……………三〇

本章の内容目次第一……………三〇

本章の内容目次第二……………三〇

第一節 身教（身表業）と身無教（身無表業）との成就關係に就きて……………三三

第二節 三世の身教と身無教との成就關係（附、口教と口無教との成就論）……………三六

第三節 四界の行と四界の果との因果關係……………三四

第四節 有漏・無漏行と有漏・無漏果との因果關係……………三四

第五節 三學行と三學果との因果關係……………三五

第十八節 心・身痛を受くる行に就きて……………二九七

第十九節 三障行に就きて……………二九七

第二十節 最大罪と最大果とに就きて……………二九八

第二章 諸種の善・惡行及び其の果報論……………二〇〇

本章の內容目次……………二〇〇

第一節 邪命と邪語・邪業及び等命と等語・等業の相攝關係……………二〇一

第二節 三惡行と三曲・穢・濁との相攝關係……………二〇三

第三節 三妙行と三淨と三滿との相攝關係……………二〇四

第四節 三惡行と無巧便の三行との相攝關係……………二〇五

第五節 三妙行と巧便の三行との相攝關係……………二〇六

第六節 行に由りて得する報の三性分別論……………二〇七

第七節 三世行の報の三世分別……………二〇八

第八節 身・口・意の三行各自所受の報果(異熟果)の愛・非愛分別……………二〇八

第九節 三時行乃至見諦斷・思惟斷行が不前不後に報を受くるに就きて……………二一〇

卷の第十六 (第四編 業鍵度)……………二二二

第三章 殺生並びに業の異熟果等に關する論究……………二二二

本章の內容目次……………二二六

第一節 殺生の加行と根本と後起との關係に就きての四句分別……………二二五

第二節 加行のみにて必ず地獄の報を受くる行に就きて……………二二五

第一章 善・悪行に關する論究……………一八八

本章の内容目次……………一八八

第一節	三惡行と三不善根との相攝關係……………	一九〇
第二節	三妙行と三善根との相攝關係……………	一九一
第三節	三惡行と十不善行迹との相攝關係……………	一九一
第四節	三妙行と十善行迹との相攝關係……………	一九一
第五節	三行と三行迹との相攝關係……………	一九二
第六節	三行と黒有黒報等の四行との關係……………	一九二
第七節	三行と三時行との相攝關係……………	一九二
第八節	三行と三痛行との相攝關係……………	一九二
第九節	三行と三世行・三性行・三學行・三斷行との相攝關係……………	一九三
第十節	三行と三斷行との相攝關係……………	一九三
第十一節	黒有黒報等の四行と三時行乃至三斷行との相攝關係……………	一九三
第十二節	三時行と三痛行乃至三斷行との相攝關係……………	一九三
第十三節	三痛行と三世行乃至三斷行との相攝關係……………	一九三
第十四節	三世行と三性行乃至三斷行との相攝關係……………	一九六
第十五節	三性行と三學行乃至三斷行との相攝關係……………	一九六
第十六節	三界繫行と三學行・三斷行との相攝關係……………	一九六
第十七節	三學行と三斷行との相攝關係……………	一九七

第二節	七聖者の三世の八智に於ける成就關係に就きて	二四
第三節	七聖者が八智の隨一を現在前する時其の智の十智分別	二八
第四節	七聖者の三三昧に於ける成就關係に就きて	二八
第五節	七聖者の三世の三三昧の成就關係に就きて	二八
第六節	七聖者が三三昧を現在前する時、現在前する智の十智分別	二九
第七節	七聖者が無漏根・覺意・道種を現前する時、現前する智の數に就きて	二五
第八節	八智相應法と八智乃至八道種との相應關係	二五
第九節	三三昧相應法と三三昧乃至八道種との相應關係	二五
卷の第十四 (第三編智變度) ……………〔三五—三五〕……………二五		

第十節	三三昧相應法と三三昧乃至八道種との相應關係(續き)	二五
第十一節	三無漏根相應法と三無漏根・七覺意・八道種との相應關係	二六
第十二節	四十四智種に就きて	二六
第十三節	七十七智種に就きて	二六
第十四節	八智の成就に關する一行問答	二六
第十五節	八智の成就に關する歷六問答	二七
第十六節	八智の成就に關する小七句・大七句問答	二七
卷の第十五 (第四編 行變度) ……………〔三五—三七〕……………二六		

第四編 行論 ……………	二八
---------------------	----

本章の内容目次第二

第一節 八智の相攝關係に就きて……………五
 第二節 八智相互の成就關係に就きて……………九
 第三節 八智の相修關係に就きて……………一〇

卷の第十二

(第二編 智鍵度)

〔二八二—三〇四〕

第四節 八智の相修關係に就きて(續き)……………二六
 第五節 八智は幾智を緣ずるやに就きて……………二八
 第六節 八智の一一は八智の與めに幾縁と爲るやに就きて……………二九
 第七節 結の斷に於ける智の能力と及び其の限界……………三一
 第八節 法智・未知智及び四諦智の結の斷と其の盡作證とに就きて……………三三
 第九節 眼根と乃至無色界思惟所斷の無明とを知る智の十智分別……………三三
 第十節 無常想に關する論究……………三六
 第十一節 七處善に關する論究……………三六

卷の第十三

(第二編 智鍵度)

〔三〇五—三三八〕

第五章 七聖者の八智乃至八道種の成就等に關する論究……………三九

本章の内容目次第一

本章の内容目次第一……………三九

本章の内容目次第二

第一節 七聖者の八智に於ける成就關係に就きて……………四三

第三節	逆慧(左慧)に關する論究	七
第四節	學の見・智・慧に關する論究	六
第五節	無學の見・智・慧に關する論究	七
第六節	非學非無學の見・智・慧に關する論究	八
第七節	大梵天と梵衆天と長爪梵志との惡見に就きて	八
第八節	阿羅漢に關する五種の惡見に就きて	八
第三章	知他人心智(他心智)乃至善法の習修・得修に關する論究	六

本章の内容目次第一

本章の内容目次第二

第一節	知他人心智及び識宿命智に關する論究	七
第二節	等意解脱・無疑解脱に關する論究	七
第三節	學・無學の明・智に就きて	九
第四節	諦現觀時に得する三證淨に就きて	九
第五節	四顛倒を須陀洹が滅するに就きて	九
第六節	三三昧を須陀洹が成就するに就きて	九
第七節	三世の道の習修・得修に就きて	九

卷の第十一	(第二編 智健度)	〔六一—六二〕
-------	-----------	---------

第四章	八智十智等に關する論究	五
-----	-------------	---

本章の内容目次第一

第二編 智論……………四三

智論總目次……………四三

第一章 學・無學種(支)論及び見・智・慧論……………四三

本章の內容目次第一……………四三

本章の內容目次第二……………四三

第一節 學迹の三世に於ける學種(支)の成就論……………四六

第二節 阿羅漢の三世に於ける十無學種(支)の成就論……………四八

第三節 見・智・慧に關する論究……………五〇

第四節 等見・等智と擇法覺意との雜・不雜論……………五三

第五節 覺意と道種との現在前に關する論究……………五三

第六節 覺意相應法と道種相應法とに就きて……………五五

第七節 世俗の等見・等智に關する論究……………六八

第八節 無漏の等見・等智に關する論究……………六八

卷の第十 (第三編 智健度)……………〔三七—二六〕……………七一

第二章 邪見等見乃至五種惡見に關する論究……………七一

本章の內容目次第一……………七一

本章の內容目次第二……………七一

第一節 邪見と邪智とに關する論究……………七五

第二節 等見と等智とに關する論究……………七六

目次

阿毘曇八犍度論（全三十卷中 自卷第三十）……………〔本丁〕七六六〔通真〕

卷の第八（第二編 結使犍度）……………〔三七—三〇八〕

第四章 十種問題の論究……………

本章の内容目次第一……………

四十章の名目と本章の目次……………

第一節 四十章に使用する使に關する論究……………

第三節 四十章の緣識及び緣緣識に使用する使に關する論究……………

第四節 四十章の次第（等無間）に生ずる有漏心に關する論究……………

第五節 四十章に使用する使の覺・觀分別……………

第六節 四十章に使用する使の五受根相應分別……………

第七節 四十章の成就論……………

第八節 四十章の不成就論……………

第九節 四十章の斷智を得する時、斷盡する使と結とに關する論究……………

第十節 四十章の盡を作證する時、作證する使及び結の盡に關する論究……………

卷の第九（第二編 智犍度）……………〔二〇九—三三六〕……………

毗
曇
部
十八

西 義
坂 本 幸 雄
男 譯



CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

國譯一切經

大東出版社藏版

